KAIZO

改造

十月號

925


最新最良の
プラトン
萬年筆
文化人士の活動の武器として
一番書きよいプラトン萬年筆
プラトンインキ

ANIMASA

das erste kausal wirkende und per os gegebene
organotherapeutische Mittel gegen

Arteriosklerose

動脈硬化症

の治療劑・腦溢血豫防劑として近時
醫界の愛用頗る盛んなる……………

内服用脈管臟器製劑

アニマザ

幼若動物の血管内膜及中膜より抽出せる成分

動脈硬化症……延いては壯年期にある貴重の人命を突如として奪ひ去る腦溢血……其治療及豫防は醫家の最も苦慮するところなりしが、獨乙ギーゼン大學グリースバッハ教授を始め多數の專門家はアニマザの内服が現時に於ける最も有力なる療法なりと高唱せり。

乃ち特殊の生活狀態にありて本病の素因を有するもの、例へば大酒家、美食家、體格肥滿者、白粉(鉛)中毒者、梅毒罹患者等に本劑を常用せしむるときは、血管の硬化を阻止し、眩暈・不眠・頭痛・足部寒冷・全身倦怠等の自覺的症狀を除き且つ亢進せる血壓を或る程度まで低下せしむることを得べし。

用量　一回一錠宛一日三回食間に與ふ　　包裝　三〇錠入…二圓四〇　一〇〇錠入…六圓八〇



說明書進呈

日本總代理店　東京日本橋區本町　株式會社　**田邊元三郎商店**



改造十月號目次

兵糧なくして出來る政黨の話……卷頭言……一
勞働組合法制定に關する諸問題……末弘嚴太郎……二
國際金融中心點に關する研究……堀江歸一……四三
在歐通信……河合榮治郎……八五
無産政黨は如何なる綱領を持つべきか……山川均……一〇七
現代に於ける自我問題の一面……錦田義富……一二七

支那關税會議と日本

支那の關税自主運動と日本資本主義經濟の運命……高橋龜吉……一四九
支那關税問題と日本……武藤山治……一五六



私の切實な問題……一六一
新明正道　小川未明　青野季吉　室伏高信
出井盛之　堺利彦　澤田正二郎　中村武羅夫
田中耕太郎　鈴木文治

林子平の父……眞山青果……一
その夜の三人……廣津和郎……二三
デンマークの雲雀に與ふ……賀川豐彦……四三
高山國の歌……島木赤彦……五〇

失業體驗錄
—夫婦わかれして……細井和喜藏……五八
—灰色の血に描く……中本彌三郎……六二

谷崎潤一郎著

痴人の愛

定價貳圓 送料廿壹錢

マゾヒズムの創始者マゾッホ博士の作より幾倍も深刻で優れた世界的大作。怪しの愛慾を描く魅力多き筆致、性に對する男女の世紀末的糜爛せる關係を鋭きメスにて解剖する冴えは天下何人の追隨を許さず。此一書出現して幾旬ならずして出版界の覇者となり、本書のみ不景氣を知らざるの概あるは以て本書がいかに面白く、深刻に現代人に喰入つて居るかを立證する。谷崎氏の藝術には誰でも恍惚として我を忘れしめる。價至廉。

新刊

谷崎潤一郎著
新選谷崎潤一郎集
四六判上製 定價五圓五十錢 送料三十錢

谷崎潤一郎著
戯曲 愛すればこそ（百一版）
四六判上製 定價一圓六十錢 送料十八錢

谷崎潤一郎著
戯曲 愛なき人々（卅二版）
四六判上製 定價二圓 送料二十錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

菊池寛著

啓吉物語

（四六判 上製）

定價貳圓 郵送料廿二錢

改版

文壇の雄菊池君の自傳とも見るべき出世作「盜み」「啓吉の誘惑」「まどつく先生」以下十六篇を集む。氏の若き時代の作が、いかに奔放の才氣に富み、力强き鬪志の藝術であるかは本書を讀むものの悅びに首肯くところであらう。本書は氏が若き日の最强の風格の映發に成る、本書に現るゝ氏は純眞そのものであり、素朴そのものであり、從つて生一本の精進に青春時代の限りなき希望と惱みがいとも明るく表現されてゐる。或人は本書は夏目さんの「坊ちやん」を讀むやうな持味があるといつてゐる。とにかく菊池氏の著作中では本書を讀むことが一番趣味があり、そして氏に最もしたしみをおぼえしめる作品のみが集められてある。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社



家庭の幸福は
健康に在り
サナトーゲンは
保險に優さる

眞正の强壯食料品
サナトーゲン

家庭の幸福は、まつたく懸つて、貴下の御健康にあります。なるほど、保險に依つて貴下が現在の財産を失ふことを防ぐことは出來るかも知れませんが、**サナトーゲン**は保險以上に貴下の御爲めになります。

卽ち**サナトーゲン**は貴下の健康を維持し活動力を增進して、從前よりも層一層の働をなし又此を樂しむことによりて、漸次その社會的地位を高めます。

サナトーゲンは元氣と忍耐力の輝かしい源泉を賦與することによりて、神經と頭腦とを强めます。貴下は事業を成功せしむるため、毎日規則正しく**サナトーゲン**をお召上りなさい。

さあ、今**サナトーゲン**を御購求になつて、二三週間、御食事の度毎に御上り下さい。貴下は必ず間もなら、その恩惠的效果を經驗なさつて、すぐと往年の靑春の氣分をまつたく恢復し、好き生活の悅樂を十分に御味ひになることが出來るでせう。

二萬四千人以上の醫家が健康增進、元氣恢復劑として熱心に**サナトーゲン**を推奨してをります。**サナトーゲン**は眞に恰適の强壯食料品です。

サナトーゲンは貴下の爲めにお役に立つばかりでなく、又貴下の御愛兒樣方にも、貴下の御家族にも御役に立ちます。

サナトーゲンは健康にして幸福なる家庭生活を建設します。

●全國到る處の藥店に販賣してゐます。

興味津々たる小册子
御要求次第無代謹呈

サナトーゲン
日本一手輸入元
ゼーエ・ルタムソン株式會社
神戶市海岸通一丁目英三番
（神戶三宮郵便局私書函二十二號）

ハーデー原著

内多精一譯

最新刊

薄命のヂュード

定價參圓廿錢

送料廿三錢

近代文學の金字塔

深刻を極めた四角關係？といへば又かと蔑まれるだらう。しかし著者は偉大なる文明批評家でありプロレタリアの代表的作家でもある。――この云ひ草ももう平凡だ――だが、彼の偉大なのは英皇儲がわざ〳〵駕を枉げられた光榮でなく、それは實に彼の筆には絶望を覺えしものに希望の息を――敗戰を味ひしものに勝利の息を――愛人を失ひし者に愛の氣息を――與へる不思議な靈的魅力にある、本小説は實に性的に、社會意識に、感情に結婚に特立した何等の模倣をも許さない靈肉の交錯を昂揚せるもので新しき時代がどの頁にも犇々切迫し來るを覺えしめる痛快にして、そして思想的に意義ある讀みものだ。就中、人生に興味を失ひつゝある人々の先づ一讀すべき小説だ。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ
煙草も一度「カロット」を口にすれば
斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!
實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御注文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて吳れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつゝ之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草等吸へないですね!、驚いたと仰有いました、此時迄發賣主の實業に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんね!」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讚下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懷」を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徵

外見恰も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適當朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き淸涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を離れて斷じて再び顧みざるに至る味に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生する時其他散步等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし

日、英、米、專賣特許出願中

東京府大森不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二九壹壹

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製パイプ付）

送料（內地十八錢 臺、朝、樺四十五錢）

引替送料（內地三十錢 臺、朝、樺五十五錢）

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店 天下堂

現代代表自選歌集

歌道の偉觀！此の六連集！

齋藤茂吉著　朝の螢　定價壹圓五十錢　送料十八錢

島木赤彦著　十年　定價壹圓五十錢　送料十八錢

古泉千樫著　川のほとり　定價壹圓八十錢　送料十八錢

中村憲吉著　松の芽　定價壹圓八十錢　送料十八錢

釋迢空著　海やまのあひだ　定價壹圓八十錢　送料十八錢

木下利玄著　立春　定價壹圓八十錢　送料十八錢

改造社

露西亜大革命史

大革命の眞相は公開禁止の處本書に依て俄然解禁さる

米國 ウイリアムス著
梅原北明
杉井忍 共譯

四六判布製
貳圓五拾錢
送料拾貳錢

全譯デカメロン

世界一の奇書
ボッカチヨ五百五十年祭記念出版

下巻出來
上下完成

ボッカチヨ
梅原北明譯
太田三郎畫

上巻貳圓八拾錢
下巻貳圓八拾錢
送料各十八錢

發行所
東京市小石川區林町五七
振替東京二四三番
電話小石川一六三八番
朝香屋書店

新村出著（新刊）

南蠻廣記

定價參圓
送料書留廿七錢

平福百穗畫伯裝禎

十六世紀の中頃、カルヴインやミケエランヂエロが未だ生きて居り、コペルニクスやルーテルが死んでまだ間のない頃に、新興の歐羅巴文化は旺然として極東の嶋を襲うた。それより僅か一世紀足らずの間にこの新しい刺戟によつて我々の祖先が示した精神的昂揚は、まことに驚嘆すべきものがある。若しあの潑溂たる新芽が順當にのびたならば、世界史に於ける日本民族の効績は既に炳乎として輝いてゐたであらう。新村博士はこの驚嘆すべき、しかも數世紀に亘つて隱蔽せられたる文化現象の、感謝せらるべき發掘者であり、またその研究の第一人者である。精練せられたる藝術的敏感と歷史的理解とが細緻なる考證と相結び、現はすに氣品高く香氣豐かなる文體を以つてせるこの書は、博士の劃期的なる研究を一目の下に瞭然たらしめる。

發兌 東京神田南神保町 岩波書店 振替東京二六二四〇番 電話四谷五八七〇番



(十月號)

兵糧なくして出來る政黨の話

A 我々は一萬人か二萬人で一人の代表者しか立法府に送れぬのに、彼等は二三十人の代表者を送るのだ。何といふ不合理な制度だらう。そして彼等は衆議院議員選擧にも選擧權を有つているではないか。

B 又かい。ハヽ……そんなことはどうでもいいぢやないか。俺なぞはドッチの選擧權もお生憎樣だ……ウハヽ……。

A 政府……乃至特權者流はいつも口癖のやうに社會政策云々といひながら自分自身でいつでも階級鬪爭の誘發者となるぢやないか。六十六人の今回の選擧に對し民衆の憎惡反感は殆んど前例もない位强かつた。それ等國民の怨府の的になつている人間どもを既成政黨が爭奪するアノざまはどうだい。一日も早くかゝる惡制度は撤廢すべきぢや。

B 自分が生きるためにはネ……どんなことでもするよ。

A ドーセ、冬の議會は解散にきまつとる。第一次加藤内閣の辭職がその目論見さ、それから多額選擧に對する政府と憲政會の力瘤の入れ工合がその證據の二、各地の代議士補[redacted]缺選擧に政府が努力せないのが證據の三、濱淺内務次官を罷めたのが證據の四、解散し[redacted]て政府と憲政會はどうなると思ふか。

B ドウならうと他人樣のことはいいぢやないか、だが解散は大歡迎サ、一雨ごとに既成[redacted]政黨の陣形はくづれて行く、新興勢力は冬の霜をもはねのけて擡頭してくる。そうな[redacted]と變化があつて看客も助かるといふものさ……。

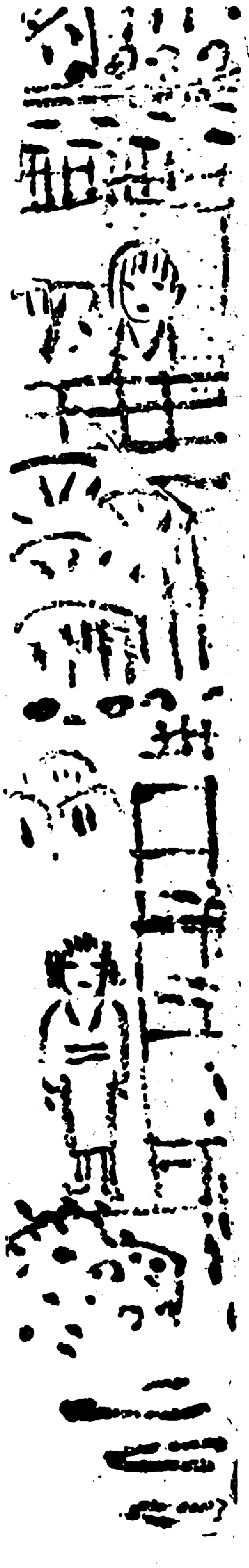
A 僕は政府と憲政會が階級鬪爭の當面の責任者だと思ふよ。

B それが結構ぢや、そう云ふ過程が順當だ、もつと特權階級が跋扈すればそこから眞の立派な政黨が生れ育まれてくるよ。

A しかしあの無産政黨のやうに生れぬ先きから揉めてばかりゐては所詮國民の期待をうら切るばかりぢやないか。

B そのうちに訓練もできるさ。また資本黨の跳梁がひどくなればその敵愾心で劣せずして結束は堅くなるさ、何にしても積極的反抗を政府で助成してくれれば乃公等の天下がだんだん近くなると云ふものよ。謂ゞ兵糧なくして政黨が出來上るのは棚果の巷にもないところだよ。ハハ……。

A ハヽ……それが人の褌で角力をとると云ふ奴だネ……あて事と何やら……同く行くかネ……。



勞働組合法制定に關する諸問題

――社會局の勞働組合法案に對する批評――

末弘嚴太郎

はしがき
第一　勞働組合の定義に關する問題
一　法律に於て「勞働組合」を定義する目的
二　勞働組合の目的としての「勞働條件の維持改善」
三　「勞働者十人以上の團體」
四　「勞働組合」の定義に關聯して起り得る各種の問題
第二　勞働組合の法律的保護
一　刑罰法令の廢止
二　組織勞働者の雇傭拒絕の制限
三　資本家の團體交涉拒絕と勞働協約――同盟罷業と勞働組合の賠償責任

四 勞働組合と法人格
五 勞働組合と免稅特典
第三 勞働組合に對する國家的監督
一 勞働組合の屆出義務と報告義務
二 勞働組合の規約並に決議に對する監督
結語

はしがき

私は、去る二月の本誌に於て、契約自由の原則を基礎とする現行法制の下に於て、勞働者をして資本家との勞働契約上眞に契約自由の利益を享受せしむるが爲めには、彼等が團結して資本家と對立するの自由を確保し、法律を以て特に其の自由を保護するの必要あることを說いた。而して次ぎに同じく四月の本誌に於て、我國の現行法が現に勞働組合に與へて居る法律的取扱の如何に不公正なるかを詳說すると同時に、國家がこの種法制の根本的改革を拒絕することは勞働者に向つて長く不公正なる地位を强要せむとするものである、政府は宜しく一日も速かに適正なる勞働組合法を制定し、以て勞働組合の地位と行動とを保障すべく努力せねばならぬ所以を力說した。

私が去る二月號の論稿に筆を染めて居た當時、議會に提出せらるべく一般に豫期されて居た勞働組合法案及び之れに伴ふ治安警察法第十七條撤廢に關する法律案は、其の後有耶無耶に葬られて不幸終に提案の運びに至らなかつたけれども、愈々去る七月この方政府當局のこの方面に於ける努力は從來に比して遙かに眞劍味を加へて來たやうに思はれる。新聞紙に依ると、社會局原案に對しては他の關係各省當局からかなり色々の反對意見が述べられて居るやうに傳へられ

て居るけれども、行政調査會に於ける審議の進行につれて意見の相違は漸次に減少して、現も角近々の中に何等かまとまつた政府案が出來上り相な形勢になつて來た。

去る八月十八日社會局當局は其の原案を參與會議に附議すると同時に、之れを廣く新聞紙上に發表した。其れに依ると法律案の內容は左の通りである。

勞働組合法案

第一條　本法ニ於テ勞働組合ト稱スルハ勞働條件ノ維持改善ヲ目的トスル勞働者十人以上ノ團體又ハ其ノ聯合ヲ謂フ

勞働組合ハ前項ニ揭クルモノノ外組合員ノ共濟、修養其ノ他共同利益ノ保護增進ヲ目的ト爲スコトヲ得

第二條　勞働組合ノ代表者又ハ設立者ハ組合設立ノ日ヨリ三週間內ニ組合規約ヲ添ヘ主タル事務所所在地ノ地方長官ニ屆出ツルコトヲ要ス組合規約ニ變更アリタルトキ亦同シ

聯合團體タル勞働組合ニ在リテハ前項ノ外之ヲ組織スル團體ノ名稱ヲ屆出ツルコトヲ要ス其ノ異動アリタルトキ亦同シ

第三條　勞働組合ノ規約ニハ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一　名稱

二　目的

三　主タル事務所

四　法人タル組合ニ在リテハ法人タルコト

五　組合員ノ資格ニ關スル規定
六　組合員ノ加入及脫退ニ關スル規定
七　會議ニ關スル規定
八　代表者其ノ他役員ニ關スル規定
九　組合費其ノ他會計ニ關スル規定
十　組合規約ノ變更ニ關スル規定

第四條　勞働組合ハ其ノ規約中ニ法人タルコトヲ定ムルニ因リ之ヲ法人ト爲スコトヲ得

第五條　勞働組合前條ノ規定ニヨリ法人トナリタルトキハ二週間內ニ主タル事務所ノ所在地ニ於テ左ノ事項ヲ登記スルコトヲ要ス登記前ニ在リテハ法人タルコトヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

一　第三條第一號乃至第三號ニ掲ゲタル事項
二　法人トナリタル年月日
三　理事ノ氏名、住所

前項ニ掲ケタル事項ニ變更アリタルトキハ一週間內ニ其ノ登記ヲ爲スコトヲ要ス登記前ニ在リテハ其ノ變更ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

第六條　民法第四十八條、第五十條、第五十二條乃至第五十五條、第五十七條及第六十八條ノ規定ハ法人タル勞働組合ニ之ヲ準用ス

第七條　法人タル勞働組合合併ヲ爲シタルトキハ合併後存續スル組合又ハ合併ニ因リテ成立シタル組合ハ合併ニ因リテ

解散シタル組合ノ權利義務ヲ承繼ス

第八條　法人タル勞働組合分割シタルトキハ其ノ定ムル所ニ從ヒ分割ニ因リテ成立シタル組合其ノ權利義務ヲ承繼ス

第九條　法人タル勞働組合解散シタルトキハ前二條ノ場合ヲ除クノ外清算ヲ爲スコトヲ要ス民法第七十二條乃至第八十三條ノ規定ハ法人タル勞働組合ノ清算ニ之ヲ準用ス

第十條　勞働組合ニハ所得税、營業税及登錄税ヲ賦課セス

第十一條　雇傭者又ハ其ノ代理人ハ勞働者カ勞働組合ノ組合員タルノ故ヲ以テ之ヲ解雇スルコトヲ得ス

雇傭者又ハ其ノ代理人ハ勞働者カ組合ニ加入セサルコト又ハ組合ヨリ脱退スルコトヲ雇傭條件ト爲スコトヲ得ス

第十二條　勞働組合カ雇傭條件ニ關シ雇傭者又ハ雇傭者團體ト契約（勞働協約）ヲ爲シタル場合ニ於テ協約ノ條項ニ違反スル雇傭者及組合員間ノ雇傭契約ハ其ノ違反スル部分ニ限リ無效トス無效ナル部分ハ協約ノ條項ヲ以テ之ニ代フ

第十三條　地方長官ハ勞働組合ニ對シ其ノ業務財産及組合員ノ數ニ關シ報告ヲ求ムルコトヲ得

第十四條　勞働組合ハ組合設立ノ日ヨリ一箇月内ニ組合員名簿ヲ作成シ主タル事務所ニ之ヲ備付クルコトヲ要ス

第十五條　勞働組合ノ決議法令ニ違反スルトキハ地方長官之ヲ取消スコトヲ得

第十六條　勞働組合ノ規約法令ニ違反スルトキハ地方長官其ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第十七條　前二條ノ處分ニ對シ不服アル者ハ訴願ヲ提起シ違法ニ權利ヲ傷害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第十八條　勞働組合解散シタルトキハ其ノ代表者ハ一週間内ニ之ヲ地方長官ニ屆出ツルコトヲ要ス

第十九條　第二條第十八條若ハ第二十四條ノ屆出ヲ爲ササル者又ハ第十三條ノ報告ヲ爲サス第十四條若ハ第二十五條ノ

規定ニ違反シ若ハ第十六條ノ命令ニ違反スル組合ノ代表者ハ五十圓以下ノ過料ニ處ス其屆出又ハ報告ヲ爲スモ實ヲ以テセサル者亦同シ

第二十條　法人タル勞働組合ノ理事又ハ清算人ハ左ノ場合ニ於テ五十圓以下ノ過料ニ處ス

一　第五條民法第四十八條及第七十七條ニ定メタル登記ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ

二　民法第八十二條ノ場合ニ於テ裁判所ノ檢査ヲ妨ケタルトキ

三　民法第八十一條ノ規定ニ反シ破産宣告ノ請求ヲ爲スコトヲ怠リタルトキ

四　民法第七十九條又ハ第八十一條ニ定メタル公告ヲ爲スコトヲ怠リ又ハ不正ノ公告ヲ爲シタルトキ

第二十一條　第十一條ノ規定ニ違反シタル者ハ五百圓以下ノ過料ニ處ス

第二十二條　非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ本法ノ過料ニ之ヲ準用ス

附　則

第二十三條　本法ハ大正　年　月　日ヨリ之ヲ施行ス

第二十四條　本法施行ノ際現ニ存スル勞働組合ハ本法施行ノ日ヨリ一箇月內ニ第二條ノ手續ニ準シ屆出ヲ爲スコトヲ要ス

第二十五條　本法施行ノ際現ニ存スル勞働組合ハ本法施行ノ日ヨリ二箇月內ニ組合員名簿ヲ作製シ主タル事務所ニ之ヲ備付クルコトヲ要ス

第二十六條　勞働組合ノ登記ニ付テハ非訟事件手續法第百十七條、第百十九條乃至第百二十二條及第百二十五條ノ規定

ヲ準用ス

この社會局原案が發表せられしよりこの方、勞資の兩方面からは勿論、新聞紙其他各方面の批評家に依つて各種の批評が述べられつゝある。而して無理解なる資本家方面より來たる多少の反對意見を除くの外、大體原案に向つて贊意を表するものゝ多いことは、法律制定の前途に向つて相當心强い希望の光を投げかけつゝあるやうに思はれる。私は政府最高當局者が目下しきりに宣傳しつゝある勞働立法の努力を以て、或は豫期せらるゝ次期議會の解散——從つて來るべき新選擧法に依る總選擧に對する宣傳的戰備の一に過ぎずと解する一派の皮肉なる意見に贊成したくはない。又どうか事のさうでないことを心から切望するものである。

兎も角も、今は政府當局者も勞資兩方面の關係當事者も又其他一般の評論家も、從來に比すれば遙かに現實の問題として勞働組合法制定の事を考慮するに至つて居る。私も今玆に二月この方既に述べ來つた概括的意見を本としつゝ、新に發表せられたる社會局原案を當面の對象として、勞働組合法制定の問題全部に亘つて具體的なる立法的意見を述べて見たいと思ふ。さうして立法の現實化に對して、正しき良き立法の實現に對して、多少とも貢獻をして見たいと考へる。

第一　勞働組合の定義に關する問題

一

今回發表された社會局案に於ても、從來各方面から發表された幾多の勞働組合法案に於けると同じく、其の第一條に於て勞働組合の何たるかを定義して居る。蓋し法案の對象たる勞働組合の如何なるものなるかを先づ明かにせむとするものに違ひない。

この定義の內容を批評するに先つて、吾々の先づ考へねばならぬ問題は、一體法律に於て或事項を定義する目的は何所にあるかと云ふことである。

抑々勞働組合の運動は資本主義經濟組織の下に於ける勞働者の自力救濟運動である。資本家の搾取と之れを擁護する制度とに對する自衞的行動である。この故に勞働組合は資本主義經濟組織の必然に生み出した社會的存在であつて、其の存在內容性質行動等は凡て社會的に定まつて居る。國家の法律が之れに關して何等の規定を設けず、又之に向つて何等の法律的地位を保障せずとも、其の社會的存在夫れ自身に何等損益する所はない。從つて、國家が勞働組合法を制定するについての根本的精神は、飽くまでも斯くの如き既存の社會的存在に向つて如何なる法律的取扱を與ふべきかを考慮するの點に存せねばならない。法律を以て勞働組合を定義し、社會の勞働組合を總て其の鑄型の中に入れて仕舞はうと考ふるが如きは抑も甚しき謬りである。

勿論、法律に於て法定の定義に當てはまらざるが如き勞働組合を設立することを禁止して之れに違反するものを處罰する主旨の規定又は法定の定義に當てはまらざる勞働者團體は「勞働組合」なる名稱を使用するを得ずとして之れに違反するものは之を處罰すといふが如き規定を設けるならば、或は定義に當てはまらざるが如き勞働組合の發生存續を社會的にも亦妨げ得べき多少の效果はあるであらう。併し其れでも實際上定義に當てはまらないやうな勞働組合の發生を要求する社會的需要が强烈である限り、斯くの如き一片の法令を以て濫りに其の需要を抑壓し得る筈はないのである。

必ずや何等か他の名稱の下に、又は秘密結社の形式を以て、其の種組合の多數が發生し又存續するに違ひないのである。

元來法律の實質的內容は其の規定する法律的效果に存し、定義的規定の如きは單に法律的效果を規定する爲めの便宜的手段に過ぎないこともとより言ふを俟たない。法律が『本法ニ於テ勞働組合ト稱スル』は斯く〳〵のものなりと規定することは、唯同法に於て「勞働組合」に與へんとする法律的取扱は其の定義に當てはまるもののみに限るの趣旨を言明せむとするに過ぎずして、其の定義に當てはまらざるものは社會的にも亦勞働組合に非らざることを法律を以て宣言せんとするの趣旨に非ざることもとより言ふを俟たない。然るに、世の中には、法律を以て勞働組合を定義することは、卽ち國家が其定義に當てはまる勞働組合のみを公認し、其の然らざるものは社會的にも亦勞働組合たることを公認せざるの趣旨なりと考へ、其の考へを基礎として定義に對する批評を述べやうとするものが尠くない。併しながら斯くの如きは批評の第一步に於て既に其の出發點を謬つて居るものと言はねばならない。

學者が或國に於ける勞働組合運動を敍說せんとするに際し、敍說の必要上勞働組合を定義するに當つては、其の國に於て現に存在する勞働組合を充分に包括し得べき定義を掲げねばならない。從つて、一方に於ては社會既存の組合の現實を正確に視認すると同時に、他方自ら認めて勞働組合とするものと否との境界を學問的見地より確立することが必要である。從つて、其の定義は同じ一國についてすら時代が推移し勞働組合の現實が變化するにつれて自ら變化すべきこともとより言ふを俟たない。例へば、シドニー・ウエッブが一八九四年「英國勞働組合史」を公にするに際し、勞働組合に與へた定義は「雇傭條件 conditions of employment の維持又は改善を目的とする賃勞働者の繼續的團體」であると言ふにあつた。然るに、勞働組合其後の變遷は最早この定義を以て英國勞働組合の現實に當てはめることを困難な

らしむるに至つた。英國の勞働組合は最早單なる雇傭條件の維持改善のみを目的とはして居ない。彼等の理想と行動とは遙かに其の狹き範圍を超えて居る。この故にウエッブが一九二〇年同書の改訂版を公にするに際しては、右の定義を變更して、勞働組合とは「賃勞働者が彼等の勞働生活の諸條件 conditions of their working lives を維持又は改善する目的を以て組織する繼續的團體」であるといふ新らしき定義を與へねばならぬに至つた。蓋し學者の一國勞働組合史を敍說するに際して必然執らねばならぬ態度である、

所が、一國の立法者が勞働組合を定義するに際しては毫もそれと同一の態度を執る必要はない。又執るべきでもない。勿論、現に其國に如何なる勞働者團體が存在し、如何に其れが行動して居るかの現實を、精細に審査することの必要なるもとより當然である。併し乍ら、學者が勞働組合を定義する場合の如く、學術的見地より見て勞働組合は斯く斯くのものなりと宣言する必要は毫もない。彼は一方に於て勞働組合の現實を精確に視認すると同時に、他方之れに向つて國家の與ふべき法律的取扱の內容を決定し、國家が將に其の取扱を與へむとするものは之れ〳〵の勞働者團體であることを宣明するの趣旨に於て定義を下すべきである。この故に、法律の定義が學術的見地より見れば尙勞働組合と稱し得可きものゝ總て包含して居ないからと云ふて直ちに之れを非難することは出來ない。定義の批評は法律が正に勞働組合に與へやうとして居る法律的取扱の內容と比較して相對的にのみ之れを爲し得べきである。法律の與へんとする取扱を其の定義する勞働組合にのみ限ることが妥當なりや、又は其の取扱を定義に相當する組合の總てに與ふるは廣きに失せずや等の諸點が、定義の批評に際して爲さるべき主要の考慮でなければならない。

勿論、法律が其の定義に當てはまる組合に向つて一定の法律的取扱を與へ、其の知らざるものに之を與へざるときは、其の社會的影響として社會的存在たる勞働組合にも亦色々の影響を與へるであらう。勞働組合が、法律の規定する一定

の取扱を自己に有利なりと考へて、之れが享受を希望するならば、社會上自ら其の取扱を享受し得べき――換言すれば法律の定義に當てはまるべき――勞働組合の増加すべきことを想像し得る。又勞働組合が法律の規定する一定の効果――例へば刑罰――を恐るゝならば、社會上も亦自ら其の効果に觸れるやうな組合を減少せしむるの傾向あることもとより言ふを俟たない。併し、其れは法律の規定する法律的効果と其對象たる定義相當の勞働組合との相對的關係より生ずる社會的の影響に過ぎないのであつて、定義其のものゝ直接的効果にあらざること勿論である。

國家は、自己の機關たる裁判所、議會、諸官廳等の組織構成如何を、法律に依つて自ら定め自ら定義することが出來る。之れに反して、國家自らの機關にあらざる社會的存在に對しては、唯其の與ふる法律的効果に依つて間接に社會的影響を與へ得るに過ぎない。法律を以て斯くの如きものに定義を與へんとするもの、及び之れを批評せんとするものは、總てこの點を正確に意識することが必要である。

英國の一八七一年勞働組合法が、其の勞働組合に向つて與へんとする法律的取扱に付て幾多の規定を設けたる後、其の第二十三條に於て同法に於て使用せる「勞働組合」なる言葉の何たるかを定義せるが如きは、右の見地より見て正に正しき考慮の上に立てるものと言ひ得るに反し、佛蘭西の一八八四年職業組合法第二條に於て「同一若クハ同種ノ職業又ハ特定ノ生産品ノ工場ニ相並ンデ附属セル職業ニ從事スルモノ二十名以上ヨリ成ル職業組合若クハ團體ハ政府ノ認可ヲ得ズシテ任意ニ之レヲ組織スルコトヲ得」と規定し、又第三條に於て「職業組合ハ經濟工業商業並ニ農業上ノ利益ノ講究及ビ其ノ防衞ノミヲ以テ其ノ目的トス」と規定して居るが如きは、何處までも勞働組合は社會的にも亦法律に根據してのみ成立し得べしとするが如き思想に基けることを示すものであつて、余の當を得ずとする所のものである。勿論之れは大革命この方同國に存在する團體組織の自由は總て法律に依つてのみ與へらるべきものなりとする同國特有の法

律思想と深き關係を有するものなることもとより言ふを俟たない。

二

社會局案は其の第一條に於て

『本法ニ於テ勞働組合ト稱スルハ勞働條件ノ維持改善ヲ目的トスル勞働者十人以上ノ團體又其ノ聯合ヲ謂フ』

『勞働組合ハ前項ニ掲グルモノノ外組合員ノ共濟修養其ノ他同利益ノ保護増進ヲ目的トナスコトヲ得』

との規定を設けて居る。是れ一方に於て同法案に所謂勞働組合の何者たるかを定義すると同時に、斯くの如き組合の進行し得べき目的の範圍を法定せんとするものである。

私は以下上記の見地に立ちつゝこの定義の妥當なりや否やを檢討せねばならぬ。而して其れが爲めには先づ、社會局案が其の定義に相當する勞働組合に與へんとして居る法律的取扱の何たるかを明かにする必要がある。

法案は、先づ第一に、勞働組合に次ぎの四種の利益を與へやうとして居る。

（一）希望に依り自由に法人格を取得し得ること（第四條）

（二）所得稅營業稅及び登錄稅を賦課せざること（第十條）

（三）勞働者が勞働組合に加入したるの故を以て資本家其の雇傭を拒絕し得ざること（第十一條）

（四）勞働協約の法律的效力を確認せること（第十二條）

併し法案は同時に勞働組合に付いて次ぎの如き諸種の監督的規定を設けやうとして居る。

（一）其の存在及び內容を地方長官に屆出づる義務（第二條、第三條、第十八條、第十九條、第二十四條）

(二) 地方長官の命令に依り其の業務、財産及び組合員の數を報告する義務（第十三條第十九條）
(三) 組合員名簿作成及び備付の義務（第十四條第二十五條）
(四) 勞働組合の決議法令に違反するときは地方長官之れを取消し得ること（第十五條）
(五) 勞働組合の規約法令に違反するときは地方長官其の變更を命じ得ること（第十六條、第十九條）
(六) 法人格を取得したる勞働組合は、右の外其の存在及內容を一般に公示する爲め登記義務を負擔すること（第五條、第六條、第九條、第二十條、第二十六條）

之れに反し、法定の定義に適合せざるが如き勞働組合の組織を禁止し且つ其の違反者を處罰すること、定義に適合せざる勞働者團體が「勞働組合」なる名稱を使用するを禁止すること等は毫も法案の既定する所ではない。

吾々が上記の定義の當否を批評するに付ては、我國現在に於ける勞働組合運動の現實に鑑みつゝ、右に列擧した法律的取扱を享くべきものを上記定義に相當する勞働組合のみに限るを妥當とすべきや否や、を考慮せねばならないのであるが、以下には先づ法案が「勞働組合」はすべて其の最小限度の目的として「勞働條件の維持改善を目的とする」ことを要すとするの點を考察するであらう。

玆に所謂「勞働條件」とは上記ウエッブの所謂「雇傭條件」を意味するに過ぎないが、又は廣く「勞働生活の諸條件」を意味するものであらうか。我國從來の用語例に依ると、「勞働條件」は屢々「雇傭條件」と同一義に使用されて居る。學者間の用語に於てはもとより、世の中の用語例に於ても亦さうである。例へば、陸軍工廠勞働組合同盟、官業勞働總同盟等の綱領中に於て、「勞働條件の維持改善」なる文字を使用せるが如きは、雇傭條件の維持改善といふと大差なきもの丶如くである。然るに、他の一方社會局案に於ては「勞働條件」なる文字の外、別に第十一條及び第十二條に於

て「雇傭條件」なる文字を使用して居ることから考へると、其の所謂「勞働條件」とは更に一層狹き意味を有するものと解するの外ないのであつて、私は寧ろ之れを解してウエッブの所謂「勞働生活の諸條件」に近き廣汎なる意味を有するものとしたいのである。而して斯く解するに依つてのみ、同法案の能く我國勞働組合の現況に適合し得べきことを信するものである。

現在我國の勞働組合中には單に組合員と個々の傭主との間の雇傭條件の維持改善を目的とするに止まらず、廣く勞働生活の諸條件の向上の爲めに各種の行動を爲すを目的とするものが少くない、若しも之れを狹く雇傭條件の意義に解するときは、現在の勞働組合中相當有力なるものも尙本法の適用を享け得ざることゝならねばならない。例へば『(一)我等は團結の威力と相互扶助の組織とを以て經濟的福利の增進並に智識の啓發を期す、(二)我等は斷乎たる勇氣と有効なる戰術とを以て資本家階級の抑壓迫害に對し徹底的に爭鬪せんことを期す、(三)我等は勞働者階級と資本家階級とが兩立すべからざることを確信す、我等は勞働組合の實力を以て勞働者階級の完全なる解放と自由平等の新社會の建設を期す』といふが如き綱領を有する日本勞働總同盟は、本法案に所謂「勞働組合」に相當するや否や甚だ疑はしきことゝならねばならない。勿論勞働組合と雖も直接治安維持法其他法令の禁止に違反する事項を目的とし得べき筈はない。斯くの如き勞働者團體は、學者の定義に從へば或は之を勞働組合の範疇内に加へ得るかも知れないけれども、飽くまでも資本主義を基礎とする我國現在の政府が斯くの如きものに向つて本法案に所謂「勞働組合」の取扱を與ふべき筈もなければ、又斯くの如き勞働者團體の側に於ても自ら之れを求むべき筈はないのである。畢竟資本主義國家と此の種の革命的勞働者團體との間には唯爭鬪の關係刑罰の問題を生じ得るに過ぎずして、勞働組合法の適用を受くるや否や等の問題は素より當然に起り得ないのである。これに反し、斯くの如き法律の禁止する事項を目的とせざる限り、苟くも勞働生活

の諸條件の維持改善を目的とする以上、其の目的遂行の爲めにする手段は――夫れ自身一般法令の禁止に違反するものにあらざる限り――其の種類範圍に何等の制限なきものと解すべきであらう。

資本主義の現實に目醒めた勞働者並に其組合が、究局の理想として「勞働者階級と資本家階級とが兩立すべからざることを確信」し、「勞働組合の實力を以て勞働者階級の完全なる解放と自由平等なる新社會の建設を期す」るが如きは、もとより當然であつて、法を以てするも尙其の理想を抱持し標榜することを禁止することは出來難い。若し假りにそれを禁止したりとせば、陰に其の理想を抱持しつゝ陽に之れを標榜せざるものは「勞働組合」としての法律上の取扱を受け得るに反し、其の然らざるものは之を受け得ざるが如き不都合なる結果とならねばならない。其結果表面上の規約の外、別に祕密規約を有するが如き反つて好ましからざる組合の發生を促すことゝなるであらう。この故に直接治安維持法其他に觸るゝが如き目的を標榜するものにはもとより「勞働組合」の取扱は與へず、又事實に於て其目的を遂行するに於ては夫々當該法令に依つて之れを處罰すべきであらう。けれども其の以外强ひて勞働條件の維持改善なる言葉を狹義に解し、之によつて「勞働組合」の取扱を受くるものゝ範圍を甚しく狹少ならしむるが如きは素より本法案の趣旨ではあるまい。

勿論、第一條第二項に依れば、勞働組合は「勞働條件の維持改善」の外「組合員の共濟修養其の他共同利益の保護增進」をも目的と爲し得べく、而して其の所謂「共同利益の保護增進」は極めて廣い意味を有つて居るから、從令第一項「勞働條件」の意義は狹く之れを解しても、必ずしも法案に所謂「勞働組合」の目的を甚しく制限する結果とはならないかも知れないけれども、斯くの如きは畢竟用語の末の問題に過ぎない。私は寧ろ、第一項を解して「勞働組合」の本體、其の少くとも有たねばならない目的は勞働者團結の力に依つて勞働生活諸條件の維持改善を圖るにありとするの意

なりとし、第二項は寧ろ勞働者の相互的扶助に依つて共濟修養其他共同相互の利益を圖ることをも併せて目的と爲し得べきことを規定したものであつて、一方に於て法令違反の目的を有する組合の除外せられねばならぬこと勿論であるが、同時に他方單に共濟修養の如き相互的扶助の作用のみを目的とするに過ぎずして「勞働條件の維持改善」を目的とせざる勞働者團體は法案に所謂「勞働組合」にあらずとするの精神であらうと考へる。

從つて、雇傭主と協議するの方法によつて勞働條件の維持改善を計るものは勿論、已むなき場合に於ては同盟罷業其他の戰鬪的手段を用ふることを辭せず、更に進みては政治的運動により議會を利用して廣く勞働者階級全般の生活條件を維持改善することを目的とするもの丶如き、すべて廣く「勞働條件の維持改善」を目的とする勞働者の團體として「勞働組合」の法律的取扱を受け得べし、とするのが社會局案の精神である。而して私は此の意味に於て同案の定義の大體に於て妥當なることを信ずるものである。

尙右の定義が實際上妥當なりや否やは、先きに述べたるが如く、法案が其の所謂「勞働組合」に與へんとして居る法律的取扱と密接してのみ之れを批判し得るのであるから、右組合目的の意義如何に關連して起り得べき二三の法律問題を玆に想像して考へて見やう。例へば、或組合が屆出を爲さんとするに際し、其の目的が法律所定の目的に適合するや否やを認定する權限は地方長官之れを有し、適合せざるものと認定するときは屆出の受理を拒絶し得べきものと言はねばならぬ。而して之と同樣の問題は、自ら法人たるべきことを定めた勞働組合が登記の申請を爲した場合に、裁判所之を受理すべきや否やを決定するに際しても亦起り得る。

次に、或る勞働者團體が所得稅其他を賦課せられたる場合に於て、自らは第一條に相當すべきことを主張して免稅の

特典あることを主張し、課税官廳は之れに反對して、結局は訴願乃至行政裁判所に於て其の勞働組合なりや否やを判定せねばならぬことゝなるであらう。

尚又、或る勞働者が勞働組合に加入したるの故を以て解雇せられたる場合に於て、其の勞働組合が本法案に所謂「勞働組合」に相當するや否やは、解雇の私法的效力如何が爭はるべき司法裁判所の判定に依つて定まらねばならぬことゝなるであらう。

果して然らば、起るべき事件の種類如何に依り、或る一定の勞働團體の勞働組合なりや否やの問題が、行政系統上互に連絡なき種々の官廳に依つて種々樣々に解釋せられ得ることゝなり、實際上相當に不都合な法律問題を生じ得べきことを豫期せねばならぬ。故に法律家の立場よりすれば、上記第一條の定義がよく我國勞働組合の現狀に適合するや否やの點を考察するの外、右に述べたるが如き或る勞働者團體が法律上に所謂「勞働組合」に相當するや否やの問題が各種關係官廳によつて異別に解釋せらるゝが如きことを防ぐべき方法を考慮施設することも亦極めて重要であると考へる。

三

次に、法案第一條は勞働組合を定義して「勞働者十人以上の團體」であると云ふて居る。而して世の中には、この員數を以て餘りに少しとし、或は之れを二十名にすべし、或は之れを五十名に變ずべし、といふが如き意見が行はれて居る。勞働組合の社會的意義より言へば相當多數の勞働者を包容するものにして初めて眞に勞働組合の權威を發揮し得るであらう。けれども、現在我國には今尚――先に本誌四月號に於て述べた「潜勢的組合」に相當すべき――少數なる勞

働運動者の集團に過ぎず、而も臨時諸方面の勞働者の爲めに同盟罷業其他を畫策して事實上勞働者團結の成力を發揮せしむることを目的とするものが少くない。而して此等のものと雖も之れを勞働組合より除外し難い。斯くの如き團體は世上屢々煽動者乃至勞働ブローカーの集團として一般に非難せらるゝものであるけれども、完全なる多數勞働者の永續的團結が成立發達する過程に於て、この種の組合と同一の働きをなす小團體の社會上存在することは蓋し已むを得ないのであつて、之れを勞働組合の範圍外に置かむとするが如きは我國の現狀に適するものと言ひ難い。

勿論、世の中には名のみ勞働組合と稱しつゝ實は恐喝暴行を業とするに過ぎない團體がある。又或は單なる社會主義者の集團に過ぎずして、資本主義經濟組織を根本的に否認し、兎も角差し當り之れを認めて其の上に立ちつゝ勞働條件の維持改善を爲すことを絕對的に否定し、同盟罷業其他の團體的行動も單に來るべき社會革命に對する「訓練」Gymnastique révolutionnaire に過ぎず、と信じて居るものもないではない。而して、この種のものは少數者から成立して居るのが普通であるけれども、先きに述べた潛勢的組合を勞働組合の中に加ふるの故を以て、直ちにこの種の團體に向つてまでも勞働組合法を適用すべしといふ議論は出て來ないのである。要するに、苟くも適當なる方法に依つて勞働條件の維持改善を目的とする限り少數者の團體と雖も尙之れを勞働組合と認むべく、而して其の員數を十名以上に限らむとするのが法案の考へである。

この十名の制限が妥當であるか、又は五十名が正當であるかは、畢竟水掛け論に終るべき問題に過ぎない。其れよりも反つて私はこの十名五十名といふが如き員數の最少限を勞働組合の定義其のものゝ中に加へることに反對したいのである。勞働組合が登記によつて法人格を取得せんとするが如き場合には設立の責任者として相當員數の申請者を要求することも尙意義を有すと言ふことが出來やう。又若しも勞働組合の成立に付て認可主義を採るならば認可條件として組合

員の最少限を定むること必ずしも無意義なりとは言ひ難い。併し本法案に於けるが如く届出主義を採る限り、何故に一定數以下は届出を要せず又一定數以上は之れを要すとするの必要があるのか。又一方に於て勞働組合の意義を相當廣く解しつゝ、單に員數の故を以て勞働組合法の與ふる恩惠の許否を決すべき必要が何處にあるのか。私はこの種の員數制限を設くることは、反つて徒らに煩瑣なる法律問題を發生せしむるの原因となるに過ぎないと考ふるが故に、之を定義の中より排除し、同時に後に述ぶるが如く定義に該當する「勞働組合」のすべてをして「届出義務」を負擔せしむるの主義を抛棄することが、此際最も至當な方策である、と信ずる。

勿論、我國の勞働組合に少黨分立の弊ありそれが爲め實際上勞働組合の威力を發揮し得ざることは一の缺點である。併し斯くの如きは畢竟勞働運動進展の自然に從つて自ら治癒せらるべき事柄であつて法律の力を以て如何ともすべからざる所である。この點より言ふても私は法律が組合員の最少限を定めた上それ以下のものには「勞働組合」の取扱を與へずとして居ることに賛成し難いのである。

四

尙、勞働組合の定義に關連して以上の外次ぎの如き諸種の細かい問題が起り得る。

一　先づ第一に、法案は其の所謂「勞働者」の意義を如何に解して居るのであらうか？勞働者の何たるかは漠然ながらも社會上自ら定まつて居る。この故に、特に説明を與へずして、この文字を使用して居る法案はもとよりこの社會的意義に從つて之を使用するの趣旨であらう。然らば、職工其他一般の工業勞働者は勿論、鑛業農業林業漁業水陸運送業等の勞働者も總て其の中に含まるゝものと解すべきであり、又企業の私營なると官公營なるとを問はず、一般營利企業

なると交通機關電氣瓦斯水道の如き所謂公益企業なるとを問はざるものと解すべきである。世の中には稍ともすれば勞働組合法の適用を狹く工業勞働者にのみ限らうとするものがある。けれども勞働條件の維持改善を目的とする組合組織の自由をこの種の者にのみ限らねばならない理由は少しも存在しないのである。反對說を爲す者の中には、例へば、軍需品工場の勞働者に組合組織を許すときは、一旦有事の際甚だ危險なりとの主張に基いて、彼等の組合權を否定せんとするものがあるけれども、斯くの如きは初めより勞働運動勞働組合を以て非愛國的のものなりと解する偏見の致す所に過ぎない。勞働者をして團結を組織せしめ、其の從事する生產の責任を分擔せしめてこそ初めて彼等からより良き勞働を豫期することが出來るのである。又公益企業の勞働者に向つて勞働組合の組織を許すときは、同盟罷業等の爲め交通機關其他公益企業の停止を生じて、公益上甚だ有害なるべきことを主張するものがあるけれども、同盟罷業の如きは勞働者の戰術として萬已むを得ざる最後の武器である。組合組織を許したるの故を以て、特に其の武器を使用する機會を增大せしめ、之れを許さゞるの故を以て特に之れを減少せしめ得るものではない。それよりは、彼等に向つても亦團結を許し、企業の經營に對して雇傭主と同樣の立場に立ちつゝ其の責任を分擔せしめてこそ、反つて圓滿なる企業の進展を期することが出來るのである。

然らば次に、現在職を有せざる勞働者も亦尙法案に所謂「勞働者」と云ひ得べきか？ 勞働組合運動は階級を同じうし利害を同じうする者の自衞的行動である。從つて現に職を有せずと雖も勞働者階級に屬する限り尙依然として勞働組合を組織し得べきこと素より云ふを俟たぬ。のみならず勞働市場を同じうする勞働者全部の團結によつて勞働の獨占者たる社會的威力を發揮することが勞働組合根本の經濟的職能である以上、現に職にあると否とに拘らず勞働組合員たり得べきこと勿論なりと云はねばならぬ。世の中には非勞働者の勞働組合參加を妨害せむが爲め、此點に反對せむとする

ものがあるけれども、かくの如きは近代的勞働者の意義と勞働組合の本質とを理解せざるものと云はねばならぬ。

次に、吾國の小作人が勞働者なりや否やは從來實際問題として屢々爭はれた所である。而して勞資對立の社會的關係より云へば一般勞働者と利害を同じうするものに違ひないけれども、彼等の組織する小作人組合は其の組織職能等必ずしも勞働組合と同一ならず、現在に於てすら相當巨額の資産を有するもの少からず、從つて財産管理の方法等についても一般勞働組合に於けると異なりたる特別の考慮を加へる必要があると思ふ。此故に、私は小作人組合は之を勞働組合法の適用外に置き、別に小作組合法を制定して其の法律的地位を保護すべきであると考へる。

尚、狹義の勞働者の外、使用人其他有給被傭者のすべては本當は所謂勞働者として勞働組合を組織し得べきか。純理上同じく有給被傭者に外ならない彼等に向つて、特に組合權を拒絶せねばならない理由は少しも存在しない。或は世上「勞働者」なる言葉は一般に之れ等のものまでをも含むものとして使用されて居ないから、法案は之れを組合法の外に除外せんとするの趣旨なるが如くに解せられるけれども、翻つて法案が勞働組合に與へやうとして居る法律的取扱の内容を觀察するとき、所謂使用人の組合に對して特にこの取扱を拒絶せねばならない理由は少しも存在しない。此の意味に於て、私は使用人に對しても亦廣く組合權を認めるのが至當であると考へる。

二、第二に、勞働者にあらざるものも亦勞働組合に加入し得べきや否や。社會局原案者の意見に依れば、少くとも勞働者十名以上を以て組織せらるゝ以上、其外勞働者にあらざるものが加入することは毫も差支なしとするの考である、と傳へられて居る。この點は、所謂勞働ブローカー乃至社會主義者の勞働組合に潜入して陰に陽に之れを指導するが如き働きを爲すことを可能ならしむるものとして、世上屢々反對の聲を聞く所である。併し乍ら、先きに本誌四月號に於て詳說したるが如く、資本家對勞働者の對抗關係に於て資本家の側に於てそれが爲め特別なる使用人を使用し得る以

た、勞働者の側に於ても同じく其の事務員とし役員として勞働者に非らざるものを使用することはもとより之れを許さねばならない。殊に、組合員多く、從つて事務の範圍も極めて廣汎なる勞働組合の如き、現に勞働に從事せる者の餘暇のみを以て事務を行ふべしとするが如きは、殆んど不能を强ふるに等しきものと言はねばならない。勿論勞働組合に加入せる者が治安維持法其他の法令に觸るゝが如き行動をとるならば、其れが非勞働者であらうと又勞働者であらうとも、總て唯直接法令に依つて其の行動其れ自身を處罰すれば即ち足りるのであつて、之れを恐るゝの餘り、非勞働者の組合加入を勞働組合法其れ自身に依つて原則的に禁止せんとするが如きは素より當を得て居ない。

三　尙法案は一單位の勞働組合を組織し得べき勞働者の種類について何等の制限を設けて居ない。この點に付いては、世上屢々組合の組織は之れを職業乃至産業を同ふする勞働者の間にのみ之れを許すべしとするの意見が述べられて居る。勿論勞働組合は社會的にも亦同種の勞働者間に組織せられ、組合の多くが産業別となるの傾向を有するは、現實の事實であるのみならず、理論上も亦當然の事柄である。何故なれば、産業を同ふする勞働者は先づ第一段に於て互に利害感情を同ふするものであり又同一勞働市場に於て互に競爭者たり得べき地位にあるからである。併し乍ら、勞働者階級は勞働者階級として其の總てに通ずる共通の利害感情を有する。其の從事する産業の種類如何に拘らず共同して勞働條件の維持改善に努力すること是れ亦當然の傾向なりと言はねばならぬ。この故に、一方に於て各種勞働組合の聯合を認むるのみならず、他方に於て各種産業の勞働者が團結して一個の組合を組織することも亦之れを認むるの外ないのである。

四　嘗て農商務省の職業組合法案に於ては組合組織の單位を地理的に制限して勞働組合の設立を「道府縣以下の區劃に依」らしめんとしたことがある。さうして今尙この種の地域制限に對して贊同の意を表せんとする者が少くない。勿

論經濟の自然は互に地域を同じうする勞働者をして一單位の勞働組合を組織せしむるの傾向がある。併し乍ら法律を以て特に其の制限を設けんとするが如きは無用にして且有害である。何故なれば、一地域内に居住する勞働者は勿論互に密接な關係を有つて居り從つて團結して一の組合を組織する傾向をもつけれども廣い見地より見れば地を異にし職を異にする勞働者と雖も亦總て勞働者階級の一員として互に共通の利害關係を有する。從つて之れを基礎として各地に通ずる一個の大組合の組織を希望することあり得るは極めて自然である。特に法律を以て之れを制限すべきにあらざること勿論である。

五　終りに、職業制限地域制限の問題に關連して注目すべきは勞働組合の「聯合」である。法案は第一條に於て勞働組合の聯合亦勞働組合の一種なりとし、之れが組織に對して特に何等の制限をも加へて居ない。もとより當然の態度であるけれども、嘗て一八八四年佛蘭西勞働組合法の制定に際しては、組合の聯合を許すときは勞働者階級の全部に亙つて支配し得べき大聯合の成立を來たし、やがて社會の爲め國家の爲め危險を醸すべしとの理由の下に、法律上之を禁止すべきことを主張したものがあつた。さり乍ら、利害を同じうする勞働者階級の全部が其の共同利害を基礎として團結するは蓋し自然の傾向であつて、一片の法律を以て濫りに之れを妨げ得るものではない。

第二　勞働組合の法律的保護

一

社會局案は上記の定義に相當する「勞働組合」に向つて各種の法律的保護を與ふべきことを提議して居る。

先に本誌四月號に於て詳說したろが如く、現在吾國の勞働組合は、先づ第一に勞働運動を制限禁止すべき各種の刑罰法令によつて著しく其の組織行動を妨げられて居る。此の法令を廢止して組合運動の自由を保障することは勞働組合法制定に際して爲さるべき第一の仕事でなければならぬ。

此故に、英佛等に於ける勞働組合法の規定はすべて此等の刑罰法令廢止の法規を以て書き記されて居る。然るに、今回の社會局案に於ては、此種の刑罰法令の廢止は例へば治安警察法第十七條撤廢の法律案として別に之を提議することとし、組合法案夫れ自身に於ては毫も此の問題に觸れて居ない。素より單なる形式の問題であつて、社會局案の態度亦必ずしも不當ではないけれども、既に詳說したるが如く、吾國の現行法令中勞働組合の運動を妨げてゐるものは決して獨り治安警察法第十七條のみではない。例へば、諸府縣の警察命令中直接同盟罷業其他組合行動に向つて不當の制限を加ふるもの丶少からざるは天下公知の事實である。從つて單に一治警十七條を廢止するのみによつて勞働者の團結權を保護し得べしと夢想するが如きは極めて迂遠である。

此故に、私は刑罰法令廢止の宣告的規定はやはり之を勞働組合法中殊に其の冒頭に之を置くべきであつて、之により、一方に於ては勞働組合運動夫れ自身は、治安維持法其他一般刑罰法令に觸れざる限り、適法にして毫も處罰せらるべき性質のものにあらざることを弘く一般に宣明すると同時に、何等か適當なる規定を以て府縣令中右の主旨に背反するものはすべて當然其の効力を失ふべく今後も亦之を制定すべからざる所以を宣言すべきであると考へる。私はかくすることによつて初めて、勞働組合の成立行動を妨ぐべき刑罰法令のすべてを排除し得るのみならず、一般公衆殊に直接此等の法令を取扱ふべき警察官司法官等に向つて勞働組合運動の適法性を教へ且命ずることが出來る、理想の勞働組合法はどうしてもかくの如き形式内容をとらねばならぬものであると考へて居る。

二

現在の制度の下に於て、勞働組合の成立行動を妨げて居る第二の事實は資本家側より來る諸種の妨害である。

即ち、先づ第一に、資本家は一般に組織勞働者の雇傭を拒絕する。或は勞働者が組合に加入した事の故を以て之を解雇し、或は組合に加入せざることを雇傭條件の一とし勞働者をして之を誓約せしむる。而して之が勞働者の組合加入を一般に妨げて居ることは頗る顯著なる事實である。此故に、勞働者の爲めに團結の自由を保障せむとするならば、どうしても資本家が此種の妨害行動を爲すことを禁止すべき何等か適當の規定を設ける必要がある。

社會局案は、此點に鑑みて、次の規定を設けやうとして居る。

第十一條　雇傭者又ハ其ノ代理人ハ勞働者カ勞働組合ノ組合員タルノ故ヲ以テ之ヲ解雇スルコトヲ得ス　雇傭者又ハ其ノ代理人ハ勞働者カ組合ニ加入セサルコト又ハ組合ヨリ脫退スルコトヲ雇傭條件ト爲スコトヲ得ス

第二十一條　第十一條ノ規定ニ違反シタル者ハ五百圓以下ノ課料ニ處ス

所が此の規定に對しては、一方に於ては之を不當とし、他方に於ても之を無用とし、以て其の削除を主張する意見が相當に強く行はれつゝある。けれども、それは決して不當でもなく又無用でもない。

先づ第一に之を不當とするの意見の根據は、之を以て契約の自由を阻止するものなりと云ふにある。資本家が自己の企業に於て何人を使用するかは全く其の自由でなければならぬ。組合に加入せるものを好まざるならば之を雇はざる亦彼れの自由でなければならぬ。是れ實に此種反對意見の骨子である。けれども、かくの如きは契約自由の原則に名をかりて長く勞働者の團結を妨げ、何時までも個々の小弱なる勞働者を相手方として、契約の利益を自己の手中に壟斷せむと

するものである。元來契約自由の原則の社會的妥當性は――先に詳說したるが如く――自己の自由意思を以て撰び約したるものは何所までも之を遵奉せねばならぬとする吾々人間の性情に根據を有するの點に存する。從つて、其の妥當性は大體に於て互に互角の實力を有し、互に平等の協議取引を爲し得べき者の間に於てのみ發揮せられ得る。契約當事者双方の間に著しき實力の差等あるとき、契約の美名に隱れて弱者に君臨し命令し得るものは常に强者である。名は契約にして實は權力服從の關係が存するに過ぎないことゝなる。此故に、資本家と勞働者との間に眞に正しき勞働契約を成立せしめ、眞に當事者双方をして契約の自由を享受せしむるが爲めには、勞働の獨占者たる勞働者をして團結を爲さしめ、以て其の獨占者たる威力を充分ならしめつゝ、資本の獨占者たる資本家に對立し、以て平等なる契約を締結するとを可能ならしめねばならぬ。吾々は自ら自由意見を以て選擇決定し約束したるものなるが故に、後より其の約束を不利益と認むるも倘喜んで之を守るのである。契約自由の原則の社會的效用は實に玆に存するのである。今日吾國の勞働者には一般に怠業的の傾向が甚だ多いと云はれて居る。若しさうだとすれば、それは明かに今日既に彼等の爲めに契約の自由が失はれて居る證據でなければならぬ。何故ならば、契約の名の下に實は唯權力命令の下に服從を强制せらるゝとき、最早彼等に向つて自ら約したるものは何所までも之を遵奉せねばならぬことを强要することは出來ない、彼等の怠業的傾向に陷る、若し當然なりと云はねばならないからである。此故に、私は勞働者に向つて團結の自由を保障することが反つて契約自由の大精神に適合するものであると信ずる。契約自由を名として第十一條を不當視するが如きは、一知半解の見にあらずんば、自己の利益の爲め不當に契約の自由を濫用せむとする惡意の主張なりと言はねばならぬ。

次ぎに又、第十一條は決して無用の規定ではない。成る程現行民法に依ると十四日の豫告期間を以てしさへすれば何等の理由を示さずして勞働者を解雇し得る（第六百二十七條）。又勞働者の雇入に際して何人を採用し何人を採用せさる

かに付て何等の理由を示す必要はない。從つて縱令第十一條が出來たとしても、雇主理由を示さずして解雇を行ひ雇入を拒絶するならば、之れを如何ともし難いと言ふのが反對意見の骨子である。併し乍ら、勞働組合法に於てこの種の規定を設くるときは、一方に於て之れに反するが如き行爲を不法なりとするの社會的信念を發生せしめ、之れに依つて社會上自ら違反行爲を減少せしめ得るのみならず、他方に於ては解雇を恐れて組合加入を躊躇する弱き勞働者に向つて團結の勇氣を與へる效能がある。加之、今日吾々は諸方の工場に於て勞働者を雇入るゝに際し、組合に加入せざることを誓約せしめて居る幾多の實例を見出す。而して之れが著しく勞働者の團結を妨げて居ることを考へると、本條第二項の規定の頗る重要なるを考へざるを得ないのである。

資本家側の人々は殊にこの第二項の規定に反對するけれども、私の考に依れば、假りに彼等の反對が成功して、この規定が不幸にして勞働組合法の中から削除せらるることありとしても、政府當局者にして若し飽くまでもこの種の規定の趣旨を實現せんと欲するならば、少くとも工場法適用の職工に關する限り現行工場法第十七條の規定に基き勅令に依つて此の目的を達し得べきものと考へて居る。何故なれば、職工の雇入解雇に關する事項は勅令を以て之れを定め得るのであり、而して政府は既に近く施行せらるべき改正工場法施行令に於て地方長官をして從業規則の内容に干渉せしめ得ることゝして居る以上、同じく――一般に印刷せられて規則化して居る――雇傭證書乃至宣誓書の類に向つても、職工の雇入に關する事項として之れに相當の干渉を加へ得べきものと信ずるのであつて、この際反對者が強いて第二項の無用を主張し、それが削除を主張するが如きは、奸に非らずんば即ち愚なりと言はねばならないのである。

三

資本家側より來る組合組織妨害の第二は、團體交渉の拒絶である。勞働者の爲めに團結權を保證せんとするならば、彼等が團結を通して資本家と交渉することは飽くまでも之れを認め且つ保證せねばならない。然るに、從來資本家は團體交渉を拒絶して、極力勞働者の組織化を妨げるを一般の例とする。

この故に、勞働組合法制定に際しては、必ず資本家をして一定の條件の下に團體交渉を受け付くる義務を負擔せしむべき規定を設けねばならないのである。然るに今回の社會局案に於ては其の種の義務を强制する規定は之を設けて居ない。唯其の第十二條に於て

勞働組合ガ雇傭條件ニ關シ雇傭者又ハ雇傭者團體ト契約（勞働協約）ヲ爲シタル場合ニ於テ協約ノ條項ニ違反スル雇傭者及組合員間ノ雇傭契約ハ其ノ違反スル部分ニ限リ無效トス無效ナル部分ハ協約ノ條項ヲ以テ之ニ代フ

との規定を設け、以て團體交渉の結果たる勞働協約の效力を法律的に保護せんことを企てゝ居るに過ぎない。

勞働協約の法律的性質及び社會的作用に付いては幾多の攻究を要すべき事柄がある。從つて之れに付ては他日稿を更めて詳論したいと思ふ。而して勞働協約の效力に關する規定としては右第十二條の規定は必ずしも充分に當を得て居ると思はないけれども、この規定が兎も角も勞働組合が團體交渉の當事者となりて勞働協約を締結するの事實を確認せんとしつゝあることは、大に注目すべき事柄なりと言はなければならない。勞働者の組織化するに連れて團體交渉が一般に行はれ、個々の契約に代ふるに團體的なる勞働協約を以てするの傾向あることは極めて顯著な現象であつて、勞働契約上社會的正義を實現するに付ても、又勞資關係の平和的協調を成立せしむるに付いても、この種の現象は寧ろ喜ぶべきものなりと言はねばならない。この故に、私はこの際資本家が第十二條の規定に反對するを以て極めて愚なりとするものである。

尙現行法の下に於て、資本家の側より來ることあり行べき第三の妨害は同盟罷業其他を理由とする損害賠償の訴である。社會局案はこの問題に對して如何なる態度を採つて居るであらうか。法案第六條は民法公益法人に關する規定中各種の規定を法人たる勞働組合に準用すべきことを規定して居るに拘らず、法人の不法行爲責任に關する民法第四十四條を其の準用規定中に加へて居ない。傳ふる處に依ると、原案者は之れに依りて法人たる勞働組合の不法行爲責任を排除せんとするの考へであるとのことである。

社會局は嘗ては一層積極的に「雇傭者ハ同盟罷業ニ依リ損害ヲ受ケタルノ故ヲ以テ勞働組合又ハ其ノ組合員若ハ役員ニ對シ其ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得ス」との規定を設けやうとして居た時代もあるのであるが、今は其の考を捨てゝ單に法人たる組合に付いてのみ民法第四十四條の適用を排除するの方針を採らむとするに至つたのである。併し乍ら、私はこの新らしき態度を以て不當なりとするものである。先づ第一に、元來勞働組合其他勞働者が同盟罷業其他によりて資本家に損害を蒙らしむるも、之れに對して何等不法行政上の責任を負擔するの必要なしとする所以のものは、彼等の團體的行動其れ自身が違法性を欠くからである。一人〳〵離れて資本家に對立すること能はざる勞働者は團結に依つてのみ初めて資本家と平等の地位に立ち得る。さうして雇傭條件が氣に入るまで勞働の賣却を拒絕し得ることが實に有力なる彼等の武器であらねばならない。この故に同盟罷業其他勞働者の團結的行動の違法にあらざること先きに本誌二月號及び四月號に於て詳說した通りである。從つて苟も勞働組合の無責任を宣明すべき規定を設けんとするならば、それを法人たる勞働組合にのみ限らねばならない理由は毫も存在しない。又第二に、法案の如く勞働組合をして同盟罷業に對する責任を免かれしめんが爲め民法第四十四條を除外するの方法を採るときは、獨り同盟罷業に原因する場合のみならず、法人たる勞働組合は一方に於て法人格を享有しつゝあるにも拘らず、他方如何なる事項についても全然不法行

爲の責任なき團體たることゝなりて、結果は極めて不當であらねばならない。第二に、以上の點は假りに先づ差支なしとしても、現に法案の提議しつゝあるが如く、單に準用規定中より民法第四十四條を除外し置くが如き小細工をして置いても、裁判所の思想にして同盟罷業を不法とするの信念を永く持續する限り、將來具體的の事件に際し民法第四十四條の準用が事實除外せらるべきことは法律解釋に關する裁判所從來の態度に照して到底之れを豫期し難いのである。

この故に、私としては法人たる勞働組合には勿論民法第四十四條を準用すべきである、唯勞働組合が其法人なると否とに關係なく、同盟罷業に關して損害賠償の責任を負はざるの根據は、寧ろ之れを同盟罷業の適法性に求むべきであり、從つて若しこの點に付て規定を設けんとするならば、先きに一言した刑罰法令廢止の宣言的規定と併べて、勞働組合が其組合として當然の職分を盡して居る限り、之れを理由として刑事の訴追を受くることなきは勿論、民事上賠償責任をも負擔せしめらるゝことなき所以を宣言するのが、最も當を得た立法方法であらうと考へるのである。

四

勞働組合が現行法上充分なる發達を妨げられて居る第三の原因は——前きに四月號に於て述べたるが名く——其私法的權利保護が全然拒絶せられ、組合の名義を以て權利義務を享有することが許されて居ないことである。

勿論小さき組合にありては必ずしも組合に自らの名を以て權利を享有する必要が起らない。彼等は人格なき社團として組合長乃至會計主任等をして組合の爲めに信託的に財産を保有せしめることが出來る。さうして其れが爲め大して不都合も起らない。それに反し、少しく大きな組合にあつては、組合員相互間の個人的信認の關係必ずしも厚からず、財産の如きも之を組合長會計主任等の個人名義にして置くことは、組合其のものにとりても又名義人等にとりても迷惑を生

すべき場合が少くない。從つて組合が大きくなり其の事務が複雜になり從つて又其の團體性が顯著となるにつれて、之れに法人格を賦與するの必要增大するはもとより當然である。

この故に、社會局案が組合の總てをして必ずしも法人たらしめないけれども、若しも組合自身に於て希望するならば、法人格を取得し得べき途を拓きたることは、至當の立法であると私は考へる。

法案は先づ第四條に於て、勞働組合は其規約中に法人たることを定むるに依り、之れを法人となすことを得と定め、而して法人となりたる組合は、後に述ぶる屆出義務の外、別に法人登記をなすことを要し、登記前にありては法人たることを以て第三者に對抗することを得ずと定めて居る(第五條)

勞働組合が其の希望に依り自由に法人たり得べき主義を採りたることはもとより大いに宜しい。併し、單に規約中に法人たることを定むるに依り、法人となすことを得とするときは、法人格取得の時期が事實上不明となる虞れがある。無論其の不明なるが爲めに損害を蒙ることあるべき第三者に對しては、登記を爲すにあらざれば其法人たることを對抗し得ないことになつて居り、從つて第三者に對する迷惑は之れを防止し得るやうになつて居るけれども、其の位ならば法人格取消の時期と登記の時期と同一ならしめる社會局脊案の方が適當であるのではあるまいか？恐らく社會局が如上の改案を試みた理由は、法人登記は概念上既に法人たるものが之れを登記することであらねばならない、登記によつて初めて人格を取得すとあるが如きは法人登記の概念に合致せずとあるの思想から出たものであらう。併し乍ら、勞働組合の登記を必ずしも一般法人登記の例に依らしめねばならない何等必然の理論は毫も存在しない。私の考に依れば、勞働組合の登記を同樣裁判所の管轄とすることとすら、果して其の妥當なりや否やを疑ふのであつて、法人格取得の時期を登記の時と同一ならしむるが如き理論上何等の差支なしと信ずるものである。

尙法案は、法人たる組合の登記事項として（一）名稱（二）目的（三）主たる事務所（四）法人となりたる年月日（五）理事の氏名住所の五事項を列擧して居る。けれども何故に法人たる勞働組合には、屆出義務の外、別に登記義務を負はしめて居るかの理由を考へて見ると、右の列擧事項の果して妥當なりや否やに付て疑を挾まざるを得ない。元來法案が一般勞働組合に屆出義務を課して居るのは、之れに依つて組合の存在及び內容を官廳に向つて公示せしめんとするにある。然るに、一度勞働組合が法人格を取得するとき更に別に登記を要すとする所以のものは、其の法人たる勞働組合を相手方として取引其他交涉をなすべき一般第三者に向つて其の組合內容を公示せしめんとするにあらねばならぬ。而して法人たる組合と取引するものゝ主として知らむと欲するのは其の法人の人的及び物的信用である。して見れば、組合資産の收支管理に關する規定、代表者其他役員の任免に關する規定の如きも、外部より容易に登記簿に依つて之れを知り得るの途を拓くことが至當ではあるまいか。

終りに法案は法人たる勞働組合の合併分割解散等に付て特に規定を置いて居るけれども、特に論評を要すべき何等重要の規定ではない。

五

最後に、法案は勞働組合保護の一方法として之れに「所得稅營業稅及登錄稅ヲ賦課セズ」との規定を設けて居る。（第十條）勞働組合の性質上もとより當然のことであるけれども、元來勞働組合は其の手段として利得を目的とする事業を行ふことはあり得るとしても、營業として之れを營むことを許さるべきものでないから、營業稅免除の事は初めより右の列擧中より除く方が理論上正當であらう。

第三　勞働組合に對する國家的監督

一

社會局案は、勞働組合に向つて上記の如き諸種の法律的保護を與へることにして居るけれども、同時に又幾多の監督的規定を設けて勞働組合に臨んで居る。

元來、勞働組合に對する國家督督の目的は、之れを三種に分けて考へることが出來る。其の一は、組合員の保護である。即ち組合規約の不當なるが爲め又は役員の行爲不當なるが爲めに組合員に損害を與ふるの虞ある場合に於て、國家之れに干渉して組合員の保護を圖ることが其の一である。其の二は、組合と取引し其他組合と交渉を有つべき第三者の保護であつて、組合の財產其他物的信用乃至人的信用に向つて干渉を加ふるが如きは即ち其れである。尙其の三は公益の保護であつて、專ら組合の行動をして適法の範圍外に逸脫せしめざらむことを目的とするものである。

右の中其の一に付ては法案は大體何物をも規定して居ない。法案は第二條に於て規約中に記載すべき事項を列擧して居るけれども、組合組織の實質に付ては何等法律を以て干渉せず、總て之れを組合員の自治自決に任せて居る。蓋し社會自然の產物であり、從つて各自の便宜に從つて自ら色々の形式をとつて居る組合の内部組織にまでも干渉して、之を法律の鑄型の中に當てはめんとするが如きは妥當にあらずとするの精神であつて余のもとより贊同する所である。勿論、役員其他に規約違反の行動あるとき之によつて損害を蒙つた組合員は普通の民事訴訟によつて裁判所に救濟を求め得るのであつて、法案は此等はすべて之を一般法理に任せて自らは特に何物をも規定しないのである。次に其の二の點

に關しては、法人たる組合に付ては法人登記の制度を設け、之れに依つて法人内容を一般に公示するの途を拓いて居ること上述の通りであるが、其の外法案中地方長官が組合の業務及び財産に關して報告を求め得る權限に關する規定（第十三條）は——後に述ぶるが如く主として警察的監督の目的に出でた規定に違ひないけれども同時に——之に依つて多少組合の資産信用を維持する働きを爲すことが出來るであらう。

以上と異なつて、法案の勞働組合に對する國家的監督の目的は主として公安保全の點に集中されて居る。即ち、一方に於ては行政官廳が組合の存在及び内容を容易に知り得べき途を拓くと同時に、他方組合行動の適法なる範圍外に逸脱することを戒しむるが爲め地方長官に許すに或程度の干渉權を以てして居る。

先づ第一に、法案は勞働組合をして「屆出義務」を負はしめて居る（第二條第三條第十八條第十九條第二十四條）即ち勞働組合の代表者又は設立者は其の設立の日より三週間内に組合規約を添えて主たる事務所所在地の地方長官に屆出づることを要し、組合規約に變更ありたるとき、組合解散したるときは又同じく之れを屆出づべきことを規定して居る。蓋し之れに依つて組合の存在及び内容を政府に公示せしめ、以て監督に便せんとするものであらう。これ等の規定により、勞働者團體中自ら第一條の定義に該當すと信ずるものは法定の期間内に屆出を爲すべき義務を負ひ、若し之れを怠るときは過料に處せらるることゝなるのであるが、先きにも一言したるが如く、或る團體が第一條の定義に該當するや否やは必ずしも明瞭ではない、從つて其の點に關する誤解の爲め不慮に過料の罰を受くるものあり得べきことは今より之れを豫測することが出來る。又官廳に於て定義に該當すると認めて屆出を促し且つ過料を加へて之を强行するも組合に於て飽くまで事實上屆出を爲さゞるとき官廳は果して如何なる態度を執るべきであらうか。法案はこの點に付て何事をも定めて居ない。惟ふに、法案が先づ勞働組合の定義を定めたる上、之れに該當するものゝ總てに對して屆出の

義務を負はしめて居るのは、之れによつてよく容易に勞働組合全般の事情を知り得べしと考ふるが爲めであらう。併し乍ら、この種の方法に依つて勞働組合の實情を知り得べしと豫測することは、恰も戸籍法を設け寄留法を設けて一般國民に屆出の義務を負はして置きさへすれば、之れに依つて容易に國民全部の狀況を知り得べしと豫測するのと同一であつて、其の決して成功するものにあらざること明かである。國家にして勞働組合の現況を知らむと欲するならば直接に勞働組合調査を爲すこと尙國勢調査を爲すと同一でなければならない。現在に於てすら有能なる政府の警察は勞働組合の實情に付いて相當詳細なる調査を遂げて居る。果して然らば今新に屆出義務を規定したとしても、徒に之れに干聯して面倒な問題が起るだけであつて、事實上得る所が少ないのではあるまいか？私は、自ら法人格の取得を希望する程の組合に付いてだけ登記義務を課し、且つそれに伴ふ監督を加へさへすれば、其の他の小さき組合については何等かくの如き特別の義務を課せずとも、實際上何等の不都合なく又反つて面倒な問題を惹起す虞がない、其方が遙かに賢明であるやうに考へる。

尙屆出義務に干聯して注目すべきは、地方長官の命令に依りて業務財產及び組合員の數に關して報告を爲すの義務（第十三條）及び組合員名簿の作成及び備付に關する義務（第十四條）である。銀行業者保險業者の如きものについては一般の信用關係上其の財產管理に對して國家的監督を加ふるの必要あることもとより之れを理解することが出來る。之れに反し、勞働組合の如き性質上財產的團體にあらざるものに對し、特に其の財產業務に向つて國家的監督を加ふるの必要は何處に存するのであるか。若しも、組合が其の事業の一として共濟的事業を營むならば、其の事業に關する限り其の經營に向つて多少の監督を加ふること必ずしも不必要ではない。乍併、其の然らざる一般の組合に向つてまでも廣く此種の監督を及ぼさんとするが如きは全然不必要である。若しも之れを惡意に解するならば、勞働爭議に際して、地方長

官は組合に對して財産の報告を命じ、之れに依つて容易に組合側の爭議資金の多寡を知ることが出來る。果して然らば爭議が容易く勞働者の側の不利益に終るべきことと極めて豫測し易き所である。斯くの如き場合恐らく組合は事實上容易に眞實なる報告を爲すことはあるまい。過料の威喝を以てするも之れを强制することは恐らく困難であらねばならぬ。この故に、私は財産報告の義務に關する規定は寧ろ之れを削除し、法人たる組合即ち第三者との財産的交渉を生ずる虞れある組合に限つて、財産目錄の調成備付を命ずることにして置きさへすればよいと思ふのである。尙其の以外の義務に付ても强いて履行困難なる義務を强制することは徒らに違反事件を發生せしむるのみであつて事實上何等の效果をも擧げ得るものではない。元來國家的保護のみを根據として成立して居るのではない勞働組合に對し、この種の義務の强制に依つて無理矢理に之を取締らうとしても、それは反つて組合運動を法律の外に逃がして仕舞ふだけであつて、法律と調和しつゝ之をして健全に發達せしむる所以ではない。

二

勞働組合に對する國家的監督方法として法案の規定する第二は、勞働組合の規約並に決議に對する監督權である。即ち、法案は先づ第十五條に於て「勞働組合ノ決議法令ニ違反スルトキハ地方長官之ヲ取消スコトヲ得」と定め、又第十六條に於て「勞働組合ノ規約法令ニ違反スルトキハ地方長官其ノ變更ヲ命スルコトヲ得」との規定を設けて居る。蓋し勞働組合の規約及び行動をして適法なる範圍の外に逸脫せしめざらんとするの用意に違ひない。法案が、先づ第一條に於て勞働組合の定義を掲げ、其定義に該當するものに限つて勞働組合としての各種の取扱を與へることにして居る以上、其の現に組合と認めて其の取扱ひを與へつゝあるものが法令の外に逸脫せんとするとき、努めて之れを防止せん

と圖るは國家として蓋し當然の態度であらう。併し乍ら、私はこの規定の內容に付ても次ぎに述ぶるが如き多少の疑點を有つて居る。

先づ第一に、勞働組合の決議法令に違反したる場合地方長官之れを取消すことを得とするの規定は、恐らく之れに依つて決議の法令に違反することを防止せんとするものであらう。併し乍ら元來法律上「取消」は唯一定の事實より生じたる法律的效果を否認し、法律上之れを發生せざりしと同一に取扱ふことを意味するに過ぎずして、決議なる事實其のものを否定するものにあらざることもとより言ふを俟たない。何故なれば、事實そのものは縱令法律の力を以てするも之を無とし又有とすることも出來ないからである。果して然らば、決議の取消に關連して起り得べき法律問題は如何なるものであらうか。先づ第一に、規約變更の決議が法令に反するの故を以て取消されたるときは、法律上規約は變更せざりしことゝなるが爲め、變更の屆出は不受理とならねばならぬ。又變更決議の內容が組合員に向つて出資其他何等かの義務を課するものなるとき、法律上其の義務は取消の結果發生せざりしことゝなるべきであらう。之れに反して、決議法令に違反するも毫も其の內容が法律的效果を目的とするものにあらず、例へば單に革命的の宣言を爲したるに過ぎざるが如き場合に於て、假りに地方長官が其の取消を命じたとしても、決議された宣言其のものは事實其のものとして存續すべく、取消の爲め之れに向つて何等の影響を生ずることはないのである。勿論決議は組合の內部に於て規則としての事實的效力を有し、自ら組合員を羈束すべきが故に、國家其の決議を取消すときは、其の組合內部に於ける事實的羈束力をも妨げ得べき多少の效果はあるであらう。けれども單に國家が取消したりとの一事を以て、直ちに其の事實的羈束力までをも全然排斥し得べしと考ふるが如きは甚しき誤りである。この故に私は第十五條を以て寧ろ無用の規定であると言ひ度いのである。何故ならば、組合の決議が法令に違反するならば、現に治安維持法治安警察法等の中に其決

議者を處罰し得べき法規が存在して居る、而して事實上法令違反の決議なからしむるが爲めには、この種刑罰の威嚇あらば即ち足るからである。又決議法令に違反する以上――特に取消なしと雖も――其決議は法律的には無效である。從つて其の決議の效力が裁判所其他官廳に於て主張せられたる場合には、敢て第十五條の如き規定なしと雖も、官廳自ら法律違反の故を以て其效力を否認すれば即ち足るのである。この故に、第十五條は法律的見地よりすれば甚だ之れは無意義なりと言はねばならないのである。

次ぎに、第十六條は規約法令に違反する場合に於て地方長官其の變更を命じ得べく、組合の代表者若し其の命令に應ぜざるときは過料に處すべき旨を規定して居る。（第十九條參照）。本條に關する立法者の考は恐らくそれによつて事實上法令違反の規約を有する勞働組合を無からしめやうとするにあるのであらう。併し乍ら法律的に見れば、この規定に付いても第十五條に於けると同樣の疑問を起す餘地があり得る。即ち例へば規約の法律的效力が裁判所に於て爭はるゝならば、裁判所は地方長官の變更命令の有無に拘らず其效力を否認するに違ひない。又規約內容の違法が當該組合をして第一條の定義中に入らしめざる程度に甚しきものなるときは、官廳は總て初めから其の勞働組合たることを否認することが出來るのであつて、敢て變更命令の問題を生ずる餘地がないのである。即ち、規約內容の違法が治安維持法違反の如く重要のものなるときは、國家は初めから之れに向つて勞働組合の取扱ひを與へず、又は之れに向つて處罰を加へさへすれば即ち足るであらう。又若し規約內容の違法が組合員の權利義務に關する此細の點に止まるときは事實其の點の法律的效果に關連して事件が起りたる場合に於て、例へば裁判所其の效力を否認すれば即ち足るのである。規約中些々たる點に至るまで地方長官之れに干渉し其の變更を命じ得べしとせば、法案が折角認可主義を採らざりし根本の自由的精神が全く失はるゝことゝなるのである。この故に私は本條も亦無用の規定に過ぎずと解するのである。

要するに、勞働組合の行動が適法なる範圍を逸脫したるときは、警察的見地より之れに制裁を加へれば即ち足るのであつて、勞働組合法其れ自身に於て直接之れに干渉すべき方法を設けんとするが如きは、本來國家其れ自身の機關にもあらず又專ら國家の法律に準據し國家の保護に依賴して生れたるものにあらざる——經濟自然の社會的產物に過ぎざる——勞働組合に對する態度として決して當を得たものではない。國家は彼等の行動が國家の認むる適法の範圍を超えたるとき、或はそれを罰し、或はそれに向つて國家的援助を拒絕し、以て組合其れ自身が斯くの如き國家の態度に影響せられて自ら變化するのを待つべきである。徒らに法律を以て規律し、法律を以て組織立て、之れを法律の埒內に秩序整然と列べ立てやうとするが如きは甚しく誤りたる態度なりと言はねばならない。

結語

以上を以て、私は大體社會局勞働組合法案の內容を紹介すると同時に之が論評を了へた。

同案は從來各方面から發表された勞働組合法案に比すれば遙かに能く勞働組合發生の社會的必然性と組合運動の實情とを理解して居る。無論公平な立場から見て尙遺憾な點は少くないとしても、徒らに之を取締り之を法定の鑄型中に押し込まむことを力むるよりは、寧ろ之に一定の法律的地位を與へ一定の法律的便宜を與へて其の健全なる發達を計らうとして居る點に於て、私の大體贊同を惜まない所のものである。

世の中には社會局の此の態度に對して、徒に勞働者側の利益感情を顧慮するのみであつて、資本家の利益主張を無視し國家產業の前途を顧みざるものなりとの非難を加へる人々もないではない。乍併、勞働組合運動は資本主義經濟組織

の下に於ける勞働者の自力救濟的運動である。此の經濟組織必然の産物である。此の經濟組織の繼續する限り、勞働者の此の運動も亦之を認めねばならぬ。資本家は何時までも長く勞働者を個々に引き離して置いて自由に其の搾取を續けやうと希望するであらう。しかし資本家は自ら如何に資本を擁して居ても、畢竟勞働の協力なしに生産を爲すことは絕對に不可能である。而して勞働は現在今や勞働者によつて獨占されて居る。それならば、資本の獨占者たる資本家と勞働の獨占者たる勞働者との關係は、最早命令服從の關係にあらずして、對等の關係であらねばならぬ。さうして生産の二要素を獨占する者をして各々互に理解しつゝ共に手をつないで生産をしてくれなければ困る。

現在の如く國と國との間に固く經濟的國境が鎖されて居る限り、さうして國と國とが依然として國際的經濟競爭に熱中して居る限り、此の世界の中に立つ一國として國民の爲めに幸福なる生活を保障せむとする以上、國家産業の盛衰を無視して勞働問題のことを說き得ざる素より謂ふを俟たない。吾々はとも角も國家を單位として吾々日本國民全體が如何に幸福に活き得べきかの途を考へない譯にはゆかない。而して元來天然富源に乏しい吾國が、此の激しい國際經濟競爭の場裡に立ちつゝ、幸福なる步みを續けてゆく爲めには、國民全部の共力によつてより能く働きよりよく生産することの必要なる素より謂ふを俟たない。乍併、其のより能く働きよりよく生産せねばならぬ人々——勞働者——に向つて永久に自由を與へず、何時までも唯「商品」としてのみ之を取扱ふに過ぎざるとき、どうして能く産業の隆興を期することが出來やう！見よ、現在の吾國は或る意味に於て「國民總怠業」の狀態にあるではないか！是れ畢竟政治的にも又經濟的にも萬人能く其の所を得ず民心自ら倦み疲れたるの結果なりと云はねばならない。此の故に我國産業の隆運を計らむとするものは、徒らに從來の資本家萬能の産業政策にのみ拘泥することなく、生産の要素たる「勞働」に向つて社會上經濟上正しき地位を與へ、其所を得せしめ、以て國家生産の責任を分擔するものとしての自重心と喜びとを

須ち與ふべきである。而して勞働組合運動に對する國家の狀態は實に此の根本的考慮の上に決定されねばならないのである。

この故に、今回の社會局案が大體に於て取締的ならむよりは寧ろ助勢的態度を採つて居ることは、右の見地よりして極めて賢明なりと言はねばならぬ。所謂國家産業の見地より其の過激を非難するもの丶如きは、徒らに資本家本位の産業思想にのみ捉られて、今後國家産業の必然に向はねばならない將來を洞察せざるものなりと言はねばならない。

私は以上法案に對して色々の批評を加へた。殊に法律家的見地よりして可なり澤山の修正を提議した。併し乍ら、法案が其の根本に於て監督的ならむよりは寧ろ放任的助勢的態度を執つて居ることに賛意を表するものであつて、今後政府部内に於ける審議の爲め又議會に於ける討議の爲め、濫りにこの根本的精神の失はれざらむことを希望して已まないのである。

（大正十四年九月十日）

國際金融中心點に關する研究

堀江歸一

一、國際金融中心點たる諸要件——戰前倫敦市場の國際金融に於ける活動——戰時中に於ける悲觀と戰後の展開　二、國際金融に於ける聯絡法——支店の開設——コレスポンデンスの約定——倫敦に於ける引受信用——コレスポンデンス銀行と支店銀行——殖民地銀行の支店——外國銀行が倫敦にコレスポンデンスを結ぶ所以——コスレポンデンスの條件——殘高と利子　三、倫敦市場の引受業務——引受業務に伴う利益——磅手形の優越的地位——倫敦割引市場の諸機關——諸機關の活動狀態　四、倫敦市中銀行と割引市場——手形仲買業者との關係——手形仲買業の變遷——手形仲買業者と倫敦市場に於ける割引步合との關係——銀行が手形仲買業者を援助する理由——割引商會の職務　五、英蘭銀行の地位勢力其他の問題——英蘭銀行と市中諸銀行との關係——英蘭銀行再割引の效果——英蘭銀行の市場に對する支配力——公定利率と市場利率との關係——英蘭銀行と手形仲買業者——手形仲買業者を統制する英蘭銀行の手段——戰時戰後に於ける右手段の效果——英蘭銀行終局の支配　六、金貨本位制の完全なる運用——金の輸出に制限を加へる場合——爲替市場に於ける英蘭銀行の地位——英蘭銀行が爲替相場を支配する所以——銀行利率と爲替相場との關係——融通手形と國際金融——英蘭銀行の金を支配する實力　七、倫敦の國際金融中心點たる意味——磅手形の重用される理由——倫敦市場に於ける金利——國際金融と金貨本位制との關係　八、歐洲戰爭の倫敦市場に加へた打擊——戰時財源の調達法——英蘭銀行に於ける借入金と大藏省證券の增發——斯る變動と爲替相場との關係——爲替相場と財政幷に金融に對する信用　九、磅貨の價値と金貨本位制への復歸——通貨縮小に對する反對論——千九百二十四年委員會の成立、千九百二十五年の報告書發表——純眞なる金貨本位制復興と之に代る可き方策——委員會の確定意見——結論

國際金融の中心點として、一國の市場を立たしめるに就ては、資金の供給の豐富であるとか、金利步合の低廉であるとか、諸外國の求める所に應じて、資金融通の任に當るとか云ふことの諸條件の必要なるは勿論であるが、是等の諸條件と共に、更に必要であるのは、一國が金の輸出入を自由にし、之に對して何等の干涉束縛を加へざることである。從來是等諸種の資格を完全に具備したものは、一の倫敦市場あるのみであつて、此故を以つて、倫敦は世界通商の中心點たり、國際貿易の大部分は磅手形に依つて決濟され、世界の爲替業務亦倫敦を通じて、行はれると云ふ種々の特色を發揮するに至つた。而して是等の特色は歐洲戰爭前まで、明に倫敦金融市場の具有する所と爲つて居つたのであつて、隨つて其結果として、

第一、倫敦市場に於ける銀行に宛てゝ振出した長期手形が國際間の取引を決濟する方法として、代金取立並に資金融通の點から見て、最も便利であり、又最も費用の少いものであること、

第二、諸國の輸出業者は英國以外の市場に送致した物資の賣却代金を回收する爲めにも、亦磅手形を振出すこと、

第三、隨つて上記諸市場に於ける輸入業者は要求拂磅手形を倫敦に送致して、右手形の滿期に於ける支拂に充てなければならないこと、

第四、斯くて世界到る所の市場から倫敦に向つて、商業手形が流れ込み來り、互に此一大中心市場に於て、相殺されること、

の四事實を生じて已まざるに至つた。思ふに倫敦が世界唯一の自由金市場であり、倫敦に於ける支拂は總て金貨を以て行はれ、其磅貨は價値の最も確實なるものであり、而して倫敦に於て、金貨を受取つた人が其金貨を外國に送致する爲め、國外に齎し去る場合に、何等の妨碍を蒙らざることの諸點は倫敦をして爲替取引に於て、右の如き地位を占める

に至らしめたものと認められる。之に加ふるに資金の供給豐富であつて、諸種の手形が確實なる金利歩合の下に、常に割引されて、以つて資金に對する需要に應じ、諸種の募債も亦行はれて、資金の融通が殆ど時を擇ばず、倫敦に於て、求められたことは、倫敦をして國際金融の中心點たらしめた所以と爲つたのである。歐洲開戰以來英國が金の輸出を禁止したり、資本の對外的融通を制限したりしたことは、自ら國際金融中心點たる條件を擲ち、其地位から遠ざかつた次第であり、之に關聯して、紐育が多年倫敦の占め來つた地位を繼承するであらう、否紐育こそ倫敦から國際金融の中心點たる特權を奪取するであらうと云ふ説の行はれるを見るに至つた。英國が金の輸出を禁止し、資本の對外的放下を制限した一方に輸入超過の大なるに加へて、貿易外の收入に激減を來した爲めに、其差を決濟する爲めに對外放資の一部分を回收處分し、更に新に外國に債務を起し、然も常に國内に於て、信用の過度に膨脹することを防ぐ必要上、金利歩合を高歩に置いた諸點から考へたならば、上記所説の起ることも、亦已むを得ざる所であるやに思はれたのであつて、此悲觀説には根柢とす可きもの丶あつたことが看取されるのである。果して斯の如く爲らんか、英國將來の經濟的立國に大なる瑕疵を生ずることを免かれない。英國が最も恐怖したのは、此一事であつて、之を避ける爲めに戰後數年間隱忍自重經濟を復興すると共に財政を整理し、遂に千九百二十五年十二月末と豫期された時日よりも早く金輸出の禁止を解くを得るに至つた。解禁直後に於ては、金に對する外國の取付の如何なる狀況と爲るや、豫測に苦むものあり、之に備へる爲めに、資本の外國輸出に對して、制限の加へられる場合あるが如くであるが、今後國際貸借に於ける受取勘定の次第に有利と爲る一方に、輸入超過の金額亦減縮するに至つたならば、右の如き制限も結局解除されて、完全なる自由金市場たり、國際金融の中心市場たる日の必ずしも遠からざることが想像される。其時に當つて、倫敦市場は國際經濟上に如何なる働きを爲すであらうか、是れ吾人の研究を要する所である。

二

世界の諸市場に於て、當業者が倫敦宛の手形を振出す場合には、其手形の種類如何を問はず、其れ等の市場に於ける銀行業者が倫敦と或る聯絡を設けることを以つて、必要の條件とする。其聯絡の最も簡單なるものは外國市場に於ける銀行が倫敦に支店を設立することに依つて、之を見るを得るのである。然しながら銀行が外國に支店を開設し、又之を維持するに就ては、相當の費用を要し、其費用は直に銀行の負擔に屬する道理であるから、支店開設の後に於て、行はれる營業を通じて獲得する利益が果して上記の費用を償うて餘りあるや否や、此一事こそ、一銀行をして外國に支店を開設せしめるの當否を決定する標準と爲るのであつて、收益が費用に超過する、而して其超過する事實が一時的のものでなく、相當に永く繼續すると考へられる場合には、利害の打算から云つて、支店の開設を促すが、其然らざる場合に、支店の開設に躊躇するに至ることを以つて、當然としなければならない。

斯る事情に依つて、一の銀行は外國に支店を開設する狀況に到達することを許されないとしても、外國に關係する幾多の取引の存する場合には、何等かの方法に依つて、支店の開設に代る道を工風しなければならない。即ち一國と他國とに於ける獨立銀行の間に、コレスポンデンスの約定を締結し、一銀行をして外國に於て、他銀行の爲めに、一のエジエントたらしめるのは、之に當るものであつて、支店に代つて、最も簡便に外國銀行をして一國の對外業務に當らしめるを得るのである。倫敦の諸銀行は他國の諸銀行の求めに依つて、斯る約定の締結に當り、双方の市場に關係する取引に就て、外國銀行の代理店と爲り、外國銀行は倫敦に所謂引受信用（Acceptance Credit）を開き、之を通じて國際金融上の取引に資するを得るのである。斯くて倫敦諸銀行の取扱う外國業務の大半は右コレスポンデンスの約定に基い

て、發生するものと云へる。固より此場合に兩國の銀行が互に獨立對等の地位に居ることは勿論であつて、兩者の所有權から云つても、管理權から見ても、互に別個の關係に居り、何等共同に關係する所を存しない。隨つて內國市場に於て、兩者の行う營業に就ては、各々其好む所に從つて發展し、以つて利益の獲得に勉める。唯上記コレスポンデンスの約定に認められた條件に從ひ、兩國銀行の間に聯絡を結び、或る國際間に亘る取引に就て、相互の利益を擧げることを欲するのであつて、斯くて兩國を通じて、行はれる金融上の關係を密接にし、又圓滑にするに至るのである

故に兩國の銀行間にコレスポンデンスの結ばれたことに依つて、金融上の關係の生ずるは、當然であるが、更に一歩を進めて、諸外國の銀行が倫敦市場に支店を開設したならば、兩者は即ち一個の本支店たる地位に居り、其共同的所有幷に管理に屬するの故を以つて、兩國市場の間に結ばれる關係をして一層密接ならしめることは論を俟たない。多年の慣例として、倫敦に於ては、是等の支店銀行を其英國殖民地に屬するものと、外國に屬するものとの二種に大別する。最近の報告に據れば愛蘭自由國の銀行六、阿弗利加の銀行四、濠洲の銀行十五、加奈陀の銀行七、印度の銀行六を數へ、外國銀行に至つては、四十八の多きに上る。是等諸銀行の本店と倫敦に於ける支店との關係は本來本支店として一の機關に結合し、全體に亙る共同的利益を擧げる爲めに、統一的支配の下に立つものであるから、之を目してコレスポンデンスの關係と同一視するを得ないのは勿論であるが、之を實際に徵すると、支店銀行は或る程度まで本店に對して、營業上獨立し、獨立銀行に類する法則に依つて、業務を律し、別個の計算を立てゝ、營業の損得を明にするのであるから、見方に依つては、コレスポンデンスの下に立つ銀行と略ぼ同樣に取扱うを不可なりとしないのである。

倫敦に於ける外國並に殖民地銀行の支店も其資產として「當座並に短期通知資金」を有し、之に依つて代表される金額は當然倫敦市場に於て、短期貸付資金に供給されるのであつて、此關係から國際金融上に關係を有するには、相違な

いが、右の金額中には、本國に於て現に運用されつゝあるものや、倫敦に廻送の途中に在るものも、含まれて居るのであつて、實際倫敦に於て活動し得る金額に至つては、大なりとするを得ない。即ち倫敦に於て、長期間を通じて、資金を運用することは、外國並に殖民地銀行の本領とする所ではなく、其公開市場に對して、資金を融通するや、輸出貿易に伴ふ金融上の要求の起らざる期間に、之を行ふに止まる。即ち是等の諸銀行は外國並に殖民地から英國に向つて、行はれる輸出貿易に對して、金融の便宜を與へることを以つて、重要の職務とする。斯くて此種の取引を代表する手形は倫敦の銀行に依つて、引受の爲めに、其振宛人に呈示され、引受後手形の大部分は倫敦割引市場に賣却される。斯る手形の賣却に依つて、外國並に殖民地銀行に依つて、收められた資金は後日英國商品の輸出に關して振出された手形を買入れる用に供される。唯諸銀行が右の資金を受取つてから、外國手形の購入に、之を使用するに至る或る時期の間だけ、諸銀行の倫敦市場に於て利用するを得る現金のバランスを膨脹せしめ、其膨脹と共に、外國並に殖民地銀行の倫敦市場に於ける勢力に加へる所あらしめるのであるが、固より其金額に限りあり、又其時期の長きに亘らざるを常とするのである。

　然らば諸外國の銀行が倫敦の銀行と特にコレスポンデンスの約定を結ぶのは、何故であるかと云へば、其目的とする所は、第一磅爲替を買入れ、或は代金取立の爲めに、磅爲替を倫敦に送ること、第二磅手形を振出し、倫敦の代理銀行をして之を賣却せしめること、第三倫敦の銀行をして外國銀行の發行した信用狀の下に、個人の振出した磅爲替手形の引受人たらしめることの諸點に外ならない。而して是等の取引の行はれるに就ては、諸外國の銀行は必ず倫敦の銀行に若干の現金を殘高として持ち、其或る程度以下に減少した場合には、本國からの送金に依つて、之を塡補しなければならない。此關係から、總て國際金融の中心地に居る市場は座ながらにして、諸外國から現金殘高を吸收するのであつて、

此事は國際金融中心に居る市場の有する大なる特權であると考へられる。外國諸銀行が斯く倫敦市場に現金殘高を所有するに當り、之を出來得る限り、其必要とする最小限度に止めようとするのは勿論であるが、一方にコレスポンデンスの約定に於ては、兩國銀行間に其維持され可き現金殘高幷に之に付せられる利子を協定し、特に殘高の最低額を定め、其以下に之を下らしめざることゝするの常である。或は兩國銀行の間に多年に亙つて、良好なる關係が持續され、一方の他方に對して許す信用程度の高き場合には、右の如き最低限度に關する協定を行はず、倫敦の銀行は外國の銀行が常に相當の殘高を存し置くことに信頼するし、又斯る場合に更に一歩を進めて、適當なる利子歩合の下に、當座貸越の行はれることもあるが、普通の事例から云へば、コレスポンデンスを許す銀行は其許される銀行に對して、若干の殘高を當座預金として、存置することを要求するのである。斯くて此事に關聯して、之に付せられる利子の問題を生ずるのであるが、此點に就ても、實例に種々の相違がある。若しもコレスポンデンスの約定に於て、殘高最小額を置くことが要求されて居る場合には、利子は此最小額を超過する部分に對してのみ支拂はれるし、最小額の約定の存せざる場合には、全體の殘高に對して、利子が支拂はれる。斯く殘高の如何なる部分に對して利子を付する協定が成立するか、其如何に拘はらず、利子歩合に就ては、一定の標準があり、普通の場合に於ては、英蘭銀行公定利子の一分引と爲つて居る。但し英蘭銀行の公定利子が五分以上に引上げられた場合に於ても、殘高に對する利子が四分以上に引上げられることは、實際に許されず、四分を以つて、最高の限度とするのである。

三

倫敦金融市場に於ける一の職務として、同市場の銀行が外國手形の引受に當る一事が舉げられる。引受業務に就て

は、從來引受商會の之に當るを常としたが、近年倫敦の銀行自ら之に當り、營業上に相當の利益を擧げると共に、引受業務をして確實なるものたるに至らしめた。蓋し引受商會は世間公衆に就て、營業資金の調達を企てるものでないのであるから、假令ひ其引受業務に關して、兎角の批評を蒙ることがあつたとしても、直に營業資金の取付に接する虞れはないが、銀行に至つては、公衆に預金を負うて營業する結果、何時預金に對する取付に接して、如何なる窮地に陷るかも測り難く、此危險を顧慮して、自然引受業務を行ふ場合に於ても、其態度を愼重にし、放漫の擧に出づることを避けしめるのである。

斯く倫敦の市中諸銀行が引受業務に干與し、隨つて彼等と外國銀行との間に、コレスポンデンスの約定の結ばれるや、前者は（一）豫告の下に外國銀行の振出した長期爲手形の引受に當る、引受の金額に就ては、或る制限の置かれることを常とし、外國銀行をして無限に手形を振出さしめるが如きは、殆ど絶無である、（二）引受手形の期限の到來するに隨ひ、外國銀行のバランス中より、其支拂に當り、（三）外國銀行の要求に依り、手形に附隨する一切の證書を取扱ふ一方に後者は（一）豫め引受の爲めに長期爲手形を振出すに隨ひ、倫敦のコレスポンデントに其旨を通知し、（二）引受手形支拂に必要なる現金を豫め銀行に預入れ置き、（三）引受手形振出の最高限度に相當する擔保物として、第一流の株券債券の類を提供するのである。

斯くて倫敦の銀行が引受業務を通じて、種々の方面から、利益を獲得することが了解されるであらう。第一に利益の生ずる根源は倫敦銀行の現金殘高に對して與へる利子と其運用に依つて收める利子との鞘であり、第二に右現金殘高の預入れを無利子にて受ける場合には、其利益の更に大なるを得る道理である。然し是等は引受業務に伴ふ附隨の利益であつて、其主要なるものとしては、引受手數料の收入が擧げられなければならない。而して引受銀行は如何なる標準に

據つて、手數料を決定するかと云ふに、特約先銀行に就て、定額の料金を課するものと、取扱ふ金額に比例するものと、二種の別がある。其孰れを以つてするかは、銀行と取引先との協定に依るのであつて、引受業務の上に、大なる關係を持たない。

倫敦金融機關の一として、引受商會なるものがある。手形の引受は市中諸銀行も、引受商會も共に之を爲すのであるが、銀行の引受を爲す手形は所謂眞手形に限られるに反し、引受商會は將來の商業取引又は支拂に關する手形即ち融通手形に對して、引受を爲す點に於て、其特色を發揮するのである。例へば合衆國の或る會社が爲替相場の自國に逆である時期に、倫敦に向つて、巨額の利子を支拂ふ義務を負ふたとすれば先づ倫敦の引受商會に宛て、期限三個月の爲替手形を振出し、倫敦のエジエントに手形を送付する、エジエントは此手形を其引受の行はれた後、割引に付し、斯くて利子支拂に必要なる資金を收める。一方に右の手形が滿期に爲つた際、合衆國の會社は新に倫敦宛手形を買入れ、之を引受商會に送付し、以前の手形引受に應ずる資金に充てしめるのである。若しも後の手形が偶々紐育に於て、倫敦宛の手形の供給豐富であり、爲替相場の有利である時に、買入れられたとしたならば、其間に著しき節約が行はれる道理である。

上述したコレスポンデンスの關係は合衆國を始め他の諸國の銀行が倫敦に之を結ぶことを切望して、已まない、又斯る關係が結ばれるので諸國は國際金融に對して、相當の交渉を持ち、斯界に活躍するを得るのである。然らば諸國が倫敦市場に上記の關係を結ぶことに依つて、國際金融上に活動するを得るのは、何故であるかと云へば、此事たる、要するに世界の爲替市場を通じて、磅爲替手形の有する特殊の地位の然らしめるものとするを得るのである。即ち磅手形をして斯る優越的地位を占めしめる原因は長期手形が其引受後倫敦市場に於て、容易に割引されるを得る一事に存するの

であつて、倫敦金融市場の長所として、其特權的地位の維持に資するものは實に其割引市場の發達並に完成に繫ると云へる。而して此割引市場に於て、重要なる働きを爲すものとしては、(一)市中諸銀行幷に外國銀行の倫敦支店、(二)手形仲買業者、(三)割引商會、(四)英蘭銀行の四者が擧げられる。思ふに金融市場の業務なるものは現金を短期月後に支拂はれる約束に變換することに存する、ウヰザース氏の所謂現在の貨幣と將來の貨幣との間に交換を行ふものは、即ち是れであつて、而して斯る約束は爲替手形の形態に於て、行はれ、手形は實に金融市場の取扱ふ物資を以つて目される。斯くて物資を取引する商人が手形の生產者であつて、市中諸銀行は其消費者であると云へる。而して是等兩者の中間に介在する者が手形仲買業者と割引商會との二者であると云ふことが一般に說明されるが、斯く云つた所で、銀行は手形の買入に必ず是等仲介者を經由し、直接に手形所有者に就て、其買入れを試みないと云ふ次第ではない、時に彼等が手形の直接買入れを爲すことのあるは勿論であるが、之を爲すや、附隨の事たるに過ぎない。而して手形の取扱を特殊の業務とするものは、手形仲買業者幷に割引商會であつて、彼等は引受商會、個人銀行、外國銀行支店と共に、割引市場なるものを組織し、此割引市場に市中諸銀行幷に英蘭銀行を加へたものが金融市場を組織し、金融の諸方面に向つて、活躍する其間に於て、如何なる分量の手形が如何なる利子の下に、割引されるかは、是等諸機關の爲す所に依つて、定まるものと云へるのである。

倫敦市中諸銀行は一方に他の金融業者に對して、引受手形を供給し、他の一方に引受手形の一部分を自ら割引する點に於て、割引市場に對して、二重の關係を持つ。即ち外國諸銀行のコレスポンデントとして、市中諸銀行は世界の到る所から、爲替を受取り、振宛人に呈示して、其引受を求め、割引市場に提供して、賣却の道を求める。手形仲買業者の如き、公開市場に於て、斯る引受手形の續出するや、好個の放資目的物として、之を買入れ、滿期日まで、其所有に

勉めるのであるが、一方に銀行自身亦一個の信用機關として、各種の商業手形に對して、現金なり、信用なりを融通することを希望して已まない。引受濟爲替手形の如き、信用の方便として、其期限短かく其信用優良であり、殊に銀行が引受人である際に、其優良の程度の高きを見るし、如何なる事變に臨んでも、容易に他に賣却するを得るの諸點に於て、大なる長所を備へ、隨つて資産を確實にし、又流動的狀態に置かんとする銀行をして爭つて引受濟手形の購入并に保持に忙からしめるのである。

倫敦の市中諸銀行の買入れる爲替手形は其由來から云つて、二種に分つことが出來る。第一市中諸銀行は他の金融市場に於ける銀行のコレスポンデントとして、日々引受並に割引の爲めに送付される多額の商手形を取扱ふ。而して引受手形には之を速に賣却して、現金とする條件が付けられて居る爲め、倫敦市中諸銀行は此指定に從ひ、引受手形を處分し、其代金を外國銀行のバランスとする。但し市中諸銀行は他の一面に於て、資金融通者たる職分を持つて居るのであるから、引受手形を處分するに當り、銀行自ら市場に行はれる割引歩合を以つて、之を買入れる。斯くて倫敦市中諸銀行がコレスポンデントたるの故を以つて、收める利益の一は外國諸市場の銀行から送付される多數の手形に就て、選擇を行ひ、自己の必要に適することの最も大なる手形を取るを得るに外ならない。第二手形仲買業者の銀行に手形を賣すことも、亦銀行に取つて、手形の供給される一の源泉と爲る。蓋し是等の仲買業者は引受手形の購入者として、又賣却者として、銀行と取引を營むのであつて、時に引受手形を買入れ、又時に之を銀行に賣却し、廣き範圍に亘つて、銀行をして手形を選擇するの餘地あらしめるのである。

四

現代の銀行業に於て、其營業の安全を期して、誤まらざらしめるには、銀行の資産を流動的狀態に置くことを必要とする。然らば如何にして之を斯る狀態に置くかと云へば、手形の期限をして日々繼續して、滿了せしめるの一事に重きを置かなければならないのであつて、其れには銀行自身有する手形の期日に就て、周到なる注意を施すことを要する。若しも此點に用意を缺いたならば、一の手形の滿期日と他の手形の滿期日との間に、大なる間隔を生ずるであらうし、隨つて銀行にして偶々滿期日に臨んだ手形を所有することの寡小なる際に、現金に對して、大なる取付を蒙つたならば、爲めに銀行の蒙る危險甚だしきものたらざるを得ない。此點に就て、銀行に營業上の便宜を與へるものは、手形仲買業者である。即ち手形仲買業者のものたる、銀行に對して、滿期日に異同ある幾多の手形を提供し、此内に就て、銀行をして自己の必要に適するものを選擇せしめるのであつて、斯くて銀行は其過剰とする現金を手形買入に投じ、以つて其資産の流動性を助長するに至る、銀行と手形仲買業者との間に、密接なる關係の存する所以である。

市中諸銀行が營業資金の一部分を當座並に短期通知(七日前)の貸付金に運用することは、著明の事實であつて、其相手方として資金の貸付を受けるのは手形仲買業者と株式仲買業者とであるが、前者に對して行はれる部分の頗る多きを見るのである。然らば銀行が斯く手形仲買業者に金融上の便宜を與へて、手形を買入れることの代りに、手形を賣却しようとする者に就て、直接に手形を購入する方法に出でないのは、何故であるかを探究すれば、其所に仲買業者と云ふ中間商人の介在を必要とする理由が明瞭と爲る。蓋し手形仲買業者の内には、其取扱う目的物として、内國手形を主とする者があり、又外國手形に重きを置く者もあるが、其孰れであるを問はず、銀行自身が直接に手形の買入れに當るよりも、低廉なる費用の下に、手形の買入れを爲すのであつて、仲買業者は常に銀行の希望に適する種類並に期限の手形を供給することを怠らないし、此故を以つて、銀行亦仲買業者に向つて、其必要とする資金の大部分を供給して、其仕事

を擁護するの態度に出るのである。

仲買業者と云へば、年來の習慣上、平生手形の賣却者と購入者との間に立つて、賣買の仲介を爲すに止まり、斯業に自己の資本を放下せず、單に手數料を徴收して、之を自己の所得に充てるものと解された。倫敦割引市場に於ける手形仲買業者の職務は當初賣買を媒介する一事に止まり、純然たる仲買業を營むものであつたが、其以後に於て、此本來の性質を離れ、自己の計算を以つて、自己の資本を運用することゝ爲り、今日に於ては、手形仲買業者と割引商會とは倫敦割引市場に於て、中堅たる地位を占め、總ての引受手形は殆ど兩者に依つて、吸收されると云つても敢て過言なりとしないのである。蓋し手形仲買業者のものたる、之を法人組織の銀行と比較すれば、全然其趣きを異にし、市中諸銀行から短期間を限つて、借入れた資金を重なる資本金として、業務を行ふ私人に過ぎないのであるが、其借入れる資本金の巨額であつて、其行ふ營業の大規模である爲めに、爲替手形に對して、廣大なる市場を供へるのであつて、倫敦に於て日々多額の磅手形が消化され、吸收されるに就ては、手形仲買業者の活動に依る所、大なりとしなければならない。思ふに如何なる國の金融中心地に於ても、其處に所在する銀行は諸地方銀行から支拂準備金の預入れを受ける地位に居るものであり、而して其準備金は平生或る方面に向つて、運用されることを許されるが、尙ほ事變に臨んで、現金を必要とする時に、適時に現金に換へられるが如くに、注意を重ねて、放下の道を求めることを緊要の要件とする。斯して此種の放資法としては、第一流の手形證券に依つて、保證された當座貸付が最も適當のものと考へられるのである。即ち紐育に於ては、斯る當座貸付は株式取引所の仲買業者に對し、其取扱ふ有價證券を擔保として、行はれるが、倫敦に於ては、株式取引所の制度として、二週間を以つて、株式取引の清算期限とする結果、銀行をして株式仲買業者に對して、有價證券を擔保とする當座貸付を行ふことを難からしめるのである。然らば倫敦の市中銀行は之に代つて、如何な

る資金の融通法を爲し、以つて當面の必要に當るかと云へば、銀行は手形仲買業者に對し、將來種々の時日に於て滿期と爲る磅手形を擔保とする當座貸付を爲すのであつて、此種の貸付金は平時に於ては、日々期限の到來するに隨つて、新なる貸付に依つて、補充せられ、結局仲買業者に向つて長期の繼續する取引を行ふに堪ゆる資金を供給することゝ爲る。若し其れ金融の緊縮期に際して、諸銀行にして是等當座貸付を回收する手段に出でたならば、手形仲買業者は英蘭銀行に就て、手形の再割引を受け、以つて貸付金の返還に必要なる資金を調達するの必要に迫られるのである。當座貸付に依つて、調達する資金の外に、手形仲買業者は其本來所有する自己資本金を營業上に利用し、引受手形を購入する。而して機會の有利なるものあれば、此手形を賣却することもあり、又擔保品に充てゝ、資金借入れの方便とすることもあるのである。

手形仲買業者は營業上に於ける多年の經驗から、倫敦市場に現はれる各種の磅手形に就て、其品質を區別し、割引歩合の高低と品質の優劣とを正確に調節せしめる能力を有する次第であつて、其日常職務とする所は倫敦の諸銀行を歷訪して、註文を受ける一方に、賣却される引受手形を査閱して、其適當と信ずるものを購入し、更に一定の條件の下に、銀行に向つて、手形を買入れる機會を供へる諸點に存する。而して手形の購入者として、手形仲買業者の定めた價格は大體上倫敦に於ける割引歩合を決定することゝ爲る。蓋し仲買業者は手形の信用若しくは期限の如何に依つて、正確に手形を分類する一方に彼等の間に行はれる劇烈なる競爭は手形の各種類に對して、其れ〳〵特別の割引歩合を生ぜしめ、之を市場に行はれしめるに至る。所謂第一等銀行引受手形(Prime Banker's Acceptances)に對する歩合なるもの、之に當るのであつて、時に公開市場に於ける割引歩合(Open Market Rate of Discount)とも稱される。銀行が外國銀行業者の依賴に依つて、手形を買入れる場合には、右の割引歩合を適用するのであつて、隨つて外國のコレスポンヂ

ントは公開市場に於て、手形を買入れるものが倫敦の銀行であると、手形仲買業者であるとを問はず、手形に對して、同一の價格を收めるを得る道理であるが、尙ほ倫敦に行はれる年來の慣例として、手形仲買業者が其購入した手形を銀行に賣却する場合には、多少低廉なる步合を以つて、割引に付するを得るのである。

然らば何故に倫敦の市中諸銀行は既に營業上に必要なる資金を手形仲買業者に供給する上に、手形割引の點に於ても、亦右に擧げるが如き便宜を斯業に與へて、以つて之を援助するかと云へば、二個の理由の存することが考へられる。第一銀行が仲買業者を通じて、手形を買入れる場合には、其數量、滿期日、品質等に就て設けた制限に適應するが如き手形のみを選ぶを得ること、第二手形仲買業者をして手形裏書人たる責任を負はしめ、手形の信用を增進すること即ち是れである。手形仲買業者は銀行に手形を賣却する場合に、裏書の手續に出づることもあり、其手續を取らない場合には、銀行と仲買業者との間に締結された契約の一條項に於て、仲買業者は手形の再割引を行つた銀行に對して、何時に於ても、自己の賣却した手形の支拂に就て、義務を負ふことを揭げて、以つて責任の所在を明にするのである。

割引商會は倫敦市場に於て、手形の割引を重なる業務とする點に就て、手形仲買業者と類似して居るが、尙ほ其實際の職務に於て、組織に於て、兩者の間に大なる相違の存することが認められる。蓋し手形仲買業者は一個の媒介業を營む者である。時に手形を其滿期まで所有して、相當金額の資金を放下することはあるとしても、本來の目的は有利なる步合の下に、手形を再割引に供するの一事であつて、媒介者たる本質を脫しないのである。然るに割引商會は之を手形仲買業者に比較すれば、媒介者たる要素に乏しくして、金融機關たる要素に富み、滿期日の到來するまで、手形を所有することを以つて、普通の事例とするのみならず、組織の點に於ても、亦大に異なるものがある。即ち割引商會は一個の商業銀行とも見る可く、自己資本金の比較的多額のものを利用し、自ら預金利子を定めて、世間多數の人々から預金

を受入れ、引受手形の買入れの外に、資本の放下をも或る程度まで行う。唯割引商會の手形仲買業者と類似する所は有價證券を擔保として、銀行から短期の資金を借入れる一事であつて、此資金は其全部を擧げて、手形の買入れて投ぜられるのである。

五

英蘭銀行が倫敦金融市場に於ける礎石である事實に就ては、何人も疑を挾まざる所であるが、其礎石たるや必ずしも英蘭銀行の有する公權的地位の然らしめるのでなく、寧ろ其他の金融業者に對して有する關係に依り、又市場に行はれる金利歩合を左右する勢力に依るものと觀察される。蓋し英蘭銀行は私人の出資に成る銀行であるが、其英國政府に對する金融業務に當り、市中並に地方諸銀行の支拂準備金を保有する任に當り、公共的利害に重きを置いて、營業を律する諸點に於て、特色を發揮する。斯くて他諸銀行の支拂準備金保有者として、英蘭銀行は多額の當座預金を有するのであつて、然も之を保有するに就て、何等法令の效果に依らず、一に他諸銀行の斯る預託を便宜とする事情に基くのである。然らば英蘭銀行は斯く預託された資金を運用するに就て、其方針を如何なる點に置くかと云へば、如何なる事變に臨んでも、流動的資質を發揮するを得ることを以つて、第一の要件としなければならない。其れには英蘭銀行は手形の割引を行ふことを必要とするのであつて、此關係から英蘭銀行は割引市場に接觸し、手形取引に大なる勢力を及ぼすのである。而して英蘭銀行の買入れる手形は英國に於ける振宛人の引受に係り、英國に於て支拂はれるものに限るのであつて、然も英蘭銀行が之を買入れるや、手形仲買業者や、割引商會の爲すが如く、公開市場に於て最初の賣却者から買入れるのではなく、英蘭銀行自身の得意先から、再割引の方法に依つて、買入れるのである。而して英蘭銀行の正規

の得意先と爲り再割引の便を收めようとするには手形買業者にしろ、割引商會にしろ、豫め英蘭銀行に當座預金勘定を開いて置かなければならない。英蘭銀行が手形の割引を爲すのは、是等の得意先からするのであつて、斯くて同銀行の有する手形には引受人として、又裏書人として、手形仲買業者若くは割引商會の名の記載されるを見るのである。市中諸銀行が英蘭銀行に就て手形の再割引を求めることは、法律に於ては勿論、政策としても、禁止されて居る次第ではないが、從來の習慣を以つてすれば、市中諸銀行は必ず其買入れた引受手形を自ら保有す可きものであつて、手形の再割引を他銀行に依賴するが如きは、其基礎の薄弱なることを表明するものと考へ、又自己の自尊心を傷けるの故を以て、之を敢てしなかつた。斯くて英蘭銀行の手形再割引業務は總て手形仲買業者並に割引商會に對してのみ行はれ、廣く市中の諸銀行に及ばないのである。然も前二者に對して、再割引の行はるるや、英蘭銀行は單に兩者の爲めのみに、之を行ふのではなく、市中諸銀行の支拂準備金が預金に對して、著しく減少し、準備金比率の低下甚だしき場合に、彼等を救濟する一つの方便に充てられる意味を存するのである。蓋し信用膨脹の時期に臨むや、銀行は盛に資金の融通に當るが、其內に於て、商業社會を通じて增進する取引に對して、融通の道を付ける爲めに、當時偶々振出される多くの商業手形を割引し、一方に其代金を預金に振替へるので、其爲めに預金の增加を惹起す。斯くて預金に對する支拂準備金の比率を減少し、結局銀行營業の安全を脅かすまでに、其狀態を危險ならしめる。斯る場合に臨んで、市中諸銀行が其所有する資產の或るものを處分して、之を現金化するを得れば、甚だ好都合であるが、此點に、困難があるときには、銀行は如何なる態度に出づ可きものであるか、銀行が當座又は短期通知の下に、市場に貸出して居る資金を回收して、其用を充すのは、第一策であるが、更に銀行に對する壓迫が續いて、已まなかつたならば、銀行は全然手形割引の請求を拒絕するか、少なくとも現金を以てする手形の割引を拒否する、即ち割引の爲めに、銀行の買入れた手形に對して、其

買入れた同日を以つて、現金を拂出すことを拒否するか、二途の孰れか一に出でるのである。前者の場合に於ては、今後の資金融通は全然停廢されることゝ爲るし、後者の場合に於ても、亦自家の營業に於て、現金を所有せざる可からざる人の窮地に陷ることは論を俟たない。然も商業上の取引は信用が繼續して、擴張されることに依つて、維持される次第であるとすれば、斯る資金融通の停止の經濟社會に有害なるは勿論であつて、假令ひ銀行をして現金と債務との關係を復舊せしめる效果ありとしても、或は一時金融市場に恐慌を誘致するの虞れなきを得ない。此際には資金の融通を欲する者は英蘭銀行に依頼するの外に、頼る可き何等の方便を有せざる道理であつて、英蘭銀行の行ふ再割引の業務は金融上に重要なる意義を有するものと考へられる。此種の取引が金融市場全體に如何なる效果を及ぼすかと云へば、上記の再割引を受けた以上は、手形仲買業者や割引商會の手許に餘裕を生ずるのは勿論であつて、彼等にして斯る餘裕を得たならば、彼等は之を以つて豫て市中諸銀行から融通を受けて居る當座貸付金を返却する、何を以つて之を返却するかと云へば、英蘭銀行宛小切手を以つてし、之を受取つた市中諸銀行は此小切手を其儘英蘭銀行に於ける當座預金に振替へる。而して市中諸銀行は英蘭銀行に於ける當座預金を支拂準備金の一部分に計算して居るのであるから、此事は自ら諸銀行の支拂準備金をして豐富ならしめることゝ爲るのである。果して然らば英蘭銀行が再割引に依つて、手形仲買業者や、割引商會に金融上の便宜を與へるのは、彼等を直接の對象とするが如くに見へるが、實際の效果から云へば、市中諸銀行に金融上の援助を與へることゝなる。英蘭銀行は市中諸銀行に對して超然たる地位に居り、後者亦前者に直接の援助を仰がない仕組であるが、間接には或るものを通じて、右の如き働きの行はれて居ることを知らなければならない。

　故に英蘭銀行が右の如き金融上の援助を手形仲買業者や、割引商會に與へる場合には、英蘭銀行自ら金融市場に大なる勢力を揮ひ、金融上の安否を決定する地位に立つのである。若しも斯る場合に英蘭銀行が再割引を拒絶したならば、

公開市場に於ける引受手形の賣却は全然其道なきに至ることとの關係から、英蘭銀行の再割引に際して、適用する利子步合は自ら手形仲買業者や割引商會の今後行う取引に施さんとする利子步合を左右するに至るのであつて、金融市場は全く英蘭銀行の掌裡に把握されると稱される（The Mahket is said to be "in the Bunk"）のは、此事實を指したのである。而して實際問題として、之を考へると、英蘭銀行は年來の習慣として、濫に再割引を拒絕するが如き態度に出でず、寧ろ公共の利益を尊重することを以つて、年來の方針とする、但し再割引の利率を如何なる點に置くかと云ふことは、英蘭銀行獨自の立場に據つて、之を決定するを憚らない。蓋し斯る時期には市場に於て金融の衝に當る者は如何なる高利率を負擔しても敢て之を辭せず、英蘭銀行に就て、資金の融通を求めるに急なる一方に、此利子を負擔した者は實際の取引に於て、之を回收するに勉める結果、事實に於て、英蘭銀行の再割引步合をして金融市場を統制する効果を生ずるに至らしめるのである。

然らば英蘭銀行の割引步合は如何にして市中諸銀行の割引步合即ち市場利率を支配するものであるか。市場利率なるものは何であるかと云へば、決して單一の利率ではなく、滿期日其他の條件の異なれる種々の手形に適用される利率の一團を指すのであるが、市場に於て、一般に市場利率と云はれるときには、最低の利率即ち倫敦の公開市場に於て、期限六十日又は九十日の第一等銀行引受手形の買入られる利率であると解される。此種の手形は總ての他の手形を凌駕し、優良なる條件の下に取扱はれ、他種の手形に對しては、第一等手形に比較して、品位の劣れるだけ、高き利率の適用されることを免かれない。一方に銀行利率なるものは、英蘭銀行が第一流の手形即ちApproved bills of Exchangeで、滿期日に至るまでの期間十五日以內のものを割引する場合に、適用する步合の名稱であつて、倫敦割引市場の狀況を示す指針を以つて、目される。而して銀行利率が世人に依つて最も多く注目されるのは、金融緊縮の際であつて、斯

る場合には利率は必ず上進し、其上進は時に亦市場利率の騰貴を促すことあると共に、時に市場利率の騰貴に依つて、銀行利率の上進を招くこともある。然らば兩種利率の間には、如何なる關係が存するであらうか。市場利率が銀行利率よりも低廉であることは、市中諸銀行の自由に處分利用することを許される資金の豐夥しく、斯くて彼等をして英蘭銀行よりも、低廉なる利率の下に、營業するに堪へしめるに出づると云へるが、一方に市中諸銀行の市場利率は諸銀行の短期預金に與へる預金利率に依つて左右され、而して其預金利子は多くの程度まで、英蘭銀行利率に依つて、支配されることの關係から、市中諸銀行をして英蘭銀行利率と著しき間隔ある利率を以つて、營業する能はざるに至らしめ、英蘭銀行の市場利率を支配する機能を大なるものたらしめるのである。之を普通の道理に徴して考へれば、銀行利率の市場利率を支配する力は當時英蘭銀行の營業が如何なる程度まで、割引并に再割引業務に關聯して居るか、其高低に依るものと云へる。元來英蘭銀行は日常の營業を行ふに就て、「シチー」の實業家殊に其巨擘を以つて目される者と直接の交渉を持ち、彼等の爲めに、信用を擴張し、斯くて倫敦の諸銀行と競爭を試みざるを得ない。然も倫敦市場に於ける貸出資本の供給の潤澤なる時期に於ては、英蘭銀行の營業は右の種類に止まり、市中諸銀行は自己の資力に依頼して、營業に當る爲めに、特に英蘭銀行を煩はさず、英蘭銀行亦再割引を行ふこと甚だ少なく、其公定利率は手形仲買業者や割引商會の營業資金を調達する費用と關係なきの故を以つて、市場に行はれる割引歩合を支配するに至らないのである。斯る場合に英蘭銀行當局者は其銀行利率を決定するに就て、第一等銀行引受手形の割引歩合として、市場に行はれる利率を標準とし、銀行利率をして右市場利率に比較して、一分又は其以下の程度に於て、若干の高率に居らしめるのである。然しながら此場合に於て、銀行利率は一の型式であつて、英蘭銀行は此利率に依つて、實際の取引に從ふ次第ではなく、取引先に對して利率を協定し、「シチー」の諸銀行の實際に採用する利率と大差なからしめる。斯く英蘭銀行利率

の形式的性質は市中金融業者の理解する所であつて、唯英蘭銀行が實際に掲げた公定歩合よりも低廉なる利率を以つて、取引に從ふときには、之を以つて倫敦に於て金融緩慢であり、倫敦の金融業者は英蘭銀行の再割引業務に依頼せずして、商業手形を吸收する地位に居り、斯くて銀行利率は手形仲買業者、割引商會、銀行等の歩合を支配する力を持たない。即ち無効力であることの證左を以つて、目されるのである。

然しながら英蘭銀行當局者にして斯く銀行利率の無效力なる狀態に置かれた儘を以つて、可なりとして、之を默視するを許さず、或る手段を施して、銀行利率を有效のものたらしめる必要を認めることがある。元來英蘭銀行が金利歩合を引上げる際には、一般に金利歩合を上進せしめると共に、特に市場の割引歩合を上進せしめることを目的とする。然るに市中諸銀行は斯く英蘭銀行の欲する所に從ふ場合もあり、又從はざる場合もある。前者の場合には、諸銀行は金利の今後愈々上進し、現金の價値の多々大なるに至ることを信じて、手元現金の增加を欲する次第であつて、所期の目的を達する爲めに、第一預金利子を引上げ、第二手形の買入れを制限し、第三當座並に短期通知貸付を回收する。市中諸銀行の當座並に短期通知貸付は手形仲買業者に對して行はれるものであるから、其資金の回收されることは、仲買業者をして不利の地位に陷らしめる所以と爲る。何故に然るかと云へば、第一金利の引上は仲買業者の現に所有する手形の價格を低落せしめ、第二仲買業者は諸銀行から營業上必要とする資金の取立に接し、第三然も仲買業者の手形を現金に換へるを必要とする時に當つて、銀行は其求めに應じないと云ふが如き、仲買業者の苦境を語るものであつて、彼等は結局英蘭銀行に就て、市中諸銀行に依つて、拒まれた所を充さなければならないことゝ爲る。英蘭銀行は其公共的機關たる見地から、此任に當ることを辭さゞるものであるが、唯自己の自由に決定する條件の下に、之を爲さうとする。其條件とする所は何であるかと云へば、(一)承認手形を銀行利率の下に割引し、(二)割引歩合よりも五厘高の利率に於

て、短期間を限り、承認された有價證券に對して、貸出を行ふが如き、其重なるものを以つて、目される。斯る方針の下に英蘭銀行が行動する故に、同銀行の金利歩合は市場の趨勢を左右するに遺漏なきに至るのであつて、市場の割引歩合は銀行利率の水準點又は之に接近する所にまで、推上げられ、英蘭銀行をして完全に其目的とする所を果さしめるを得るのである。

然しながら市中諸銀行が英蘭銀行の爲す所と歩調を一にせず、手形の買入れに制限を加へないと共に、手形仲買業者に對する貸付金の回收をも行はないとしたならば、斯る場合に臨んで、英蘭銀行は如何にして當面の必要に應ずるであらうか。市中諸銀行の預金利子は英蘭銀行の公定歩合を標準として定められるのであつて、以前は其れよりも一分半引、近年は二分引を以つて、之に充てるのであるから、若しも英蘭銀行が公定歩合を引上げたならば、其事は市中諸銀行の預金利子を高くし、預金利子の高く爲つたことは、諸銀行の割引歩合をも高くして、英蘭銀行の其れと歩調を一ならしめる道理であるが如くに考へられるが、此道理の働くに就ては、或る限度の存するものがある。何故に然るかと云ふに、市中諸銀行の吸收する預金の内には無利子のものが少なからざる高を占める。銀行の割引貸出利率は營業資金の銀行に及ぼす費用全體の平均率に基礎を置くのである。隨つて銀行の預金利子は無利子を以つて吸收された全體の營業資金に割當てられる次第であつて預金利子が引上げられたからと云つても、當面適切には銀行の負擔を大ならしめず、其割引貸出利率を引上げるの必要を感ぜしめないかも、測り知るを得ないのである。

然らば英蘭銀行の割引歩合引上に依つて、市中銀行の預金利子を左右し、斯くて市場利率其ものを支配しようとしても、效果に於て、充分なるを得ざる場合が多々あるのである。英蘭銀行が割引歩合を引上げたに拘はらず、市中諸銀行が之と行動を一にしない所以は彼等の手元に相當金額の遊金ありて、之を手元に置くよりも低利を以つて、他に融通す

ることを欲する、之を融通するに就て、銀行の間に競爭の行はれる結果として、市場利率を低廉ならしめる次第に基くのである。彼のウオーター、バヂオットが「ロムバード街」を著作した當時に於ては、「ロムバード街」には、英蘭銀行から或る金額の資金融通を受けるに非ざれば、手形の再割引の行はれるに足る資金の存するを見ざることを述べて、以つて英蘭銀行の勢力の强大なる趣きを論證しようとし、世人亦其然る所以を認めた。市場に於ける遊金の供給に制限あり、小切手利用の範圍亦局限された當時に於ては、誠に然るものありと考られたことであらう。然も其後市中諸銀行の隆興する勢、甚だ盛であり、市場に於ける遊金も亦多く彼等に吸收されて、剩すもの少なきに至るや、市中諸銀行に對して、英蘭銀行の勢力は必ずしも大なりとするを得ず、正常の狀態の金融市場に保たれて居る場合には、手形は多く市中諸銀行の割引する所と爲るのである。英蘭銀行の割引步合引上が市場利率を左右する效果を奏しないのも、主として市中諸銀行に存する資金の豐富なるに由るものと認められる。玆に於てか英蘭銀行は自ら必要とせざるに拘はらず、市場に就て、資金を借入るゝの方針に出で、以つて銀行利率をして市場利率を支配せしめようとする。即ち英蘭銀行は市中諸銀行をして同銀行の爲す所に從つて、違はざらしめる爲め、市場から資金の一部分を回收し去らうとする、其方法として行はれるのは、英蘭銀行が其所有に係る有價證券殊にコンソル公債の一部分を株式取引所に向つて、現金で賣却して、定期（二週間）で買戾して置くことに外ならない。此方策は確實に市場の遊金を減ずるのであつて、遊金の減少と共に、市中諸銀行は支拂準備金の維持に困難を覺へ、之に對抗する爲めに、勢市場利率を引上げざる可からざるに至るし、又斯く遊金の減少する勢、著しきに至ると、市中諸銀行は手形仲買業者や、株式仲買業者に對する資金の融通を制限するので、是等當業者は自然英蘭銀行に就て、資金の融通を求める、之に應ずる際に、英蘭銀行が銀行利率其のものを適用するとすれば、即ち銀行利率をして金融市場を支配せしめることゝ爲るのである。此種の方策たる、聊か人工的

の嫌はあるが、一面から觀察すれば、斯る方策の成效するのは英蘭銀行が自ら健全と信ずる政策を實現するに就て、如何に大なる威力を有するかを示す所以であり、英蘭銀行自身に取つて、或る負擔を加へられるとしても、公共の利害に訴へて、可なりと考へられる。

唯歐洲戰爭中幷に戰後の或る年間に於ては、右の金融政策は事實之を行ふを得なかつたと共に、又之を行ふを要しなかつたのである。蓋し開戰直後から、千九百二十二年五月下旬に至るまで、倫敦株式取引所に於て、二週間を期限とする取引は實行されなかつた。隨つて上記の市場控制策は英蘭銀行に於て、之を行ふの道なきに至つた次第であるが、唯之に代つて市場を控制する用を爲したのは、政府の殆ど間斷なく大藏省證券を發行する一事であつて、其發行に依つて、政府の收納する資金の一部分は經費として、政府關係の請負業者其他に拂渡されるとしても、他の一部分は英蘭銀行に於ける一時借入金を決濟する爲めに、英蘭銀行に交付され、斯くて同銀行をして巨額の遊金を所有して、市場を控制する地位に立たしめるを得たのである。

若し其れ市場に於て、金融緊縮し、英蘭銀行が再割引の業務を行ふに至るや、狀況は全然異ならざるを得ない。斯る場合に於ては、手形仲買業者や、割引商會の如きは、其商業手形を所有することから受ける重荷を輕うする爲めに、英蘭銀行に依頼することは、自然同銀行をして公開市場に行はれる金利步合を支配するに至らしめる。英蘭銀行は年來の慣例として、金融市場の平靜なる時期に於ては、巨大の資力を擁するに拘はらず、其一小部分に相當する程度に、割引業務を制限し、事變に臨んで利用せらる可き實力を留保する一方に、一旦再割引の行はるゝに至るや、此貸出能力は手形仲買業者や、割引商會の商業手形を割引することに用ひられ、斯くて間接に「シチー」に於ける諸銀行の實力を鞏固ならしめるのである。然しながら斯る再割引が英蘭銀行に依つて行はれるに隨ひ、同銀行の準備金比率は次第に低下し、

其金融市場に於ける地位を薄弱ならしめる結果を生ずる。此場合に斯る結果を回避するの必要に接するのであるが、急劇なる貸出禁止の如きは、百弊あつて、一利の伴うを見ない。宜しく不必要なる貸出を制限し、又貸付を受けることを困難ならしめる手段に出づ可きであつて、之を爲すには、英蘭銀行たるもの、準備金比率の低下するに隨つて、公定利率を引上げ可きである。公定利率にして引上げられんか、手形仲買業者や割引商會が英蘭銀行に就て、再割引を受くるに當り、負擔を加重されるに至る爲め、彼等自身の取引を行うに當り、利率を高くし、信用の膨脹を制限することゝ爲るのである。斯る狀況の下に於て、銀行利率は割引の市場利率を支配するに就て、有効と爲るのであつて、英蘭銀行の當局者は公開市場に於て、爲替手形や他の商業證券が如何なる價格を有するかを決定する權能を持つ。而して英蘭銀行は倫敦に於ける信用取引を制限する爲めに、此權能を行使し、斯くて市場の信用組織を壞敗する虞れある信用の過度の膨脹を防止するに勉めるのである。

六

金貨本位制を採用する國に於ては、如何なる場合に於ても、金の輸出入を自由にすることを以つて、此本位制度の運用の完成される所以であることを認めなければならない。蓋し一國から他國に向つて、金の現送され、然も其現送の自由に行はれることは、其國に於て、信用が手形に對する需要に應ずるに充分なる程度に於て、維持されて居る證據を以つて、目されるのであつて、既に此證據の備はれるからには、信用の基礎として、特殊の資源の存在するを必要としないのである。自由金市場の存在丼に維持が爲替相場確定の方法として、特に重要視される所以は自ら理解されるであらう。

然しながら或る事情の下に於ては、金の輸出に對して、國家として斷然たる態度を持するを得ざる場合がある。蓋し金の輸出にして繼續して行はれたならば、銀行並に國庫の金貨準備に減損を來して、啻に信用を危うするのみならず、金貨本位制其ものゝ基礎を脅かすこととなしとしない。斯る際には金の輸出を制限し、又は輸出の勢を永き期間に亘らしめる爲めに生ずる影響を緩和することが必要であり、又近く大規模の信用取引の行はれる場合には、之に對する準備として、金の輸入を促進し、又輸入される勢を集中することが必要であると考へられる。殊に歐洲戰前に於ける如く、倫敦が世界最大の自由金市場であり、國際信用の中心點である故を以つて、他の諸國から金の取付を受ける地位に居り、一方に自國信用組織を保障する爲めに、充分なる金準備を維持す可き境遇に居つたとすれば、金の國際間に於ける移動に就て、特殊の利害關係を持つたことは、論を俟たない。斯くて爲替市場に於ける英蘭銀行の地位に就て、重大なる意義を生ずるのであつて、英蘭銀行は一方に善意の債權者に對しては、自由に金を拂渡す義務に應ずると共に、他の一方に英國に於ける金の出入に對して、統制を加へるのである。英蘭銀行が斯る權勢を發揮するに就て、其基礎とする所の如何なる邊に存するかを知るには、爲替市場の狀況に就て、顧みなければならない。倫敦に就て云へば、他の諸國の市場に於ける磅爲替の相場が正貨輸入點に達した時に於て、金の輸出に接するし、又他の諸國の市場に於ける磅爲替の相場が正貨輸出點に達した時に於て、金の輸入を生ずるのであつて、要するに倫敦に於ける金の出入を決定するものは、他の市場に於ける磅爲替の相場に於ける高低に外ならないのである。故に英蘭銀行にして倫敦から金の流出することを妨遏し、制限する權能を有するとすれば、其權能たる、英蘭銀行が他國市場に於て、磅爲替の相場の正貨輸入點に低落する勢を遮斷することに存するし、又金の流入を誘導するには、英蘭銀行は他國市場に於ける磅相場をして正貨輸出點に至らしめなければならない。英蘭銀行は如何にして此種の權能を發揮するやと云ふことが實際問題と爲る。

元來紐育其他市場に於ける磅參着爲替の相場は倫敦宛で提出される銀行爲替に對する需要と其供給とに依つて、定まるのである。隨つて手形の供給、過多であつて、之に對する需要に超過するときには、爲替相場は低落し、或る程度を超へれば、金の輸入が行はれて、自ら低落の勢を阻止する。即ち爲替相場の下落し、倫敦から金の輸出されることは紐育爲替市場に就て、磅手形に對する需要を盛ならしめるか、其供給を減ぜしめるか、兩者の作用を同時に働かしめることに依つて、之を控制するを得るのである。之に對して磅手形に對する需要が其供給に超過したならば、需要者間の競爭は相場を騰貴せしめて、結局正貨現送點に達せしめる。故に若しも紐育に於て、磅爲替の相場が正貨現送點以下に低落したときに、倫敦に於て金の輸出を惹起さしめるが如くに、相場を左右することを有利であると認めたならば、紐育に於て、磅爲替に對する需要を增進せしめるか、又は其供給を增加するかの方法を構ずることに依つて、之を爲すを得るのであつて、斯く英國以外の市場に於ける磅爲替の需要供給を支配する勢力は英蘭銀行に依つて、充分に發揮されるのである。

英蘭銀行は如何にして此種の權勢を發揮するかと云へば、要するに倫敦市場に行はれる割引歩合に對して、同銀行が支配を加へるを得ることに基くのである。倫敦市場の割引歩合に對する英蘭銀行の統轄的勢力は必ずしも絕對のものでく、時に銀行利率が市場利率に依つて、左右されることなしとしない。英蘭銀行が倫敦から金の流出することを防ぎ、又倫敦に金の流入することを促すが如き、遠大なる政策を行うを得るのは、銀行利率を以つて、市場を支配し得る場合に限られる。換言すれば市場に於ける金融に緊縮の狀勢を呈し、金融業者が英蘭銀行に就て、再割引の方法を通じて、金融の便を仰がうとする場合に臨んで、英蘭銀行は市場を左右するを得るのである。本來金の出入は倫敦金融市場に取つて、重大の事件であり、而して金の移動に對する支配にして、希望す可きものであるときは、英蘭銀行は何時に

於ても、其支配を加へるに躊躇しない。英蘭銀行が其方便として利用する所は銀行利率の引上であつて、斯くて間接に公開市場の割引歩合を高からしめる。其結果として他國の金融市場に於ける磅爲替手形の供給を減縮して、需要を增進し、爲替相場をして正貨輸入點以上に騰貴せしめ、倫敦から金の輸出される勢を遮斷するのである。換言すれば爲替相場統制の機關として、最も有力なるものは、銀行利率であつて、英蘭銀行は必要に應じて、此利率に人工的支配を施し、然らずんば爲替相場が英國に不利と爲り、金貨の流出の免かれ難き場合に、爲替相場を有利にして、外國から金を吸收するに至るのである。即ち英蘭銀行の割引歩合が爲替相場統制の機關たるを得るのは、金利歩合と爲替相場との間に密接なる關係を有し、金利歩合の引上が直に爲替相場に反應を及ぼすからである。

然らば何故に倫敦市場に於ける割引歩合の高低は諸外國の金融中心點に於ける銀行業者が購入し、引受並に割引の爲めに、倫敦に送付する長期磅手形の相場に影響を及ぼすものであるか。外國銀行業者にして倫敦の金融市場と密接なる金融上の取引を結ばうとする以上は、倫敦の引受商會に或る程度のクレヂキットの開かれて居る譯であるが、之に對して手形を振出し、斯くて金融上の便を謀るかどうかは、一に當時倫敦に行はれて居る割引歩合の高低に依つて、定まるのである。假に倫敦に於ける市場利率が低落したとしたならば、必ず左の如き事實を生ずる。

第一、低廉なる割引歩合は倫敦の引受商會に對して、手形振出の便宜を有する者を誘つて、其振出を行はしめる。蓋し斯の如くして低廉なる利子歩合の下に於ける割引に依つて、手形額面に近き金額を收めるを得るからである。隨つて磅手形の供給は勢增加し、其相場の低落を免かれない、

第二、市中諸銀行や、私人銀行等の取引先に與へる利子の歩合は割引歩合と共に、低廉に爲るとすれば、外國の銀行業者が割引に依つて、倫敦に資金を得た場合に、之を其儘金利の低廉なる倫敦に置かず、寧ろ高率の利子の獲得さ

れる他國の市場に移すであらう。

第三、外國當業者の倫敦に有するバランスも亦同樣、事情の許す限り、倫敦以外の場所に移動する傾きを免かれない。

故に割引步合の低落は一方に磅手形の供給を增加し、他の一方に外國通貨に對する需要を增加し、其孰れを以つてしても、爲替相場をして英國に逆ならしめるのである。之に反して割引步合の上進した場合には、左の如き事實を生ずるのである。

第一、倫敦に於ける手形割引に伴ふ負擔の大なる以上は、此事は自ら外國當業者をして倫敦宛手形の振出を制限せしめる。磅手形の供給の減少は自ら其價格を上進せしめて、英國に有利なる相場を見るに至る。

第二、割引步合の上進するに隨ひ、倫敦に物資を賣却して、其代金の支拂を受くる外國人は倫敦に資金を存置して、以つて高率の利殖を謀らうとする一方に、外國の債權者亦資金の自己の手元に送付される代りに、其倫敦に於て、運用されることを希望する。即ち外國の諸銀行は其餘裕に屬する資金の多くを投じて、倫敦宛短期手形を購入するに勉めるであらうし、斯る手形の代金にして取立られた場合には、之を倫敦の銀行に預託し、又は自己の支店をして手形の割引を行はしめる資金に充て、又時に金利步合上進の結果として、偶々倫敦に於て、價格の低落した第一流有價證券を購入する用に充てるか、孰れか其一に出でしめる。斯る取引にして行はれたならば、其倫敦宛手形に對する需要を增進する結果、諸外國に於ける爲替相場を上進せしめ、倫敦に於ても、亦其騰貴を見ざれば、已まざる道理である。

第三、外國にバランスを有する諸銀行亦高率の利殖を得る爲めに、外國から之を回收し、本國に於て其運用を試み

る方針を取る。即ち是等の銀行は外國宛手形を振出して、倫敦に於て、之を賣却する手段を講ずるのである。

即ち前記三事實の內、第一の結果は磅手形の數量を減じ、第二の結果は外國通貨に對する需要を減じ、又第三の結果は外國宛手形の供給を增加し、三者の總てを以つてしては勿論、其內の或るものを以つてしても、割引步合を通じて、爲替相場を英國に有利ならしめるのである。即ち長期爲替手形の相場を決定するに與つて力ある要素の一は金利步合であるが、其金利步合は手形支拂國に行はれるものであつて、手形振出國に行はれるものではない。今、倫敦は國際間の取引に對する淸算所たる地位に居る。斯くて倫敦宛の手形は賣却の自由である結果、歐洲諸國に取引關係を有する外國の當業者は專ら倫敦に引受信用を開き、倫敦宛手形の振出されるもの頗る多きを見る。此一事が英國に於ける金利の引上をして爲替相場に大なる勢を及ぼすに至らしめる原因と爲るものと解される。

本來平常の時期に就て、之を觀察しても、或は割引步合の低廉なることに於て、或は貸出資本の豐富なることに於て、倫敦市場の優勝なる地位を占める結果として、其市場には外國市場に於て支拂はれる銀行の引受手形の集中するもの少なしとしない。蓋し倫敦市場の低廉なる割引步合に依つて、割引される利益を收めんとするの趣意に出づるものである。斯くて佛貨又は獨貨に依つて支拂はる可き銀行引受手形の所有者が特に倫敦に於て、其割引を求めるとすれば、彼等は倫敦に於て磅貨のクレヂットを收めるのであつて、之に對して自國市場に於て、磅手形を振出し、之を賣却するを得るのである。然も倫敦市場に於ける割引步合の上進した場合には、外國銀行は倫敦に於て手形の割引を求め、斯くて充分の利益を收めるに難きに至り、從來倫敦に集中した手形は去つて、他の市場に赴くことゝ爲る。斯く倫敦に於ける手形割引高の減少することは外國銀行の磅手形を振出す力を制限し、磅手形の相場下落を抑制するに至るのである。

斯く倫敦市場に於ける割引歩合上進の結果として、他國市場に於て、磅手形の供給を減ずる種々の作用あることは、前論の如くであるが、同時に割引歩合の引上が磅手形に對する需要を增進することも亦説明される。磅融通手形の振出に依つて、國際間に資金の貸借の行はれることは、曩に述べた所であるが、振出銀行が磅手形を買入れて、之を倫敦のコレスポンデントに送付したならば、貸借は自ら決濟されるのである。然も貸借は此方法に依つて、終了されずして、延長されることが多い。此場合に最初の融通手形を決濟す可き義務を負ふ振出銀行は同一のコレスポンデントに對し、第二の長期磅手形を振出し、之を市場に賣却し、其代金を利用して、必要とする引當を買入れる。此種取引にして行はれゝば、能く最初の融通手形を決濟するを得るとしても、貸借其ものは終了したとするを得ない。蓋し倫敦のコレスポンデントは當初の手形の引受人として、其義務を果すと共に、第二の手形に對して、同一の義務に服する一方に、外國の銀行は倫敦に對し、支拂に相當する送金を爲す可き義務を負ふからである。貸借關係が斯る狀態の下に繼續するとすれば、當初の融通手形の償還は外國市場に於て磅手形に對する需要を增進するものとは云へない。蓋し第二の融通手形を買入れた者は倫敦宛手形振出の權能を持つからである。之に反して貸借の決濟される場合には、融通手形を供給せずして、却つて磅手形を買入れ、斯くて磅手形に對する需要を增加することゝ爲るのである。

然らば倫敦に於て、融通手形の滿期と爲れる際に、其支拂が行はれるか、將た又其れが繼續されるか、之を決定するものは、一に倫敦市場に於ける割引歩合が例へば紐育に比較して、低廉であつて、其結果磅短期手形の相場が上進しないと云ふ見込みであれば、貸借は繼續されるが、此反對に倫敦の割引歩合騰貴に依つて、資金の運用から利益の生ずる望みなきに至つたならば、貸借は決濟され、紐育市場に於ける磅短期手形に對する需要は爲めに惹起されざるを得ざるに至るのである。倫敦に於ける割引歩合の引上が些細の程度に止まらず、或る著しき程度に行はれたならば、曩に述べ

た貸借の關係は正反對と爲り、外國の銀行は倫敦市場に對して、短期の放資を行ふ爲めに、倫敦に資金を送致するであらう。其方法として、紐育のコレスポンデントは磅參着手形なり、電信爲替なりを買入れ、之を倫敦に送付して、現金に引換へる手段を取るが故に、是れ亦磅手形に對する需要を盛ならしめるに至るであらう。

英蘭銀行が其割引政策に依つて、外國市場に於ける磅爲替に對する需要と其供給とを左右するのは、上記の作用に基くのであつて、斯る取引の行はれるに就て、其基く所は外國銀行の方で、倫敦に於て資金を借入れようか其れとも倫敦に資金を貸附さうかと云ふことの決斷如何に存する。放資の爲めに、長期の磅手形を買入れる、磅融通手形の振出を廢する、借入金を決濟すると云ふが如きは、外國の銀行が倫敦市場に於て、資金の借方と爲ることを中止した意味に當る一方に、倫敦に貸付を爲す爲めに、倫敦の銀行に磅爲替を送付するのは、外國銀行をして倫敦市場に於て、資金の貸方たらしめる意味に外ならない。此場合に斯る取引に干與する銀行は金の輸出入を行ふものではないが、彼等の行動は磅爲替相場を支配し、次いで銀行の金を現送する所業を左右するに至るのである。

英蘭銀行の割引步合の引上に依つて、或は金の流出を抑制し、或は其流入を誘致する政策は既往に於て、其成效を博した事例少なしとしないが、就中今日吾人の記憶に殘つて居るのは、千九百七年紐育に於ける恐慌の當時幷に千九百十四年歐洲開戰の當初に行はれた所である。即ち前者に於て、英蘭銀行が金利步合を引上げるや、之を通じて世界到る所から、金を吸收し、斯くて其金を紐育に供給して、恐慌に當らしめるを得たし、又後者に於ては、開戰の近づくや、世界の諸國民にして他の國に債權を有する者は資金として之を取立て、其バランスを自由に回收することを期したのであるが、其際英蘭銀行が割引步合を四分から相次いで數日間に一割に引上げるや、爲替相場は英國に有利と爲り、外國の中心市場から、倫敦に向つて續々現金が送致されるの狀況と爲り、世人をして今更の如く英蘭銀行の國際金融に於ける

勢力若しくは倫敦の國際間に於ける金融的優勢の如何に大なるやを感得せしめるを得たのである。

右の如き取引並に作用の行はれるに當つて、英蘭銀行に金の出入を支配する特殊の權能が備へられ、之に依賴して、從來巨額の要求拂債務を負ひながら、比較的少額の金貨を準備として、金貨本位制を維持するを得たのは明白の事實であつて、而して英蘭銀行の金の取付に對する防禦力は

第一、世界諸國の銀行業者が長期爲手形に依つて、巨額の取引の行はれる故を以つて、常に倫敦の割引市場と接觸を保つて居ること、

第二、是等手形の割引される條件は金融緊縮の時期に於て、英蘭銀行の統一ある支配の下に決定されることの二點に歸着するのであつて、此力を通じて、英蘭銀行は倫敦に於ける長期爲手形の價格を左右し、外國市場に於ける短期爲手形の需要供給を支配して、以つて世界を通じて、爲替の價格を動かすを得るのである。

七

斯の如く世界の爲替市場を通じて、倫敦の地位の卓絕して居ることは、英國以外の國の間に存する貸借關係を決濟する標準として、長期爲手形の使用される事實に依つて、證明される。他の歐洲諸國の通貨又は弗貨を以つて振出された手形は是等の貨幣を使用する國が貿易の當事者である場合に限つて、其用を爲すに止まるが、爲手形に至つては、世界の貿易に利用されて、其局限されることを知らない。斯くて倫敦銀行家の長期手形は世界商業上の中心地から、倫敦の割引市場に流入し來り、公開市場に於ける仲買業者や金融業者に依つて、低廉なる割引步合の下に吸收され、其相次いで滿期日の到來することは、外國銀行をして倫敦に向つて、倫敦に有するバランスを補充する爲めに、爲短期手形を送

致するに至らしめ、斯くて、戰前に於て倫敦が世界商業上の信用に對する最大の清算所たることは、疑を容れざる事實と爲つた。

然らば斯の如く世界貿易の中心地に居る人々が自國の貨幣を以つて振出した手形よりも、寧ろ長期磅手形を使用するは何故であるか。長期磅手形が他種類の手形よりも、廣く使用されるとすれば、其理由は貸借決濟の方便として、長所を有し、其れを使用することが當業者の利益を增加し、費用を節約する事實に歸着しなければならない。磅手形の如きは、何時と雖も低廉確實なる割引步合の下に、之を賣却するを得るのであつて、此種手形を所有することは、金融の便を得る上から云つて、最も便利である。元來英國は最も大なる規模に於て、外國貿易を營み、世界到る所の市場を取引先とし、其輸出貿易から英國の諸國に有する債權が發生し、諸國をして債務決濟の爲めに、磅爲替を需要せしめる。一方に英國は最も早く國際間の債權國と爲り、今日に於ては債權國として最大なるものであつて、其利子收益は他の受取勘定と共に、磅爲替に對する需要を增加するのである。而して磅爲替は倫敦市場に於て、最も低廉なる利率を以つて、割引されること、上記の如くであるとすれば、輸出業者が引受後低廉なる利率の下に、割引される手形を選ぶ可きことは、論を俟たない。倫敦に低廉なる割引步合の行はれるのは、第一放下を求める資本の供給の豐富であり、第二斯る資金を爲替手形の買入に向はしめる機關の備はれることに基くのである。英國に於て產業が著しく發達し、他の諸國を凌駕した爲めに、資本の蓄積も亦急速に行はれ、資本の蓄積の盛なると共に、其一部をして海外に放下の地を求めしめ、他の一部をして內國に於ける低利の運用に滿足せしめるに至つた。而して金融市場に於ける機關の整頓するに隨つて、斯る資金は自然銀行引受手形の買入に供されることゝ爲つたのである。斯くて一方に銀行や、引受商會が各自の取引先の爲めに、手形の引受を爲し、其結果手形を品質優良、流動的資產の運用に適するものたらしめれば、他の一方に手形

仲買業者や、割引商會は相次いで業務を開始し、引受手形に對する市場を擴張して、割引歩合に起る變動を穩かならしめたし、英蘭銀行亦再割引の機會を供へて、市場を安定し、急劇なる金融の緊縮を除き、小規模金融業者の信用を增進するに資するもの、少なからざるを得た。殊に爲替市場に對する效果の重大なるものは、市中の大銀行が引受手形の割引に依つて、支拂準備金に流動性を保たしめる一事である。元來倫敦の銀行業者が其營業上の政策として、必要とする所は一方に銀行の所有する資產を流動的狀態に置くと共に、他の一方に資產から相當の利子を獲得することである。蓋し銀行の負ふ債務の內には、或は要求拂のものあり、或は七日前通知支拂のものある其上に、一年中の或る時期に於て、特に現金の必要を訴へることがある。例へば每年六月幷に十二月末の如き、銀行自ら其貸借對照表に於て、多額の現金を所有する事實を裝ふことの必要から、店頭裝飾の目的を以つて、現金を需要することがあり、又每年二月三月の如き、銀行の取引先が所得稅の納入に當る爲めに、特に多額の現金を引出すことがある。銀行は斯る必要から生ずる現金の取付に應じつゝ、一方には資金を適當の方法の下に利殖し、必要ある場合には、何時に於ても現金を以つて、回收するを得る方法を工風しなければならない。其方法として、如何なるものが銀行に與へられて居るかと云へば、其一は爲替手形に資金を放下することであり、其二は當座又は短期通知を以つて、資金を貸出すことである。第二の方法は姑く之を措き、第一の方法に就て考へるに、爲替手形は苟も支拂人の確實である以上は、或る期日に於て、自働的に支拂の行はれることを以つて、其特色とする。隨つて銀行にして或る時日に於て、特に多額の現金を必要とすることを豫知して居るとすれば、手形仲買業者又は割引商會を通じて、其時日に於て、期限の滿了する手形を購入するを可なりとする道理であつて、斯の如くして銀行は一方に之を必要とする時に、確實に現金を回收し、他の一方に手形の額面と購入價格との差額を銀行自身の利益に充つるを得る所以である。倫敦市場に於て、銀行の遊金が期せずして、爲替市場に其

出路を求め、低廉なる利率を以つて、割引を行ふことを競爭し、爲めに長期の磅手形を利用して、金融の便を謀る者に對して、其蒙る負擔を輕くするを得るのも、亦偶然でないのである。

然も倫敦割引市場をして其完璧を得せしめた最後の條件としては、英國の金貨本位政策が擧げられなければならない。金は所謂國際的購買力を持ち、廣く國際間を通じて、流動し、又國際間に同一の價値を代表し、價値の確實を以つて、稱される。銀行業者は如何なる場合に於ても、其有するクレデキツトの金に引換へられる信用を持つ以上は、外國の金融中心市場にバランスを有するに躊躇するものではない。歐洲戰爭前倫敦は世界を通じて、金を以つて債務を果すことに就て、何等疑問の存しなかつた唯一の市場であつて、此點から外國銀行業者の信用を博したのである。唯一の自由金市場たる倫敦の名聲が磅爲替の優勢に資することの大なるは論を俟たないのである。

然るに歐洲戰爭後の數年間、倫敦金融上の機關が戰前に於けると同樣の狀態に於て、働かなかつたのは、戰時財政の金融上に及ぼした影響の然らしめる所と云へる。即ち從來多年に亙つて、倫敦金融市場の存立し、活動した根柢には、一種の信用の英國幷に諸外國民に依つて、懷かれて居つたことの爭ふ可からざるものがある。其一は英吉利の通貨こそ、何時に於ても、間違なく金に兌換されると云ふことであり、他の一は倫敦の諸外國金融中心市場に對して有する權利は必要に際しては、金を以つて、回收されると云ふことであつた。是等二個の事實は戰前に於ては、何れも眞實とするを得たが、戰後に於ては、何れも實際に相違することゝ爲つた。即ち英國に於て千九百二十五年五月まで、金の輸出が禁止され、金が紙の磅に對して、打步を持つて居つたことの如きは第一の推測に違背したものであり、又紐育以外の金融中心地に於て、同じく金の輸出が禁止され、伯林、巴里、フランクフオート、羅馬の如き、何れも英國に負ふ債務を決濟するに、金を送致しないことは、第二の推測を蹂躪する事實と爲つたのである。

八

然らば戰時財政の金融市場を壓迫したと云ふのは、如何なる事實を指すものであるか。戰時財政に於ける臨時の經費に對する財源が盡く國民眞實の負擔に依つて、調達される場合には、其國民に及ぼす苦痛の程度は兎に角、金融上の關係に加へる打撃に至つては、必ずしも大なりとするに足らない。然も斯の如きは國民に苛重の負擔を及ぼすの故を以つて、如何なる國も爲すを憚るのであつて、財源の調達は勢信用の利用に向はざるを得ない。信用利用法の重なるものは、英蘭銀行に對する短期貸出金の要求と大藏省證券の發行とであつて、二者の孰れを以つてしても、信用の膨脹を招き、通貨の增發を企てるのと其效果を一にする。前者が政府に對してクレヂットを開き、信用の膨脹に資するは、論を俟たない。後者に就ても、大藏省證券の期限の到達した場合に、政府が其償還に要する財源を英蘭銀行に對する短期貸出金に求めることは、多く行はれる所であつて、其結果は信用の膨脹と爲り、一時金融緩和の事相を生ずるとしても、結局金融市場を攪亂することを免かれない。

戰前に於ては、英蘭銀行の週報に於ける或る項目の異動に依つて、世人は最も明瞭に倫敦金融市場の狀況を察知するを得たのである。即ち同週報借方に於ける「民間預金」の一項は貸方に於ける「民間證書」の一項と相俟つて幾何の資金が市場に供給されて居るかを示し、又預金其他の債務に對する支拂準備金の比率は如何なる程度まで、將來信用の膨脹の行はれ得るやを數へる所以と爲つた。然るに戰時財政の進行と共に、大藏省證券が金融市場に於て、重要の項目と爲り、同證券にして借換へられゝば兎に角、償還される場合には、直に信用の膨脹を惹起することゝ爲る以上は、金利步合の引上の如きも亦必ずしも戰前に於けるが如く、爲替相場を支配するを得ざることゝ爲つた。蓋し從來金利引上は

信用に制限を加へた爲めに、其結果として、爲替相場を左右するを得た次第であるのに、今大藏省證劵の關係に制されて、英蘭銀行が信用を膨脹するに於ては、金利引上に伴う効果は抹消されることを免かれないからである。

爲替相場の高低は必ずしも正確に一國の財政又は金融に於ける信用の程度をトする標準とするを得ないが大體に於ては兩者の間に關係するものありと云へる。千九百十九年三月英國が對米爲替の決定を自由に付して以來、磅價値は相次いで下落し、一時三弗十二仙と爲り、千九百二十年中に於ても、三弗九十仙乃至三弗五十仙の間を上下したのである。此場合に最も確實なる根柢に基いて、緊縮策を講じたものは、彼のカンリッフ委員會であつて、同委員會の所説を約言すれば、磅の價値が弗爲替を以つて之を測つて、其平價とする所に達するまで漸次政府紙幣を回收し、消却するの一事を主として漸進的通貨收縮の政策に重きを置いたのである。此政策の行はれるには財政に充分の餘裕を作り出し、此餘裕を以つて、政府紙幣を回收することを必要とするのであつて、然らざるに限り、磅の價値恢復は至難の業と目されたのである。政府紙幣は千九百二十年十二月末發行高の三億六千四百萬磅に達したのを以つて、其絕頂とし、爾後次第に減少を告げるに至つたが、殊に信用の收縮に資したのは、流動公債の減少であつて、千九百二十二年中に於て、同公債の現在高が十三億磅から、九億五千磅に減少したことの如き、政府が鋭意此點に勉める所の如何に大であつたかを語るに足るのである。

九

磅貨の價値に於ける上進は英國をして依然たる金貨本位制に、戰前同樣の狀態に於て、復歸するの可能なることを信ずるに至らしめた。戰後數年を經過した千九百二十三、四年の頃に於て、此種の可能性ありと信ぜられた國は北米合衆

國を除けば、英吉利、和蘭、スカンヂナヴキアの諸國あるのみであつて、佛蘭西、伊太利を始め、東部並に中部の歐洲諸國に至つては、純然たる金貨本位制に復歸することを當面の問題とするを得ざるまでに、通貨の價値に低落を來したのである。唯英國に取つて、重大なる問題と爲つたのは、磅價値の騰貴が永久的のものであるかどうか、之を永久的のものたらしめる爲めに、通貨縮小の勢を續けることが有利であるかどうかと云ふことであつた。是等の事たる、當初から重大なる問題を以つて、目されたのであつて、通貨縮小を非なりとする議論も多くの方面に於て主張され、殊に工業界に於て、此種の主張の盛なるを見た。即ち通貨の縮小は爲替相場を有利ならしめるとしても、一方に英國よりも多く通貨價値の低落を告げて居る諸外國をして英國に就て、物資を購入することを困難ならしめ、他の一方に他國市場に於て、英國よりも物資賣却上に有利なる地位に就かしめると云ふことを以つて、反對論の骨子としたのである。然しながら爲替相場の低落が輸出貿易に有利であると云ふのは、其低落の勢が內國の物價に及ぶに至らざる或る短小の期間內に於ける事實であつて、其期間が經過したならば、輸出貿易に對する刺戟の如きも亦自ら消散せざるを得ざる次第であるのみならず、英國の如き巨額の食料品原料を外國から輸入する國に於て、通貨の價値を低落せしめたならば、是等輸入品の價格を騰貴せしめて、國民の生活を壓迫し、又國民工業に對する原料品の供給を高貴にして、生產費の增高を促す弊害に接するものと認めなければならない。此點に於ては、最近兩三年間、我國に於ける物價下落の內國經濟に及ぼす影響と軌を一にするものと云へるのである。或は通貨の縮小を以つて、失業の勢を盛ならしめるものとし、失業の弊害の著しきに隨つて、之を緩和する爲めに、通貨の縮小を半途に止めるの說もあつた。然し此說の如き、一面の事實のみを以つて、他の半面を閑却した嫌なきを得ない。通貨の縮小にして通貨價値の低落の大なる諸國に對する輸出を困難ならしめる弊ありとしても、勞働並に原料品の費用低減に依る代價の下落は同時に輸出を容易ならしめる力ありとしなけれ

ばならないからである。失業の如きは、戰時に於ける富の破壞に依り、世界の購買的能力に減退を來した結果であつて、通貨問題の失業に對して持つ關係の如きは、間接迂回的のものに止まるのである。

斯くて群議の紛糾する間に立つて、最後の決斷を與へ、英國をして敢然金貨本位制復興の方針に出づるに至らしめたものは、之を「政府紙幣並に英蘭銀行券發行に關する委員會」の報告書に歸しなければならない。此委員會は千九百二十四年六月十日大藏大臣の發議に依り、政府紙幣と英蘭銀行券とを併合する時機が來つたかどうか、若しも時機到來したとすれば、如何なる條件の下に併合を行ふ可きかを調査する爲めに、オーステン・チエンバーレン氏を委員長に、サー・ジョン・ブラッドバリー、ガスパード・フアーラー、オー・イー・ニーメーヤー、エー・シー・ピグーの諸氏を委員に任命して、組織したものであつて、千九百二十五年二月五日を以つて、政府に報告書を提出し、政府は同年四月二十八日之を世間に公表したのである。此委員會に於て、第一に問題とした所は戰前のソヴエレイン金貨を基礎として金貨本位制を復興することの可否である。而して委員會は若しも此形態に於て、金貨本位制を復興しなかつた場合に、之に代つて行はる可き方法は何であるかと云ふことを考量し、之を以つて、第一價値を減じたソヴエレイン金貨を基礎とする金貨本位制に復歸する、即ち名義に於ては兎に角、實質に於ては、戰前よりも少量の金地金を代表する單位を以つて、自由金市場を再建するか、第二金以外の單位を見出して、通貨の基礎に充てるか、孰れかの一であるが、前者に於ては、現在の爲替相場が、戰前の平準點に對して、大差なき程度に恢復した際に、特に問題とする價値なしとし、後者亦今日此國に於ける現實の政策として、ソヴエレインの戰前に於ける金貨價値に復興することに匹敵す可き良法の存せざる以上は、是れ亦考量するに足らずとし、結局吾人としては何時如何にして上記の復興を行ふ可きかと云ふことに問題を局限す可きものであるとし、左の如き論點に基いて、議論を進めたのである。

吾人が千九百二十四年九月本報告に就て、攻究した當時に於ては、紐育爲替相場は平準點に對して、一割乃至一割二分の低きに居つた、斯くて例年の秋季に於ける金融の壓迫が磅貨の價値に再度の低落を來さゞるかと云ふこと、千九百十九年十二月十五日の大藏省示達に依つて定められた政府紙幣の保證準備高に對する制限が基督降誕祭當時に維持されて、能く金利歩合に急劇の變動を惹起さゞるを得るかと云ふことが共に問題と爲つたのである。然も吾人は英國の國際金融上に於ける地位が戰前に比較して、聊か不滿足であるに拘はらず、其愼重に爲し得ると信ずる時期に於て、戰前と同様の金貨本位制に復歸し、又之を維持するを得る實力の英國に存することを疑はなかつた。

最近兩三年間例へば産業上の不振、戰後の狀況から生ずる國際貿易の攪亂、歐洲大陸の債務國から支拂を受けずして、英國獨り北米合衆國に向つて、戰時公債の元利金を支拂ひつゝある事實等あるに拘はらず、有形並に無形の輸出は對外放資から收める收入と相俟つて、英國をして其外國の債務に應じ、必要なる輸入を決濟し、加ふるに對外新放資を行ふに餘りあるに至らしめた。

斯る事情の下に於ては、自由金市場は信用に對する支配に依つて、磅貨の國内購買力が其爲替平價に調節され、對外放資が正常なる國際貸借の差額に制限されたならば、戰前の狀態に於て、復興され、維持されることに、疑を存しない。

其上に金の輸出を禁止する權能は千九百二十五年十二月三十一日限り、繼續されざるものであると云ふ方針の宣告のみを以つてして、自働的に、又急速に上記の信用調節に必要なる狀況を生じ、斯くて有效なる金貨本位制は復興され、信用收縮、物價低落の時代に生ずるものに比較して、特殊の不便困難に接せざるを得るであらう。

金貨本位制復興の問題に對する英國殖民地並に諸外國の態度も亦吾人の考量す可き所である。南阿聯合國は今夏を以つて、復興を行ふ方針を決定し、他の殖民地亦本國の爲す所に從ふであらうし、本國が躊躇して居つたならば、率る先鞭を付けることを辭さないであらうし、和蘭、瑞西其他の歐洲諸國に就ても、亦同様の擧に出づることの觀察が

下される。獨逸新通貨の金に對する兌換は現行立法の下に停止されては居るが、價値の確實は充分に維持され、完全なる金貨本位制の建立は近き將來に行はれることゝ考へられる。

故に吾人は英國政府が金貨本位制に早く復歸することと並に金の輸出に對する制限は千九百二十五年十二月末日以外に延長せざることの方針を宣明する必要を勸告する。而して之と同時に英蘭銀行に就て、購入したる金は之を外國に輸出するを得る一般特許の制度を設け、金輸出解禁期の到來するまで、英蘭銀行をして此特許權を利用して、爲替相場の低落に備へしめることを必要とする。

以上私の抄出した報告書の要點だけに就て見ても、千九百二十五年の英國金貨本位法が右報告書に現はれた委員會の意見に全部の信賴を置いて、制定されたものであることを知るを得るであらう。而して委員會が如何に大なる自信を有して、金貨本位制の復興を主張したか、又其自信の基く所は財政に於ける徹底的整理、貿易に於ける逆調の矯制、國際貸借の有利なる狀況に於ける發展、斯くて生ずる磅貨價値の漸次的上進等に存することも、亦明に看取される。金貨本位制を純眞なる形體に於て、實行し、以って本位貨幣の價値の確實を期するに非ざれば、一國の市場を國際金融の中心點たらしめることの不可能であるは勿論、地方的中心點たらしめることも亦困難である。英吉利が萬難を排して、金輸出解禁の方策を定め、純眞なる意義に於て、金貨本位制を復興した所以のもの、實に斯くせざれば國際金融上に於ける倫敦舊來の地位を保持するを得ざるに基くに出づるのである。而して今や所期の目的は略ぼ完全に英國に於て到達され、金貨本位制の充分に復興されざる今日に於て、磅貨の價値は既に確定し、其將來如何に確實であるかを示すに餘りあるに至つた。然らば國際金融の中心點たる地位も完全に倫敦に回收され、倫敦をして國際金融の方面に於て、重要なる職務を致さしめることに依つて、英國の經濟的優勢を支持する一助と爲るは、論を俟たざる所である。國際金融の見地に於て、英國の經濟的優勢は依然として其根柢の鞏固なることを示すと云へるのである。

本論文執筆に際し、エドガー、エフ、ソアーニス氏外國爲替、ヒユーバート、シー、ウォーター氏近代外國爲替の二書に資料を得たもの少なしとしない。特に掲げて讀者の參考に充てる。

在歐通信（第五）

オックスフォルドの學園

河合榮治郎

R君

一

僕がオックスフォルドに來た時は九月の末であつた。各コレッヂの壁に匍ふ蔦は眞紅に染まつて實に美しい時であつた。若しオックスフォルドによい季節をと云ふならば、それは春五月か、秋の十月であらう。春は新綠と百花の一度に咲き亂れるのでよいし、秋は蔦の紅葉で又となくいゝ。

オックスフォルドに來たいと云ふことは、久しい前からの僕の宿望であつた。日本に居た時に、先輩T君は居た、あのテームスの流に舟を浮べ、あの廣い牧場を散歩したりすると、こんな所でゆつくり勉强が出來たらば、どんなに幸福であらうと思つたと。又云ふ、オックスフォルドに有名なブラックウエルの書店に入ると、プラトーとアリストートルの研究の本丈で、一つの室が一杯である、此へ來て英國に之れ丈の古典の研究があるのかと思ふと、英國の偉大さは此にあると感じたよと。之等の話は未だ見ぬオックスフォルドに對する僕の心を唆るに充分であつた。

尤も僕が同地に往つたのは、九月が始めてではなかつた。春五月ウッドブルックから、一二泊同地に旅したことがあつた。知人D氏に導かれて、一通り街を見て歩いた時、此に自分は落付かうと決心を堅めてゐた。其の時政治學の教授アダムスに會ひ、中世思想研究者ドクトル、カーライルに會つた。秋來る時の御世話を賴んだりした、かうして僕が同地に移つた時、既に知合はなくはなかつた。殊にラスキン・コレッヂの副校長ブラウン氏は自分の家に來ないかと、誘つて吳れたので、樂しい生活をブラウン氏夫妻と共にすることが出來た。

R君

英國の人と話をすると、世界の大學都市として、美しいものが二つある、第一がオックスフォルドで、第二がハイデルベルグだと云ふ。僕は景色のよいと云ふ點のみから云へば、ハイデルベルグは遙にオックスフォルドを凌いで居ると思ふ。山があることはハイデルベルグの特長で、オックスフォルドの遠く及ばざる所である。又河の流もネッカーはテームスよりもずつとよい。唯オックスフォルドにあつて、ハイデルベルグにないものは、大學そのものの大きさと、町全體に對して持つ大學の重要さである。ハイデルベルグに往つては、此に大學があると云ふことより外には、大學都市と云ふ感は起らない。オックスフオルドの町は大學あつてのオックスフォルドで、大學の建物の大きさ、其の廣がりから云つて、之こそ本當の大學都市である。更に大學に於けるコレッヂの制度、之に附屬した庭園、食堂、禮拜堂、之を中心とした學徒の共同生活は、之を英國にのみ求むべくとして、獨逸の大學に見ることの出來ないものである。

僕は曾て、ある學校の先生二人と話してゐた時に、ケムブリッヂとオックスフォルドとが、と云つた。忽ち二人は言を挿んで、濟みませんが、オックスフォルドとケムブリッヂと言ひ更へて呉れませんかと云つた。二人はオックスフォルド出身の人である。勿論之等は戯談ではあるが、英人と話をすると、すぐに出るのはオックスフォルドとケムブリッヂとどちらが良いかと云ふ話である。僕はケムブリッヂも好いと思ふ。古びたコレッヂの建物、美しい河と庭、何れを何れとも分ち得ない。唯僕のオックスフォルド好きなのは其の古典的な味にある。ケムブリッヂの學問の特長が近代的なるに對し、オックスフォルドの誇りは神學と哲學とである。流石に數百年間、プラトー、アリストートルの研究の中心地丈あつて、此にはケムブリッヂに見られない落付がある。ケムブリッヂには電車があるが、オックスフォルドではどうしても電車を引かせない、今以てバスしかない。以前は經濟政治を學ぶものも、希臘語でプラトーやアリストートルが讀めねば、試驗が通れなかつた。近頃やつと古典が讀めなくとも、現代語丈で、試驗の通る一つの科程を作つて、之を稱して、Politics, Economics And Philosophy の科目と云ふ。現代語で通すやうに改正はしても、政治學や經濟學丈では滿足出來なくて、其所に哲學を加へなければ、承知の出來ない所に、流石にオックスフォルドらしい所が偲ばれる。政治學は未だ政治哲學と云ふ方面からの研究は實に盛んであるが、然し經濟學と云つたやうな科目は頗る振はない。經濟學の教授マックレガーは曾て語つて、ケムブリッヂでは經濟學を教へるの

に、金融とか保險とか云ふ問題に好んで入る、又方法も數學を用ひたりする、之に反してオックスフォルドでは、同じ經濟學でも、すぐに學説の發達史と云ふ方面に重を置く。兩大學の間には、こんな大きな差異があると云つて居た。經濟學のやり方如何は別として、一體に古典的な、そして根本的な教養を重んずることに、オックスフォルドの特長があつて、此の點でケムブリッヂよりも好きだ、然しいつのまにか僕もオックスフォルド・ボーイになつて了つたのかも知れない。

二

K君

オックスフォルドを充分に述べるには一冊の本を必要とする、かうした通信のよくなし得る所ではない。オックスフォルドのことを書いた本が、實に澤山出版される。今僕はさう云ふ本の抜書でなしに、君に必要なことだけを此に述べやう。オックスフォルド大學は廿一の大小コレッヂ（college）から成つて居り、此の外にコレッヂと云ふ名稱を持つてはゐるが、他のコレッヂと趣を異にして、ユニバーシチー（University）の中に入らない數個のものがある、それはマンスフイールド（Mansfield）マンチエスター（Manchester）コレッヂ等の主として宗教に關係したコレッヂと、勞働者教育の爲に建てられたラスキン・コレッヂである。オックスフォルド、ケンブリッヂに於て異様に感ぜられることは、ユニバーシチーとコレッヂとの關係である。日本で考へるやうな意味に於て、ユニバーシチーと云ふものは、統一された集合體ではない。寧ろ學園の生活に於て、單位をなし中心をなすものは、各コレッヂであつてユニバーシチーではない。尤も極めて最近に於て、コレッヂ間の統一・連絡・企て、從つて全體の集合體としてのユニバーシチーと云ふものに重を置くやうになつて來た。殊に議會が大學に補助金を下附するやうになつてから、其下附を受けるものはユニバーシチーであつて、各コレッヂではないので、之から段々ユニバーシチーと云ふものが一つの集團人格を持やうに考へられて來たやうなものの、今日に於てもユニバーシチーは云はゞ獨立せるコレッヂのフエデラルと云つた性質のものである。各コレッヂは夫々に獨立の發達の歴史を持ち、獨立の會計基金を持ち、スコットランド、イングランド等に廣大な田園や森林を所有して、一つの大きな財産の經營主體である。從つてコレッヂの學長は之等の財産を管理する責任があり、之がコレッヂの主長に行政的手腕を要する一つの原因をなして居り、又オックスフォルドやケンブリッヂの學園に、厄介な煩雜な事務として、附き纏つて居

るのである。

各コレッヂに長があつて、それがオックスフォルドに於ては Principal, Warden, provost, rector, dean, president, master 等一々名稱が違つて、統一がない、此に英國らしい趣がある此の長の下に Professors, Fellows, lectures, readers, tutors がある。フェローと云ふ觀念が一寸我々に分り難い。之に二つの種類があつて、一つは講義をし、個人が教授をするもので、他のものは全く何にもしないで、唯金を貰つて隨意の研究をすればよいのである。後者に於て有名なのが、最近に死んだエフ・エッチ・ブラッドレー(F. H. Bradley)であり、又ギルド社會主義で有名なヂー・ディー・エッチ・コールであつた。之等のフェローの受取の俸給は日本の三千圓位から一萬圓位に達するものであつて、上のものになると教授と少しも差のないのがある。講義は各コレッヂでなさるゝものがあると共に、ユニバーシチー共通のホールでなさるゝものがある。何所へ往つて聽いても隨意であることは勿論である。

R君

學生は初年生は必ずコレッヂに寄宿しなくてはならない、上級生になるとコレッヂ外の寄宿を許される。此のコレッヂに於て、マスターを中心にフェローやチューターを圍んでの寄宿生活が、即ちオックスフォルドやケムブリッヂの特色で、外國にない制度であり、又英國自身に於てもプロヴィンシアルの大學に持てない所である。各コレッヂには夫々特色がある、例へば學問の水準の高いことに於て、ベリオルやニュー・コレッヂは昔から評判であり、モードレンやクライスト・チャーチ等のコレッヂは贅澤な社交生活に於て有名である。モードレン・コレッヂあたりで贅澤な學生は、一年に費す學費、驚くなかれ一萬圓だそうである、何に使ふかと云ふと、招待したりされたりする社交費に懸るやうである。尤も社交と云ふものに對する觀念が、我々日本人と英人との間には、かなりに差違がある。彼れは人と御茶を飲んだり、話したりすることが、一種の修養であつて、讀書から得るものと同じ位に認めてゐる。學生の授業は、毎學期八週間あつて、後六週間は休暇となつてゐる、そして其の八週間さへも、彼等は決して日本のやうには勉強しない、運動や社交に費す、此の間が共同生活でなくては得られない人格の鍛錬をする時で、そして六週の休暇が來ると、笈を負つて山間の僻地に、獨り又は極めて親しい友人と籠つて、此に孤獨の讀書思索の生活を送り、再びコレッヂ・ライフに戻つて共同の生活に入るやうである。僕等が英國名士の傳記を讀んで、彼等の生涯に花やかな色彩を與へるコレッヂ時代と云ふのは丁

庭かうした孤獨と集團と、二つから成る生活を云ふのである。

三

コレッヂの建物はマートン・コレッヂの千二百六十四年を最古のものとして、何れも中世の末に出來た僧院の跡である。僕は其の古い苔蒸した建物が好きで溜らない。コレッヂからコレッヂへ續くオックスフォルドの街を歩いて居て、感ずることは實に中世の町といふことである。各コレッヂには必ず之に附屬して、禮拜堂があり、圖書館があり、食堂がある。圖書館又は食堂には、其のコレッヂから出た名士の肖像が飾つてある。僕が主として出入したコレッヂは、ベリオルとモードレンとであつたが、ベリオルの食堂には、ジョエット、ケヤード、アスタイス、ミルナー等の大小の額があり、モードレンにはコレット、エラスムス等の額があつた。食事をする時が一寸大變である、僕は曾てモードレンに夕食の招待を受けたことがあつた。食事の前に談話室で、プレヂデント始め古參教授ジエー・エー・スミス等を始めとして、若いフエローに至る迄燕尾服又はタキシードで待つてゐる。やがて食事の時間が來ると、ローマ法皇の持つ笏のやうなものを捧げて、一人役員が先頭に立ち、プレヂデントを始め、行列をなして食堂に入り、學生が總起立をなす間に、正面の一段高いテーブルに着席する。そしてプレヂデントの祈禱の後に皿に手を着ける、中々大層なものである。

然し恐らくコレッヂになくてならないものは、其の美しい庭園であらう。美しいといつても日本流では決してない。庭の周りに、樹の茂みを作り、中央に大きなニレの樹でも植ゑ、一面に青い芝を敷き、其の間に澤山の花壇を作る。アーネスト・バーカーは曾て、コレッヂ生活に欠けてならないものは、庭である、此に若い學生は瞑想の生活を送ることが出來るのだといつた。實際此のコレッヂの庭の中から、英國の歴史を作る澤山の運動は生れて來たのである。モードレン・コレッヂの庭には、澤山の鹿を放してあり、河の流に沿うた並木路は、アヂソンの好んだ所だといふので、アヂソン・ウオーク (Addison's Walk) と云ふ。クライスト・チャーチの傍の大きな並木路は、好んでグラッドストンの散歩した所だと云ふので、グラッドストーン・アベニュー (Gladstone Avenue) と云つてゐる。僕の好きなのは、ベリオルの庭と、トリニチーの庭である。夕方庭のベンチに腰かけて、何をするともなしに考へてゐるのは、實によい。あちこちに學生が俯きながら、往つたり來たり何か考へてゐる。美しい鳥の聲が聞える。此の塵環を遠く離れた所に來て、此の學園から出た多くの人の足跡を偲ぶ。やがて夕の六時

因すると云ふ。

然し僕は之等の欠點はある程度迄防ぎ得ないものではないと思ふ。先生の室に於て、溢るゝ書物の棚を眺めながら、先生と二人丈で對談する。先生は時々立つて書架の書物を取り出して、名著の有名な節を指示する。學生は假令幼稚なりとも、自分の考へたことを聞いて貰つて、自分の思想の批評を聴き得る、更に解けざる疑問は、時を明じて先生と生徒と相並んで、グラウンドを逍遥しつゝ語り合ふ。此に本當の教育がある。此には智識の注入がなくて、如何に考ふべきかを教へられる。此には諸君はと呼びかけられるのでなくて、君はと呼ばれて、學生はかくすべしと說かれずして、君はかくすべしと教へられる。英國人が自ら讀み、自ら考へ、自ら案じ、獨自の路を歩いて、毫も他に賴らざるは、其の依つて來る所、實に此に在りと云ふべきである。

R君、

日本にも明治維新前に、私塾なるものがあつた。此に人格勝れた教師を中心として、若い青年が集つた。其の主とするところは人格の鍛錬にあつて、思索の鍛錬にはなかつたであらう、然し云はゞ一種のチユートリアル・システムである。其の後教育多量生産的になつて、學校なる設備によつて行はれ、政府の任命する官吏によつて支配されるに至つた。それでもまだ福澤諭吉、新島襄、成瀨仁藏と云つたやうな教育者が私立學校に立籠つて一個の特色を爲してゐた。今はそれさへ消へつゝはないか。今の日本は學者は増したが、滅じたのは教師であり、先生である。獨逸又は日本の大學の演習は、講義と個人教授とを折衷したものである。然しまだ不充分である。何等かの形に於て舊日本の私塾のやうなものが復活し、何等かの形を以て、英國兩大學のチユートリアル・システムが採られて然るべきではないか。

五

コレツヂを中心として、教師と學生とは起臥を共にし、個人的に接近する機會を持つたことは、オツクスフォルドをして歴史上、數多くの思想運動の發源地たらしめた。僕は最近のオツクスフルドを說く前に、之等二三の運動に付いて、簡單な歴史的回顧を試みてみたいと思ふ。

R君、

話は中世の末に遡る、コンスタンチノープルがトルコ人に奪はれたことは西歐キリスト教國に異常の衝動を與へた。キリスト教は歐洲の西北部にのみ狹められ、其の西は唯見渡す限り、何も見えない海原であつた。既に分裂に分裂を加へて來たキリ

スト教の運命は、此に終りに近づいたかと思はれた。然るに一はスペインよりムーア人を驅逐したとの報知により、一は海の彼方に新大陸が發見されたとの消息の傳はつた時、人々の胸は躍つた。キリスト教の運命はムーア人から救はれて、更に新に新領土を開拓したからである。此の歐洲の躍動は期せずして、内面的の飛躍と時を同じくして居た。即ちイタリアのフローレンスを中心として。プラトー、アリストートルを始めとして、新プラトーニズムを研究する一團の學徒は集まり、所謂新學問を生んだのである。

歐洲の各地から新學問に憧れた若人は、アルプスを越えてイタリアに學んだ。其の中に英國のジョン・コレット(John Colet)が居た。彼は此にギリシヤ哲學に觸れるのでなく、此にサボナローラの熱火に觸れた。多くの新人が單なる人文主義者としてイタリアから歸つた時に、彼のみは新學問に加ふるに、宗教と社會との改革に對する熱を以てした。さうして内よりしてキリスト教會を改革せんと闘つたのである。千四百九十六年秋、ジヨン・コレットはイタリヤより歸つて、母校オックスフォールドにポールの福音書に關する講義を開いた。之れ實に英國思想史上に一新紀元を劃したもので、又英國文藝復興の先驅であつた。彼と同時代に一代の天才と謳はれた、トーマス・ムーアが居た。更に千四百九十八年エラスムスもオックスフォルドに來た。かくて此の三人は互に手を携へて、新學問を英國に植ゑると共に、英國始め歐洲の治者に訴へて改革の一日も忽にすべからざるを說いた。

僕は今此の一團の人々に付て多くを語らんとするのではないこれはシーボームの「オックスフォルドの改革者」(F. Seebohm: Oxford Reformers, 3rd ed. 1896)に詳である。彼等は中世の末期に於て、改革を唱へて革命を排した。治者階級に訴へて、彼等自ら改革の率先すべきを諭した。然るに治者は彼等に耳を傾けて、之を待つに禮を以てしたが、之に聽いて改革を爲さんとはしなかつた。遂に時代はルーテルの憤起を促し、革命によつて始めて歐洲は新轉向を爲した。フルードの興味ある小篇「エラスムスとルーテル」(J. A. Froude: Erasmus and Luther に"Short Studies on Great Subjects")は、此の舞臺に活躍した二人の比較論評して、遺憾なきに近い。ともあれ、オックスフォルドは、英國新學問の誕生地であつた。オックスフォルドは其の運動史の第一頁に、彼等を持つ事を誇つて可なりである。

オックスフォルドが生んだ第二の運動は、十八世紀の中葉であつた。ジョン・ウエスレーは書いて云ふ「千七百二十九年十一月、オックスフォルドに於ける四人の青年——リンコルン・コ

レッヂのフエローなるジョン・ウエスレー・クライスト・チャーチの學生チャールス・ウエスレー、同じくクライスト・チャーチのコンモンナーなるモルガン、マートン・コレッヂのカーカムーは始めて、希臘聖書を讀まんが爲め、毎週數席の集まりを催した」と。之よりして後、彼等は聖書の命ずる所として、附近の病者を訪問し、監獄の囚徒に說教した。彼等の前途に多くの變化はあつた、然し之が有名なるメソヂスト教會（methodist church）の起原である。彼等の努力は、英國宗教會に一道の活氣を與へた。殊に彼等が好んで說教の相手としたのは、當時漸く數を增した工場鑛山の勞働者であつた。之等の勞働者は、所謂勞働運動者より宣傳を受ける前に、先づ教へられたのは、彼等の說教であつた。さうして彼等の說教よりして、英國勞働運動は、大きな刺戟を受けて頭を擡げた。オツクスフオルドは此にも社會史上意義ある運動を生んだのである。

其の次の運動は千八百三十三年の所謂オツクスフオルド運動である。(Oxford Movement)。此の時オツクスフオルドは、プセー、キーブル、フルード（Froude）等宗教界に堪能の士を持つてゐた、彼等はベンサム一派の功利主義の跳梁に嫌たらなかつた。恰もラツセル卿のホイツグ內閣が、教會の內部に干渉の手を加へんとしたるを憤慨して、宗教の名に於て、教會の名に於て起つべきことを、全國の僧侶に檄した。次で此の運動に加はつたものに、ヘンリー・ニユーマン（Henry Newman）があつた。彼等が英國の上下に久しく忘れられた信仰を喚醒した力は非常なものであつた、殊に彼等のオツクスフオルドの青年に及ぼした影響は、驚くべきものがあつた、一時ニユーマン熱（Newman fever）と云ふものがあつたと云ふ位で、唯一人のラスキンを除いては、當時育つた青年は何等かの感化を受けないものはなかつたと云ふ。

然し興味は啻に之が宗教的方面に止まらないで、別に彼等の殘した社會的意義にある。彼等は宗教の權威を說くに當つて、自ら段々と羅馬舊教に近づいた、さうして權威を各個人の良心の判斷に置かずして、外なる僧侶の命令に置いた。此に個人主義に對する運動が、先づ宗教界に表はれたことが窺はれる、之れやがて社會思想上に於て、個人主義攻擊の來る先驅を爲したのである。更に又彼等は好んで教會とは何ぞやとの問題を研究した。さうして教會はそれ自身に於て生命を有し、目的を有し、歷史を有する團體である。此の點に於て國家と對等の立場に立つべきもので、國家によつて其の地位を與へられるものではない、國家の承認に先つて、其の存在と意義とを持つものである。況んや國家の下に立つて其の干渉を受くべきではないと

した。此の點に於て彼等は最近社會思想たる、集團人格說の先驅を爲した。此の方面よりオックスフォルド運動を研究するものに、フイギースとラスキーとがある。此の運動はかくして近く現代的意義がある。今セント・ジアイルス通にあるプセー・ハウス（Pusey House）と、トリニチー・コレッヂの庭にあるニューマンの像とは、當時を偲ばせるものである。

六

R君

かうして僕は運動の變遷を辿つて遂に、千八百七十年代に來た。此の時オックスフォルドから最後の運動が生れた、之れ即ち理想主義の運動である。此の運動は一面に於て、ロック、バークレー、ヒュームに始まつて、今ミル、スペンサーに傳はれる經驗主義の認識論を排し、更にベンサム、ミル父子の功利主義の倫理說を排し、他面に於てミル、スペンサーの自由放任を主張する個人主義を攻擊するものであつた。而して彼等のは其の源を一方に於て、プラトーの研究より得、他方に於てカント及びヘーゲルの研究から得た。デイー・エッチ・グリーンが千八百七十四年、ヒュームの論文を批評して、經驗主義が如何に矛盾するか、如何にして結局懷疑說に陷らざるべからざるを述べたるに始まる、此の年を以て英國理想主義發現の時と目すべきであらう。更にグリーンはスペンサーを論ずるに當り、「今や年齡二十五歲以下の青年は、ミル、スペンサーを抛つて、カント、ヘーゲルを繙かざるべからず」と唱へた。當時を知れる古老の言に依ると、此の運動はオックスフォルドを席捲し、往く所として靡かざるなしと云ふ有樣であつたと云ふ。

此の以前に理想主義を唱へるものがないではなかつた。殊にカーライルの勢は大きかつた。彼は彼ならずんば爲し能はざる時代の使命を果した人である。彼の巨大なる人格によつて始めて、時代は個人主義功利主義に對する批判を試むべきを教へられた。然し如何にして之等の思想が誤れるか、何が求るべき思想なるかは、此のチエルシアの哲人の教ふる所ではなかつた。彼は豫言者であつたが、精緻な體系を整へる學者ではなかつた。カーライルは必要であつた。然し彼の出たる後に於て、必要なるは更に別個の人物であつた。之を供したのがオックスフォルド理想主義の人々である。

此の運動は、ベリオル・コレッヂから生れた。之を語るにはベンジャミン・ジョウエット（Benjamin Jowett）を語らねばならない。彼は千八百七十年から二十三年間、ベリオル・コレッヂのマスターを努めた。此の間彼の感化によつて名を爲

したもの、實に數多い。彼は後年得に誇つて、何人の首相、何人の大僧正、何人の大臣の僧正を門下に生んだと誇つたさうであるが、後年英國政界に名を爲したるものに、アスクイスありグレー(Grey)あり、ミルナー(Milner)卿あり、カーゾン(Curzon)卿がある。一種多樣の人格的力を以て多くの門弟を作つた人である。ラグビー學校長アーノルド先生の孫娘にして、當時一代の才媛の名あつた公フレー・ウオード夫人の自叙傳を讀むと頗る面白い。丁度此の當時オックスフォルドに三つの傾向があつたさうである。其の一つは、クライスト・チャーチにあるリッドンによつて代表されるもので、神學の研究を以て終始する信仰者の一群である。其の二がリンコルン・コレッヂの學長マーク・パチソン(Mark Pattison)に代表されるもので、學問は學問の爲めに存するもので、他のことの爲に存するものではないといひ、獨逸學究の精神を傳へたものであつた。第三がベリオルに於けるジョウエットの代表するもので、人格の教養を主とする一派であつた。後年のウオード夫人は、始めマーク・パチソン氏の愛撫を受けたが、後漸次之から遠ざかつて、ジョウエットに近いて、ベリオル一派に傾倒した消息を詳に書いてゐる。此の傾向と云ふのは何所にもあるもので一寸興味あるものではないか。

ジョウエットは元來希臘語の教授であつた。然し彼は語學の教授として終らなかつた。彼は當時の英國の市民として、何をアゼンスのプラトーから學ぶべきかを考へた。彼は單にアゼンスのプラトー及びアリストートルを讀ますして　十九世紀にプラトー、アリストートルを蘇らして、之を當面の英國に適用しやうとした。今一つ彼の興味を持つたのは、ヘーゲルの研究であつた。僕の知る所では彼はヘーゲルの全體を充分に分つたのではなかつた、然しヘーゲルの精神を酌むことは出來た。さうしてプラトーとヘーゲルの研究を、門下に力說したのである。幸にして優秀なる門下が先師の鞭韃の下に、先師の足らざるものを大成した、之がグリーンとチャードである。

七

R君

今グリーンとエドワード・ケヤード Edward Caird とを語ることは、此の短い通信に於て避けたい。前者に就ては、ネットルシップの傳記があり、後者に就ては、ジョーンスとミアヘッド共著の傳記がある。共に傳記として上乘なるものである。更にウオード夫人の有名な小說 Robert Elsmere の主人公は、グリーンを取つたものグリーンはオックスフォルドに直に入つて、ベ

リオルにジョウエットの個人教授を受け、ケヤードはグラスゴー大學を卒へてから、オックスフォルドに來た。彼等は共に少年時代に、カーライルの感化を受けた人達であつた。彼等は千八百三十七八年に生れたからして、千八百五十年代は彼等の丁度成育する時期である。さうして此の時がカーライルの全盛時代であつた。かくして彼等も亦カーライルによつて、其の胸に靈の火を點された青年であつた。カーライルは前に書いたやうに、漸く付きさうになつた靈の火を、パット明るくすることの出來る天才であつた。然し點された火を如何にいつまで保護するかは、各々が自分自身の負はねばならない仕事であつた。あるものの胸の火は、一度點された丈で、やがて間もなく消えた。唯僅な青年のみが、一度點された火を如何にかして永久のものにしたいと苦心した。かくして自ら消えざる火を保つと共に、更に人の心に永久に消えざるものを與へることが出來た、これがグリーンとケヤードとであつた。

グリーンはオックスフォルドに殘つて、フエローとなり教授となつた。ケヤードはグラスゴー大學に迎へられて、其の教授になつた。グリーンの辯と筆とは、人を惹付けるものではない、然し彼には驚くべき人格的の感化力があつた。ケヤードの人となりは、すべての人を動かす威力を持つたものではない、然し彼には實に平明暢達の、筆と辯とがあつた。更に此の二人に加ふるに、グラスゴー大學の總長、兄のジョン・ケヤードがある。彼は始めは工場の機械技師であつた。後轉じて牧師となつた。彼の問題は神の觀念を最もよく説明するに足る哲學を求むることであつた。當時スコットランドに普及した所謂蘇國哲學は之に適するものではなかつた。彼は遂にヘーゲルに接して、始めて求むるものに逢着した。彼の雄辯は當時蘇國第一と云はれた。此に理想主義は更に有力なる代辯人を得た譯である。更に我々の逸してならないものは、オックスフォルドに育つて一生オックスフォルドを出なかつた彼の、エフ、エッチ、ブラッドレー（F. H. Bradley）である。學問の深さから云へば彼を以て、第一人者とすべきであらう。かくしてジョウエットの行政的手腕と、グリーンの人格的感化力と、ケヤード兄弟の辯と筆と、更にブラッドレーの學問を以て、理想主義は幸に豐な指導者に富んでゐた。

R君

更に彼等は後に續く後進に於て、決して不幸ではなかつた。ネットルシップ、ワレース、ボサンケを頭として、彼等より約十代若い人々に、ホルデーン、プリングル・パチソン、エー・シー・ブラッドレー、リーチー、Ritchie ソーレー、ジョーンス、マッカ

ーン、ミアヘッド、ジエームス・ボーナー、ワットソン、バーネット等がある。彼等の多數は、千八百八十二年グリーンの死んだ時、論文集（Essay in Philosophical Criticism）を作つて、之をグーリン追悼の爲に捧げた。之が若き新人が轡口を並べて勢揃をした最初と云つてよからう。之れ以來英米及び其の殖民地の大學の哲學の講座はすべて此の派の人によつて占めれざるはないとさへ云はれ、爾來四十年間隆盛を專らにした。今は此の人々が或は物故し、生きてゐる人も隱退したものが多い。此の中で拔群の力を持つものはボサンケであらう。然し僕は社會思想の方面に於ては、リーチーの努力を多とする。氏の遺した作物の中には暗示を與ふるものが尠くない。僕は曾てケムブリッヂの教授ソーレーに會つた時、リーチーが割合に若くして死に、又多くの先輩に厭せられて、知られてゐないけれども、自分はあの人を惜しいと思ふと云つたら、氏は眞面目になつて、本當に君はさう思ふかと念を押され、それを聞いて、自分は實に嬉しい、彼は自分の親友であつた。異國の君から今の言を聞いて、友人の爲に實に嬉しいと感傷深さうに云はれたことがあつた。

R君

更に此の一群の人々の後に、第三代と云ふべき人が現代にゐる。現にオックスフォードの古參教授たるジエー・エー・スミスを始めとして、第二便の通信に於て述べたロンドンのキングス、コレッヂの學長アーネスト、バーカー、今のベリオルのマスターなるリンゼ、ベリオルのフエローたるマックマレー、リーズ大學の副總長ハドー、南阿大學教授ヘーン、レー等がこれである、然しリンゼー以下に於ては、既に他の思想的要素が混入して來て、純粹のオックスフォード理想主義を受續いではゐない。現代は理想主義に對する反動の時代である。オックスフォルド理想主義の投じた光は日々に弱まりつゝある。然らばオックスフォルド理想主義運動は何を殘したか。之は一つを哲學倫理學方面の功績とし、一つを社會思想方面の功績として、二つの場合を分けねばなるまい。第一の方面に彼等の爲したことは、英國人に永く求めて止まざりしものを傳へたと云ふことであらう。英國人は經驗主義の哲學を採りながら、拔くべからざる宗教的倫理的傾向を持つてゐた。云はゞ彼等は夫れ自身に於て互に矛盾する思想を同一人格の中に混有してゐたのである。此の彼等の無意識に取り入れてゐる宗教的倫理的傾向を、誰かゞ意識の界に引出して、之と經驗主義とを打つて一丸とする說明を與へねばならなかつた。之を果したのが即ち理想主義である。曾てケヤードはコムトを評した時に「哲學とは各人が自ら知ら

ずして有する前提を、意識の白日に齎して、之を説明し之に組織を與へるものであると云つたが、其の哲學の任務を爲したのが彼等である。

第二の方面に於ては、當時の個人主義者の唱ふる自由なるものゝ意味を深く思索し、自由とは單に強制なき狀態を云ふのではない、本當の自由とは眞正の自己の實現するを云ふとし、此の意味の自由の爲に或る場合に強制なきを必要とすると共に、又ある場合に於て強制を要することを説いた。自由の空言に囚はれて、變化せる社會狀態に適應の途に窮してゐた千八百七十年代に於て、此の説明は空谷に跫音を聞くの趣があつた。かくして結果は十九世紀末と廿世紀との、活潑なる勞働立法の制定となつて現はれたのである。ジョン・スチュアート・ミルが其の「自由論」に於て、自由の必要を論證せんとした時に、既に一歩理想主義に足を踏み入れて居た。然し自由の論據を此に求むるは、唯ミル自身の根本の經驗主義と矛盾してのみ可能であつた。ミルの進み得ずして止まつた所に、足を踏み出して、矛盾なしに自由と強制との調和を試みたのが彼等であつた。一方に於て彼等によつて國家の強制はある場合に於て容認されると共に、他方に於て亦自由はベンサム、ミルに於けるよりも更により強く主張される論據を得た。グリーンの「政治義務の原理」ボサンケの「國家の哲學的理論」を讀んで、如何に彼等の自由に對する力説の強いかに驚く、此に英人特有の個人主義が窺はれ、そして此に彼等と獨逸に於けるヘーゲリアンとの大差がある。

R君

更に幾多の問題が起り得る。彼等とカント、ヘーゲルとは如何に異るか、彼等と獨逸の新カント派の運動とは如何なる關係があつたか、彼等は新カント派と呼ばるべきか、新ヘーゲル派と呼ばるべきか、獨逸に於て千八百六十年代に新カント派運動が起つて、漸く昨今に於てヘーゲルに返らんとしつゝあるに、英國に於ては何故に新カント派と新ヘーゲル派と同時に來りしか。すべて之等の問題に答ふるは、かうした通信のよくなし得る所ではない、僕は之を改めて他日に期さう。

八

それでは現今のオックスフォルドはどうであるか。社會思想の方面に於て、理想主義に對する各種の反動が起りつゝあることは、既に第二便に於て之を書いた。今は唯哲學の方面に於て、理想主義の反動を語らう。反動は二つの方面から現はれた、一つはアメリカから來たウイリヤム・ジエームスのプラグマチズムであり、今一つがケムブリッヂから來たリアリズムの勃興で

ある。此の二つの浸入を受けて、今オックスフオールドに於ける年齢五十歳以下の人は、大抵理想主義に批判的立場を採つてゐる。僕自身はオックスフオルドに來て、新に受けたものは、リアリズムの思想であつた。此の思想はケムブリッヂの自然科學者たるホイットヘッド、バアトランド・ラッセルに始まり、ブロードによつて稍大成されつゝあるのではないかと思ふ。理想主義者が内在するとするカテゴリーのあるものが、内在するに非ずして外在するものなりと云ふのである。新に受けた此の思想が僕にどうなるかは少しも分らない。唯僕は友人プライス氏の熱心なる談話で、除々として之に興味が向いたのである。

然し僕は今此にリアリズムを說かうとしない。之がオックスフオルドにどう影響したかを見たいのである。一つはリアリズム其のものを說くものを生じた、一つは再び新な興味を以てロツク、バークレー、ヒユームを顧みるやうになり、彼のカンベル・フレーザーの研究を想ひ起すことになつた。然し最後に一番大きいのがパーソナル・アイデアリズムの擡頭であらう。スタートが編纂した "Personal Idealism" なる論文集は、稍見劣りはするが、ある意味に於て、"Essays in Philosophical Criticism" に相當するものと云へるかも知れない。然し割合にまだ立場を明にしないが、此の方面に未來の大を期待されるのはクレメント・ウエッブ氏であらう。此の種の人々によつて今想ひ起されるのは、十九世紀末の "Three Types of Ethical Theories" の著者ジエームス・マルチノー（James Martineau）氏である。人間の運命は實に面白い、マルチノーなどもスコットランドの一角に於て、立派な業績を擧げてゐたに拘はらず、理想主義に壓倒されて多く顧みられなかつたのが、今漸く浮び上るの機運に際會した譯である。

R君

僕に一番興味のあるものは、理想主義の系統の中に育ちながら、除々としてリアリズムの影響を受けて、舊思想と新思想との橋梁を爲し、過渡的思想家としての使命を果したものがなくてならない、若しあつたとすればそれは誰であつたかと云ふことであつた。此の問を以てグラスゴー大學に於て、當時の教授リンゼーに提出したことがあつた。ジョン・スチユアート・ミルが經驗主義と理想主義との橋梁であつたと似たやうなものは誰であるかと。リンゼー氏はそれは死んだ論理學の教授クツク、ウイルソン（Cook Wilson）であると答へた。其の後クツク、ウイルソンの遺稿が近く出版される由を聞き、僕は窃に之を待つてゐた。中々出ないので丁度ウエッブ氏を訪れた時、ウイルソン教授の遺稿は何日出ますかと問うたら、氏は驚かれて、あ

なたはどうしてウイルソン教授を御存じです、あの人は唯一つギリシア哲學の註釋書を出した丈で、外に何等の著述なしに死んだ人です、あの人はオックスフォルドの人丈が知つてゐる人で、外國の人の知るべき人ではありません、どうしてあなたは御存じですかと不思議がられたが、實はリンゼー教授から聞いたのですと答へて、始めて氏も首肯された。ウイルソンといふ人はかう云ふ人であつた、人の云ふ所によると、氏が身を以て理想主義からリアリズムへの變化を體驗した徑路は、オックスフォルドの若い人に大きな影響を與へたものだと云ふ、僕は今以て其の遺稿の出版を待つてゐる。

然しウイルソン教授と似たやうな變遷を經過して、アイデアリズムとリアリズムとの調和を試みたものが他に二三ある。一つは前便で述べたエヂンバラ大學教授ノルマン、ケムプ、スミスの Introduction to the Idealistic Theory of knowledge 1924 by Norman Kemp Smith であり、今一つがボサンケの Meeting of Extremes in Contemporary Philosophy 及び Three Chapters on the Nature of Mind の二篇であらう。ボサンケ氏は自身理想主義の有力なる殿將たりしに拘はらず、非常に心の伸縮性の豐かな人で、晩年に於ても、努めてアリストテーリアン、ソサイエチーに出入して、若い人々の討論に傾聽して、段々と最近思想を受納れたので、氏をして今十年生存させたならば、定めし興味ある境地に達したらうとも思はれる。

僕がクレメント・ウエッブ氏を知つたのは、日本に於てホーム・ユニバーシチー・ライブラリー中の「哲學史」を讀んだ時であつた。あれ丈の材料をあの小篇にこなした技倆は、凡庸なものの爲し得る所ではない、僕は窃にクレメント、ウエッブの名を注意した。やがて雜誌は氏がオックスフォルドのキリスト教神學の講座の教授になつたことを報じ、其の就職講演の出版を知らせた。僕は氏の就職を窃に喜び、其の當然の榮進なるを思つたのである。オックスフォルドに來てから、二回午食に招ばれて氏夫妻の御厄介になつた。氏の今爲さんとしつゝあることは、absolute idealismと individualism とを如何に調和すべきかにある。氏の博識と暗示に富んだ觀察とは、氏の根本思想と共に、氏の作物を重からしむるに餘りある。氏の"God and Personality," "Divine Personality and Human Life" の二冊は實に喜しい著作である。僕は獨逸のウイルヘルム、シュテルンの研究（Wilhelm Stern: Die Menschliche Persönlichkeit; Wertphilosophie）と比較すると、定めし興味のあることと思はざるを得ない。

九、

R君

今少し現在のオックスフォルドに付て書きたいことはある。然し余りに長くなるから後便に譲らう。さうして此には例の如く當面の人物印象記を物すとして、先づエフ・エッチ・ブラッドレーに會はざるの記を書く。

ブラッドレーはグリーン・ケヤードと並んだ理想主義運動の長老である。同僚後輩の相次で世を去る中に、彼のみは獨りオックスフォルドに生きてゐた。其の千八百七十六年に出した"Ethical studies"は之れ丈英國民に讀まれて、之れ丈倫理思想の革命を來したものはないと云ふ。確にグリーンの"Prolegomena to Ethics"と共に、此の派の出した代表的の倫理書であり、之を以てベンサム、ミルの功利主義を打破したものと云へやう。更に氏の"Appearance and Reality"の一書は最近五十年、英國が持つた最上の形而上學の著述と云ふ。更に晩年に於て"Principles of Logic"の改版を出し、又論文集を纏めた。氏の「倫理學研究」のみはどうしても絶版で、氏は再版を許さない、あれはもう其の使命を果したと云ふのださうで、今英國に於ても手に入れることは、殆ど不可能である。

英國の人と話をすると、其の傾向の新舊何れに屬するを問はず、ブラッドレーを以て最近一世紀英國が持つた最大の哲人であると云ふ。更に氏と傾向を同じくするものに云はせると、氏はヘーゲル以後に於ける世界の第一人者だと云ふ。獨逸にはヘーゲル以後要するに註釋學者のみで、哲人は居ない、我々のブラッドレーに比するものは一人も見當らない。若し又少し視野を廣げても、イタリアのクローツエ、アメリカのジエムス、フランスのベルグソンを擧ぐべきで、結局どちらにしても獨逸からは一人も出ないと云ふ。僕は少しく之と見る所を異にするが、英人の立場から見て、如何にブラッドレーの地位の高いかは、之を以て知ることが出來やう。

氏は絶對的の隱者で終生マートン・コレッヂのフエローをしたが、一回だも講義をしたり、教授をしたことがない。又氏がコレッヂ内の邸宅から外に出たのも稀で、偶にコレッヂの庭を散歩するのを見掛ける丈だと云ふ。僕が英國に着いて間もなく、ボサンケは死んだ、此の派の長老で生きてゐるのは、唯氏丈であつた。然し誰に話しても氏に會ふことは諦めろと云ふ。外の人なら誰でも御世話するが、ブラッドレー丈は駄目だと云ふ。遂に此の隱者の門を敲くの機なくして英國を去つた。所がある支那の學生が、氏の門を尋ねて呼鈴をならした、氏は玄關側の書

窓から顔を出して、何か用かと怒鳴つたさうだ、支那人は突嗟の間に、Appearance and Reality の著者に會ひに來ましたと云つたら、氏は可笑しくなつて噴出して、喜び迎へて約卅分間心よく話をしたと、之が最近に於ける訪問のレコードだらうと云ふ。

所がジョン・モーレーが死んだ後、學界有數の名譽たる Order of Merit の稱號が國王から氏に與へられた。輿論は此の隱者に與へられた表彰を限りなく喜び、氏も亦外ならぬ此の稱號丈は喜んで受けたと云ふ。僕が英國を去つてから千九百二十四年九月末、氏はオックスフォルドで死んだ。ジエー・エー・スミスは、氏を悼むの書に、ブラッドレーは英國思想史上ヒュームと比肩すべく、恐らくはヒューム以上に位するであらうと云つた。即ちブラッドレーに會はざるの記を此に書く所以である。

僕が此の學園で會つた人は多かつた。政治學のアダムス、經濟學のマックレガー等も其の一人である。唯會はなかつたのは、經濟學の前教授エッヂウオースであつた。氏は確に特色ある經濟學者である。最近に其の論文が二卷に集められて、"Papers relating to Political Economy, 3 vols" となつて出た、現代に出た有力なる文獻と云ふべきであらう。法律學の方でダイシー教授は既に死んでゐた。氏の名譽ある講座―ダイシー自身が常にブラッドストーンの講座として誇つて居た――の後任者ゲルダートは、ダイシーの生前既に物故し、今はホルヅワースが就いてゐる。更にオックスフォルドに有名なのは、ギルバート・マレー教授である。氏は希臘語の教授で、多分ジョウエットの後任であらう。國際聯盟に熱心で、自由黨内に重きをなす人である。氏の演説は度々聽いたが、個人的に御目にかゝる機會はなかつた。

十

僕が法律學の大家サー・パウル・ヴイノグラドッフ Sir Paul Vinogradoff に會つたのは、オックスフォルドを去るに間近い時であつた。氏の講演は前に一度ロンドンの婦人コレッヂで聽いたことがあつた。法律學が文化科學として如何なる地位を有するものかと云ふやうなことを述べた、後で聞くと難しくて誰も分らなかつたと云ふ。氏を訪うて話はダイシー教授の "Law and Public Opinion" から始まつた。あの本は實によい本だ。少くとも僕にとつて忘れられない本である。あれがスミスやリカルドに跼蹐してゐた自分の眼界を、ベンサムに擴張して呉れた、そしてそれはベンサム一個を知つたことではない、それは個人主義の基調を自分に示したと云ふことである。又それは社會哲學の一部を開いて呉れたと云ふことであつた。唯然し

ダイシーは個人主義の部を說くに、溢るゝ同情を以てし、溢れることない材料を集めたが、團體主義を扱ふに、如何にも忙しさうに、纏めたことは、僕にとつて遺憾であつた。之に就てヴイノグラドツフ氏は云つた。ダイシーは功利主義者で個人主義者ですから、團體主義に就ては、嫌々ながら之を迎へたと云ふ態度ですよ。ダイシーの好意を持たなかつた時代を、ダイシーが個人主義を扱つたと同じように扱ふと云ふのが私の企ですと云ひ、氏は最近アメリカに講演された筆記を示して、之が自分の思想の一部を表はすものだと云つた。僕はあなたのやうな企てを外にしたものがある筈ですが、それは如何ですかと問うたら、氏はフランスのデイギユーを擧げ、オランダのクラツベを擧げられ、デイギユーの社會連帶の觀念、クラツベの法律意識の觀念等に批評を加へられた。更にオツクスフオルドの持つた過去の思想に就て話が出た時、氏はあの理想主義は時代に遲れた。自分の共鳴するのは、獨逸のシユタムラー、マツクス・ウエーバー、ウイザー等の思想であると話された。

話が氏の親友たりしメートランドの事に移つた時、氏は自分は今迄澤山の人に會つたけれども、天才と目すべきものは、僅に二三人しか出合はなかつた。メートランドは其の少い一人であると云ふ此の古學者の口から逝ける親友の追想を聞ける時、僕は果てなく一つの物語を想ひ起した。それは僕が曾てフイツシヤーのメートランドの傳で讀んだことであつた。ゲムブリツヂのコレツヂの庭に、二人の學生が寢轉びながら話をした、そしてサー・ヘンリー・メーン (Sir Henry Maine) の業績は本當の歷史派ではない、あれは獨斷を說くに唯事實を集める丈だ、我々は本當の歷史派を起さうぢやないかと決心した。此の一人がメートランドで後にゲムブリツヂの教授となり、他の一人はロシア生れの青年で、ベルリンでモンゼンに教へられ、更に英國に勉强に來たものであつた。それが即ち此の教授ヴイノグラドツフである。爾來彼等は互に共同して、青年時代の決心を實行した。僕は今此に此の兩人の業績を語らない、此の兩人の法律學、社會學、法制史、社會史の方面に及ぼした功績は實に大きい、彼等は共に世界的の權威である。

氏は今七十を越えてゐるかも知れない、手が少し顫えてゐる。然し氏は今漸く生涯の大作に着手した、"Historical Jurisprudence" は既に二卷を出して、第一卷に序論とギリシアの法律を述べ、第二卷に於てローマを述べる。第三卷に中世を扱ひ、之は既に氏の手を離れてゐると云ふ。第四卷以下が近代を說くので、氏は余す所少い晩年に、之が完結に寸陰を惜しむと云ふ風であつた。日本の學者が老朽と云はれる時分に、ライ

フウオークに手を着ける西洋學者に感心して、自分は氏の著作を辭したのであつた。

R君

最後に僕はグリーン夫人に御目にかゝつたことを忘れてはならない。グリーンの未亡人がまだ生きて居られることは一二三の人から聞いた。折惡しく適當な手蔓がなくて御目にかゝらずに居た。ある人は毎日曜に、ベリオル、コレッヂのチャベルに來られるから、其の時御話したらよいだらうと云つて呉れたが、それも變なので躊躇してゐた。所がウエッブ教授の夫人と御話をしてゐる時、偶然にグリーン夫人のことが話題に上つた。夫人はきつとあなたはオックスフォルドの往來で御目にかゝつた人に違ひありませんよ、まだ達者でそれは美しい方です、今は婦人のコレッヂのことで、よく私共と相談會を開きますと云ふ。御目にかゝりたいと云つたら、それは御易い事です、すぐ手紙を出しますから、直接夫人からあなたに御返事を御出しになりませうと云ふ。かうして僕は思ひがけなく夫人に御目にかゝることが出來た。

夫人は丁度その時八十二を迎へられた。グリーンが逝いたのが千八百八十二年だから、四十一年前に夫に別れた譯である。痩ぎすな小柄な婦人で、如何にも若かりし時の美しさを偲ばせるやうなものを持つてゐる。此の老年でありながら、耳は少し遠いが、記憶は實によく、又難しい問答をハキハキ片付ける頭の良さには敬服した。今の御宅はグリーン生前の家と違つて、幾度も其の後引越をしたと云ふ。書物の一杯積まつてゐる室に導かれて、五十年前の昔話に耽る。グリーンが影響を受けた方はと問うたら、ワーズウアースの詩とカーライルの本でせうと云ふ、其の後愛讀したのはブラウニングの詩でしたと答へられる、之はあの時代の人々に誰でもに共通の事の樣である。哲學の方ではと云ふたら、御存じでせう、マスターのジョウエットからプラトーとヘーゲルとを教へられたのです。哲學の教授からは何も得ないやうです。あれ迄オックスフォルドの哲學の教授は、神學をやつた僧侶の努めたもので、それからは何にも得なかつたやうです、主人が教授になる時も、リベラルなもので すから、大分故障があつたのですが、オックスフォルドで始めて僧侶以外から哲學の教授になりましたと云はれる。洋行した獨逸に往かれた時、獨逸の學界から何を學んだでせうと云ふに對しては、實はあの洋行に付ては、私は何にも聞いて居りませんし、忘れて了つたのかも知れません、唯ドレスデンに往つて、誰かの演習に出たと云ふことは聞きましたがそれ以外獨乙での生活に付ては聞かないと。英國で同時代の獨逸の學者と何

か關係がありましたかと問うたら、ロッツエはよく讀みました。それとエルトマンの哲學史をボサンケと共に少し譯したことがありましたが、それ以外カントやヘーゲルを除いては、同時代の人とは交渉はなかつたやうですと。即ち此の事は英國の理想主義運動が、獨逸の新カント派と何等の連絡なしに、起つた事をよく語るものである。

夫人は色々の逸話を述べられた、永い間フエローをしてゐて非常に忙しかつたので、教授になつてからやつと勉強が出來ると云つて喜んだら、間もなく死んで了ひました。宅はそれは話が下手で、よくバルフオーア氏やシヂウイック氏が遊びに來られて、あの人達がよく喋られるのに、宅は口籠つて中々言が出ないで、傍で見てゐて可笑しい位でしたと。又宅は御存じでせうが、教授以外に、オックスフオルドの市參事會員を努め、又市民の教育の爲めには大變働きました。死んだ時もオックスフオルドの北部の人々が、是非選擧區の墓地に埋めて呉れと云ふて、本來は外へ葬るべきであつたのが、あすこへ埋めましたと云ふ。今ウオルトン・ストリートの墓地に、ジョウエット、ケヤードと墓を竝べて居る。やがて別室へ招ぜられたら、そこに深山の額が懸つてゐた。あれは御存じでせう、宅の傳記を書いたネットルシップで、あの隣が同氏の好きなイタリアのマジニーの寫眞ですよ。自分はグリーンと夫人との寫眞を一枚宛戴いた。

夫人は逝ける夫の傾向を承ける人として、今オックスフオルドの人々を擧げた、スミス、リンゼー、マックマレー等が其の中にあつた。ジエームスのプラグマチズムは自分にはよく分らないけれども、唯物論的のもので自分は贊成出來ない。日本の思想の傾向は如何ですかと問はれたので、哲學の方面でカントが一番勢力を持つてゐますと答へたら、それは本當に嬉しいことですと喜ばれた。グリーン逝いて後、思想界には多くの變遷があつた。ある時は彼の思想は榮え、ある時は多くの攻撃を受けた。夫と別れて四十余年、靜に夫の遺業を見守る老いた未亡人の心を思ひ、心から余生の祝福を祈て、僕は夫人に別れたのであつた。

※

半歳のオックスフオルドの生活は、自分にとつて極めて收穫が多かつた。次の年の三月中旬、僕はボーンマウスの海岸に友人Hを訪うべく、オックスフオルドを引上げた。汽車の窓から春光を浴びつゝある、中世以來の學園を眺めて、さよならオックスフオルドと、心から呼びかけざるを得なかつた。

（六月廿八日朝）

無産政黨は如何なる綱領を持つべきか

山川均

（一）無産階級黨と綱領の問題

日本に於ける無産政黨樹立の運動は、今や黨の内容上の問題を中心問題とする段階に到達した。無産政黨の内容上の問題は、主として無産政黨の組織形態と、綱領の問題である。無産政黨の組織形態については、私は本誌の新年號に於て詳論し、最近重ねて一二新聞雜誌でその要點を再論したから、こゝには無産政黨の綱領について考へて見たいと思ふ。

綱領の問題は、吾々の政黨の綱領は、どんな形態を取るべきかと云ふ形態上の問題と、吾々の政黨の綱領は、どんな内容を持つべきかといふ内容上の問題との、二つの方面から見ることが出來る（勿論、綱領の内容を離れては、その形態を定めることは出來ないが）。

無産階級の階級黨の完全な形式を整へた完全な綱領には、原則的な部分と、この原則から割出された運動の綱領（即ち行動の綱領）との、二つの部分を含んで居るべき筈である。綱領の原則的の部分は、勢ひ理論的、從つてまた抽象的な性質を帶び、行動の綱領は、應用的、具體的な性質を帶びることになる。

現在、日本の既成政黨のいづれを見ても、著しい事實は、原則上の綱領を持たぬことである。例へば『余等同志は憲法を恪守し、其條章に循由して統治權の施用を完からしめ、以て國家の要務を擧げ、以て各個の權利自由を保全せむことを期す』というような、既成政黨のこの種のいはゆる綱領なるものは如何に漠然とした抽象的なものでなくても、原則的綱領であるとは云ふことが出來ぬ。既成政黨は支配階級黨であつて、現在の秩序と一切の社會關係との是認と維持とに出發し、その一切の行

動は、この範圍を越えることがない。從つて原則的な綱領の必要がない。否なブルジョア政黨にも原則的な綱領がないのではなくて、たゞ暗默のうちに理解せられてゐるのである。即ち資本主義の秩序をブルジョアジーの階級的支配とが、彼等の原則的の綱領なのである。

然るに無產階級の政治行動は、多かれ少かれ、資本主義の秩序とブルジョアジーの階級的支配に對する、疑問を以つて出發する。そして資本主義の秩序とブルジョアジーの階級的支配に對する見解の如何によつて、初めてその政治行動の性質が定まるものである。斯ような意味で、眞實に原則的な綱領を必要とし、また眞實に原則的と云ふべき綱領を有することは、無產階級黨の特質の一つであるといふことが出來る。

そこで無產階級黨の綱領の原則的な部分には、資本主義の本質、その歷史的意味と發展法則との解剖、資本主義的社會關係のうちに占める無產階級の位地とその歷史的の任務、從つてその階級的の目的、これが實現に必要な諸條件とその形成、この階級的目的を實現する行程、段取り、鬪爭の一般的の戰略——大凡それ等の事柄について、明確な見解を含まねばならぬ。

この根本的なプログラムに基づいて、このプログラムの一部分として、その發展の一段階として、現在の形勢と條件との下に於ける我々の當面の運動の行程と、段取りと、鬪爭の戰術とを定めるものは、行動の綱領である。

無產階級黨の原則綱領の最も典型的な實例としては、マルクスの『共產黨宣言』を擧げることが出來る。その他の無產階級的黨派を以つて任ずる政黨の綱領には、多かれ少かれ、原則的の部分を含んでゐる。ドイツ社會勞働黨のゴータ綱領、ドイツ社會民主黨のエルフルト綱領の如きも、その通りである。

(二) 原則綱領と行動綱領

そこで嚴密に云へば、原則的な綱領が確立してゐないでは、行動の綱領を定めることは出來ぬ。從つて無產政黨の完全な形を取つた綱領には、この二つの部分が含まれてゐなければならぬ。現に先頃、大阪に開かれた全國勞働團體の協議會でも、綱領委員會を作るに先つて、先づ綱領の根本原則の討議をしなければならぬといふ主張があつたといふことであるが、これは一面から見れば、道理ある主張に違ひない。

然しながら實際には、根本原則上の綱領を精密に確定しないでも、或る程度までは、行動の綱領が立て得られることも事實である。

斯う云つたなら、こゝでも理論と實際とは違つてゐると速斷

する人があるかも知らぬ。しかしこの批評は誤つてゐる。眞實の理論は如何なる場合にも、眞實の實際と一致する。精密に云へば、原則上の綱領を確立しないでは、行動上の綱領は立てられぬ。けれども原則上の綱領を明白に確定しないでも、或る程度までは行動上の綱領が(理論上からも實際上からも)立てられる。但しこの場合には、原則上の綱領は、人々により暗默のうちに決定せられてゐるか、乃至は行動上の綱領が、人々によつて、多かれ少かれ異つた意義に解釋せられてゐるか、さもなくばその綱領は、內容が精密に純一でないかに違ひない。

例へば日本の無產政黨の行動綱領のうちには、農民の方面では、耕作權確立の要求、勞働者の方面では、最低賃銀制度に伴ふ八時間制獲得の要求を掲げることは、今日恐らく大多數の人人の一致するところであつて、これは原則的の綱領を確定しないでも、出來得ることである。この場合、耕作權確立と八時間制獲得の要求項目が剔出された原則上の綱領に就いて——詳しく云へば耕作權の確立と八時間制獲得の要求が、無產階級の階級的目的のためにする鬪爭の發展のうちに、如何なる意義を持つてゐるかに就いて——吾々は暗默のうちに一致してゐるかも知らぬ。或はたま〳〵一致してゐるかも知らぬ。或はまた、その解釋は、人々に一任せられてゐるかも知らぬ。即ち耕作權の確立と八時間制の獲得を目的とする鬪爭が、無產階級の階級的目的の實現と、その政治的鬪爭の發展行程のうちに占めてゐる意義については、人々は別々の見解と解釋とを下してゐるかも知らぬ。

無產階級の政黨が、原則的な部分を含んだ完全な形の綱領を掲げないで、特に行動綱領のみを採用してゐる場合も少なくない。斯ような場合にも、これ等の行動綱領は、必ずしも何等の根本原則の上にも立つて居らぬものではない。或る場合には、原則的の部分は、單に省略せられて居り、或る場合には、暗默のうちに理解されて居り、或る場合には、極く大體が暗默のうちに了解されて居り、その餘は人々の見解に一任せられてゐる。斯ような相異は色々の形勢と實情に基づくものではあるが、その政黨の構成と內容、從つてその性質(同じく無產階級の政黨と云つても、その構成と內容と性質には色々ある)もまた、これを決定する主要な條件となる。

例へば「ドイツ獨立社會黨の一九一九年の綱領は行動綱領であるが、この劈頭には、社會民主黨が一八九一年に採用したエルフルト綱領の原則的部分を取る旨が明記されて居り、この場合は明かに省略である。之に反して英國勞働黨が原則綱領を持たぬのは、恐らくこの構成要素が純一でないからである。

（三）行動綱領の形式

然しながら原則とこの應用といふことは、相對的の言葉であつて、決して絶對的の區別と考へてはならぬ。大なる原則から見れば、小なる原則はその應用である。けれどももつと小さな原則から見れば、この應用は却つて原則である。原則的な綱領と、その應用である行動綱領との關係も—その通りであつて、綱領中の根本原則的な部分から見れば、普通に行動綱領と呼ばれてゐるものは、その應用に外ならぬ。けれどこの行動綱領だけを取つて見れば、その内には又、原則的な部分と應用的な部分、乃至は理論的抽象的な部分と、具體的な部分とを含んでゐる。

近頃—無産政黨の綱領問題が論議されるに當り、行動綱領とは、單に當面の要求條項のみを指すものであつてこれらの要求條項の形で現はれてゐる以外の部分、多かれ少かれ抽象的に書き現はれされてゐる部分は—全べて原則綱領と見做されてゐるかの如き觀がある。これは明かに誤つてゐる。理論上かく誤つてゐるばかりでなく、實際上からも誤つてゐる。即ち今日まで慣用せられてゐるところでは、行動綱領なる言葉には、決して具體的な要求條項——例へば耕作權の確立とか、八時間勞働制の獲得といふやうな——の列擧をのみ指すものではなく、この具體的な要求條項の割出される原則乃至は理論をも含んでゐるものである。けれどもこの原則はより根本的な原則から見れば、その應用であり、從つてより根本的な原則綱領から見れば當面の行動綱領なのである。

これは二三の無産階級黨派の綱領を見れば直ぐ分かる。例へび先きに實例として擧げた、一九一九年のドイツ獨立社會黨の綱領は、明かに行動綱領として採用せられたものであるが、その前半は一九一八年の革命の失敗と、それ以後の形勢を說明し、これに對する黨の一般方針を明かにしたものであつて、その後半はこの一般方針に基づいた當面の要求條項である。無産政黨の行動綱領とは、無産階級の要求を簡潔な箇條書きの形式にしたものに限るかの如き誤解は、フランス社會黨の綱領によつて一掃することが出來る。フランス社會黨が一九一九年に採用した綱領は、特に行動綱領として採用せられたものであるが、決して單なる要求項目の箇條書きではない。且つ小形のパンフレットに印刷して二十數頁に亘る長文であつて、決して簡潔なものとは云はれない。綱領はその序文に於いて、世界大戰及び大戰後の形成を論じ、第二節社會革命、第三節政治上の革進、第四節經濟上の復興、第五節當面の改良、第六節國際的組

義と平和の題下に、各々その方面に於ける黨の行動方針を論じ、第七節社會主義の時代が全體の結論となつてゐる。

最近、政治研究會の綱領委員會で作成され、その全國協議會で採用せられた無產政黨の綱領草案を見ると、その前半に於ては、日本に於ける資本主義の現在の發展段階を解剖し、これに對する無產階級の政治的鬪爭の戰術を論定し、後半に於ては、これに立脚した無產階級の當面の要求が箇條書きとして列擧せられてゐる。そこでこの後半の要求箇條が行動綱領であつて、前半は原則綱領かと云へば決してそうではなく、この二つの部分を合せて、初めて完全な形を備へた一つの行動綱領となるのである。

（四）無產政黨の性質と綱領の形式

日本の無產政黨が如何なる綱領を採用すべきかは、日本に於ける資本主義の現在の發達段階下に於いて、プロレタリアの現在の階級的成熟の狀態を以つて、無產政黨は如何なる任務を持つかといふ問題によつて決定せられるものである。この點について、私は大凡そ次の如き事柄を繰返したい。

第一　無產政黨の當面の任務

（一）都市プロレタリヤと農村に於けるプロレタリヤ的要素とを政治的に結合すること。

（二）組織せられたプロレタリアと未組織プロレタリア（日本の產業狀態では、多數の未組織のプロレタリアの殘ることを免れぬ）とを政治的に結合すること。

（三）准プロレタリア要素（或る程度までプロレタリアとの間に共通の利害を有す）を組織せられたプロレタリアの政治的指導の下におくこと。

（四）動搖不定な中間勢力の牽制。

（五）一切の反資本主義的勢力の上にプロレタリアの政治的指導の確立。

第二　無產政黨の構成要素

無產政黨の以上の任務は、その構成要素を次の如く決定する。

（一）組織された都市プロレタリア（工業勞働者）。

（二）農村に於ける組織されたプロレタリア的要素（小作農）。

（三）未組織プロレタリア及びプロレタリア的要素。

（四）階級的綱領をプロレタリアの政治的指導の下に來る准プロレタリア分子。

（五）その他の階級から脫落した若干の要素。

第三　無產政黨の性質

以上の諸要素のうちで、組織せられた都市プロレタリアと組織せられた農村のプロレタリア的要素とは、吾々の政黨のうちに主要な役割を持ち、また持たなければならぬ。小作農は典型的な小ブルジョアたる小自作農ではない。けれどもそれと同時に、小作農は標本的なプロレタリアたる近代的な工業勞働者ではない。日本の無產階級運動に於ける勞働者と農民との關係は、外國に於けるプロレタリアと小農業者との關係に均しいものではない。けれどもそれと同時に、この二つの階級は、異つた經濟の上に立つてゐることを忘れてはならぬ。プロレタリアの脚下には、近代的工業の基礎が橫はつてゐる。小作農の脚下には、小ブルジョア的な生產方法がかくれてゐる。吾々はこの差異を誇張してはならぬ。また之を過少視してはならぬ。

從つてこの二つの要素の結合こそ、吾々の政黨の性質の神髓である。この二つの要素が異つた經濟的基礎の上に立つてゐる範圍に於ては、我々の政黨は、この二つの要素の協同戰線の特殊な一形態なる性質を持つてゐる。

それと同時に我々の政黨は、一面に於ては組織せられた都市プロレタリアと組織せられた農村のプロレタリア的要素とか、都市と農村とに於ける勞働民の大衆を指導する、指導の一形態であると同時に、他の一面に於ては、すべて是等の要素――一切の反資本主義的勢力――をプロレタリアの政治的指導の下におく、指導の一形態である。

以上の如き無產政黨の當面の任務と構成要素とは、吾々の政黨の性質を次の如く決定する。即ち

(一)吾々の政黨は階級的の政黨である。それと同時に

(二)吾々の政黨は包容的な大衆的の政黨である。從つて

(三)吾々の政黨は、そのうちに二つ以上の要素を包容する。

即ちその內容は決して純一なものではない。從つて吾々の政黨が階級的政黨であるといふ時には、その意味は、共產黨がプロレタリアの階級的指導黨派であるといふ場合の意味とは同一でない。また同一であつてはならぬ。吾々の政黨は大衆的包容的の政黨であり、一切の反資本主義的勢力の間の、協同戰線の特殊な一形態である。

吾々の政黨の斯ような任務と、斯ような內容と、斯ような性質とは、最も根本的な原則綱領を採用することを、極めて困難ならしめる。從つて吾々の政黨は、行動綱領に一致點を見出すべきであると云ふことは、今日は大多數の意見であると云つてよい。そこで吾々の政黨は、無產階級的黨派の綱領の形態としては欠げてゐるにもせよ、行動上の綱領のみをもつて出發しな

けれぱならぬ。これは一面から見れば、止むを得ざる必要であり、同時に他の一面から見れば、無産政黨の當面の任務に適合した方法であると云ふことが出來る。たゞしこの場合にも、行動綱領といふ言葉の意味を、ことさらに要求條項の列擧といふ、極めて狭い形式に局限して考へることは誤つてゐる。行動綱領なる用語の本來の意味の範圍内に於ては、無産政黨の綱領は、その要求條項の基づく根據を示すことは望ましいことである。たゞこの範圍内に於てすらも一致點を見出し得ぬ場合に、吾々は初めて、單なる要求條項の列擧といふ形式を以つて滿足しなければならぬ。

（五）綱領の内容

以上は主として、吾々の政黨の綱領は、如何なる形態を取るべきかといふ問題に關聯してゐるが、綱領の形態は同時にその内容をも、或る程度まで限定したことになる。

吾々の政黨の行動綱領の内容について、恐らく大多數の人々の一致する考へは、『無産政黨の綱領中に掲げる要求條項は、無産階級の階級的立場に立つた要求でなければならぬ』といふことである。これについては恐らく何人にも異論はない。また異論があつてはならぬ。吾々の政黨が無産階級の階級的大衆政黨である限りは、この一點には、何人も一致しなければならぬ。また一致するに違ひない。若しこれに反對する者があるとしたならば、それは無産政黨と名づけるブルジョア政黨乃至は小ブルジョア政黨の別働隊を作らうとする人々だけである。

無産政黨がその綱領のうちに掲げる要求は、究極は、いづれも無産階級の政治上の要求ではあるが、その直接の影響が、政治的又は社會的なものと、經濟的なものとがある。從つてこれ等の要求は、便宜のために、無産階級の政治的要求と經濟的要求とに區別することが出來る（いふまでもなく、この區別は單なる取扱上の便宜のための、大體の區別である）。

無産政黨の主要任務に基づく當面の闘爭の目標は、政治上の方面では、主としてデモクラシーの略取であり、經濟上の方面では、主として資本の搾取に對する抗爭である。

無産政黨の主要任務は、資本主義の一切の勢力に對して、プロレタリアの指導の下に、一切の反資本主義的勢力を動員することである。然るに日本の資本主義は、（一）ブルジョア・デモクラシーの確立によつて、封建的勢力を打破して居らぬ。これに反して（二）帝國主義的反動期に入つた日本の資本主義は、封建的舊反動勢力をそのまゝ抱合して、自分自身のものとした。そこで資本主義に對する無産階級の政治上の闘爭は、勢ひこの

封建的・資本主義的反動主義に對する闘爭であつて、この闘爭は、デモクラシーの徹底の要求となつて現れねばならぬ。

デモクラシーの要求は、或る程度までは、小ブルジョア急進黨(日本には、今日までこの種の政黨はない)の綱領のうちにも掲げることが出來る。この範圍に於ては、吾々の政黨は小ブルジョア自由主義乃至は小ブルジョア急進主義の政黨であらうか。

この點については、私は曾て本誌六月號の『無產政黨の綱領問題』のうちにも言及したことがある。資本主義が帝國主義的反動期に入つた今日、特に封建的な舊反動勢力と資本主義の新反動勢力とが完全に抱合した日本に於ては、ブルジョアジーと小ブルジョアジーの階級には、最早やデモクラシーを徹底せしめる力がない。否な無產階級の壓迫なしには、デモクラシーを發達せしめる力すらもない。デモクラシーをその最後まで徹底せしめる要求は、最早やブルジョアの要求でも小ブルジョアの要求でもなくて、たゞ獨りプロレタリアの要求である。デモクラシーの徹底を以つてブルジョア自由主義の要求であるかの如く考へる錯覺こそ、日和見主義と階級協調主義との有ゆる錯覺に導びく泉源なのである。

そこで無產政黨の闘爭の目標は、封建的・資本主義的反動勢力に對する闘爭の方面——即ち政治上の方面——では、第一に、デモクラシーの徹底の要求を含まねばならぬ。

第二には、封建的社會制度の徹底的掃蕩の要求を含まねばならぬ。政治制度や政治機關のうちばかりでなく、吾々の社會生活と、社會制度のうちには、封建的勢力がより以上に根を張つてゐる。

第三には、軍國主義と軍國主義的施設、民衆の軍國主義化を目的とする一切の計畫に對する闘爭を含まねばならぬ。

第四には、資本家階級と地主階級との、階級的利害を擁護する一切の政策と施設に對する。抗爭を含まねばならぬ。

第五には、帝國主義的政策(特に殖民地、弱少民族)と帝國主義的戰爭に對する反對である。

ブルジョアジーの搾取に對する闘爭の方面——即ち經濟上の方面——では、第一に、產業上の要求を含まねばならぬ。このうちには、特に勞働階級に關した要求と、勞働者と共に、或る程度まで農民に共通する要求がある。

第二には、一般無產者(勞働者、農民、その他の分子)の經濟の利害に立脚した、社會的施設に對する要求を含まねばならぬ。

×　×　×

無産政黨の綱領の内容は、政黨問題の最も大きな難關と見做されてゐる。然るに最近、主要な團體で起草せられた草案を比較して見ると、少くとも重要な問題については、寧ろ豫期以上の一致點を見出すことが出來る尤もこれ等の草案は、政治研究會の草案を除くの外は、いづれも要求項目の列擧に止どまるものであるが、要求條項に於て、すでに此の程度の一致を見るとしたならば、少くとも行動綱領たる性質の範圍内に於て、これ等の要求の基づく根據を明かにする部分を綱領中に加へることも、必ずしも困難ではあるまいと思ふ。いま以上に述べた一般的な考へに照しつゝ、これ等の草案によつて、具體的な要求條項を比較して見ることは、一致點を見出すために、極めて有益であらうと思ふ。(こゝに比較に用ひる要求條項は、主要な四團體の草案であるが、これ等はいづれも決定的な成案ではなくて、尚ほ改訂を加へられつゝあるものである。從つて特に團體名を表はさないで、甲乙丙丁を以つて表はしておく)

(六) 政治上の要求

(一) 政治上の要求(封建的・資本主義的反動勢力に對する鬪爭、デモクラシー徹底の要求、封建的社會制度撤廢の要求、軍國主義的施設に對する鬪爭、ブルジョアジーの階級的利害を擁護する政策に對する抗爭、帝國主義的政策と帝國主義的戰爭に對する反對。

【第一項 政治制度に關する要求】

(甲) 元老、樞密院、貴族院、參謀本部、海軍々令部の廢止。

(乙) 同文。

(丙) 同文。

(丁) 貴族院、樞密院の廢止。

この項目については、『元老』を入れるか除くかといふ程度のこと以外には、あまり問題の餘地はない。但し後段に現はれる『軍事裁判及び憲兵の廢止』の要求と、警察制度改良の要求とは、本項に一括し、海軍々令部の次に『軍事裁判、憲兵制度、警視廳』を挿入した方が便利である。

【第二項 封建的社會制度の撤廢】

(乙) 華士族の廢止。

(丙) 華族制度の廢止。

封建的社會制度の遺物に對する鬪爭は、無産政黨の重要任務の一つである。この意味に於て、華士族制度以上に重大なるものは、婦人の隷屬的地位である。從つてこの項目の下には、婦人の隷屬的地位の撤廢を目的とする條項を加へる必要がある。

また殖民地民族並びに少數同胞の隷屬的地位の撤廢に關する要求も、この項目の下に一括することが便利である。これ等の問題に就ては、四草案中、たゞ乙案に『婦人の社會的地位の向上』の一項目あるのみであるが、この要求は、次の如く具體化しなければならぬ。(政治研究會婦人部の提案に基づく)。

第一には、『戸主制度の撤廢』である。自然的な家族生活とは全然離れて家なる觀念が認められ、戸主權がこれに伴ふてゐることは現實な家族生活の事實に反した最も根強い封建勢力の遺物であつて、婦人の社會的隷屬の泉源である。

第二には『既婚者と未婚者を問はず、法律上に於ける女子の無能力の撤廢。婚姻及び離婚に於ける男女の權利義務の平等。』である。

第三には、『全ての教育機關並びに公私の職業に對する女子及び殖民地民族の權利を、内地男子と同等ならしむること。』である。

第四には、無產階級婦人に對する最大の侮辱にして奴隷制度の遺物たる公娼制度の廢止、即ち『國家によつて賣淫を公認する一切の制度の撤廢』である。

【第三項　參政權の要求】

(甲)滿二十歲以上の男女の無制限選擧權及び被選擧權の獲得、大選擧區比例代表制の實施。

(乙)徹底的普通選擧(滿十八歲以上、選擧權被選擧權)。

(丙)滿十八歲以上の男女の選擧權、被選擧權の獲得。

(丁)選擧權の擴張(二十歲以上男女)。

この項目についても殆ど異論はない。問題は唯だ年齡であるが、大勢は恐らく十八歲になるだらう。

【第四項　言論、集會、結社等】

(甲)言論、出版、集會、結社の制限法令の撤廢。

(乙)言論、集會、結社の完全なる自由(治安警察法、新聞紙法、出版法、行制法の改廢)。

(丙)甲と同文。

(丁)言論、集會、結社の徹底的自由。

甲及び丙草案には別個の項目として、『罷業權及び示威運動の自由』が掲げてあるが、示威運動の自由が、當然この項目の下に收むべきである。

【第五項　暴壓法令の撤廢】

(甲)治安維持法の撤廢。

(乙)ナシ

(丙)治安維持法、治安警察法その他一切の暴壓法令の撤廢。

(丁) 治安維持法、治安警察法の撤廢。

この項目は前項と一括するにしても、又は別個の項目とするにしても、當然あるべき要求であつて、乙草案に見へないのは、恐らく偶然の脫漏であらう。尙ほこの項下には、農民運動に直接利害のある府縣令撤廢をも加へる必要がある。

【第六項　司法權、警察權】

(丙) 司法權及び警察權の侵害に對する國庫の即時賠償。

(丁) 司法制度並に警察制度の改良。

警察制度改善の第一着の具體的方法は、密偵政治の目的を以つて創設され、今尙ほ日本の政府機關のうちに奇異なる位置を占めてゐる警視廳の廢止である。

【第七項　組合の團結權及び罷業權の確立】

(甲) 勞働組合及び農民組合の組織及び活動の自由。

罷業及び示威運動の自由。(別項目)

(乙) 勞働者及び農民の團結權並に同盟罷業權の確立。

(丙) 勞働組合、小作人組合の自由。

罷業及び示威運動の自由。(別項目)

(丁) 團結權、罷業權の確立。

示威運動の自由を第三項に挿入すれば、本項からは刪除する。尙ほ甲案及び丙案の國際の部には、次の如き要求條項が掲げられてゐるが、これは團結權に關聯するものであるから、政治上の要求のうちに一括することが便利である。

(甲) 極東無產階級團結を阻害する一切の努力に對する抗爭。

(丙) 極東勞働者の團結を阻害する一切の努力に對する反對。

無產階級の國際的運動を阻害する諸勢力に對する反對。

無產階級運動の國際的團結は、日本に於ては事實上禁止せられてゐる。單なる國際的の聯絡關係よりも、頭から反對の一纒の如く取扱はれてゐる。この反動主義を打破つて國際的團結の自由を獲得せぬ限りは、日本の無產階級運動は世界的の水平線に進出することは出來ぬ。從つてこの要求は、當然掲げらるべき項目であるが、特に極東に限る必要はない。また極東と極東以外とを區別して、二つの項目を存する必要はない。

【第六項　兵卒の要求】

(甲) 在營年限の短縮、兵卒在營中の標準生活費支拂。

(丙) 一年兵役制の設定。

兵卒に對して服役中の標準生活費に相當する給料の支拂

(別項目)

戰死者廢兵並に徵兵より起る家族の經濟的窮迫に對する

國庫の保證。（別項目）

兵營內に於ける兵卒の奴隷的待遇の廢止（別項目）

軍隊內務書實施細則制定に關し兵卒參與權の獲得（別項目）

軍事裁判並びに憲兵の廢止（別項目）

兵營生活に關する兵卒及び青年の要求が多くの草案に現はれてゐなかつたことは、寧ろ不思議といふべきである。右の諸要求は四項目に整理することが便利である。即ち（一）在營年限短縮の要求、（二）軍事裁判、憲兵制度撤廢の要求、（三）兵卒に對する標準生活費乃至は勞働賃銀に相當する給料の支拂、家族に對する生活の保證、（四）兵營內に於ける市民權の伸張である。第四項を如何に言ひ表はすかは尙ほ研究の餘地がある。『奴隷的待遇の廢止』では、主として上官の横暴な行動を指すかのようで、やゝ消極的である。兵營も日本の版圖のうちである以上は、少くとも憲法によつて保障され、兵營外に於て一般市民の享有する一切の權利は、兵營內に於ても認められねばならぬ。そこでこの一項は、兵營內に於ける、市民どして當然享有する一切の權利の伸張を意味するように言ひ表はしたいと思ふ。また軍事裁判及び憲兵廢止は第一項に一括するが便利である。

【第六項　軍國主義化に對する鬪爭】

（甲）民衆を軍國主義化する一切の政策の撤廢。

（乙）軍國『主義的教育』方針の撤廢（教育制度根本改革中の（ロ））

（丙）民衆の軍國主義化反對。

その後、甲草案には、『青年團の官僚的支配の撤廢』なる一項目が追加されたといふことである。これは本項のうちに一括することが便利であらう。これに類する條項には、乙案の中に『軍政根本改革』がある。

【第七項　租稅制度】

（甲）相續、所得、財産稅に對する高度の累進賦課。

（乙）地租、所得稅、相續稅、登記稅、營業稅に對する高度の累進。

財産稅、奢侈稅創設。（別項目）

（丙）相續、所得、營業、財産稅に對する高度の累進賦課。

（丁）高率累進相續、所得、財産稅賦課。

【第八項　殖民地】

（甲）殖民地の解放。

（乙）殖民地の自治。

（丙）殖民地の解放。

（丁）殖民地の自治權獲得。

【第九項　弱小民族】

（甲）弱小民族に對する不平等條約の撤廢。

（丙）弱小民族に對する不平等條約、其他一切の帝國主義的暴壓の撤廢。

（丙）帝國主義的戰爭反對。

（七）

（二）産業上の要求（資本の搾取に對する鬪爭）

【第一項　産業管理權（コントロール）の獲得】

（甲）勞働者經營委員會による公私企業監督制の實施。

（乙）勞働者の産業管理權獲得。

（丙）産業監督權の獲得（經營委員會）。
官公營産業に對して勞働者による監督の即時實施。
【別項目】

（丁）産業民主制度の獲得。

この項目も異論の起る餘地がない。たゞ問題となるのは文字についてゞある。四つの草案は多少言ひ表はしは異つてゐるが、いづれも從來『産業管理權』と云はれてゐるものゝ獲得に外ならぬ。産業管理の『管理』とは、恐らくコントロールの譯語であつて、必ずしも勞働者が、資本家の手から企業の管理經營の全權を奪取するといふ意味ではない。普通に要求せられてゐる産業の『管理權（コントロール）』とは勞働者が、原料や燃料の買入から、製品の販賣に至るまでの有ゆる過程について、企業の經營狀態を監査する權利を指すものであつて、決して勞働者が、企業の經營に對して管理の責任、乃至は監督の責任を負ふものではないのである。外國殊に米國では、産業民主々義の美名の下に、企業の經營に對して勞働者に多少の（有名無實の）發言權を與へ、從つて勞働者に或る程度の責任を分擔せしめることにより勞資協調の實蹟を擧げる計畫が行はれてゐる。そこでこの要求項目について最も大切なことは、吾々の要求する産業の『監督』または『管理』なるものは、資本制度下に於いて資本家と共に企業經營の管理（乃至は監督）の責任を分擔する意味でないことを明確にし、資本家階級の斯ような奸策を容れる寸毫の餘地なからしめることとである。これを『管理權』と云ふか『監督權』と云ふか、『監査權』といふか、それとも其の他の言葉を用ひるかは第二義的の問題ではあるが、これを好機會として、譯語を一定しておくことは必要である。また丙案の條項の如く、官公營事業に對しては、特に監督權確立の必要あることは無論であつて、これは同一項目に一括するが便利であらう。

【第二項　八時間勞働制の確立】

（甲）八時間勞働（一週四十四時間）の確立。
（乙）八時間勞働の確立。
（丙）甲と同文。
（丁）乙と同文。

【第三項　最少限賃銀制の實施】

（甲）標準生活賃銀制の實施。
（乙）無産階級の最低生活保證。
　　最低賃銀の確立。（別項目）
（丙）標準生活賃銀制の獲得。
（丁）最低賃銀法の制定。

云ふまでもなく前項と本項との間には、不可分の關係がある。如何なる場合にも、標準的の生活を保障する賃銀の最少限度が法定されてゐないでは、八時間勞働制は殆んど無意義に近いものとなる。乙案の『無産階級の最低生活保證』は、失業、廢疾、老幼、母親等に對する標準生活の保證によつて、おのずから不用となる。

云ふまでもないが、標準生活賃銀（即ち最低賃銀）の額は、男女共通でなければならぬ。また殖民地民族と内地人との間にも共通でなければならぬ。『同一勞働に對する男女同一の賃銀率』といふ要求は、各國勞働運動の多年の要求であるが、決して實現せられて居らぬ。また女子の生活費は一般に男子以下に見積られてゐる。例へば英國の失業保險にしても、女子に對する手當は男子よりも少なく、子供との中間になつてゐる。特に日本の如き婦人勞働が近代工業勞働者の一大多數を占めてゐる狀態の下にあつては、同一勞働に對する男女賃銀率に開きのあることは、獨り婦人の利害問題ではなくて、男子勞働者に取つての致命的な問題である。從つて無産政黨の産業上の要求のうちには、これを原則的に（即ち標準生活賃銀、同一勞働に對する賃銀、その他すべての場合に通ずる）要求した一條項を加へるか、さもなくば、標準生活賃銀の要求條項に、特にこの意味を明記する必要がある。標準生活賃銀の場合に男女共通の原則が明記せられて居れば、その他の場合は、勢ひ之によつて徃せられるからである。

殖民地の民族についても、同一であつて、殖民地民族と内地人との間に、同一勞働に對する賃銀の異つてゐることは事實であつて、この差別は、今后資本家階級によつて色々に利用せられるに違ひない。就中、兩者の階級的團結を阻止する手配に供せられるに違ひない。現在では、少くとも階級意識のある組織勞働者の間では、この心配はないかのやうである。けれども―

一否それ故に——今日に於いて、兩者の間の同等賃銀率の原則を主張しておくことが必要である。殖民地民族の場合も、婦人と共に、原則的にこれを要求した條項を加へるか、又は最も基本的な場合である標準生活賃銀率の場合にこの原則を明かにして、其他の場合に對する基準を示しておくことが必要である。

【第四項　團體契約權の獲得】

(甲)　團體協約權の獲得。

(丙)　同文。

團體協約權の公認は、組合の公認と關聯するものであつて、現に社會局の組合法案には、或る程度に團體協約が認めてある。從つてこの要求の意味は、組合の團體交渉權を法律によつて確認せしめる意味だとすれば、團結權の項目と並べるのが適當である。

【第五項　勞働制度】

(甲)　勞働請負制度、徒弟制度、その他封建的勞働制度、並に危險非衛生なる設備の廢止。

(乙)　工場法、鑛業法、海員法改正。

(丙)　人身賣買、親方制度、その他野蠻なる勞働制度、劣惡なる並に危險非衛生なる設備の撤廢。

(丁)　勞働災害保障及び豫防の完備。

乙案は言ひ表はし方は違ふが、内容はほゞ同一事實に附着するものであらう。尚ほ撤廢を要求すべき制度の一つとして、寄宿舍制度を加へる必要がある。現在の寄宿舍制度の存續する限りは、日本に於ける最も大規模な近代工業に於ける組合運動の發達は望まれぬ。

【第六項　幼少年及び婦人勞働の保護】

(乙)　幼年勞働の禁止。

(丙)　滿十四才以下の幼年雇傭の禁止。

(甲)　滿十八才以下の少年勞働者の六時間勞働の確立。

(丙)　滿十八才以下の青年勞働者六時間勞働（一週三十時間）の確立。

(乙)　婦人勞働者の夜業及び坑内勞働の禁止。

(丙)　婦人及び滿十八才以下の青年の殘業、夜業危險作業の禁止。

(丁)　少年婦人勞働保護。

この條項も異論の餘地のないものであつて、十四歳以下の幼年の雇傭禁止は、國際勞働會議を通過はしてゐるが、尚ほ要求の必要がある。十八才以下の少年勞働については、丙案の六時間一週三十時間の要求を採用し、婦人及び滿十八才以下の少年

の殘業、夜業、危險作業の禁止については、乙案を參酌して『坑內勞働』の一句を丙案に挿入して一層明白にしたい。

【第七項　母性保護の要求】

(甲) 分娩前後八週間の休養及びその期間の賃銀全額支拂。

(丙) 婦人勞働者の分娩期に於ける十八週間の休養及び賃銀全額支拂。

この項目に關聯して必ず採用せらるべき要求條項は、(一)乳兒を有する母親に對する授乳時間(三時間每に三十分)の法定と設備、(二)幼兒を有する母親に對する標準生活費の國庫支給である。母性保護の要求は、工場及農村の勞働婦人ばかりでなく、すべての職業婦人に通ずるものである。また是等の要求のうちには、必ずしも產業上の要求とは云はれぬものがある。從つてこれは母性保護といふ獨立の一項目の下に一括して、『社會的施設に對する要求』のうちに編入するか、さもなくば、關係のあるそれ〲の項目の下に、別々に分類しなければならぬ。

【第八項　失業、傷害その他の保障】

(甲) 資本家負擔の失業保險。

職業病及び傷害の國庫保障。(別項目)

(乙) 失業、傷害、養老、廢疾の保險制の確立。

(丙) 資本家の全負擔による失業中の標準生活費の支拂。

職業病及び傷害の賠償に對する國家の保證。(別項目)

(丁) 失業救濟並に失業保險の制定。

職業病の補償制度の制定。

この項目もまた、四つの草案の間に一致がある。たゞこの要求項目について大切なことは、資本家及び政府の全負擔によることを明確にすることである。失業、傷害、職業病等は資本主義の必然の結果であつて、之に對する全負擔は、資本家及びこれを支持する政府の出費として、當然資本家階級の收得する利潤のうちから差引かるべきものである。資本家と政府と勞働者との掛金による保險制度の如きは、資本家の食つた料理屋の勘定を、勞働者に割り附ける奸策であつて、その結果は、賃銀の減額を意味するものである。

【第九項　勞働市場の統制】

(乙) 職業紹介機關の勞働組合管理。

(丙) 勞働組合による職業紹介機關の管理。

(八)

(三) 農民の要求。

【第一項　土地に對する要求】

(甲) 耕作權の確立。

(乙) 同文。

(丙) 同文。

(丁) 同文。

丙案には、別に『耕作者の土地管理權の獲得』といふ一項目があるが、耕作權が確立せらるれば、土地は事實上その使用者たる耕作者が管理(或る意味に於て)してゐるものであつて、勞働者の場合に於ける『産業管理權(コントロール)』といふ場合の管理權は必要がない。從つてこの場合の『管理權』とは、かの伏石事件で問題となつた場合の『管理權』と思はれるが、暫らく疑を存しておく。これについても、用語一定の必要が感ぜられる。

【第二項 土地改良の要求】

(甲) 土地改良の國庫負擔。

(丙) 土地改良に對する耕作者の共同管理權の獲得、並に耕作者管理權を伴ふ土地改良の國庫負擔。

日本農民組合の私案にも、土地改良の國庫負擔といふ一項目があつたが、削除せられたと聞いてゐる。若し本項の意味が、單に國庫の負擔によつて土地の改良事業を行ふといふことなら、この利益は地主の利益である。寧ろ地主の土地に耕作者の加へた改良に對して、耕作者の權利を主張すべきである。けれども此の條項は恐らく別樣の意味であらうと思ふが、疑を存しておく。

【第三項 肥料、農具に關する資本の搾取】

(甲) 肥料及び農具の公營。

(乙) ナシ

(丙) 肥料及び農機具の販賣及び購買に對する耕作者の管理權の獲得。

(丁) 肥料農具の國營。

肥料及び農具の生産と販賣とが、個々の資本家や商人の手に分散してゐるのでは、耕作者が何等かの統制を行ふことは不可能である。そこで丙案も、恐らく肥料及び農具の國營を前提とするものと思はれる。肥料及び農具の價格を統制し、これ等の資本家から農民を保護する方法は、これを國營に移すか、それとも價格を公定する外はない。耕作者がその統制に參與することの難易といふ點のみでは、寧ろ價格の公定の場合の方が容易ではないかと思ふが、この點も疑ひを殘しておく。

【第四項 其他の要求】

(丁) 重要農産物專賣。

(丁) 農業保險國家經營。

重要農産物の國家專賣は、市價の亂高下を緩和する効果があ

る。けれどもこの結果、農民がどれだけの利益を受けるかは疑はしい。若しこの條項の目的が、主要農產物の市價を、農民に有利に統制することにあるならば、恐らくは失望するに違ひない。私は或る綱領私案のうちに（正確な文句は忘れたが）、地主本位ならざる米價の維持といふ一項目を見たことがある。けれども小作人よりも、地主の方がより多くの賣るべき米を持つてゐることが動すべからざる事實である以上は、苟も米價に影響を與へる政策は、農民よりも地主に多くの利害關係を持つ政策であつて、地主本位ならざる米價の維持はあり得ない。從つて農民の階級的利害を擁護するためには、之に代はるべき適切な政策を考へねばならぬ。

農產物保險についても、ほゞ同じことを云ふことが出來る。少くとも米のみに就いて云へば、保險によつて直接の利益を受けるものは農民である。けれども農民の作つた米の大部分を收得するものが地主である以上は、農民は自分の名儀で、地主のために保險をつけることになる。言葉を換へて云へば、農民は兇作の場合にも、地主に小作料を保證するために、保險の掛金をすることになる。そこで保險に類する方法によつて、農民を兇作から保護する制度を設ける場合には（一）その掛金は地主と政府の分擔たるべきこと、（二）保險の程度は、農民に標準生活費を支給する程度であつて、地主のために小作料を保證する程度に及ばざること、（三）またこの場合には、農民は當然、小作料を免除せられねばならぬ。この場合、地主も亦た小作料を保障する必要があると思ふなら、地主は勝手に、地主ばかりで、斯ような場合に對する保險制度を設くべきである。農民が地主のために、兇作の場合の小作料を保證する制度を要求する謂はれはない。

（九）

（四）**社會的施設の要求**

【第一項　保健上の要求】

（甲）保健、衞生、診療の國庫負擔。

（乙）ナシ

（丙）國庫負擔による無產者の保健衞生の保障。

（丁）保險、衞生事業の國營。

【第二項　生活權保證の要求】

（甲）無產者老幼及廢疾者扶養の國庫負擔。

（乙）失業、傷害、養老、廢疾の保險制度の確立。

（丙）無產者の老幼及び廢疾者扶養の國庫負擔。

（丁）老幼廢疾者の國庫扶養。

この項目中、失業及び傷害については、產業上の要求項目に一括するが便利である。また必ずしも保險制度と限定する必要はない。尙ほこの項目中に必ず加へねばならぬものは、『幼兒を持つ無產の母親』である。

【第三項　敎育上の要求】

(甲)　無產者義務敎育期間中の一切の費用の國庫負擔。

(乙)　敎育制度の根本改革。(1)義務敎育年限の延長並に費用の國庫負擔。

(丙)　甲と同文。

(丁)　義務敎育制度の完成及び國庫負擔。無產者敎育、職業敎育の完成。(別項目)

【第四項　住宅問題】

(丙)　勞働者小作人住宅の資本家地主負擔、並にその管理權の獲得。

(丁)　住宅の公共管理。

(十)

以上により、四つの草案に含まれてゐる要求條項の大部分が盡されてゐる。尤も排列の順序は、大體草案を基礎として他の三草案中から共通の條項を拾ひ出した關係上、ほゞその排列順序になつて居り、尙ほ多少の整理を加へる餘地がある。(分類は主として說明の便宜のためであつて、必ずしも綱領中に於ける排列を示したものではない。)

然るに以上の外に、四つの草案のいづれにも共通せぬ若干の條項が殘つてゐる。尤もそのうちの幾つかは、他の條項に關聯して、それ〲の場合に揭出したが、揭出の機會のなかつた條項は次の通りである。

(乙)　產業組合の無產階級化。

(丁)　土地國有。

電力國營。

產業組合貿易の確立。

中央銀行の國營。

庶民銀行の普及。

軍備の縮少。

移民政策の確立。

右のうちで最も重要であり、從つて最も問題となるのは土地國有である。土地國有の要求そのものが、立派な無產階級的要求であるといふことには、恐らく何人にも異論はないが、それと同時に、或る方法による土地國有は却つて地主の救濟となり地主の要求となるといふことも爭はれぬ。現に地主の間でも土地國有論が起りかけてゐる。そこで若しこの要求條項を揭げる

とすれば、明白に無產階級的な性質を表示さるように限定することは、絶對に必要である。

また生產手段としての土地の國有を揭げるとすれば、工業の方面では、獨り電力に限らず、少くとも主要工業の國有を揭げるのが妥當である。然るに工業の場合にも、或る方法による主要工業の國有化は、却つて資本家の救濟となり、資本家的要求となる。從つてこの場合にも、無產階級的要求たる性質を明かにすることが均しく必要である。ところが之は必ずしも容易でない。そこで差當り、農民の方面では耕作權確立の要求、勞働者の方面では產業監督權乃至は監査權確立の要求に止どめることが、却つて有利であらうといふ主張には、相當の理由がある。これが他の三つの草案に、この一條項が現はれて居らぬ理由であらうと思ふ。いづれにせよ、土地にしても主要工業にしても、國有の要求を揭げるとすれば、農民及び勞働者の監督權を伴はねばならぬ。

×　　×　　×

以上のうちには、削除せらるるものがあるであらうと同時に、尚ほ挿入しなければならぬ多少の條項があるだらう。これはその他の團體の草案によつて補足せられるとゝ思ふが、こゝに比較した主要な四團體の草案によつて、ほゞその他の草案をも想像するとが出來る。これ等の要求條項によつて吾々の知り得ることは、第一には、全國の組織された勞働者と農民とが要求し、そして吾々全無產者のために用意しつゝある政黨は、日本の現在の形勢が必要としてゐる程度に於いて、充分に無產階級黨たる性質を備へてゐるものだといふことである。第二には、少くとも組織された勞働者と農民とを代表する意見の間には、大なる相異を見出さぬといふことである。勞働者と農民との間にも、また最も多く意見の相異を氣遣はれてゐた勞働團體の間には、少くともこの綱領草案に現はれた範圍に於ては、大なる意見の相異がない。これは吾々の無產政黨が、無產階級の協同の戰線の特殊な一形態として、基礎の鞏固なことを示したものである。

第三には、具體的要求の條項に於いて、討議以前に於て既にこの程度の一致を現はしてゐるとしたならば、この具體的要求を綜合して、當面の行動の原則を引き出すことも、必ずしも望み得ぬことではないと云ふことである。これは無產政黨が、いはゆる原則綱領を採用すべしと云ふ新しい提議でないことは云ふまでもない。無產政黨の綱領は、行動綱領に限るといふことを既定の問題としても、その行動綱領は如何なる形態を取るべきかといふ問題が殘つてゐる。意見の一致が困難な場合には、最低限度の基礎の上にも協同戰線を實現することも止むを得ぬ。けれども意見の一致が望み得られる範圍内に於ては、出來得る限り明確な、そして出來得る限り廣い一致點を基礎として、その上に一層鞏固な協同戰線を實現することは、實に望ましいことである。そして之が近く開かるべき無產政黨創立準備委員會の主要な任務である。(九月九日)

現代に於ける自我問題の一面

錦田義富

一

暫らくカントの範疇表に從ひ量の上よりして見る時、自我の問題には『一』『多』『總』の三方面或は三階段を區別することが出來るであらう。玆に自我問題の一面と限定したのは、『一』即ち個人我の方面を主にして、自我に就て若干の考察をして見ようと云ふのである。コーヘンの力説する通り、『一』は『多』に含まれ『多』の中の『一』として初めて其存在を確保し、更に『多』は進展して『總』となり之に攝取されて玆に『多』たるの意義を完うする、純粹意志の對象としての自覺、眞の自我(das Selbst)は『吾』と『汝』との結合統一でなくてはならぬ。即ち『總』我或は全體我に於て自我の本質が顯揚される。斯の如き考方からは個人我の方面は自我問題中最も輕意義の一面とも見られるであらう、

コーヘンは個々人個人我は夫れだけの立場に於て考へられる限り未だ眞の人間又は自我の問題を構成するもので無いと言つて居る。然し具體的に直接吾々の知る處の人若くは自我は個々の人個々の自我であり、『吾』と『汝』との統一である純我の意味も結局は現實の個人我の上に實現されるので無ければ空名に終る外ないのであるから、個人我具體我は自我問題の出發點であると共に其歸着點をなすとも云へるであらう。

次に現代に於けると限定したからには、自我問題――嚴密に言はゞ個人我の問題を歴史的・發展的に考察すべきこと勿論である。過去を背負はぬ現在、前代と切離しての現代を論ずることは無意義である。『現代』と一つの時間的全體を劃し、其時間内容をなすものとして個人我の問題を取扱はうとする時、必然前代に於ける個人我の問題と對立連關に於て、之を考察しなければならぬ。左うしなければ此問題の現代に於ける意義が判明しないであらう、然し特に現代と限つて一定の文化問題を考察する場合には、單なる歴史的敍述だけでは滿足されない或種の要求が背後に動いて居ると思ふ。現在の文化内容を關心の對象とするものは、夫れが背負ふ處の過去を振返ると共に、夫れが孕む處の未來を想望しなければならぬ、即ち豫料の立場に立たねばならぬ。

豫料の立場は具體的時間の立場である。純粹意志の立場である。當爲に於て現在は未來を孕む、否、未來との關係に於て現在の意義を定まるのである。現代に於ける自我問題の考察は、歴史的關心と共に體系的關心にも動かされる人の試みる處である。過去を背負い未來を孕むものとしての現代文化の考察は、現實自然を超越する當爲課題の見地に於て初めて可能である。玆では歴史的と體系的とが不可分離のものとなる。

夫れでは現代の境界は如何にして如何樣に定めるか。嚴密に言へば直下の一刹那も之を現在と意識する時、夫れは既に過ぎ去つたものとも見られるであらう。斯くて現在とは、たとひ時間系列成立に不可缺の項であるにしても、丁度數

理上の零に等しく全く空虚無内容となるであらう。之に反してベルグソンの説く如く活き活きした統一的關心圏内に持ち來されるものは凡て現在となると考へれば、現在は如何程でも過去を包攝し不定限に擴大し得るでもあらう。特定の文化内容に就て其現代的意義を問題にする時には、當該文化に就て現實に比較的一般共通に承認されて居る課題目標があり其實現が現に努力されて居ると見られ、此現實の課題承認・實現努力は時間上夫れに先立つ所謂前代の當該文化課題承認・實現努力と内面的連續の上に立ち、而も之れと明らかに區別し得る特色を持つと考へられねばならぬ。課題の認められぬ處に文化は無く、前代の課題と内面的に連關し而も夫れとは異別し得る課題が無ければ現代の文化とは言はれない。一定文化問題に就ての現代の境界は前代の文化課題と一貫的にして而も異別し得る現在の文化課題の認定に基いて玆に初めて統一的に劃するとが出來るであらう。

主題として居る個人我の問題に於て、依つて以て現代を前代と區別するに足る共通課題は果して如何なるものであらうか。之に對しては研究者の立場や關心方向の異るに從つて種々の見解が樹て得ることであらう。然し最も根本的な解釋は、結局自己の哲學體系に俟つ外は無い。體系への強い要求は持てど未だ其確立も基礎附も充分には出來上つて居ない私共に許された途は、文化の自覺としての哲學の歴史及び一般文化史を手がかりにして一種の假説を提供することであらう。さて近世初頭以來自我の自由解放が一つの大な主目標となつて居たことは周知の通りであるが、此自由解放運動には陰翳が伴つて居た。束縛傳統から放たれたる自我が翻つて自己の裡に發見したものは自我の空虚乃至其崩壞であつた。解放と之を裏附ける崩壞とは原理的には第十八世紀で終結を告げ、第十九世紀から今日に至る迄の新なる努力の標的は、自我の再建、人格の創造にあると思はれる。再言すれば、個人我の問題に於て現在の共通課題として承認され其實現の努力されつゝあるのは自我の再建充實であり、此課題は前代の課題であつた自我解放夫れを裏附ける自我崩壞

と内面的に連關し而も夫れと異る特色を有して居ると見られる。斯くして玆に現代とは第十九世紀以來現今に至る迄を包括し、前代とは文藝復興期以來第十八世紀末迄を指すことになる。問題の範圍の廣汎、内容の重要、固より一短文のよく所理し得る處ではない。唯此假説の意味解明の一助ともならば幸である。

二

フリドリッヒ・シュレーゲルが相並んであらはれた三つの劃期的な運動だと評した夫の佛蘭西革命、ゲーテの詩、カントの哲學によつて、一方近世初頭以來の自我解放運動は原理上終結させられたと共に、他方新課題の提出に基く新運動が喚起され、玆に現代の自我問題を形成するに至つた。現代を理解する豫備條件として前代の自我解放運動を一應概觀する必要がある。重ねて思ふに、自我解放運動考察の意義は單に現代自我問題考察の豫件と云ふだけに悉されては居ない。現代の境界内に含まれると見做される第十九世紀に於ても、否今日も自我解放の運動は諸種の方面に種々の形をとつてあらはれ居る。之れ抑も所以あることで、上記の三代表運動によつて自我の解放が完結したのは原理上の話である。文化理想として當然のことと事實上一般に承認を受けはしたが、夫れが現實有ゆる方面に實現され悉くす迄には多大の距りがある。我國のみならず歐米諸國でも、今日と雖も否今後とても猶長く或方面或分野に於ては依然として第十七八世紀流の自由解放運動が繰返されることであらう。イプセンのブラントの精神は愈々廣く浸潤して行くことであらう。

Eins begehrt ein Mann allein:
Bahn frei, ganz er selbst zu sein, ——

服從强制を厭ひ自主獨立を悦ぶ精神は敢て近代人に特有のものとは言はれぬ、恐らく人間一般の性向と見ても差支ないかも知れぬ。アダム、イヴ、プロメトイスの傳說は會々人間本來の自由精神の反抗的側面を象徴するものとも見得るであらう　然し長い中世紀を通じて、此人間自然の性向は罪なもの抑壓すべきものと一般に考へられ、傳來の慣習規約には異議なく服從するのが無條件的に善なことと見做されて居た。近代人は之れに反して人性の自然を肯定是認し、服從も其意味を反省し自由意志に基いての服從で無ければ決して正しとは認めない。否寧ろ近代人にとつては服從とか義務と云ふ事其物が何となしに嫌惡の情を起し反抗心を喚る傾向さへある。

Und wenn Dir einst von Sohnespflicht,
mein Sohn, Dein alter Vater spricht,
gehorch ihm nicht, gehorch ihm nicht! ——

Richard Dehmel.

有ゆる外的束縛をかなぐり捨てて只管自己の內的權威自由意志の上に立つと云ふことは一應是認せらる可き理想であるに相違無い。然し此解放を遂行せしめる自由精神が、自己の裡より新に積極的組織を産み出す建設的精神で無い時には、自我は解放されて却つて空虛となり、更に一層進んでは當の自我其者が分散破滅し依つて立つべき地盤を失ふ恐れがある。第十七八世紀に於て一般の文化理想として承認される樣になつた自由精神には、其輝かしい半面に斯樣な暗影を伴つて居た。其自由は動もすれば單なる消極的自由、即ち破邪折伏の力として働く場合が多かつた。斯くて自己解放の刃が自己破滅の刃ともなり、獨立自主となつた筈の自我が實は分散崩壞し去つたのを發見したことも稀ではなかつた。而して此自由を確保すると共に崩壞を免れ、消極的自由を積極的自由に轉成する處に、自我再建の新課題が生れて

來る。此課題の承認と實現の努力とに、前代人と區別しての現代人の本質が横はつて居る。

之れから人間精神活動の主なる方面に就て、自我解放運動が如何なる姿をとつて行はれたか如何なる傾向に於て發展したかを概觀して見よう。

先づ宗教の方面に就て見るに、ルターの名によつて代表される宗教改革が近世自我解放運動中最も光彩あるものの一つであつたことは事新しく言ふ迄もない。基督教本來の面目より云へば、個我と神との直接關係を中核とすべきで其間必ずしも外的媒介者を要しない筈であるにも拘らず、中世カトリック教會の發達し教權萬能の勢をなすや、法王、僧侶、教會の如き外的權威者が神人の仲介者たるに止まらず、更に進みて神人關係の裁斷者決定者たるの力を揮る樣になつた。斯くの如き外的權威の拘束強制から解放され、神人直接關係を恢復しようとする要求が、良心の自由信仰の自由を叫ぶ聲となり、クリストに還れ、バイブルに還れの呼び聲となつて發現したのである。近世初頭の宗教的解放運動には樣々なモテイーフ或は傾向が結合して働いて居たのであるが、其中には後發達した姿に於て正反對の運動となつて現はれ來るべき二種の傾向が含まれて居た。主理的傾向と神秘的傾向とが即ち夫れである。ルター、カルヴイン、ツヰングリ等の改革運動に於て理知が夫れ夫れ重要の役目を演じたことは今更言を俟たぬが、唯彼等にあつては決して單なる理知——分析的理性が最後の審判者であつたのではなかつた。深い情意的體驗直接自證が其究竟の據所となつて居た(例へばルターの神秘主義的傾向に見る如く)。然し理性も之れと抱合して宗教改革の力強い運動を助けたことも疑無い。然るに理性が主として分析的理知として働く時には、夫は信仰に對して常に必ずしも從屬乃至融和的關係に立つとは限らない。寧ろ之れに對抗し獨立的位置を要求するのが本來の傾向である。加ふるに其自然研究に適用されての華々しき成功は理知の優越を自負せしめるに充分であつた。斯くて理知は漸次信仰に對して優越的位置を占め終には神人關係の最後の決

定者たる資格をとる様になつた。斯くては宗教上の解放は宗教からの解放の傾向に進み、終に宗教其者の否定に終結する。第十八世紀英佛に盛えた理神論、夫れから無神論への推移は正しく此傾向を示すものである。傳統に捉はれず外的權威に反抗する點に於て理知と握手し抱合して宗教改革の原動力となつたものに神秘的傾向がある。宗教の純化、信仰の内面化は主として此神秘主義に負ふ處のものであらう。然し神秘主義は分析的理性を至上とする主理主義とは本來獨立のもので之れを離れ之れに反抗して獨立の存續發展を遂げる可能性を有する。「Dein Wille geschehe」と祈る絶對歸依、神人直接融合の境界を想望憧憬する神秘主義は、恐らく個人我の立場に於て最も純なる宗教生活を表現するものであらう。宗教からの解放で無く、宗教に於ける解放は之を以つて究竟とする。茲では有ゆる矛盾乖離が融解され、理想即現實、現實即理想、義務と權利との歸一が體驗されるであらう。要之に、近世初頭の宗教上の自我解放運動からは、宗教からの解放と宗教に於ける解放との二つの正反對な傾向が發展して來たことを注意すべきである。

教權萬能の中世紀に於て道徳が如何に外面化したかを象徴するものに恐らく決疑法の發達と免罪符の賣買とであらう。傳承習慣の無反省的承認、外的制度組織への沒批判的服從が一般の風をなした。内なるものの價値に目醒めた近代精神が道徳の分野に於ても亦、其内面化自律化を要求したのは當然であつた。教權道徳に對抗してストア倫理の復活が企てられ、不合理なる強制に對して懷疑的批判が試みられ、更に積極的には人性論研究（Anthropologie）の勃興となり、道徳が決して外よりの強制命令に基くもので無く、人性の自然に根ざす所以を闡明せんと力めた。第十七八世紀に榮えた人性論は單に精神に對する純心理學的關心からばかりに行はれたものでなく、更に遙に又廣く道徳的關心にも基いて研究されたのである。然し此の道徳の内面化も又嚴に宗教に於て見た如き相反對する二つの方向をとつて開展する可能性を包藏して居た。之れ人性の自然に基礎附けられる所謂道徳の内面化は人性の如何なる方面又は樣相に重點が置かれるかによつて異る解釋を容れ得るからである。刹那に變轉する衝動欲望に有りの儘なる人間性を見んとするものにとつて

は、道德は稍々假面を被れる利己心、個人的氣隨が義務當爲に代るものとなる。"Alles ist erlaubt." 正邪善惡の差別の排拭、其終結は道德からの解放人倫否定である。之れに反して道德の本質の恣意氣隨を許さぬ客觀的秩序に存することを信ずる人が其内面化人性化を試みる時は、吾心の裡に何等かの意味で個人的者を超越する精神活動を發見し來り、之を以つて眞の吾が面目となし、道德の根源を玆に求めようとする。シャフツベリーやバトラーに見る道德人性化は此意味で道德に於ける解放運動の一線を進んで居るのである。而して此方向を其最後迄押進めたのがカントの自律說である。

信仰の自由、良心の自由、ともに外よりの強制拘束を退けて自己内心の判斷を最后の訟庭となさんことを要求するもの、此意味に於て判斷の自由が宗教及び道德上の解放運動の前提をなして居ると云ひ得る。判斷の自由に、基く認識の解放は實に近世自我解放運動の最も有力なる原動力となり又最も光彩ある業蹟を擧げた。古來の傳承とか他人の意見とか凡てイドラを捨てゝ只管事實の眞に從ひ當體其儘を正視しようとするのが認識の本質でもあるし、又近世初頭の學者達の目ざした處でもあつた。ケプレル、ガリレイ、ベーコン、デカルトの仕事は皆此認識解放の精神に氣呵され又よく之を體現したものである。認識解放は對象への絶對服從によつて達せられる。權威や證言は事の實相に適合する限り採用されるが、獨し最后の標準は實相何者である。餘處からの附加物は凡て排斥せねばならぬが、對象其物には無條件に從はねばならぬ。自然に從ふことによつて自然を知るとは此謂である。玆には沒我的態度が要求される。眞理は時處を超越するが同時に個性をも超越する。個我の個我たる特殊性を捨て、個人的なる願望好惡の情念を離れ、只管對象に我を沒入し去る時、對象は初めて眞正に認識される。認識に於ける解放は斯くして一方認識對象――或は認識規範――への絶對服從と他方自我の特殊性(個性)の全的放拋によつて初めて徹底的に行はれる。個人我が認識の方面に於て解放を求めれば、個我を捨てゝ超個人我となつて働かねばならぬ。即ち我を物に從へねばならぬ。斯くて認識上の解放は

或意味で吾自由の拘束を要求する。然るに認識作用は決して自我活動の全體ではない。眞理至上、事實第一主義は生命我、具體我をば其一部分の活動たるに過ぎぬ認識理知の奴隷たらしめんとするものである。斯くて情意至上のルソーが理知への抗議となり、更に進んでは „Das sind noch lange keine freien Geister: denn sie glauben noch an die Wahrheit." てふニーチエの眞理への抗議認識規範からの解放が稱へられるに至つた。認識に於ける解放の窮まる處個人我の滅却にありとすれば、認識規範からの解放の赴く處は、自我統一の喪失であると言ふことも出來るであらう。

三

明暗相伴ひ禍福相表裏するとは言ひ乍ら、認識、道徳、宗教この三つの本質的方面に於て、自我は中世教權の支配を脱して自由の天地に立つた。而して此偉大なる解放運動を成就せしめるに當つて最も有力な武器となつたものは分析であつたと思ふ。先づ認識の方面に就て見るに、ケプレル、ガレリイに創まる精密自然科學の目醒しき發展は、既に早くガレリイの說いた如く、觀察實驗と數量的測定との併用に基く。複雜多樣の現象を出來るだけ少數の固定不變なる同質的要素に分解還元し、其等要素間に一般的關係を設定し、出來得べくんば之を數學的方程式に表現する。茲には對象固定、量的還元の悟性的分解力が無制限に働かされねばならぬ。次に道徳宗教の內面化自律化に就て見るに、此際最後の所依なるものは自證境內の事實である。而して心根の純潔道念の確固たらんことを求めること強ければ強い程、自己沈潜愈々深く自己省察益々精しからざるを得ない。茲にも一種細やかな分析が行はれる。此情念分析が彼等の信念に有力なる支持を與へる。スピノーザやシャフツベリーの情念分析の或は嚴正或は精緻なるを見よ。又第十八世紀に於ける宗教解放運動の代表者と見做し得べき夫の敬虔派の人達の病的と思れる迄に鋭く細やかな自己認識自己解剖を見よ。微

妙なる魂の揺めき、瞬時なる欲念の動き、之を捉へ之を剖きて一點の汚染をも看過せざらんとする。外に向つて戦ふ確信の力は内に向けられた自己省察の深さに依つて培はれねばならぬ。道德宗教の解放も斯くして分析に倣つ處多大であつたのである。但し情念に對する分析は必ずしも知的分析とは限らない。デカルト、スピノーザ乃至英國道義學者に見る如き學的沒感情的分析も勿論であるが、他方又神祕家や後ロマンテック詩人達に於て顯著なる如き非學的帶感情的分析も存在することを注意せねばならぬ。悟性中心の非情的分解と情意中心の有情的分解とは、たとひ事實上には截然分離して働くことはなくとも、概念上之を區別するばかりで無く、其典型的なる實例に就て見る時には其相違可なり顯著であると思ふ。同じ文藝の分野でも例へばゾラの分析とドストエウスキーの分析とを對照せしめて見れば、兩者の異別は首肯されるであらう。宗教上の解放運動の武器となつた分析は主として此有情的分析であつたと言つてよいであらう。道德の場合は少しく複雜で、宗教と結び付いて行はれた解放運動では有情的分析、認識と結び付いて行はれた解放運動では非情的分析が主役を演じたと言へはしないかと思ふ。

有情非情の分析は斯く一方宗教道德認識の方面に於て自我を自由獨立ならしめる有力なる利器となつて働いたが、他方夫は亦自我其者を分散崩壊せしめる凶器としての働をもなした。先づ非情的悟性分析に就て之を見るに、宗教や道德の分野に於ての悟性分解の効果に對して異議を挿む人も、夫れが認識の分野特に外界自然の認識に於て如何に卓拔なる研究法として働いたか、之を即認するに吝ではないであらう。既に外界自然に對して彼が如く有功であるならば之を内界精神に其儘轉用するに何の憚る處があらう、否、眞理を欣求し實相に徹せんことを念とするものは、必然斯くせざるを得ない。動いて息まず無限なる作用の交流する吾々の具體我が一個の認識對照として固定され、原子化量化を其本領とする悟性的分析作用の俎上に上された時、夫は果して如何なる姿をとつて再現するであらうか。自我とは『印象の

束』に過ぎず、意識の千態萬様は物的元素に類比すべき印象又は觀念の相互關係を規定する聯想法則によつて說明し得とのヒユームの論結は、上述の見方からしては之を避くるに由が無い。自我とは唯名に過ぎない。認識對象――悟性の對象――としての自我に關する限り、ヒユームの下した此斷案は動かすことが出來ない。認識に於て解放された自我は、認識對象となつて玆に已れ自ら沒落の運命を甘受せねばならなくなつた。理知の解放を誇る自我は自己分散をも醸してはならぬ。英佛經驗論の發展は此意味に於て極めて合理的態度を示して居ると思ふ。然し悟性分析による自我の分散は表面上さう見える程に實は自我にとつて危險なものでは無い。認識我としては兎も角、自我の核心をなすと見るべき行爲我としては、彼等の自我分散者も實際上自我統一を確保して行動して居るのである。のみならず、認識我としても實は立派に自我統一が維持されて居る、唯彼等が之を自覺しない迄である。分散消逸したと考へられる自我は客觀對象化された自我であつて、夫れは最早眞の自我ではない、一個の自然物に過ぎぬ。然し斯く自我を固定分析して行く思惟我其者の統一は明かに確保されてゐなければならぬ然らずば一貫した分析は決して遂行し得られぬであらう。自我を印象の束と判斷したヒユームの認識我判斷我は牢乎たる悟性統一の典型である。經驗論者の謬は自己の現實に働かせつゝある認識作用其者に對する反省の足りない處に存する。斯樣な譯であるから、分析的態度は夫れが純認識の分野に止まる限り、自我に對して左して危險とはならない。たとひ機械觀を徹底させて、自我をばコンディヤツクの試みた如く『生ける大理石』となし得ても、知我の統一は依然として、確保されて居る。唯然し之れが價値實踐の領域に迄推及ぼされる時、玆に初めて眞の危險が生じて來る。即ち人生觀上の決定論機械論が成立する。夫れは必然に價値無差別觀を含意する。神人相會のエクスターゼと變態性慾の陶醉との間にも價値上高下の別は無い、共に心理必然の所産であるから。道德的精神と自棄的放縱と、其何れをとり何れを捨てる譯はない、機械的必然の前には價値差別上位選擇は無意義

であるから。其本來の立場とは相容れないが、強て此立場に立つて價値標準を定めようとして、所謂平均價[illegible]てふ量的尺度を持て來るものがある。然し眞の價値は多く異常なるものに體現され、進歩は屢々極端によつて實現される。最も屢々起るとかノルマールとかは夫れが分量的に解せられる限り、以て價値標準とするに足りない。若し夫れ不快の結果の大小を以て道德標準に擬するの不可なること、古來からの快樂論の發展其者が之を明示して餘りがある。價値無差別觀の前提は人生觀上の自然必然である。自由意志理想欣求の如きは幻影に過ぎぬ。知に於て放たれたる自我は自然の一部となり、自我の行動云爲凡てが自然必然の支配下に立つ。此際認識主觀としての自我は依然として其統一を保持しても、夫は謂はゞ傍觀者の如きもので、自我の自我たる所以は失はれる。好惡愛憎の評價生活、自由意志の實踐我に於て初めて自我の眞面目が現はれるのであるから。要之、非情的悟性分析は認識の範圍を越えて、實踐の領域に立入り茲に其至上權を揮ふ時、夫は最も明白なる自我崩壞を招致する。ルソーが情意の名に於て理知に、ニーチエが生命の名に於て眞理に抗議したのは、其中に爭ふ可らざる眞理を含んで居ることを認めなければならぬ。

轉じて有情的分析の方は如何にと云ふに、此方法は一般に神秘家やロマンテイク詩人によつて好んで用ゐられ、近世自我解放運動に於ては宗教及び道德の內面化に貢獻した。分析の對象は情意活動があるが、之に對して嚴密なる心理學的分析を施すのではなく、各自の強い──屢々甚だ偏破な──關心に基いて自己諦觀沈潜解剖を行ふのである。即ち自己の情意活動に對する關心的帶感情的分析である。之れが亦自我崩壞を招致する源ともなる。耻かしきもの氣高きもの美しきものよりも暗きもの卑しきもの醜きものが、より多くより強く自省の眼には映ずる。意志弱きものに罪の意識の强まり行く時、彼は自己嫌惡より自己破滅への道を急ぐであらう。詩人の如く觀照的態度をとつて之に對し之を創作に表現すれば、茲に解脫の一路が開かれるが、而も自己心內の落寞荒寥を如何ともし難い。衝動本能欲求感情等凡て動搖不

定の情意活動に動くがまゝの統一を與へるものは自律的意志である。有情的分析の過度は此意志統一を弱め或は喪失せしめる。意志統一を失ひたる自我は分裂割據して各々主たることを求める無數の衝動感情の混戰舞臺となる。ホフマンスタールの „Beieinandersein von tausend Leben" となる。より強く更に變つた刺激をと求め行く刹那的感覺生活、自己心内の魔靈に惱まされる自我分裂、或は此遠心的情意生活の苦惱に堪えずして嘗て外的權威として退けたる教團に救濟の手を求める他力本願の生活、樣々な姿に於て現はれるが、何れも有情分析の過度使用に基く意志統一力衰退の結果である。此時自我は最早主人でなくて奴隷である。末梢が中心に命令する、部分が全體を支配する。外に於て解放された自我は今や内に於て絶對拘束に陥つたのである。茲にも曩の悟性分析の場合に見た樣な、而も夫れよりも遙に深刻な自我崩壊を見るのである。對象が自己の情意であり、態度が有情的であり、分析即崩壊を身一つに體驗するのであるから、冷靜なる悟性分析に見られぬ直接さと生々しさがある。古來幾多の悲劇が此方面では演ぜられて來た。心豐かな人には人知れぬ惱みがある。

四

解放されても認識道徳宗教からの解放に逸すること無く價値圏内に始終する解放たるに止まり、破壊の刃たる分析法をして自殺の凶器と變ずることなからしめるのが、次で來る時代の新なる課題とならねばならぬ。斯る自我再建充實の道程に於て確乎たる第一歩を踏み出して呉れたのはカントであつた。彼の認識超個人我の發見は認識及び道徳の方面に於ける自我再建の基石である、たとひ夫れに如何程の不足不備點が見出されるにしても。之れ無くしては第十九世紀以來の自我の積極的建設は考へ得られない。彼の提出せる必須條件 Conditio sine qua non は實に先驗的極少限であつた

のである。彼の先驗統覺の說は認識對象としての自我を感覺の集積と見つゝもよく認識主觀としての自我統一を確保し、之れが經驗我のみならず物心兩界に渉つての立法者たる所以を闡明した。彼の自律的意志の概念は自然必然以上に立ち而も消極破壞の恣意氣隨に陷らぬ構成的自由意志を確立したものであつた。(宗教に就ては認識道德に於けると同列に見てよい程の深い劃期的見解に認められる樣に思ふ。)理知と情意との權能と其範圍限界、從つて又分析法の意義權限等近世初頭以來の懸案の主なるものは大抵カントによつて根本的解決が與へられた。實に彼に依つて近世の自由解放運動は組織的原理的に解決された。カントも亦自ら啓蒙の完成者を以つて任じた。

完成者は創始者であらねばならぬ。一の課題の解決がやがて亦新課題を生み出して來ねばならぬ。而してカントの與へた解決は必然に新課題を提出して來ねばならぬ性質のものであつた。彼は自然及び道德界の立法者としての自我の發見によつて思想史上のコペルニクス的廻轉を成就した。處が此自我は何處迄も超個人的非人格的たることを特色とする。最も人格的個人的たるに近い彼の倫理に於て確立された人格さへも抽象一般的な人格性人間性(Persönlichkeit, Menschheit)が主であつて個性を具へた生命我、具體的人格は輕視された。眞と善との普遍必然性を保證すべき先驗的條件としての法則性(Gesetzlichkeit)を擔ふ主體としての意識一般や人格性を究明することは近世自由解放運動をして自省せしめ之をして邪路迷徑に踏み入らしめずよく坦々たる大道を進ましめるには足りるであらう而も斯くの如き自我には具體性生命性が缺如して居る。夫れが現實の經驗我と如何に關係するか、夫れは吾人の現實意識に於て如何なる姿をとつて動くか、約めて言へば、超個人我の特殊化の問題が解かれるのでなければ所謂畫龍點睛を缺ぐの憾みがある。第十九世紀初半の獨逸唯心論の課題、下つて新カント派の勃興に次いで現はれた理今の生命の哲學の課題は、之を自我問題に就て考へる限り、正しく此方向に横はつて居る。而して此新課題の提起其者が之をカントの解決に負ふばか

りで無く、之が解決の仕方に就てもカントに學ぶ處が多い。コペルクニス的轉回の意義の深さは、之を究むること益々精しくして之を驚異すること益々多いと言はねばならぬ。

超個人我の特殊化、普遍的者の具體化の問題については純粹理性批判と實踐理性批判との間に相異する處がある樣に思はれる。即ち前者では此問題は殆んど提起されないのに反して、後者では明に問題とされ、不充分乍ら其解答が與へられて居る。實踐理性の動機としての道德法に對する畏敬の情の如き最も注意すべき概念であると思はれる。然し之はまだ中心概念とはされて居らぬ。一般論としては矢張カントに依つてはまだ此問題が其意義の重要さを充分に自覺して提起され無かつたと言つてよいかと思ふ。獨逸唯心論の發展史上、玆で問題にして居る方面から見て最も進んだ見解を提出したのはヘーグルとシュライエルマッハーである。前者は其論理的思索の精到に於て後者は其體驗の深さに於て互に對峙するものであり、而して恐らく相互補足的關係に立つべきもので無いかと思ふ。

五

一方には分散剌擾せる感覺衝動欲求の雜多がある、他方には永遠妥當の課題當爲を揭げる超個人的自我がある。前者は自我解放より生じた消極的所産即ち自我崩壞の姿を示し、後者は之を克服し之を再生せしめる。新生命原理の核心をなすものである。而もカントにあつては此兩者が如何に結合或は融解して如何なる具體我生命我を構成すべきかの考察が充分で無い。形式と質料との峻別に急なる餘り、其結合が疎にされたのである。而も分離は結合の爲めの分離であり、形式は質料と相結ばねばならぬ、純粹的者は不純なるものの爲めに存在すと言ふことも出來るであらう。分たれたるこ

の二つのものを自覺的に結合せんとする處に現代文化の課題としての個人我の問題が橫はつて居る。恒轉如暴流の感覺欲求が永遠妥當の自我中心によつて其內面から活され統一され、兩者が一の親和力として働く樣になる、而も夫れが明らかなる自覺を以つて遂行される。之れが具體的人格の輪廓であるとすれば、現代個人我の課題は人格の創造にあると云ふてよいであらう。

人格の中心となるものは超個人的意味を持つ絕對價値でなくてはならぬことは、カントの闡明した通りである。而も此超時間的叡知的自我は一方無窮の課題として有ゆる吾活動の向ふ處を指示すると共に、他方我を根抵より搖り動して之に向つての無限活動をなさしめねばならぬ。即ち超時間的原理は時間的流動に內在化しなければならぬ。否、時間的流動は本來當爲實現によつて成立するもので、當爲あつての時間である。時間が意識の根本形式と考へられ、意志によつて立つと見られるのは之に基く。自律的意志によつて過去現在未來の區別が生ずるものである。超時間的自我中心は時間と無依獨立ではない、時間を生產する自我中心である。斯の如き自我中心が絕對價値の源であるとすれば、其具體化である人格は目的自體、終極目的でなくてはならぬ。人格の絕對價値は人格性人間性の絕對價値に基く。但し個々特殊の人格が人格性の絕對價値を要求し得る爲めには、個性的人格が普汎妥當的價値の單なる事例 (Exemplar) ではなくて、其必須なる表現であることが證明されねばならぬ。此證明は結局自證確信に俟つ外は無い。自己の目的自體たることを自覺する處に人格の人格たる所以、即ち人格性の唯一表現が成立する。而して近世自我解放運動の喚び醒ました自覺は此目的自體としての自我の價値反省に至つて其頂點に達したと云つてよいであらう。斯の如き自覺的人格に於ては中心原理が孤立獨在することはあり得ない。特殊雜多なる周邊的質料と一になり之を內から統一して所謂個性を具へた人格を構成して居なくてはならぬ。今少しく具體的人格に於ける中心と周邊、形式と質料との關係を一般的に考へ

てみよう。

人格の中心は勿論一の統一點であるが、然し此中心點たるや周邊への關係を含むものとしてのみ成立し得るのであるから、單一點ではなくて寧ろ無限なる線の集中點である、無限に復雜多樣なる部分の連結點である。生滅起伏する表情感情を離れて別在する自我中心なるものはない。意識は多くの心理學者の明らかに說く如く流れ或は出來事の連續である、デイルタイの言ふ如く生長し發展し死滅し行く體驗である。從つて其統一中心點をなすものも、一の作用活動でなくてはならぬ。自我中心は靜止固定せる物ではなくて活動である。而も特異なる意味に於ての活動である。之れは自我中心が所與でなくて課題であることを考へれば直ちに理解される。無限の實現活動を要求する課題が眞の自我中心を形成すべきである。物で無いばかりでない、如何なる意味に於ても之を固定的に考へてはいけない。實現創造の作用を離れて彼岸に聳立する目標ではない、寧ろ刻々の意識作用其者に內在し之をして靜止せしめざる原動力である。不斷の努力精進の純粹活動に於てのみ維持される中心である。努力已めば中心亦消逸する。所謂絕對價値無限當爲は實は努力自體、活動其者と云つてよいのである。當爲と存在とは飽迄區別せねばならぬが、然し兩者の分離の必須は結合の必至を含意する、差別は同一と相表裏する。人格統一の此特異性が屢々之れと類比的に考へられる有機體の統一より根本的に之を差別する所のものとなる。生物的統一は所與の統一である。少くとも所與の物の如く考へられたる統一である。心理的統一は之れに比すれば一段高き階段を示すが、自覺的人格統一に比すれば猶生物的統一に近い。人格統一は最高窮極の統一である。茲では凡ての意識內容、一々の表象欲求が人格全體の表現として純粹持續の狀態をなして居る、融通無礙と言つてよい。

右の如き人格統一の狀態は古來詩人聖賢の多少とも體達し得た處であつて、敢て近世自我解放の有無には關係がな

い。プラトンやエシロスの偉大は近代精神を俟たない。然らば現代人が近世自我解放の洗禮を受けたことは、其人格統一に對して如何なる意義を持つのであらうか。一言にして之を悉せば、人格統一作業を自覺的ならしめたのである。先づ自己人格形成の中心とすべきものに就て見るに、夫れが他から與へられ強制されたものであつてならないのは言ふ迄もない、自覺的に謂はゞ自己生長の歴史中に於て自然に生成したものであつても、夫れが一種の自然的所與である點に於て之を其儘是認することを拒む。一度之を反省批判の對象とし、之に價値を認め、自己の自由意志によつて撰取決定したるもののみが自己の人格中心たるに堪える。即ち自我中心原理に對する自由決定權を主張するのである。然らば如何なるものが各自の自我中心として有價値とされるかと云ふと、具體的には勿論千人萬樣であるが其間に一つの共通な傾向がある。即ち各自の生得せる特殊性が之によつて最もよく活される如き中心原理を求めると云ふことである。ライプニッツの說いた如く凡て存在するものは他と異別する特性を持たねばならぬ。此自然的個性が反省され、之をして普遍妥當的意義あらしめる如き中心點が求められる。玆に理想的個性が現ずる。具體的人格とは正しく此の如き理想的個性の謂に外ならぬ。有限特殊の極限である。個性が無限普遍の意義を擔ふのは理想的自覺的個性に於てである。自然的個性は可能潛勢態に止まるのみである。理想的個性に於ては普遍的中心原理は特殊態を通してのみ働き、特殊態は又普遍的中心の力によつて初めて其特殊性を完うする。否斯くの如き區別は反省の上に現ずるのみで、現實直下の意識に於ては一々の特殊が直ちに普遍者として活きて働くのである、部分が全體の表現として現前するのである。現代に於て職業の自由撰擇が尊重されるのは此邊の消息を示すものである。職業は課題としての自我中心實現の重要なる一樣式である（個我は職業を通して社會我に連る）。從つて自己の特性に最も適した職業を自由に撰定することが最も望ましき狀態であるとされる。父祖傳來の業とか、階級身分とかの顧慮は第二義である。適才適所性能自由發揮が職業決定の基準に

ならねばならぬ（經濟上社會制度上種々の事情が此理想の實行を妨げることは周知の通りであるが、今は唯此等の社會的事情を捨象し、純然たる個人我の立場から見ての職業撰擇を論じた迄である）。斯る理想的職業に於て勞働即快樂、全我表現の活動を見ることが出來るであらう。無限の關聯を内に藏する唯一無二の理想的個性が個人我の究竟地、具體的人格であるとすれば、夫れは無上の價値尊嚴を有するものであらねばならぬ。目的自體としての人格とは之を謂ふのである。單に人格性、單に絕對價値は未だ眞の目的自體ではない。左樣な普遍的者の唯一表現、全宇宙を寫す一つ一つのモナドの如き具體的生命我こそカントの目的其自體（Zweck an sich selbst）であり、其中には目的の王國たる意味も含まれて居る。人格にあつては一々の表象欲求が主にして從、中心にして周邊たる關係に立つて居ると思ふ。無上價値は個性の自覺に基く。個性の自覺を失へば直ちに純乎たる手段化する、即ち物件となるのである。人は目的自體であるのではなくてなるべきである。あるものは物である、人格個性はなるべきもの即ち純粹活動其者であらねばならぬ。己れ自らを單なる手段とし、物件として取扱ふ人の如何に多きかを見よ。目的自體たるの自覺を體する決して容易ではない。

自己の自由選擇に依つて、自我中心が決定されれば、自己自然の諸傾動は合規範と反規範、有價値と反價値とに別たれ、前者についてもより高きものとより低きものとの價値排列上の高下關係を生ずる。然し中心は當爲課題であるとすれば、之に依つて統一せらるべき質料的要素は凡て現實の所與であり其儘では價値上無差別・無記であると見做さねばならぬ。從つて其自體初めより反價値として退けらるべきものは一つも無い、凡ては反價値ともなり得れば合價値ともなり得る。現實の所與は無限可能態である、單に終り無しと云ふ意味での不定限的無限である。之れが價値的中心によつて統一されるとは或意味で終結の與へられた無限（部分と全體との相等と云ふ如き）となること、即ち無限可能に一定の方向が定められることを意味する。可能が一定の方向を持つとは現實の活動となることである、所與自體が動的に

なつて來ることである。價値中心による個人我の統一とは、個人の無限可能態としての現實の全傾動が一つの方向に於て活動することである。此方向は全てが活かされ肯定される方向である、之を全體的方向と名けてよい。此意味に於て自我統一は自我內容の全的肯定であると言ふことが出來よう。一切を擧げて當爲的中心に集注協働せしめるのが、個人格の理想境であらう。純粹活動としての個性は茲に現前する。眞に一即一切である。然し現實所與の人性自然其者は無限可能態であるから、其方向は全く不定である、如何なる方向へも動き得る發展し得ると云ふ點より言へば全く自由狀態にあるとも見られるが、要するに夫は消極的自由の境界に止まる。之れが一定の方向に於て全體的活動として活きて來る爲めには、無限可能は限定作用を受けねばならぬ。可能としての傾動は一々が他と獨立無依に銘々勝手にも動き得る。自我の分散は之より結果する。之れをば相互會通交流する一の全體的活動たらしめるには、可能的動性が全體性てふ中心によつて限定局限されねばならぬ。此意味に於て自我統一は自我內容の全的否定を要求するとも言ふことが出來る。全的肯定と全的否定とは畢竟同一物の表裏に過ぎない、或は表現の相違で當體は同一物であると言つた方が更に適切かも知れぬ。大死一番が更生の轉機たるは此故である。可能限定の極限は唯一獨特他によつて置換へられぬ個性、即ち目的自體である。之れが凡ての種類の對象性客觀性の最后の基礎である。認識と雖もこれが除外例をなすものではない。認識對象性の根據は抽象的一般性になくして具體的個性である。

價値中心當爲的統一による可能局限は時間的過程としての發展と云ふ形をとる。努力精進の純粹活動に於てのみ維持される中心統一は時間系列上將來の目標として意識される。而して絕對價値目的自體である時には、夫は刻々に實現されつゝ而も永遠に實現され盡されない課題イデーとなる。イデーに於ては未來が現在を定め過去を產む、歷史の世界はイデー實現過程を裏返して見たものである。暫らく普通の時間意識に從へば、當爲實現の發展運動には一つのアンティノミーが含まれて居る。發展に於いては重點をなすものは實現せらるべき當爲である、即ち將來に重きを置かねばなら

ぬ。さもなければ發展向上の運動は起らぬのであらう、發展向上と云ふ意味もないであらう、然し又將來に重點を置くと、現在の生活は凡て將來の爲めの手段準備としてのみ存在する、現在其者としては意味がないことになる。而して當爲が無窮の課題であるとすれば、現在の意義愈々微かにして無始無終なる連鎖の一環たる位置を享有するに過ぎなくなるであらう。斯くの如きは解放されたる現代人の甘受し得る處ではない。自己人格に無上價値を認め自己を目的自體と信ずる意識は現實直下の刹那にも他に依つて置き換へられぬ充實の意味を味はうとの強い要求を含んで居る。現在を措いて何の未來ぞ何の過去ぞとの意識は活動型の人に共通の觀念である樣に思はれる。將來中心の靜觀享受型の人と現在中心の活動努力型の人とが對立する。此對立は實は發展概念其者の中に含まれて居るので、兩者何れも發展には不可缺の力素である。具體的の人に於て屢々對立をなして現はれる二つの精神が合一して、當爲實現の發展運動を構成して居るのである。兩者は二にして一、一にして二でなくてはならぬ。然し夫れは如何にして可能であらうか。二而一、一而二なる關係成立の根據は如何。此問題を解く爲めには理想と現實、當爲と存在との對立歸一の問題を是迄考察して來たよりも一層一般的且つ根本的に考察する必要があるのであらう。夫れと聯關して一般に時間意識の成立を深く究める必要がある。現在の私には所に餘る處のある問題ではあるが、今の私の考で之れだけは動かぬと信ずる一點だけを玆に述べて此稿を終へよう。

時の意識は流れざる意識に於て成ると云ふことは爭ふことの出來ない處である。流れざる意識は意識即ち運動でないと等しく又時間でもない。然し單に流れるだけの意識には流れを流れと意識せん術が無い。流れつゝ己れを振返る作用ある處に流れの意識も生ずる。否、眞に純動の意識は動くとか動かぬと云ふ差別を超えた意識であるであらう。流れて流れぬ意識とは既に反省された意識である。如何にしても反省されぬ而も有ゆる反省の依つて生ずる根源としての純粹自我には動靜流停の別は無い、從つて時間も無い、あるとすれば永遠の現在と名くる外ないものであらう。時間は無いが、時間は玆から生れる。マホメットが倒瓶の水の流れ盡す間に天涯を廻つて歸り來つたと云ふのは此の如き永遠の現在を意味するものと思はれる。中世神秘家の好んで口にした此語に盛られる體驗は吾人の現實時間意識の依つて成立す

る根源を示すものである。之に對するトーマス・アクイノスの詳細な分折は今日猶敎へる處が多い。さて永遠の現在が已れ自らを反省すると玆に流れる意識と流れぬ意識即ち時間的と超時間的との對立が生ずる。眞理の超時間的妥當性とは此立場での永遠性であり、それは當に時間への志向を含む。時間的に對立しての超時間的は時間と絕對無關係ではなく寧ろ之れへの關係に於て成立する。即ち超時間的妥當の眞理は眞理への意志に於て認識されねばならぬ。眞理自體は認識可能性との相關に於てのみ成立する。可認識性を拒む眞理自體とは自家撞着の概念に過ぎない。ライプニッツの眞理自體說がモナド論に進んで行かねばならなかつた根本動機は玆にある。夫れでは流れる意識は如何にして成立するか。之れは已に說いた如く當爲に基いて未來と現在とが先づ定まり次で過去が決定される。之が時間意識の根本形式である。之を意志的時間と見てもよい。過去現在未來の順序は當爲的意志の順序を裏返した順序で之を存在時間と見ることが出來よう。永遠の現在より如何にして當爲が生ずるかは、如何にして反省が可能なるかの問と同じく私には今の處答辯の出來ない問である。强て言へば左う考へるより外に道が無いと答へる外はない。カントの云ふ理性の事實である。如何にしての問には答へられぬが、事實左うに違い無いと信ずることは出來る。當爲の嚴存疑ふ可らず、其實現可能を信ずるものは、當爲と存在、動と靜、時間と超時間との對立連關を可能ならしめる絕對境としての永遠の現在を疑ふことは出來ぬ。之を想望せしめるのは、數學的零に比せられる空虛なる如く見える現在意識であらう。零が已れ自身空しき如くで而も凡ての數系列の出發點をなす如く、現在は全く空で無に等しいから凡ての時と內容とを孕み得る。空なるが故に一切を包藏するのが現在の現在たる所以である。斯る現在は過去や未來に對しての現在ではなく、過現未の三世を超えて之を內に含む現在である。吾等は現實直下の意識に於て此の如き絕對境に出入し得るのである。個我に在つて總我たるの意味も玆に實にされる。

附記。私自身の健康も現在の境遇も思索執筆には甚だ不都合な央に强て筆を執つたので、意に滿たぬ處が頗る多い。（四）の問題史的敍述はもつと詳しくなくてはならず、（五）の體系的思想開展は一層學的に而も立證的に行はれねばならぬ。單にプログラムメーシッヒで餘りに獨斷的主張の形にたり過ぎたのを愧ぢる。尙此文 Jonns Cohn' Der Sinn der gegenwärtigen Kultur 1918 に負ふ處多いことを斷つて置きたい。

支那關稅會議と日本

支那の關稅自主運動と日本資本主義經濟の運命

高橋龜吉

一、支那關稅會議招集成立の意味

來る十月二十六日北京に於て、いよ〱支那の關稅會議は開かれることになつた。この會議の問題となるものは、表面上は、ワシントン對支九ケ國關稅條約に基き、現在の現實五分の從價稅(之れもワシントン會議の結果改定せられて大正十二年一月より實施中のもの)に、更に、一般に從價二分五厘の附加稅と、奢侈品に限り從價五分以内の特別附加稅を設定することである。しかし乍ら、支那政府が關稅會議を招集した眞意は、單に、ワシントン條約で決まつた通りに、二分五厘の附加稅を要求せんとするにあるのではなくて、之を機會に、年來の要求である所の、關稅自主權を回復せんとするに在る。このことは支那政府の關稅會議招集狀にも、極めて圓曲ではあるが、極めて明瞭に之を示唆してゐる。然り、來る關稅會議は、支那のこの關稅自主權の要求が期待せられるからこそ、内外に至大の興味を惹いてゐるのである。

そも〱、世界の强國が、條約の名に於て、弱國に對しての關稅權を束縛し、低率の關稅を强要して、その弱國に工業の興ることを抑止し、以て自國產業に自由販路を確保すると云ふ政策は、帝國主義的侵略の一形式に外ならない。然るに、一度

び世界の植民地が列強の間に分割されつくして、この上の植民地獲得慾を滿たすためには、列強已得の植民地を爭奪するより外なきに至るや、茲に列強は已得權の確保に最大の利害を見出すに至り、斯くて從來の侵略政策の謳歌は一轉して侵略主義の呪咀となるに至つた。就中、植民地爭奪戰の代表的なものであつた歐洲戰爭以後に於てさうである。

斯樣に、帝國主義的侵略を呪咀する思想は延いて、これまで永く、壓迫せられながら、之を訴ふべき所のなかつた被壓迫民族の自覺となり、反帝國主義運動の擡頭となつたが、しかも、さきに已得植民地の現狀確保の必要から生れ出した反侵略主義的國際道德が、今度は自繩自縛となつて、この被壓迫民族の反帝國主義運動を昔の如く強壓することを許さず、茲に、世界の帝國主義の礎石は、その根柢から動搖するに至つた。而してその最も代表的なものは、尙ほ記憶に生々しい最近に於ける支那の反帝國主義運動である。昔であつたならば、戰艦の數隻で以て容易に威嚇することの出來た支那の排外運動に、あゝまで我儘をせられながら、尙ほ之をどうすることも出來なかつたと云ふことは、帝國主義の侵略力が、如何に著しく凋落したかに驚かざるを得ないではないか。

來るべき支那の關稅會議は、要するに、斯樣な反帝國主義運動の一面が、秩序ある政治運動の形をとつて現はれたものに外ならない。果して然らば、列強はいま、支那の關稅を、已にその根抵のグラツイてゐる帝國主義を脚場にして束縛してゐるのであるから、支那から、少し力強く、關稅自主權の要求を持出されれば、ワシントン對支九ケ國關稅條約を楯に、之を拒絕する國際道德を持ち合はしてゐない。假令、いまは何とか之れを拒絕し得たとするも、遠からず、之を認めざるを得ないことは少し心あるものの何れもが現に認めてゐる處である。加ふるに、各國ともそれ〲利害を異にしてゐて、斯る形勢の下に於て、虎視耽々、出來るだけ自國に有利の方法にて、この避くべからざる運命を認めんとしてゐる。

斯樣のわけであるから、來るべき關稅會議は、決して、ワシントン對支九ケ國條約に基く、單なる二分五厘附加稅を議するに止るほど簡單なものではない。それは、必ずや、支那の關稅自主權の回復まで發展すべきものであり、而して支那の關稅自主權の回復は、我が國で普通に考へられる如く、主として財政上の問題ではなくて、列國の支那に對する經濟的帝國主義の侵略に、最後の止めを刺すべき最重要な第一步に外ならない。然るに、新聞によると（九月四日の大阪朝日）我が紡績會社は、關稅に二分五厘を附加することを認める代りに、支那紡績の競

爭をそれだけ殺ぐために、支那內地產の紡績品に對し、同じく二分五厘の消費稅を課すべしと云ふが如き、依然、昔の帝國主義全盛時代に於けるまゝの蟲のよい要求を、臆面もなく我が政府に呈出したと云ふ紡績業者と云へば、我が資本家の中でも、最も進歩せる方面に屬するが、しかも、彼等がこんなことを主張するのだ。我が資本家階級が如何に時勢に後れたるかに驚かざるを得ない。

二、關稅束縛による對支帝國主義の破綻と我が資本主義經濟に及す影響

以上の如く、支那の關稅を束縛することによつて、支那工業の發達を抑壓し、さうすることによつて、自國產業に有利な販路を確保し來つた、これ迄の對支政策は已に破綻して、近く、その帝國主義破滅の具體的影響のすべてが、現實に各國の貿易の上に現はれんとしてゐる。所で、斯く支那が關稅上の權利を回復することによつて、(假令關稅自主權の回復までには至らないとするも、現實五分の現關稅は最低七分五厘にまで引き上げられることに間違なく、若しかすると、關稅自主權拒絕の代償として、現實一割近くにまで引上げられることになるかも知れぬ)最大の打擊を蒙るものは、云ふ迄もなく、支那內地の工業と直ちに競爭の地位に立つ工業階段にある國である。

然るに、英國にせよ、米國にせよ、その對支輸出品の大部分は、機械類の如き支那に當分製造の見込なきものか、又は纖維品其他の雜貨にしても、専ら高級品のみであつて、駈け出しの後進國の工業が、容易に之を製造し得ない種類の精工品である。之に反し、日本の工業は、いま尙ほ專ら、粗工業時代にあつて、支那產業の直ちに競爭の對象となる位地にある。現に、歐洲戰爭以來、支那に近代工業の漸く勃興し始むるや、關稅の擁護を殆んど藉ることなくして、已に我が對支輸出品の一部を驅逐しつゝある。例へば、現在支那に發達しつゝある近代工業は、紡績、織布、製粉、燐寸、製絲、製糖、製油、製酒、製紙、製革、毛布、石鹼、化粧品、蠟燭、ガラス、紙卷煙草、セメント、紐帶、琺瑯鐵器、罐詰食料、洋傘、メリヤス、草帽、縫針等であるが、この中製絲を除けば、この殆んど凡ては、我が資本主義工業の對支輸出の大競爭者である。しかも、我が資本主義的近代工業の對外輸出の約半分は、對支輸出に依存してゐるものである。關稅の束縛から解放せられて、支那工業の競爭大となる曉に於ける、我が近代工業の困難の狀を想見し得るであらう。

いま、我が近代工業の對外發展が、如何に多く對支輸出に依

(一) 我が對支重要輸出品と其の輸出全體に對する位置

	大正十三年 支那 (千円)	大正十三年 其他 (千円)	大正十三年 合計 (千円)	大正十三年 支那の占むる割合 (%)	大正十二年 支那 (千円)	大正十二年 其他 (千円)	大正十二年 合計 (千円)	大正十二年 支那の占むる割合 (%)	大正十一年 支那 (千円)	大正十一年 其他 (千円)	大正十一年 合計 (千円)	大正十一年 支那の占むる割合 (%)
綿絲	六五、四七四	四四、一三七	一〇九、六一一	五九・七三	五三、九一九	二四、五九三	七八、五一二	六八・六八	九一、五九四	二三、一六九	一一四、七六三	七九・八一
綿織物	一七二、七九〇	一五三、七九七	三二六、五八七	五二・九一	一二六、五三五	一〇八、二一九	二三四、七五四	五三・九〇	一三七、四六五	八四、五八七	二二二、〇五二	六一・九一
精糖	二八、七八五	七九	二八、八六四	九九・七三	一四、五六三	一八〇	一四、七四三	九八・七八	一九、〇一〇	八二	一九、〇九二	九九・五七
麥酒	一、一二六	一、〇六六	二、一九二	五一・三七	八七三	一、四三四	二、三〇七	三七・八四	一、二〇八	二、一五〇	三、三五八	三五・九七
紙類	一二、三七〇	三、二〇六	一五、五七六	七九・四二	一二、一五一	三、〇一七	一五、一六八	八〇・一一	一三、一二二	二、九〇六	一六、〇二八	八一・九八
硝子及同製品	四、八三二	七、九〇五	一二、七三七	三七・九三	三、七九二	六、三二七	一〇、一一九	三七・四七	四、五〇六	五、八三三	一〇、三三九	四三・五八
機械及同部分品	八、六三三	一、一一〇	九、七四三	八八・六一	七、八三三	一、四二九	九、二六二	八四・五七	一二、九九二	一、四三三	一四、四二五	九〇・〇六
鐵製品	七、七一四	五、〇九一	一二、八〇五	六〇・二四	六、八二〇	四、五九〇	一一、四一〇	五九・七七	六、〇七九	四、二四三	一〇、三二二	五八・八九
ゴムタイヤー	一、五六九	一、六七〇	三、二三九	四八・四四	一、三六二	二、五三八	三、九〇〇	三四・九二	二、六九四	三、三〇五	五、九九九	四四・九一
洋傘	二、一九七	一、四七〇	三、六六七	五九・九一	一、三四二	七一七	二、〇五九	六五・一八	一、三三九	九五七	二、二九六	五八・三二
ランプ及同部分品	二、〇三八	三、〇一四	五、〇五二	四〇・三四	一、六六五	二、五四一	四、二〇六	三九・五九	一、五五二	二、五四二	四、〇九四	三七・九
綿ブランケット	一、九六八	一、八六一	三、八二九	五一・四〇	一、二五六	一、一八二	二、四三八	五一・五二	……	……	……	……
石鹸	三、四四三	二二二	三、六六五	九三・九四	二、六七八	一八四	二、八六二	九三・五七	三、〇一四	三三四	三、三四八	九〇・〇二
帽子	二、三六三	二、四五五	四、八一八	四九・〇五	二、三〇三	一、六三九	三、九四二	五八・四二	二、五四九	三、〇〇七	五、五五六	四五・八八
絕緣電線	一、一九七	七六	一、二七三	九四・〇三	一、四〇一	二〇八	一、六〇九	八七・〇七	七、七三五	九一	七、八二六	九八・八三
小計	三一六、四九七	二二七、一四九	五四三、六四六	五八・二二	二三八、四八三	一五八、八〇八	三九七、二九一	六〇・〇三	三〇四、九〇九	一三四、六一〇	四三九、五一九	六九・三七
石炭	一八、〇〇五	四、三八九	二二、三九四	八〇・四〇	一五、四八六	六、〇五五	二一、五四一	七一・八九	一三、九一九	九、五八五	二三、五〇四	五九・二二
水產物	一九、八九七	二、五九一	二二、四八八	八八・四八	一七、九三一	一、九六三	一九、八九四	九〇・一三	一四、一四六	二、一四〇	一六、二八六	八六・八六
A合計	三五四、三九九	二三四、一二九	五八八、五二八	六〇・二二	二七一、九〇〇	一六六、八二六	四三八、七二六	六一・九七	三三二、九七四	一四六、三四五	四七九、三一九	六九・四七
B輸出總計	五〇〇、〇二一	一、三〇七、〇一四	一、八〇七、〇三五	二七・六六	三九五、三八〇	一、〇五二、三七一	一、四四七、七五一	二七・三〇	四七〇、八〇二	一、一六六、六五一	一、六三七、四五三	二八・七五
C絹絲及絹布類を除く輸出總計	……	……	九七〇、八六三	……	……	……	七七七、〇九六	……	……	……	八四二、三〇六	……
Bに對するAの%	七〇%八八	一七%九一	三二%五七	……	六八%七七	一五%八五	三〇%三〇	……	七〇%七三	一二%五四	二九%二七	……
Cに對するAの%	三六%五〇	二四%一二	六〇%六二	……	三四%九九	二一%四七	五六%四六	……	三九%五四	一七%三七	五六%九〇	……
Cに對するBの%	五一%五〇	……	……	……	五〇%八八	……	……	……	五五%八九	……	……	……

（備考）　玆に支那とは我が貿易表に現はれた支那、關東州、香港の合計である。

存してをり、しかも、その品種の殆んどすべてが、いま現に支那に勃興しつゝある近代工業と同種であるかを、具體的に示して、讀者の印象を深くするために、少し面倒ではあるが、之を數字で示すことにする。即ち、第一表に掲げるものがそれである。(註、玆に對支輸出とは、支那、關東州、香港を合計したものである)

別掲の第一表によつて見るに、綿絲、綿織物、精糖、麥酒、紙類、硝子及同製品、機械及同部分品、鐵製品、ゴムタイヤー、洋傘、ランプ同部分品（電球を含む）、綿ブランケツト、石鹼、帽子、絹綿電線等、我が近代工業の重要輸出品の殆んどすべては、その輸出の五割內外から約十割（即ちその全部）を對支輸出に依賴してゐる。しかして、別表に載つてゐない、我が近代工業重要輸出品として、外に、燐寸、メリヤス、セメント等があるが、これ等は何れも、支那內地に於ける同種產業の勃興のために、已に支那市場から驅逐せられて、その對支輸出は重要性を失ひ、全體としての輸出も亦已に衰退しつゝあるものである。

以上の外、我が對支重要品としては、石炭、水產物の二種があるが、その何れも輸出全體の八割以上を支那に賴つてゐる。しかして、いまこの石炭及水產物と前記の近代工業製品とを合計した對支輸出は斯種品輸出全體の六割より七割近くを占め、その對支輸出の總額は昨大正十三年に於て三億五千四百萬圓であつて、我が對支輸出合計の約七割一分を占め、十二年には同じく約六割九分、十一年には同じく約七割一分であつた。我が對支輸出の殆んどすべてが、いま、支那內地に勃興しつゝあり更に關税自主權の回復によつてそれが促進される位地にある、粗工業的近代工業品であることを窺知し得るであらう。

しかも、我が對支輸出は、我が輸出總額に對しては、十三年二割七分六厘六毛、十二年二割七分三厘、十一年二割八分七厘五毛に過ぎないが、しかし、之を我が資本主義經濟の近代工業品の輸出と云ふ立場から見れば、我が輸出の中には對支輸出の殆んどない、我が原產品の輸出を多く含んでゐる。そこでいま、假りに生絲類及絹織物類を差引いた額に對支輸出額を比較するに、十三年十二年十一年ともに、その約五割餘りに相當する。即ち、之を他の言葉で云へば、我が近代工業品（生絲及絹織物類を差引いた）の輸出の中、大觀してその約五割は對支輸出に依存してゐることになる。(詳細の數字は別掲の第一表を參照せられたい）所で、我が絹織物の輸出は大してないから、この割合は單に生絲類のみを差引いた輸出總額に對しても略ぼ同一であつて、しかも、その割合は多少の變化はあるが、大體に

大差なく、大正五―八年の特別事情を除けば、明治三十六―四十年平均の四割一分五厘五毛から漸增して、大正九―十二年平均に於ては四割七分四厘一毛に增してゐる。參考のため、原數字を示せば第二表の如くである。

(二) 對支輸出の我が輸出に對する位地

平均	生絲類を差引ける輸出總額 (百万円)	內、對支輸出 支那本土 (千円)	內、對支輸出 關東州 (千円)	內、對支輸出 香港 (千円)	對支輸出の對全體％ 支那本土 (%)	對支輸出の對全體％ 關東州 (%)	對支輸出の對全體％ 香港 (%)	對支輸出の對全體％ 合計 (%)
明治二〇―二五	二九、五八五	六、八五六	―	八、五一四	三三・一七	―	二八・七八	五一・〇〇
二六―三〇	四二、四八八	一三、一六二	―	一九、一二二	二八・六七	―	四五・〇〇	七三・〇〇
三一―三五	一三四、〇四九	三八、三二八	―	三四、五三二	二八・五二	―	二五・七五	五四・〇〇
三六―四〇	三三三、五一五	八七、〇一二	四、〇八〇	三五、九〇九	二八・七〇	一・七五	一一・一〇	四一・〇〇
四一―四四	二六二、三〇八	七七、九四六	一八、九一二	三三、〇四九	二九・七三	七・二一	八・四一	四五・〇〇
大正一―四	四〇四、九一〇	一四三、二四九	二五、四六三	三〇、七五三	三五・三八	六・二九	七・五九	四九・三〇
五―八	一、一六八、一三七	三三九、三三三	九二、三三二	五三、七五三	二七・五九	七・九〇	四・六一	四〇・一〇
九―一二	九九五、八二六	三三五、八〇三	八二、七四六	六三、五三八	三三・七三	八・三三	六・三八	四七・四三

兎に角、以上によつて、大略ながら、我が資本主義經濟の近代的工業（生絲を除く）の對外發展の約五割までは、對支輸出に依存してゐるものであること、しかもその對支輸出の殆んど全部が、支那內地に現に勃興しつゝある近代工業のために已に多かれ少かれ驅逐せられつゝあるものであつて、その上、近く支那の關稅自主權の回復――又はその代償としての稅率の引上げ承認――によつて、愈々大なる競爭を脅かされてゐる位置に在ることを容易に看取し得るであらう。しかも、如何にモガイた所で、この運命から、我が資本家は脫することの出來ない時勢にあることは、前に述べた通りである。

三、支那の稅權回復と我が資本主義經濟の運命

元來、粗工業時代の階段に於ける資本主義經濟は、勞銀の低廉な後進資本主義國に產業の勃興せば、之れとその國の市場に於て到底競爭し得ないのが、世界の經濟史の示す所である。就中、今日の場合の如く、關稅政策による帝國主義的發展が、一朝にして、その根抵を破壞せらるゝが如き場合に於てさうである。人爲的に、對手國の產業を壓迫し來つた强壓力が薄らぐに從つて、競爭はいよ〳〵困難を加ふる筈であるからだ。そこで先進工業國は、斯る場合には、常に一方には技術を精練して、後進國の追隨し得ざる精工品に進むと共に、他方には鐵工業品にその國の產業の中心を移したものである。例へば、英國、獨逸、米國、皆なさうである。然るに、いま日本には、鐵工業に移る資源を國內に持つてゐない。勢ひ、此際に於ける、日本資

本主義經濟の對抗策は、粗工業より愈々精工業化して行く外に道はなく、現に、當業者の或る方面に於ては、この方面に進みつゝあるが、しかし、さうした方面への進出は、一歩一歩益々英米獨其他の先進工業國との競爭の激化を意味し、益々我が資本主義經濟の位地を困難ならしめる。

斯樣なわけで、我が資本主義經濟は、いまや、下からは支那工業からの競爭を蒙り、上からは歐米先進工業國の壓迫を受けてゐる事情にあるが、この危急存亡の秋に際して、政府や資本家の採りつゝあり、又は採らんとしつゝある對策は、關稅保護の引上げか、勞働條件の低下運動位ひである。云ふ迄もなく、斯樣な、時勢に逆行した政策によつて、我が經濟の難局は毫も緩和せられることなかるべく、却つて、益々、困難を加ふるであらう。何となれば、關稅保護はなる程當該事業には何程かの利益を保證するか知れないが、それだけ他の事業の生產費を增し、生活費を騰貴せしめて、いよ／＼、我が產業の對外競爭力を低下せしめる。更に、我が產業が精工業化するためには、勞働者の待遇を今日よりも更に引上げることを絕對必要とするが、斯かる場合に於て、我が資本家の之を引下げんとするが如き手段に賴る限り、歐米と競爭して精工業化に進出することは到底夢想だもし得ない所である。

しかし乍ら、斯樣な無駄な努力に、政府や資本家がグヅツいてゐる間に、我が資本主義經濟の困難はいよ／＼加はり、民衆の生活は益々壓迫せられて、民衆の反抗を呼び起し、このまゝでは、到底永く現狀を維持し得られないと云ふ時期が、早晚來るに違ひない。宛も、英國が現に歐洲戰中、後進國の產業勃興のために、その資本主義經濟の行詰が、いよ／＼深ふしつゝあると同一である。之を更に、今日の流行語で云ふなら、我が資本主義經濟は、その經濟的帝國主義による對支發展の根抵をいま覆されて、その帝國主義的發展階段にある資本主義經濟の一方の主柱を、覆されんとしてゐるのだ。

斯樣にして、我が資本主義經濟は、いよ／＼、次の經濟政策に進むであらう。次の經濟政策とは、今日の資本主義經濟の組織の改造に取りかゝることであつて、今後、益々各種制度の改革や、產業の國有問題やが勃興するに至らう。云ふまでもなく斯くて、新に擡頭すべき組織の改造運動は、いかにもこれ迄の資本主義經濟の原則を捨てゝ、一歩／＼社會主義經濟の原則を採用する外ないのであるが、しかし、それが資本家階級より運動せられざる限り、斯樣にして、經濟制度に於て讓步しながら、社會主義經濟のより大なる機能を利用して、依然、搾取の備だけは維持しやうとするものである。しかし乍ら、結局それが如

何に轉囘するかを決定するものは、今後の無產階級の自覺如何に懸ること云ふまでもない。

以上之を要するに、支那に於ける關稅自主權の囘復運動は、之を日本に就いて云ふ限り、日本資本主義經濟の、帝國主義的發展の一方の主柱の倒壞を意味し、それだけ、日本資本主義經濟の行詰を促進するものであつて、その行詰に對する根本的轉換運動が、近く勃興するであらうことを豫期する。私は、この點に於て、支那の關稅自主運動に、至大の興味を感ずるものである。尤も、その支那關稅自主運動の影響は、今日の國際關係に見て、一擧にして襲ひ來ることはあるまじく、各國は出來るだけその影響の漸進的ならんことを努めるであらうから、それだけ、以上に述べたるが如き我が資本主義經濟に及す影響は漸進的であらう。

支那關稅問題と日本

武藤山治

近かく開かれんとする支那關稅特別會議は、吾國に取り最も重大なる關係がある。それは此會議の目的が、名は關稅會議でも始めより一の經濟會議として、關稅以外にも渉るものとせられて居るからである。斯く言へばとて私は單に眼前に橫はる利害關係からではない。關稅なるものは古き昔から行はれたるものであつて、歐洲諸國に於ても封建時代には、國內にて關稅を取立てたものである。勿論それは重商主義の發現と共に悉く撤廢せられて、現今の國境關稅となつて居る。吾國に於ても吾々の耳に殘つて居る關所なるものが、軍事上のみでなく、國內關稅制度の一種であつたのである。然るに支那に於ては、昔時の國內關稅制度其儘が今日も猶殘存して居る。かの常に問題となる釐金制度の如きは、支那に於ける內地關稅の最も煩苛なるもので、支那關稅問題が議に上ると、此支那特有の釐金制度其他種々の名義で取立てる內地關稅廢止問題の起るのも無理はな

い。支那政府及び支那の有識者は、支那が輸入超過國であるから、輸出を奨勵せねばならぬ地位にあるのに、國內關稅を課するは、自國の爲めにならぬことを充分に理解して居り、之が全廢に異議のある筈はないが、各地方の財源が之に依つて得られて居る爲め、之を標榜しながらも實行が出來ぬ立場にある。私が玆に、支那國內關稅制度が今日猶殘存して居ることを述べるのは、今度の特別關稅會議で之が問題となつて、釐金制度廢止杯が決議されても、それを支那政府は容易に行ひ得ぬ事情の下にあることを、讀者に御注意を願つて置く爲めである。

元來支那は經濟的には余程遲れた國である。支那の利益であつて行ひ得ぬ經濟問題は、釐金の如き國內關稅許りでない、米の輸出解禁問題の如き明らかに支那國民全體の利益であるのに今猶行はれぬのは、支那政府の無力と、支那國民の經濟的無理解の甚しきを示して居る。吾々日本國民も、經濟問題となると、吾々をして時として其無理解の甚しいのに驚かしむることがあるが常時米の輸出を禁止せねばならぬと考へるほど、無理解でない。尤も維新の當初までは吾國も米の輸出を嚴禁することと支那と同樣であつた。然るに、或る年吾國が米の不作で大飢饉が起つた時、當時の黑船に外國人が米を續々積んで來たから、始めて貿易なるものゝ眞意義を理解して、米の輸出禁止を解いたのである。それを支那は官民共に、今日に至るも猶依然として之を解かずに居る。然しながら支那政府及有識者は、米の輸出禁止が支那の爲め利益にならぬこと位は、尠なくも理解して居ると思はれる、唯之を斷行し得ぬのは、米が高くなると國民の生活を脅かし、治安が維持されぬと恐れて居るからである。私は、一昨年漢口に於て、支那の有力なる商人に向つて、米の輸出禁止を解くことが、支那の經濟的開發の先驅であり、支那國民全體の爲めにも利益幸福を齎らすものである、と說いたところ、何れも贊成したが、其結果急に米價が上がり暴動の蜂起するのを恐れて居つた。斯の如く支那は政府が治安を維持する能力を欠いて居るから、今度の關稅特別會議に於て、最も列國の代表者が觸れねばならぬのは、支那の爲めにも之と通商する列國の爲めにも、如何にして支那政府をして、完全に、治安を維持せしむるかの途を講ずることである。

關稅特別會議の主要の問題は、私が特に說明するまでもなく、大正十一年華盛頓軍縮會議で、支那の一般關稅二分五厘、贅澤品五分引上げることに略ぼ同意し、別に關稅特別會議を開會して決定することになつて居るのであるから、此關稅率を引上げることに同意すれば、それで濟むようであるが、華盛頓會議の話合に依れば此支那關稅特別會議の席上に於て、關稅以外

それと關聯する賠金問題其他の支那の經濟問題にまでも觸れる約束になつて居るやうであるから、今度の特別會議は單なる關稅會議でなく、其成行如何に依り重大なる意義のある會議となるのである。

此度、關稅特別會議の主題たる一般關稅二分五厘、贅澤品五分引上げることにより僅かに支那政府の爲め收入を三四千萬元增加する丈で、之れも列國が支那に無擔保で貸して利子も取れずに困つて居る六億五百二十萬元の借款の利子として取られるのであるから、支那政府としては此關稅特別會議を其位のことで終らせたくない、何者か他に産み出したいと計畫するは當然である。之れにしても列國使臣が華盛頓會議で、此僅か許り支那の收入を增す、然かも、それも借金の利拂に取り上げるやうな關稅引上げの問題を主題として、他にも色々各自國に都合のよささうな問題を持ち出さうとする一種の經濟會議の開會を約束したことは余り勝手過ぎて其豫期に反する結果となるは明らかである。

支那は今度の關稅特別會議に於て極力治外法權の撤廢と關稅自主權の恢復を主張するやうである。是は支那としては當然のことである、殊に先頃支那の各所に起つた暴動の成行を見ても、部分的に之を見れば、紡績工場に於ける雇者被雇者の爭ひの其中に種々の不平分子が加はつたに過ぎぬやうにも見え、又露國共産政府の關係が濃厚であるやうにも見えるが、要するに此度の世界戰爭が捲き起した思想の動搖が、支那にも現はれたもので、唯それが支那では年少なる學生に依りて重もに指導された爲め、排外思想や左傾的極端なる思想に支配されたのであつて、多年政局不安定、軍閥的職業政治家の跋扈陰謀、之に反對せる孫逸仙一派の國民黨により高唱せられたる不平等條約の破棄、其他過激なる言論が、自然と學生の思想を動かすに至つたのである。外國へ留學して新智識を得たる支那の新人達や、上海其他開港地の外國人の設立せる學校にて高等教育を受けつゝある學生が、自國の現狀を見て不平不滿を抱くも止むを得ぬことで、居留地に於ける外國人の橫柄なる態度も癪に障るのであらう、多くの企業が外人に依つて營るゝのを見るも不愉快であらう、加るに今度の世界の大戰爭は支那をして聯合國に參加せしめたる爲め、一方支那人の自負心を大に强烈ならしめた點もある、頃日上海で暴動が起つた時、諸外國人は、義勇兵を組織して夫々居留地の防禦に努めた、然るに獨逸人は之に加はらなかつたのである、之に付き新聞紙に寄書して一英人が非難したるところ、之に對する獨人の答辯は獨逸人は今日治外法權の保護を失つて居る、若獨逸人が義勇兵となつて支那の暴

徒の手に落つれば、裁判を受けずして打首されるから、義勇兵側に容易に加はれぬでわないか、と答へて居る。支那人より見れば、先頃まで强大な獨逸人も、今や何んとも思はぬようになつた。隨つて諸外國人に對しても、從來の如く考へぬようになる、是等種々の事情を思ふと、支那には常に騷動の起り易き空氣が釀生されて居るのである。更らに其根本原因として、吾々は支那が經濟に行詰りつゝある現狀を認めねばならぬ。支那は今度の大戰爭前迄は、英國始め歐洲各國より盛んに投資され、鐵道丈でも支那國內に於ける勞働の需要は可なり多かつた、然るに開戰と同時に、全く外國より資本の輸入が止まり、支那の政局が安定せぬ爲め、戰爭が終り米國は盛んに諸外國に投資するに係はらず、支那には資本を投じない、歐州各國は勿論他を顧みる暇がない、茲に於て支那は極度に國內の不景氣に惱まされて居る。從つて失業せる各地の勞働者は職を求むる爲め、居留地に向つて集り來る、治安を維持する力のない政府の下で、居留地に暴動の起るのは火の氣のあるところに煙の上がるようなものである、露國共産政府が支那を活動の舞臺とするのも別に證據を詮索するまでもなく容易に察し得られることである。

故に吾々日本の側より考へ、支那に對する問題は今一層深刻に考慮せねばならぬ。今度の關稅特別會議に於て、列國は如何なる程度に於て、支那の要求たる不平等條約の撤廢に就て考慮を云ふであろうか、思ふに極めて不徹底なる外交的辭令を以つて充たされたる意見、又は覺書の交換に止まるであらうと信んずる。是は支那の現狀に於て止むを得ぬことであつて、論理は如何に明らかであつても、治外法權の撤廢は勿論上海の居留地が支那人の管理に移さるゝことでも、何人も其不可なるを認むる、蓋支那人自身も之を嫌ふであらう、支那の商人杯は、居留地が現行制度の下にあるの故を以つて居留地に集つて來るのであつて、支那人の手に其管理が歸するは第一に反對すると思ふ、ロイド・ジョーヂ氏は上海の市參事會員に支那人を加ふべしとの意見を述べて居るが、或は今日九人の市參事會員が英人六名、米人二名、日本人一名で組織せる中へ、一二名の支那人を加ふるは可なるようであるが、私は自治精神に乏しい支那人を市參事會員に加ふることが、上海の市政に有利の結果を來すとは思はぬ、此點は遺憾ながら吾々日本人も支那人と共有性を持つて居る、然しながら支那人も多數居留地內に住居し、納稅して居る以上一人や二人位參事會員に選擧せしむることとは、それで感情が融和するなら之を容認すべきである、去りながら私の見るところは支那の問題は斯の如き姑息な讓歩に依つて解決し得るものとは思へぬ、今度の關稅特別會議は、要するに其主題が關稅の引上にある以上は、其範圍より遠く出づることは行はれぬであらうと思ふが、私の希望は支那と關係深き列國が此關稅會議に引續き支那の爲め最も好意を示して、支那問題を永遠に解決する一の協議會を、北京又は吾東京に於て開會

することに、吾政府當局者の盡力せられんことである。

支那が今日の如き不安狀態に陷れるに就ては、私を以つて見れば、列國共其責任があると思ふ。よし善意から出たとしても、從來支那に對する列國の外交を見るに、支那政局の安定を期する爲め、總體的に又共同的に盡した場合もないではなかつたが、多くの場合或一部の支那人を助けて、それ等の人々の勢力に依り、支那を安定せしめようと謀つた。それが爲め支那は安定させられずして、動搖させられる場合が多かつた、支那人全體から見れば有難迷惑であつたとも言へる、然して今日では、列國何れも手を引いて、成るべく相手にならぬようにして居る、之に對して支那は、既に財政に行詰つて金を貸せ貸さなければ亂發すると言つたような狀態である。

私は日本として、此支那の不安な狀態を傍觀して居るは、隣邦であり同文同種である德義から言つても、又經濟關係の密接なる點から考へても、大なる考へ違であると信ずるもので、大正十一年華盛頓軍縮會議の時も、吾全權大使に依つて、支那に對する問題は、單に僅か許りの關稅引上や主義として何々を認めると言ふようなことでは解決するものでない、宜しく列國に向つて、吾東京に於て一の支那財政經濟會議を開き、成るべく各國より多くの實業家を參加しめ、支那問題を根本的に解決する方針を以つて提議せられたし、と望みたるも、聞かれざりしは遺憾であつた、又本年一月通常議會に於ても、支那關稅問題に關聯して、此問題に付き加藤總理大臣の意見を質したが滿足なる答辯を得なかつた。然ながら私は今日でも同く信じて居る。支那問題は姑息なる方法で滿足なる解決を得るものでない、支那に對して今少しく立入つて世話をしなければならぬ。他國の內政に干渉することは不都合である杯と言ふ反對論があるかの知れぬが、私は個人と個人の場合も、國と國との場合も同一であると思ふものである。個人の場合に於て他人を世話するのには其人の內政にまで立入ることが寧ろ親切であるとすれば、國の場合にも其國の財政の問題に立入り世話しようとすれば、善意の干渉は止むを得ぬのである。列國が幸に日本の斡旋に依つて支那の財政整理を根本的に援助することになれば、支那も喜んで其親切なる干渉を受くると思ふ。吾國も支那の爲めには一肌脫いで積極的に盡すべきである、多少の金錢上の不利も覺悟して誠意支那を助くべきである。是れ支那を救ひ亞細亞を救ひ、世界を將來の禍根より救ふ吾國の一大使命である。私は吾國民が支那の關稅問題より更らに一步研究を進めて、吾國は支那と共存共榮の間柄にあるを思ひ、恰も個人が親戚に整理の必要が起つた場合と同樣に、支那の內政にまで立入りて世話するまでの決心を固め、列國の贊同を得て、支那問題を、永遠に解決する爲め、一大犧牲を拂ふ必要と其義務を認むるに至らんことを切に望むものである。

私の切實な問題

眞の友を

新明正道

今夏私の用で滿洲に行つてきました。一ケ月にも足らない滯在でしたが、その間支那人と接觸する機會が多く、私にとつては好い見聞だつたことを思ひます。その印象を一口にいへば彼等は原始的であるだけ幸福な社會を樂しんでゐるといふことです。しかし、家へ戻つてきて支那の前代の詩文などを讀んでみると、あゝいふ濃密な人間的接觸の中に生きてゐたものとしては不思議なほど生活の孤獨を嘆ずる者が多いのを發見し、意外に思ひました。しかし、よく考へてみると、これは反つて當り前か知れません。如何に人情淳朴な社會にあつても我等は文句以上に萬人に友を求めることは不可能なのです。實に友の問題は我等の生活において絶えず切實なる思ひを迫つて已まないものです。我等は安易に友を得たと考へてゐますが、眞の心の友は果して幾人あるでせうか。種々の主義の一致によつて同志といふものが出來ますが、同志は直ちに友には成らないのです。勿論、ロマンチックな氣持でお互ひが同志といふ言葉のもとに眞の友情が成立してゐるもの〻やうに考へてゐる場合が多いのですが、やがて同志といふ形式的な言葉に空虚を感じてきます、單に意見の一致によつて友は出來ません。相對した鏡のやうに互ひに心を削み合ふことが出來なくては。かういふ友が一人でもゐたら如何に心強いことであらう。何事を爲さうと志ざすにせよ、友は欲しいものです。しかし、互ひに友を求めながら人間は終ひに永久自己の孤獨を嘆じてゐるのです。支那に友無きを嘆ずる詩の多いのは、その社會が友情に缺けてゐるといふよりは、彼等が友を求むる心が傳統的に切實なるものが有るからではありませんか。友は我等の日常を摑む切實な問題です。我等は儉吝な多くの友を必要としない。唯だ僅かの眞の友を。かくの如き友と携へて、欒榮動き山犬が吠える山の邊りを、人生の閑暇ある折々、散歩することが出來れば、如

何に幸福なことでありませう。支那の詩をよみながら、私は屢々自分にも迫つてくるかうした問題について、涯てしのない瞑想に耽りました。

要するに自己對社會の問題

小川未明

私は、いま過去二十餘年間の作品を選集することにあたつて、感慨に耽るといふよりは、その間に於ける自己對社會の關係を意識の上に新たにさせられてゐます。

既往に關してのことは、少なくもここには言ふ必要がない。たゞプロレタリアの正義感から、また友情から、私のために、極めて世間的でない作品の選集を出版すべく百難を厭はざる、島中雄三氏に對して、衷心から感謝してゐることです。氏は、もとより財力があつてのことでないがために、この事業も友人諸君の聲援に待たなければならなかつた。しかし、友人達は、援助に、紹介に、純粹にして、温かき、親切を惜しまれなかつたのです。締切期日には、幾何もない今日に際して、私の希ふところは、他にも、無産階級の文化を宣傳しつゝある文化學會に損をかけたくないことです。他に比して、部數の少ないといふことなどは意とするところでない。私は、それだけの眞實なる讀者を、かの一種暴力にも等しい巨額な新聞廣告によつて得た、幾千人よりも、どれだけ貴く、力強く感ずることであります。これを負惜しみと言ふ者は、其人がブルジョアであり、もしくは、その心の持主だからである。無産階級は到底金に於て、彼等と戰ふことができない。頼みとするものは、たゞ社會の正義感である。不正を憎む人々の理性である。……自身の問題については、斯く感じつゝある一方に、以上の憂慮の原因をなす、今日の不景氣について無關心でゐられないのであります。

何人がまた平氣でゐられませう。もしこの際、「そんなことを俺達は考へる必要がない」と、言ふものがあつたら、誰しも、その人が社會生活意識を有しない、共同の責任感に乏しい、むしろその鈍感さに驚かぬものはなかつたらうと思はれる。

實に、この頃は、この不景氣が、いつになつたら恢復するだらうと殆んど毎日のやうに、頭の中に浮ばぬことはない程、切實の問題となつてゐます。

一時は、可なり多數の文筆業者を收容し得た文壇も、この不景氣以來、職業的價値を失したやうに、さながら特種的な仕事になりかゝつてゐることです。それだけ、この方面の失業者の多いことは、こゝに身を置く者にとつて憂へなければならない。この不景氣が單なる週期的のものでないことは、經濟學者等の所說である。それで、濱口

藏相によつて實行される。この程度の緊縮政策によつて解決せらるゝものならば、それで辛棒もできるが、もし、それだけで覺束ないものなら、今後いかなる方法に依つて、國民生活の不安を救ふべきか、何の政黨でもいゝ、またどの政治家でもいゝから、私達に、政策の大要だけなりと示してもらひたい。不安と、光明のない心持でその日を送るのにやうやく堪えられなくなつたからです。

以上の二つが、最近に於ける最も私にとつて切實な問題であります。

——九月三日——

切實な欲求を殺す工夫

青野季吉

「切實に感じてゐること。」社會的、個人的にいくらもある。長くつゞいてゐるもの、瞬間に消え去るもの、どれもこれも「切實」でないものはない。

社會的のことは云ふ限りでない。

個人的のことにして見ても、ひ弱ひ妻の顏を見ると、ぴんぴんしてくれないかなあと思ふ。いつも苦勞ばかりしてゐる妹のことを思ふと、せめて小さな幸福でもいゝからしつかりつかませてやり度いと思ふ。本を讀みたくても本がなく、勉強しやうにも時間と金のない仲間を見ると、小さな研究所でも起せればいいがと、あてのない計畫を樹てゝ見る。そろばんの化物のやうな出版屋ばかりで、出したいと思ふ書物の出せない時は、損失の上にある出版屋の一軒くらゐはあつてもよささうなものだと考へる。月末になつて金の廻らぬ時は、決してのらくら遊んでゐるのぢやないのだから、わづかばかりの生活費をくれて、仕事をさせたり、本を讀ませたりしてくれる篤志家はないかなあと、蟲のいいことを考へる。そうかと思ふと、少し脈の加減でも惡いときは、せめて病氣の時だけでも生活のことを氣にしないで居り度いものだと、つくづく思ふ。

ざつとそんな具合である。

しかもそれがたいてい、金さへあれば或程度乃至は全部の解決がつくもので、その金に縁がないと來てゐるから、結局、「切實な」希望や欲望も、知らぬ面でかみ殺したり、苦笑して發散させてしまつたり、原稿紙にくるんで屑籠へ放り込んだりしてしまふ。まことに他愛のないものである。

そこで論理的には、金を欲しいと云ふことが一番「切實」になるわけだが、これは今も言ふ通り、僕等にして見れば、星を欲しいと云ふのと變りがないのだから、絶對に見込のないものには働かない心理のメカニズムにしたがつて、心理的には切實な要求ともならない。

僕はよくかう思ふ。文學者などは何かと云ふと、生命の要求とか、欲望の

満足とか、思ひ切り自分を生かす、とか偉らさうなことを云ふが、あんなことが言葉以外にあつたら大變だ。僕などは、自分の生命を殺し、欲望を墮胎させ、見て見ぬ振りをすることに汲々としてゐる。これ以外に生きやうがないぢやないか。この惨酷な殺人的心棒が自分にあるから、人並に社會人として通つて行けるので、それがなくてうつかり「自分を生かし切つたり」でもしやうものなら、正眞正銘の氣狂ひにされてしまふ。

困ツたものである。

土と魂との生長

室伏高信

私はハムスンの畫けるごとき處女地に、土と魂との美しき諧調、そしてそれの生長とを希ふの日のきたらんことを思ひわづらひ居り候以上

『失業の鐵則』打破

出井盛之

政府は近々大規模な失業調査を行つて、失業問題對策を確立する資料を蒐集するさうだ。實はそんな泥縄的、いや初めから效果の擧らないことが分り切つてゐる宣傳的な調査などやらなくても、賢明なる政府は、すでに六大都市の市長さんを集めて、失業救濟の評議を凝らしたといふことである。しかし現政府は根本方針として、勞働賃銀を引き下げ、生産費を低廉ならしめ樣とする、『緊縮政策』を止めやうとして居ないから、當分無數の勞働者は浮ばれないものと観念しなければならない。

一つこゝに不可解であるのは、常にわが社會の進歩的輿論の中心である新聞紙が、失業問題に對しては、政府と同じく極めて冷淡であることである。これは一體どうした譯か。なるほど諸新聞は社會欄に於ては、失業群の困苦の有樣を同情的によく報道して居る。けれども社說に現はれた經濟問題の諸評を讀むと、そこには該問題に關しては、甚だ無關心の思想が潜んで居ることが發見される。普選の如き問題に就ては、民衆に味方して大努力を傾倒した、新聞勢力が揃ひも揃つて經濟問題に對しては、反動的態度を執つて居るのは、どうしても私には解し難いことである。

一例を今朝（九月二日）の東朝紙に求めやう。社說欄に『財界の變態現象』と題した文が書かれてある。その變態現象といふのは、今日不景氣のどん底にあつても、依然として物價が低落しないといふ事實を指すのである。

こつ現象の説明として、三つの原因が数へられて居るが、主要な原因として、政府も個人も消費の緊縮節約が、なほ不十分であるといふことを強調して居る。斯様に、現在の物價高の由來する處も、生産の不能率といふ點に歸因せしめずして、消費惡徳の經濟思想から割り出して居るから、結局勞働者階級により大なる、しかも定安した購買力を與へやうとする失業問題解決方法には、勞働者階級の消費を促進することゝなるが故に、踏み込んで賛成はできぬといふ論法になるのだ。そこまで徹底して論ぜられてないにしろ、獨り東朝紙に限らず、都下の有力なる諸紙が、これに類似した論調を殆んど共通して有して居ることは、爭はれないことだと私は思惟する。

とにかく、わが勞働者階級はあらゆる方面よりして、我が國繁榮策の害盃として、『失業の鐵則』といふべきものを、無理に強いられて居るのだ。國民の生活を限りなく不安に陥れやうとする、この誤れる陰惨思想を打破したかいのが、私の今最も切實に感じて居る問題である。

好、適、有効、邪魔

堺利彦

如何に殘年を費すべきか。

どうせ短かい人の一生なのだから、如何にそれを費すべきかは、初から『切實』な問題であるのだが、いよいよ年を取つて、殘年の極めて短かい事をハッキリ意識する樣になると、それが本當に『切實』な問題になつて來る。私の樣なノンキ性の人間でも、矢張りそこに相當の切實味を感ぜずにゐられない。

お前には社會主義といふ守本尊があるのだから、別だん迷ふ事はなささうなものだと云つてくれる人がある。然しこの本尊の御利益は廣大無邊である。その如何なる方面、如何なる部分のお取次をすればいゝのか。

自分の好きな事、自分に適する事をやればいゝのだと教へてくれる人がある。成程、尤もだ。それなら若い者にも老人にも當てはまるモットーだ。然し自分の好きな事ばかりやつてるのでは、我儘すぎる場合もある。自分に適すると思はれる事でも、全體の爲にチットも役に立たぬ場合がある。そこで『好き』と『適する』だけではどうも充分な標準に成りかねる。

然らば『全體の爲に有効』といふ事が、いつでも最後の標準にならねばならぬ。多くの場合、『好き』と『適する』とが『有効』と一致する筈で、それでこそ本人の爲にも、社會の爲にも人物の經濟的消費になるのだが、然しそこには又、銘々個人のわたくしといふものがあつて、或は我儘となり、或は

役に立たぬ事になる。そこで飽くまでも『有効』といふ事を第一の標準にして、その標準の決定を多くの人の意向に任せるより外はない事になる。

それで多くの人の意向に依つて、これがお前の仕事だとして自然に振向けられたら、よしんば自分に適しないやうに思はれても、それが本當に適してゐるのだと考へ、餘り好きでないと感じられても、努めてそれを好く様に心がけるより外はない。

多くの人の意向にも間違はあるだらう。然しそれは致方がない。自分のわたくしで間違を起すよりは、ましだらう。

又、積極的に『有効』を考へると同時に、消極的にはいつも『邪魔にならぬ事』を考へる必要がある。そして、この方では、人の意向よりも自分の心掛の方が肝腎になる。人の意向はツイ遠慮や何かで分りかねる場合がある。自分の心掛で早くそれを察する所に、自他の便宜がある。如何に自分の好きな事でも、如何に自分に適したと思はれる事でも總てこの『邪魔にならぬ』範圍に於いてすべきである。

若し又、何かの感激、何かの意地、何かの廻りあはせからして、好きも好かぬもない、適するも適しないもない、有効無効もどうでもいゝ、兎にかくやらねばならぬといふ、ノツピキならぬ場合が先じて來たら、それが萬々致方がないとして置く。

『熱』と『力』の精進

澤田正二郎

民衆の、藝術に對する歸趨を見極むること、今の私にとつて、これほど切實な問題はない。移りゆく時の流れ、何をもつてこれに備ふべきか。それはたゞ、單に目先の新傾向くらゐでは駄目だ。と云つて、昔の姿、そのまゝの踏襲、なほ駄目である。それ等は或は一部通人やよがりやの無意味な大向ふは受けることがあつても、到底澎湃たる時の流れを支へ得べくもあるまい。

然らば何だ！何を以つて私共は次の時代に向ふべきだ。それは理論でもない、色彩でもない、また音響でもない、從つて單なる手先の技巧や、纖細さや、そんな枝葉の小手業では無論ない。

移りゆく時勢の、眞に渇してやまないもの、それは實に「熱」と「力」である。

然るに、私ども同業の間では、長い俳優生活のしきたりとして、時に往々、この「熱」と「力」を蔑む習僻がある。或はこれを「素人藝」と嘲り、或はこれを「馬力」と罵る。先づわれわれはこの劇界の迷妄を打ち毀すことだ。そして、そこに熱と力の偉大な演劇を生み出すことだ。

「熱」と「力」！これこそ實に藝術向上の要諦であつて、又同時に人類進化の基調である。いつの世にも、小手の人は多く、手先の人は尠くない。だが、それは朝咲いて夕散る花の姿である。やがては萎れ、やがては飽かれる虹より果敢ない運命であらう。稀なるは「熱」の人であり、「力」の藝である。無明の闇に光を點じ、混沌のうちに建設を齎すものは、是れ、小手にあらず器用にあらず、實に全靈全身の「熱」と「力」であらねばならぬ。

とは云へ、「熱」とて「力」とて、決して、無智練、無理性、無情操のものであつてはならぬ。何等智練もない、理智もない、情操もない無闇な熱力は、舵なき飛行機より無益にして危險である。

従つて熱とは、力とは、必ずしも「挺身の勇猛を奮ふ」底の、單なる表面の「姿」ではない。靜のうちにも動があれば、動のうちにも靜がある。高き情操と、明なる理智と、そして深き智練の下に全身の熱と力を注いで進む精進——これより外はない。

これはただに、私ども演劇の上にのみにとどまらず、政治、文藝、科學、宗教、人類一切の向上を培ひ導く最高最善の基調である。

いゝ小說が書きたい

中村武羅夫

場合々々で、切實な問題も、いろいろに變ることは、誰だつて止むを得ないだらう。今日はどんなに切實な問題であつても、明日はそれが調和を得てしまへば、もう切實な問題ではなくなるだらう。國家や社會の問題は、外國と戰爭でもして居る場合の外は、私の實感をそんなに動かして來ないから、切實な問題と言へば、どうしても自分自身の問題である。色食の欲望は、それが饑えた場合には、切實を通り越して、非常に猛烈なものだが、それは刹那的のものだし、問題といふ以上、もつと時間的に連續して、もつと一般性を帶びたことでなくてはならないと思ふのだが、さうすれば私に取つて、この二十年くらゐの間、一番切實な問題は「いい小說を書きたい」といふことだ。今更、こんな返事をするのは、幼稚なやうに思はれはしないかとも思ふし、氣取つてると思はれはしないかとも思ふし、少なからず氣が引けるのだが、どうも仕方がない。

「いい小說が書きたい」といふだけでは、あんまり漠然として居るかも知れない。だが、それには私だけのいろいろのわけもあれば、理窟もあることなのだ。それをこゝで詳しく說明してる暇はないが、手つ取り早く一口に言へば「いい小說を書く」ことは、私自身に取つて一種の救ひなのである。人間としてはいろ〳〵の缺點を持つてる

し、生活はなつて居ないし——私自身を私は、どうも仕方ない存在だと思つてるのだが、その仕方ない存在も、私の考へてるやうな意味での「いい小說を書く」ことに依つて、初めて救はれるやうな氣がしてるのである。氣がしてるのではない、これは私の信念だ。私のやうな仕方ない存在も、その根本に「いい小說を書く」といふ切實な欲望を抱いて居ればこそ、私は許してやつて居るのである。

それではその「いい小說」だが、それは一體どんな小說なのか？人氣のある菊池寛氏や里見弴氏や、芥川龍之介氏などのやうな小說なのか？冗談ぢやない！私が小說といふものを、凡そどんな風に考へてゐるかは、今の時代に評判が惡くても「人生」の書き出しだけでも見てくれたら分るだらう。

對社會的には、物價が高いことだ。複雜な經濟的關係の組み合せなんか、よく分らないが、爲政者のやり口一つで、不當に高い物價を引き下げることくらい出來さうなものだ。それから東京市の往來や、交通機關のザマは何だ。一度でも市內電車に乘つたことのある人間で、東京市を呪はない人間があるだらうか。同じ中村でも、この中村を東京市長にすれば、三日くらいで整理して見せるといふ氣がする。全く齒痒、東京市の往來と乘り物の改善は、東京市に關係を以て生活してる者に取つて、最も切實な問題でなくてはならない。

猿になりたがる人間

田中耕太郎

人間が猿から進化したものとする學說が眞なりや否や私は知らない。猿からの進化を認めようとするなら我々人類は一體これから先に何に進化して行かうとするのだ。所が所謂社會進化の法則として主張せられる所のものは折角人間らしくなつた人間が逆戻りして猿にならうとすることを認めるものである。ストリンドベルヒ的に言へば、此の頃は猿になりたがつてゐる人間が餘程多いやうだ。

實際人間は徹底的に猿になり切れるものではない。概念的の學者や思想家は其れが出來るやうなことを主張するが、其の不可能は之れと矛盾撞着せる夫子自らの生活をして證明せしめよ。無論人間にだつて猿的の所が澤山あるのを否定は出來ぬ。其れだからつて純粹に猿になり切るものと豫定せられては堪つたものではない。斯る學者や思想家は統一した生活全部に就ての內省を缺いでゐるから自分自身の生活とぴつたりしない主を政治的理由から又自己陶醉的追隨から平氣で無良心に言ひ得るのである。部分的眞理が全部に行はれるものと annassen するのだ。

猿になり下つて同じ仲間の猿の敵に摑みかゝる代りに遙に彼等の上にあつて靜に彼等の自滅を持て。完全なるもの來らんとき不完全なるものは影をひそむるだらう。其れは勿論明日明後日のことではない。sub specie aeternitatis. 而して此のお目出たく見えるオプチミズムこそ實は問題解決の一番確實な捷徑なのだ。

勞働組合第一

鈴木文治

私の最近最も痛切に感じて居ることは、日本の勞働組合を、質に於て又量に於て、如何にして堅實に且つ大ならしむるを得るかといふ一點にあります。

日本の勞働組合は實際あまりに貧弱であります。それは情けない程貧弱であります。少しく歐米先進國の勞働運動に通ずるものは、誰れでも同感でありませうが、殊に直接彼の國のリーダー連と交遊し、且つその實際の活動を目擊した者に取つては、泣きたい程に情けなく思ひます。そして我身の無力と腑甲斐なさをしみじみと嘆ずるのであります。

日本現在の勞働組合、それを右から左まで一切合切を合しても、僅かに二十二三萬に過ぎません。然るにこれを外國の例に徵すれば英、米、佛、獨、の如きいづれも百萬、二百萬、三百萬、五百萬を以て數へ、白、蘭の如き小國に於てすら尚六十萬を以て算するの有樣である。然も、そのいづれもがたゞ一つに纒まつてゐるのではないが、二つ又は三つの大かたまりに纒まり、更に夫れ〴〵國際的に大同團結を遂げてゐる。翻つて日本の內部を見れば、あまり大きくもない組合が、各々分立孤存し、四分五裂といはんか、七花八裂といはんか、殆んど收拾すべからざる狀態にあるのであります。二つでもよし、三つでもよし、せめて大纒まりがつけば、日本勞働組合も相當力が出て來ると思ふが、今のやうに分裂又分裂を重ぬるに至つては、無產階級の陣容は正に亂るゝ一方であると言はねばなりません。私は實に之を嘆はしく思ふのであります。

これは果して過渡期に於ける一時的現象であらうか、それとも日本の國民性に根ざす痼疾的病患であらうか、容易に判斷は出來兼ねるが、大勢今のままにして推移して止まざれば、日本無產階級大同團結完成の日は、正に前途遼遠と言はざるを得ないのである。現存政黨が大同小異の政綱を揭げつゝ、我も相分れてゐるのを笑はれた義理ではないと思ひます。

何とかして大きいシツカリした勞働組合を築き上げたい、それが私の何よりの念願であつて、此爲めには身を粉

に碎いても敢て厭ふところではないと思ふのであります。無産政黨と言つても、若しその基礎に、その背景に大きい組織勞働者があるにあらざれば、トゞのツマり舊來の國民黨乃至は革新倶樂部と似たり寄つたりのものしか出來ないではあるまいかと感るゝのであります。それに勞働組合は國際政局、世界平和、國家間の外交問題等に關して今後益々否應なしに重要な役目を演ぜねばならぬ時機に際會しつゝあります。然るに今いづれの組合と雖も、未だ滿足な調査部一つを持ち得ない有様であつて、如何にして今後の難局に處して行くべきかを思へば、實に長太息を禁じ得ません。ましてや、不景氣は底知らずで、資本家もいよ／＼腰を据ゑて、時にはむしろ積極的に勞働者に挑戰し來りつゝある場合に於て、當面の經濟闘爭に於てだに果して十分の勝算ありやと心悲しく思はれるのである。

私は何をさしていても勞働組合の運動に熱中し沒頭するの決心です。無産階級の一切の運動の出發點は茲にあると思ふのであります。私は何等望むところなく、求むるところもありません。願はくば一日も早く、堅實なる百萬の組合員を有する組合を日本に欲しいのです。それが私の目下の至願切望であります。

新刊發賣

經濟學博士 本庄榮治郎著 **近世農村問題史論**（我國唯一の農村史論です。九月下旬發賣） 定價貳圓 送料廿二錢

與謝野晶子著 **人間往來**（第二次自選歌集第二卷本月發賣） 定價壹圓八拾錢 送料十七錢

前田夕暮著 **原生林**（第二次自選歌集第四卷本日發賣） 定價壹圓八十錢 送料十七錢

文學博士 松本亦太郎著 **知能心理學**（十月初旬發賣十月中旬發賣） 定價四圓五十錢 送料廿七錢

改造社

偉大なる法律の民衆化

大審院長 法學博士 横田秀雄先生序

法律研鑽會長 石角春之助氏
辯護士 坂本大五郎氏
共著

世渡に知らねばならぬ 法律常識

法律的に覺醒せる者は常に堂々と自己を主張し其運命を開拓し社會の優勝者となり立身出世の道を拓くを得ん

大好評

▼定價參圓五十錢 送料十二錢
▼三六判ポイント組九百頁總布函入 大冊

これまでの法律書があまりにむづかしくて、一般人に解り兼ねたが、法律の民衆化を自己の使命として努力しつゝある著者は、一讀誰でも速ぐに解るやうに、極めて平易に言文一致體に述べられたものが本書で、他に類例なき優越的特徴をもつてゐる。世の中には證文一枚も書けないやうな人があり、他人のために貴重な權利を害せられて泣寢入りをする人もある。本書はさういふ人達のために直ちに應用し得られるやうに、法律一般數百の條項に就て説明し、如何なる願書、屆書、證文、訴狀をも一々雛形を示し、一人で書けるやうに教へてゐる。本書一冊あれば辯護士を煩はす必要もなく、法律鑑定家に聞く必要もなく、又代書屋の必要もなし。希ふ速に購求せよ。

回 内容見本申込次第無代進呈す 回

東京市京橋區南傳馬町一丁目一番地
甲子書院發行
振替口座東京六六四五五番

萬葉集代匠記

契沖阿闍梨撰
文學博士 木村正辭校

萬代不朽の大著
國民精神研究の根本資料

▼國文學の寶庫開かる！

代匠記は萬葉集全注の嚆矢、空前の大著、研究上に一新時期を劃した名編、萬葉學の根本資料である。代匠記を見ざる者は萬葉を語る資格なしと謂はれるのは之が爲に外ならぬ。故に一たび絶版となるや古本が暴騰して容易に求め難くなつた。是れ江湖の熱望に促され新裝を凝らして再び見ゆるに至つた所以である。本版には初版の誤植を正し、目錄代匠記を總目錄に代用せしむる工夫を講じ、別冊として、木村博士述の萬葉集三辨證を附加した。三辨證は萬葉集全部を縱斷して字訓、字音、字形の三方面から深刻の研究を加へ古來の僻說謬見を打破して萬葉學の上に一新生面を開拓した名著で、今日の萬葉の大家も三辨證の恩澤を被らぬ者は無いのである。

〔特價〕即納金貳拾四圓（着金次第全部送本す）分納五回金廿六圓（逐次送本す）

郵稅（即納）市內貳拾四錢、內地九拾九錢、鮮、滿、樺、臺、壹圓六拾錢、（分納）市內六拾錢、內地壹圓四拾四錢、其他貳圓八拾五錢、（六册分前納）

〔期限〕十月末日限 期限後は分納を廢し正價金卅圓に復す

附錄共六册
菊判總布
紙數四千頁
天金、紙函入

内容見本 申込次第送呈

東京牛込 早稻田大學出版部

振替 東京一一二三 大阪六八九〇〇 名古屋二三四五

トロツキー原著
茂森唯士譯

文學と革命

定價貳圓
送料二十一錢

既成文壇の横紙破り

無產階級革命の曉、文學は如何なる位置にある乎――。現實無產階級革命の指導者たりしトロツキーが、本題を捉へ來たつて、彼一流の論爭的で力强い潑剌たる筆致もて、何人をも推服せしめずには措かぬ見解の適確さを以て滔々數萬言を費したのが本書である。而して本書をして永久に價値づけてゐる第一要素は、何よりも彼が批評の尺度たる唯物論的辨證法の正確さである、近時斯くの如く新味あり條理ある文學論は、吾等の未だ知らざる所である。譯文は正確にして且つ流麗、新人必讀の書。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

見よ!! 文學と藝術の正しき理解に入らんとする人の
渇望せる眞に權威ある我國唯一の新辭典！

忽五版

創元社編輯部編纂

文藝辭典

吾々が文藝に關する著書や雜誌を繙く時に、一番困るのは、それらに散見する術語の解釋である。たとへば、外面描寫、第八藝術、高蹈派、高級象徴、感受性、中篇小說、世紀末的恐怖、靜劇、正反合、セリ上げ、ソナタ、多樣の統一タランテラ、耽美主義、瞑想、クロツキー、ツオイロスの劍、トラピスト、内容美、ノーベール賞金、バアスト、ダダイズム、排主觀、音畫、バレー、伴奏、悲壯美、オラトリオ、プレリユード、プロツト、舞臺照明、未來派、モノドラマ、裸體美術、ラビリンス、リタツチ、律格、ルネツサンス、煉獄、ホガース美線、等の如く、特殊な内容や傳統的意義を有つ言葉が從來の辭書や最近流行して居る所謂新しい言葉の字引などでは、到底充分滿足の出來る解說を望まれないからである。

本書はそれらの言葉を、文學、美術、演劇、音樂等より蒐集し、最新語まで悉く網羅して、最も周到、正確な解說を施し、各項には、それぞれ英、佛、伊、羅の原語を附し、卷末添ふるに、世界的な藝術家略傳九十頁を以てして居る。故に文藝の最も正しき理解に入らんとするには本書は、我國唯一の權威書と云ふべく、讀賣新聞曰くこの精緻なる文藝辭典の現れたことは、文學界の至大な慶びであると。

内容

斬新、豐富、正確!!
四六判上紙五百頁
ポプリン美裝函入
定價 貳圓五拾錢
送料 書留拾八錢

發兌 東京芝區二本榎西町二 振替東京一五六五 創元社
發賣 東京銀座新橋際 福永書店

關西大賣捌 大阪市西區靱上通二丁目 振替大阪一九貳壹 福音社書店
其他全國著名書店ニ在リ



林子平の父

—岡村源五兵衛—

眞山青果

元文寛保の頃と思ふ。時の將軍吉宗の譴責をうけて士籍を削られ、雪深き奧州路の羈旅にさすらうひとりの武士があつた。年齡四十一二歲。筋骨たくましく、精悍の氣魄その面にあらはれ、眼中の慧鋭、おのづから人にせまるものがある。

突然の嚴命に、彼は旅裝をとゝのへる暇さへなかつたと見えて、腰に鐵鐔の大刀を横へ、身に些かの金子をつくるのほか、これといふ旅用意もなかつた。たゞその中に、坐臥の間も身邊をはなさず、始終人目を警戒して、用心を怠らない一箇の小荷物があつた。封裝嚴重にして内容は知るべくもないが、その形狀から察して書籍らしい。書物とすれば、可也大部の著書と思はれる。

もとより急ぐ旅ではない。又、定まる寄邊ある人とも見えぬ。彼は絶えずその前途にこゝろ迷ふ者の如く、そこに宿りこゝに寢ね、呻吟懊惱のうちに漂泊の日を重ねてゐる。白河の城下には知る人などあつて、暫く逗留してゐたやうに見えるが、やがて又そこを立ち出てゝ、岩代國信夫郡の片ほとりにしばしの隱家を求めてゐる。彼が江戸を發足したのは、歲の正月初めかと思はれるが、信夫の里に辿り着いたのはもう四月中旬であつた。

序に云へば、彼は無論その旅行の間、わが名を名乘つてゐたに相違ない。後の文反古を見ても、その時の名らしいものが殘つてゐる。然しそれはいづれも當坐の變名であつて、この場合の彼は本名を他人に明かす筈はなさゝうに思はれる。で、わたしは暫くの間、やはりかれを『彼』と呼んで置きたい。

彼の潜伏所は阿武隈の激流に臨みて、信夫の連山が前面にそ

ゝり立ち、物憂げたる山間ひの寒村であつたと自身に云つてゐる。宿かれる家は、貧しき農民の廢屋でゝもあつたらう。雪國のならひとて春は遲く、彼がその村に到着せる頃は、樹木の梢が一せいに季節を急いで、梅も、梯も、桃、櫻、卯の花などまで、晩春の空をいろどりて同時に咲きみだれてゐた。『ふる年より雪の消やらで、春も降りつゞきていと寒かれば、花も咲かぬなるべし。されば、この國の人は春の花を知らぬなるべし。』彼は田舍めづらしさに斯く呟きつゝもわが旅の遠く遙かなるを思はせられてゐる。

歲を繰れば、彼は元祿の末年頃をもつて江戶の繁華に生まれ、謂ゆる享保の治世は八代將軍の左右に昵近して、その半生を大殿の奧ふかく暮してゐる。その間に一度、臺命によつて京都に旅行したかと思はるゝほか、彼はほとんど江戶の外の地を踏んでゐない。随つて、初めて見る邊陬の窮民生活が、いかに悒せくもあさましく、彼のこゝろをいかに憂欝にしたかは、後に書き殘せる彼の隨筆によつて察しられる。彼は始終人を恐れて、恍々として落着きなき間にも、訛みにごりて聞き分けがたき土地の方言を聞いたり、がさつにして耻なき僻地の男女風俗を見ては、彼もやはり最初は都會人らしく厭惡の眉など顰めつゝ、絶えず望鄕の念ひに驅られてゐたらしい。然しそれも馴れるに随つて、次第に、土に耕して土に生きる稼穡の民の眞劍さと、自然と惡鬪してその生をまもらんとする窮庶生活の雄々しき原始感情に心うたれて、彼は時々しみぐ\とわが過去の生涯などを反省させられてもゐる。

『此國は仁部省獵人が立てりし碑にも、去三京師二千五百里となん云へる。都よりいと遠きえびすなれば、無道いも多なるべし。秋の頃、狩人の雁の雛もて來りけるを、いかに得つと問へば、初雁の渡り來るを、田面にてら（ママ）ゝ置きならべて呼びおろす。てゝはゝの數多の子を連れてあさるを、鐵砲といふものにて先づ母を射る。てゝは子をつれて飛び立つが、女鳥を戀ひてかへり來るを、此たびは父を射る。てゝはゝを射られて、子は惑ひありしを、追ひ廻はして打ち殺し、生ながらとりて囮にもすると、いと厳めしう語りぬ。あぢきなき狩人のわざなれど、餘りに不祥えみし心よ。』

『都にはべりて、歌など讀めることとなかりけり。いと貴なる人を思ひかけ侍りて、思ひ煩ひける頃、斯くやは言ひてきましと、云ひける人のはべりけるを嬉しく、心遣りにたゞ

詞に。

忍ぶ山しのびて通ふ道はあれど人の心のおくも知られず。と獨ごちて慰め侍りけり幾程もなく言贓されて、信夫の里に左遷らひける。都にては名をのみ聞きしに忍ぶ山に登りて、なにくれと思ひつゞけ侍るにも、忍びてかよう道は有りと口號みしも思ひ出られて、今日の身の上をあらかじめ言ひ出せるかなと、いと心憂くて又こりずまに。

しのぶ山今ぞしのぶの道なれや人に心のおくは知らせじ。と打眺めて下りぬ。劉廷芝が年々歳々と詠ぜしも思ひあはせぬ。命ばかり猶つれなくて、かなた此方さまよふらん。』

彼はこの後十年の放浪の間、格別知人親戚の扶助をうけてゐない。遁走のその日から、彼はみづから勞苦してその日の糧を求める境涯にあつたらしい。『昔富める時は、富めるまゝに奢らず。貧しき時は貧しきにしたがひて貪らず。都の手ぶりを捨てゝ、鄙のならはしに賤れぬ。野山に狩して、鳥獸を殺して寐鳥を獵り。』と書いてゐるのは、無論糊口のたづきに餘儀なくせられてゐるのだらうが、同時にまた、それは彼等窮民階級への接觸でもあつたらしい。初めは村人にも心をゆるさず、貴も推れ締めて一身の警戒に油斷なかつた彼が、次第に進み出て、彼等の生活感情に同化しやうと努めてゐる。或時は村人とともに焚火を圍んで怪異譚に夜を深かしたり、或は村の老爺の發にたゝずんで「鬼かた」や「たねまき人道」の郷土傳說を聞き探したり、時には又、土地の人々と連れ立つて、伊達の大木戶や國見を跋涉して、奧藤原家時代の遺蹟などを弔ふてゐる。獅巖の「すゞり石」義經の「腰掛松」など云ふ傳說地に遊んでは、村人に聞きやすからんためとて、『やくさうに腰かけ松さ來て見ればあらくづなくて心たまげつ。』など土地方言のされ歌を讀んで人々を笑ひくつがへらせたりしてゐる。

彼は醫書も讀み、本草物産の學に興味をもち、契沖や眞淵の古學釋義の非科學的なのを常に惜んでゐる。長崎通辭の深見新左衛門、（名は玄岱、天狗と號す。後幕府儒官となる）などに親炙せるためか、太た西洋の究理の學問を尊敬して、無稽なる迷信說を打破し、『世に妖怪なきを見極めたり。』と主張しながらも、狐や貉、野猫、河童の類だけには正直その變怪を認めてゐるところなど、やはり都會人らしい當時の時代常識がうかがはれる。彼はよく圍爐裡に村人を集めて、羽倉在滿に聞いたとか、大塚庄右衛門に聞いたとか云ふ諸國の怪異談を、言葉おもしろく話して聞かせてゐる。

『關の東の國々には、いなりとて野狐精を祭ひて、贄さかき立てゝ敬まふ。狐も善く祟りをなす。道の奥には敬まはず、狐も祟らず。たま〳〵祟れば人に殺されぬ。信夫にお山のごんぼう、一盃もりの長七、米澤に右近左近など、千歳の老狐あり、されど畏るゝ人なし。右近左近が誑かさんとや思ひけん、上杉が家の奴の、東の都に使ひして、たゞ一人山あひを歸るさに、道にさし出でゝ、何でう遲く歸りつる。大守のいと腹だちの給ふ。家に歸りなばおかしからがへられん、是より疾ういづち往ね、と云ふを見れば野狐なり。併つくき狐の業かなとて、刀ぬき切り殺しつ。名高き狐なれど、化けそこないけるにぞ。西の國にも似たること事あり。因幡國鳥取といふ所に、坂川彦左衛門と云ふ武士ありけり、雉子うたんとて、鐵砲といふもの持りて、野邊に行きけり。松原の中より人の出で來て、み狩にや、と云ふ形は奴にて面は狐なり。今日は家君に暇乞ふてまかりつ、み狩のおほんともに仕らん、と云ふ。惡しからず來ぬる、これ持てよ、とて鐵砲さし出せば、承りさぶらふとて、打ちかたげて後に立ちて來つ。とある家の門につきて、いで奴、雉子の有りや無しやと見をりて殘れとて、内に入りて、今をかしき者來なん、な笑ひそ、爲んやうこそあれとて居たれば、遲れ入りて、彼方此方を見はべれど、鳥の見へずと云ふ。困うじぬらんと云へば、厨のはたに尻かけつ。家人の敢て笑はず、茶をもりて與へぬれば、飲まで水乞ひぬ。こはしのまゝに與ふ。碗の水に姿うつして、驚きまどひて、碗水も振り捨てゝ逃げ出づ。皆さと笑ひて立ち。次の朝も雉子うちに出で、小松おし分け行けば、草叢の中より彦左衛門を呼ぶ。誰と問へど形は見へず、昨日は可笑しかり、とて笑ひつ、かの狐の呼びけるにぞ。』

彼は斯く流浪の身となれる原因に就いて、口を噤んで何事も洩してゐない。然しその口吻より察するのに、彼は堅く自己の潔正を信じて、絶えず寃枉の情をのべやうとしてゐる。又しきりに讒佞の徒の惡むべく恐るべきを説いて、人を見る明察なきわが性の迂愚を憫んでゐる點などに深い事情が秘められてゐるらしい。若し推測がゆるされるならば、或は彼の災禍の主なる原因は、彼が今瞬時も坐右をはなさずに用心を加へてゐる彼の著書に關係してゐるのではないかと思ふ。彼は無論その著書についても殆んど云つてゐないけれど、前後の文意によつて、その著書の内容が、朝廷の古典儀式の研究に關するものである

とは明かに知られる。且つ彼はいかにもこの著述のために精力を傾倒し、多年の苦心をかさねて来たかは、『春の暮には久方の光りのどけき青雲を望みて、あけながらなる色を悲しび、秋の夕には、玉鉾のみがきいたせる道芝の白露に袂をしぼりて、木隠れて見る月を恨みつゝ、四十路あまりを明し暮して、あはれ時しらば、大やけの眺めともならんと、夜はまろき枕にいもねず、晝はあらき乾飯に水飲みて、急ぎしもたゞ夢の心地して、ゆくりもなく人の心のおくも見るべからざりし、うき世を忍ぶ山形にさすらひけるにも、恨めしきこのはみぞ外かめる。齢さへやう／＼傾きゆくにつけても、何くれと思ひがちなり。』と彼が自記せる感想によつてもまだ覗ひ知られる。

『親に似ぬ子は鬼子といふ諺あり。父はいと正しき人となりに坐しけり。吾はその子なり。初めは庭の教へのまゝにして、家に錆びたる兵器なくば、籠に戯れたる書なし。疎、花柳の巷にむかはず、口、鄭衛の聲を云はず。粗き衣を着、悪しき飯食ひて、衣食の人といはれん事をば、朝に日に勤しみ勉めたり。』

彼は時々、苦々しげに往時を追懐してゐる。

彼は相當格式ある武人の家に生れ、幼年より規律ある教育をうけてゐる。縦へこれは高貴をほこるほどの家格ではなくとも、幕府麾下の士族として體面をたもつだけの封祿は食んでゐたらしい。殊に彼の父は激憤素朴の古武士氣質を失はず、家居日常の生活は甚だ簡省に、子弟の教育には厳格なる人であつたらしい。その臨終の最後の時までも訪問客あれば必ず病褥を下りて恭しく應對し、家族の者がその疲勞をおそれてさま／＼に勧めても、何うしても病床に横臥しなかつた。『われ生きて無禮しきわざせず。いま死ぬる日になりて、禮を失ひはべらんや。』と云つて、遂に跪坐せるまゝに瞑目したと、彼は其隨筆に記してゐる。その日は『庚戌のとし、五月すゑのみか。』とあるから享保十五年五月二十三日に相當する。（註一）

豪懐不屈にして人を憚らず世を恐れぬ彼も、亡き父の回想に耽ける時だけは、不思議に聲が沈んで、首を俛れてゐるやうに思はれる。『父は足はしく、厳き人となりなりける。』と幾度も繰り返して、痛切なる悔恨と自責の涙にくれてゐる。それには勿論、わがために一族を破滅の境遇に沈め、一家を流離の艱難に陥はすといふ耐へがたき感慨はあつたに相違ないけれど、然しそれ等にも勝りて彼の心を悩むの悲哀は、彼自身の過去に對する無限の嘆息と侮蔑とであつたらしく見える。彼は壮年客氣にまかせて徒らに青雲の志高く、功名にあくがれ榮達を急ぎ、しかも

脚下一尺の地に人生行路の禍根の包藏さるゝも知らずに、ひたすら空虚の幻影に欺かれて、精を竭し身を疲らせ、營々として苦しみ來つた過去の刻苦精勵を思ふたびに、彼は自から憫み自から悲しむの情に耐へられなかつたらしく見える。彼は云ふ。

『一度は五月蠅なす佞人にいひよこされて、流らへる旅人となりて、人目しのぶの果におもむき、草結ぶはてしもなければ、彼方此方にさまよひ歩りきて、夷のならはしに都のてぶりを捨てゝ、あざれたる振舞ひのみして、或時はあやしげなる蓑笠きて狩人にまがひ、或時は大刀佩きて博徒に伴なひ、或時は世のうきふしの竹杖つきて浮れ女のもとに宿り、人の家を家とし、人の物を物とす。やぶらずむさぼらず、儒にあらず、禪にあらず。詮方なければ、心やりに歌よみて明し暮せば、人はみな物狂ひとぞ云ふめる。

自から陸生になぞらへて、我非死生と印章刻りて持ちぬ。

されど親に似ぬ子なれば餓鬼界とや言はまし。大方の親の富貴を失ふ者も、みな餓鬼界なるべし。されば身まかりなん後、盂蘭盆會に、餓鬼をもてまたれんも、恕めしからじ。』

彼は亡父を追想するたびに、いつも激しき悔恨に心を苛まれて、涯瀬なき懊惱に耽つてゐる。隨筆によれば、この時はまだ母親も壯健にて、彼の妻子とともに落魄して江戸の親類の家に寄留してゐるやうであるが、彼はそれ等の人々に就いては、餘り多くの感情を述べてゐない。たゞ一念、謹嚴方正なる父の生涯を想ふごとに、彼は物狂はしきまで亢奮して、自分を嘲り自分を卑しめてゐる。彼が放縱不羈なる生活から殆んど自暴自棄とも見ゆる境遇に身を沈淪して行く經過には、無論その周圍の事情もあり、また如何にともしがたき、彼自身の性格の奔馳もあつたに相違ないけれど、更らに一層深き源因は、彼が亡父の追憶に對する痛切なる悔恨に耐へられないのではなかつたかとも思ふ。

試に、彼の隨筆によつてその親屬關係を調べて見る。父系の親類としては醫者大森元孝、村井新左衛門、謙道法師などの記事があり、母かたの姻屬には伯父に深美某（四谷に住む。註二）、あもり瀬兵衛、遠州掛川在住に西尾源兵衛、下田もろふる、淺井左衛門とも政等の名が見られる。『ゆかりなりける橋本あはのかみ。』ともあるから、これも遠い親屬らしい。その中でも下田師古と淺井奉政兄弟のことは數箇所に記され、『はゝかたのいとこ』として極めて懷しげに追憶してゐるばかりでなく、篤學者研究家として深く尊敬の意を致してゐる。

『享保の比儀式といふふみを、下田師古、淺井とも政、羽倉在滿におほせて、ようとかせ給ひける。あづかりみ侍りける。田ぬまとのものかみ大島あふみかみなど、おほせごと承り、いたづら年月を送りける。』と彼の隨筆にあるのは德川實記に吉宗の好學を記して『貞觀儀式、延暦裝束抄なども、みな御みづからつまびらかに御校正ありし上、其頃國字もて解せらるゝ羽倉藤之進在滿に仰せて、校正してたてまつらしめらる。（中略）在滿は後に宗武卿（田安家）の家人にめし加へらる。このころは國字をこのむもの、いと少なかりしかば書物奉行下田幸太夫師古、淺井順次郎奉政（幸太夫弟なり）にその事を猶まねびあきらむべしとて、燈燭の料五十金を年々に賜ひてはげまさる。後、順次郎和事彙二百冊を編輯してたてまつれり。今奥の御文庫に藏せり。』（有德院御實記附錄）とあつて好く符合するのみならず、この校正事業は、『荷田家系譜』『好書故事』『右文故事』等にも事實が判然してゐる。たゞ諸書ともに彼の性名を逸してゐるのは怪しむべきだが、彼が後に『儀式考』の著述を世に殘してゐる事實に徵しても、彼がこの編纂事業に參與してゐることは疑ふべきではなからう。下田師古は享保十六七年頃に死して、彼もその文章のうちに早世を惜んでゐるが、その學術の造詣は當時既に學者間にも認められてゐた。室鳩巣も『彼山秘策』のうちに、『三月傳奏衆中院大納言殿參府の刻、御近習御右筆下田幸太夫と申人學問有之、禮樣の儀（古典、職原の學をいふ）心得申す方に付、此人に御書物等御渡、高家中條山城守殿へ指添被レ遣候て、眞僞の處被二聞召一度被二仰遣一候處、傳奏衆しかと難レ辨候間、歸京の後何も僉議仕候て、其上に可レ申上一との趣にて、一圓譯立不レ申候。』と話して、師古の學識を稱揚してゐるのみならず、その性質また豪邁にして林大學頭の權威に屈せず、殿中伺候の面前にて林父子の不學不識を一々明證をあげて論破してゐる光景などを、鳩巣はさも愉快さうに友人等に洩してゐるのを見ても、師古の篤學ぶりは察しられる。また京都稻荷の荷田家には、師古が荷田春滿に師事して古典舊儀の疑問を質した三年間の往復文書が保存されてあると云ふから、眞摯なる國典研究者であつたと思ふ。

　師古の弟淺井奉政は、『名人忌辰錄』に、『淺井奉政。字子德、稱二稻左衞門一。享保十七年五月二日、大御番頭酒井紀井守組より御書物奉行となり、二百俵賜る。分類國史綱二百卷の著あり。享保十九年卯年六月二日沒す。歲三十八。』とあり、『德川實記』にほゞ同樣に出てゐるから、この小文の主人公たる彼よりは三四歲の年上であつたらしい。彼の隨筆の文意に、何んとなく奉政の學術研究に拮抗競爭の語氣があるやうに思はれるのは、同

年配の從兄弟間には寧ろ然うあるべき人情であらう。そして彼は深く奉政の精勵に感憤して、始終自分の怠慢を鞭撻してゐたやうに見える。

『近頃ふみ多く作りし人は、林道春、春齋、中納言光圀卿。この人達はたすけもさはなれば然もあらん。母かたの從兄に左衞門淺井とも政こそ、得もいふべくもあらず書き集めたり。十七八より書き初めて、三十八にて身罷りけり。あはひ二十年ばかりに書けるもの、事纂とて百五十卷、分類國史綱とて百五十卷、そのほか令集解考、日本紀考、定儀式考など五百餘卷あり。ふるき文は文花、英華、左傳、韓文、柳文、賦類など千百五十餘卷書けり。おのが詩文八十餘卷ありけり。人の業とも思はれず侍るかし。』

彼が信夫の里を出で常陸に移つたのは、寛保二年秋の頃と思はれる。それは彼が『信夫の里より潮來の里に來にけり。こゝは常陸の國と下總の境にて、中に流れたる川を利根といふ。月あかゝりける夜、船逍遙しはべりて、いにし年、山の端に見しこと思ひ出てゝ、歌よみしことなかりけれど、心のをごくまゝに、去年は山ことしは水に照る月を又來ん秋はいづこにか見ん。』と述懷して、旅情忽忙の感慨に耽つてゐるにも知られる。潮來には關戸某といふ知人あつて、それを便りに身を寄せたらしいが、何故か關戸一家は彼の留寓を悦ばなかつたらしい。彼もまた常になく怨言を出して、一族夫婦の鄙吝執拗を憎んでゐる。

彼はこの移住についても、やはり何も云つてゐない。然し前後を照應して觀ると、この流寓は尋常一樣の動機ではなく、可也復雜なる事情が伏在してゐるやうに見える。或は彼は、身にふりかゝる生命の危難を避けて、這ふ／＼の體にて常陸に遁げ込んだのではないかと疑はれる。更に憶測すれば、彼は元來人を殺して江戸を逐電し、始終復讐者の追跡をうけてゐたのではないかと思ふ。彼が常に戒愼して人の心をゆるさぬは信夫在留の時とて同じだが、彼の文章には一種凄慘の氣があつて、殊にこの頃の追憶の甚しく感情的になつてゐる點に注意せしめられる。『米穀布帛金銀銅鐵は、よき重き資といへども、十年あまり一つも貯へず、たゞ黑金の刀ばかりは棄てざりし。あす修羅の巷にたゞずまば、鬼どもを切り殺してんためなるべし。』とあるのみならず、常陸に放浪後は人目を恐れて、いづれに行くにも必ず黄昏時に宿を出て、拂曉を限つて旅行することに定めてゐる。また今回の遁竄にも、信夫の里から米澤、會津、越後の國境方面を流浪して、やう／＼にして潮來の里に落ちのびてゐ

る。

『常陸の國、水戸の北なるころふちと云ふところに行きて、賤の屋に立ち寄りける。十七八ばかりなる娘の、髪はおどろのやうにて、耳のまはり髪の下など、黒く垢づきて、鐵漿つけたりともつけざりとも見えぬばかり、向齒のうるみたりける。その色も見えず萎れ穢れて、やれいでたる單衣に、繩の帶ゆるやかに結び垂れ、薄墨より今少しくろめなる襷の端をあらはにして、爐のきはに斜めに坐りたるが、見るも穢かり。茶を具すとて陶碗とり出でゝ、されど水そゝぎ、そこそこに洗ひて持たれば、白き碗に指より黒き雫の流れかゝりたるを、上衣もて拭ひたれば、柱のもとに蹲りはべりける八十ばかりにて、えひのあまひからみたる嫗の、やはら姉よ、氏より育ちとなん云へる。など育ちの悪ろき。上前は穢れたり、下前もて拭はめと云へば、やがて下前引まくり、椀ごめのごひて、茶を汲みて出しぬ。』

『霞の浦に往なんとて、狩犬ひきてかみあひといふ所まで行きける。困じたれば新右衛門といふ人の家の端に尻うち掛け、絆は柱に結びつけて休みぬ。年經て來ませるぞ嬉し、物參らせんとて姑と娵と、ころ〳〵と轉びて、棚のあたりあなぐりて、參らすべきものなし。猶たけたるも食せとて、稗蒸しとて、麥と稗とにいろ〳〵の木草の葉切りて添でゝ蒸したるが、餅とも粥ともわかず粘りたるものに、おまはりとて、麥の鱗の黒く炒りたるに鹽加へたるを添へて出したり。飯へつべくもあらぬものながら食ひける。犬も饑ぬらんとて、立働くをとゞめけれども聞かず、かの稗蒸しを與へければ、尾うち振りて嗅ぎける。食ふべくもたかりけるにや、ふと嗅きて片方へ寄り臥しぬ。いと味氣なかり。』

彼は常陸流寓の後も一所を定めて居住せず、絶えず諸方に放浪してゐる。狩犬をつれて旅行する記事の多いのは、やはり狩獵によつて糊口してゐたのかも知れない。とみた、またくま、茂木、をばた、ころ潤、清水、おしだなど、常陸國内の地名が彼の隨筆に見えてゐる。こゝに揭げた二節は、彼の奔放自由なる文章を見るためにも抄出したのであるが、彼の遍歴するところ多くは赤貧の農民家庭であつたことは注目に値すると思ふ。彼は何人の補助もうけず、始終貧しき小民の厨に惠まれて、十年漂泊の旅をかさねてゐるところに、彼本來の性格と境遇とが察知せらるゝかとも思ふ。

『浮世の風にまかせ、浪に漂ひ、あふさきるさに明し暮したる、老て棲處も無くなりぬれど、手づから水汲む業もせず、澤に吟よひ嶺に叫ぶ思ひをば、灰に書きて烟と共に立ち騰るを、思ひながして水に書けば、浪と共に亂るゝも苦し。形容をばかひあるさまになし、心をば淵の瀬に寄せつゝ、浮れ女のもとに宿りぬれば、狂鷄のまだきに啼きて、村部の人の心をおどろかすも可憎のわざなれ。都を出てゝ十年ばかり、浮世に歸る道を閉ては、難波江のあしきもよきも、名にたてらんこそ就々しけれ。僞り狂れて假りの宿りさへ定めず、ある時は禪刹の精舍に道をかたり、ある時は桃李の徑に別れを惜しむも、まことやひとときのなだと聞えなん事の惡しければぞかし。』

潮來には海雲山長勝寺とて地方に有名なる禪宗寺がある。その住職長洲和尚は可也博學の僧侶であつたらしい。彼は如何なる縁故あつてか、間もなくこの學僧と衆友になつてゐる。また土地の鄕士（?）に東條かくいと云ふ篤實人があつて、この人とも交際してゐる。『今はかくするすみなる身の足ふみたてぬ世の中に、何もとむる所もなく、假りの宿りさへ定めざれども、手づから水汲む業もせず、居るに常の所なければ、一ものもあさへず、上に畏まる君もなければ、下に憐まん女房もなし。風に嘯き月に吟よひ、身をば文園のしみによせつゝ、もじたいちうに自ら活ひて、目に見えぬ古代の人を友として、世を世とも思はぬより、悦ばしき事もなければ、愛はしき事もなし。』彼は斯く記して、やゝ虛無恬淡の情趣を述べてゐるは、常陸移住後四五年も過ぎ、生活にも幾らか安定を得て、文籍にも親しむやうになつた後の感情と見るべきであらうが、兎に角、この長洲和尚等との交際などが機縁となつて、多年廢棄してゐた古學研究の學者的欲望がまた復活して來たのではないかと思ふ。彼が名文の隨筆集を書き殘す氣になつたのもこの頃らしく思はれるし、契沖や眞淵の研究を論駁する三四の著述に隨ふたのもこの前後からのやうに思はれる。そして、その間の生活は和學講義や歌文の教授などにて償ひつゝ、轉々と諸方に流浪してゐたものらしい。

潮來の町と利根川をへだてた加藤州には野口盈貞（一本に盈口とあり）磯山某等の若人達があつて、彼はこの人々の家にも時々滯留して村人のために三國誌などをも讀んでゐる。二人のうちにも野口盈貞とは殊に交情が密にて、彼はその晩年の著書に親友みつ貞とさへ呼んでゐる。遊蕩ずきの彼は、時にこの人々と連れ立つて、潮來の妓樓に流連などしてゐるけれど、思ふにこの二人は土地の豪農の若息子などにて、彼のためには和學の

息子であつたらしい『我とも六とせばかりこの方は、する業もなければ、ならはぬ業なれど、心やりたゞ詞に、日々にはたうたとす（ママ）讀みける。よみては母のかり奉りける。』とあるから、自からは好まぬといふ和歌も放吟の間に自然上達して、無論地方人を教導するほどの伎倆には習熟してゐたと思はれる。

彼がこの隨筆を書いたのは、四十七八歳から五十一二歳の間であらう。十年漂泊の旅につかれて、老の坂ゆく身の衰へが次第に感じられる頃であつた。直徑して三十里に足らぬ常總の境に放浪しつゝ、人づてながら朝夕に江戸の噂を聞き、後に殘る家族から月々の音信など受けては、取る歳とともに旅愁の哀切なるものがあつたらう。彼は時々遣瀬なげに太息して、戀々の情を江戸の地に寄せてゐる。

『あすか山に東叡山のうしろにあり。また忍が岡といふ。したなる池を不忍の池といふ。岡と池との心たがひぬるもをかし。さすらひながらこの名どころを思ひ出て、たゞごとに旅の心を讀みはべる。

戀しさをうへに忍ぶの岡なればうめなや下にしのばずの池。

初音の里はしらやまどのゝ前にあり。向ひの谷を鶯がやつといふ。こゝのは深山より音のきされりとなん。かの谷を出てゝ、この古里に初音なくらんとめでたし。櫻だにつゞきて霞が關あり。花の都はいつも春の心地しておもしろけれ。おもかげの橋、すがた見の橋、江戸川の上なる高田の里にかゝれり。いかなる人のこの河の水かゞみ見て、面かけのこるらんとゆかしかり。』

彼は江戸の地を思ふごとに、常にこゝろを靜涼にして、多くは幼年時代の童びた感情にかへつて、心から染々と、追憶そのものを懷しんでゐるやうにも見える。一度は谷中あたり上野の山ちかく住居したらしくもあるが、その成長期の大半は大塚の藥地から傳通院の間に暮されたやうに思はれる。それは彼の幼少の追憶と云へば、必ず江戸川の流を中心にして、小日向邊赤城あたり限られてゐるばかりでなく、彼の算術の師範小南源右衛門は服部坂のほとりに住み、儒學の師匠大塚庄右衛門は茗荷谷邊に住んでゐた。

江戸の昔を想ふにつけて、彼が過去の殿中生活をも回顧するのは、蓋し人情の自然であらう。彼は折にふれそれとなく、當時の思ひ出を語つてゐる。彼の傳記と思はれる他人の記述によれば、彼は代々幕府の旗本にて、八代將軍吉宗に勤仕して小納戸役、書物奉行をつとめ、後ち大炊頭に仕官して六百二十石を

含んでゐるとあるが、これを彼自身の隨筆に照合して考へても、決して架空の説とは思はれない。彼が將軍扈從の可也重要なる位置にあつたことは、當時既に御側役であつた田沼主殿頭意次や、御小性頭水上美濃守興正、有馬兵庫頭氏倫、京都所司代松下伊賀守忠栄など〻親しく往來し、その間にさまで階級があつたやうにも見えない。小納戸頭の石黑但馬守易治とは少年時代よりの親友にて、隨筆の各所にその人物の恪勤嚴正を稱揚してゐるばかりか、御祐筆大久保源次郎忠裔父子には特別の眷顧をうけて、歌學故實などに就いて質疑をうけてゐる記事なども見える。そのほか戸田采女正、大久保忠濟、大岡出雲守等、當時幕府の顯職にあつた人々の名が多く見え、記述のうへにも格別に自分を卑屈してゐる模様がない。嘲るべきは嘲り、譏るべきは譏り、大膽無遠慮に各人物を月旦批評してゐる。將軍吉宗の日常行實については、何か憚るところありと見えて、正面には何事も書いてゐないけれど、然し他の記事の間に隱見して、吉宗の實用學に傾く、究理格物の研究心に富み、物産生殖の西洋癖に心醉してゐるさまなどが、實見者の實話として明かに承認される。

彼が下田師古淺井奉政とともに「儀式考」の校正事業に參與し、荷田在滿とも交つてゐることは前にも述べた。他の書によれば、在滿の養父たる荷田春滿とも交際があつたやうに見えるのみならず、當代に名ある文學者の多くと親しく往來してゐるのは注意すべきであらう。そのなかにも時代の耆宿成島道筑には始終信頼の意を致して、何か學問上の發明あることに必ず道筑の門を叩いて、この老大家の認識を得るのを自慢にしてゐる。『道筑は陸奥の人也。ひろく學ねびてよく書けり。咽頭の下に、ひげみすじよすじ長く生ふしてさもらひぬ。友とする人は服元喬、太宰純、平金花などみな徂徠の徒なり。』など親しげに書いて、有名なる道筑の飛鳥山の碑文に自分の考證が用ゐられて、古文字を復活せしめたことなど、誇りがに吹聴してゐる。服部南郭、太宰春臺などにも師友の關係があつて、彼もまた蘐園の學派を奉ずる人であつたと思はれる。その他出雲の儒官たる松井邦彥（甃庵）中尾照菴、河合善三郎の諸詩人とも親しく、田原藩の碩學爽見隱山には師禮を執つて仕へたこともあるらしく、爽山の沒後はその妻冬野について歌學などを問ふたかとも思はれる。彼の隨筆に紅毛人の記事多く、長崎事情などにも可也通曉してゐるのは、譯官深見玄俗父子と親交があつた〻めであらう。

わたしは以上の人々との關係から推測して、彼は享保元文の頃、吉宗に昵近してその書物奉行を勤めてゐたと云ふ或傳記の

說を信じたいと思ふ。彼の隨筆と比較してその後六七十年にして編輯された德川實記を見ると、例へば享保年中の無人島發見記や「さる御影石」の話などに、事實は勿論文體などにも、影響として類似を認めずにはゐられない。恐らく彼は書物奉行として日記の記錄などを擔當してゐて、書物所に殘してあつた彼の筆記が、後ちに實記を編纂する際に引用されたものではないかと考へる。（近藤正齋の右文故事等にも、何んとなく然う感じられる記事がある）彼の朝儀古典の研究に興味をもつて進んだ順序系統については、自然後に云ふべき機會があらうと思ふ。

『武士の運つきて、さまよひ戯れぬるを惡しざまに嘲けるまじき事なり。武藏守諸なほ（師直カ）は、さしも猛き軍將なりけらし、はすのはかき引被ぎて、和田が僕の手にかゝりたるなど、咲ふこそ笑ふべけれ。その所のがれなば、いかなる大なる謀事ありけん。斯かる人は死しても心根の知られぬ者なりと、由井正雪が評しけん。眞事なり。』

『時に逢はぬ人の佯り狂れてする業は、痴者の知るべきものかは。行先き〳〵のうるさければ、潮來の里に行きて五日ばかり居ぬ。浮れ女に絆されて、長居すと人の言ふなる。己れ〳〵が心の限り言ふめるにぞ。』

『或人の爲る業もなく侍りけるを、世の中に生れては、人なみ〳〵ならんこそ本意なめれ。和殿は何する事もなく明暮して、あたら月日を空しく送ることこそと、人の言へりければ、さな言ひそ、一日も靜なることも候はず。つとめて起き憂かれば、しばし朝寢して起き出れば、今日はなど云ふ間に、手水せよなど人の云へば、しぶ〳〵手水して庭など眺めやるうち、はや朝飯すゝめぬ。食ひはてゝ茶などうち飲みて、かれこれすれば晝前にもなるを、少し坐眠まんとて寄り臥して、胡蝶の夢もまだ結ばざるに、また晝飯めせよと起しぬ。又うち食ひて其の事彼の事思ふ間に、夕飯も食ひつ。入相の鐘のあはれさに、心に浮ぶ事も多きうち、宵も過ぎぬればいも寢ぬ。心まゝに尿まり、厠へのぼらん暇だになければ、何する隙もなし。これも世の中の習ひと思はずば、さこそ急がはしからん。素より此世に生れたらん理と、思ひ諦めしぞ、斯かる憂き世をもさまで苦しと思ひたらずとて眠りぬ。これも又一生を終るらんかし。』

彼は四人同胞の總領として生れてゐる。時あつてしめやかなる弟妹の身の上などを追想してゐる。

『妹は六つになりける秋、世を早うせり。四つまでらりるれろの五つ聲を得言ざりけるを、父母の悲しく思ひ給ひて、膝にすゑて教へたまへども、得も言はざり。六つになりければ彼（彼自身を云ふ）共に遊びながら、上顎へ舌をつけて言へかしと云ひたりければ、そのまゝ言ひけり。母の前にいきて言ひければ、こよなく悦び給へぬ。六つになる年葉月七日の夜、俄かに隠れたり。その夜は知らざりけり。翌朝父の、やよこそ亡せたりとのたまふに、いづち亡せたらんとて、只泣きに泣きけり。今に四十路あまり五歳なるべし。かく思ひ出れば猶その折の心持して、ともに遊びけん面影の、あらはに見ゆるにぞ、そゞろ涙あえける。世の中に殤死ばかり悲しきものはあらじかし。』（註三）

これは彼に引續ぎの妹であらう。あと二人は男子にて女子はこの妹一人だけゆゑ、殊に追悼の心が深いのであらう。彼はその末弟についても云ふ。

『末の弟の十ばかりなる頃、もの好く讀みける。知らぬ文字を書くとて、かゝる文字はいかに書くらんと問ふを、偏傍をしふるに、なほ知らぬをば、あるは縦、或るは横、あるは擧げ、斜など、一點一劃教ふれば、やがて書きけり。三つばかりなる頃、母に添臥しけるに、夜毎に昔し〳〵語りて聞かせ給ひける。ある夜、今宵より昔し語りは聞きはべらじ、と言ふ。など問ひかじ、とのたまへば、みな僞りの作り事なるべし、眞實ならぬは聞きてよしなし、とて聞かざりけり。さらばとて小學の言解きて聞かせ給ひければ、身動きもせで聞きたり。十一にて出羽の國にいきて、伯父に養はれて、大方ならぬ儒者なりしが、二十一にて自ら死にけり。こは一城をも領りねれば、亡魂も怨みなからんや。』（註四）

又、彼は云ふ。

『母の胎の中にありて泣く子は、必ず人に異なる事有りけりとなん。弟の母の胎の中にある時しより泣けり。生れて三つばかり迄は、只泣きいさつ。人の玩びもの與ふれば、童めきたりとて紙に包みて埋みぬ。土塊や草葉や何か取りあへて、醫師のまねして遊びぬ。ひと文字を知らされど、常に眞字の書引きをひろげて見ぬ。假名書見せぬれば棄てつ。四つばかりより自ら文字讀みて、六つの年は日々に、唐処二十巻ばかり讀みけり。常に醫師の書讀みて、暁らぬことなし、十四にて馬より落ちて、手足打そこない不具になりけり。猶醫師の書讀みて、十六より癒えがたき病者あれば、くすし侍りける。手の傚に癒えけり。自らかんのちうけいに誰らひける。二十ばかりなりける時、大森元孝と謂

の道斷じけるに、元孝もちうけいが再來ならんと云ひける。今は四十路にあまりぬれば、道もいよ〳〵増すめり。』(註五)

隨筆のうちにある彼と長州和尙との談話によりて推測するに、彼は既に出奔の時に數人の子供があつて、それは皆に江戸在留の親類にでも圍つてあるらしい。然し剛情なる彼は記述の間に遂に一度も、その子その妻についての感情を洩らしてゐないが、たゞ一箇所、その幼き娘の消息を聞いて、悲嘆の涙に沈んでゐるところがある。これは注意すべき點と思ふ。

『都にはべりける娘の、三つ四つばかりなりける比、常に傍に侍りけるに、おふしたてられていづち往ぬめりとも、さぞな本居の戀しかるらんと、言ひ合ひりけるを、いと悲しく聞きはべりけり。十にも足らぬ計なりける比、捨て置けりて、みちの奥へさすらひければ、人々はあだしの花と散りかひ、住みなれし家居は、さがなき人の住家となりて、十年餘り彼方此方となく、さまよい歩りきけるにも、斯かりと言ひけんことの、忘られず侍りけるに、近き頃宮仕へして、あだし所に住ひはべると、つてごとに聞へけるを、九月ばかり心地もれいならぬころ、夜ふかく思ひ出て、そゞろ涙こぼれぬ。かゝる尙の闇中に都しながらも、亦と悲しみ楽まんと言ひし。かゝる憂身には、猶さらにこそ、思ひあはせぬ。』(註六)

賀茂眞淵の後繼者、伊能景良、茅生庵、後の楫取魚彥。この縣居派の巨匠と彼との交渉顛末は、恐らくは將來の歷史家に好箇の研究題目として殘るだらう。彼の記述だけではその關係が判然しないけれども、兎に角、延享三年には明かに佐原滯在の事實あるに徵しても、彼は常陸流寓後間もなくから、加藤洲を中間宿として、潮來佐原の兩地に往來してゐたものらしい。彼の筆記によく顯はれる小倉春江と云ふ人は、佐原の商人か豪家の主人などにて學問ずきのところから、その家に彼を寄宿せしめて、和歌國文學などの講筵でも開かせてゐたのだらうと思はれる。魚彥の景良はその頃建部綾足について繪畫を學ぶとともに、かねて文事を好むために初めは聽講生として出席するうちに、彼の學問見識などに敬服して、後には熱心なる門弟の一人となつたのではないかと思ふ。年齡から云つても彼は四十三四歲の老熟者、これは二十二三の好學青年であつた。彼には既に精力を傾倒した大著述ある上に、その頃もなほ二三の小著述を出して(螢火編、假字論など云ふ)、盛んに契沖の「改觀抄」や

眞淵直淵合著）「伊勢物語古意」などに挑戰してゐる頃だから、その颯爽たる風氣と洒落の性格とは、温厚なる地方人士の信頼を購ふに足るものがあつたらうと思ふ。

隨筆によれば、彼はその後多くは魚彥の家に寄寓して、彼の修學に師範となつたらしい。魚彥の初名を景豐と呼び、晩年にして景良と改めたのは彼の本名良通（この事はまだ云はないけれど）の良字を與へられたのではないかと云ふ疑問もあるし、彼がこの頃「雅言雜狙」と題して古語研究の著書のあつたのを、『佐原の青藍（魚彥の諱名）が、我編集にしたいから可レ與と乞しまゝに與へたり。』と晩年のものに記してゐるのを見ても、彼はいかに魚彥の景良を愛し、景良もまた深く彼に師事してゐたかゞ窺知られる。（魚彥に後ち「古言梯」の著述あるのは、この「雅言雜狙」と脈絡の相通ずるものがあるだらうと思ふ）兎に角こゝには、後來魚彥の學術大成は一箇浮浪人たる遠名氏彼に負ふところが多いことを記して、彼と眞淵との學敵關係、葛藤、兩者間に立てる魚彥の苦衷等に就ての推測は、改めて後章に書きたいと思ふ。

以上は太田南畝の「新三十幅」に纂輯されたる匿名の隨筆集「寓意草」二卷のうちから、著者の自叙傳的記述と思はるゝ部分を拾つて、やゝ順序に書き記したのに過ぎない。

この「寓意草」は卷末に『文化巳八月十四日。寫懸日山東園窓下、六十一叟遠樓山人。』なる附記あつて、可也早くから學者間に愛讀せられてゐながら、著者の傳記は今日まで不明であつた。和學者戸田氏德の「雜書解題」にも、「百年已來の雜事および諸國の珍らかなる事など和文にて記せり。天明の頃の人記せしにや。文章は古き草紙物語などに似たれど、尚一ふしありて、おもしろく書きなされたり。卷中松平大學頭か田沼主殿かなど權貴の人をも、事もなげに書かれたるさま、いかにも貴人の所爲と見えたり。」と書し、奧附の遠樓山人は太田南畝の別號にて、恐らくは金剛寺（小石川金富町。懸日山と號す）の藏書を寫し來りて、世に傳へたのだらうと推測してゐる。で、南畝の全集について當時の記述を搜索すると、「一話一言」の文化六年と思はるゝ條下に、「淺井ともまさ著書」と題して、「寓意草」中の一節を抄錄してゐるのを發見した。そして淺井奉政については、「事纂序に、大衛騎郎遊國源奉政トアリ、享保年ノ作也。」と註記せるのみにて、「寓意草」著者に關しては何等の記事も見られない。最早この頃からこの隨筆著者の名は煙滅してゐたのであらう。

明治時代に及びては佐川八郎氏の「國書解題」には、遠樓山

人の附記に「寫＝譯日山東雨窓下」の寫字を、謄寫の意か起稿の意か不明なりとして、暗に南畝自身の作にあらざるかを疑ふてゐる。後ち大正六年に同隨筆が國書刊行會から復刻される時の緒言にも、解題子は文中に親に似ぬ子は鬼子云々の章（前に引用す）を擧げて「決して南畝の稿に非ず」と斷言しながらも、やはり末節に「只南畝三十八歲、狂歌を以つて有司の忌諱に觸れて小普請組に入りしこと、及び狂歌狂文且豪放諧謔の所爲、當時の文人の消息に通ぜる、長崎の譯官某氏のことを記せるもの等、遠櫻山人の俤あることは疑ふべからず。故に本書の炎は、譬に明月の珠にも疵なきこと能はざる如く、全篇の佳趣に至つては、眞に珍とするに足ものあり。」と附記して、飽迄もこの書の創作價値を推奬してゐると共に、著者の判明せざることを惜んでゐる。

然るにわたしは幸にして、この著者の名を明かにするを得た。現に今、其人の傳記の幾分を明かにするために、この小文を稿してゐるのだが、然しわたしがこの隨筆の著者の名を明かにする迄の經過には、著者とわたしとの間に、偶然以上の一種不可思議なる因緣が纏つてゐるやうにさへ思はれる。記述冗漫にして讀者の倦意を招くおそれはあるが、もう少しの饒舌をゆるされたいと思ふ。

この隨筆をわたしが初めて見たのは、今から十二三年も前であらう。神田の某書肆が破産する時、わたしは偶然そこに通りあはせて、その店頭にあつた寫本雜書を一纏めにして五六十冊購ひ求めて來た。その中に「もしほ草」と題して、裏表紙もない寫本の隨筆寫本があつた。或る日藏書の分類目錄をつくるために、手にまかせてその二三枚を讀んで見ると、文章がいかにも傑れてゐる。時代は享保頃の漫筆と思はれて、（當時わたしの鑑識にて、直ちに時代を享保と探り得たのも、思へば不思議の一つであつた。）文字蒼然として些かも粉飾の氣なく、高邁の氣おのづから紙面に溢れ、人をして覺えず肅然たらしむるものがある。觀察の直截にして犀利なる點、女々しき感傷心を排ちて人生の眞實に直面せんとする努力、我を語るに猶ほ人の如く人を謂ふに我の如く、始終冷然たる批評的態度を失はぬ點、權貴を畏れず道學に拘らざる點、飽まで人を嘲り世を憎み物を物ともせぬ剛腹さのうちに脈々として人に迫り來る一道の眞氣など、到底尋常文人の著作とは思はれなかつた。單にその文章のみを見ても、當時古學復興初期の徒らに古語文辭に役せられて、何等個性なく人格なく、冗漫にしてたどたどしく、古言死文の模倣羅列時代にあつて、斯くまで大膽に上代語を驅使し

使して、簡潔に、勁直に、而かも觀るまゝに描き想ふまゝに叙べて、些かも拘束のあとを殘さゞる老練さは、時代國文家の間にあつて驚嘆すべきの文章家と思はれる。若し强いてその儔を求むれば、前也時代は下るけれど、「膽大小心錄」を書いた頃の晚年の上田秋成にも比較すべきほどの名文だらうと考へたほどであつた。

その後わたしは本牧の假寓を引拂つて東京に歸住することになつたが、その移轉の混雜に取りまぎれて、不幸にも、該寫本の所在を失ふてしまつた。始終こゝろにかゝつて、本箱の底など搜索してゐたが、やはり見出されない。後ち四五年も經つて國書刊行會本の「新三十輻」中に集錄されてゐる「寓意草」を流目一讀して、前に見た「もしほ草」と同書らしいとは考へたが、記憶も不確實であつたし、當時他に多忙なる研究問題などもあつて、深く研究して見る熱心もなく、つい忘れるともなく今年の春まで過ぎて來た。

今年三月某日。わたしは鄕里仙臺なる伯父が急病危篤との電報をうけて、蒼皇歸省の途についた。その時、汽車中の讀物として鞄の中に詰め込んだ數册の書籍のうちに、「仙臺叢書別集」の第一卷も交つてゐた。同叢書は、豫て尊敬する鄕黨の篤學、鈴木省三先生の監修編輯せらるゝ舊仙臺藩の文學集書であつて、われ等後學輩のために受益すくなからざる良書であつた。既に同別集は昨年末に配布をうけて、わたしは深く讀書欲をそそられてゐたのだが、新年以來引續き沒頭してゐる他の課業のために、同書はその日まで包裝のまゝ、書架に置き忘れられてゐたのである。

「仙臺叢書別集」第一卷には、寬政三奇士の一人として有名なる林子平友直の父、林笠翁の遺著「儀式考」一部十一卷とその隨筆集「仙臺閑語」三卷とを集錄されてゐる。雨香鈴木先生が卷頭に解題して、「儀式考は、偉人林子平の父なる林笠翁の編述に係り。一部十一卷より成れる。林家不出門の祕書にして、海内絕無と稱せらるゝものなりしが。其裔孫林三郎氏。本會の爲め、其刊行を許されたるは。獨本會の光榮なるのみならず、又江湖の至幸と謂ふべし。抑其書たるや。朝廷古來の禮典儀式を集て大成したるものにして。上は攝家九條家より。下は伊庭。衣笠等の大太夫に至る。諸家に傳りし祕書を取り。之を延喜式。貞觀式。江家次第等の書に就き。參互校正し。其本文註文共。誤謬。衍錯。闕漏を指摘し。一々之を正し。之を補ひ。以て一部の儀式書を完成したるものなり。是れ著者が該博の學と。朝廷の典籍故實に精通するの致す所と雖も。亦勞苦は想像

するに能りあるなり。」とあるにても明かなる如く、試にその數節を卒讀したるのみにても、引證極めて該博、考察また緻密にして、空理空談を排斥し、嚴粛なる實證を求めて、後の謂ゆる科學的研究とも稱揚すべき眞摯なる研究書である。附錄せる「仙臺間語」三卷は、同翁古學研究の餘暇になれる業餘の隨筆とも見るべきであるが、古文古辭の解釋の上に獨創の見識を有して、眞淵を衆議判と嘲り、契沖の不學を惜み、春滿在滿等の固陋を嗤ふ箇條など、理路の井然たるものがあつて、謬妄の漫爲とのみは見られない。

──松（子平の父）──

中學校の漢文教科書にも、佐々木知芳の林子平傳があつて、「父名良通（中略）良通學關古今、善和歌、最通國朝典故、著儀式攷十卷、與新井白石往來最密、後因事削籍。」とあり、わたしどもも「儀式攷」の名は少年時代から聞いてゐる。又中學時代の漢文教師に近藤親民といふ老先生があつて、常に蒲川八郎、高野長英、林笠翁の三人者を極端に稱揚して、東北の三傑人または三狂士と呼んでゐた。先生自身の拓落不遇のためもあつたらうが、中にも殊に林子平の父笠翁には傾服して、學識器量ともに感歎してゐられたやうに記憶してゐる。或る日輪講會の席上にて、（わたしは試驗準備のため數月間先生の私塾に通つた）先生は授業の際に用ゆる土股消に作つて、平常の訥辯にも似合はず、萬吉滔々として林子平論を高唱されたことがあつた。その説に據れば、林子平とは寧ろ一箇の好適見件傀兒のやうにもあつた。彼が後世に大名をなせる所以は、その父その友に負ふところが甚だ多い。友とは即ち工藤平助、藤塚知明、父は即ち勝諳林笠翁である。子平の學業見識は畢竟この三人者の研究抱負の集成に外ならない。時勢もし人を生むと云はゞ子平は寛政の思潮によりて活き、時勢もし人を殺すと云はゞ父笠翁は享保の政治のために殺された者とも云ひ得る。氣概者として學者として、また卓見ある開國思想家として、子平は到底その父の對抗者ではない──近藤先生の論旨は大略斯の如きものであつたかと思ふ。そしてその時先生はわれ等に向つて、笠翁事蹟の説明などもあつたらうと思ふけれど、その記憶は今甚だ分明でない。その後間もなくわたしは東京に遊學するし、先生は同僚職員の排斥をうけて中學校を辭して郡部の小學校教師に遷られたと人づてに聞いたのみで、空しく年月が過ぎ去つた。今思ふにいつになく過激なるその日の笠翁論は、先生自身の不平鬱懐をもらす爲めに、故と慷慨の言を古人の經歷に托したものではないかとも考へられる。序ながらここに餘門をかりて先生の略傳を掲げ、不遇にして世を終りし舊師匠の前に、

些か追懐の意を表して置きたい。放縦不検束にして學問にも不熱心であつた少年時代のわたしは、不思議にもこの老先生に愛されて、孤立獨往の精神を注入されたことを今に忘れ得ない。

「木村敏、近藤親民、學問文章頡頏シテ相讓ラズ。而テ一ハ名聲嘖々、一ハ沈淪彰レズ、抑モ亦命矣。其顯ハルルモノヲ木村敏トス。(中略)利器ヲ抱テ、當世ニ試ムルヲ得ズ、沈淪落魄、以テ死スルモノハ近藤親民ナリ。親民名ハ綱字ハ尚卿、通稱一郎、醒堂泰軒巨溪ハ其別號ナリ。少ニシテ家貧、親ラ薪水ノ勞ニ服ス。初メ養賢堂に學ビ、大槻習齋ヲ師トス。後チ江戸ニ出テ古賀茶溪に從遊シ、傭書自ラ給シ備ニ艱苦ヲ嘗ム。平生氣節文章ヲ以て自ラ任ジ、其詩文ヲ作ル苟モセズ、故に皆法度アリ。維新後北村(木村氏を云ふ)ト同ク、宮城師範學校ニ入ル。然レドモ遂ニ志ヲ獲ズ、僅ニ一小學校長ヲ以テ身ヲ終フ。噫亦悲ムベキ哉。親民明治二十九年十月八日ヲ以テ、柴田郡村田僑居ニ歿ス。享年五十二、黒川郡大谷村東成田ニ歸葬ス。」(仙台人物史)

わたしはゆくりも無くも舊師の晩年の有様など追想しつゝ、食堂車の喫煙室の一隅に凭れて、ウヰスキイを嘗めながら殆んど終日「儀式攷」に讀み耽つた。朝儀禮式の學問に對して何等の智識なきわたしには、斯の書の内容について價値的判斷或は批評などを下すべき資格なきことは十分に承知してゐるけれど、その研究的態度のいかにも勇健にして、飽迄も自己の信念に邁進する熱情的氣魄が、讀者としてのわたしに甚だ爽快の感を與へる。彼自身も古學研究は僅々十年足らずの勉強に過ぎぬやうに云つてゐるにも拘らず、當時斯學の權威者たる何田春滿及び其養子在滿を敵對者として正々の論陣を張り、その謬説を指摘し不詮索を責め、遺漏を補ひ曲解を正し、緻密なる考證と該博なる引證をもて堂々と自說の論據を進めてゆく態度が、いかにも颯爽たる著者の風姿を思はせるばかりでなく、資料の選擇、立論の態度ともに甚だ實證的であつて、前學者の形骸に拘泥せず科學的の検討を重しとする點など、何んとなく近世的學者の研究態度を窺ひ見られる。彼の眼中には契沖なく、眞淵なく、學術の前には私情を顧みぬためもあらうけれど、かねて敬服する從兄の下田師古淺井奉政等の學說をも何んの忌憚なく縱横に揶揄し、愚弄し、唾棄して、時には諸者に一種の反感を生ぜしむるまでに、敢然として自說を支持するところに、著書の熾烈なる情熱と血性とを見るやうな氣がする。わたしは讀み讀むうちに、幾度か笠翁その人の勇敢なる邁往精神に氣をうたれると共に、舊師親民先生の激語の虛誕ならざりしを感じた。

それにしても不思議なるは笠翁の生涯である。これほどのオ能器量を有しながら何故にその事蹟が今日に傳はらぬのであらうか。多くの林子平傳は彼笠翁の生涯について何事も云つてゐない。偶ま彼の經歷を述べる者があつても、たゞ彼が徳川幕府麾下の士であつたこと、ほゞ國學古典に通曉してゐたこと、元文六年正月故ありて削籍されて諸處流寓の後、その女が仙台藩主の側室となりたる縁故によりて、一族の者が仙台に移り住むに至つたと記すぐらゐなもので、それ以上の記載は殆んど見當らないばかりでなく、最も肝要と思はるゝ笠翁削籍の眞相については、各書ともに固く緘默を守つて、一切を秘密に付してゐる。これを郷黨の傳說に辿つて探しても、或はその幕府勤仕中に同僚の横邪を憤つてこれを斬殺して常陸に流落したとも傳へられてゐるし、或は又剛直にして權威に屈せず、屢々吉宗將軍を强諫してその譴責をうけたと云ふ說もあり、甚しきに至つては笠翁もと放蕩無賴にして新吉原の遊女何某に深く狎れ、金錢に窮して人を殺して江戸を立退いたとも云ひ、所說紛々として明瞭を缺いてゐる。また不審と思はるゝは林子平の姪に小林良吾（通明、後剃髪して良阿と云ふ）なる人あり、この人は極端なる子平崇拜家であつて、叔父の事蹟を世間に顯はすために種々の方法を講じて勉めてゐながら、その父笠翁の經歷については一言の記述すら殘してゐない。それのみならず見方に依つては、笠翁行蹟の世に明かにさるゝを恐れて、子平の聲聞のために故意に湮滅に從つたのではないかと疑はれる點さへある。わたしは其等の事實に徵して、何んとなく、この一部の「儀式攷」十卷こそ笠翁生涯の秘密を闡明し、削籍の眞相も流落の原因をも明かにすべき大切なる鍵であるやうな氣がしてならなかつた。雨香先生の序文にもあるが如く、斯くまで苦心經營の著書が林家の遺族間に門外不出の秘書として取扱はれ、享保の末年より今日まで、殆んど二百年に近い年月を空しく篋底に死藏されたといふ一事だけでも、そこには必ず意想外の事情が伏在しなければならないやうに思はれた。附錄せられたる隨筆集「仙台間語」三卷は、その大部分が「儀式攷」の拔萃抄書であつて、もし「儀式攷」が障りなく刊行せらるゝ時運にあつたならば、決してこの隨筆集を編む必要がないと思はるゝ點から考へても、笠翁自身も「儀式攷」は到底世に出すべき書籍でないことを、生前に覺悟してゐたらしく思はれる。それこれともにわたしは異常に好奇心穿鑿癖をそゝり立てられ、この度の歸省を幸ひ郷里の先輩先生の門を叩いて笠翁研究の階梯を得やうと考へてゐる時、汽車はいつか仙台驛に到着してゐた。北國の三月は春まだ淺く、膚に冷寒を覺ゆる午後九時頃であつた。

伯父の急病は腦溢血であつた。もとより十死に一生をも期しがたき危篤の症狀ではあつたが、昨日からの昏睡狀態のまゝ呼吸なども可也に確實に見えた。親戚の醫者の注意にて家族の者を臥床に入らしめ、從兄を初め三四の近親が枕頭に集つて、しめやかに病人を見戍つてゐた。わたしは兎に角伯父の生前の姿を見るを得た安心と、汽車中にて過ぐした酒が急に出て、從兄等と久しぶりの對面酒に、少し盃が續れると思ふほど醉つた。見ると、先程から坐敷を出入りして、杯盤の周旋などまめ〳〵しく立働いて、女どもに代つて親切にわたしをもてなしてゐる眉目清秀の一青年紳士がゐる。從兄にあれは誰かと訊くと、忘れたかと笑つてゐる。誰であつたと聞くと、あれは三郎さんだと云ふ。林の三郎さんだと云ふ。林子平家の正統相續林三郎君であつた。伯父は先代の亡後林家の後見者のやうな地位にあつたので、三郎君は昨日以來伯父の病床に侍して看護につとめてゐたのである。わたしは覺えず膝を叩いて、林君を無理から自分の前に坐らせた。汽車中にて初めて「嚴式攷」を讀んでその興奮がまだ止まぬところへ、伯父の家に着すればそこに笠翁の裔孫がわたしを待つてゐる。奇遇とも因縁とも、たゞ不可思議なるやうな氣がして、默つてゐるだけな程大袈裟に考へてゐた。そしてわたしは切りに三郎君を責めて、何か家に傳はる傳說なり記錄なりとも得やうとしたが、年若かな同君には格別の聞覺えもないらしかつた。それから話は自然と笠翁論にうつて、何でも曉の四時か五時頃まで話しつゞけたと思ふ。その間紺メルトンの洋服の膝をキチンと坐つて、醉客の世話をしてくれた同君の迷惑さは一通りではなかつたらうと、後になつて考へた。

わたしは三郎君を相手に話してゐる時、キラリと閃いて電光の如く頭腦を掠め去つた考へがあつた。それは前にも云つた、嘗て何年か前に神田の古本屋から購ひ來つた古寫本の「もしほ草」であつた。子平の兄林嘉膳が姉お清の方の緣故によつて、初めて仙臺藩士に席を列する時に、父笠翁から兄弟の者に書送つたと云ふ訓諭書がある。「平生可ㇾ被二心掛一候々の事。」と題する十四五條の箇條書で、仙臺藩ではその頃小學生徒でも知らぬ者はないほど有名な書簡體の文章であつた。そのうちに慶長寬永頃の古武士の質素々朴なる氣風を賞敬して、「小野濟右衛門と申す御持筒頭は二千石にて候。一生皮の袴に黒戻子の肩衣を夏冬着て相勤候。林檜右衛門と申す御目付も二千石にて、其女を近藤宮内と申候て、五千石取の方へ遣候時、家老に樋口休意とて御坐候もの、肩に負ひ來り候。かつぎかぶせ、手木と申一尺

餘りなる丸木を尻へあて候て、阪上下の上へ負て來り候由、終大人の御物語に候。」とて、近代の奢侈の甚しきを畏れ戒めた文章があつた。わたしは三郎君と雜話のうちに不圖その一節を思出して、それと全然同じ記事を何書かにて讀んだ記憶があるやうに思つた。慥に寫本「もしほ草」にあつたと思ひ出した。それと同時に、笠翁の時代が享保元文を中心としてゐるのに、「もしほ草」の著者も同時代の人である。笠翁にも常陸流寓の傳說があるのに、「もしほ草」の著者も常總の地に漂浪してゐる。わたしは其等の事實を思ひ出して、僵が心が急に揺らぎ出すやうな心地がした。一方にはそのやうな奇蹟にも似たる發見が、わたしなどの力によつて爲し遂げらるゝ筈はないと否定しながらも、一方また今日一日の奇遇因緣を考へて見ても、彼の著作が既に世に顯はれべき時節が到來してゐるのではないかとも、醉つてゐる頭腦には興奮して考へられるのであつた。

伯父の昏睡狀態は十日ほど續いて、遂にこの世を去つた。葬式の日には北風が荒んで、雪まじりの小雨が降つてゐた。わたしは埋葬を終ると急に思ひ出つて、翌々日の急行列車で東京に歸つた。明日は初七日の法事を營むといふのに、斯くも慌しくわたしが歸宅を急いだのは、期日を約束してゐる或る仕事もあつたのだが、一つには一刻も早く「もしほ草」を讀んで、頃日來こゝろに蟠つてゐる疑念を晴らしたいためであつた。家に歸つて早速本箱をそこごゝと探したけれど「もしほ草」はやはり見つからない。その後十日ほどはたゞ無性に懊惱して、毎日々々同じ本箱抽斗などを探すのみで、仕事も何も手につかなかつた。すると偶然、四月の下旬になつて圖らずも「新三十輻」のうちにある前記の「寓意草」が「もしほ草」と同書であるのみならず、上下二卷に分れて完備してゐるのを書架のうちから發見した。讀んで見ると無論笠翁自記の著作に相違ない。一々の事實を林家の系圖や雜纂に照合してみても、何等の疑惑をさしはさむ點を見出されない。わたしは、やはり因緣であつたと獨語して、疲れた心を憩はせた。

「儀式攷」はその緖言によつて見れば、享保六年に紀州某社の祠官前田美濃守なる人が、伊勢山田にて儀式の書を得て、これを將軍吉宗に奉進した。然るにその書といふは殘缺錯簡が多くして、到底讀み下すことを得ない。よりて吉宗はこれを當時の京都所司代松平伊賀守忠榮に命じて、九條家の秘本によりて訂正を加へた上に、書物奉行たる下田師古及び京都人荷田春滿の二人に命じて校訂をなさしめた。二子心を用ひ心を竭し力を竭して其業に從ひ、數年の後にやうやく完成して校訂書を將軍に奉つた。(荷田家記錄には享保八年五月十八日、吉書校定の功

により賞賜金十兩兩三疋を受くとある）然しその書は文字紊亂して猶ほ未だ通曉せざるところ多きために、再校定を師古の家弟茂井奉政に命ぜられた。「奉政命ヲ受ケテヨリ、寝ルニ枕ヲ安ンゼズ食ソニ味ヲ甘シトセズ、或ハ舊文ヲ復シ或ハ新意ヲ加ヘ、竣餘ニシテ新ニ一本ヲ書寫シ、序ヲ作リ圖ヲ制シ、貞觀儀式ト題シテ闕ニ詣リテ之ヲ進ム。」とあるが、この新寫本も矢張り文意に斷續あり、脈絡が連絡せざる點が多くて、讀むに甚しき疑惑がある。「故ニ又春滿ノ子在滿ニ下命シテ、新古ノ二本ヲ以テ更ニ校訂セシム。此時師古奉政春滿既ニ沒ス。在滿モ亦タ心ヲ用ヒ力ヲ竭シ、左衛門尉酒井氏家臣衣笠篤親ノ本ニ據リテ、前者ヲ捃摭シ新定ヲ沙汰シ數字ヲ刪補シテ以テ官庫ニ納ム。儀式再ビ全典タルコトヲ得タリト謂ツ可シ。二三子ノ功實ニ至レリ盡セリ。予幸ニ看ル事有ニ與レリ。」とあるは、荷田家の系譜及德川實記などゝもよく符合してゐるから、在滿の儀式校訂は享保十九年頃であつたらうと思ふ。笠翁は當時御納戸方などに勤任してゐて、この事業に參與したものらしい。因りて試に享保武鑑（同二十年板）及元文武鑑（同五年板）を繰り出して彼の姓名を探索したが、兩者ともにその名を記してないのは、甚だ不審に思はれる。これは四方識者の一考を煩はしたいと思ふ。

「仙臺間話」に記せる彼の履歴によれば、彼はこの頃既に國典歴史の研究に興味をもち、學術の進歩も見るべきものがあつたらしい。初めは奉政在滿等の熱心なる勉學を見て感歎の聲をはなつのみであつたが、次第にその研究態度の冷淡たるに慊らず、不滿を感じ疑問を生じ、遂にはその書の根本問題に重大なる惑疑を生むに至つた。元來儀式の撰書には、弘仁儀式、貞觀儀式、延喜儀式の三種あつて、世にこれを三代儀式と謂つてゐる。前田美濃守の上納本儀式書はその篇目がほゞ貞觀儀式に同じきために、初校者春滿はこれを貞觀の作と定めたるに、師古奉政在滿の諸氏もその說に疑ひを置くところなく、遂に奉政の校訂に際してはその書に「貞觀儀式」なる題目を加へて將軍文庫に上納するに至つたが、果して該書は貞觀の撰集とたすべきであらうか、笠翁にはそれが重要なる疑問となつたのである。彼の觀るところでは、その儀式書は延喜儀式を符選する時の未定草稿であつて、決して貞觀の選集とは思はれないのであつた。然し徒に疑問を提供したのでは人を驚かすに足らぬ。獨力敢行してこの難事業にあたり、先輩三四氏の精力を竭してもなほ完成にするを至らざりし數百年の疑惑を、彼一人の刻苦によりて闡明の域に達しやうと、彼は雄々しくも決心して、その研究に沒頭した。前にも引用した隨筆中に「あはれ時しならば、

大やけのながめともなるならんと、夜はまろき枕にいもねず、ひるはあらきかれいひにみもひ飲て、いそぎじもたゞ夢の心ちして。」とあるのは、以て彼のいかにその難事に精勵せしかを語るものであらう。

斯くの如くして一部十巻の「儀式攷」は完成された。その内容價値の批判の如きはこれを斯道識者の研究を待つべきものであつて、われ等門外漢の窺知すべきものとは思はぬが、彼が如何にこの著述に自信を有してゐたかはその緒言に、「一犬虚ヲ傳ヘテ萬犬實ヲ傳フ。春滿ガ虚談遂ニ實錄トナル。此書ヲ惑ス者ハ春滿ニ始リテ、奉政ニ終ル。之レヲ潤色スル者ハ在滿也。古來假令貞觀ノ二字ヲ遺留ヌルトモ、今除去スベキヲ新ニ其字ヲ加題スルコト、何爲レゾ其ノ盛典ヲ穢ヒ、聖謨ヲ汚スコトノ甚シキ。嗚呼恐レザル乎、嗚呼恐レザル乎。」と慷慨を極めたる上に、「書ヲ校訂スルハ道ヲ後世ニ傳フルガ爲也。二三子ノ如キハ惑ヒヲ傳ソルモノト謂フベシ。其ノ古典ヲ刪補スルニ、許モ舊史ノ鑑トスル無クシテ、之ヲ刪リ之ヲ補フハ唯是レ臆度ナリ。二三子ノ如キハ舊史ヲ鑑トセズ、之レヲ前後ニ照ラサズ、之ヲ名ケテ目論ト謂フ。（中略）彼等三禮ヲ看ズ、七書ヲ讀マズ。宜ナル哉、試生文面ヲ解セザル。故ニ校訂刪成シテ舊典弊ブル。寧ロ功有リト謂ハシカ、抑モ罪アリト謂ハンカ、費ニ益ナキノミナラズ、正ニ並世に害アリ。後世必ズ享保ノ例ヲ議襲センヲ如何トカスル。」とまで極論してゐる。

彼は斯く記しても滿足せずに、成書を荷田在滿に讀ましめて、その意見を問ふてゐる。在滿はこれを讀んで、「初ハ悅色有リ、中ハ從ハザル色アリ、終ニハ慼色アリ。漸クニシテ第十巻陵墓付註清和外祖ニ至ルヤ、左右ヲ顧テ微音ニ謂フテ曰ク、誠ニ然リ誠ニ然リ、今如何トモスル無シ、若シ糺問アラバ、後人ノ加フル所トセンカ。答ヘテ曰ク、明證有リヤ否ヤ、證ナクンバ敢テ從ハズ。正親司式及ヒ西宮記、北山抄、江家次第、荷前編、十陵八墓、皆此ノ如ク註ス。此書獨リ豈後人ノ爲ス所ナランヤ。在滿默然タリ。鳴鳳卿（成島道筑）モ亦之レヲ讀ミテ曰ク、前考ノ妄ハ如何トモス可ラズ、默シテ時ノ至ルヲ待ツニ若カズト。」と痛烈に學敵を攻擊してゐる。

序ながらこゝに笠翁の學問を知るために、彼が「仙臺間語」の篇末に附記せる一文を、原文のまゝこゝに引用する。

老後仙臺に偶居して病に罹り。可レ消レ日事のなく。無聊の餘り。見覺聞覺た事を生白堂か贈し。白紙の小冊の有を幸と。筆に任て書置ぬ。雲水の境界より後は。一卷の書も不レ持は皆闇記（アラチボエ）に而書るまゝ。さぞ誤も可レ多。若も見人有

は正し給へ。所詮無用のむだ事なれば。問語と題したり。如レ是假名書の作も。仁齋翁の制度通。東涯翁の名物六帖。徂來先生の政談語錄。答問書。孫子。吳子。明律國字解。春臺先生の經濟聖問答辯書。親族正名など。皆假名書なれども。治道要務なれは。國家に無て不レ叶書也。其他白石翁の東雅。採覽異言。熊澤氏の集議和書。貝原氏の大和本草。農業全書の類は。皆國家に有益は無て不レ叶也。物に云。理窟を云ひ。古聖人の道をは不レ知して。天理。人欲。性善。浩氣。混然中。和。明二德可レ爲二聖人一工夫に。日を送り持敬靜座に時費し。治道に不レ關。學問の仕形は學者生かひなき事也。爰に一つ懺悔物語有。八九歲の時。林家の腐儒。飯田源之進と云漢に屬られ。書を讀習しか。只道春點のまゝに。素讀するまで也し故。十三の歲。徂來先生の門に入らんと欲し。往けるを男子に。下田泉翁と云人有て。父母謂て云。兒をして荻生氏に屬する事勿れ放蕩に至是より徂來先生の門に入るを許されず。次其徂來門下は放蕩人多し。嫉みする人の云さはぐ事の有れば也。男氏は二山彌三郎門人也。同派に大塚庄右衛門。と云し老儒二定引來り、篤實の君子也。此人に學と云ふ。四書。五經。小學。近思錄。朱子語類の外は讀せず。かくて十五六歲に至る比。論語前後篇の文勢の異と。罕云憲問の疑しきに問たれば。何者に竊取し無用の事な云そ。それは致知格物の益になるか。天理。人欲の理を會得してこそ。學問と云なれと甚怒罵ぬ。爾來十八九歲に至。學問は畢竟無益と思ひ廢てはてたり。壯年に過る比。余は文盲なるが悲さに。表兄淺井平政が國史を讀を把て看たるに。一字も不レ讀。憤懣を發し寢食を廢して。歲餘讀たれば。少く文字は知れたれども。學問はたゞ窮理で止ると思たり。其後徂來春臺二先生の書を看て。先生孔子の道の可二高信一を知り。詩文の不レ學して不レ叶を知る。此時徂來先生既物故せり。春臺。郭二先生に謁して。頻りに學其時過ぬれば成るなし。如レ此文盲にて朽終るも。道學者に一生を誤たりと思へば。大塚備儒を思出しては讒に欲思ふ十三より林家に入て。五十歲勤たらば。假ひ王公の師と成共。慰る事は不レ可レ有豈區々として人の下に立也。新安之學流毒於二四海一と。領候の書給ひし思ひ當れり。明二明德一する工夫を說し。混然中和の境に入。氣質を變化して。聖人に爲を說より。念佛讀經して報行の功を積は。後世は必佛に成。佛氏の教るに生ながら聖人に爲事を教るより。遙に賢き術也。程。朱二子も持敬靜座の効を積み。混然中和の境に入ば。

死後必聖人と爲て。敎に欲し思んを。さすかに不レ敎は。程朱の程朱たる所以也。子孫に傳へ與せまじきは道學者流也。無用の閑語と知つゝ。紙を費して書も可レ消レ日までの事なれば。道學者流の理窟ばかり。背道ほどの者までは不レ可レ有。如レ此筆墨を費し無用の事を書置は。頓て屏風の下張と成り。終は紙屑とてかひやり。捨られんと思へば。口に出るに任せて、

かくかひも渚の海人の藻鹽草いつか煙と立やのぼらん。

明和元年甲申十二月

猶書たく欲き事の有れども。紙の不足は筆を措ぬ。此後紙を求め得ば書續べしと爾云。

東都林笠翁志

林嘉膳林子平等之父也

緒言の附記によれば「儀式攷」の脫稿年月は享保二十一年三四月の頭になる。(同年四月改元、元文と云ふ) 然しわたしは何んとなくこの記載に疑ひを持たせられる。何故と云ふに、若し彼の江戸出奔が普通傳說の通り元文六年正月（同年二月改元、寛保と云ふ）にかゝるものとすれば、その間に滿五箇年の歳月が經過してゐる。彼の如く功名心に燃え自信に猛進する者が、五箇年の長き間その校本を進獻せず、好學將軍吉宗の閲覽を經なかつたと云ふのが、いかにも事實に遠いやうに思れる。尤もそれには成島道筑の語の如く、「前考ノ妄不レ可ニ如何一不レ若ニ獻而待ニ時至一」と云ふやうな穩健なる仲裁者があつて、前校定者の名譽のために獻上本を中途に抑留する者があつたと、想像を廻らせることもならぬではない。然し元文三年には大嘗會の再興あつて、在滿は儀式拜觀のために上京をさへ命じられてゐる。わたしはそこに何等かの理由があつて、笠翁自身が後年「儀式攷」を校定の際に年次を故意に二三年遡らせて、享保丙辰の歳に繫けたのではあるまいかと疑つてゐる。これはいづれ識者の研究に待ちたい。

序ながら云ふ。わたしはこれまで隨所に彼の名を林笠翁と呼んで來たが、林笠翁も勝詰も共に彼が江戸を逃走後に用ゐた彼の變名で、(尤も先祖に林姓を名乘つた人はある) 本姓は岡村源五兵衞良通である。代々の菩提所日輪寺の過去帳には總て半次郎良通と記してあるが、恐らくそれは享保十五年家督相續以前の通稱であらう。わたしは以後本名の源五兵衞に隨つて彼の名を呼びたい。

「儀式攷」脫稿の年月に疑ひあると共に、わたしは彼の江戸脫走の年月にも疑問をもつ。然しそれ等は資料完備の上に再考す

るとして、こゝには矢張り林家の傳説通り寛保元年正月説に從つて置く。そしてその前後の史書史料を探測してゆくと、偶然かも知れないが甚だ不思議なる事實に逢着する。第一、この正月の制令として、「去年京におゐて行はれし大嘗會の儀註上梓せしを絶板命ぜられき、今より後、朝廷禮典を記せし書、古く板布せし外、新に剞梓する事停禁たるべしとなり（大成令）」とある外、嚴重なる出板法令が發布せられてゐる。第二に、彼の研究の敵對者なる荷田在滿は「大嘗會具釋」と「大嘗會便蒙」なる二書を刊行せるために、幕府の忌諱に觸れてその板本を沒收され、在滿自身は閉居閉門を命ぜられ、そのために田安家を退身するに至つてゐる。わたしはこの事實に深く留意してゐる。後の學者はこの事實を説明して、「具釋の方には中古以來大嘗會の完備せるを述べたるに對して、便蒙には當時大禮の粗略に附せられつゝあるさまを示して、暗々裡に朝廷の式微を悵慨し、尊皇の精神を振起せしむるとの下心に出たれはなるべし。（荷田東麿翁、大貫眞浦氏著）」と云ふに一致してゐるやうだが、わたしは簡單にそれだけでは見過せないやうに思ふ。この在滿の譴責事件に、子平の父源五兵衛が如何なる點まで關係を有するか、その顯秘の時が來るのを待つてゐる。問題の中心となつた「大嘗會便蒙」は先に在滿が吉宗に進獻せる「大嘗會圖説」またその儀典研究と何程の差異があるか、今それを比較研究するの便宜はないけれど、前文にも見ゆる如く、源五兵衛の「儀式攷」著作の源因の一つは、在滿の大嘗會研究の杜選安修を極めて、後世を誤るものして憤慨を發した點にある。その對立者の二人が二人ともに、同じこの年の正月をもつて、しかもその著書のために、一人は故郷を逐電して遠國に漂泊する、一人は禁錮の人となつて終生幽愁のうちに世を去ると云ふ運命に逢着するとは、例へ偶然としても餘りに奇異なる因縁と云はねばならない。殊に源五兵衛の著書「儀式攷」がこの時世に埋もれたるまゝ、殆んど二百年の間遺族子孫の間に、不出門の禁書として空しく篋底に秘められたる事實などに徴して、わたしは一層その感を深くせざるを得ない。

　この臆測を延長して行くと、わたくしはそこに屹然として立つ巨人の姿を見る。縣居の翁、賀茂眞淵その人である。勿論資料の十分ならざる時、輕々しく斷定すべきことではないが、寛保元年正月の怪事件には、彼の翁も多少の配役をうけて登場俳優の一人として見べきではないかと思ふ。その行實が表面に顯はれぬだけ、或は闇中の飛躍があつたのではないかと思ふ。彼は在滿に從つて上京して、在滿の助手として或點までその研究に關與してゐる。わたくしは彼の傳記を讀んで、彼の田安家出

仕の前後事情に至る時、いつも彼の出處進退に些か公明を缺くやうな感を禁じ得ない。傳ふるところの事實は、在滿が所罰をうけて田安家を退くについてその後任者として眞淵を推薦したことになつてゐるが、無論それは事實に相違なからうけれど、在滿が眞淵を推薦せざるを得なかつた點に、何か深き情實が隱されてゐないかとも疑はれる。眞淵側から出づる記錄雜誌などは、なるべく田安家出仕の事情に觸れまいと勉めてゐる形迹が見え、荷田家側のものはいつも言外に怨恨の氣を含んで、隆々たる眞淵の社會的活躍を嫉視してゐるやうにも見える。これを岡村源五兵衛の隨筆に徵するに、彼は極端に眞淵を憎惡して、その人格まで誹議してゐるやうところがある。「本鄕に岡部衛士と云ふ男有り。自ら加茂縣主眞淵と名乘り。」云々と別に一章を起して、彼の不學を罵つてゐる。表面は學問上の論議を出ないけれども、十年後に魚彥や千蔭を使者に立てゝまで駁論を寄せてゐる執拗さにも、何かそこに秘密が伏在するのではないかと思はれる。兎に角、源五兵衛在滿の二人が失脚の源因となつた同じ事件が、眞淵が大名をなす最初の一階段であつたことは不思議と言はざるを得ない。

この小文を草する最初の計畫では、源五兵衛とその弟子魚彥並に健部綾足との關係、源五兵衛がその愛兒友直に及ぼした思想及性格上の感化影響、子平の學統、海外思想の傳來などにも及びたい考へであつたが、記し來りて餘りに饒舌にわたるを恐れると共に、時日も編輯者の締切に近づいてゐるので、總てそれ等は後日を期して評論したい。幸に、千葉縣小見川町の小池晃三氏、潮來町の野口新次郎氏中崎氏などの援助を得て、目下同地方に於ける源五兵衛史實の採訪中であるから、それ等の結果を併せて再び書きたいと思ふ。

最後にたゞ一つ書き加へたのは、岡村氏代々の墓地發見の次第である。これを書けばます〳〵因緣話にて小文を始終するやうになるけれど、事實は事實として書記して置く方が好いと思ふと同時に、萬一にもそれが史蹟保存會など云ふ人々の一顧に値して、何等かの維持方法でも講じられるに到らば、わたくしとしては望外の幸福とせねばならない。

「寓意草」の蜀山附記によつて、同書がもと慈日山なる寺に保存せられてゐたことが知られる。且つ記中の文章によつて、岡村氏の親戚に小日向某寺に住職する者があることが知れ、且つ源五兵衛幼年の追憶は必ず江戸川を中心としてその界隈に限られてゐる事實などから推測して、わたしは最初から岡村家の墓地は必ず小日向崇邊にあるに相違ないと考へた。今考へると可

也に危い斷定であるが、妙に暗示的に然う信じられた。そしてその第一の手懸りは戸田氏德の解題にもある小石川金富町の金剛寺であるから、人にも賴み自分も出掛けて、金剛寺の帳面を調べて貰つたり墓地の搜索などにも從事した。然し同寺には岡村姓はあつても、源五兵衛の家と目すべき墓碑はない。次には慧日山東の雨窓下に寫すとある山東の東字に目をつけて近傍の寺院も探したが、矢張り無い。それでも尙ほ小日向邊の墓地を斷念しかねるので、散步しながら四五日間あの邊の墓地を每日步き廻つてゐた。すると七月廿六日、かねて仙臺の從兄に托してあつた林家の古系圖が到着した。見るとその中に墓地は小日向水道端日輪寺と明かに書いてある。日輪寺といへば幼稚園のある寺で、現に二三日前にわたしはその墓地を探して來たのだ。暑い日の午後であつたが、わたしは今年中學生になつた伜をつれて直ちにその寺に出掛けた。

丁度盂蘭盆會にあたる日で、住寺は本山の施餓鬼に出張された留守であつたが、家人に尋ねると林子平の親戚の墓ならば當寺にあると云ふ。早速寺男に案內してもらつて裏山に登ると、なるほど林從吾の墓とした石碑があるにはある。然し奇麗に地ならしした墓地にのなかに、この石碑が一基立つのみで岡村姓のものが見當らない。林從吾は源五兵衛の弟なる人で、源五兵衛の逝去後は子平兄弟の義父となつて遺族を保護した人であるから、この墓があれば他にも代々の墓がなければならない筈である。寺男にその次第を話して樣々に問ふたが、何事も知らない聞かないと云ふ。是非なく諦めて歸らうとして、何氣なく周圍を見廻はすと、一二間離れたところに桑山家代々之墓と彫りつけて、昨日今日築造したかと思ふ眞新しい石碑が一基建つてゐる。側面を見ると、今回の震災にて墓地崩壞せるために、この一基を新造して他は全部取拂ふ旨が記されてある。わたしはその文句を讀むと同時に、曾て何人かの林子平傳にて讀んだうちに、子平の遠祖にあたる人が紀州藩桑山某の養子となつたと云ふ記事を思ひ出した。で、寺男に向つてこの桑山家の取拂つた墓碑どもの行衛を質すと、それは既に檀家總代の墓地整理委員の權限に移つて、石は既に石屋の手に渡されたが、その邊の地中に埋れてゐるのが大方それであらうと云ふ。その言葉に勇氣を得て寺男に賴み、伜を指揮して、その邊の籔垣や草原を探して、ひどい籔蚊に攻められながら數十の墓碑を掘起して見たが、岡村姓の石は一つもない。そのうち日も暮れかゝつて來たので、今はこれまでの運と斷念するより外はない。小兒にせがまれて歸りかける時、不圖徑端を見るとそこの空地に日覆ひして、石工の工事場らしい所がある。取拂ひになつた古石碑に細工し

て、新しい石碑に修飾して搬出する場所らしい。何気なく中に入つて見ると、一基の小松石は奇麗に碑面を削り落されて新らしい石碑に装ひ出されてゐる。その傍に一本の古石碑が泥に塗れてゐるのは、これを総つてこれに取懸かるべき石屋の手順であつたらうが、その日は盂蘭盆の墓詣りなども多いので、石屋は仕事を休んでゐたと見える。わたしはそんな事を考へながら、泥まびれの碑面を見るともなく眺めると、中央に心光院大安寶道居士とある。正しく源五兵衛には祖父にあたる人の石碑であつた。わたしが思はず有つた〳〵と叫ぶと、寺男も小兒も駭いて飛んで來た。

正直はその晩、わたしは興奮して眠られなかつた。翌朝は暁を待ちかねて飛び起き六時頃に日輪寺を訪問すると、住職土藏氏は仔細を寺男に聞いたとて、これも驚歎してわたしの訪問を待つて居られた。そして同氏の好意によつて墓地を無代償にて寄進をうけることになり、石屋の方はわたしが引受けて、從前の位置に從前の通りに復舊することになつたばかりでなく、住職の斡旋によつて代々の石碑も大部分發見されることになつた。

註一） 慈照山日輪寺過去帳に、『天眞院太宗悰心居士。享保十五庚戌五月二十三日、岡村半次郎父。』とあり。林家略歴に、『岡村八左衛門衛道。中右衛門長子なり。享年六十六歳。先妻若林氏、後妻首藤隊源美又兵衛女。』とある。

（註二） 元文武鑑に。『渥美太郎兵衛、御書院御留守居組、二百俵、四谷與力町』とある。恐らくはこの人なるべし。

（註三） 日輪寺過去帳。『秋顔玉葉貞女。寛永四丁亥年八月八日。岡村八左衛門妻。』

（註四） 林家の傳說に、『源五兵衛の季弟を杢之助といふ。十一歳の時堀田伊豆守正虎の家老若林杢左衛門高白の養子となり、成長して養父の後を繼ぎ城代家老となり、祿三千石を食む。寛保元年三月、主君正虎の時に至り、君の放縱を諫めて容れられず、二十二歳にて切腹して死す。』と云ふ。

（註五） 林家累譜に云ふ、『林政二郎通明。八左衛門二子、林家中興ナリ。其人トナル騎ヲ好ミ、遂ニ馬ヨリ落テ右ノ手足ヲ折リ、終生不具トナル。元文五年ヨリ岡村ノ稱ヲ止メ、仍舊林氏ト稱ス。從吾ト號ス。諱ヲ辨世ト改ム。兄良通ノ子二男三女悉ク以テ己ガ子トナシ、醫ヲ業トシ老母及嫂五子ヲ濟フ。寛延二年己巳始テ仙臺侯ニ仕ヘ、月俸三十口ヲ給フ。元文寛年ヨリ俸ナキ十年ナリ。寶暦二年正月十三日卒、四十六歳。仙樹院寛道從吾居士。江戸慈照山日輪寺ニ葬ル、終生無妻無妾。』

（註六） 林家略譜及び雜纂に云ふ。『林嘉膳ノ姉清、寛保三年仙臺侯吉村ノ侍女ト爲ル。延享四年世子宗村ノ側室トナリオ清の方ト云フ。寶暦六年側奨、同十一年二月廿四日卒ス。圓智院ト號ス。』

その夜の三人

廣津和郎

一

早稻田時代の自分の同級生に山本一藏と云ふ男があつた。同級生と云つても、自分は彼と一度も言葉を交はした事はなかつた。見るからに秀才然とした、痩せた、眼の鋭い男で、傲然とした態度で、級中を輕蔑したやうな顏をしてゐた。――何でも授業時間の始まる時、教室に這入らうとする學生達で、教室の入口が雜閙する。さういふ時、彼は順繰りにその小さい入口を這入つて行く事にいらいらして來るのか、むつとしたやうな顏をしながら、拳骨で前の男の背中をぐいぐいと突く。その人もなげな彼の振舞は、併し何處かに痛快味があつた。默つて級中を見下してゐるやうな顏付に、或秀拔なものがあつた。言葉は交はさないが、遠くから見てゐて、彼に自分は興味を覺えてゐた。

ところが、卒業してから間もなく、彼は戸山の原で鐵道自殺をした。それは大正二年の、たしか秋だつたと思ふ。いつの間にか足掛十三年も前の事になつてゐる。自分は彼がどういふ思想を抱いてゐたか、よくは知らない。併し人の噂によると、彼はクロポトキンの崇拜者だといふ事だつた。學生自分から、社會主義者の群に交つてゐたらしい。併しクロポトキンから、やがて老莊の哲學に傾いて行つたと云ふ事がほんたうらしい。彼の遺書には、さうした心持がはつきり現れてゐた。

けれども、彼の事を語るのは、自分のこの文章の目的ではない。そして又自分は、彼の事は、以上に述べた事ぐらゐしか知らないのである。

その追悼會が牛込の矢來倶樂部で開かれた。矢來倶樂部は今はほんのその名ばかりの小さな建物が殘つてゐるだけだが、そ

の時分は割と大きな貸席だつた。――自分は山本一藏と別段つきあひはなかつたが、併し彼の死を悼む心があつたので、そこに出席した。

級友達はかなり澤山出席した。それから早稲田時代の教師達、それから社會主義者たち――お祭騷ぎなどの少しもない、質素な、しめやかな追悼會だつた。

自分はその末席に坐つて、その會の光景を見まもつてゐた。――で、自分はその晩、そこに出席した人々の中で、三人の人物が妙に頭に印象した。それは島村抱月、大杉榮、それから自分の親友の峰岸幸作の三人。

島村抱月は、例の藝術座、須磨子事件等で、側から見ると一番賑かな、けれども彼自身は苦惱と孤獨のまつたゞ中にゐた時分だつた。體が疲れた印象を與へる人だが、その晩は殊に疲れてゐるらしかつた。痩せ細つた身體を、しやんとして坐つてゐる事など出來ないやうに、背中を丸くして、前屈みに、ぐにやりと胸をたたんで、火鉢に手をかざしたり、又は頭の重みを、支へるとでも云ふやうに、兩手に顋をもたせかけたりしてゐた。

一人の青年が、思想自殺をしたといふ事など、別段彼に何の驚異をも與へてはゐないらしかつた。この世の中では、さういふ事はあるものだ、とでも云つたやうな顔をしてゐた。いや、さういふ云ひ方ではよくその感じが出ない。島村抱月の認識の世界では、青年の思想自殺などが、特にその世界に淋しさを與へる事などはあり得ない程、それ程彼の認識の世界そのものが淋しい色で塗られ切つてゐる、とでも云つたやうな感じだつた。それだから、青年の思想自殺などといふものは、彼には解り切つた事過ぎるのだ。

身體を前こごみにして、頭を重たげに兩手で押へたりしながら、人々の話す追悼談を默つて聞いてゐる島村抱月の顔付、細い聰明な眼に、彼獨特の不斷な淋しい微笑を浮べたその顔付は、追悼會そのものよりも、尚淋しかつた。みづから生を斷つて、この世から脱れ去つた青年が我々生きてゐるものに與へる淋しさよりも、抱月の横顔は、我々生きてゐるものに尚淋しかつた。

人々の言葉が一寸杜切れた時、

『別段戀愛といふやうな問題はなかつたのですか？』彼は顔を上げて靜かに聞いた。

『そんな事は少しもありませんでした。』

死んだ青年を一個の英雄の如く人々に印象させたがつてゐた死者の義兄は、もつての外の事だといふやうに答へた。――も

つとも、この義兄の昂奮はかういふ場合に、ふさはしくないものではないだらう。

『ああ、さうですか』

さう云つて、抱月はそのまま、默つて、又前のやうに前こごみになつてしまつた。

自分は彼の顏にすつかり引き入れられてしまつてゐた。——人間生活の一面に、深く深く這入つて行つた人間、生の孤獨といふものの中に深く深く這入つて行つてしまつた人間、自分はそんな事を、彼を見つめながら考へた。自分は學生時代に何回か彼の講義を聞いた。その事は自分は先日時事新報に一寸書いたが、併し彼から聞いた美學の講義そのものが、自分を少しも益しはしなかつた。いや、自分は彼の講義した美學そのものは、聞いてはゐなかつた。自分は學者としての彼はただのなまけ者としか思つてゐなかつた。それだから、彼の美學に別段敬意は拂つてゐなかつた。その他に、自分は彼の評論をいくつか讀み、彼の著書も、丁寧にではないが、一寸のぞいた。それから、彼の小說、脚本、和歌等も讀んではゐた。併し自分は評論家としての彼にも、創作家としての彼にも、別段敬意は拂つてゐなかつた。——それだのに、彼から受ける印象、彼といふ人物から受ける印象は、それ等のものと比較にならない秀拔なものだつた

若し島村抱月の顏に現はれてゐた『人生』といふものを、のがす事なしに、島村抱月の顏を彫刻に刻める人があつたら、それは大彫刻だ、と自分はそんな事を考へた事が度々あつた。——後年自分は問答師の『須菩提』を見た時、尙一層抱月の顏の彫刻の事を考へた。若し抱月の顏をほんとうに彫刻出來る人があつたら、その人は立派な近代的問答師だ、と。

實際、島村抱月の顏は、彼の思想、藝術、生活の綜合された表現だつた。——彼がこの世でめぐり合つた惱みの經驗、或はこれから彼がぶつかるであらうところの運命の暗示、それがその痩せほけた頰にも、淋しく頰笑んだ鼠のやうな眼にも現れてゐた。

藝術俱樂部の二階の薄暗い部屋で、誰もが知らない中に、つまり死ぬ時丁度枕許に誰もがゐ合はさないやうなめぐりあはせで、死んで行つた抱月の運命は、生前その顏に十分讀めてゐたと云つても過言ではないだらう。——一人のヒステリカルな、理性の缺除した女の愛を追つかける自己について、はつきりした反省を持ちながら、併しやはり追はずにゐられなかつた自己の姿を、彼は客觀的に見る淋しさをその顏に持つてゐた。この世的な名譽も地位も、總て捨ててしまつて、而も情熱の忘我境

は終に得られずに、そしてその事をはつきりと意識しながら、この人間生活の大海の中に漂つてゐた彼の苦笑と、孤獨と、それから認識と。――自分は彼の生涯を考へると、人生といふものの或一面をほんたうに學ぶ氣がする。

先日近松秋江の誕生五十年祝賀會の時、正宗白鳥の述べた感想の中に、『自分は他の誰からも何も學ばなかつた。自分が人生を學んだのは、島村抱月氏と近松秋江氏とからだけだ』と云ふ言葉があつた。

自分は正宗白鳥が、實際、ほんたうの事を云つたと思つた。

こんな事はみんな後の事だ。併し自分は山本一藏の追悼會の席上で、島村抱月の態度や樣子に、すつかり打たれてしまつてゐた。

二

島村抱月が坐つてゐた少し向うに、金子筑水、內ケ崎作三郎(これ等はみんな自分の早稻田時分に學んだ敎授達だ)の諸氏が坐り、その向うに堺枯川、大杉榮、その他の社會主義者達が並んでゐた。

『僕が監獄にゐた時……』と堺枯川は、その髯のない圓顏を元氣に動かしながら、何かそんな事を大きな聲で語つてゐた。何の話だつたかは知らない。けれども、學校を出たばかりの我々は、その『監獄』などといふ言葉が、平然として語られてゐる樣子に、多少度膽を拔れた氣味があつたかも知れない。

自分は地震後、K雜誌社で、偶然この老社會主義者に打つかつた。何でも例の共産黨事件の收監から、その日始めて解放されて、K雜誌社の人の案內で、地震後の東京を始めて自動車で見物してまはつたといふやうな事を話してゐた。十三年前に見た頃から思ふと、その髯のない圓顏が圓顏のままに老人になつてゐた。が、その聲は十三年前と同樣に、元氣に充ちてゐた。

で、その矢來俱樂部の席上で、追悼談があつたり、雜談があつたりしてゐる間に、ふと內ケ崎作三郎が、あの肥つた身體では、正しく坐つてゐるのが苦しかつたためだらうが、背を障子にもたせかけ、足を卓の上に投げ出しながら、

『大杉君、あなたのお國はどちらですか?』と訊いた

『僕の國?』

大杉榮は筒つぽの着物を著て、その時分は晩年とは違つて、非常に瘦せてゐた。色の淺黑い、額の廣い瘦せた顏に、ぎよろりと大きな眼を薄氣味惡く光らしてゐた。その利かない氣を瘦せた肩のあたりにもあらはして、肩は骨がつつぱつて、いかつてゐた。『僕の國?』と內ケ崎作三郎の言葉を繰返して云つた時、

肥つた基督教出の經世家をじろりと尻眼にかけて、その眼が皮肉に光つた。

『國とは？』

『お生れになつた處、故鄕ですな』

『ああ、さういふ意味での國ですか？　所謂國は△△です』

ふんと云つたやうな表情で、吐き捨てるやうに彼は云ふと、そのまま橫を向いてしまつた。傲岸なその態度、それが少し内ケ崎三郎には氣の毒だつたが、我々には、面白くない事もなかつた。『ははあ、あれが大杉榮か、元氣なものだなあ』と自分は思つた。

内ケ崎教授は我々にカアライルの講義をしてゐた。そしてその講義中、ややもすると人生論、藝術論をやる。肥つた身體から、東北辯を絞り出しながら、日本の現代文學が如何に不健全かといふやうな事を喋り出す。そして『諸君文學青年達は、みんな青い顏をして、煩悶病に取りつかれてゐるが、煩悶があるなら、解決してやるから、僕のところに來給へ。人生とは君達の考へてゐるやうなものぢやないんだ』とよく云ふ。そんな物の云ひ方が、文科の學生達に反撥を買ふのは當然の話である。

それだから、自分はこの肥つた、人生解決者を、始終頭の中でカルカチユアライズしてゐた。その肥つた教授を、『國とは？』と傲岸不遜な大杉榮が一本やつつけたのが、さうした自分には、一も二もなく面白かつたのかも知れない。何しろ自分だつて若かつたんだから、さうした若氣の至りと云へば云へるやうな一つの極端な態度が好きだつたんだ。それは今から考へると、溫厚な内ケ崎教授に、お國は？と訊かれて、國とは？と反問しなくつてもいいのかも知れない。そしてそれが大杉榮の若氣のさせた業だと云はなければならないのかも知れない。

けれども、瘦せた肩をいからかして、底光りする大きな眼をぎよろりとさせて、『さういふ意味の國ですか？　所謂國は：：：』と出た大杉榮が、自分の頭に殘つた。島村抱月のあの人生の孤獨感の中に沈湎した淋しさと、大杉榮のこの昂然とした、世の溫情主義者達を一蹴し去らうとするやうな戰鬪的な態度と、この二つの極端に相違したものが、その時自分の頭に殘つた。

自分は人生はなかなか面白いな、と云ふやうな氣がして、そんな光景を見てゐた。

さうしたら、そこに端なくも、不思議な論爭が持上つた。といふのは、自殺者山本一藏の義兄と自分の級友Fとの間に起つた。自殺者の死に態についての論爭である。

義兄に云はせると、自殺者は線路で眞二つに切斷されてゐたが、その顏付は靜かで平和だつたといふ。ところが、Fに云はせると、自殺者は覺悟をしてはゐたものの、汽車が來ると立上つた。そして今度は汽車に引倒されたので、足と身體と頭とが、とびとびに距離を置いて、線路の上に散らばつたといふ。

『自分は目擊してゐた線路工夫から聞いたのだから、間違ひはありません』とFが云へば、

『いや、そんな事はない。自分は直ぐその場に駈けつけて見たのだから、自分の云ふのが確です。一藏は平和な靜かな顏付をしてゐました。顏色も生きてゐるもののやうな顏付でした』

この無益な論爭は、暫く續いた。自分はをかしくなつた。そんな事はどつちだつて好さゝうだ。汽車が來て、たとひ自殺者が立上つたところで、少しもそれが不自然ではない。──で、自分は笑ひながら、自分と並んでゐた峰岸幸作を見た。

『莫迦らしいね』

『少し莫迦らしいね』

二人は呟き合つた。

その論爭がやがて止むと、今度はそれから、級友達がいろいろな事を喋つた。山本君は一途な道を踏んで行つた。それだから、彼の妥協しない一生を考へると、我々は恥しくなる。そんな妥協的な生活をして生きてゐるのが、恥しくなる。──ひとりがそんな事を云ひ出すと、それがみんなに傳染して、みんなが『妥協して生きてゐるのが恥しい』氣になつて來たらしい。山本一藏が英雄で、生きてゐる級友達が、それに仕へる奴隷とでも云つたやうな光景になつて來た。

若い青年達だから、みんな『死』といふものに昂奮して來たわけなのだ。──

さうしたら峰岸幸作が、自分を突つついた。

『莫迦らしいね』

『莫迦らしいね』

自分達は再びかう呟き合つた。が、たうとう我慢が出來なくなつて來た。

『おい、歸らうぢやないか』と峰岸。

『歸らう』

二人はそこで立上つて、その追悼會の席上から出て來てしまつた。

『莫迦野郎共……』と往來に出ると、峰岸が大きな聲で叫んだ。『何が生きてゐる事が恥しいんだい、莫迦野郎共！ 山本は山本で俺達は俺達ぢやないか。生きてゐる事が恥しい奴は山本が生きてゐたつて死んでゐたつて、恥しい筈なんだ。山本が死

んだといふので、急に生きてゐる事が恥しくなる莫迦共があるものか。』

『さうだとも、さうだとも』と自分も云つた。『俺達は何で恥しがつて生きてゐる事があるものか。死ぬのは死ぬ奴の勝手だ。生きてゐるの は俺達の勝手だ。──方途の知れない莫迦共だ！』

そこで二人は昂奮して、昂奮してゐる中に、自分達だけがほんたうの事が解つて、他の級友達には何も解らない氣になつて、隨分得意になつて、そして歩いて行つた。今から考へると、若氣の至りだ。けれども、若氣の至りと云ふものは、さう後悔すべきものではない。なつかしいものだ。

自分はその時峰岸幸作を、『こいつは話せる奴だ。こいつは頼もしい奴だ。こいつは何事をかするだらう』と考へた。

自分達はそれから通寺町の横丁を這入つた『みよし亭』といふ洋食屋に行つた。その時分はカツフエエと名乘つてゐるのは尠かつたので、唯洋食屋といふ名だつたと思ふ。併し今のさらにある粗雜なカツフエエの先驅者だ。

そこは峰岸幸作の馴染の家だつた。自分は一二度峰岸に引つぱられて行つた事があるだけなので、よくは覺えてゐない。そこで峰岸が酒を飲んで、自分が珈琲か何かを飲んで、それから何も、生きてゐる事を恥しがつてゐる級友達を罵倒してゐた。たしか後で谷崎精二も追悼會から脱け出して來て、一緒になつたと思ふ。

その時の事であつたか、或は峰岸ともう一度その洋食屋に行つた時の事だつたか、記憶が入り亂れて、はつきりしないが、何でもその當時の事を考へると、一緒に浮んで來るのは、その洋食屋にゆつと、近松秋江が這入つて來た事だつた。

帽子も被らない、散歩姿で、ちよこちよこと這入つて來ると、

『やあ、峰岸君、どうです？』さう近松秋江は云つて、それから峰岸の返事は待たずに、帳場の小娘に『一寸電話を』と云つて、壁の電話器を取上げた。──呼び出した相手は藝妓のやうだつた。

『昨日は散財しちやつたよ。米琉の羽織一枚出來たのに……』

と云ふやうな事を云つてゐた。この事は近松秋江印象記の中に書いた事があるが、再び書く事をゆるし給へ。感じ易いその頃の自分の心には、記憶の糸の一端はいろいろな事に關聯してゐるからだ。島村抱月を思ふと、矢來倶樂部の山本一藏追悼會が浮び、その追悼會が浮ぶと、大杉榮、峰岸幸作が浮び、峰岸幸作が浮ぶと、みよし亭と近松秋江の電話が浮ぶやうになる。

そして自分は人それぞれが持つてゐる若氣の種々相に、一種の微笑が浮んで來る。若し肥えたる内ヶ崎作三郎にぎよろりと眼を吳れて、昂然として空嘯いた大杉の態度が、若氣の至りだと云へるなら、峰岸幸作や自分が追悼會の席を蹴つて出て來て、級友達を罵倒したのも同じく自分達の若氣の至りだと云へる。そして若しそれ等が若氣の至りなら、又近松秋江が電線の彼方の女に向つて、昨夜の散財の話をしたのも、やつぱり近松秋江の若氣の至りだ。

併しそれ等それぞれの若氣の至りは、みんな何とそれぞれに生活力の横溢を語つてゐた事か。その方向はそれぞれに異つてはゐるが。

それから五六年經つて、峰岸幸作は突然死んでしまつた。或地方新聞に隱れてゐた彼は、左傾的な社說執筆のために、投獄されたが、その時の怒が、前から彼の持病である心臟に來て、そして彼は出獄後間もなく、故鄕に歸つて死んでしまつたのである。自分は『死んで行つた友』と云ふ小說に彼の事を書いた。

三

大杉榮とは自分は五六回しか會つた事がなかつた。矢來倶樂部で、彼が昂然として内ヶ崎作三郎に向つて空嘯いたのを見た時から、四五年經つてからであらう、自分は彼と知合になつた。矢來倶樂部の時から見ると、彼は人間が圓熟して來たとでも云ふのか、寧ろ如才なさ過ぎはしないかと思はれる位に、アタりが柔かつた。——どんな時に彼と始めて會つて話をするやうになつたのだつたか、自分はよく覺えてゐない。

何でも雨のびしよびしよ降つてゐる、秋の晩だつた。自分は林倭衛と町を散歩してゐた。林と自分とは義太夫が聞きたくなつた。林は西洋音樂に對してかなりの熱情をもつてゐた。そんなに豐である筈がない西洋畫家生活の間に、ビクタアやコロンビアのレコードを百五十枚だか二百枚だか持つてゐた事でも、彼の音樂好きが想像出來るだらう。何でもそれはボツボツと買集めたので集まつたのだが、併し彼はそれだけのレコードを揃へてゐながら、蓄音器は持つてゐなかつた。レコードは一枚一枚買へるので、一時に金が要らないが、蓄音器は一時に纏まつた金が要るので、彼には買へなかつたのである。それで彼は自分のレコードが聞きたくなると聞きたいレコードを小脇にかかへ込んで、何處か蓄音器を持つてゐる友達のところに、出かけて行く事にしてゐた。

その林に自分は義太夫熱を吹込んだ。日本音樂を聞かずに輕

蔑してゐた彼は、やがて義太夫が好きになつて來た。感受性の鋭敏な彼は、どんなものをでも直ぐ理解する能力を持つてゐた。

そこでその晩も、二人は散歩してゐる中に義太夫が聞きたくなつた。ところが、林も自分も金が少しもなかつた。散歩の中に使ひ果たして、電車賃さへもなくなつてゐた。

『誰かに會ふだらう』といふやうな事を云つて、二人は銀座を歩いてゐたが、雨の降つてゐる時に、散歩に出かけて來る知つた顔はなかつた。

『さうだ、大杉のところに行かう。大杉のところに行つて、義太夫の金を借りよう』

さう突然思ひついたやうに、林が云つた。林は畫家になるまで、大杉などと一緒に、社會運動に携つてゐた事がある。

自分達は數寄屋橋の側の日露協會の三階を借りてそこを事務所としてゐた大杉榮をたづねて行つた。日露協會と向ひ合つた自動車屋の二階から、尾行が首をのぞかしてゐるのを見た林は、

『大丈夫大杉はゐるよ。あすこに犬達が番をしてゐるから』と云つて、その自動車屋の二階を指さした。

大杉は窓際のテーブルに向つて、校正をしてゐた。奥の寢台の上に、野枝夫人が魔子ちやんと一緒に寢てゐた。

非常に上等とは云へないが、相當に立派な部屋だつたので、自分は『なかなか豪儀なものだね』と室内を見廻しながら云つた。

『うん、そんなでもないがね』かう答へながらも、無邪氣らしい得意さを顔に表して、『こんな事務所なんか持つてゐるといふので、近頃は大分成金見たやうな事を云はれるよ。上海に行つて二萬圓持つて來たなどといふ奴があつてね……』

『その噂は僕も聞いたが、上海にはほんたうに行つたのかい？』

『いいや、行きやしないさ……』彼はさう云つて、へんにニヤリニヤリとした。行つたとも行かないとも取れるやうな笑ひ方だつた。

『實はね、今義太夫を聞きに行く金を借りに來たんでね』と林が云ひ出した。『廣津君と散歩してゐる中に、急に義太夫を聞きに行かうといふ話になつたのだが、二人とも一錢もないのでね……』

『義太夫とは、又恐ろしく古風なものが聞きたくなつたもんだね。――併し金があるかな、どうかな。野枝さんに訊いて見給へ』さう云つて、にこにこしながら、一寸寢台の方を顎で示し

た。そしてこんな事を云ひ續けた。『併し義太夫といふものは一寸好いものだよ。あれは半分坐睡（ゐねむ）りしながら聞いてゐるに限る』坐眠りしながら、三味線に合はせて、こくりこくりやつてゐると、ほんたうに好いものだよ』

『弱つたな、實に』と林は野枝夫人の方を向きながら、頭を掻いた。『悪いな、あなたに借りるのは……』

『でも、いくらもない事よ』

それから蟇口を取出して、內をしらべてゐたが、

『三圓あるから、一圓五十錢持つていらつしやい。それで足りて？』

『弱つたなあ、どうも。――ははは』と林は再び頭を掻いた。『それぢや借りて行きます』

自分達はそれから、市ケ谷見附附近の何とかいふ席まで、義太夫を聞きに行つた。何でも素雪の『堀川』の三味線が聞きたくて、そんなにしてまで出かけて行つたのだが、その晩、素雪が病氣か何んかで休みだつたので失望したのを覺えてゐる。

自分が本郷の下宿にゐた頃だから、これも四五年前の事だ。改造社のK君が來て、晝飯時だつたので。一緒に外へ出た。神田の資亭に行つて、簡單に飯を食はうと思つたのだそれで本郷三丁目から電車に乘つて、前の方の釣革に掴つて立つてゐると、

『やあ』と聲をかけながら、近付いて來た一人の身長（せい）の高い、腹のでつぷりとした洋裝の紳士があつた。山高を被つてゐたかと思ふ。手に小さな寫眞機械をぶら下げてゐた。見ると大杉榮だつた。

『やあ』と云つて、自分は彼の樣子を見上げ見下ろした。堂々たる紳士振りである。

『ブルジョアだね、寫眞機械までぶら下げて』さう云つて自分が笑ふと、

『うつふふ』と彼は一寸子供らしい得意さで、無邪氣に笑つた。矢來倶樂部時代のあの神經的な險しさは少しもなく、何處かゆつたりと圓熟し切つた感じが、この時は特に感じられた。

『今日は尾行は？』

『昨晩撒いちやつたんだよ』と唇をもぐもぐ動かして吃りながら、『そしてね、昨夜は白山に泊つたんだよ』

『白山に？――君はそんな處に泊る事があるのかい？』

『うん、滅多にないけれどね』

『野枝さんが憤慨するだらう』

『無論內密（ないしよ）さ。尾行がついてゐるので割に安心してゐるよ。わつはゝはゝ』

『なるほどね』

自分も笑つた。――こんな事は死んだ人に對して書くべき事ぢやないかも知れないが、併し自分はその時、その事からへんに好感を受けた。大杉榮のユウモラスな一面が表れてゐたからだ。

『君達は何處に行くんだ？』

『神田の寶亭に飯を食ひに行かうと思つてゐるんだ』

『寶亭？ あんな處は不味いよ。陶々亭に行かう』と贅澤な事を云ふ。

そこで三人で陶々亭に行つて、支那料理を食つたが、彼はなかなか支那料理通らしく、いろいろの料理の說明をしてくれた。

『この燕の巣、これは駄目なんだ。上海で食べると、實にうまいよ。なかなか高いがね』

『上海に行つたといふのはやつぱりほんたうなのかい？』と自分は日露協會の三階での話を思ひ出したので、さういふと、彼は『あつはは』と前と同じく曖昧に濁してしまつた。――何でもその歸りに、ニウロオプに行つて、珈琲と菓子を食つた。地震後なくなつたが、その當時は銀座附近で有名な菓子のうまい家だつた。

『此處の菓子はうまいんだね。それでは一つ逗子に歸るのに、菓子を買つて行くかな』さう云つて、彼は自分であれこれと菓子を選び、それを包んで貰つて、一寸手にぶら下げて見せながら、『辯解だね、昨夜の。――心ひそかの辯解だね』

自分は『愉快な男だ』と思つた。實際運動方面ではかなり烈しい調子を見せながら、こんな半面があるのかと思ふと、この男の人間味の細かさが、うれしかつた。――自分は例の彼の不意の災難を思ひ出す度に、この時の菓子の包をぶら下げて、『心ひそかの辯解』と云つて笑つた彼の笑顏が浮んで來る。彼の思想界及び實行運動方面の事は、誰でもが知つてゐるが、彼は隨分こまかな人間生活の味や意味を知つてゐた、藝術家肌の男だつたと思ふ。

×　×　×

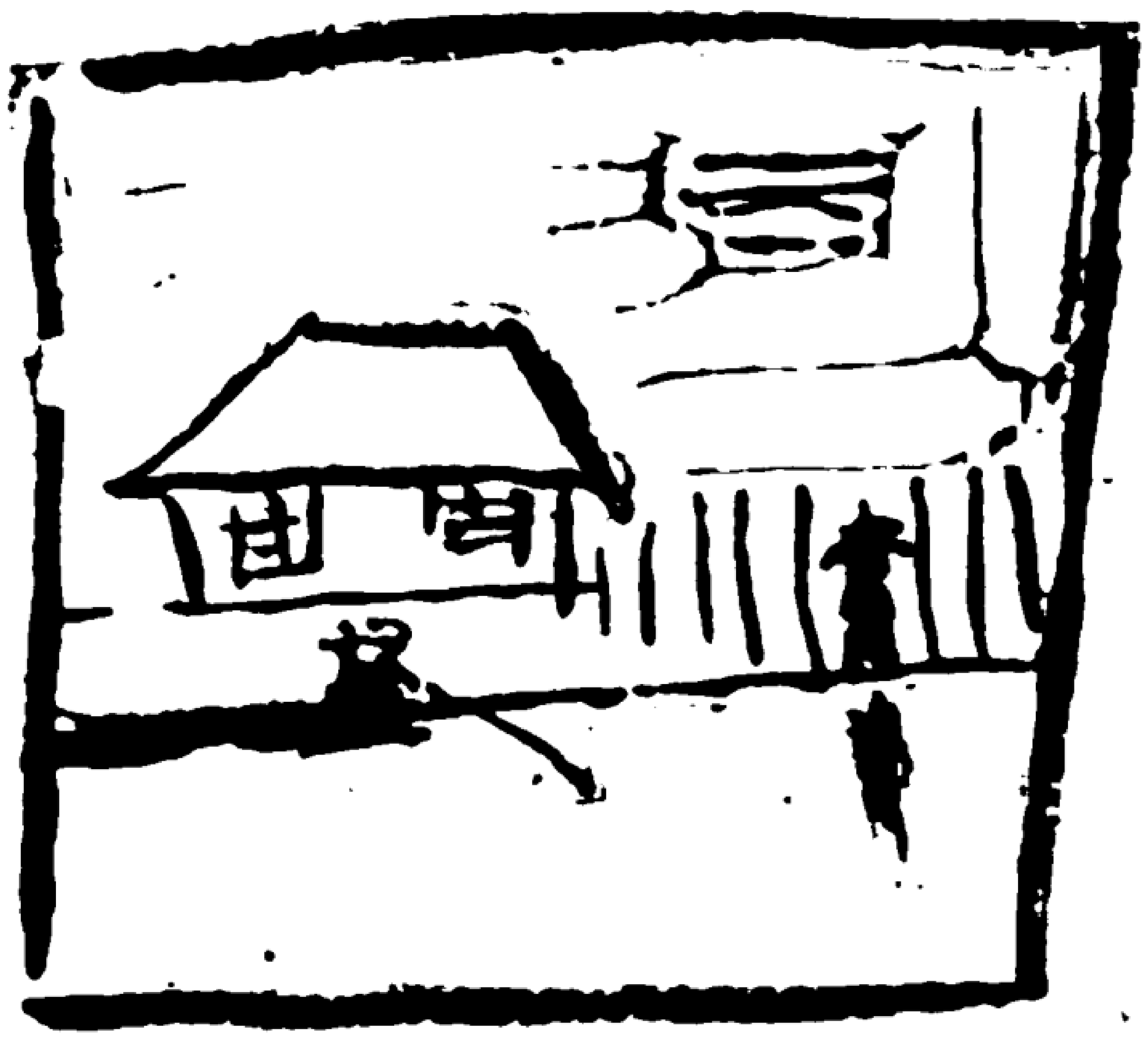
この雜文は少々取留めなさ過ぎるとも思ふが、自分がこれを書いた目的は、足掛十三年前に、矢來倶樂部の山本一藏の追悼會で自分の頭にそれぞれの意味で深い印象を殘した三人の人物が、それぞれ常ならぬ死に方をしたといふ事が、自分にはかなりの感動を與へてゐるといふ事を云ひたかつたのである。

無智な女優を戀しながら、その女優は愚か、誰ひとりとしてその臨終を知らなかつたと云ふ島村抱月の死は、いかにも島村抱月らしいし、筆禍事件で憤慨して、心臟を痛め、一種の憤死を遂げた峰岸幸作の死は、いかにも峰岸幸作らしいし、地震のどさくさ紛れに、時代についても、思想についても、何も知らない、人の命を何とも思つてゐない殺人役人の手で、人知れずやられてしまつた大杉榮の死は、やはり大杉榮の最後らしい。

考へると一種の感慨に打たれる。

デンマークの雲雀に與ふ

賀川豊彦



東の窓が白む。
北緯五十五度の五月の朝は、
眞青に澄んで
ガラス張の窓より
天空が見える。

朝早くより
雲雀が鳴くよ。
ほがらかに、美しく、
デンマークの雲雀が鳴く。
雲雀よ、雲雀よ、
私は、おまへを羨む。

私も、おまへのやうに
曙の來ぬ前に
碧空を飛びたい。
アウロラの先驅者が
未だ、目醒めざる中に
おまへの如く、目醒めたい！
小さい羽根をふるはせて
おまへは力一ぱいに鳴いてゐる。

そんな眞似を私もしたい。
誰れも、きか無くとも
誰れも邪魔するものなき碧空に上り

力一杯に大きな聲が出してみたい。
あゝ、砂丘打續く
デンマークの西海岸に
おまへは巴里できく
オペラ。シンガーよりも美しい聲で
鳴くではないか——
おまへの歡喜の聲こそ、
藝術の爲めの
藝術とでも云ふべきなのだらう。
歐洲を彷徨し——
求むる心に滿されざる思ひ募り
寂寥と胸底の喚叫に
私の魂の喉がはりさけさうだ——
私にも雲雀の喉が欲しい——
私は、私の魂の雲雀になつた——
私の魂の碧空に
私は一人旅をする——
羽根はないが私は飛ぶ——
歐洲の天地に、 絶望して
私は一直線に上に逃避する——

あゝさうだつた
歐洲の天地に、 私は絶望して
私は、 デンマークに雲雀の聲を聞きに來た。
あゝ、 凡てがいたましき輪廻だ——
日の下に一つとして新らしいものはない
魂の噴火が休止した日に
凡てのものは輪廻を始める。
全く絶望だ——
これ位なら、私は歐洲を
見なかつたら、よかつたにと思ふ——
それで、私は雲雀として碧空に鳴くのだ——
私の喚叫は歡喜のそれではない
私の喚叫は絶望の喚叫だ——
救はれざる人生の喚叫だ——
ナザレのイエス以來一九〇〇年を經て
猶相戰ふ人生の醜惡に、
絶望した喚叫だ
雲雀よ、雲雀よ——
私の魂の雲雀よ——
おまへの姿は私のかすんだ眼には

見へない――
おまへは、あまりに悲しい魂だ――
おまへの運命は、
一人ぼつちで、天空に鳴くにある――
私はおまへの正體を見定めようと、
焦點の結ばない眼を無理に努力する――
姿は見えないが鳴き聲だけは聞こえる――
その聲は銀鈴を振るようだ――
そんなに澄み切つた聲で鳴かないでくれ
東の子が悲しくなる――
私は今度の旅で、勉めて
泣かないつもりで出たのだ――
それを、歐洲と米國が
私を絶望させ――
私は魂の中に喚叫を
續けて來た――
私は、私自らを
難船したハムレツトのように
デンマークの砂丘の陰に
身を寄せた。――

そして私の魂の雲雀をして
心一杯に鳴かせてゐる――
一生懸命に鳴けよ、
雲雀よ！私の爲めに鳴いてくれ――
私は、一人ぼつちの魂の彷徨者だ――
誰一人慰めてくれるものが無い。
美人も、英雄も、淫賣婦も
美術品も私を慰めない――
私は、現代の歐洲に凡て
慰めらるべきものを發見しない。
歐洲は百のキリストを殺し、
萬の十字架をたて、
僞つてキリスト教の假面をかぶつてゐる。
そうだ――慰めてくれるのは、
千九百年前に生きてゐた大エイエスのみだ。
さう私の云ふのは、彼のみが愛を知つてゐたからだ。
私は外側を求めて居ない
内側を求めてゐる――

どうして人間が、もう少し多く愛すべきかを求めて居る——

そして歐洲に失望した——
その動かす可らざる宿命に
私は泣く——
私は雲雀として天空に戰く。
デンマークの雲雀よ、
心一杯に泣け——
東の子はおまへの下で
泣きつゞけてゐる——
雲雀よ、叫べ、
喉のはりさけた時に
落ちて來い——
私も、人類のその愛し得ざる
悲しき宿命に就て、
泣くだけ、泣かう！
そして泣き疲れた日に、
天空から落ちよう——

あゝ、曙の白まざる先に
デンマークの雲雀は
碧空を横切つて鳴く——
曙の遲きを泣いてゐるのか？
孤獨の寂寥に泣いてゐるのか？
東の子は愛し得ぬ
人類の宿命に泣いてゐる——

——デンマーク、ハジヤム村牧師館の石段に腰かけて——

ヨーロッパよさよなら！

ヨーロッパよ、　かわらざる古き大陸よ、
さよなら　さよなら——

日の下に何等
新しきものもなく、
昔ながらの爭闘に、
世界の滅亡も忘れて、
戰よ、大陸よ、さよなら。
ベスビアスの烟よ、さよなら。
變らざる中にも、
變らざる、その烟よ、
さよなら——
世界は狹い、
またおとづれることもあらう。
何の執着もなく、
何の思ひ殘りもなく、
私は東に歸つて行く。
おまへの爲めには、
おまへの道があらう。
爭闘の爲めに、爭闘をつゞけ、
地球に血をぬることを悦ぶ。
ヨーロツパよ、さよなら、
タールの刃も
マースの劍も
猶忘れられず打ち續く
ヨーロツパよ、さよなら、
イギリスは貪ぼり、
フランスは淫し、
ドイツは刃の復興を思ふ。
その變らざる意志の爲めに、
地球はなやむ——
さよなら！　さよなら！
おまへの爲めに新らしき福音があらう。
福音を蹂躪したその天罰に、
おまへは永遠に呪はれる。
魂の變らざる間、
ロマにミサがどれだけ行はれるとも、
ヴァチカンの鐘が幾千度鳴らうとも、
世界は永遠に呪の中に、
とぢこめられる——
さよなら、ナポリ——
龍宮の如く美しく
貧民窟の

ごみ箱の如く穢きナポリよ、
さよなら——
さらば、私は、
自由なる海に浮び、
太陽の出づる途をしたひ、
東に東に歸り行かん。
その民はきたなく、
その體は小さく
その容貌は秀でずとも、
その魂の爲めに、
私は歸つて行く！
愛の爲めに、
さうだ愛の爲めに、
噴の爲めに、愛の爲めに、
私は東に歸つて行く！
西半珠に噴のつきたる日
その醜き東半球に愛を求めよ、
噴ふものは遂に愛である——
ローマも朽つるが善い
ロンドンも亡びよ。

たゞ愛は永遠に亡びない。
歐洲の勞働運動も、
疲れる日があらう。
愛に根ざさざる運動は凡て、
亡びる——、
そして愛は他人のものではない、
獨乙の愛は私の愛でない。
フランス人の愛は、日本の愛ではない。
私の愛は私が掘らねばならぬ。
さらば日の下に變ることもなく、
日は昇り日は落ち、
人間は生れ人間は死す。
その中に愛のみ永遠である——
嗚呼私は伊太利の海に告げる、
海よ永遠に若かれ、
そこには國境もなく、
所有者もなく、
潮は上り潮は下る——
さらば、私は紺碧の水に告げる、
歐洲も亡びよ。

海は永遠に我等を慰める――
海潮よ上れ、
百尺上れ、
五百尺上れ、
全地を潮もて蔽へ、
その日、國境は忽ち消え、
土地の上の、
憎しみは忽ち失せよう。
あゝ全地をして、
海潮に、
受洗せしめよ。
その色は紺碧に、
その香は豐かである――
ヨーロッパの日よ、
さよなら、
パリの花も、
さよなら――
私は云ふ。
永遠にさよなら、
おまへが亡びても、
おしくはない、
さよなら――
また逢ふ日は、
生れ變つて、
會ふ、
さよなら　さよなら、
海潮よ上れ！
歐洲よ、さよなら――

――ベスビアスの畑を見ながらナポリの沖にて――

高山國の歌

島木赤彦

大正十四年五月三十日木曾福島町に齋藤茂吉君と會す。その夜大衆木曾踊を踊る。

踊り止みて靜かなる夜となりにけり町を流るる木曾川の音

佛法僧鳥一聲を聞かむ福島の町の夜空に黒きは山なり

五月三十一日木曾王瀧川上流に入る

この谷の若葉はおそし御嶽のみ雪はだらになほ殘りつつ

夏にして御嶽山に殘りたる雪の白斑は照りにけるかな

谿の上にやや開きたる空青し雪山の秀の現れにけり

やや暫し御嶽山の雪照りて谿の曇りは移ろひにけり

駒ケ嶽は東方にあり

木曾谷の雲を隔てて相向ふ二つの山の雪斑らなり

わが友と御嶽山の雪は見てなほ峡ふかく入り行かむとす

谷川の音さやかなり高木より咲きて垂りたる藤波の花

谷川の水はやくして藤波の花をゆすぶる風吹きにけり

峡の雲はれゆく見れば檜木山黒々として重なりにけり

檜木山の光は寒し谷川の早瀬の音の響きわたらふ

横さまに若葉にあたる雨疎し照りかげり疾くなりまさりつつ

谷の空雲剝ぐること疾くして雨は若葉に照りにけるかも

鞍馬に至りて谿漸く深し

岩あひにたたへ靜もる青淀のおもむろにして瀬に移るなり

谷川の早瀬(はやせ)のたぎち激(たぎ)ち來てここに靜もる岩垣青淵

川上の遠瀬のひびき響き來る岩垣淵に我しまし居む

木曾街道より入ること六里にして氷ケ瀬に至る

折りをりに心にとめて聞きにけり耳に馴れにし谷川の音

霧(きり)はるる岩より岩にあな寂し傾きざまに橋をかけたり

驚きて橋をぞわたる谷川の底明らかに渦まく青淀

山人は蕨を折りて岩が根の細徑(ほそみち)をのぼり歸りゆくなり

山岨道盡くれば橋あり山人の谷の入り深く歸りゆく見ゆ

石楠は寂しき花か谷あひの岩垣淵に影うつりつつ

跣足にて谷川の石を踏みわたり石楠の花を折りにけるかな

石楠の花にしまらく照れる日は向うの谷に入りにけるかな

夕ぐるる谷川はたに石楠の花を折らむとするが幽けさ

谷川の早瑞のこゆる石むらのありの淸しさ水の底ひに

氷ケ瀨に泊る

雲下る眞木山並みの麓にして我は宿らむ夕ぐれにけり

谷なかに檜木づくりの小家一つ心靜まりて我は眠らむ

谷川に米を磨ぎたる宿の子の木の間がくりに歸り來るなり

佛法僧鳥啼く時おそし谷川の音の響かふ山の夜空に

谷川の早湍の音をうち亂し夜風ぞ騷ぐ雨來るらむか

谷川の早湍のひびき小夜ふけて慈悲心鳥は啼きわたるなり

朝あけて檜の木の山の木のまより上るものあり雲にかもあらむ

柿蔭山房即事

久しくも夕顔の花の咲きつぎて棚にあまれる蔓伸びにけり

夕顔の棚の末蔓屋根にのびて白き花さく秋となりにし

夕顔の果は垂り花は咲きに咲きてその末の蔓は伸びに伸びにけり

夕顔の花ほの白くたそがれて清しと思ふ月立ちにけり

戸を閉さで灯影のとどく草むらに蟋蟀鳴けりこの二夜三夜

うちよりて夜は茶を飲む子どもらの休暇も果てぬこほろぎの聲

小夜なかに二たび起きて蚕をとれりかかる歎きも年經りにけり

わが庭の萩の花藪の下にして蟋蟀を追ふあはれ仔猫は

萩が根に動くこほろぎを覘ひたる仔猫はあはれ居睡りにけり

萩の下に日影をよきて眠りたるひよこ五つよ相居倚りつつ

失業體驗錄

夫婦わかれして

細井和喜藏

失業も一度や二度のことなら味があるが、十遍二十遍と度かさなつて來るともう珍しくもない。そしてまた、餘りおそれもしなくなつた。しかし自分一人のことはさておき、六十萬も七十萬もの者がこの失業のために苦んでゐるのかと思ふと、あらためてそら恐ろしい氣持になるのである。時とすると、えゝい、もつともつと失業者がふへて、田舍にも都會にも食へない人間が充滿するといゝ。さうすればきつと、みな眼が覺めてどうかするんだ――といふやうなアナキスチツクな氣持ちに支配されることとすらある。

僕は、紡績工――嚴密に言へば織布機械工（運轉でも保全でもどつちでもやる）であるが、大正十一年の三月に失業してからこの方、未だ完全な就職口を得たことが無い。足かけ四年の失業だ。そして今ではもう、元の職に就くといふことを、すつかり思ひ切るべく余儀なくされてゐるのである。僕の力の及ぶ範圍內では、何ぼさがし廻つても無効だ。それでこの頃ではもう、口をさがそうともせずに一生懸命でほかの仕事に熱中して居るのだ。

その四年間といふかなり長い失業中で、一番こまつた時のことが聞いて貰ひ度い。

そうだ、去年の春だつたねえ。大の男が一日十二時間はたらいてたつた一圓二十錢にしかならんので、それだけではどうに

も食つて行けないところから夫婦共稼ぎをして辛うじて生活を支へ乍ら、四ケ月ほどゐた田舎の染色工場を止させられて一月二十五日に上京したが、本職の紡績工場は勿論のこと、どんな仕事でもいゝから、そしてまたどんなにやすい給料でもいゝから通勤で働ける處があつたらは入り込まふと思つて、毎日々々寒い中をあらゆる方策をめぐらせて就職口を求めつゝ駈けづり廻つたが遂にどんな處もなかつたので夫婦わかれをして了つたのは……。

働き口はどんなことでもやるといふ日になればまんざら無いこともない。しかしわが日本特有の封建制度的「仕込み」といふ悪い勞働制度に依つて時間の搾取をほしいまゝにすることが許されてゐるために、夫婦者などは實に困る。その爲め、就職に方つて夫婦わかれせねばならぬような悲慘なことが隨分たくさんあるのだ。

さて去年の一月二十七日のあさ東京驛へ降ろされた僕達夫婦は、凍りつくやうな寒い中を先づ龜戸へやつて來た。龜戸は前に居つた處なので家なんかさがすのに便利だし、大紡績工場が程近い處に六つかたまつてゐるので、その何處かへなりとは入れるだらうと思つたからだつた。東洋モスリン第一、第二工場、東京モスリン吾嬬、龜戸工場、日清紡績、栗原紡織、それから少しはなれて富士瓦斯紡績の小名木川工場、これだけの工場に三萬人の職工がゐるのだから一人や二人は何とか割り込めぬことはないと考へた。それで、この中どこかへは入れるものとあて込んで、當分かよへそうな地點へ持つて行つて六疊一間先家賃十圓の間借りしたのである。(それは特殊な事情の家で、その邊の市價より二割がたやすかつた)

仕事先はきまらないまでも、こうして居處のきまつたといふことは嬉しいものである。僕は明る日の朝、ひどい雪の降る中を早速ながら貸し車かりて東京驛まで荷物ひきに行つた。荷物といつたところが大した物がある譯ではないが、ほんの自炊道具すこしばかりと蒲團があるのだ。いやその蒲團といふのも、寒中二人にたつた二枚きり……。

翌日、妻は早く起きてずつと震災前までゐた東京モスリン龜戸工場へ志願に行つた。ところが入れるようなことを言つて散散またせておき乍ら、仕舞ひのはて「いま經驗工は採用しない筈になつてゐた」と斷つてかへした。が、實のところは彼女が經驗工だから入れないのではなくつて、僕が運働者であらうへ彼女自身もどちらかといへば工場規定に柔順な小羊ではなく時どき監督に反抗する方なのでけい遠されたらしい。

昔はふりうりといふやつが利いたものだ。工場の人事係へ行

つて「私をこの工場へ使つていたゞけませんでせうか」と申し込むと、大概はものになつた。ところが今はてんでそれが駄目になつて了つて、相當有力なつてが無ければ殆ど入社できない。

僕は、矢張り妻が斷られたところの龜戸工場に居つたのだが、元の處へは賴んだつて無駄なことが判つてゐるから今度は吾嬬工場の方へ志願して見ようと思つた。そして、それも端た役人の紹介では効がうすいと考へて、重役の許へお百度ふんで「もう一切運動はやめるから入れてくれ」とまで言つて賴み込んだ。しかし遂に足の運び損で何のやくにも立たなかつた。

先家賃やら旅費につかひはたしたあとの僅かな殘りで炭やら米やら買ふと、もう一升の醬油が買へなかつたので取り敢ず三合だけもとめて置くと、それが無くなつて了ふ。

「困つたね………。」二人は求職にあぶれて歸つては歎息した。

僕は職業紹介所の無能をもうそれまでに度々經驗してゐるので、そんな處へ足を運ぶの無駄を承知して居り乍ら、それでゐてつい朝おきると、ひよつとしたらいゝ求人の口が昨日の中に出來てゐやしないかしらん――などひかされては每日々々龜戸や業平橋やそのほか市内の職業紹介所へ足を運んで行つた。けれども七面倒な求職カードにごたごたと記入して來るだけで其の役にも立たない。ある日、神田橋の中央職業紹介所から添書を貰つて行つた處は、何でも和泉橋の近所の自轉車店だつた。そこでは住込みで二年の年期をきつて月に五圓の給料だと言ふ。僕は求職カードに織布機械工で妻が一人あつて、通勤の處を望むと書いておいた筈だ。職業紹介所の人が「前の仕事より少々くらゐ違つても、械機仕事でさへあればつとまりませう」と言つたので「勿論」と答へて紹介して貰つたのであるが、三十男が住込みなんかで月五圓の給料では餘りひどい。

職業紹介所とは、そんな馬鹿げた處へでも人を押しやりさへすればそれで職業を紹介したのであらうか？

僕は勿論のこと其處へは行かなかつた。

醬油がなくなつたので、五六年も前の景氣のいゝとき五六十圓もらつたボーナスで張り込んでおいたマントが、二月の半ばといふのに質屋の藏の中へ四圓でおさまる。味噌が、餘り甘口なので餘計いつて勿體無いとて鹽が混ぜられる。

妻も外手町の婦人職業紹介所へ行つて見たが、男でさへ住込みでなければないところだから女の通勤なんか迚もあるものでなかつた。職業紹介所などに申し込まれてゐる謂ゆる職業といふものは、多く男なら出前持ちだとかまた住込みで以て時間無制限にこき使はれる家内工業の奴隷的職工か、女なら子守か女

中などゝいつた下らぬものばかりで、一人前の人間が永久的の職業として就くに足るものは一つもないと言つてもいゝ位だ。

一月の終り頃になつて、妻は漸く一つの仕事を見つけて來た。力織機五十台ほど据えてモスリンを織つてゐる「龜戸モスリン」といふ個人工場である。そして、兎にかくまあ彼女は其處へ通ひ出したことはいゝが、一ケ月先でなければ給料がとれぬので一月の月末には實に困らざるを得なかつた。着物なりと持つて居ればまた質屋へ走られるが、夫婦とも文字通り着のみ着の儘なので何ともすることが出來ない。そこで家具としてたつ一つきりある僕の机が古道具屋へ飛んで行つたが、勿論そんな金くらひでは十圓の間代と一ケ月分の米や炭を買ふにはどこのはなへも足りぬ。工場服と古本のは入つてゐる二個の柳行李があけて賣り拂はれた。チヤブ台も叩き賣つた。妻のショールまで質にぶち込んだ。

僕はつてからつてを賴つては方々の工場へ行つて見るが、一つとして使つてくれる處はない。東洋モスリンの第二工場などでは紹介者には入れるといつておいて、いざ僕が出頭すると履歴書に難癖をつけて斷られて了つた。と、そのうちに妻が第一回の勘定を取つて來たが、景氣のいゝときは儲けのいゝ工場で月に八十圓くらひも取つた腕だのに、二十六日はたらいて十九圓何十錢しかない。それでは當然やつて行けないのであつた。

二ケ月無理に無理して持ちこたへたが、三月の終りには間代も拂へず、もう二進も三進も動きのとれぬところまで押しつまつた。そして、それも、何時いつかまで待てばどこかへは入れるといふあてがあるのなら兎もかく、何時まで駈けづり廻つても僕の就職口にありつけぬのだから底しれぬ不安である。

「おい、何時までもこんなでは仕方がないから當分わかれて働かうか?」

僕は到頭そこで夫婦別れを決心した。妻も「五十錢や七十錢もうけてゐたのでは仕方がないから、いつそ別れ別れになつて何とか少しは金のたまる稼ぎをやらう」と言ふ。そうして僕も何處かへ住込んで、手あたり次第の職に就く心になつたのだ。

僕は又しても業平橋の紹介所へ出かけて行く。彼女は洋食屋の女給がいゝといふことをどこからか聞き込んで來て、二三軒くちをあたつて見た。不景氣だといふのに、そんな方面の口はさらにあつた。併し、いゝ着物をもつて居らぬのでもちろん場末のうす汚い三四流の店でしか採用してくれない。

遂に妻は柳島邊のある安洋食屋へつとめることになつた。昔

ふまでもなく住込みでだ。

こうして、愈よせつぱつまつた僕は、もう何でも構はぬやつてのけようと思つて紹介所の求職カードに獨身者として書き込んだのである。そして早速ながら紹介して貰つたのは製本屋であつた。(尠くとも製本業としてあつた)

僕は紹介所の人が書いてくれた封緘ハガキ樣の紹介票を持つて、その表にしたゝめられた住所の家をたどつて行つたのであつた。ところが、其處はあにはからんや製本屋ではなくして、牛天神の下の方にある製本屋から人を寄越してくれるよう依賴されてゐる桂庵だつたのだ。

桂庵は、すぐに僕を傭つたことにして紹介所の方へ通知を出した。そして僕は其處から新たに手紙をもらつて、始めて製本屋へ住込んだのであつた。が、紹介所で聞いた條件とは著しく相違した給料や時間――紹介所では十時間はたらいて向ふで食べて月に二十五圓だと言つたのに、十五時間くらひも働かされて十三圓しかくれない。

しかし、それでも我慢して辛棒するよりほかに、僕は當分のあいだ採る道がなかつた。(困つた時の話しを、こぢんまりと書かうと思つたのだつたが、これはまた散漫な「失業エピソード」になつて了つた)

(記者曰) 君の應募原稿は當選した。君は當選した通知にも接せず臨月の妻女をのこして逝つた。遺稿となろうなぞとは君も思はなかつたであろうことが悲しい限りだ。君は長篇『工場』を既に一千枚近く書きにげていた。いろ〳〵の大業を目論見つつ、そして勞働者のために最後まで善く戰つた君を追想すれば萬感こも〳〵湧き立つ。

灰色の血に描く

中本彌三郎

失業して四月、それも永年勤めて來た職業から失職してからの間なのです。其間をうたた水草の樣に流れて來た私は、また

堪えざる感傷の魂を押へて今其の記錄を書いて見る氣持にまでなつたのです。

血で血を洗ふ、そして其の點滴を地上に描いて行く跡から灰色の砂でまぶしてゆくさいころの生活は、一つの競技となつて伊太利の屠牛士を私達の胸に物語ります。けれど血生まぐさいそれも今は夢物語です。

街から街へ、其の宏壯な建物を縫つて流されてゆく爭鬪の血は、わずかに新聞の三面に漂はして時に數でこなされ、そして足りない處は田舍の方にまで其の事實を刻んでゆきました。私はそんな事をもう數限りもなく見せつけられて來た樣です。私は其の人達の血と淚をよく知つてゐる筈でありました。それでこそ私自身どうして此の大ざつぱな社會に切り拔け樣かと戰つたのです。けれど凡ては水泡に歸しました。私もそうして隱れた落伍者の一人となつて幾十萬の人達と同じい群に數へられなければならなかつたのでした。

四月の陽は既に爛熟してゐました。春はいやが上にも暖い平和と魅惑を地上の凡てに投げかけてゐました。私の家も年老つた母は、今まで離さなかつた綿入の件天を脫いでは日當の良い緣に出ました。裏庭には赤や紫の水草が今を盛りと咲いてゐました。老母はいつも其處で老眼鏡を覗む樣にしてつゞくり物をしました。早く死んだ姉の子供は其のぐるりをふざけたり表で他の連れと手を繋いでは自由な唄をうたひ續けました。私の妻は益々美しくしとやかになつて來る樣に見えました。

斯うして私の一家は四人、靜かな郊外に何うにか團欒の生活を續けてゐました。でも春が來ても財界の景況は益々惡い樣でした。私の勤めてゐる社は小つぽけな經濟通信社でしたが其頃はもう業務を縮少する一方で、其間に幾人かの首切りを見たのです。私はそうした幾人かの同僚と順々に淚で別れました。そんな時同僚の眼から不安な暗示を殘して行つた事が今も私には思ひ當る悲痛な感じであります。けれど私達はよく働らきました。朝は七時頃から夜は七時八時迄も事務を片付けていつたのです。終ひには日曜の休みも台無しに出勤したのも珍らしくなくなりました。人が減つて幾人もの仕事を一人でやらなければならなかつたのです。私達はお互ひに眞劍になつてゐました。それでも不景氣の恐怖病は止みさうにもなかつたのです。分產整理や破產の宣告、工場の閉鎖、業務縮少など雜多な方面の波瀾と共に、私の勤めてゐた通信社も遂に四月中を期して解散して了ひました。

私は皆と同じ樣に月給の二つを解散の淚金として受取りました。そして其の日の私は何故だか久し振りに解放された樣な氣

輕さで元氣よく家に歸へりました。家では皆は最初悲痛な表情でしたが、私が何かと力強い事を並べ立てるので皆の顏色は納まりました。けれど暫らくすると内心寂しい私をどうともしようがなかつたのです。私はひそかに自分の『力強い事』を悲しみました。

五月に入りました。晩春の空は憂鬱症の色を漂はして曇つてゐます。私は呆んやりとして其の空合の雲を見つめてゐました。中學時代に讀本で習つた藤村の『晩春の別離』を靜かに思ひ出してゐたのです。そして過ぎし日の感傷を甦生(よみがへ)らしてゐたのです。けれど現實の自分に還へると私はそれを責めたのです。私はもう一生懸命にならなければならない自分を聢かりと見定めねばなりませんでした。そして私は毎日友達や知邊を訪ね歩きました。もう私は差當りどんな仕事でもやらねばならないと定め込んでゐたのです。就職してゐる頃は左程こたえなかつた不景氣な話も失職してからは身體を引チ切る様に強く刺して來ます。友達や知人の中には悲觀説が多かつたのです。けれど『そう心配したものでも無からう。何とか聢り心掛けて置く』と言ふ希望の返事も可成ありました。而し直ぐにも就職口のある話はどこにも無かつたのです、私はほと／＼心細くなつて來ました。

『まだ仕事は見つからないかい』母は覗き込む様にして言ひました。

『いいのがありませんの』妻はそつと私の耳元で囁やきました。子供は此頃おとなしくなつて來た樣に見えました。私は默つてゐられなかつたのです。

『何つ、大丈夫だよ、何とかなるよ』そうは言つたものの私はそつと母や妻から顏をそむけました。

その内に大阪毎日が有望だと、その記者をやつてゐる友人から通知がありました。そして定められた日に私を幹部のA氏に引合はして呉れました。A氏は力強い暗示と大丈夫の様な口もちをして呉れたのです。それから幾日もかかつて私は原稿を書き上げました。論文、感想、小説、その三つを書かされたのです。それが内内の試驗だつたのです。

五月も暮れて春は逝きました。燒けつく日の下に冷し飴を飲む勞働者をおもふ日が如實に展開されたのです。砂埃の荒い凸凹の十字街で頰の落ちた五十過ぎの勞働者は其の赤黒く燒けついた身體を痙攣さして上眼使ひに、その冷えた水を飲んでゐるのです。彼ののどぶえは波立つて動いてゐます。汗がたら／＼額から流れるのです。けれどそれは汗丈けではなかつたのです。私はよく見ました。彼の眼は涙で一杯にうるはつてゐたの

です。渇を醫した時の涙が故知らず彼の眼を泛したのです。そして涙は汗と一緒に頸筋から身體に傳つたのです。私は暫らく涙ぐましく歯を嚙みました。

そんな中に私は「毎日新聞」の消息を待ち乍ら家族を安心さす様に努めました。半月程するとたよりはありました。けれどそれは何にもならない水泡だつたのです。

『帝大と早稲田と、慶應の大學出が三人入込んだので君の分は又當分保留になつた』友人はそう私に告げました。友人の言葉の中には茲暫らくあきらめる様にと言ふ暗示がよくうかがはれました。

もう私の一家は血眼になりました。長い間を希望に任せて待ち暮れた努力も今は机の一輪咲と共に亡びて行きました。私の頭には何もなかつたのです。涿溜の蛆蟲と、貧民街の頽廢と、何處かで叫ぶ○○の聲が幽かに耳元を過去るのみだつたのです。

母は鼻緒の賃仕事をあやしい手つきであやつり、妻は家を外にして仕事を漁りました。

私は勞働街に出て市立の職業紹介所や、財團法人になる紹介所を片端から歩きました。私は且て人夫や雜役工の群で働いた事があつたのでいくら不景氣でもそんな働きなれば必度ある確信でゐたのです。けれどそれも裏切られました。

『仕込みはありますが通勤仕事はありません』そう言つて何處の紹介所も頭を振るのです。それでも私は毎日朝早くからたづねました。六時頃から同じ様に職を求める人達は辨當持で詰めかけてゐるのもありました。紹介所の人はどうした勤務時間になつてゐるかといぶかはれる程に皆の爲めに早くから受付けてゐました。

『せめて宿泊料丈けでも取れる所でも』此の紹介所に宿泊してゐるらしい頑丈な男は、低い聲で言ひました。

『よく分つてゐます。けれども斯う求人がなければ仕方がありませんからね』事務員は氣の毒さうに男の顔をみつめ乍ら、求人表を示しました。男は默つてうなづいて指を繰つてゐました。

朝の勞働市場に集る人達、頑丈で太つた腕を持つてゐて何仕事にあぶれてゆく果敢なさ『私に一日の勞働を』と乞ふ者に何故割當てらるべき勞働がないのでせう。勞働市場に集つた人達は斯うして全で魂の抜けたでく人形の樣に毎日、陽が高く照る頃まで其處に陳列しながら穢されてゆくのです。私は失業者の團結と○○を泌々と胸に囁きました。私は溜息をして其處を出ました。

或る日新聞廣告で試願に行つたのです。其の日も新聞廣告で

は到底だめだと云ふ失望を、さいころの運に任かして出掛けたのです。七時頃に先方へ行きつくと同じ樣な志願者は十四五人も來てゐました。其の店のドアーには『面談午前十時より』と只それ丈、半紙に貼り出してありました。私は其の間を皆の樣に待つことにしました。頭數は段々と增えて來ます。私はこつそり、其の人達の顏を盜み見る樣にしました。皆もそうしてゐるらしいのです。私達は默々と絕望の時間を待つてゐる樣に元氣がなかつたのです。軈て面會の時が來ました。志願者の數は六七十を數へた樣でした。近所の人や通すがりの人は立止つていぶかしげに私達の群を見物してゐました。

店では商人風の五十男が優しい表情で履歴書を眼鏡越しに引繰返へしました。其の前の土間に私達はうろ〳〵と並び立つたのです。五十男はしきりに履歴書の生年月日と早見表の樣なものとを見位べてゐました。そして叮嚀に斷つたり事情を聞いたりしては順々と人數を片附けてゐました。横合から一人がその譯を聞くと五十男は平氣で之を叮嚀に答へました。

『いえ、それは別に大した意味もないのですが、只私の方も勤めて下さる方もお互ひにつまづきがない樣に生れた星を合はしてゐるのです。社長がそう言はれるものですから』私達は込み上げる苦笑をこらへました。そして私もその星が合はない故で叮嚀に斷はられたのです。私は道々その事に就て妙に考へさせられました。

梅雨の晴天は續きました。人々は『今年は必度不作だ』と言つて米の滅るのを心配しました。燒けつく白日は用捨なく照りつけます。私はその一日が今如實に思ひ出せない位ひ惱ましくなつて來るのです。その日母は半道餘りある野を横切つて出來上つた鼻緒を抱へて子供を連れて鼻緒屋に行きました。そして歸へり途で卒倒したきり息絕えて了つたのです。子供は泣き喚らした眼で知らない人を連れて馳け戾つて來ました。私は飛んで行つて母の亡きがらに泣き縋りました。そして皆がなだめるのを振り切つて子供の樣に泣き續けたのです。醫者は診斷書に『腦溢血』と書きました。そして少し早く馳け付けたら息を吹き返へさしたのだと惜しみました。そして最近それの人工法と注射液とが創られた事をつけ加へました。私は余計悲しくなつて來ました。

翌日も梅雨の雨は降らなかつたのです。けれど濕氣含んだ風はしづかに吹いてゐました。母のなきがらは無雜作に自動車の上に積まれました。私と妻は再び淚を呑んで聲を立てました。けれど小さい子供はもう泣きませんでした。

母を亡くしてからうつろの日は幾日も〳〵、續きました。私

は自分乍ら呆けた日ばかりを追ひました。妻は習つてゐつたミシン仕事で半月程前から市内の運動具屋へ働きに行つてゐました。私は妻の力づけや生活の維持を、ひそかに感謝してゐました。そして自分の果敢なさが泌々と責めつけられてゐたのです。けれど母の死は鮮やかにこびりついて私の身動きを縛りつけて解けなかつたのです。

日は暮れてそして明けました。妻と子供と三人の生活は影が薄い様に見えてきました。妻は此頃何故か心が落ちつかない様に見えました。そして母の死後二十日餘り、妻は突然自分の親元に歸つたまゝ戻つて來ないのです。私は妻の親元に行きました。親は叱つて妻に歸へる様に責めました。世話して與れた人も其の事を妻に責めました。けれど妻は私のところへ歸へらないと言ふのです。私は妻にそれを問き正しました。妻は私と二人きりの前で綺麗に言ひ切りました。

『その人は運動具屋の息子です。其の人とはミシンを習つてゐる頃からの知合でした。けれど妾が結婚してゐる事を知つてゐました。その妾に息子は一緒に死んで與れと言ひます。妾は運動具屋へ行きさへしなかつたらこんな事にならなかつたのにと思ひました。けれど……』妻はさう言つて泣き伏しました。

『二人を生かす爲めに私を殺す』私はそう言ひました。けれど私の胸は苦しくなつて來ました。妻は奥の方に走つて突伏したまゝ、其處で長い間泣きじやくつてゐました。

一週間餘り、私は夢遊病者の様に過しました。

其の内に東京の兄からこちらへ來いと言つて來ました。兄は東京でペンキ塗をしてゐるのです。私は子供を亡き姉の男を尋ね當てて其の男に突返へしました。けれど私は涙ぐましくなりました。子供も甚く悲しみました。私は『又歸つて來るから』そうなだめて涙を拭いて別れました。

私は遂に一人に還つたのです。そして永年住み慣れた大阪を捨てて只一人東京へ來たのです。大阪を出立するとき、少しばかしの使ひ古した道具や何かを賣拂ふ時、新らしく涙がこみ上げて來ました。今人手に渡つて了ふそんな物の一つ一つが母の顔に見えて來るのです。新らしく貸家札を貼られた思出多き家は『いかに生くべき乎』の一頁を餞別に私の門出を見送つてゐる様に見えました。

新らしく甦返つた夢遊病者の私は、追つてはならない感傷を無闇と追ふ様になりました。失業と生活、それから破壊されてゆく家族生活、余りにも信じ難い凡てが斯うして手易く現實に示されてゆく事に、私は又何物かをより深刻にされねばなりませんでした。そして恐らく一生解けないであらう此の謎を私の

傷める魂に秘めてゆくことでせう。
それにしても此頃切にねがふ郷里の土を。未開の山をうねつて小走りに動いてゐる石油汽車を見送つて、又新らしく繰り返へす蟒土の一くれに、若しかして私の生きる希望を見出せない事だらうか。そんなことを幾度か繰返へし思つては、若き日の力強さを追ふのです。それだのに田舎の人はまだ懐かしの土を捨てて街にやつて來る。私は此頃其の人達を涙で迎へるのです。そして私の心はそんな人達と入りかはりに少年の日の郷里の土に走つてゐるのです。
あれから一と月、今は三河のトタン張を塗り歩くペンキ屋になりました。赤や黒、それに美しい色彩を取交ぜて灰色に塗り潰すとき、私は自分が心細くなつて來るのです。赤い筈の私の血は灰色ににごつて來るのです。それでもどうにか働きが續けばそれでもいいのです。けれどもそれさへ心細いからなのです。
生きてゐるのか、死んでゐるのか、それとも灰色の魂は何を希つてゐるのでせう。
凡ては失業して四月この方、未だ癒えざる魂を押へつけて、灰色の血に描き乍ら追憶したに過ぎなかつたのです。
―一九二五・八月十七日―

バットの吸ひ殻

堤　健一

妻は悪阻に苦しんでゐた。もう一と月ばかりろくに御飯も何も喰べないで青い顔をしてゐた。會社から歸つても、ゲエ〳〵いつては黄い液體を苦しげに吐くので新聞讀む氣もなかつた。それかと云つてどう手當の仕様もない。時の經過を待つより他には方法がないといふ一種の病氣だ。本人も苦しいだらうが傍にゐる者も隨分厄介な事だ。
ところが訪ねて來た友人の妻君が、悪阻がひどくて死んだものもあるといふので、そいつは大變だと醫者に見せた――藥代

にひく／＼しながら。醫者は心臓に未だ影響がないから心配な事はないがと云つて注射してくれた。其注射も二三本したがちつともよくならぬ。食ひ過ぎの結果と云ふわけでもなし、反つて責任の過半は自分にある事だから入費がかゝるとか不愉快だとか云つて彼女を責めるわけにもいかぬ。一日隔きに醫者が來て注射する。其度毎に五十錢宛車夫にやるのが惜しくつて仕樣がなかつた。五十錢と云や俺たち二人の一日分のお菜代だ。妻は飯を食はぬにしても一本二圓の注射をしてくるんだ。それでなくてさへ二十五日に貰つた月給が、月末には十圓紙幣が二枚か、やつと三枚しか殘らないのだ。今度の月末はどうしやうと内心少なからず弱つてゐた。

　そこへ『會社の都合により解雇』だ。家内がこういふわけですからと恐れ乍ら申上げたが、會社が毎期欠損續きで氣の毒ではあるがどうも致方がない。お前の婦の事まで會社の知つた事かといふ御挨拶である。成程欠損を發表してゐるので考課狀にはのせてないが、營業費の内から交際費としてチヤンと重役はこれだけの金をせしめてゐる事は先刻承知だが、夫れは經營者の役德で、被雇人は欠損に就きといつては賞與を減らされ手當を削られてしまふ。其上に『都合に依り解雇』だ。重役がコクソリ、否、堂々と全營業費の何分の一に當る交際費をとらなきや、下つ端の事務員の二十人や三十人、三年位遊ばせてをいたつて大した事ではないはづだ。出勤から料理屋通ひまで乘り廻してゐる社用の自動車を拂下げても、月に三百圓や四百圓――事務員五六人分の給料は浮くはづだ。會社の景氣がよかつた時には、甘い汁は上つ方のポケツトに納まつて下つ端はその影を遙かに拜むだけだつた。欠損となれやすぐに首をチヨン切られる。だが俺達には團體交涉權とやらもなく、踏まれても蹴られてもお有難う御座いますだ。そのうへダズ／＼云や解雇手當が手加減される。入社以來貰つた月給の十分の一といふ大枚三百何十圓有難く頂戴した。そして今天下に時めく失業者になつた。

　ボーナスの他には百と名のつく金を貰つた事のない俺は、三百何十圓の金でスツカリ成金の氣持になつた。が、貰つて幾日其金があつたか。ゲエ／＼云つて青い顔をしてゐた妻は、入院しなけりや十分の手當が出來ないと云ふので、月末の拂ひを犠にしながら入院する事になつた。俺が成金になつた事をお醫者さんはX光線ででも透視したと見える。俺たちにとつては、病氣ほど――醫者の手にかかるやうな病氣になるほど恐ろしい事はない。決して入院なんて死ぬより辛いのだ。一日五圓。半月も入院したら俺の一と月の勞働の報酬は見事に消えてなくな

る。それに俺はもう失業者だ。俺は妻を呪ひたくなつた。だが落ちくぼんだ目に涙を浮べて『すみません』と云ひ乍ら俥に乘つて入院する彼女の後姿を見ると、呪ひたくも呪へなかつた。誰れが惡いのか？誰れが俺たちをこんなめに合はせるのか？自分が不甲斐ないからぢやとばかりは思へなかつた。俺も！だが俺の他にまだ惡い奴がゐる！と俺は空を睨んだ。

入院して一週間たつたが經過はちつともよくならぬ。反つて惡くなるばかりだ。そして到頭母胎が危いから子供を出さにやいかんと來た。其時俺は考へた。結婚すりや子供が生まれるのは覺悟の前だ。どんな子が生れるか知らぬが、苟にも自分の生命を分與したものだ。殊に俺のやうな者の子に生れて來るなんて、よつぽど物好きな……だがなんていじらしい子だらう。膝にとりついて來る子の姿を畫いた、俺は涙が出るやうな子のいじらしさを感じた。

俺のやうなやくざな者にならないやう、せめて人並の人間になるやう育ててやらなきやならん。此上一人殖えたら、三度の飯も食ひ兼ねないかも知れないが、子供にだけはそんなつらいめをさせたくないと思つて、俺は好きな煙草をやめた。妻は內職に賃仕事を始めた。千圓の生命保險にも入つた。月掛の積立貯金にも入つた。新聞に挾んで來るビラ一枚も粗末にしないで、古新聞の中に疊み込んでは賣る時一匁でも重いやうにした。よそから來た手紙の狀袋さへもコツソリ差し込んでゐた。淺間しいと笑ふ奴は笑へ。目の前に迫つて來る生活苦、生れて來る子供を迎へるのに此位の欺瞞――紙屑屋へ――をも敢てする程眞劍に考へてゐたのだ。

それなのに『母體が危いから子供を出す』だ。來月から一文の收入もない俺には、行く先々で大なる負荷になる子供を、今の中に棄てる事は寧ろ望ましい事かも知れない。天來の福音だ。こつちからお願しやうと思つてゐました。と、どうしてそんな氣になるものか。俺は、人を呪つても我が身を呪つても、生れる子を呪ふ勇氣はなかつた。産兒制限論者が聞いたら阿呆の骨頂と云ひくさるだらう。唯さへ人口過剩の國に、育てる能力も十分にない奴が子供産むのは、社會の毒蟲だと罵るだらう。マルサスの人口論位は俺だつて知つてゐる。だが絹物の着物に包まなくつても子は育つ。鯛の刺身や洋食を食はせなくとも子は大きくなる。大學を卒業させなくつても偉くなる奴は偉くなる。社會の毒蟲は金と暇とのあり過ぎる奴だ。貧乏人は一體誰れがつくつたんだ。

飲まず食はずの妻は、絶えずゲエ／＼云ひ乍ら、五ケ月前の初々しい花嫁姿はどこへやら、暗闇に立つたら幽靈としか思は

れぬやうに痩せた。子供を出さなきや母體が危ない。それは俺にも肯かれる。妻を死なしてまでもとは思はぬ。母體には代へられぬ。今迄の辛抱も、拂つた藥代も、結局は何にもならなかつたのだ。

手術料三十圓也。大きな膿盤に入れられた、血塊に交りて白い小さい手足や胴がチギレ／＼になつたのを見て、俺はゾツとした。生れて情けない思ひをするより、寧ろこんな姿になつた方がお前には幸福だ。と、俺は苦しい辯解をした。

手術后十日にして退院其時俺の大枚な退職手當は半分になつた。退院后も一週間ばかりは俥で通つた。月末が來た。新婚の記念に思切つてつくつた月賦の洋服代十何圓、家賃、米代、醬油代、電燈料、何代、彼代、列をなして請求に來る。會社ぢや貰ふべき權利のある月給さへも平頭低身して貰つた。世の中は金をやる奴が威張るんだと思つてゐたら、月末には金をとる奴が堂々とやつて來る。俺たちはどつちを向いたら威張られるんだ。

妻は、まだ十分恢復してゐない身體を大儀さうにして賃仕事をした。浴衣一枚二十五錢だ。一枚一圓八十錢の袷せを二日もかゝらないで縫つた彼女も、流石に病後の事とて浴衣一枚を一日もてあました。俺は、家の掃除から何から引受けてやつたが、時間があまりある。その上、家でいくら働いたつて一文でも呉れる奴はない。妻の手傳でも、そんな不生産的な事をしてゐた日にや月末をどうする。

俺は汚れた浴衣を着て職業紹介所へ行つた。月に五十圓でも六十圓でもと思つて行つたら求人一件に求職者八十何人だ。月給の多寡どころぢやない。俺は驚いて飛んで歸つた。それから五六日たつて、此度は頭の髮の毛を鋏で手當り次第に切つて、屋外勞働者を志願した。見事滿員、無經驗者は二三年經つて來いだ。人足にさへも資格がいるのだ。入學試驗には一ぺんでパスした俺も社會に出ては立派な無能力者だ。

或る夜友人が遊びに來て歸つたあとで、灰皿に棄てゝあつたバットの吸ひ殘しを一つ拾つて、煙管につめてのんでゐたら、浴衣を縫つてゐた妻がそれを見て泣き出した。俺のした事が淺間しかつたのか、それほど窮迫した事が悲しかつたのか。俺は訊く氣にもならなかつた。

夏休みに歸省する甥が、東京からの歸途立寄つた。其時貰つた淺草海苔がどんなにおいしかつたか。日に一度野菜の煮物、あとは漬物ばかり何十日と食つてゐたんだもの。だが甥をもてなす金がなかつた。妻の一生一代の晴れ着は、二十何圓で破れ行李から立派な庫へ飛んで行つた。甥が錢湯に行つてる間に、

押入れから行李を引出して、アレかコレかと幾度も思案し、縞模樣のたつた一度着た晴れ着を出してからも長いこと思案してゐた彼女が、コツソリ風呂敷包を持つて出て行つた時には、流石の俺も胸が一杯になつた。風呂敷を丸くして歸つて來た彼女が、臺所の板の間にペツタリ坐つて、啜り泣きしてゐるのを障子の隙間から見た時には、俺は讀んでゐた新聞の上にボタリボタリ涙を落した。

兎にも角にも學校を出て數年。月給を貰へばこそ嬶の一人は養へるが、職にはなれたとなりや手も足も出ない意氣地のない話だが、親もそのつもり學校に入れてくれたし、學校もそのつもりでしか教育してくれなかつたのだ。失職の時の事までは考へてくれなかつた。月給は一生くつゝいてまはるとは本人の俺だつて確信してゐたのだ。

働けど／＼なほ我が暮らしらくにならざりぢつと手をみる

我が抱く思想はすべて金なきに因する如し秋の風吹く

啄木の歌がともすれば頭に浮ぶ、俺たちの生活には夢見る余裕もない。

暑苦しい室に晝寢をしてゐると、顏に冷たい滴が落ちる。目を醒ますと、俺の鼻の先に妻が顏をくつつけて泣いてゐる。俺は近頃妻の泣顏を見ても癪にさわるやうになつた『何が悲しいんだ』怒鳴りつけてやる。が怒鳴つたあとの淋しさ。俺のやうな者の妻になつたればこそ、新婚匆々こんな情けない目に會ふのだと思ふと、可哀相でもある。

妻の着物も俺の着物も、片つ端から飛んで行く。この冬は何を着るのか。ユカタを重ねるのか。

そこへ思ひがけなくも、某雜誌社へ送つた原稿に對して、四十何圓の爲替が送つて來た。俺は其時ほんとうに飛び上つて喜こんだ。妻の手前痩我慢して『貧乏位なんだ。今にいやと云ふ程金をもうけてみせる』と力んではゐたものの、あてのない事とて内心焦燥してゐたんだから、四十何圓の爲替證書を見た時には、編輯者へ何と云つて御禮したらいいか分らぬ程嬉しかつた。妻は二度も三度も押し戴いた。『よかつたね……ほんとうにわたしたちの神樣だわ』女は現金なものだ。編輯者をすつかり神樣にしてしまつた。そして晴れ／＼しい顏をして公設市場に行つて、天下の神戸牛を三十錢と玉葱と蒟蒻とを買つて來た。久振りの御馳走である。

『俺はこれで身を立てるんだ』早速原稿紙を買つて來た『それがいいわ。しつかり御書きなさいよ。もう月給取りなんかいやだわ』嬶の奴まで有頂天になつた。だが賣れるあてのない原稿を書く無名作家程みじめなものはない。それでも俺は寢る間も

惜しんで原稿紙と睨めつくらを初めた。

飯櫃の中の一粒

――或る失業者の手記――

永江倫太郎

×月×日。

職を失つてから一ケ月——貧乏、無一物、飢え、俺の生活は日一日と窮迫のドン底へ落ちて行くやうだ。

夜が明けると俺の極貧の生活は初まるのだ。夜は樂しい夢に綴られてゐたから——。太陽の光りが俺には恐ろしかつた。空腹に白日が刺戟强く泌みるのである。俺は汚ない木綿蚊帳の中で、また眠らうとするのであるがもう眠れない。生活の事が考へられる。陋巷、窮死——いつになつたら一片のパンにありつけるのだ。夜具と二枚の單衣と肌襦袢、金目になる質草は盡きてゐた。壁がケーキに見える。腹の蟲が蠢動する。一椀の飯、その幻想で頭が一杯だ。俺は起き上つて、床を疊み、顏を洗ひ（それもなるべく靜かに動作せねばならないのだ）陰鬱な部屋に坐ると、俺は呆然とする。電車賃、着物、袴、俺には仕事を探す餘裕すらないのだ。働く程の氣力もないのだ——。

俺は高窓に凭れてゐた。動坂迄の烈日に燃ゆる道、俺は今日も辨當箱を提げて、自炊生活をしてゐる動坂の友人の處に食貰ひに出かけねばならないのだ。この裏長屋の二階——俺は階下に降りるのが恐ろしいのだ。間代が滯つてゐるので、老婆はいつも不機嫌だ。鬼婆陰險な眼、貪慾な口、そして「永江さん、間代は戴けないでせうか」と言ふ。畜生ツ。波立つた疊、戸棚の異臭、歪んだ柱、煤けた天井、豚小屋だ。無賃でも不快な部屋なのだ。それなのに間代の請求、けども俺はその老婆と面すると竦んでしまふのだ。便所に入つた背をきいて、俺はすつと幽靈のやうに家を拔け出すのだ。

ああ、晴れやかな空——俺はフラ〳〵と歩いてゆく。懐ろで辨當箱が鳴る。大福十錢、天ぷら、食パン、お好み燒、食物が眼の中に飛び込む。スカラボンの腹の中で蟲が鳴く。眩暈、搖れる家、俺の脚は歩行機械だ。空腹で、神經が痲痺してしまつて、何處に行かうとしてこんな烈日の中を歩いてゐるのか分らなくなる。さうだ、飯貰ひ。乞食！咽喉は干乾びて來る。ああ、畜！傳通院、白山、肴町、團子坂、動坂、遠いな。俺は死んだ氣で歩いてゐた。電車と貨物自動車の響きが耳から入つてガタ〳〵と頭の中で廻轉する。坂下、道灌山下——俺の脚は埃を浴びて、指先のむく毛が泥に塗れた川蝦の手のやうだ。俺は喘いでゐた。か、友の窓に聲を投げかけた。

「おうい——」やつと咽喉を絞つた。

青葉のかぶさつた窓からAの顏が出た。俺はもう少しで、氣が緩んで卒倒する處だつた。

部屋に上ると、俺は辨當箱を投げ出した。

「飯を食はせてくれ」と、俺の吐息だ。

窓、カーテン、机、Aは悠々と讀寢も出來るのだ。が、俺はどうだらう。宿にゐると老婆の恐喝に竦んでゐるのだ。幽閑な家と、休息の幕が欲しい。Aが出してくれた飯、眞白い飯は寶石のやうに有り難かつた。腹の蟲が爭奪戰をおツ始めたと見えて、グウ〳〵と鳴る。それとも狂喜の舞踊かな。昨日一日はパンの耳と水で過ごしたのだ。この一椀の飯がどの位、眼先にチラついて俺の心を苛立たせたらう。牛のやうに反芻が出來ないかな。一週間分も食つて——。おお、飽滿の幸福よ！ そして俺はアルミニユームの辨當箱に飯を詰め初める。一粒でも多いのがいゝのだ。

「幸福だよ。全く……不思議だね。飯が食へるなんて。へゝ」

電車賃五十錢貰つて、俺は友の宿を出た。何、歩くぞ。電車なんて贅澤だ。そして俺は街の喧燥の中で、五十錢玉の入つた袂を嬉しさうに押へて、白い雲を仰ぎ見ながら悠々と歩くのだつた。

×月×日。

「大家から家賃を催促されて困つてゐますが何とか都合して貰ひないでせうか。もう一週間も待つて上げたのですからね」

「どうも濟みません。もう四五日待つて下さい。恐れ入りますけど——」

「私の方もこの世智辛い世の中に地もたゞでは貸せませんからね。もう延ばす事は出來ませんよ」

俺はどうにか老婆に平伏して猶豫を願ふ事にした。口小言を呟きながら、老婆が降りて行つた後、俺はまた苛々し初めた。仕事、仕事、俺はまたコソ〳〵と部屋を出て、逃避場所である

江戸川公園へと出かけた。

公園の四阿——其處は勞働者、立ン坊、浮浪人、閑人等の集り場所だつた。生活に疲れ果てた魂が、寄り集つて人生の不幸を喞つてゐた。瘦せた顏、灰色、疲れた眼、日燒した顏、それ等が集つて、激し、口論し、泣いてゐるやうだつた。

俺はベンチに腰かけてゐた。

哀れなる生活の敗殘者よ！　彼等の前には一片のパンがぶら下つて、その下で呻き、藻搔きながら爭奪しようとする蒼白く瘦せた幾つもの手が、差しのべられ絡み合つてゐる。悲慘、

俺はぢつと空腹を耐えてゐた。

「何か金儲けはないかな」

「外交はどうですね」

「全く不景氣ですね」

「無である。空である。悟道に入れ」

「愉快だなア。家も、樹も、生活もぐる〳〵廻つてやがる。畜生ッ。酒だ。酒、酒よ」

垢染みた着物、ちびた下駄、蒼白な皮膚、老眼、酔漢が語つてゐた。

俺は全身に倦怠を覺えてゐた。口をきく氣力もない懷ろは空ッぽ。餓死、やけ糞だ。明日から緩ついて飯も食はず、水も飲まず、斷食自殺法——。俺は三十分も落着いて腰かけてゐられなかつた。手が、足が動かなくなつてゆくやうだ。心細い、無限の不安に閉されて、俺は青葉と木を凝視めてゐた。

×月×日。

俺は夢を見た。一家團欒の樂しい夢だつた。亡き父母と姉の四人で、食卓を圍んで、晩餐を認めてゐる夢を見た。幸福なさゞめき、然し黎明の儚ない一瞬の夢だつた。俺は舌鼓を舐めづり廻した。夢で飯を食つた。父の靈の加護かも知れない。

俺はよた仕事を探しに出かけた。一歩、外に出ると白日が飢えた眼に沁みて、頭がグラ〳〵とした。俺は殘滓のやうな勇氣を振ひ起して歩き初めた。陋屋の窓が、黑く泣き歪んでゐる。垢と汗でよれ〳〵になつた單衣が、不快だ。埃溜の中に首まで突込んで歩いてゐるやうな感覺だ。二三の知人が新聞社にゐるのだ。たよりにならない仕事探し——月給五十圓拾つたとて、それが何にならう。俺は虱蟲だ。流汗、疲勞、そして今日一日の努力の報酬は——空。舖道が破れろ。死んでしまへ。俺は歩き續けてゐた……。

M新聞社の應接室で、俺はTを待つてゐた。蒼膨れの貧相なTといふ人に會つた。

「何か仕事はありませんでせうか」俺は吃つてゐた。

「さア、今どうですかね。それに私は人を推薦するのがいやなので、一切しない事にしてゐます。誠にお氣の毒ですが――」

冷酷な言葉！ああ、俺はこの言葉の出る迄、如何にTの唇から出る言葉に期待をかけてゐたらう。失望が憤怒に變つて行つた。俺は新聞社を飛び出した。俺の頭は鬱々した憂鬱で、塞がれた。その途中で、俺はC新聞社も訪ねた。輪轉機が俺の頭を掬つた。Kは出勤してゐなかつた。俺は歩いて歸る氣力さへ失つてゐた。そして長い白日の舗道が擴つてゐた。

×月×日。

「永江さん、昨日私が掃きましたらね、まア汚ないことツて、まるで猫でも棲んでるやうだ。髮の毛がゴミと一緒にくるくると固くなつて、箒の先にかゝるのですよ。まるで猫だ。私の方でももう貸せませんから、早速出て行つて下さい」と老婆は突慳貪に怒氣を含んだ語調で、俺の前で言つた。「猫」と俺は侮辱されてむツとした。

「え、出るとも、僕の方で出たい位だ！」

俺はさう言つたが、別に行く當てもなかつた。

「間代は戴きます」と慾深い老婆の眼が光つた。

「今、ない。後で上げます」二言、三言口論したが、結局貧乏な、弱い俺は負けたのだ。俺は三四冊の本と、歯磨、石鹸、原稿紙、ノート等日常必要な物を風呂敷に包んで、漂然と四五ケ月起居した家を出た。今日からほんとの浮浪漢だ。かうなると俺の心も強くなつてゐた。もう閑人の夢想みたやうやセンチメンタリズムは棄てゝゐた、宿、宿、俺は風呂敷包みを抱いて歩いた。俺の眼は反抗と悲愁と臆病とに顫へてゐた。俺の頭の中では、友の下宿歩きの日取の計畫をたてゝゐた。寢る場所はどうにかなるが、友が勤めに出た後の日中を、俺は當もなくグルグル歩いてゐなければならないのが、俺を閉口させた。空腹で、歩き廻つてゐたら黄膽になるに違ひない。動坂迄歩きながら、悲しい行末を俺は想像した。貧と流轉と、悲しい宿命を辿りながら、俺は幾日生きてゆくだらう！俺の涙腺は涸れてゐた。そして悲しい笑ひが、生存を呪ふ笑ひが痩せこけた頬に浮んだ。

Aの部屋に上ると俺は「泊めてくれ。宿を追ひ出された」と言つて風呂敷包みを投げ出した。それ程、俺は疲れ切つてゐた。

ああ、柔かな蒲團の快い觸感よ！　蒲團は円かな夢で俺を包んでくれた。一夜の安眠、それが不幸な俺の人生の中で、儚ない夢に似た唯一の幸福なのだ。

×月×日。

昨日は宿がなくて、S停車場の入口のベンチに、風呂敷包を枕にして寢た。汽車に乘り遅れた田舍者らしい五十恰好の男が、子供を背負つて轉寢をしてゐた。それから醉漢、旅の人――それ等の人達が仲間であつた。三時頃になると、驛夫が入口の戸を開けに來たので、俺は待合室に入つてまた寢た。輕やかなクッションの上で、わづかの睡眠を貪ることが出來た。目が覺めたのが四時で、戸外は薄明るくなつてゐた。疲勞と睡眠不足で瞼が痛む、關節が疼く。俺は待合室の硝子窓越しに、靜かに明けてゆく戸外を見た。寂しい漂泊の思ひが湧く――飯、宿。旅の人はまだ莫蓙席の上で眠つてゐた。

俺はフラ〳〵と歩き出した。足が蹣跚とする。未明の街上は爽やかだ。交番の前に來ると俺は巡査に呼び止められた。

「君、何處へ行くのだ」

「え？　……代々木です」

俺の言葉は躓ひ、瞳は怯えてゐた。日に燒け、瘦せ、眼が尖り、俺の形相は凄いのに違ひなかつた。

「代々木の何處だ」

「富ケ谷一四三五」

「何處から來たのだ」傲然とした巡査。

「早稻田鶴卷町一一二」

「早稻田としちや方向が違ぢやないか……ちよつと入り給へ」

俺は忿怒と憎惡と評もない怖れで、巡査を睨めて交番の中へ入つた。

「掛け給へ。君の勤めは？」

「無職です。今、仕事を探してゐる所です」

「何處からか金でも來るのか」

「いゝえ、別に……」

「で、君はどうして生活してゐる。その包みは何だ。見せ給へ」

其處で、俺の心は破裂した。竊盜とでも思つてゐるのか、人格の侮辱！

「見て下さい。怪しいものは入つてゐません」

巡査は「啄木全集」と「フランス一、十八人集」とトルレルの「機械破壞者」を取り出して、訊問し初めた。貰つた本屋、場所、時日――を執拗にきいた。

「確に貰つたのです。攫拂ひはしません」

俺は昂奮してゐた。

「隱すと後でためにならんよ」と言つて巡査は俺の顏をぢつと見た。そして「お、君は何處かで見たことがあるぞ」と言つて、棚から搜索犯人の人相書を出して、俺の顏を見較べ初めた。長髮、色黑、額、細長く眉間に黑子あり……俺はそんな文章を頭

の中で相像しながら、ぢつとしてゐた。俺は巡査を打ちのめしてやりたかつた。

俺は二時間も交番に押し籠められてゐた。不當の詰問、留置、人權蹂躙――それにも俺は反抗する事は出來なかつた。俺は巡査の箱の中で、檻に入れられた猿のやうに、小さな窓先の青葉と空を眺めてゐた。

「君が白狀しなければ君を歸すことは出來ない」

「一體何を白狀するのだ！」俺は怒鳴つた。が、空腹で目が眩んだ。俺は默つてゐた。勝手にしやがれつて氣持だつた。

その巡査の交替の時間が來て、俺は漸く釋放された。貧苦、侮辱、蹂躙――俺の虐げられた魂は、朝日の耀ふ街上の中を泳いでゐた。

俺はまた歩き初めた。何處といふ當てもなく――。放浪、無職、一體いつ仕事にありつけるのだ。ああ、ブルジョアの飯櫃の中の殘りの一粒にも、いつありつけることであらう！。俺はその零れ餌を漁る雞だ。

俺は風呂敷包みを持ち變へて、よれ／＼と歩いて行くのだつた。

（一四、七、一八）

社會主義にはしる迄

鳴海四郎

變なところで應募資格が持てたものだと、甘酸つぱい微苦笑を嚙みしめながらペンをとる。その頃の日記をこゝに採錄しよう。

一月九日　愈々俺の恐れてゐた日が來た親方のあの目、「もう今日からは君も休みだ」何とあけすけもない宣告だらう。食つて行けるか行けないかの瀬戸際を親方はあまりに簡單に裁斷して仕舞つた。休みだと分つてゐたらこんなにまで早く起きて十錢の電車賃を使ひはしなかつたものを。

畜生！　まあ歸るんだ。そして下宿の隅でまたどうとか考へ

てみることにしよう。

一月二十日　實際失職するとなれば、この自由勞働者程みじめなものはない。官吏や職工なら金額はいくらにしろ兎に角失職手當が出るのだが、俺たちにはそれがない。一日一圓七十錢の日給で間借り生活をしてゐたんだもの、貯へがもう盡きた位當然すぎる話だ。

市役所前と、富川町との人夫市場にも四五回朝早くから行つて立つてみたが、その度毎にアブレたのでもう電車賃を費つて出かける勇氣もなくなつた。

朝早く起きると腹が空くので毎朝十一時頃迄寢てゐることにして來たそれが祟つたのか、今日床屋の前を通つて顔色が惡いのに吃驚した。

唐辛子を噛む樣な思ひで友達に無心狀をかく。何と云ふ天氣のよさだらう。

一月二十二日　市設の職業紹介所程賴りにならぬものはない。新宿のと櫻田本郷町のは非常に丁寧にして呉れるが、今日行つた上野のなどは云ひようもなく腹立たしい感じを與へた。あんなものは無い方が却つて好い。もう俺の爲めにならない樣なすべての施設はみんな無くなつて仕舞へ！

一月二十三日　また古本屋の軒をくぐる。「もう少し出して呉れ」と云へば「そんならどうもお生憎樣ですが、何卒他所へ……」と來る。結局話にもならない安値で賣飛ばす。四枚の銀貨を情ないながらもポケットに入れてまた櫻田本郷の紹介所へ行く。

俺の方では何でも好い心算だが、それでも仕事はみつからない。日比谷の音樂堂に立寄つたら、これはまたどうだ。土の香の失せた袢纏着の男達が、二三十人位暖かな陽の下に寢ころんでゐる。俺もベンチから無意味に流れて行く雲をじつとみつめた。何と早いあの雲の流れ樣だらう。この音樂堂は金のない者にとつては確かに有難い溜り場だ。

聞くまいとしてもしきりない自動車の警笛だ。今、東京市内だけで何台の自動車が動いてゐるだらう。ガソリン代！　不景氣とは俺たちの世界にだけ通用する形容詞だ。足許に踏みつけられた新聞には皮肉にも初號活字で歌舞伎座滿員續きの標題が出てゐる。つくづく嫌になつた。たとへ仕事があつて汗みどろで働いてゐる時だつて、彼等は遊びながらに俺達の數十倍を儲けつゝある…………

歌舞伎座！　自動車！畜生！！

一月三十一日　とう〳〵今年も一ケ月過ぎた。新聞の案內欄は毎朝喰ひつく樣にして見るんだが、俺を雇つて吳れさうなところは一つもない。ガランとした本箱を見てさびしい氣がした。

毎朝々々の新聞を見ることが恐ろしい。失業者は俺一人ではないのだ。そして職に就く者よりも職を失ふ者の數が數十倍多い。

飢餓！　三味線の柄みたいに細つた腕首を握つて泣きたくなつた。飯を燒芋七錢位ですました日がもう數へ切れない程になつた。

二月十三日　もう職を探すのが嫌になつた。それでも新聞の案內欄だけは見逃さない。すべてのものが八百長で芝居で、カラクリの樣な氣がする。淺草の公園に六萬圓で音樂堂を建てる……と云ふ記事を先日見た。それでゐて當局は、この苦しんでゐる人間の數多くをどうともなし得ないのか。政治機關は何の爲めの存在だ。社會人の生活をかくも脅かし、かくも不安定な斷崖の上に置いて、何處に政治の生命があるのだ。歌舞伎座は滿員だそして留置場を望んで行くものが日に二百人以上を算する現在だ。これで何も考へさせられない人が果して有るか。社會制度の缺陷、それは幾年かの間叫ばれて來た事實ではないか。そして今なほどうにもならないでゐる事實ではないか。愈々となつたら俺も掏つ拂ひでも始めるより仕方がない。どうでもして俺は生きて行かねばならない身だ。生き伸びるべく生れて來た人間が、生き伸びることを阻まれたとしたら、その爲めになすあらゆる行爲は、道德とか、法律とかの概念を超へたより嚴肅なものゝ樣な氣がする。

蒲團がないのでありつたけの着物を出してその中にくるまつてゐる。これからまた永く仕事にありつけないとしたら、寒さを辛抱をしてゞもこの外套も羽織も手離さねばなるまい。あゝぞつとする。

二月十五日　上野公園兩大師前の廣場で失業問題民衆大會がある。演壇開放のビラを見たので出かけた。演説に多少の自信もあつたし、云ひたいことも文字通り山程あつた。

俺の演説は大喝采だつた。またみんなの叫びも悲痛だつた。「もう職を與へよパンを與へよの問題ではない。今我れに××××××を與へよ！」「もう我々に殘された一つの道は××××

××××」こんなことが幾人からか繰り返された。聽衆の格構も涙ぐませるに充分なものだつた。申し合せた樣な蒼い顏の陳列會、バットの煙が吹きまくる空つ風に無雜作な崩壞を見せてゐた。目に余る警官達がのん氣さうに煙をふかしてゐるのも憎らしい。

兒玉何とか云ふ代議士が出て色々喋つた。しかし俺は彼が着てゐた三百圓のオーバーが欲しかつた。彼の喋つた內面に、普選の通過を豫想して、次の總選擧への打算がなかつたと云へるか。

會が解散してから木島一揆君や加藤外君、石川忠三郎君達と救世軍の傳導隊の傍で路傍演說を始めた、テロリズム！宗教否定！「若し宗教に力あるものとするならば、何故にこんな社會の不公平を造るのだ！」私はもう聲が出なかつた。今朝から飯を食はないで、しかも巢鴨から上野まで步いて來たのだ。

警官が三四十名押しかけて來たので皆は散り〳〵に逃げた。幸ひ誰もつかまらなかつたが、かうまでも俺たちは苦しめられねばならないのかと思つた。俺たちの演說が、果して失業問題を云々する上にどれだけの與りがあつたか、あまりにもその力うすいことは知つてはゐながらもなほ何とか叫ばないではゐられない。食へないものが、食はしめよと叫ぶ、それを壓迫する者がある。これで好いのだらうか。生きると云ふことを阻まれても猶俺たちはいろんな概念の桎梏の中に甘んじなければならないのだらうか。

それでも俺の腹は空いてゐる。今夜だけは飯らしい飯を食はう。

二月十七日　何とこの頃の新聞に强盜殺人、掏摸の記事の多いことだらう。

俺の仕事はまた特別に探しにくい。學校は師範の中途退學だし、年は十九だと云ふので小店員にも事務員にも不向きだつた。俺の履歷書の師範中途退學も幾分祟つたに違ひない。書生なんかの口も二三あつたが髮の格構を見てかみんな斷はられた。髮も斬りたいが、金はない。仕事に就けるか就けないかはつきりもしないのに五十錢の斬髮料を使ふことはどうしても決心出來なかつた。その中に俺の顏は愈々瘦せ、髮は愈々伸びて、人相は惡くなる、仕事のありつき口はいやが上にもなくなつて來た。

二月十八日　友達が十圓送つてくれた。泣きたい程うれしかつた。久し振りに吸つた味噌汁のうまいこと！（朝は十一時

過ぎに起きるのでめつたに味噌汁は吸へない。今朝は郵便屋に起されて九時に起きたのだ）食も三日振りだ。その元氣で淺草橋の職業紹介所へ行く。滿員も滿員、糸瓜みたいな靑くやせた顏のすし詰めだ。俺はもう何も云へなくなつて引き返した。公園の活動街でせめてもの慰めでもと思つて行つて、なぐりつけられた樣な心痛さを經驗させられた。何と云ふ雜沓だ！　それに今日は水曜日なんぢやないか。俺は他所の話をきいてる樣な氣持ちでそゝくさと歸つた。

何時行つたのか忘れた湯に思ひつ切り長く溫まつてゐた。バットはまだ六本殘つてゐる。今朝買つた十本のバットは、まだ六本殘つてゐる――

三月十五日　朝から雨である。增上寺で治安維持法反對、貴族院改革問題の演說會があつた。この前の上野で顏見知りの人々が出ろと云ふので立つた。俺の襤縷姿が人氣を呼んだ。西巢鴨借家人同盟の下村利一君は演說半ばで泣き出した。聽衆の中に啜り泣きの聲が擦硝子の樣に起つてゐた。「今に俺たちは餓ゑねばならないであらう。民衆の大部を餓ゑしめ、しかもなほ或一面には豪奢なる生活の華やかなる桃色を見せる。市井には强盜、殺人、放火を頻々たらしめて何の治安ぞや！　縛されて行く彼等犯人の姿は、近き將來における俺達自身そのものではないか」「富川町に行つてみろ。そして淺草觀音樣の椽の下に行つてみろ。そしてそれは舞台の上の芝居でもなければ、遠い國の話でもない。俺たち仲間、日本同胞のことなのだ！」俺は憂欝になつた。こんな事實は聞き飽き、讀みあきたものには何でもない茶飯事にしか感じられないかも知れない。だが、その痛ましい事實を每日々々見せつけられる者には、その日〱の新らしい感銘である。またかくも痛ましい事實に對する神經を鈍くしてしまつたのは誰だ。失業、失業、俺は生きてゐるのが不思議だ。俺は强盜に這入つて行く自分の姿と、引張られ行く自分とを想像してぞつとした。

ところで俺はこの先どうなつて行くのだらう。予算も當てもなく瞬間々々を生き伸びて行く、俺は恐ろしい。そしてこの恐ろしさを經驗させられてゐるものは俺一人ではない。この暗影の前に戰ける者共の魂がどこかで觸れ合ひ、そして結び合つた時、あゝそしたらどんなことになるだらう。…………俺はつく〲恐ろしい。今に何か×××以上のものが起りさうな氣がする。

演說會の同志が皆で出し合つて一圓二十錢を貸してくれた。

三月二十一日　九段バラックの同志の家で次の運動の打ち合せがある。對時局勞働者同盟と純正普選期成會と提携することに論議區々である。だが、他の方面の主張は兎に角、現內閣に對して不滿を持ち、それを倒壞せむとする意志のみに共通點がある以上、初めからの主義主張を變へさへしなければ、と云ふので結局話はまとまつた。

三月二十四日　淺草傳法院を實すまして、夜は本所菊川橋際の東館で中止を喰ひ、日本橋の何とか俱樂部をすましてまた青山會館へ自動車を馳せる。自動車に乘つて失業者を救へ、治安法を撲滅せよと叫ぶ、何だか變な氣がした。しかし、彼等仲間の主張の根底の空虛さ、上辷りの理論、演說の爲めの演說、何だか嫌になつた。それでも一日に五圓位の金が這入る。金のために……俺達は食ふために潔癖を犧牲にするか、潔癖を通して餓うるか。所詮俺達は人間である。

夜晩く歸つたら女將が變なことを云つた。間代の請求である。そして此處を出て吳れの謎である。俺は新聞の切拔帳をひろげて、俺の演說のことを書いてあるのを繰り返し讀みながら急に淋しくなつた。

四月三日　偶然逢つた從兄が雜司ケ谷にゐるので其處に世話になることにする。古本は洗ひざらひ賣つてしまつた。それでもやつぱかり九圓いくらになつた。引越しの荷を纏めながら、神田から此處に越して來た時に比べて荷物の半分もなくなつてゐることが淋しかつた。

六月三日　まだ仕事はみつからない。從兄も貧乏である。勿論小遣は一文も貰へない。鏡を見るとまた殊の外瘦せてしまつてゐる。一つは先日町議戰演說會のことで檢束され、蒸し返しを喰ひ、拘留になつたそのせいも確かに手傳つてはゐようが。

瘦せた。瘦せた。故鄉の者には、この上心配もかけたくない。從兄も近頃好い顏をしない。早く仕事を探せ〳〵と云ふ。仕事が見つかりさへすれば、俺だつて人の家で女中みたいに飯炊きなんかしながらその上氣がねな生活をしたかないのだ。

今日は×××と云ふのに連れられて保善社に行く。その宏壯な建物に向腹が立つた。こんなところから五十圓や百圓を貰ふ位當り前の樣な氣がした。何とも云はずに名刺を出して應接室に待つてゐたら、十五日にお出下さい。十五圓出しますと云つた。

七月十日　北里家の心中事件に對する議論も下火になつた。自分の一家から心中の片割れを出しても、大學の教授が勤まる世の中だ。働かねば食へぬ。そして仕事は一つも見つからない世の中だ。外國から何とか云ふ有名な音樂家が帝劇で何か演つてゐる。そして滿員だ。俺は不景氣で自殺した者の心持もよく分つて來た。やがてはどうせ餓ゑるんだつたら、いつそ自殺した方がましかも知れない。だが俺は泥棒して監獄に這入つてまでも生きてゐるぞ。社會主義者を滅ぼさんとする當局は、何故に社會主義者を生むところの社會狀態を改革しないか。生死の境を彷徨する者が自動車で歌舞伎座に乘りつけたり、帝國ホテルで踊つたりするのを見ては、どうして安靜な氣持でゐられよう。失業問題、小作問題、そして………これでもどうにもならない世の中なのか。内務省とか市役所とかゞまた失業調査とかやつてゐる、俺はそれよりも、その費用で一切づゝのパンでも配つてほしい。震災當時の義捐金が六百萬圓ばかり寢てゐるさうだ。おい何とかしてくれ。これを何とも出來ない當局だつたらこれが如何なる恐ろしい事實を生んでも、それは俺たちの罪ではない。所詮俺たちは人間だ。

七月十一日　「月收二百圓、男なら誰にも出來る。素人に限る」新聞廣告だ。どうせ……とは思ひながらも出かけて行つて見たら、硝石に金文字を書く商賣だ。資金がこれだけあればいくらの仕事が出來る。日にいくらの注文をとればいくらの純利益がある。それを敎へてあげるから三圓お出しなさい。馬鹿!!俺は唇を戰かせてそこを飛出した。

愈々金の出る當がなくなつた。文學界の六月號の戲曲の原稿料催促の手紙を嫌々ながらも書かされてしまつた。

八月二十五日　雨！　雨！「土方殺すにや刃物はいらぬ、雨の十日も降ればよい」また漸く仕事が不規則的ながらもみつかつたが、親方の方では不景氣、失業者多數につけこんで極端に勞賃を安く拂ふ。それでゐて雨に三日も責められてたまるものか。

編者記　（百五十餘篇の應募者があつた。しかし傑出したものはなかつたが何の篇にも苦惱の姿はよく現はれていた此五篇を入選した。）



富田渓仙筆

寒山拾得

富田溪仙

序詞

隋が滅亡して後、唐の高祖帝位に即き長安に都した。六朝の禍亂時代を經て唐時代の燦爛たる文化が啓けやうとする黎明期である。これにつぎて太宗が立つた。かくて漸やく國威四方に輝き、國内よく治まり、世に貞觀の治と云はれたころのことである。

南方の山中に僧院があつた。

山は天台山といふ。天台縣の西、一百二十里の地にあつて、その高さは一萬八千丈、山は八重に重なり合ひこれを望めば一山の如く見られたと云ふ。周廻は八百里。少し大きすぎるが勿論支那の里程である。

上天の三台星に應じて聳え立つ故に台嶽とも云はれた。兎も角非常に高大なものであつたのである。

僧院は天台寺、六朝の末、智者大師が三十八歳のとき、森林に幽棲すべき素志を實行して之を草創し、隋の開皇十七年十一月二十四日壽六十歳にして示寂した。智者大師は此の時山上の天台寺を病を推して降り、晋王廣（隋煬帝）の懇

誦もだし難く山腹の石城迄來て、法華、無量壽二經の題を唱へて歿したと傳へられてゐる。

山上の天台寺と、山腹の石城との間に、松柏の密林に覆はれて國淸寺と云ふ寺がある。智者が修禪定光を夢みし舊跡で、隋煬帝が、智者大師の遺囑によつて建てたものなのである。

一

唐初、太宗の貞觀七年のころ、この國淸寺山内を徘徊する異様な風體の、三人の比丘ともつかぬ者があつた。

一は寒山と云ひ、二を拾得と云ひ、三を豐干と云ふた。

寒山子は天台山の西七十里をゆく寒石山といふところの巖窟中に穴居する貧窮なる乞食であつた。寒巖にあるの故をもつて自ら號して寒山と云ふた。拾得は國淸寺厨房にあつて、器を滌ぎ、薪を割る卑賤の寺男であつた。豐干は國淸寺經藏のかげに小室を結び虎とともに住居する老師であつた。

これ等は世に國淸寺の三隱と呼ばれる人々である。

二

寒山は何れのところのものか、如何にして人と成つたかは明かではない。

例へば蒼天を渡る白雲の如く、何處より來り何處へ行つたものかを知る者はないのである。ただ太宗の貞觀年中のころ、飄然として國淸寺に現れた。

寒山詩

余家有一窟
窟中無一物
清潔空堂堂
光華明日日
蔬食養微軀
布裘遮幻質
任儞千聖現
我有天眞佛

窟中に幽棲する彼の生活は此の詩に唱ふごとく醇朴枯淡を極めるものである。窟中一物を止めるなく清潔にして空しく堂堂たるものであつた。心境おのづから居住となり、居住直ちに是れ心境であつた。

古老は彼を貧人風狂之子と云ふ。風狂とは韓非子も百歳風狂之子と云ふ如く悟性を消耗せる如き意味であらう。蔬食微軀を養ふと云ふ如く、物質生活の窮乏を常とし、その状貧子の如くであつたと云ふ。且つ形貌枯悴して痩軀枯葉の如く見るからにわびしい。

頭上に髮は亂れ、樺の皮を剝いで冠とし、布裘破弊して、足に大木履を履つた。

賤が伏屋に精靈降ると云ふことがある。窟中一物を止めることなき清潔にして空しく堂堂たる内に彼は任儞あれ千聖

現すと云ひ、我に天眞佛ありと云ふのである。蓋し彼が大見識と云ふ可きである。若し外觀と內容とを對比して見ると、一切の社會人とは全然反對なものを見るであらう。

寒山詩

一往寒山萬事休
更無雜念挂心頭
閑於石壁題詩句
任運還同不繫舟

一トたび寒山ゆきて萬事休す。更に雜念の心頭に挂げるなくと云ひ、運りかへるに任じて舟を繫がさるに同じと云ふ。心の自由さと行動の捉はれるなきは舟を繫がざるに同じい。行常座臥のさまがこれである。それは意志や理性やに由るものではない。かゝるものもまたここには雜念と考へられ可きものであらう。

形貌のしかく醜怪なるに反して、心境の清遠皎潔なるは、最も寒山の寒山らしきところである。

巖窟を出づると彼は感興の如何に依つて、草原にゆき或は國淸寺の方に步を轉ずる。寒石山より國淸寺への途上彼は閑に於て石壁に詩句を題することも珍しくない。

寒山詩

可笑寒山路

而無車馬蹤
聯溪難記曲
疊障不知重
泣露千般草
吟風一樣松
此時迷徑處
形問影何從

詩は國淸寺に豐干拾得等と解脱の放談をなしての歸路であらう。しかし所謂寒山の道であつて彼が常に往復する途上の景物を推し知るに難くはない。勿論その内容とするところは、單に語句に表れたるもののみではない。

寒山の道は車馬蹤ふなく、聯溪記曲難し、疊障重り知れずと云ふ。幽寂の草露に裂はれた小徑と知られる。小徑は岩壁の重疊たる下、或はまた聯溪のほとりをゆきまたはこれを越える。つぶさには記し難しとも云はれる幽邃の境であらう。懸崖つき溪谷盡きて欝蒼たる松柏の密林に入るのであらう。

更闌けたる月明の夜、深山の松柏に裂はれたる小徑をゆく寒山の胸裡は、また彼獨特のものたるを知られるであらう。このとき道に迷ふところ、形、影に問ふ、何處よりかせんと云ひ、前に笑ふ可し寒山の道と云ふ。苦もなき彼が笑聲を寂寞の夜に聞く如き感じさへある。恐らく之に依つて見れば、寒山の道は、彼のみがひとりあの大木履を履つて往來するにすぎなかつたものであらう。日常往還の道に迷ひ、形、影に問ふと云ふ。形、影に問ふ――立ち止まり、自らの影に、自ら問ふ。玆にも彼の躍如たる面目を見るのである。尤も他面また、その内容とするところは、徑に迷ふ

と云ひ、形かげに問ふと云ふは、一脈の諷刺を湛ふるものとも解せられる。

此の小徑を經て、彼は國淸寺の方に向ふ。國淸寺に近き風物は拾得の日常親炙するところであつて、彼の詩に依つてほぼ想像するに難くない。

拾得詩

迢迢山徑峻
萬仭險隘危
石橋莓苔綠
時見白雲飛
瀑布懸如練
月影落潭暉
更登華頂上
猶待孤鶴期

詩は幽境を唱ふが、國淸寺の建てられてある、天台山中の五峰に遠くないところであらう。更に登る華頂の上と云ふのは、上、台星に應じて一萬八千丈なる天台山の最頂巓のことである。華頂の上に至つて、天台山は盡きる。

元來天台寺は既に智者大師が六朝のころ、俗界の繁瑣を厭ふて森林に幽棲せんとして此の地を撰んだものなるが故に、國淸寺を中心として、山上山下至るところ奇勝絶勝の風致に富むは、著名の事實である。徑は峻險として唱はれて

ゐるが、これには、天台山も國清寺迄の道は比較的傾斜がのろいが、國清寺をやゝすぎてから、寒石山や、天台寺の方に向ふと俄かに急斜面に成つてゆく。所謂石橋ありて半天にかゝり、瀑布は飛いで雷響となるのである。渓は天台山の奥深きあたりから流れ出で國清寺に近く流れ下るところは、道に添ひ、渓をへだてて萬仞の險を見るのである。そのあたりから華頂への道と寒石山の道は岐れるものであらう。拾得のみは寒山の石窟を訪ふことがあつたと云はれるから、彼のみはその途上の風物を知るものなのである。

かくて寒山は國清寺に至る。寺院は、山腹の平地にある。背後に山を負ひ、前面に、谿ゆるく流れる。皇家の經營に由つて建てられたものであつて、隋朝の建築である。寺塔鐘樓に至る迄從つて一種雄勁の氣をふくむで屹然として立つ。

彼は廚(くりや)の内へぬつと這入つてゆく。拾得以外の坊主どもとは彼は決して口を利かない。内には拾得が、寒山が來さうなものだと思つて、食堂の食器を滌いでゐる。食器の數もずいぶん多い食器にはいつも食ひ殘した飯や菜が少しづゝある。彼はそれを、寒山が來る度毎に巨竹を截つて造つた竹の筒に投藏して置いて之を與ふるのである。寒山はそれを無言のまゝ肩に負ふて悠然として去る。例へば大河の流れるに似て、千里を遠しとせぬ如くである。

三

庫裡に續いて長廊がある。

時にまた彼は、竹筒を背にして悠然として長廊をゆく。或は獨言し或は獨り高らかに笑ふ。或は詩を口ずさむ。六朝の儷體になづまぬ簡勁の詩句である。

或は天を仰いで「蒼天！蒼天！」と叫喚する。「咄なるかな！咄なるかな！三界の輪廻！」と空に向ひて漫罵の聲を放つのである。

か丶る彼の譎佯の言動は、彼自身に於ては平常のことである。一ト度それが俗衆と對するとき、即ち俗衆の目をもつて見るとき、悟性を消耗せる風狂の發作として映ずるのであつた、恰も大戒と破戒との對立の如く、或る概念に依つて(例へば戒律と云ふ如き)拘束されるものと、か丶るものを超越するものは、同一事實を、一は正しくこれを見、一は錯誤に依つてこれを見ると云ふ如き、二樣の見方を生ずるのであらう。即ち大戒は、云ふ迄もなく正しきものであり、戒律を超越する先驗的のものたるに拘らず、戒に律せられるものに取つては、却つてそれが破戒の如く考へられるのである。

國淸寺僧堂の大衆は寒山の言動をもつて、悉くそれが風狂の發作と信じたのであつた。多くの修道僧や學問僧は、寒山の布襴の零落し面貌の枯悴し、大木履と云ひ、樺の皮の冠と云ひ、その外觀の尋常ならざるは、內的生活もそれと等しく瀟灑たるものであらうと推斷したのである。如何となれば、彼等は因襲や先入主觀に出發して物を見、物を考ふるが故である。彼等が日夜、日もこれ足らざる如く研究し、修業するところのものが、か丶る一切の迷妄を打破する點にありながら、卑近な實際生活に於ては却つてか丶る迷妄我執の內に溷沌として昏睡するのであつた。

長廊に叫喚し、または慢罵し、或は絕笑する寒山の姿を、若し彼等が認めるであらうならば、彼等は突差に起て之を逼逐するのであつた。ひとり寒山に對するのみならず、彼等の生活自體はすべてみな錯誤に出發するものであつた。寒山の長廊に步みを運ぶは恐らく暴擧に依つて彼等の心根に深く根を張るところのか丶る我執迷妄を滅盡して、一點の法燈を點ぜんとしたものであらう。然るに彼等は修羅道の聲をあげて騷然として罵り叫び、或は杖を把つて追ひ逼るので

あつた。然るに兩者の見解のへだたりは餘りに遠きにすぎた。彼等は杖を揮つて寒山を擊つた。彼は輕く身を退けて高らかに絕笑するのである。見解のへだたりの餘りに甚だしきは、各々事に望んで異れる二つの形を取つて現れるであらう。寒山の笑はかゝる見解のへだたりから押へ難く湧きあがる笑であらう。彼等は更に一層の眞劍さを加へて逼迫する。彼は又だ靜かに退つては掌を折して愈々笑ふのである。彼等が眞劍に成れば成るだけ彼の笑は一層甚だしく成りゆくのであつた。

彼は寺門を拔けて獨り山道に步みを運ぶ。恐らく拾得の詩に言ふごとく、高低の險月は影を落す碧潭の上、孤谷のみどりなる石橋を渡り過ぎるのであらう。軈て靜然として虛空に向ふ、空は蒼く無窮の果に擴り續く。愚痴の嘆きに蝟集して蠢動する卑少なる人間、大衆を見る。または心は蒼窮の如く、蒼窮はさながら心の如く曠茫と擴りゆく。無窮の髓からの如く笑ふ。そして又た叫ぶ。聲は戛然として溪間に反響する。聲の響きに應ずる如き勸發の機緣もなき、衆僧のさまを思へば、またそとに新たなる哄笑が胸を衝いてこみあげて來るのである。そこで彼は又た腹をゆすぶつて笑ふのである、

木履地に踏み小徑に向ふ。人あるも人なきもかゝはるところなく呟やく。呟きは、蠶の糸を吐く如く縷々として續く。何事を語るとも詳かではないのである。或は老樹の巨幹に詩を書きつけ、幽谷の碧潭に座して流水に語り、山頂に突立ち煌々たる明月にものを云ふ。

或るときは高原の草に立つ。遠く台州唐興の村落を望む。溪流は繁つた草をもつて覆はれ、そのかげに涓涓たる響を殘すのである。草原には青牛が默默として草を喰み、水を呑んだ。牛豎子は其の傍で谷を眺め、草笛を吹き、また快活な寒山と戲れ遊び、時にはまた村落に行はれる人類の醜惡なる闘爭のさまを寒山に聞かせた。

寺寺の晩鐘が黄昏の空にひびきわたつた。牛豎子は牛を追ふて夕月に皈る。寒山がかく牛豎子と戯れ遊び自らその情を樂しむ日も少くはなかつたのである。

四

拾得は幼い頃五峰に程近い赤城の山道に泣いてゐた。彼は棄子であつたのである。山道は樵夫も通らなく森々としてゐた。彼は其處でたゞ意味もなく泣きつゞけてゐた。何故に虎狼の馳せ遊ふ山中に突立ち、泣きつゞけてゐるのかも知らなかつた。その內に彼は自分の前に突立つて何か話しかけてゐる異樣な老人を見たのである。

老人は僧侶で、豐干といふものであつた。頭上からながながと黑の毳裳をかぶつてゐた。頭髮は垂れて眉に等しかつた。

「わんわん泣いてお前は一體どこの子だ。」豐干は口を開いてブツキラ棒に恁う訊いた。だが彼はそれに對してただ知らぬと答へた。老僧はまたお前の親は何だと訊いた。彼はただあつちだと答へた。そして牧牛の子だと附け加へたのであつた。

老僧はまた云つた。

「お前の親の名は何だ」

彼は知らぬと答へる。更に

「お前の名はどう呼ぶのか」と訊く。名前は無いと答へた。歲は幾つと訊く。彼は十歲だと答えた。老僧は訊き畢つて

宜しと云ふ。

豐干は逍遙を中止してもと來た道を國淸寺の方へ引き返した。彼はとぼとぼこれに從ふて蹤いて行つた。

赤城の山道に拾ひ得た孤兒を攜て歸つた老師はこれを拾得と名命して、庫裡に至りこれを食堂に香燈の役をなさしめたが忽ち壇に登り佛像と對して餐を共にしたと傳へられてゐる。

食堂には文殊を祀る（谷響集）これを上座とし次に賓頭盧を祀る（高僧傳）これ等の佛像の壇に登り供物を捧げ自らもこれと相對して餐を喫する拾得のちよこなんとした樣は如何にも寺僧共を一驚せしめたであらうことは、想像に難くはない。

國淸寺に或る聖僧が巡錫して來た。

拾得は聖僧に向つて傷を負ふてゐるぞと云ひ小果だと罵つたのである。果は佛果を意味するものであらう。聖僧は三密瑜伽の觀行を經て密教の窮極目的たる即身成佛と成るものでなければ成らぬ。然るに瑜伽(yoga)に於て果は最も根元的であつて、意に本尊の種子を觀ずるのであらう。それを持つて小果と云ふのである。聖僧の聖僧たる所以はない譯である。

彼は當時に於ける學問僧の如く學殖あるものではない。聖僧と云はれる者の如く、深き修道の生活を經た者ではなかつた。無智蒙昧の一小僮により過ぎなかつたのである。而もまた頓機徹底に依つて深き悟道の境涯に入り、即身成佛を現成するものであつた。聖僧と云はれるものの如くその最根本的のものを有たざる形ばかりの聖僧とは心境自ら霄壤の差があつたのである。

拾得は食堂から厨房に轉ぜられた。僧堂に於ける最も佛と縁遠い下賤の仕事である。彼は玆に於て食器を滌ぎ、爨を執り、山に薪を採り、米を搗き、箒をもつて庭を掃く寺男の如きものと成つた。彼は此處で寒山と知り合ふた。寒山は饑へて厨房に來り食を乞ふたのである。拾得と相知るに至り、拾得は彼のために竹筒を造り、彼のために殘食菜滓を藏し置いた。彼等は一切の形相と拘はるなく、相互に於て心境の高潔の故に結ばれ、暗黒のなかに法燈相映ずるごとくして和したのである。

拾得は高箒を採つて庭を掃いてゐた。

座主道翹は彼の側に來て云つた。

「お前は此處に長く居るやうだか、名を聞いたこともなければ姓を聞いたこともない。一體お前は何處のものだ。」

しかし彼は突如箒を地に捨てて、兩腕を組んでピンと反り返つて突立つたのである。道翹はそれが何事であるかを豈り知るを得ず去つた。

或るとき拾得は衆僧に告げて、我れに一珠あり、陰中に埋めて誰として知る者がないと云つた。一珠とは何を指すかは明かではない。拾得傳は彼の此の言葉に對して「衆謂癡子」とある。按ふに佛舍利（Sariru）の如きものであらうか。舍利とは元來釋迦の遺骨を云ふものであつて、衣、鉢と云ふ如きものとともに釋迦の遺物崇拜の内でも最も貴ばれるものである。若し此の推定が正しいとすれば、卑賤なる寺男風情の拾得如きがこれを所持すると云ふのは衆呼んでこれを癡子となすと云ふ意味が明瞭となつて來る。

然るに拾得の意味するところは、一珠が、佛舍利であつても、必ずしも現實の佛舍利を意味するものではないのであらう。何故ならば、拾得の如き境地に在るものに在つては、かゝるものも砂礫に等しいのであらう。即身成佛の境涯は

惟れ直ちに釋迦の境涯である。釋迦の遺骨の一小片よりも釋迦の境涯の貴きはあらゆる經典の根本義として說くところである。彼はかゝるものの、本質よりもその形殻のみを尊ぶ彼等衆僧に語るに、一珠をもつて爲し、これを陰中に埋めて別つものなしと云ひて、彼等の見性の親行に對し一閃を與へんとせるものであらう。然るに衆僧は、彼をもつて擬子と呼んだのである。

或る朝衆僧は不思議な夢を見て目を醒した。夢は衆僧一夜に一樣のことを見た。それは寺内に祀る山王神が姿を現じて奇怪な事實を彼等に告げた。

夢の告げに曰れば、山王神の壇に奉る供物、香華の類は鳥のために啄まれ常に散亂せられてゐたのである。日日供物香華を奉る者は拾得であつた。拾得は此の狀を見て山王神を打つて瞋り云ふには、爾は是神にして伽藍の守護をなすものではないか。然るにその供物を鳥やうのものに啄まれるに任せ追拂ふことが出來ぬのであるか。それも出來ぬやうな神には香燈供養も無益であると云つて去つたと云ふのである。

彼等は外ならぬ伽藍の守護神なる山王の夢の告げの故に如何なることであらうかと不審を抱き、事の眞偽を確めんとして祀堂の方へ行つたのであつた。果して堂內の山王は滅茶滅茶に打たれ身上至るところ痕跡を止め、散散に傷つけられてゐたのであつた。實に國淸寺草創以來の珍事であつた。

これに依つて彼等は拾得を凡間の者にあらざるを知り之をもつて神秘的な事實と考へ早速此の狀を具さに州縣に報じ、符を下して賢士と爲した。

五

豐干は國淸寺の經藏の畔りに小室を結んで住んでゐた。髪の剪ること肩に斉しく、堂堂七尺の躰軀を、布裘をもつて覆ふてゐたと云ふ。或は常に唱道するに虎に乗つてしたと云はれてゐる。その傳へらるる形貌は寒拾二公の如く異様であつたことが知られる。

時に虎も豐干の外出せぬ時は、欠伸をしたり、背のびをしたり、咆吼してゐるのだから物凄い變な一家族であつた。彼は山道を逍遥し、また幽谷に虎を走せて神靈の氣を深く吸ふた。或は田園を過ぎ村落に赴きては共處に行はれる俗界の生活を見て來るのであつた。彼もまた超凡の氣骨を備へたかまた穏やかな慈悲の心に富んでゐた。彼は無口で誰かゞ若し彼に佛理を問ふごときことあれば彼はただ、そして何時も同じやうに「隨時」とのみ答へた。

國淸寺に於ける彼も畏る可き存在の一人であつた。寺僧にして彼を訪ふものは一人としてはなかつたのである。内に在るときは、拾得ともに米を搗いた。米が搗きあがると彼はそれを袋に入れて村落の貧窮なる家族の者を訪れてそれを頒ち與へるのであつた。

時に彼の小室を訪ふものは寒山と拾得のみであつた。此の消息は彼の詩に左の如く記されてゐる。

寒山特相訪
拾得罕期來
論心話明月

大虚常無礙
法界即無邊
一法普偏該

寒山は特に、拾得は寮に來り會し、心を論じ明月に話すと云ふ。後の三句は三隱の襟懷とするところを披瀝するものであらう。拾得は厨房に在つて彼と居を接するが故に訪ふの要もなかつたのであらう。寒山は俗事に捉はれるなき無宿の人である故に特に訪ふことを得たのであらう。

彼等三隱が明月に話し心を論ずるの光景は想像するに難くはない。

寒山は東の方の家に死人があつた。と云ふ。東の家の者は歎き悲しむ。西の家の者はそれが哀れだと云つて同情してゐる。

さう云つて彼はげらげらと笑ふ。

悲しみや、死はそれ等の人間が何事も解せず、ただ本能のまゝに悲しみ歎くのである。死生の歎は徒らなる愚痴の歎きにすぎぬ。賢愚を問はず佛の本旨に歸するときは情緒感傷に超然たる明煌々の心境に入るを得るのである。愚態痴態の限りをつくし豪然として俗世に濶歩する者の表裏がお可笑しいと云ふのであらう。さうして歎き悲しんで一體それが何に成るのだと云つて笑ふのである。

拾得は更に面白い話をはじめる。

水浸泥彈丸
思量道理無
浮漚夢幻身
百年能幾幾
不解細思惟
將言長不死
誅剝壘千金
留將與妻子

浮漚夢幻の身と云ひ、百年能幾ばくぞと云ひ、人生の樣は夢幻泡影の如くうらさびしい。肉體的生存とは、水に泥の彈丸を浸す如く臾須にして溶解し濁水と成るのみである。

思量れば其處には毫末の道理の存するさへない。にも不拘、そこに誅剝を事として千金を壘しまさに留めて妻子に與へんとす。これもまた千金に非ずして泥彈丸にすぎざるを知らぬと云ふのである。

二人の皮肉は痛烈で、笑聲はそれに應じて高く成る。豐干は虎頭を撫して默默として聞くのみなのであらう。

寒山は更に云ふ。

人是黑頭蟲
剛作千年調

鑄鐵作門限
鬼見拍手笑

慢罵はいよいよはげしくなつてゆく。

人間とは是れ黒き頭の蟲にすぎない。にもかゝはらず鐵を鑄て門や塀に依つて限界を造り堅固にして千萬年をよくささふるものと思ひ做す。その爲すところのものは片片たる黒頭の蟲の仕掛により過ぎぬのである。黒頭の蟲共はやがて思ひ驕り、鬼を見て手を拍つて笑ふ、鬼と蟲との對比により兩者の力量の甚だしすぎる計量を見せ、垢塵にも見紛ふ黒頭蟲の微微たる社會生活の浮華を笑ふのである。鬼を見て手を拍つて笑ふの結句が無限に複雜なる意味を見せ、嘲笑と慢罵の酷烈さが表されてゐるものと思ふ。

かくて三隱の笑聲は月明の經藏の邊りにドツと一どきに起る。形は影を宿し、風俗は等しくみた、おどろおどろの様である。ただ語り合ふ三つの靈のみは明鏡の月に映ずる如く皎潔聖淨の極みである。

寒山は話を斷つて後、眞面目くさつた顏をして豐干に向ひ師も少しく道へと促す。豐干は慈顏に微笑をふくむで、萬徳も將來せぬに俺をして一體何事を道はせやうと云ふんだい――と答へる。答へ畢つて洒然として空嘯く。

六

長安の都に其の比、閭丘胤と云ふものが居た。彼は頃日、台州の主簿を命ぜられた。位階は朝儀大夫と云ふから我が

正五位下に相當する。國司の資格で高官の者である。

然るに命の降つた日、胤は會憎頭痛に惱んでゐた。早速彼は醫者を召して治療させたが、病狀轉重く快復の狀も見えなかつたのである。然るに此の雜遝のときにあたつて、偶ま、胤の門を訪ふ異樣な姿をした一禪師があつた。名はと、問へば豐干と答へた。何許の人かと訊けば、天台國清寺より來ると云ふ。倘、特に來つて此の相を訪ふものであると附け加へた。天台は彼の新任地台州の唐興縣にあつた。胤は台州の委細に就いて詳らかにするの暇もなく病に冒された。病は神經衰弱性であつた。人を障けて病を治さなければ成らなかつたのである。

然るに老僧で天台國清寺より來り問ふと聞いて胤は早速招じ入れた。座についた老師は嚴然として、へりくだるところがなかつた。胤はそれを見ると何處よりするとも知れぬ或る不思議な峻烈さと威容とに打たれた。

胤は辭を低うしてひたすら疾の癒ゆるやう貴僧の配慮を得たいと乞ふのであつた。

老師は聞き畢つてゆるゆると笑ふた。しかしその妙な笑は胤には解し難いものであつたのである。老師はその狀を見てやがて口を開いた。

「身は四大に居り、病は幻より生ずるものだ。もしこれを除かんと欲するならば、すべからく淨水を用ゐなければ成らぬ。」

語は何事を意味するものか、胤には全然不可解であつた。

四大（Catvuri Mahabhusani）は佛教の語で、物質界を構成する四種の元素の意で、四元素とは地、水、火、風を謂ふのである。即ち身は物質界にあつて、賢聖の如く、心境おのづから清淨にあるものではない。若し彼が恒に高尚を惟ふ者であるならば頭痛を病むと云ふやうなことはないのである。例へば禪の修道僧の如きものが棒をもつて撲たれる

程切迫した見性の思惟にありながら決して其の故に頭痛を起し神経衰弱になると云ふやうなことはないのである。胤は俗界の煩瑣に心身を消耗し、老子に從へば有爲のことに奔走し疲勞する故に心身を痛め傷つける。四大に依つて構成される現實の世界は、更に高き立場よりすれば即ち幻であり、化であり、空であらう。

病は幻より生ずとは、高き精神生活を有たざる胤がかゝる物質生活社會生活より生ずると云ふのであらう。豐干の高飛車で手厳しい唱道の樣が推測される。

從ふ者は即ち淨水を汲み來つて老師に上る。老師はそれを受け取ると呪を唱へ俄かにそれを口に噀んだ。丹丘の縣官朝儀太夫閭丘胤はその前に畏み伏した。豐干は口に啣む水をいきなり胤の上にプツ！と吹きかけた。

しかし駭いたことには胤の病はたちどころに癒えたのであつた。彼はこれを奇として深く老師の高徳に感じたのである。時に老師は彼に告げて恁う云つた。

「臺州の地は海島にして嵐毒がある。彼地に到るの日には必ずまた保護を用ひなければなるまい。」

臺州は今の浙江省にあり、彼の任地は今の三門灣内丹邱であつた。灣内島嶼の多きは人の知るところである。胤は嵐毒があると聞いては心穏かではなかつた。保護を要すべしとは如何なることであらうか。豐干におどろかされた彼は急に思ひ惑ふのであつた。そしておずおずとして老師を見上げて云つた。

「彼地のことはいまだ審らかに知るものではないのです。しかし彼地には老師に於ける如く仰いでもつて師となすに堪ふる高徳の人が居りませうか、若し居りますならば——」

豐干はあると言下に答へた。

「しかし、これを見ても識ることが出來ぬ。これを識るとも見ることが出來ぬであらう。若し強ひて見んと欲しても明

敢な相貌をとることを得ない」

胤はあると聞いて喜悦に心踊らせた。併しその言葉の意味は解らなかつたのであつた。彼は老師に迫つて是非知己を得たいと乞ふ。

「それは文殊と普賢だ。國淸寺に遯跡し爨を執り器を滌ぐこれ拾得と云ふもの、或は去り或は玆に來るものこれ寒山子、その状貧子の如くまた風狂に似てゐる。ともにその厨中に火を焚く――」

豐干は斯く云ひ了つて何處とも知れず立ち去つた。

七

國淸寺僧堂に於ては、座主道翹や、專門の學問僧や、修道僧等が集まつて佛戒（Sila 尸羅）を說いてゐた。

拾得は莊頭に於て牛を放ち、歌を詠じ、天に叫んでゐた。堂內の講述は佛門主要の問題の故に微より細に至り爲されてゐたのである。拾得は牛を牽して衆僧の方に追逐してやつた。衆僧は俄然佛戒を中止して不意の闖入者に駭き呆れ、騷擾亘つた。拾得は手を拍つて嘲ふた。

「噫、悠なる哉、悠なる哉、この坊主共は澤山の頭を並べたてて一體何をしてゐるんだ。」

衆僧は怒り叫んで牛を追ふて出て來た。彼等はやがて拾得に迫り之を捉へて風狂の下人我が說く佛戒を破ると罵り叫んだ。そこで拾得は莞爾として笑ふて云つた。

「瞋ることなきが佛戒だ。心、淨きは出家と云ふ。我が本性と汝と合ふ。一切の法に差別あることはないのだ。」

云ひ畢つて牛を驅つて走り出た。莊頭には牧牛が幾頭も草を喰ふてゐた。衆僧は更に彼の後を追ふた。しかし其處には時ならぬ、處を得ぬ牛の群が點點として在るのを彼等は見た。恰もそれは白日に見る幻の如きものであつた。彼等は再び驚き疑ふた。拾得は何の故に莊頭をして斯く突然放牧場としたのであらうかと――――

拾得は立つて叫んだ。

「俺が牛を放つた譯ではない。」

衆僧は驚き呆れて一團に成つて立ち止まつた。拾得は更に云つた。

「群牛は皆前生に於て大德知事の人々であつたのだ」

「見よ！是れ等には咸く法號がある。これを喚ば皆これを認められるだらう。」

彼等は口を噤んだ。

拾得は群牛に向つて叫んだ。

「前生の律師弘清出でよ！」

然るに驚く可し群牛の內より突然其の叫びに應じて、一頭の白牛が聰と答へて出で來るのであつた。

拾得は更にまた喚き叫んだ。

「前生の典座光超出でよ！」

聲は再び凛として響いた。衆僧は異常なる現實に直面して息つぎあえずそれを凝視した。しかし忽ち聲に應じて突如一頭の黑牛が吼く如く應へて驀進して來た。

拾得は尙もまた聲高く喚んだ。

「直歳清本出でよ！」

時に一頭の牯牛聲に應じ、聲を發して立ち顯れた。衆僧は思はず聲を呑んだ。

其時また彼は強く怒鳴つた。

「前生の知事法忠出でよ！」

だが法忠と呼ばれた牛も等しく地を踏み鳴らし驅け出して來たのである。

拾得は獨り牽て牛に謂ふ。

「汝、前生に於て戒を持さず、人面にして畜心であつた。」

衆僧は此の言葉を耳にして慄然身内に惡寒を感じた。

「汝今此の咎を招く、怨恨何人に於てあらむか！」

座主道翹は息をつめた。拾得の簡勁の語句は、彼の心を割れ鐘の如くぐわん！と手強い響きに擊つた。手は固く汗を握つた。だが拾得の痛烈な撞木は更に酷く彼の割れ鐘を擊つた。

「佛の力は洪大なりと雖も、個に於てのみ佛恩も孤だ。」

大衆は俄かに慌てふためき此の由を州廳に報じた。吏は直ちに拾得を召して高官に就かしむ可く迎ひに來つた。だが勿論彼は謙直鄭重なる吏官の言葉に對して、てんで問題にはしなかつた。依然として國淸寺畔を彷徨し、厨房に火を燃き、器をみずすすぐのみであつた。

衆僧は菩薩來と叫びかはし讃嘆の聲をあげた。

八

寒山と拾得とは肌に冷へ冷へとするうすら寒さを感じながら厨中。竈前に火を焚いて語つてゐた。拾得は昨夜夢を見たと云ふ。

拾得詩

昨夜得一夢
夢見一團空
朝來擬說夢
擧頭又見空
爲當空是夢
爲復夢是空
想景浮生裡
還同一夢中

夢は空の夢だ。朝に成つて眠りは醒めた。醒めて夢を偲ばうかと思ふ。凝乎とそれを惟ふうちにフト首をあげると空が見えた。晴れ渡る現實の空だ。はた空か、夢と現つと頒ち難い。想んばかるに浮生の内、還つて一夢のうちに同じ——即ち色空二界を對比して自ら兩界の一如の心境を云ふものである。

寒山詩

烝砂擬作飯
臨渴始掘井
用力磨甎瓴
那堪將作鏡
佛說元平等
總有眞如性
但自審思量
不用閑爭競

砂を蒸して飯となさんとす。渴にのぞんで、はじめて井戸を堀る。力を用ひて甎瓴を磨く。なんぞまさに鏡となさむとす。如何にして鏡となり得やうか、佛說はもと平等である。すべて眞如の性がある。ただみづから審らかに思ひ量れ。

みだりに爭ひ競ふことを用ひずと云ふ結局が面白いのである。

恐らくこれは楞嚴經から出たものであらうと思ふ。砂を蒸しと飯となすと云ひ、百千劫を經るとも祇熱砂と名づくる如しとか、何ぞもつて故に玆に飯はもと砂石の成るにあらずなぞの語がある。寒山はそれを用ひたものであらう。

順調に行はれてゐると考へられる人間生活も實は砂石を煮て飯とする如きものと考へられる。甎瓴を磨き鏡となさんとすと云ふも、同一事實を異れる言葉に依つて云ひ表されたものである。禪林類聚に記する南岳穰禪師の話の如きは即ちこれである。

南岳穰禪師が南嶽に在るとき馬祖はその傍らに庵を結び住んだ。或るとき禪師は馬祖が何事をするのかと思ひソッと

庵室をのぞきに行つたのである。彼は定に入るごとく跌座し幾度行くも變ることなく、石佛の如く鎭まり反つてゐた。師は禪師は彼を呼んでお前はそこに何事をしてゐるのだと訊く。馬祖は師に答へて勿論座禪をしてゐるのですと云ふ。師は更に座禪をして何を計劃してゐるかと云ふ。彼は禪を中止して師坊の問に答へなければ成らなかつた。

「佛を見るのです。佛の境涯と成る禪の根本義に入らうと思ふのです。」

南岳はフフンと鼻で嗤つて去つた。翌日師は一枚の磚を提げて庵の入口に座を占めた。彼は常に變ることなく禪定に入つてゐた。師は磚を敷石にかけて磨きはじめた。四邊は沈り反り石に磨する磚の音のみがゴリゴリと聞かれた。彼は明境にある筈のところその音に心曳かれて定は何處へ行つて終つた。彼は堪へかねて磚を石に磨して何をするかと訊く。師は洒然として勿論鏡にするのだと云ふ。彼はそれは到底不可能だと云ふ。師はこれに答へてお前の爲すところと一ッだと云ふ。彼は自分の爲すところは是であるが師の謂ふは全然不可能だと云ひ張る。

「これだけ見せしめても解らなければ俺は一ッの譬論を話さう。此處に馬車がある。夫れが如何しても進まぬとき、お前は輪を打つか、牛を撃つか」

此の語を聞いて馬祖は愕然として言下に心を印し大悟したと云ふ。即ち頓氣の閃めくところである。自ら正しと考ふるものに於ても更に深き反省を必要とするものである。佛說はもと平等である。甎瓶と鏡の如き對立があるものではない。すべて眞如の性をもつものである。學問僧の如きがみだりに法論の爭鬪に疲れることの誤りを知るべきである。

即ち寒山詩の味ひ深いところである。

彼等は心を論じ詩を詠じ合ふ。孤獨の時は互に、寺内や洞天桃源に逍遙して頓氣の感發するところ、堂殿の柱と云は

す壁と云はず、または鐘楼や農家や、岩石や樹皮やにたちどころに成る詩頌を書きつけた。

拾得もまた時によつては寒山の洞窟を訪れることがあつたやうである。左の一篇はその消息を明らかにしてゐると思ふ。

拾得詩

閑人天臺洞
訪人人不知
寒山爲伴侶
松下噉靈芝
毎談今古事
嗟見世愚癡
箇箇入地獄
那得出頭時

松下に靈芝を噉すと云ふの噉は、かみ啖(くら)ふことである。或はすゝり食ふと云ふやうな意で、恐らく靈芝をしふみ食ふて汁を味はうものであらう。靈芝は聖王の祥と云はれ、味は、色に由つて異なるが、靑は酸にして、黄なるは甘いと云はれる。松下に噉ふと云ふのは、靈芝の內、飛節芝と云はれる種類のものであらうか。これは千年の老松の上に生じ之を服すれば長生すると云ひ傚されるものである。

天台山中知る人もない寒巖のほとりのことだから人倫を絕する幽境なるは勿論、千年の老松鬱蒼として枝をひろげ

て、點々たる美事な靈芝を採り啖ふと云ふことは容易に考へられる。國淸寺に殘食菜滓の類をとりにゆかぬときは、恁う云ふものやら、木の實、蔓草の果物を喫ふてゐたものであらう。

每に今古を談ずとあるから、彼が寒山を訪ねたのは、さして稀でなくて閑暇を得れば始終往き來してゐたのであらう。閑にと云ひ每にと云ふのは此の消息の推定を容易ならしめる。

每に今古のことを談ずと云ひ、世の愚痴のなげきを見るとか、箇箇地獄に入るとか、云ふは拾得が群牛の名を喚び歷歷たる罪業の隱沒を暴露し或は泥彈丸の詩にもよく表れてゐるし、寒山詩中には往々彼が非常な讀書家であつたことを隱約の間に仄見せてゐる。勿論彼の含蓄が何時如何なる處に於て爲されたかは全然不明である。箇中一物のとどむるなしと云ふのであるから此處に於ては一切の讀書を廢し只管內省思惟の生活を爲したものであらう。左の一篇の如きは彼が讀書の廣さの一班を知るにたるものであらうと思ふ。

寒山寺

琴書須自隨
祿位用何爲
投簪從賢婦
巾車有孝兒
風吹曝麥地
水溢沃魚池
常念鷦鷯鳥

安身在一枝

琴書須らく自らに隨ふ可しは列女傳より出づるものであらう。陵子楚王の聘に應ぜず、履を織りて生活し琴を抱き書を讀むの安全にして分を知る可きを其妻諫したと云ふの故事に依るのである。故に寒山は祿位（官吏の服）用ひて何かせんと云ひ、鋤を投じて賢婦に從ふと云ふ。風吹きて麥、地に曝すは、高文通の故事で後漢逸民傳より出づるものである。高文通は其妻田圃に耕する留守に、妻に賴まれて地に曝す麥の番をしてゐた。竹の棒をもち鷄の啄むのを逐ふてゐた。然るに彼は學を愛し讀書に夢中で麥は滅茶滅茶にされた。後大儒と成り王の招聘を受けたが病にかこつけて仕へず、魚を釣つて餘生を樂しんだと云はれるものであつて、これ等兩者は共に分に安んずる樂天安命の思想を表す詩句である。水は溢れ云云は范蠡が功成り名遂げて後の餘生を送る故事に由る。拾得がその詩に古今を談ずとあるは恐らく含蓄の深い寒山が語るところであらうことが、此の詩に依つて推察されるであらうと思ふ。

詩の中心思想とも云ふ可きものは、常に念ふ鷦鷯鳥、身を安んずるは一枝に在り、の結局で、鷦鷯は深林に巣うが、千萬の枝があるにかゝはらず巣を置くは一枝にすぎず、人間の社會生活に於ても一切の物質的欲望、例へば所有や從つてそれの手段たる榮達やの欲求を否定し、かゝるものの否定がやがて、一切の執着、迷妄（迷妄も執着の所産であるが）を遮斷して心境自ら佛の三昧境に入りかくて人間本來の生活の存するものたるを明かにするものであらう。

此の思想をもつと明確な形に於て表したものは左の一篇であらう。

寒山詩

爲人常喫用

愛意須慳惜

老去不自山
漸被佗推斥
送向荒山頭
一生願虚擲
亡羊罷補牢
失意終無極

これは前掲の拾得詩中、毎に今古の事を談ずの詩句の今を談ずる部分である。前述の古を談ずるの詩と對比して玆に少しく此の今を談ずる寒山の一面を吟味しやうと思ふ。尚拾得の寒山を訪ふて語り合ふたと云ふ、前掲詩中、「一世の愚癡の暁を見る」と云はれる兩者篇中の談論の内容の如何なるものたるかを推し知るを得るものである。

此の詩は實に古來から寒山詩中最難解のものとして聞えるもので、斯道の達士と云はれる人々に於てもその意の那邊にあるかを知る者はなかつたと傳へられるものである。

或は「古人呼爲寒山詩中最上一巳難處」と云ひ「是寒公諸言三昧中把諸史百子六經四書及佛典祖言中未嘗說及底賤哉下癡漢分明頌出、誠卷中最上秘訣也、顧夫非自賊軍隊裡來、不察賊兒奇計」或はまた「向所謂到卷中最上秘訣、我亦不能了知待可長之寒士」と云ふ如く、白隱禪師の如きに於ても此の詩の理解に苦しむところであつた。

九

元來寒山詩は道翹及び閭丘胤等に依つて、後に編錄されたもので、樹皮堂壁に書きつけられたのを蒐集するものと傳

へられる。所謂世の詩人流の如く稿を敲いて成るものではなくして頓氣の喚發するところ直ちに詩を爲したものである。寒山詩中卷頭に採錄された左の一文をもつて、私は此の難關を解く最初のよすがともしたいと思ふ。

凡讀我詩者、心中須護淨、慳貪繼日廉、諂曲登時、正驅、遣除惡業、歸依受眞性、今日得佛身、急急如律令。

寒山詩を讀む者は心中、護持淨盡たるを必要とし、眞性に歸するを要し、今日佛身を得なければ成らぬ。その間一點の垢塵を止むるに於ては正しき理解を得ることが出來ぬ。これ卷首に於て爲す彼が獅子吼であり、從て我等詩に望む者の深く注意を要するところである。かくて卽身成佛の三昧境にある者は漸く、急急如律令と云ふ。律令とは雷邊捷鬼で此の鬼の善く走ること雷と相疾速すると云ふ。卽ち寒山詩の理解はかくて紫電の閃光を感ずるごとく鋭き直觀に依つて詩と心とは相映ずる如く成る。必ずしも熟讀玩味に依つて理解を得るものではない。或は更に理解と云ふ如き分折的のものではなくして鋭き直觀に依らなければならぬ。

然るに悟道の達士とも云はれる白隱禪師の如き迄がその理解の困難を訴へ、寒山を待つにあらざれば了知するを得すと云ふのは如何なる譯であらうか。寒山自身が既に、上にも云ふ如く境地が佛の三昧境にあれば、電雷の走せるが如く直觀するを得るものとの注意がある。

私の考ふる處をもつてすれば、此の詩は何等困難なる內容を唱ふものではないと思ふのである。寒山詩は大部分淸淨なる心境を唱ふものであつてさながら惟れ佛の聲の如きものであるが、中に一味の低廻趣味を湛ふるものもあるのである。左に示すものはその一つである。

寒山詩

余見僧繇性希奇

巧妙間生梁朝時
道子飄然爲殊特
二公善繪手毫揮
逸畫圖眞意氣異
龍行鬼走神巍巍
饒貌虛空寫塵跡
無因畫得志公師

註

（僧繇は張僧繇、その畫く龍、眼睛を點ずれば雷鳴を聞き壁を破りて飛び去ると云はれる。詳しくは、列仙傳、歷代名畫記參照、道子は、列仙傳には、龍を畫けば、鱗甲飛び動くが如しとある。歷代名畫記には、道子と名づくる六朝隋、唐初代に作家は記されて居らぬ。吳道子は、彼よりはるかに時代を後にするものであるから勿論寒山に云はれる筈はない。佛祖綱目には左の如き記事がある。歷代名畫記には記されざる記事の故に、參考のために記して置く。梁武帝詔畫工僧繇、寫誌公像、僧繇下筆輙不自定、誌遂以指𠢐面門分披出十二面觀音相、或慈或威、繇竟不能寫誌曰、毘婆尸佛・蚤留心直至而今不得妙。云云）

詩は寒山の畫論の如きものである。列仙傳佛祖綱目等より出づるものであらう。前揭の琴書の詩と共に寒山詩中比較的低廻的のものである。

前揭最難解と稱されるものも此の種に屬するものであらうと考へられる。これは拾得の寒山寓を訪ふの、「曉見世愚凝」を彼がその事實を詠ずるものと考へられる。此の詩が解し難いと云ふのは、何等か深遠なものがあるのであらうと寒山詩劈頭の注意を忘れかゝる先入主觀に出發するが故であらうと思ふ。これもまた癡愚の嘆きである。何等か深遠なものがあらうと思ふは、然く思ふこと自體が既に深遠に對し執着する。癡愚の嘆きの根元は如何なるものであらうか。

云ふ迄もなく執着迷妄であり、或は所有の欲求である。これ等のものを一切滅盡して、はじめて癡愚の嘆を根絶するを得るのであらう。根絶してはじめて大我の境に入る。此の詩は言言癡愚の嘆に充ちてゐる。

　或る男衆の如きものがあつたと假定する。男衆は或る村落の豪家に仕へてゐたのであらう。男は忠實の故に主家の谷遇を受ける。これ愛意である、然るに男は老行き軈ては身體の自由さへ失ふてゆくであらう。舊の如く主家に忠實ならんとしても身の自由を失ふ老耄の爺ではそれも叶はぬのである。主家は益なき老耄の爺を養ひ置くを悦ばず成るであらう。前の愛意はかくて冷遇排斥と變る。愛意は忽ち慳惜と變ずる。老ひ去つて自由ならず、漸く推し斥けられるであらう。即ち端數な涙金を與へて主家ではこれを追放する。送られて荒山の頭に向ふ。一生の願ひ虚にして擲つ。男は實は生涯主家に居られるものと憶ふてゐた。男は律義の故に然く仕へ、然く願ふたのである。然るに冷酷慳貪の主家は老ひさらぼうた彼を放逐した。今は、はや生來の願も地に擲たれ天地廣き中に老軀を置くにその處もなくなつたのである。失意は終に極まりなし。と云ふ。

「亡羊罷補牢」の羊の亡ぼすは弱者を虐ぐるの意であらう。牢は此處には男の主家なる大資産家を諷するのであらう。此の一句は、起句の「爲人常喫用」とともに全體の記述的なのと異り寒山の思想を表すものであり、詩に於て表現されたる主眼點である。即ち人は常に喫はなければ成らぬ。寒山も喰ふために雨の日も國清寺に殘食菜滓の竹筒を取りに行つた。喰ふことは、人間の物質生活の第一步である。人間の物質生活の第二步第三步とも云ふ可きものは所有の生活である。所有とは執着である。我執と云はれるのである。

　人間の物質生活に於ては喰ふことのみは何時如何なる處に於ても正しいし、且つその故に肯定される。軈てそれが進んで所有の生活に致るとき、正しき人間生活は果然根本的な錯誤に陷入る。一切の執着や迷妄は此處に基因するからで

ある。之を小我と云ふのである。小我は所有欲の別名に過ぎぬ。所有の對象は所有さる可きもの即ち物質である。小我と物質とは不可分的な關係に由つて立つ。此處に修羅道があり、一切の罪業、惡虐の根元があり、痴愚の喚をなすの根本的な原因がある。「爲人常喫用」は、かく人間の物質生活に於て喰ふことの一事のみを先づ起句に於て肯定し、「亡羊罷補牢」に至つて、弱者（羊）を屠げ（亡）て飽くところなき所有欲を充實（補牢）せんとする小我の生活物質生活を否定（罷）してゐるのである。彼はかゝるもゝの否定に依つて、大我の生活、大死一番の生活、即ち佛の三昧境に一切の在家俗縁の者即ち人類全體が入る可きものたるを暗示してゐるのである。何となれば所有や從つてそれと不可分的な小我や從つてそれ等の具體的形式たる物質的生活の否定は、或は斷氣徹底と云ひ、大死一番と云ひ、即身成佛と云ふ如き高き精神生活の肯定と成るからである。

寒山は田園に牛豎子と戲れ遊んだ。寒山詩は他の大半を主觀的素材に出るに反して此の一篇のは客觀的素材を以てした。鶺鴒の詩や張僧繇の詩等は後者に屬する者である。恐らく拾得詩の古今を詠ずとあるものは、かく史傳に出るものか、田園村落の遊戲中に得たかゝる實話であつたことがかくて漸く瞭かと成つたことと思ふ。必ずしも玄妙深遠の詩のみが白隱や和漢古今の、悟道の達士の人々の云ふ如く、寒山の全面目ではなかつたことが知られるであらう。

十

臺州の主簿朝儀大夫閭丘胤は京師を發て東南に向ふ。行程五百七十八里、日に繼いで臺州丹邱に着任した。胤はかくて豐干の語るところに從つて國清寺に聖賢を訪ふのである。道翹は敬恭の意を表して迎へ招じた。胤は、豐

干禪師は在すかと訊く。

「豐干禪師は院の經藏の後に小室を結び住まはれたが今は住む人とてなく、ただ一疋の虎のみが時々此處に來て咆吼するばかりです。」と道翹はそれに答へた寒山拾得の二賢士は在はすかと胤が更に訊く。

「寒山と拾得の二人はつねに厨房の中に居ります。」と答へた。やがて道翹は立つて胤を豐干の舊居に案內した。院の後に往き房を閉けば寂閑たる中にただ默々たる巨虎の足跡を見るのみであつた。

道翹は後を顧て伴ひ來る寺僧寶德に云つた。

「禪師在住の日はどう云ふことをしてござつたか」

寺僧寶德は恭しく禮して答へた。

「豐干在す日はまだ米を舂いて供養に攻めて居られました。夜は詩頌を諷誦して自ら樂しんで居られたやうすでございました。」

胤の一行はぞろぞろと厨房の方へ進んだ。內に入れば寒山と拾得とは竈の前に火に向ふて大笑してゐる樣が見られた。

胤は恐れ畏みて進み恭しく佛にするごとく篤く禮拜した。

然るに二人は突如胤を喝し自ら相ともに手を把り、げらげらと笑つた。と思ふ內にまた相叫喚し合ひ「豐干は饒舌だ、饒舌だ」と罵つた。

閭丘胤は頭をあげる遑もなく滿身に氣味惡き慢罵と嘲笑を浴びた。

「お前は彌陀を識らずに我を禮して何に成るんだ。」

二人は手を把りうるさいと云ふ顏で寺を走り出でて行つた。僧徒は奔り集まつて來た。訝かり驚いて彼等は貧人と貴

人の主客顚倒した對面の樣を見たのである。何故に尊官が二貧士如きに禮をするのであらうかと彼等は囁き交した。

後に殘された胤は嘗て豐干が自分に語るところの言葉を思ひ起した。彼は突嗟に吏を奔せて文殊普賢の後を逐はせたのである。しかし二人は急走して去り、吏官は手を空しうして歸つて來た。胤は深く失望して溜息をした。逃げ去られては今更の如く渴仰の念の新たなるものがあつたのである。彼は道翹を顧て云ふ。此の二人は肯て止まるものかどうかと。胤は二人の房を尋ね覓めて喚で寺に歸らせ安置せしめるやう云ひ置いて悄然として廳へ歸つた。

胤は皈り來つて遂に淨衣二對を製し、香藥等を特に送り供養せしめた時、二人は更に寺へは皈つて來なかつた。使の者は辛くも寒石山中寒山の道を辿り、巖に從ふて窟に至り禮拜して淨衣香藥を奉らんとした時、寒山之を見て高聲に「賊！賊！」と喝破し退いて巖穴に入つた。

「汝諸人に報ひ、各々努力せよ！」

寒山は此の言葉を云ひ畢るとともに、窟中に其の姿は消え去つた。其の瞬間巖穴はおのづから合し使者は再び追はんとして之を追ふに由なく呆然として立つのみであつた。

附記　因に拾得の後と傳へらるるものは左の記事がある。

後有僧採薪南峰、距國淸寺東南二里、遇一梵儀持錫入巖、挑鎖骨取拾得舍利、乃知入滅于、此因號巖爲拾得。

拾得岩は天臺山中群雲峰にあり、拾得遷棲の所と傳へられるものである。

遊歐雜記

歸來(一)——藝術の社會的地位に就いて

阿部次郎

以上私が例として引いて來たものは、主として德川時代の中葉以後に於ける平民藝術である。明治大正の文化が最も直接な遺産として祖先から繼承したもの丶一つ——吾々が意識的には如何にこれを脫却し得たと自負するにせよ、冥々の間に深く吾々の血肉に喰ひ入つて、猶無意識の奧から吾々の生活を支配してゐる一つの文化的勢力である。此等の藝術を一概に衰世の藝術として——所謂「亡國」の藝術として片付けてしまふのが文化史的武斷に過ぎることは、その依然として現在を動かし續けてゐる歷史的な力(ポテンツ)を見ても既に明らかであるであらう。私がその對照として想起するものは、曾て京城で聽いた妓生の歌である。彼等が普通太鼓に合せて酒席で歌ふあの何とか云ふ歌である。私が受けた印象から云へば、あれこそは本當に亡國の歌——活力を失つた、虛脫した、生彩なき魂の、單調な、生欠伸のやうな呟きである。(私はただ自分自身の印象に基いてこれを云ふ、あの歌が朝鮮人自身にどういふ感銘を與へるかは私の知り得るところではない。このやうな評價がただ私自身の無知と無識とを告白するに過ぎないならば、私は寧ろそれを悅びとするであらう。云ふまでもなく私がこれを云ふは朝鮮の同胞からその民族的自信を奪はうとするからではない。慶洲石窟の諸佛

や李王家博物館に於ける二三の肖像畫を有する朝鮮民族は決してその藝術的可能性に就いて悲觀するを要しないであらう)。これに反して德川時代の歌謠や浮世繪には、もつと內に籠る激情と活氣とがある、煮えたぎりつゝ底から噴き出して來る何ものかがある。其處に表現される憂愁や絕望には、縱令形而上的宗教的の意味に於いては、何の人を輝かすに足るものを見出し得ないにもせよ、猶その暗さには濡羽色のつやとてりとがあり、その薄明には溫かに人の心に觸るゝ柔かさとなつかしさとの籠りが感ぜられるのである。その激情、その底力、この光澤は抑も何處から來たか、而もこの激情とこの底力とこの光澤とが何故にあのやうに不思議な奇怪な姿をとつて現れなければならなかつたか──此處に吾々の考へなければならぬ問題がある。

8

一體德川時代の文化は、捕捉し難く、名狀し難く、況して極めて敍述し難き、一種變妙なる Ragout (ごつちや煮)である。畠は同じ畠育ち、河は同じ河生れながら、其處には、紫蘇も蓼もどくだめも、鮫も鮹もおたまぢやくしも、赤蛙も蝦蟇も縞蛇も、「闇汁なし」渾沌として一つの鍋の中に煮られてゐるのである。その一々の味ひを味ひわけることの出來る銳敏な感覺、その毒になるものと藥になるものとを過たず鑒別する理性、此等のものの一切に通ずる根本精神を摑み出してこれを簡勁に表現する悟性と想像力──これ等一切の能力を併せ有つことは、如何なる德川時代にとつても恐らくは困難なことであらう。況して自らこの困難な仕事に當ることは、斷るまでもなく私の任ではない。併しこの不思議な文化に愛着と憎惡とを持ち、これによつて樂まされ又煩はされる運命を持つてゐる限り──換言すれば、血によつてこの文化に結び付けられ、この文化を礎地として自己の創造の營みを遂げるべく餘儀なくされてゐる限り、如何なる素人

と雖も亦彼自身の德川時代觀を持つてゐなければならぬ。私が今此處に私自身の覺束ない德川時代觀を一言するのは、それが問題の出發點から生ずる必然の要求であり、問題の進行にとつて避くべからざる自然の經路であるからである。

9

私の見るところによれば、德川時代は政治上社會上の特權を持つ階級と、文化上の實力（その根柢には經濟上の實力がある）を持つ階級と、この二つのものの分離對抗せる時代、さうして結局前者の敗北と後者の勝利とによつて終る時代である。この根本的社會關係が一般にこの時代の文化の特質と進行とを規定する。この時代の創造的文化は、專ら（悉くといふのではない）後者によつて、又後者の間に、產れ出でた。それは兩者の相互影響に始まつて結局後者の文化の中に統一された。併して創造的文化は、これは產出せる階級の政治的無力と社會的劣位とによつて著しく特色づけられる。この時代の文化は日本に於ける文化受難史上の最も注目すべき一節である。吾々はこのやうな受難記念標として德川時代の藝術を所持する。それは受難によつての勝利と墮落とを同時に標識する。それは衰亡の藝術ではなくて新興階級の——虐げられつゝも內より育つ力の主張を如何ともすることが出來なかつた新興階級の——へし曲げられた藝術である。德川藝術の特徵と偏畸性とは、藝術の社會的說明が可能な範圍內に於いては、大部分この理由によつて解釋されることが出來るであらう。

10

士農工商は德川時代に於ける階級の種別に名けられた名である。併しこの名稱は、この時代のオーソドックスな觀念

に從へば（室鳩巢その他の迷護な學者の思想は例外である）、單にその種類別けを意味するのみではなくて、又 Rangordnung（位附け）を意味するものであつた。支配階級としての「士」が最上位に來ることはこの時代にとつては自明である。その次に來るものは、「なくてならぬもの」を生產して四民の養を分擔する「農」である。百姓は國の寶である。「工」は「缺くを得る」も生產する者として農民に一籌を輸する。併しそれは猶何物をも生產することなくして徒らに金錢の利を爭ふ「商」の上に立たなければならぬ。商人はその營業を許されることそれ自身さへ既に支配階級の寬容による「難有き御取計らひ」である。彼等は四民の最下にして、たゞ僅かに「穢多非人」（當時の言葉を用ゐるのである。私自身が此等の階級の差別を是認するのではないことは斷るまでもないであらう）の上に置かるゝのみである。併しこのやうに政治上社會上の表向きに於いて、四民の最下に置かれた「商」こそ、德川時代の始まる前に於いて既に相應の實力を蓄積せる階級、この時代の進行につれて益々社會上の實力を發揮せる階級、さうして最後に武人の專制を破壞する社會的（政治的ではない）爆藥となれる階級であつた。德川幕府の政治的組織から云へば、最初からこの組織にとつて最大の危險を孕んでゐるものはこの階級であつた。併し「士」といふ階級の組織と平衡についてはあれほどの細密な注意を拂つた德川家康の後繼者、又「農」の支配に於いても極めて怜悧にして巧妙な政策を遂行した德川氏の執政の間に於いても、「商」の危險を洞察して根本的にこれに具へることを考へた政治家は殆んど一人も居なかつたやうに見える。輕商の思想が次第に重商に向つて奔流しつゝある時代の潮流に逆行する。前者は全力を盡して逆行せんとしつゝ不知不識この潮流にひきづられ、その渦卷の中に捲き込まれる。さうして遂に武士專制の制度は崩壞に歸せざるを得なかつたのである。

文學博士 新村出著

南蠻更紗

（四六判上製）

定價貳圓五拾錢
送料十七錢

十四版

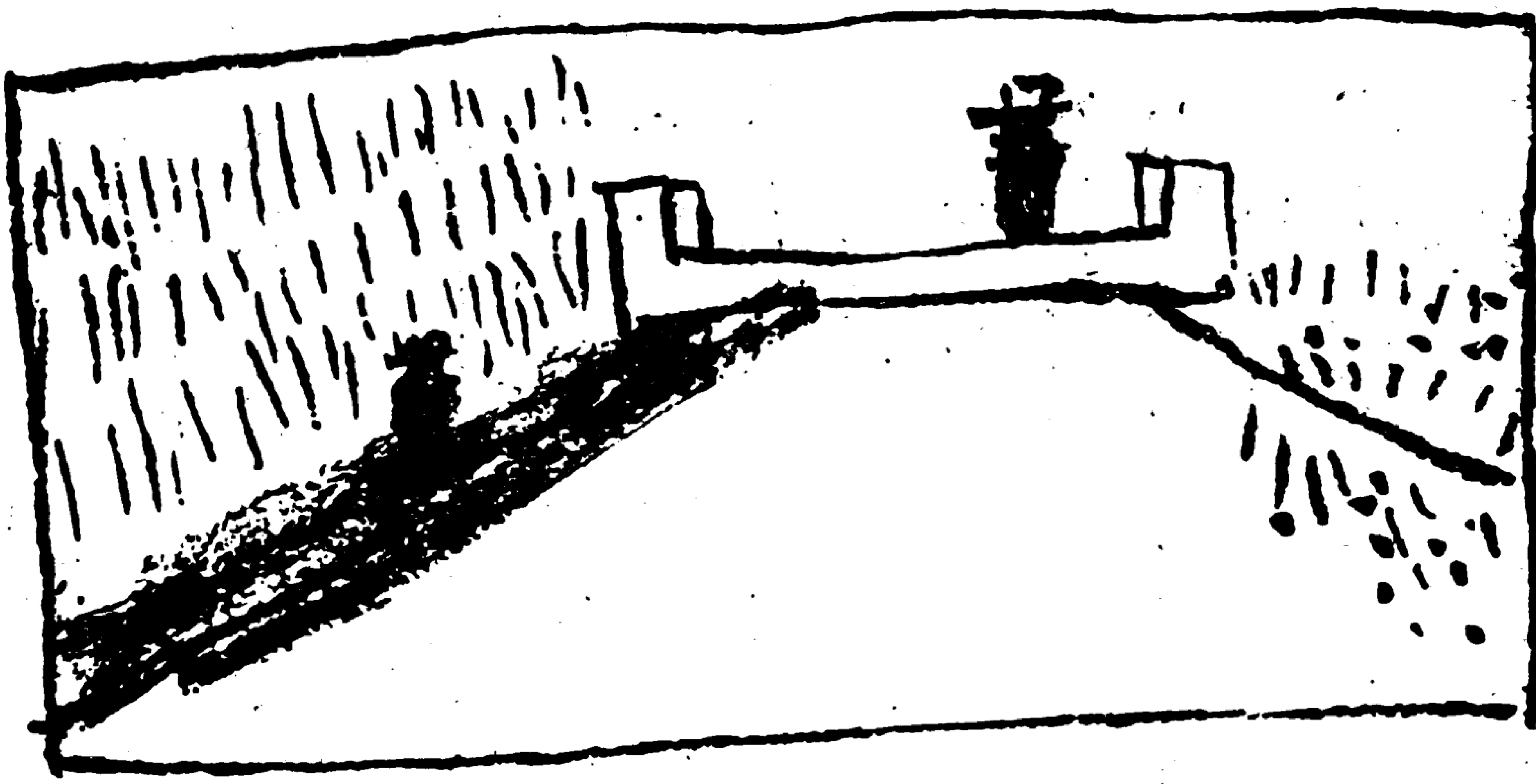
美文家として、南蠻研究の第一人者として知らるる新村博士の近業である。博士が珠玉の如き麗文、斷想にて幾多面白き題材を捉へ來りて明治以前の奇しき文化の跡を訪ねた近來類稀な文献にて、讀み去り讀み來りて身は其の時代にあるが如く、卷を掩ふ能はざるのものである。近來の好史家のみならず家庭、學校の必ず一本を備ふべき參考書であり、趣味の讀み物である。

◆雪のサンタマリヤ◆切利支丹文學斷片◆主聖聖範の舊譯本◆切支丹宗の遺物◆日本最古の銅版畫◆南蠻趣味と和歌其他（三百年前の回顧）◆南蠻に關する俚諺その他◆貞宗と切支丹◆烟草と煙管◆時計傳來の歷史◆加留多の將來と流行◆近世輸入服飾品と其名稱◆ちやるめる◆日本美術史上の新研究◆日本文學の海洋趣味◆海賊の話◆大西洋上より◆長崎再遊◆日本人の眼に映じたる星◆星に關する二三の傳說◆昴星讚仰◆晝夜讚美の女性歌人◆花の名三つ四つ◆「ふれふれ粉雪」◆徒然草とその口譯◆圖書館の一隅より◆地獄小話◆鷹狩◆鋤燒物語◆語原雜話◆エスペラントの好望◆パクーニン來航の事など◆去來一家の事

東京芝愛宕下町
振替東京八四〇二

改造社

電話高輪四九九三



崖の上

中條百合子

（一）

彼等は引越した。家は、吉祥寺の前で、醫者の高い煉瓦塀と葉茶屋の羽目との間の狭い露路の奥にあつた。兩親の家まで、吉祥寺を抜けると十五分ばかりで行けた。仲子は、其方へ風呂を貰ひにゆくことにした。

彼等が移つたのは、八月のひどく暑い日であつた。仲子は、家さがしに毎日歩き廻りすぎたので、熱を出し、珍しく床について居た。引越しの日も、彼女はまだ寝床の上に居、庭から、俥夫が本箱を一つづゝ運び出すのを眺めた。荷が行つて仕舞つてから、仲子は、少しふらつき乍ら、着物をなほした。母は、獨り二階の縁側で長椅子に長くなつて居た。凝つと白い團扇を胸のところにあて、軒先から深く繁つた梧桐の青い葉の照りの中に沈んだやうにして居た。仲子は、默つてその傍に佇んだ。母も默つて居た。餘程經つてから、多計代は、娘の方を見ずに訊いた。

「どんなだい、もういゝのかえ?」

「大抵いゝらしいわ」

伸子はやがて

「―ぢやあ……」

と云つた。母の顏ぢゆうに、引歪むやうな苦しい表情が現れた。伸子は、自分も胸から何かを引剝がれるやうな苦痛を感じた。

「…………行つて參ります」

迚も他の訣れの言葉で挨拶は出來なかつた。それでなくてさへ伸子は、現に今は涙を落した母を二目と見られず、彼女の、咳拂ひとも何か云はうとする前ぶれともとれる啜び聲を後にし、どし／＼階段を降りた。力を入れ、一足一足降りる度に涙がこぼれた。下に降りきると、暫く堪へ難く感じ、彼女は手摺の柱に頭を押しつけて泣いた。佃が歸り、他の家族と一緒に暮すやうになつてから、生活は誰にとつても、餘り愉快なものではなかつた。伸子は、本當に自分等の家を求めた。多計代は、一種の怒りで、佃が永く彼女の家庭に居ることを拒んだ。別つて暮すのは元より當然で、その上、皆が希望して居たことではないか。それだのに、不思議なものだ。我が家を去るといふことは、此樣に悲しく辛い。――眞實別離といふ感が、伸子を魂まで貫いた。現在建つてゐる構へではない、建てなほし前の、又その前の、まだ裏が畑で茅屋根の臺所があつた時分の、稚い、古びた家の柱まで、別れて出て行かうとする自分を愕いて幻の中から見て居るやうに感じた。猶いやなのは、自分が此處で過した幼年、少女時代の思ひ出のすべてが、此を境にあとに遺され、自分であつて自分ではない元氣な子供のやうに矢張り此處いらを驅け廻り、親しみ棲み續けさうに思はれることだ。佃は新しい家に向つて進んで行く。顏も其方向に据つて居る。けれども、心は佃の上でくるりと向き換り幌の間か

ら徐々遠ざかる親の家に向つて、いつまでも手をふるやうな心持を、仲子は經驗した。

家を持つ爲、彼等は個の親類から借金をした。貸家が極拂底な年だつたので、彼等は高過ぎる家賃を出しながら、門もない、裏小路の其那家しか見つけられなかつた。

引越しのごた／＼が鎭り、やつと生活らしい生活が始つて間もなくであつた。或午後、仲子は椽側に出てウクレリーを彈いて居た。ハワイの土人が、頸から大きな花環を吊下げ乍ら謠に合はせて搔き鳴す小さいウクレリーは、軟く低い何方かと云へばメランコリックな響を出す。粗末な印刷の樂譜を椽板の上に置き、、胡坐を組み、譜と首つぴきで、仲子は變調の多い原始的な民謠を稽古して居た。

ハォ、ハエ、ハエ……

長く引張つた母音に合はせ、ハォ、ハエ、ハ二……と三重音の繰返し(リフレイン)をつけるところなのだが指がうまくかんどころを押へず、どの絃かゞきつと半音ぐらゐずつた音を出す。仲子は、何遍も頭で拍子をとり乍ら、一二三、一二三とやりなほした。根氣よくやつて居ながら、仲子はさう大してその稽古を樂しんで居るのでもなかつた。時間のたつぷりある獨りぼつちの人間が、九月の晝過、樂器でうさ晴しをする時のやうに、うさ晴しをして居ると云ふばかりだつた。羽目板一枚で密接して居る隣の家からは、汗一杯で癇癪を堪へて居るらしい中年の女の聲がして居た。

「坊ちやん、いゝお子、おとなになさいね、母さん」

何とかといふのが聞えた。バシヤバシヤ水か湯を跳ねかす音がした。其を制するらしく遠慮勝な支那語で、母親が息子何か云ふ聲も聞える。隣家には、仲子がまだ顏を合はせた事のない支那人の一家が、日本人の家族と住んで居た。緣側の先は七坪ばかりの庭——僅か數本の櫻、檜葉などの植つた空地で、すぐ目かくしの下が崖になつて居た。崖下には、

職工の家が細かく澤山在つた。彼方は、小石川の高臺になつて居るので、午後の斜光に眩ゆい土藏の白壁や、こんもり樹木に覆はれた涼しさうな露臺の柱列の端などが遠く望まれた。碧い空もその間に廣く眺められた。風があるので雲が高臺の方へ旗のやうになびいた。折々、かぼそい支那語が聞える。仲子はその中に胡坐で、上手にならないウクレリーを掻き鳴し續けた。目的のわかなない、貧しいコスモポリタン雰圍氣が四邊に漂つて居た。ぼんやりした憂愁もある。―ーが、氣がついて見ると、その憂愁に似た感情は、決して、たゞ風景や支那語のせいばかりではないのは明らかであつた。近頃は、その日に限らず、仲子の心のしんに、さういふ霧のやうなものがつきまとつてゐるのであつた。

（二）

仲子は、後頭部を柱に靠せ、意味のない和音を惰性的に掻き鳴らした。彼女の心には、最近いくらかづゝ變化した自分の氣持が、種々連絡なく映つて來た。彼女の胸の底には、漠然と、然し日夜、結婚生活といふものは本當に斯ういふものなのだらうかといふ疑ひが生じて居るのであつた。原因は何處にあるかと云つても、其等はひどく奥深いところにある故か、又は、極く纖細な氣分の組合はせでゞもあるのか、簡單に一口で納得の行くやうに纒めることは自分にも出來なかつた。何だか全體に、生活全體にぎごちない、狹苦しい、無趣味なものが詰込んで居るやうに感じられるのであつた。仲子にとつて、其感じは、最も思ひがけない、厭なものであつた。是まではすつかり違ふ周圍で、自分達だけの生活で、仲子は暢々と新らしい經驗を吸ひ込みたいと思つて居た。實際は却つて逆に感じられた。如何ういふ理由か、仲子は、日常生活に於て、今まで通り樂に思ひ切り手足が動かせない窮屈を感じた。突然、よく牧場で牛などを圍つて置く柵、あゝいふ柵で四方を繞した仕切の中で、夫といふ威張つたものと向ひ合つた自分を發見したやうな不

安、居心地わるさを感じるのであつた。そして、その夫は、手をふれず繋ぎつけないが、妻はもう絶對に逃げ出す意志など持つことなく、柵は破れないものだと、髮の毛の端でまで知つて居る。横を向いても、後を向いても知つてゐる。

さう云ふ風な居心地わるさ。…………

仲子は、佃がいやで愛さなく成つたのでは決してなかつた。佃が急に薄情に成つたのでもない。彼等は、一緒に散歩した。一緒に臺所をやつた。互に亢奮して抱擁した。然し、其等は、搖れ動き、輝く生活の波の上にとばしる充實した波頭ではなく思はれた。處々で流れを分ける橋杭のやうなものではなからうか。生活は平べつたく生彩なく流れて、何處に行かうとするのだらう。

仲子は、はつきり自分達の生活から、初めの頃の光輝が失せようとして居るのを感じた。より深く互に愛さうとした熱、邪魔をとりのけ、道を眞直につけやうと努めた協力。仲子にすれば、幾年經たうが無くてはやり切れない其等の氣の張りを、佃は、家を持つと片つけて何處かに藏つて仕舞つたらしい。それと共に、光り添ふ若々しい鼓動が日常生活から薄れかけた。仲子は、凝つと恐怖をもつて褪せてゆく熱情を見守つて居ると云へた。何か大切な、生命あるものが自分達の間から消えかけて居る。消えあとに如何那ものが現れるのか、自分は何をその代りとしてよいのか。その見當はついて居ない。仲子は、一彈き力を入れて四本の絃を一時に搔き鳴らすと、そのまゝ樂器を置いて立ち上つた。いつの間にか、つい近くに迫つて居る結婚生活の危期を、仲子は犇と身にこたへて感じた。

仲子は、髮をなほし、台所口から錠をかけて外に出た。大通りでは、電車が喧しい軋りを立てゝ、埃の中を走つた。花屋の硝子戸の中には女郎花の束が積まれ、吉祥寺山門の甃のところでは三人の少女が、むきな顔つきで唄に合せて毬をついては脚の下を潜らせて居た。彼女は、悠くり鐘樓の傍を、裏通りに拔けた。斜にもう一筋大通りを橫切つて、靜か

な屋敷町に出た。彼女は氣をかへに、散歩がてら、母やつや子に會ふ積りなのであつた。

門の修繕で、左官が入つて居た。木の船に漆喰のこねたのを、詰らなさうに小僧が掻きまぜて居た。つや子は、書生の手につかまり乍ら、氣をとられた樣子で其を見て居た。仲子は遠くからその形恰を見、思はず笑つた。書生が見つけ、つや子の手を引つぱつて何か云つた。つや子は、ひよいと顔をあげて仲子を往來に認ると、

「やあ、お姉ちやまあ」

と、とびついて來た。

「どうした？お母ちやまは？」

「ゐらしつてよ。おねえちやまゝ、何故もつと早くいらつしやらないの、こないだ、じき來るつて云つたのに」

「うん……」

仲子は、つや子を先に立てゝ、職人が撰げた菰や板切れの間を拔けた。つや子は、姉の袂の先を引かつぐやうにして歩き乍ら、頻りにじろ〳〵仲子の手元を見た。

「はあ、見つけたな、おづるさん」

「うん、僕ちやんとわかつたの、だつて、この間仰云つたでせう？」

「――でもこれは違つてよ」

仲子は、空惚けて云つた。

「たゞの古新聞よ」

「嘘う！わかつてよ、ちやんと見えるわよ、コドモノクニよ」

玄關に來ると、女客の下駄が揃へてあつた。客は、何處かの夫人であるらしい。伸子は、木戸から庭に廻つた。西洋間の窓から、小じんまりした束髮の後つきが見えた。その窓々を眺めると、伸子は或感じを受けた。七月、佃を、佐佐に入籍させる、させないといふ事で兩親と衝突した時、伸子は、西洋間に來、その窓のところで汗と涙とを流した。伸子は、自分の激しい言葉をはつきり思ひ出した。

「佃が佐々になつたからと云つて、人間が變るものではないし、價値を增すものでもないわ。萬一、馬鹿な誰かゞ、それで頭の一つも餘計に下げるのだつたら、私は猶不贊成なの。何だつて勿論さう思ふに定つて居てよ。第一、私が愧しくて堪らない」

「先々の爲を思へばこそ云ふのに……次の代になれば、お前は他家の人だよ、誰の世話になることも出來ませんよ」

西洋間に立つて來ると、父がじき入つて來た。彼は、燈火もつけない部屋の中を幾度も彼方此方して居たが、やがて背を向けて居た伸子の側に佇み

「あ――」

と、しんのしんからしい溜息をついた。そして、娘の肩に手を置かんばかりのしみ〴〵とした調子で云つた。

「いつも、家庭のトラブルを惹き起すのはお前だ。――もつとテンダア・ハアトになれないか――兩親を歎かせたり、自分を苦しめたりする主張なんぞすてちまへ。平和に暮さう、え? 平和に暮さうよ!」

あの、穩やかさうな、今は翡翠の束髮ピンのちら〳〵する窓際で、ついこの間、父のこのやうな言葉を聽いた。――花壇でつや子と茶かくしをして居ると、客を送り出した母が、窓から伸子を呼んだ。

「二階へおいでな」

昇つて行くと、二間ずつと通して襖をあけ放ち、廣い方に緋の毛氈が敷いてあつた。大きな盆に、繪筆や筆洗繪具皿などをのせてある。多計代は、毛氈の上に坐つて唐紙を截つて居た。仲子は、その光景を見ると

「おや」

と云つた。

「繪の御稽古？泉さんがいよ／＼習つて下さるの？」

「あゝ、何だのかだのと例によつてなか／＼捗取らなかつたのだけれど、やつとね。今日で二度目さ、この年で始めたんじやあ、どうせ本ものになりつこはないから、せめて色紙ぐらゐ間誤付かないやうになれば大出來としないじやあね」

これ迄、久しい間のお相手であつた仲子も居なくなつたので、繪でも習はふと思ひ始めた母の心持を、仲子はいとしく感じた。

「それで結構ですとも！打ちこんで稽古するものが出來ただけで萬歳よ、見せる爲めじやあないんだから。――どれ！この前のは……一番始めの………」

「何にしろ、何年も繪筆なんぞ持たなかつたから、からきしさ。小藪さんの頃からずつとやつて居たら、どうしてこれだつて今頃は、小何とかだよ」

多計代は、晴やかに大笑ひした。ずつと、ずつと聞かない、屈託なさで笑つた。仲子は、繪の稽古が其那にも心に影響を與へるものかと、刺戟を感じた。仲子は以前から、母が和歌でも熱心に、本氣でやればよいと思つて、勸めたこともあつた。その方に却つて穢がなく、繪になつた。學校時代の若い時、野口小藪に好意のある指導をされた、それも因緣

になつて居るのだ。多計代は六色紙ぐらゐに截つた唐紙に竹を描いたのを見せた。

「どうだい」

そして、自分も傍から覗き込んだ。

「こうと頭では分つて居る積りでも、いざとなると筆が何ともいふことをきかないでね」

「ハ、、まるで十年もおやりになつたやうねハ、、、筆がいふことをきかないと云ふ程進歩なすつたの？もう？」

「又ひやかす！どうせお前は偉いよ。——それは冗談だがね」

多計代は、泉さんの繪について二三批評した。

「如何う思ふかい？　少し氣魄が無さすぎるだらう、私は玄人になり過てかぢかんだやうなのは嫌いさ」

伸子は、違ひ棚の下に、見なれない螺鈿の小箪笥——薬箪笥にでも昔使はれたらしいものが置いてあるのを見つけた。

近よつて見た。朝鮮邊のものらしく、大きい柘榴の實の模様に象眼した貝の色が深味もあつて、素晴しく立派であつた。

「いゝものね、いつお買ひになつたの」

多計代は、竹の清書でもするのか、片手を毛氈について筆に墨をふくませ乍ら

「え」

と生返事をした。

「どうれ？　あゝ、それかい、綺麗でせう、例によつて父様のどらさ。私の繪具箪笥にしろと下すつたの」

「ほう………」

伸子には、夜、父がわざと知ん顔で其大包みを抱へて部屋に入つて來た様子が見えるやうであつた。

「相變らずのソェイスフル・ハズバンドでゐらつしやるわね……親切にしておあげ遊せよ、本當に」
「……私も近頃はさう思ふよ」
多計代は、首を曲げて自分の描いた細竹の枝を眺め乍ら、緩くり云つた。
「近頃は全くいゝ父樣さ、私もお氣の毒だと思ふようになつた……相變らず癇癪はひどいけれどね……」
「元からいゝ夫ぢやないの」
「若い頃の氣むづかしかつたことゝ云つたら！伸ちやんなんか知らないさ。……だけれども、まあれで父樣もごく純な人だつたから持つて來たのだね……今になつていろ〳〵男の人を見るとつく〳〵さう思ふよ……仰なんかとは比べものにならない純粹さがあつたよ確に……」
運筆につれ段々形がついて來る繪を眺ながら聞いて居た伸子は、率直に、女らしく自分の夫自慢をする母の調子の朗さに、愉快を感じた。だが、ほんのぽつちり、極ぽつちり佗しくないこともない。——伸子は、自分が姉になつて、妹の罪ない夫自慢をきいて居るやうな幼りを瞬間感じた。
「……まあ何ね、父樣があれだけ愛してゐらつしやることが確だから、母樣もいろ〳〵强さうにして居らつしやれるやうなものね。土臺が大丈夫だから、安心してその上で跳ねられる……さうぢやあないこと？」
「さあね……そんなものかね」
階下で、二人は茶をのんだ。空也の話をして居ると、如何うかして喉がいらつき、伸子は顏を顰めて咳拂ひをした。するると、茶飲茶碗を口の傍へ持つて行きかけた多計代が、手を止めじろりと伸子を見た。
「おや、そつくりだこと！」

仲子は、無邪氣で訊きかへした。

「なにが？」

「咳拂ひがさ、お前の。俶もそんな、乙う氣取つたやうな咳拂ひをするよ」

仲子は、漸い辛うじての薄笑ひで唇を歪めた。

「……いやあだ偶然よ」

「さうぢやあないよ、そつくりだよ、だつて………」

仲子は、厭はしさうに、然し穏やかに云つた。

「さう一々神經質に検査なさるもんぢやあないことよ、私は何の氣なしにするんだからね」

仲子は、和一郎が此頃凝つて居る寫眞の、靜物印畫を一枚貰つて歸つた。

(三)

其日夕飯の時、仲子は俶に話した。

「今日はね、ぶらりとおひるつから動坂に出かけたのよ、そして一つ新しい發見をして來たわ」

俶は、大して興味もなささうに

「へえ」

と云つた。

「なに」

「母様についてよ、少し違つた考へかたになつたの。これまで、私子供の時からの癖で、母様の云つたり仕たりなさることを餘り重大にとり過て居たのかもしれないと思ふのよ」

伸子は、抽象的に、今日印象を得て來た母の心の單純さを説明した。

「だから、いろんなものが——優しさでも、意地わるでも、その時々によつて聯絡なく、反射的に出るのね、きつと。どうしてやらうとか斯うしてやらうとか云ふやうなものはないのよ、さうお思ひなさらないこと?」

伸子は、勤坂から歸る道々其等のことを考へ、平和に似た心持さへ感じた。母との交渉は、彼女にとつて絶えざる重荷であつた。そこに、すうつと、ひどく理解を單純にする見地が出來たやうで、伸子は淸らかささへ感じた。佃もさう分れば、氣の持方も違ふだらうと、伸子は樂しい期待をもつて、其を話し出したのであつた。けれども、彼は、無感動の狀態から出なかつた。彼は、小楊子を使ひ、額の上に皺をよせて斜に伸子を見上げ乍ら答へた。

「僕は批評はしませんよ」

伸子は、夫を見た。

「批評ではなくよ、見かたよ。どうせ私共は無關係ではゐられないんだからなるたけ賢い理解を持つ方がいゝと思ふのお互の爲にも………好意のある、けれども、うはてな心の持ちかたね………」

「——まあ、時が何とか解決するさ」

さう云ひ乍ら、彼は顏に一種特別な——餘り高貴でない表情を浮べて、兩手の指の節々を一つ一つぽきぽき鳴した。

伸子は、眼を逸し、苛立たしいやうな、切ないやうな顏をした。元より、佃が、一般に人間的興味のある活々した話題を好まないのが、伸子にとつて不滿なのは明かであつた。が、其にも増し、彼が、氣のない、一寸面倒くさい時、ぽき

く指頭の平たい無骨な指の節を鳴らす癖が、仲子には堪らなく厭なのであつた。彼は、ごく近頃其を始めた。その動作を見、骨の鳴るのをきくと、仲子は肉體的の苦痛を受けるやうに感じた。眉間が痛いやうであつた。いつでも、

「あゝ、やめて！　お願ひ、やめて！」

と叫んだ。（恐ろしい。彼も指をぽき〳〵折る。カレーニンも、冷淡な、いやな顔をして机の前で指を鳴した。彼はカレーニン的なのだらうか？どこか？）

仲子は、今も衝動的に、やめてと云はふとして片手を延した。が、譯の分らないものに制せられて默つた。もう一度遣るだらうか。――仲子は、變に他處々々しい、暗い、苦痛を待つやうな氣持で、個の手を見守つた。然し彼は、心付かず立ち上つた。そして、机の前で、勤め先から持つて來た風呂敷包みを解き出した。仲子は、隧道を滑り拔けて來たやうな氣分がした。調和ある、美しさ――色でも音でも空想でも――が激しく欲しかつた。彼女は不圖、母のところで見た朝鮮の小箪笥のことを思ひ出した。彼女はそれについてどあ夫と話して、いやな氣持を忘れようとして云つた。

「蝶貝でも隨分いゝ色のがあるものね、母樣の納具箱にするんだつてまるで大きな蛋白石を嵌め込んだやうなのを見て來たわ」

「ふうむ、よつぽどするだらうね」

「――さうね。……水色つぽいのや薄い桃色みたいなのはよくあるでせう、でもそれはまるで複雜なの、光りかたが。日本近海のとは違ふのよきつと……まるで蛤みたいだつたわ」

けれども個は、それの話題に關係なく、机の上の鉛筆やペンを片よせ乍らやゝ唐突に云つた。

「あれを見て置いて呉れた？」

「え、」

「どう？」

伸子は、不明瞭に、

「さうね」

と云つた。

「持つて來るわ、とにかく」

佃は、彼の專門に屬する小著書の下拵へをして居た。通俗的な文化史概論のやうなものであつた。伸子は、丁度その目的に適つた一人の素人讀者の代表として選ばれたのであつた。伸子は、二寸程厚くなつた原稿を自分の机の抽出しから持つて來た。佃は、自分の仕事に對する親しみの現れた手つきで、ぱら／＼頁を翻した。

「何か苦情がある？」

伸子は、彼の氣を挫くのはいやに思つた。彼女にしても、佃が、何方かと云へば重い筆を努めて働して共丈の仕事をしたのは疑なく悦びと感じて居るのだ。

「苦情は大袈裟だけれど、もう少しどうにかした方がいゝと思ふところはあるわ」

「どこ？」

「紙が挾んでありやあしないこと？　說明が足りないのよ處々。まるで豫備知識のないものが讀むと物足りないの。それに何といふか、材料の底までたつぷり筆が屆いて居ないやうなところがあるやうな氣がするんだけれど……」

佃は、荒つぽく長めな前頭の髮を指で梳きあげて、辯疏的に云つた。

「そりやあ小説のやうなものとは違ふさ。面白いものちやあないに決つて居る。——何にしろ片手間にやる仕事だからね。材料を整理するだけだつて、容易ちやあない」

「さうよ、それはよく分るわ。だから猶更いゝものに仕上げなくてはね、」

伸子は、胸の奥から閃くものゝあるのを自分で感じ乍ら云つた。

「それに、仕事から云へば學校よりこの方が貴方の本道なんだから、云ひわけをつけないですむやうなものにしなけりやあいけないわ」

彼等は、原稿について暫く話した。話し乍ら、伸子は、これまで餘り氣づかなかつた自分の性質の一端をはつきり自覺した。昨日の午後、今朝と其を讀み乍らもぼんやり感じたのだが、伸子は、其を書いたのが自分の夫だからと云つて、自分が些も寛大な批評者となれないのを知つた。却つて、よいものであらせたいといふ慾が加るせいか、敏感で、氣むづかしくなつた。凡庸な小冊子の著者によくあるやうな常套語の平氣な數多い使用、主意も明にしない不正確な文句等に出會つたりすると、伸子は悲しみと腹立たしさを一緒くたに感じた。

「駄目、駄目、これはなあに？」

と、禮儀も何もはね飛ばした癇癪を破裂させない爲に、伸子はそれが下書きだといふことや、夫の殆ど始めての試みだといふことを、絶えず念頭に置く必要を感じた。同時に、彼女は、自分自身に對して一種の意氣沮喪を感じた。本當に心の優しい人といふものは、斯ういふことで此那氣持は持たないのだらうか。自分が見榮坊で偏狹な故で、斯樣な特殊な感覺の缺乏を此程苦にやむのだらうか——

何にも、種々理屈があるので、彼等は數度重苦しい沈默に陷つた。一區切すんだ時、伸子は、吻として云つた。

「あゝ、やつとすんだ！、頑張りやの寄り合だからなか〳〵大變だわ」
彼女は、手を延して、赤インクの栓をした。
「ね、一寸息ぬきに喋らない？」
「喋つてもいゝが――勤坂で充分樂しんで來たでせう」
「樂しんでなんか來やしないわ、別に。貴方と外の者とは違ふぢやあないの。――何か珍しいことでもなかつて？」
「何もないさ……ぢやあ斯うしよう」
佃は、いゝ思ひつきだといふやうに云つた。
「どうせたゞ喋つて居るんなら、喋りながらこれをつけよう、ね、頭を使ふことでもないから」
彼は、机の上から、ものゝ下積みになつて居る茶表紙の小帳面を引出した。伸子は、其を見るとふざけたやうに
「ふあ――」
と、閉口した。
「閻魔帳？私それを見るとうんざりしちやうわ」
伸子は、冗談の下に本心を現して云つた。
「自分がだらしなしだから仕方ないけれど、樂しみたい時に迄それに現れ出されると、私がつかりだなあ」
佃は、落付いた樣子で、小遣帖に日づけを記入し乍ら、じぶくる伸子に教訓するやうに云つた。
「何年もあとで見ると、その頃の生活が分つて面白いものになるさ。今日は――と、パン代十五錢…………多賀君の送別會費三圓。君の方は？」伸子は、げつそり興ざめ乍ら答へた。

「――つや子にコドモノクニを貰つて行つてやつただけ」

仲子の部屋は、北向の三疊であつた。上部一枚だけ透徹る硝子を嵌めた曇硝子障子が二枚正面にたつて居た。透徹る硝子から、葉茶屋裏の土藏だの、穢い亞鉛塀の天邊、自分の家の古びた庇等が、何時も同じ光線の中に見えた。其處から、空は見えなかつた。曇硝子の上には、前に住んで居た家族の子供が、男の子がしたらしく、太い鉛筆の、式の終りになる程大きい亂暴な數字で、5×82+1.1+000と惡戲書の跡がついて居た。

（四）

彼等の家に訪問客といふものがなかつた。

仲は、夜よく近所へ散歩に出た。仲子もついて出た。彼等は樅や檜葉類を少しづゝ貰つた。それ等を、西日のさす庇ふちや、むき出しな格子の横に植えた。其邊は、遠くから他處の梢が見えるぎりで、各々の家に木らしい木も無いので、樅はひどく露路の青々した子供等の目を牽くらしかつた。午後、小學校がひけた頃になると、男の子たちが其二本の、四尺たらずの樅の周圍にいつとなく集つた。

「おい、何だい、この樹」

「松だよ」

「違ひますよ、松ぢやあねえよ、松の葉は觸るともつとちく〳〵するよ」

妙にひつそりしたかと思ふと、いきなり下品な調子で、一人が叫ぶのが聞えた。

「あら！あら！わあるいの」

するともう一つの、ひそ〳〵聲が臆病らしく云つた。

「叱られるよ」

　佃が家に居ると、仲子はかういふ時悩ましい思ひをした。彼は、其那聲を聞きつけると、大人對手のやうに亢奮した顏つきになり、そつと下駄を庭に廻して、板塀について居る切戸に手をかけた。彼は音を立てずに掛金をはづし、突然姿を現はすなり、物も云はずに子供達に近づいた。群れて、ひそ〳〵し居た連中は、ぱつと一目散に逃げ出す。狭い露に入り亂れて響く跫音で、彼等がどんなに本氣で恐怖に打れたかゞわかり、仲子は滑稽を越えて、變に寥しい氣がした。

「又、此那に葉を捲つた。仕様のない奴等だ、學校で何を習つて來るんだらう」

「珍らしいからよ、庭へ入れた方がいゝわ」

「折角ひとが植えたものを、捲るなんて怪しからん。僕はなかへは入れませんよ」

　散歩に出て仲子が買ひたいのは植木より本であつた。古本屋をよく見た。何か目につくと、彼女は、其をぬき出し

「これ」

と夫に示した。佃は、あつちこつちをかへして見て、仲子にきゝかへした。

「是非なくてはならないもの？」

その調子が、忽ち仲子をしよぼんとさせた。彼女はあきらめて本を元の處に返した。

「――ぢやあ又にしませう」

仲子は、買つても、買はないと同じやうにさつぱりしないのを知つて居た。彼女は、佃が元からたつぷりしない暮しを經驗して居ながら、其に馴れ、大膽に快活に支配することを知らず、逆に貧乏に支配され、ちゞこまるのを、意外に、

警戒的に感じた。

佃は毎朝九時に、出勤した。午後四時過には歸つて來た。古典語と他の語學を教へて居た。仲子は、大概家に居た。本を讀んだり、直ぐ崖下の井戸端で長屋の女房連が喋るのを聽いたりした。支那語も矢張り聞える。永く一日が經つ間、彼女は何とも知れぬ期待に滿されて居た。佃が歸つて來ると、彼女は、その堤が切れたやうに話したがり、彼にも喋つて貰ひたがつた。然し彼はげんなりした樣子で、餘りとりあはない。氣がのつて、彼が話すのは、多く勤め先の同僚の噂であつた。仲子は、不幸なことにさういふ話題には退屈を感じ、もつと惡いことは、不安に成ることであつた。佃が、低い、これはお前にだけの話だがと云ふ風な口調で、今日、幹事の處へ三四度行つたら、誰それが、何か幹事に御用ですかと訊いた、皆氣の毒に神經質だ、僕なんか何上も下もないさ、其那こと考へても居ないのに。と云ふと、仲子は、其那ことを云ふ夫自身が大層その人々に似て居るやうな、却つて慘つぽい氣さへするのであつた。

秋が進んだ。庭によい月がさした。軈て霜が夜中に降り、往來が凍るので、暗いうち工場へと出かけて行く人の下駄の齒の音が、寒さうにカタ〳〵と仲子の寢て居るつい頭の上で響いた。

仲子は、段々自分の心に切ない渣滓がたまつて來るのを感じた。彼女が毎日絶え間なく飢えて、待つて居るもの——それ等は勿論誇るに足る程崇高な程度のものではなかつたにしろ、內的に育つて行かうとする強い欲望のある、若い仲子には食物と同じやうに必要な、知的乃至藝術的教養ある雰圍氣——の缺乏の感情は深く彼女を苦しめた。佃は、寢たいだけ仲子を眠らせた。日常の買物も自分で厭はず仕た。けれども、眠りたりたスポンヂのやうな頭で貪るやうに讀み印象を吸ひとつたとしても、それを共に語る誰も居ない。而も此世では誰より親しい魂の仲間の筈の夫が、形だけはちやんと具へて傍に在る——これは何といふ矛盾であらう。異樣な孤獨だらう。仲子は、この恐ろしい、絶望的な寂寥に打

れて激しく泣き出すことがあつた。

「あゝ、何故此那に寂しいの、寂しいの……もう少しどうにかしませうよ」

佃は、當惑し、仲子の背を撫で乍らなだめるやうに顔をよせて呟いた。

「其那に泣くもんぢやあない、今によくなる。今に馴れます」

その馴れるといふことこそ、何より仲子の可怖がつて居ることであつた。人間が、飼はれた獣と同じやうに馴てはどんな境遇にでも馴れるといふ事實は、本當に悲しく恐ろしい。自分も、今に矢張り馴れて仕舞ふのだらうか？そして、幾年か經つうちには、趣味も、高まらうとする情熱も失ひ、最初成らうとした者とは似ても似つかない者に成つて一生を終るのだらうか？仲子は目に見えないうちに自分のどこかゞ段々畸形になりでもしさうに不安を覺えた。

三月になつてから、或日動坂に行つた。親戚の子供が來合はせて賑やかであつた。皆を集めて、和一郎が寫眞をとつた。其がすむと、和一郎は、仲子だけを又別に迎へに來た。

「今日は光線の工合がいゝから、姉さんだけでもう一枚とらない？」

「さうね」

仲子は、元來すつかり他處ゆきになつて、商賣人に寫眞をうつされることが嫌いであつた。彼女は、弟にすゝめられると、近頃自分がどんなに見えるか、と好奇心をもつた。

「ぢやあとつて貰はふかしら……でもぼやぼや幽靈みたいなのはいやあよ」

「大丈夫さ！此那天氣にしくじるなんて決してありやあしないさ」

仲子は、弟と連立つて客間の庭に廻つた。そして、こんもり丸く刈りつけた木犀の前に立つた。

其が數日後行くと現象出來て居た。

「丁度乾かしたところよ、もういゝだらう」

伸子は、一緒に和一郎の仕事部屋に行つて見た。裏の洗濯場の奥を區切り薬品を澤山並べた窓の處に、印畫が乾してあつた。

「まあ何枚もあるのね、皆あの時の？」

「ううん、あとでつや子と大學の御殿の傍へ遊びに行つた時のもある、こないだのだけぢやあ、まだフヰルムがあまつてたもんだから」

「どれ…拜見」

「これが大學で撮つたの」

つや子が、兄とふざけて笑ひ乍ら此方を向いて歩いて來るところを不意に撮つたと見え、自然な手脚の動作が律動的で非常に美しく見えた。

「これがこないだの。元ちやんが少し動いたんでぼやけちやつた。――姉さん一人の方がいゝや」

「さう？」

伸子は、セピアにやきつけた一枚を渡された。光線も背景も悪くなかつたので、印畫としては奇麗に仕上つて居る。けれども、最初の一瞥で、伸子はその寫眞のが、自分のには相違ないのに、すらりと承知出來かねるやうな、變な感じを受けた。自分のものと思つて居たのとは何處か違ふものが、正面を向いて兩手を束ねた顔に漲つて居る。見て居るうちに伸子は思ひかけず太い二本の陰翳が、縦に眉上に現はれて居るのを發見した。それが、顔の上半分に、老けた複雑な陰し

さを與へて居るのだ。其にも拘らず、口許ばかりは穏やかに〳〵とくつろがされて居る。曇つた、苦々しい額に對するせめてもの心やりのやうに、努めて平和的であらうとして居る口許の表情は、妙に意識的で却つて切なげでさへある。それにしても、いつの間に自分の顏は斯うも變つたのだらう。仲子は即座に、

「ねえ、一寸、和一郎さん、私の顏本當に此那？」

と、問ひ質したいやうに感じた。未だに自分のものと思つて居た晴々しさ、生活の悦びが四邊に漂つて居るやうな雰圍氣などは、その寫眞に微塵もなかつた。多勢子供が居、仲子も陽氣で居た筈なのに、此處には、彼女の中の彼女、彼女より正直な彼女が、白粉や何かで胡魔化されない亂れた心の容貌をあからさまに照出してちぐはぐに立つて居る。仲子はつく〴〵自分の顏を眺めた。胸に迫るものがあつた。

いつまでも默つて居るのを、和一郎は寫眞に不滿なのだと思つたらしい。彼は、辯解的に云つた。

「もう少し全體濃くてもよかつたな、この次又やきなほして上げませうね」

「これで結構よ、有難う」

仲子は、寫眞をもう一遍見なほし乍ら云つた。

「よく――はつきり撮れて居るわ」

（五）

向ふの高台の濃やかな青葉を透す日光が、廣い耕地の展望や、大きい窓から吹き渡る野風を懐しませる氣候になつた。崖ふちの、彼等の家で生活は相變らず單調であつた。朝から晩まで、朝から晩まで、生活は狹く無表情に廻轉して

居る。伸子は、不可抗な力でその調子に卷込まれて居ながら、いつも不本意で抵抗を失へなかつた。斯ういふのは決して自分の本來望む生活ではない。自分を自分で護つて、生活を見守つて居る不健全さが生じた。佃と居て、伸子の氣分が平和なのは、二人が話もせず、笑ひもせず、ぼんやり緣側に腰をかけて、樹でも見て居る時であつた。丁度、二匹の犬が、日向で前脚を延し、その上に顎をのせてうつら〱して居る時のやうに。けれども、その眠つたやうな平穩はいつも永續きしなかつた。先づ、伸子が自分達の有樣に云ひようない物足りなさを感じ出すのが常であつた。これが二年前、あのやうな熱情で生活し始めた男女の日常であらうか。よき結婚生活といふ、あの時の標題は元より全然なくなり切つて居た譯ではない。伸子が、自分の感じる不安について夫に話せば、彼は立所に、何處からかその表題をとり出した。そして、彼女を安心させようとした。然し、それとても、近頃は何と通一遍な疑はしいものになつて來たゞらう。伸子は、夫が言葉でする愛の誓で、愛す。愛すとだけ云へば、萬事解決すると思つて居るのが味氣なかつた。毎日は、互の心持についてまるでやり放しにして置いて平氣だのに、伸子がやり切れなくなつてし涙をこぼすと、急に熱烈に、これ程愛して居る心が通じないかと訴へられる。――伸子は、途方に暮れて云ふしかなかつた。

「ね、こういふことは、言葉に現せない毎日々々の感じから來るのよ……貴方のはまるで自分は愛してゐると思ひ込んで、頑固に思ひ込む程度の强さを愛の强さだと勘違ひしてゐらつしやるやうね」

「あゝ、其那皮肉を云ふ！　ちやあさう思つてゐらつしやい」

其故、犬のやうにたゞ並んでゐるのが佗しくなり

「ねえ」

と呼びかけはしても、彼女は大抵あとの言葉は云はず仕舞ひにした。佃は別にそれを咎めようともしない。

仲子は、沼に浸つたやうな自分の氣持が堪へ難くなつて來た。外の世界は五月だ。明るい、潑溂とした五月だ。自分の心もこのやうではなかつたか？　行かう！何處かうんとからりとした處へ行かう。そして、魂の洗濯をするのだ。

初夏の空氣が充滿して來るにつれ、彼女の旅行に出たい渴望は愈々激しくなつた。出かけると云つても、仲子に心當りは一箇所しかなかつた。其は祖母が一人住居してゐる東北の田舍だ。其處なら、佃も承知するに違ひなかつた。去年の六月、佃が裏日本の、彼の生國に歸つて居た間、仲子は其方に行つてゐたこともある。彼女は、仕事をしたいといふ理由で、困難もなく佃の承諾を得た。

仲子は小さいスウトケイス一つ持つて出發した。間の時期なので、東北本線の急行は割合すいて居た。仲子は日のさし込まない側の、居心地よい場所をとることが出來た。四邊には、まばらに人影があるばかりだ。汽車に乘りたての、何だか騷然とした氣持のうちに、埃々穢い大都會の端を拔け切り、追々田舍が開けて來ると、仲子は落付きと一緒に名狀出來ない廣々とした快さが心に滿ち擴つて來るのを感じた。明るい窓の外に、田畑の上を、子供らしく面白さうに拍子をとつて、電信柱や人や森がひよい／＼來ては飛び去る故だらうか？クッションが軟かで工合よく彼女の體を搖る故だらうか？　程よい動搖や規則的な車輪の響が、彼女の神經を鎭めたのは明かであつた。けれども、彼女の心には何かそれ以上の愉快があつた。うれしさ、悅ばしさといふやうなもの、其も、たゞ違つた景色を眺めつゝ旅行する樂しさばかりではなかつた。今まで自分の體を四方から壓へつけて居たものがやつととれた、あゝ！と溜息をついて周圍を始めて暢々見廻すやうな爽やかさなのであつた。仲子は、出しかけた本を膝にのせたまゝ、貪るやうに自分の心持を味つた。此那こだわりなさ！　こんな自由な豐富さ！この汽車には何人が居るか、自分はその中に知る人もなくたつた一人な筈だのに、皆と知り合ひ、草や木までと仲間のやうに感じる、この洋々とした心持

仲間と云へば、この沿線の風景と仲子とは子供の時からの知己であつた。今は、深い青草の茂つて居る原野や疎林が、冬はどんな野兎色になるか、自分は知つて居る。さう、よく知つて居る。一列車は、那須野ケ原にさしかゝつた。列車の前も後も、一面若い倭樹林で埋つた。それ等は綠の波のやうに地平線まで泡立ち戰いだ。大氣の澄んだ遠い彼方には、仄に硫黄の煙が立昇る噴火山と、更に遙な日光山脈がまだ嶺に雪を戴せて、優雅に雄々しく聳え立つて居る。かねて何處より好きな北方の自然の新鮮さを眺めると、仲子は思はず坐席から立ち上る程感動した。若し人が居なければ、彼女は心をこめて、兩腕をこの山々に向つて延したゞらう。彼女は、生活が再び自分に還つて來たのを感じた。彼女は、勇しく駈ける馬に立ち騎りでもして居るやうに、確り兩脚で突立つた。頭をしやんと、遠い〳〵山嶺を見つめて居ると、疾走する車輛の搖れと音波のやうな自然との交感が錯綜して、仲子の全身には胸苦しいやうに音樂的リズムが漲つて來た。

シユツシユツ、カ、カ、

いきなり、(―然し、彼の山々は―)と云ふ何かで讀み覺えた警句が記憶の底から浮み出てその後にとびついた。

シユツ　シユツ　カ、カ、―然し彼の山々は―

シユツ　シユツ　カ、カ、―然し彼の山々は―

然し彼の山々は――……………

亢奮が鎭まると、仲子は徐ろに自分の氣持に騷きめいたものを抱いた。自分は、野原や山々への鄕愁にかゝつて居たのだらうか？　それで、彼那に生活を苦しく堪へ難く陰鬱に感じたのであらうか。けれども、其にしては不合理な心持があるのを仲子は自覺した。單純に山々が戀しかつたのなら、そして、今斯うやつて幸福にそれに滿足して居る以上、何にも、この悅びや鮮やかな自然の印象を分ちたいと思ふのが普通ではないだらうか。仲子の氣持は全く逆であつた。彼

女にとつては、この山々を、この矮樹林を、自分一人で眺められるからこそ嬉しいのであつた。傍に誰も居ず口を利かれず、妨げられず、心一杯に眺め、味ひ、感覺する、その快よさこそ、彼女に、久しく失つて居た自由の蘇生を感じさせるものなのであつた。東京の、崖ふちの家の想念は、數十哩離れた此處でも、猶重く思はれた。仲子は自分が其程自由に渴いて居たのかと、憐憫と恐れを以て考へた。

（六）

家ぢゆうに、鏡がたつた一つあるぎりであつた。水銀に罅の入つた古い大きい掛鏡が流しの横の柱に懸つて居た。田舍に來てから、仲子は朝顏を洗ふ時、きつと氣をつけて其鏡を覗く習慣が出來た。寫眞を撮つて始めてわかつた自分の額のいやな縱皺は如何うなつたかと思つて。日により、或は光線によつて、起きぬけの額がすらりと晴れて見えると、仲子は其日一日正しい心で暮せる瑞相のやうな喜びを感じた。何の工合か、陰翳が濃く現れて居ると、暫く陰氣になつた。そして、もう一生この襞はつききりなのだらうかと心配した。

祖母は、女中と、おとよさんと云ふ、元は他人だが今は遠い親類のやうになつた婦人と三人で暮して居た。仲子は、毎日野天に出て一時間ばかり、祖母と二人で、庭樹の刈込みをした。柊や、生垣の冬青などが、春からがむしやらに芽を延して居た。夏になる前それをすかして置くのだ。木鋏で、刈り乍ら、祖母と仲子とは種々なことを話した。

「これからはなか〳〵いそがしいこんだ。茶はつまなけりやならないしな……何故なわけか、茶を拵へる男がすつかり減つて、錢を出しても來てがないから、俺りやはあ今年はもう茶は製しないかも知れない」

「樂しみでなけりやあお止めの方がいゝわ、どうせ手間をかけるだけ澤山もとれないんでせう」

椽側で、胡桃をむき乍ら、おとよさんが口を出した。

「御隠居さんはそりやあお氣をおもみなさるんでね、はたでお氣の毒でございますの」

「放つたらかして呑氣に遊せよ、もうおばあ様なんか、いろ〳〵の樂しみだけを仕事にしなさつていゝお年よ」祖母は、少し太い小枝を挾み當て、弱々しく力を入れ剪んでから答へた。

「空家のやうにしては置かれまいつちえ

「――東京へいらしちまへばいゝわ、何も世話をおやきにならないですむから……いゝ御隠居所になつてよ小じまり便利な。もう經師やだけで出來上るんですもの――今度私と一緒にいらつしやいまし」

「……ふむ」

祖母は考へ乍ら、おとよさんに戸棚から經木の鍔廣帽を出させた。

「日がてりつけて禿があついごんだ。――お前達二人で住めばよかろ」

仲子は離れて自分の刈つた楓全體の枝ぶりを眺めた。

「何處へ？　御隠居へ？」

「さうよ、そしたら家賃なぞ馬鹿々々しく出さないですむだろ、俺が住むよりお前の方がやくに立つ」

「其は駄目よ、おばあさまのために建てたんですもの……」

「俺が住まはせろと云つたらよかろう？」

仲子は、陽氣に笑ひ乍ら云つた。

「有難いけれどお断りするわおばあさま、母様に叱られるとこわいから」

「………俺のやうな田舍婆が行つたら、さぞ笑はれつぺなあ。――ほんに俺なんぞ、お國風で、稼ぐことばかり數へられ、字も書けないで口惜しいことよ」

祖母が、茶の間に來た人に會ひに引込むと、おとよさんは椽側に腰かけた仲子に云つた。

「本當に御隱居さんもあちらに御一緒におなりなさるとようございますのにね……なか／＼その氣におなりなさらない、貴女よく勸めておあげなさいませよ、貴女の仰云ることは不思議におきゝになりますもの」

「……今度もおたのまれして來たのよ、お連れしろつて………」

おとよさんは語勢をつよめ

「是非さうなさいませ」

と云つた。

「――それは私が斯うやつて御厄介になつて居りますうちは、及ばずながらどんな御世話でもしますが……私も……」

彼女は少し顏つきをかへ茶の中を見た。

「いつまで斯うして居られますか分りませんし」

彼女は中年まで教員をしてゐた。それから結婚し、その夫に二年前死別したのであつた。

「何かお話があるの？」

「え……少し……いろ／＼私も先々のことを考へますもんですから――」

暫くして、おとよさんは仲子に訊いた。

「もうどの位いらつしやるお積りですか」

「さうね」

伸子は、足をぶら〳〵ふり乍ら苦笑した。

「當なしよ、歸りたくなる迄居るやうなことになるでせう」

おとよさんは、ちらりと女らしい偷見で伸子の横顔を見た。

「……佃さんが何でもよく御わかりですから伸子さんはお仕合せですわ」

「…………」

「…………よくおひとりでゐらつしやいますことね、男の方だのに。お手紙でも參りましたか」

手紙は五日經つたが來なかつた。伸子も書かなかつた。故意に考へがあつて書かないのではなかつた。たゞその氣になれなかつただけのことだが。——伸子は、初めて、これまでも自分達は餘り筆まめではなかつたのに氣付いた。佃が外國に殘つて居た頃、恐らく時期から云つたら最も頻繁に通信したい時代であつた筈なのに、伸子は一週に一度しか彼に書かなかつた。後、一緒に暮すやうになつて、廿日ばかり別れ〳〵になつた時、佃から用事について短い便りがあつたぎりであつた覺えがある。船の都合で、往復一ケ月もかゝる——片便りになる物足りなさはあつたに違ひないが。其癖どんな時でも、自分の日記だけは、細かに、長く書きつけたことを考へ、伸子は自分自身に居心地よくない妙な氣がした。現に今度も、彼女は、觀察の愉快や書くことの樂しさを感じ乍ら、夕空の美しさ、其處を翔んで行く鵯の旅行、其他些細な百姓生活の印象を書きつけて居た。伸子は、自分が、本ものは書けもしないのに作家的貪慾さばかり強く、感銘を自分にだけ仕舞ひ込まふとするのだらうか等とも考へた。然し、此等の考への下にもう一條心の働きが流れた。分つて居るぢやあないか。お前は、彼にとつて自分の自然や生活に對する細々した感興が大した同感を促さず、必要でもな

いのを知つて居るのでつい書きもしない辭に、仲子は、佃は佃で、矢張り彼の日記には種々書いて居るらしいとを考へた。

二三日後の或晩のことであつた。低い生垣の外から

「仲子さん　仲子さん」

と呼ぶ女の聲がした。

「其處にゐらつしやるのは仲子さんでせう」

仲子は、東京から祖母に送つてよこす新聞を見、社會欄の記事を話して聞せて居た。外は闇で、頭の上に電燈があるから仲子の方からは誰も見えなかつた。

「どなた」

「誰だごんだ？　今頃」

祖母が呟いた。

「私、飛田です。そちらへ廻つてようございませう」

「――どうぞ」

飛田は三保といふ名で、東京の會社員と結婚して居る此村の人なのだが、仲子は親しい間柄ではなかつた。寧ろすきでない部であつた。何時此方に來たのだらう、何故訪ねてなど來たのだらう、咄嗟に疑問が生じた。一人だと思つた三保が、中の口へ下駄をぬぎ乍ら、誰かに物を云ふ聲がした。

「さあ、お前もお上りよ、何故？　大丈夫よ」

仲子は立つて行つて見た。式臺に上りかけた三保の後に、ふけた風の女が二人暗い中に佇んで居た。そして、ひどく

遠慮し、もう夜が更けて居るからこのまゝお暇すると云つた。兎に角三人上ることになつた。二人の女は三保の妹とその友達で、三十近い人々であつた。三保は、大層けばけばしい大島の着物を着、同じやうに騒しい拍子で挨拶した。

「私はね、昨晩おそく來ましたのですよ、今日はこの人達と一日喋つて、さつき大神宮樣の方へ散歩に出ると、玉が、間の拔けえた顔をして、仲子さんが來てゐらつしやるつて云ふんでせう？ 頓馬なねえ、早くさう云へば何を置いても上つたのに、ぢやあ是非これからお目にかゝつて來るつて上りましたのよ、本當に田舎の人つたら氣が利きませんね、頭がないつたらありやあしませんわ、で、貴女はいつ？ いつおいでになりましてすの」

「さうね、もう十日程になるかしら」

仲子は、三保の辯舌に後退りするやうな氣がした。

「いづれ何かお書きになつてゐらつしやるんでせう？」

「いゝえ、どうして！ のらくらよ」

「私もふだんはいそがしうござんしてね、お父樣が、有難いことに、私のしたいことは何でもしろと云つて下さるんで、この間ぢゆはお習字をやつて居りますし、お花のお稽古はする、家のことはする、間には赤ちやんまで拵へなけりやあならないんですものハゝゝ大いそがしですわハゝゝゝゝ」

丸髷に結つて、内氣らしく默つて居た三保の妹が、苦笑ひをして、

「まあ」

と云つた。

「だつてさうぢやあないの？ ねえ。――なかなか飛田が離しちやあくれませんわ」

仲子は、三保がヒステリックなのに氣がついた。彼女は、何かに憑かれたやうな眼を、濃く濃く白粉をつけた顏の上に光らせて、一人喋つた。二人の同伴者が、上るまいとした理由や、迷惑さうに坐つて、ちよい／＼仲子を見たり、三保を見たりして居た理由がわかつた。氣が變になつて居るのかと、仲子は凄く不安に感じた。

「――この頃はずつと御丈夫？」

「いゝえ、貴女ひどい目に會ひましてね」

三保は婦人科の病で手術を受け、退院するとすぐ此方に來たのだと云つた。

「お父樣と居ると、ね、ほら、どうしたつて貴女――」

仲子は、三保の氣持がどうかして居て、何を云つても性的なことの方にひきつけるので默り込んだ。二人の連れも、共が氣遣らしく「――そろ／＼失禮しませうよ」

と頻りにすゝめた。

「又、ひるまゆつくり上つて御話するとしてね、御隱居樣ももう御やすみの時刻でせうから」

「さうしませう……仲子さんはいつ迄此方です」

仲子は、おとよさんに答へたと同じ返事をした。三保は仰山に、

「まあ！　あんなこと」

と叫んだ。

「旦那樣を放つて置いて其那ことを仰云る奧樣がありますか……一人で置いちやあ第一あぶないぢやありませんか。よく辛棒なさること、うちなんか」

「さあ一寸、行きませうよ、姉さん」
門の方へ出て迄も、三保の盛に喋る聲がした。やゝ暫くして、祖母がさもげんなりしたやうに云つた。
「何だべ、あの女!」
仲子は、その調子の滑稽さにつられて笑つた。笑ひ乍ら、彼女の頭に疑念が湧いた。普通夫婦と云ふものは、本當に三保が云つたやうなものなのだらうか。若しさうだとすると、自分達は如何いふのだらう。彼女は、自分達が別々に旅行するのなど、あたりまへのあたりまへで、留守に佃が碌でもない眞似をしようなどゝは、不安がるのが當然だといふ意識さへなく安心して居るのであつた。仲子は三保を或種の病人ではないかと怪しんだ。

（七）

おとよさんは、よく小一里ある町まで買物に出た。彼女は其度に仲子に用はないかと訊いた。仲子は、一度男物の單衣を買つて貰つた。其を仕立てさせて佃に送つた。祖母は、おとよさんが出かけると、
「—買物ばかりぢやなかろ、又新町へよる氣なごんだ」
と、ひそ〳〵聲を出した。祖母の話對手に來て縫物をして居る近所の老婆が迎合的に合槌を打つた。
「さうよしか。……でも、おとよさんはほんとに若く見えるない、卅一寸出た位で通るものなし、……又いゝ旦那樣がすぐ見つかることとよ」
祖母は、老年で震へる指先で針のめどを通し乍ら、年とつた女獨特の底意地わるさで
「俺がおとよさんだつたら、四十越して嫁さるなんぞ嫌だなあ、今の者は年とつても一人で居ないか知らて……」

「ほんによ……ホヽヽヽ」

仲子は、おとよさんが行先に不安を感じて養老保險でもかけるやうに結婚しようとするのが歯痒ゆくもあり、哀れであつた。目引き袖引きする女共にとりかこまれて居る彼女の境遇に同情を持つた。彼女は祖母に注意した。

「おばあさまが一生あのひとの爲に仕合はせに暮すだけのことをしてあげるならいゝが、さうでなかつたら、五月蝿彼此仰云らない方がよくてよ、誰だつて仕合はせになりたいのだからね」

すると、祖母は、妙に捩くれて述懐し始めた。

「―俺なんぞ本當に不仕合はせな生れとでも云ふのだらうなあ、若い時には若い時でお前のお祖父さんが事業々々で貧乏するし、年とりや年とつたで、息子にまで嫌はれるし……お前に會ふだけが俺あたのしみなごんだ」

さう云つて彼女は涙をこぼした。

おとよさんは、仲子と下手此上ない五目並べをしながら、身の上の不安なことなどを訴へた。彼女は、新町にも、從つて町への買物にも、程なく出かけなくなつた。後で、彼女は、縁談が持ち上つて居た歯科醫と會つて、自分から斷つたことを話した。――仲子は、女性の生活の様々な、然し一樣に思ふやうには行つて居ない標本を見て居るやうに感じた。祖母にしろ、おとよさんにしろ、皆暮したいやうには暮して居ない。其でも生活しつゞけては居る。朝日も夕日もさゝないやうに、どんよりと蠢き乍ら暮して居る。仲子は自分が自分の不滿に降參しないのを賴もしく思つた。彼女等を見て居ると、仲子は、しんから斯ふ云ふ生活をしたくなく思ひ、邪魔はどけ、根氣よく生活にぶつかつて、斯うと思ふ生活を開かうといふ熱意が湧くのを感じた。幾代かの家族の中に、せめて一人位、愉快に一生を回想出來る女があつてもよいではないか？

六月の中旬に、和一郎が徴兵適齡で、檢査を受けに來た。彼等はさう澤山はない仲よい姉弟の一組であつた。仲子は、互の生活が別になつて以來、久しぶりで彼と田舍で數日暮せるのがよろこびであつた。和一郎は、つい近年肋膜を患つたので、乙種か、丙種かもしれなかつた。其故この滯在は猶心輕やかであつた。祖母の簞笥の引出しに、古い風月の菓子箱があつた。種々な寫眞がしまつてあつた。仲子が生れて百日目といふ時のだの、少し大きくなつて和一郎が天鵞絨の水兵帽をかぶつて乳母に支へられて居る横に、姉らしく澄して立つて居るのだの。祖母は、ほく〳〵して彼等に其等を見せた。

「おや、これは忘れて居たわ、此那のがあつたのかしら……この頃ぢやあなくて、ほらよく人挨ひが來るつて可怖がつたの。――吉さんを送つて行つたかへり、坂の角から貴方をおんぶして夢中で家まで駈けて歸つたことがあつたぢやあないの」

「本當ね、滑稽だな……だがあの時は本氣で可怖かつたさ、姉さんがまるで一生懸命なんだもの」

「今度は、和一郎が姉さんをおんぶしてやらにやなるまい」

「――こんなでかいの? 參つちやうなあ」

「ハ、、、」

二人きりになると、彼等はもつと立ち入つた打明け話をした。和一郎は、戀愛模索時代に入つて居た。憧憬や不安が、時々激しく彼の精神を搖ぶるらしかつた。彼は、自分の細かい心理狀態や、予備校の學生仲間にある、特殊な、彼自身の趣味とは全然合はない戀愛病?的雰圍氣などについて、信頼に滿ちた穩やかさと、若々しくかくし立てない正直さとを以て話した。仲子にとつて、話題は自分達と違ふ世界に屬することなので、自ら深い興味を感じた。が、それに

もまして、彼女の心を屢々動したのは、其那ことについては餘りひとに喋りたがらない性質の和一郎が、子供時代からの結びついた氣持から、自分だけには直截に、幾分たよりにさへ思ふらしく話してくれる心根であつた。仲子は、その信用を寧ろ忝けなく感じた。

和一郎は、櫻坊の種を、遠く、海に小石を投げるやうに庭の芝生に放り乍ら、云つた。

「……姉さんなんか、僕達みたいぢやないんだらうなきつと」

「さう云ふことについて？ちやんと解つたり落付いたりして居やしないかと云ふの？」

「うん」

「なあぜ——結婚して居るから？」

「さうばかりでもないけれど……」

「若し結婚して居るからさうだらうと思ふんだつたら却つて逆よ……結婚は結論ぢやないもの、出された試験問題みたいだわ、まるで。それもなかなか手硬いの……」

仲子は、和一郎を見我知らず暗示的な微笑を浮べた。和一郎は、眩ゆいやうな複雑な表情をした。

「——妙なもんだなあ。……僕、級の奴の氣持なんか、一言喋らせりやあ大抵分つちやうんだけど——全くお嬢さんには參るなあ、妙に手應へがなくて、ふわふわで、直ぐ目から水は出すし……」

仲子は、和一郎の表現に愛情を感じた。

「色どりの派手な空氣ばかり見たいなの？」

「まあさうね——そいで、友達同志の話なんか、僕閉口しちやうさ傍で聞いて居ると……他愛なくて……」

間を置いて、彼女は訊いた。

「あのお嬢さん——よく寫眞なんか撮つてあげて居た——あの方は近頃どうなすつた？　矢張り遊んでゐる？」

「あゝ、あのひとはよくない」

和一郎は、淡白な調子ではつきり答へた。

「——先鞦韆しに來て居たんでせう？　僕何だかよくない性質がありさうな氣がしたもんだから——姉さんどう思ふ？　上目で人を視るなんか、陰性で僕嫌いさ」

仲子は、和一郎の裡に鋭さと、冷靜な粘り强さがあるのを感じた。彼女は、センチメンタルであつた彼が、次第に生存適應者らしい足許の確さを持ち始めたと思つた。

「…………なか〳〵確りして居るのね」

彼女は、自分の本質的な夢想癖を顧みた。

「——私より偉いところがあつてよ」

「其那こと！」

「本當よ、——生れつきで仕方ないやうなものだけれど、私みたいなのは、——何ぞといふと忽ち空想するのもよしあしだわ」

仲子は、ぽつりぽつり、獨言のやうにつけ足した。

「其は私だつてからの盲目ぢやあないから見えるものはちやんと見えるのよ、だけれど……妙ね、何かの廻り合はせで好きにでもなると、どうしても『それはさうだが』と思ふのね、きつと、嫌いなところなんぞ消えちまふと思ひ込む

のね、………處が消えなんかしないわ、――實際になつて見ると。………其でがつかりする位なら貴方みたいに、始めつから變な蜃氣樓なんか見ないやうな性の方が却つていゝかもしれないわ」

床に入つてから、和一郎は仲子も知つて居る或娘について、彼女の意見を尋いた。仲子は何故ともなく彼の興味が、今はその少女にあることを覺つた。彼女は、少し返事に困つた。彼女の印象によると、その令孃は、先刻和一郎と話した派手な色どりの呑氣ばかりみたいな少女でない代り、餘り鮮やかな愛らしい處もない、つまり平凡すぎる生れつきに思へて居たのだ。仲子は、隣室との境の欄間から天井にだけさして居る薄明りを見上げ乍ら答へた。

「どうつて………ごくあたりまへぢやあないこと………だけれど、私、自分が其でいゝ加減いやな思ひをさせられたから、餘り彼此云ふのは好でないわ」

全く、言葉といふものは恐ろしい。――仲子は、考へた。自分と他との交渉が始つてから、自分は、何と澤山アンティ他の言葉をきかされただらう。云ふ人々の目的は、自分に他を斷念させたい爲であつたらうが、事實は決してさうならなかつた。彼女は萬一、和一郎に戀愛問題が起つたら、せめて自分だけは本當に何等かの言葉が彼の爲に求められる迄よき沈默を守らうと思つた。其にしても、この弟はどんな戀愛をし、どんな一生を送るのだらう。成長して居る彼に、自分の結婚生活の有様が無意義に映つて居る筈はない。樂しいらしく見えるだらうか？仲子は、動かない弟の布團のもり上りを眺めた。彼自身の結婚生活についても、明るく積極的な見解を持つやうに影響して居るだらうか。仲子は、微かに哀愁と責任とを感じた。

程經つて、不圖仲子は和一郎の聲をきいたやうに思つた。眠つて居つたのではなかつたのかしら。彼女は

「起きて居たの」

と訊いて見た。和一郎は返事をせず、聞きとれない言葉を呟いた。寢言だ。さう知ると伸子は微笑した。彼は子供の時分から、よく夜乳を吸ふやうな音を舌でさせる癖がある。和んだ、母親のやうな氣分で耳を傾けて居ると、和一郎は

「あゝ――」

と、永く引張つて溜息をついた。伸子は、反射的に口許を引しめ、片肱ついて起上り、彼の顏を覗き込んだ。溜息は、夢中にしては餘り感情的であり過た。堪へ〳〵て居たものを、力にあまつて魂からあゝ――とはき出したやうであつた。其上、響に何とも云へず情深いところがあつた。伸子は、息を凝して寢息をうかがつた。眠つて居ることは眠つて居るのだ。軈て彼はもう一度、あゝと短い吐息をつくと今度は、低く、軟く、然し明瞭に

「あゝ、僕苦しいなあ　――僕苦しいなあ」

と二言呟いた。伸子は自分に訴へられたやうな痛みを總心に感じた。其と同時に彼は、胸の上に置いて居た兩手を、小さく指先だけで動した。伸子は、そつとその手を片方づゝとつて、下におろしてやつた。手は大きく、重く、暖であつた。――伸子は、長い間、彼と自分との區別を失つたやうな氣持で、夜の中に坐つて居た。

これは、伸子に、靜かな、いつまでも薄らぐことのない感銘を與へた。彼女は、和一郎に何も云はなかつた。彼は三日後に歸京した。

伸子は、次第に東京に歸りたいと思ふ日が多くなつた。半月以上離れて居た都會的雰圍氣が非常に彼女を牽いた。夕暮など、今頃東京市中を貫いて流れて居るだらう生活のどよめきを思ふと、朝まで待たず飛び戻りたいやうに思つた。佃からは催足も來なかつた。彼は、手紙で、彼女の滿足する丈逗留すればよいこと、彼は彼の愛が理解される時を樂しみに、いくらでも待つと云つて寄來した。其を受取つた時、伸子は感謝は感ぜず、寧ろ不快であつた。彼は、こうして

居て伸子が勿論仕事など出來ず、矢張り彼に拘泥し、一本な心持で居ることを知り拔き乍ら、それに些も觸れず、奇麗な文句で自己の堅忍を示して居るのが腹立たしかつた。不滿がり、あばれるのはお前だけの勝手で、私は變らない。その氣持が歴々として居た。伸子が、今にも佃を呼びたい程歸りたくなつても、堪へ、二の足を踏むのは其故であつた。伸子の心に從前と違つたものが生じない限り、歸れば又元通りの日常が始るのは明かだ。

伸子は田舍の自然によつて充分な生活力を恢復すると、再び苦しくなつて來た。來たての、うつとりした、胸を躍らせる陶醉は無くなつた。彼女は、椽側や庭を考へに沈み乍ら歩き廻つた。この行き詰つた狀態を新しくするには、そして、自分の希望する方に生活の向きを換へるには、選ぶべき態度がたゞ二つぎりなのを伸子は知つて居た。一つは、一思ひに佃と自分とのいきさつに見切りをつけて仕舞ふことだ。他の一つは、これから一生、佃をあてにする氣はすてゝ、自分だけを賴つて境遇を育てゝ行くことだ。然しいづれにせよ、これ迄描いて居た、或は努めても描かうとして居た夫としての佃とは永久の別れを意味して居る。——あれがたつた二年昔の自分とは思へない程稚く、若々しく、信じ易かつた自分が、燃えるやうな心で佃を庇ひ、生活へ突進まふとした頃のことを思ひ出すと、伸子は悲しさ、勿體なさで、そのまゝ其庭に膝をついて仕舞ひたいやうになつた。假令愚であつたにせよ、いゝ氣な己惚れがあつたにせよ、誠ある暮しをしようとしたのだけは眞實だ。その眞心を、我と無にしてよいものだらうか。無になり切るか、いざといふ時現はれ出て、何かの足しにはならないだらうか。

又實際、不滿があるにしろ、このまゝで行けないことは明白にしろ、佃を棄てるなどといふことは、伸子に迚も出來ることではなかつた。湖へ重い石でも落したやうに、自分が手離した彼が、淋しく一人ぽつちでずうつと人生の何處かへ姿を消す有樣を考へた丈でも、彼女は堪へ切れなくなつた。さうとすれば、路は一つしかない。——新しい勇氣を

出すのだ。そして、新しい世界を造るのだ。伸子は自分で自分に話しかけた。お前が本當に生きる力の大きい人間なら、どうしてそれが不可能と定つて居るだらう？誰でも樂はして居ない。まして、愛することは遊びではない。一つ力一杯やつて見て、いつかは二人が住んでも結構廣い心の宮を建てたらどうだ？辛い時には泣くがよい。けれども、後から其が自分で笑へるやうに。さう考へて來るうちに、伸子は、極めて小量だが、自分で自分の矛盾に憫笑を催し乍らでさへあるが、彼とても、實に頑なで妙ではあるが、木の根つこでない人である以上、いつかは少しづゝ變るまいものでもない、自分の執念深かさに閉口する丈でも變るかもしれないではないかといふ希望に近いものを抱くのであつた。伸子は、自分が雄々しくならうとする決心、それが無駄ではあるまいといふ信念も、結局は最後に來るその芥子粒ほどの望みによつて全體命づけられることを否めなかつた。

伸子は、佃のところに手紙を出した。彼女は自分が歸りたくなつたこと、家に入れるやうにして置いて欲しいことを知らした。佃から、伸子が歸らうとして居た日には、夜外出するから、その翌々日にするようにと云つて來た。台所の入口で、受取なりそれ等の文句を讀み終ると、伸子は體の内部からせき溢れたひとりでの勢のやうなもので、そのハガキを破いた。彼女はもう歸ると定めた日を、翌々日まで延したりするのは厭であつた。

(八)

その夏、伸子は久しぶりで短い小説を一つ書いた。春から計畫して居た長いものは、内部的に不足なものがあつて遂に出來ず仕舞ひであつた。結婚してから、仕事が出來ないといふことは、絶えず彼女の氣を重くして居た。それが、田舍に行つて居るうちに、幾分心の持方が變り、兎に角集注して四五十枚のものが書けた。出來榮より、書けたといふそ

のことが既に伸子にとつては一つの吉祥であつた。仕事が出來るといふことは、即ち自分や自分の周圍の生活に對して曲りなりにも一つの精神的足場の持てる證據ではなからうか？　その足場が持てさへすれば、自分が田舍で、歎きと勇氣との縺れ合つた感激の中に思ひ定めたこれからの生活法——心持の上では夫にたよらず自力で立つといふことも、萬更見込みないことゝも思はれない。——伸子は、自分が其處に來る前の、一種渾沌とした動搖の氣持を書いたのであつた。其作品は、文學的には大して重きを置かれて居ない或政治雜誌の附錄に載せられた。

掲載號を送つて寄來した日であつた。伸子は活字になつた自分のものを讀みかへし乍ら、机の前で纏りない考へに耽つて居た。すると、表の格子戸が開いた。伸子は、歡迎しない顏つきで立つた。彼女は、獨りで暮して居る晝間、いきなりがらりと格子の音がすると、いつでも四邊の空氣を衝き動かされるやうな物々しさを感じた。そして來る者は、乞食聲を出す押强い物賣りか何かに定つて居ると云つてよい。伸子は膝をついて障子をあけかけたが、土間に立つて居る者を認めると、

「なあんだ！」

と、現金に聲まで變へて嬉しさうに立ち上つた。

「いやなひと！　誰かと思つたぢやあないの」

和一郎であつた。

「今日は。——一寸本當のお客の眞似をして見たのさ」

「おあがりなさい」

「……有難う……」

伸子は、彼の躊躇するらしい樣子を訝つた。

「何故？　いそぐの？　それともオウトバイが心配？」

「そりやあいゝけれどね、今日は迎へに來たのよ」

「…………――でも一寸はいゝぢやあないの」

和一郎は上つたが落付かなかつた。彼は

「いそがしい？　來られない？」

と訊いた。

「――行かれない事はないけれど……何か用事なの？」

彼女は、呼びつけられるのはすきでなかつた。例へその日は出かける氣で居ても、不意に誰かを迎へによこされ、今直ぐ來いと云はれると、氣が澁り勝ちになるのであつた。

「お母さんが話があるんだつて」

話があるといふのは多計代の慣用手段なので、云ふ和一郎も聞く伸子も、思はず一種の可笑しさを感じて笑つた。

「そりやあ、話があるには定つて居るけどさ」

「今日は、でも少しむきよ」

「何なの」

和一郎は、云ひ難さうに、不器用に云つた。

「姉さんが今度書いたものね、それを讀んで、文句があるんだつて」

「ふうむ」

仲子は、心の中で一通り考へて見た。何が氣に障つたのだらうか。彼女は一箇所だけ、其かと思ふところを思ひあてた。それは、主人公の女の夫に對して、女の母が或反感、敵意に似たものをもつて居ると云ふ僅か數文字の部分であつた。若し母が何か云はふとするなら恐らく其處以外にはあるまい。

「ぢやあ行かう」

考へた後、仲子は立つて仕度をした。彼女は、早くこぢれないうち、互にさつぱりするのが肝要と思つた。その爲に、心持の上で迷惑を受けずにはすまされまい父や和一郎も氣の毒であつた。仲子は短いノオトと鍵を隣に頼んで出た。

多計代は、氣輕く平常通りな仲子を見ると

「――おいでなさい」

と、蟠りのある調子で迎へた。

「今日は。お迎へを有難う」

母は、自分でせず、女中を呼んで茶を入れさせた。

「其處いらに、長崎のカステラがあつたようだか……よかつたらお上り」

仲子は、母が深く考へて或不愉快を抱いて居るのではなく、感情的にむしやくしやし、そのむしやくしやを自分から棄てまいと重々しく仕て居るのを感じた。

「何かお話しがあるつて？」

「……もうわかつて居るだらう」

「……和一郎が一寸話したけれど、細かくはわからないわ……何もまだ何はないんだもの」

「――自分の書いたものだから勿論わかつて居るだらうが、今度のは一體どう云ふ積りで書いたのかい」

伸子は、氣まづさを我慢して、丁寧にモウティブの說明をした。然し多計代は、其をしんみり聞きしめず

「そりやあお前の理屈はどうでもつくだらうがね」

と云つた。

「――理屈ではない、私の本當の心持よ」

「實はね、昨夜、澤谷さんが夕飯に來て、お前の今度書いたものを讀んだかと訊くから、ちつとも知らないと云ふと、奧さんのことが書いてありますよと云ふんだらう。どうせ碌なことぢやあるまいと思ひ乍ら、直ぐ買はせにやつて讀んで見ると――私は、何も活字にまでしてお前に赤耻を搔かされなければならないやうなことをした覺えはないよ」

伸子は、不愉快になり、來る時まで持つて居た同情的な氣分を失つた。彼女は、自分の心を第三者として傍觀するやうな習慣のない母が、問題は例へたつた二字の形容詞にすぎないとしても、自分を餘り願はしくない心の狀態で書かれたと思つたら、事實であれば一層いやに思ふのは無理ないとさへ思つた。其故、そのいやさはいやとしても、伸子が其作を書いた種々な衷心の事情が分れば、或諒解が得られるだらうと、多くの口數を利いたのであつた。けれども、今の母の言葉で、伸子は索寞とした氣持になつて來た。澤谷の態度もいやであつた。母の動かされ方もいやであつた。彼女は、全體に愛の缺けて居る、情けなさを強く感じた。伸子は、默りこんで、冷えた茶を啜つた。

暫して、多計代は語を繼いだ。

「……そりやあ私はお前の親だから、私さへ踏臺になつて居れば、お前がよくなるとでも云ふのなら、どんな目で

も辛棒しますよ。土足にかけられても、喜びます。けれども、恐らく共那ことはあるまい──たゞさへ、どんな工合だと世間で目をつけて居るのに、何もそれ見ろ、と思はれるやうなことを書かなくつてもいゝだらう」
彼女は、抑制を失つた女らしい毒々しさでつけ足した。
「──それとも、何かいお前の得にでもなるやうなことがあるのかい」、
仲子は、母でなかつたら何と云つたか知れない勢で
「おやめなさい」
と遮つた。
「さういふものゝ云ひようをし始めたら仕様がないぢやありませんか」
多計代は、仲子の顔を見、幾分弱く云ひ張つた。
「……だつてさうじやあないか」
彼女は、それから長く、亢奮した心のめりはりに引摺られ乍ら仲子が佃との關係で彼女にかけた苦勞を思ひ知るべきだといふことや、仲子の藝術が目に見えて墮落し始めたといふやうなことを攻擊した。仲子は、議論がましい其等の言葉から、眞心を打つものを受けられず、弱つた喰ひ違つた氣持で歸つた。
六日後、勸坂から又迎が來た。土曜日であつた。今晩是非佃と二人で來て吳れといふ口上を賴した。先日仲子一人呼ばれた時、多計代は、いづれ佃も呼んで話さなければならないが、と云つた。用事は其事なのであつた。仲子は、自分が書いたものによつて惹起されたいざこざに、佃を卷き込むのは眞に厭であつた。氣の毒でもあるし、此處だけは自分の世界と思ふところへ、どた〳〵一人でも多くの者に踏込まれるのが辛かつた。佃は、勿論讀んだに違ひないのだが、

其について彼女には一言も云はなかつた。

二人は、二階に通された。繪の稽古の赤毛氈などすつかり片よせ、隅に、仲子の氣に入つた螺鈿小簞笥だけが天井からの遠い燈火に閃いて居た。立つて行つて其を眺めて居ると、母が上つて來た。彼女は、床の間の前に、一つだけ離して置いてある坐布團の上に坐つた。仲子は、圍りから壓しつけるやうな扱ひ方に對して、反撥を感じた。世間話を一つ二つして、多計代は

「わざ〱貴方までお呼びしたのは、他のことぢやありませんが」

といふ風に切り出した。

「この間は何だかぐず〱で仲子を歸してしまひましたが、私は、あれからずつと考へつゞけて、夜も碌に眠らない程だつたのです。いづれ、仲子からおきゝでしたらうが、貴方からも意見をおきゝしたいと思ひましてね」

「お迎へだつたから佃も上つたんだけれど、これは、母樣と私だけが話してすむ事と思ふわ、佃は、關係のない人でせう」

「さうは思へないね……佃さん、貴方もお讀みでしたらう……どうお考へです？」

仲子は、夫が答へる顏を見て居られず、暗い廊下の段戶の方を眺めた。

「…………私は、御承知の通りこのひとの書くものには、絶體の自由を認めて居りますから…………」

仲子は、この寛大らしい返答から一向眞實を感じなかつた。夫の狡さのやうなものを感じた。この場合の返事としてこれは何だか滑つこい、解つたやうな解らないやうなものであると共に、これは時によつて、仲子自身にも向けられる遁辭となることを彼女は感じ、坐つて居る場處が沈んで行くやうに思つた。何を書かうと彼女の自由です——その自由

を私は認めて居る。其故、書いたものは飽くまでも書いたもの。そこにどんな苦しみや涙があらうとも、それは自分や互の生活に全然關りない彼女の書いたもの——ほう、何と胸に浸み徹る冷え冷えした寛容さ！　仲子が、このやうな思ひをつゞけて居る間に、多計代は話しを進めた。

「——それはさうでせうが…………私はこの間から考へて、どうも仲子が今度あれを書いたのには、譯がありさうに——まあそこまで行かないにしろ、何か感化がありさうに思はれて來ました——さうぢやありますまいかね、公平に云つて」

佃が怪訝さうに、尋きかへした。

「どふいふ意味でゞせうか」

多計代は、佃に答へず、仲子に向つて云ひかけた。

「ね、さうぢやあないかい、仲子、よく良心に手をあてゝ反省して御覽——お前も苟も文字を書く人ならその位は分るだらう」

仲子は、既に此等の押問答に云ひ難い嫌厭を感じた。不快な、何だか心の底に觸れない、殆ど不必要と思はれる言葉をぐんぐんつみ上げて行つて、結局何をどうしようとするのだらう。

「つまりどういふことを仰云るの？」

多計代は、激しい眼つきで仲子を見た。

「云へと云ふなら云つてもよいがね——餘り佃さんにお耳ざわりがよくあるまい」

「何なの」

「——一言で云へば斯うさ、あれは、まあ全部ではなくても、私についてのところは、どうもお前が佃さんに暗々にでも唆かされて書いたとしか思はれないのさ」

「…………」

「どうだい？」

「…………」

多計代は、居住居をなほした。

「これは、尤も私だけの意見ではない——皆もさう思つて居るんだが……」

「————」

夜の廣い疊の上に、皎々とした明るさと皆の口を噤んだ沈黙とが漲つた。仲子の心の中もその通りであつた。彼女は悲しくも、腹立たしくもなかつた。其程度を越し髓まで傷けられた感情で、冴えかへつた。

多計代は、

「默つて居ちやあ分らないよ」

と云つた。硬ばつてしまつたやうで仲子は口が利けなかつた。

「……私の考へ違へだつたらあやまりますがね」

暫くし、仲子は夫に云つた。

「……貴方あつちへいらしつて頂戴」

母が佃に謝まれる譯はない。佃が、自分の夫となつたといふだけの因縁で、このやうな屈辱を堪へるには及ばないと

仲子は思つた。

「いらつしやい」

佃は、腕組みをしたまゝ、

「うむ」

とうなつた。彼が不決斷で居ると、多計代が、

「話もまだすまないのにお前の勝手でそんなことはさせられません」

と、云つた。

「――でも母様は後に引けない方でせう？」

「引くわけがないから引かないのです、――お前のやうに自分が惡いと思はない者はない」

激情的な意地張で、多計代は仲子に謝れ、謝れと強いた。これから一切、家庭に關するらしいことは書かないと誓へと迫つた。これは仲子にとつて不可能なことであつた。今、假に氣やすめの謝りや誓をしても、それは、いつか必ず破れる事だ。又、仲子には、自分が、母の强調する意味で惡いとも考へられなかつた。氣の毒なことゝ、惡いことゝは自ら別に思へた。それに、多計代の方から餘り亂暴に與へた數々の言葉を、母の云ふことだからと自分が折れて承認するやうな度量は仲子に持てなかつた。

「では、どうしても自分の云ふことは枉げないと云ふんだね」

「――お座なりを云つても仕方ないと思ふから………」

「ぢやあ仕様がない、お前と私とは根本的に相容れないのだ。――さういふわけなら」

多計代は、改めて決定的に宣告した。

「以來、出入りしない事にして貰ひませう。その方がお互の爲だし、佃さんにもいゝでせうから……」

彼女は、終りの方をやつと云つて、劇しく顎や唇を震し乍ら顔を反した。横顔を見て居るうちに、伸子は深く母が哀れになつて來た。彼女には、多計代が其那ことまで云ひ出したのが決して永續的な考へからでなく、當人こそ思慮の結果と思ふだらうが、實は强烈な感情の刺戟を好む激し易い性質から出たことゝ思はれた。これでもか、これでもか、と押して來た自然の勢で、或は予期せず、其那斷定的なことまで口にしたのではなからうか。母には本當に、自分の云ふことの意味が解つて居るのだらうか。伸子は、自分が、謂はゞ勘當されるといふことより（此は何故かちつとも實感に訴へて來なかつた）母が自身の激越性を制御出來ないやうな姿が堪へ難かつた。不幸な人といふ氣さへした。彼女は、優しく

「まあ、さう一飛びにお考へにならないでもいゝでせう」

と云つた。多計代は其を、伸子のいゝ加減な胡魔化し手段と思つたらしい。彼女は、涙をはら〳〵こぼした。

「私に迚も其那ことは出來まいと高を括つておゐでだらう。——私にも覺悟といふものはあるからね。さう見くびつては貰ひますまい。一旦云ひ出したからには、會ひ…………會ひたくて、死にさうになつたつて、頼つて來て呉れとは云ひませんよ」

空虚のやうな靜寂が擴がつた。すると、いきなり、佃が儀式張つて畳に手をつき、母に挨拶した。

「——では已を得ませんから……どうぞ御體をお大切に……」

伸子には、すべてが信じられず、わざとらしく變に感じられた。何でもない筈のことを、行きがゝりで仰々しく悲壯

らしく振舞つて居るやうな落付かなさ。同時に何とも云へずがらんどうな、火の消えたやうな氣持。――仲子は坐り込んだまゝこの妙な心持に沈んで居た。母は母で、兩手で自分の胸の邊を抱き込むやうにし乍ら、凝つと前方を見据えて動かない。――

佃が立ちかけるやうにして、仲子を促した。

「ぢやあ……失禮しませうか……大分夜も更けたから――」

仲子は、佃の低めた聲や、自分を見る眼つきが何だか五月蠅かつた。形の上では突き離され乍ら、却つて母の心持がよく通じるやうな、錯倒した感情が生れた。

二階を降りようとして、仲子は階子口でよろけた。佃が、すぐそれを支へ、痛い程彼女の腕を捉へた。

（九）

翌朝、仲子は九時過に目を醒した。

佃は起きて、椽側に居た。秋らしくからりとした日で、乾いた梧桐の葉が鳴る音がして居た。仲子は、體ちゆう非常にだるかつた。――だるいと名つける、はつきりした感覺があるのではない――床から體を持ち上げる張が抜けて居るのだ。彼女は、寢たまゝ、彼方の高臺の上の秋空を眺めた。實に澄んで居る。此那空をこれまで見たことがあつたゞらうか。寢て居る部屋に、その碧い空から清々しい力のある風が吹き通して來た。仲子は、無碍な、其故ひとしほ魂にしみる哀感で、思はず眼を瞑つた。

昨夜、一時頃歸つて來てから今朝まで、仲子は殆ど物を云はなかつた。寢しなに佃が、着物を着換へ乍ら、

「あゝあゝ――まあ仕方がないさ、人間は二つの神には仕へられないから」

と云つた時、彼女はまだきちんとして坐つたなり

「……貴方だつて私の神ぢやないわ」

と呟いた。その位であつた。床に入つてから、彼女は寢つかれなかつた。異樣な、氣を失ふやうな寂しさを感じた。

彼女は闇の中に兩手を擴げ

「もうちやま」

と呼んで、劇しく泣き出した。父は、二階で彼等三人が切れ〲に、險しい話をして居る間ぢゆう、階下の小さい娘のとこに居た。仲子は歸りがけ、戸のすき間からちらりと父の後姿を見た。ずんぐりした、腰に兵兒帶をまきつけた後つきが目について、仲子は此世の其處にだけ、自分をしんから愛し暖めて吳れる光があるやうに感じた。この心持は切なく仲子に涙を流させた。

佃が立つて來て、寢て居る仲子の額をさわつた。

「どう？工合がわるい？御醫者を呼ばふか」

「――病氣ぢやあないのよ……一寸へばつたの」

一日中、仲子は默つて横はつて居た。

二日五日と經つうちに、仲子は恢復した。氣持の上で、新しい一つの添へものを持つて恢復した。それはこれ迄にないさつぱりした氣持、輕やかな氣持に、不斷の淋しさが加つたもので、田舍から歸つて後ずつとある彼女の自分でしやんと立つて行かうとする欲望と、眞面目に結びついたものであつた。仲子は、次の、小さな仕事に着手した。自分の精神

を引締めて見れる點、この外見不幸らしいことも感謝してよい氣がし、伸子はしんみりと元氣があつた。彼等は、その夜以來、動坂のドの字も口に出し合はなかつた。斯ういふ狀態が、どの位續くのか、本能のやうなもので伸子は一生の間でないことは知つて居たが、さりとて來月終るとも思へなかつた。

月が變つて直ぐの或日のことであつた。伸子は思ひがけず、玄關に和一郎の聲をきゝつけた。自分の作つた紙屑にかこまれ乍ら、伸子は、元氣な彼の顏を見ると、思はず男の子のやうに

「やあ」

と、よろこびの聲をあげた。

「どうした?」

「姉さんもどうした?」

「この通りよ」

和一郎は、伸子の顏や四邊の様子を見廻し、

「ぢやあ結構ね」

と、はじめて坐つた。二人は、三時間ばかりとりとめなく愉快に雜談した。和一郎は、やつと、來年の春或專門學校へ入る氣になつたと話した。

「——僕、どんな奴だつて中學を出たばつかりに、すぐ悅んで上の學校の試驗なんぞ受けるんぢやあないと思ふな。第一、何が自分の好きな仕事か大抵は分らないし……氣持だつて……適當ぢやあないもの——」

歸りがけ、向ふをむいて靴をはきながら、和一郎はさりげなく云つた。

「ゆふべ、お母さんが僕に、この頃ちつとも姉さんのところへ行かないやうだね、と仰云つた」

月半ばに、仲子は、再び思ひがけない人の訪問を受けた。それは、おとよさんであつた。祖母がいよ〳〵隱居所へ來たので、其伴がてら上京したのであつた。

「御隱居さんも是非いらつしやりたいつて仰云ひましたけれど、今日はまだお疲れだし致しますからね――」

おとよさんは、しげ〳〵仲子を見て居たが、急に

「私、御元氣にしてゐらつしやるのを見ると却つてお可哀さうで」

と云ふと、善良さうな、小皺のある顏をさつと赧らめ袂のかげで涙をこぼし始めた。

「よく何でもおわかりの方々だのに、本當にどうしてね………私お話を伺つて、何とも云へない氣が致しましたよ」

仲子は、おとよさんの一途な歎きに、濟まない、極りわるい思ひをした。彼女は、おとよさんを慰めるやうに、笑ひさへ浮べさうにし乍ら云つた。

「大丈夫よ、其那に涙なんか出されると、私困るわ、今に何とかなるから安心して頂戴」

「どうぞね、あなた、實の親子でゐらつしやつて其那……」

おとよさんは眞心をこめて呟いた。

「それは、奧樣から御覽になれば、佃さんにもいろ〳〵御不足はありませうが、その爲に貴女までね………………確り遊した方ですから御無理もないかも知れませんけれど……」

その言葉で、仲子は母がおとよさんになど、衝突の原因を自分との間に在つたのとは違つた風に說明してゐるらしいのを知つた。

なか一日置いて、つや子が彌生と遊びに來た。じき、保が花壇の花があまり美事だからと持つて來た。弟妹達は此迄よりずつと頻繁に來るやうになつた。仲子は、その陰に一々母の心持を感じた。彼等がかへると、彼女はきつと、仲子自身子供の時分きかれたやうに斯うきくのだらう。

「どうだい、姉さんはゐらしたかい、面白かつたかい？」

保は保らしく、つや子はつや子で女の子らしく其に答へるだらう。すると、母は又重ねて訊くに違ひない。

最後に、ちよびつと、然し特別な關心で

「佃さんは居たかい？」

或は、

「どうして居たかい？」

と訊くのではあるまいか。相手が無心だから、彼女は知りたい詳細に觸れられず、いくら訊ねてもきゝ足りなく思ふのではあるまいか。彼等が歸つたあと、仲子はよく其那空想をした。佃は、つや子や保の來るのを悅ばなかつた。つや子が彼の頸にからまつて、

「ね、一緒に遊びませうよ、ほらおはじきがあるからね、お姉ちやまと二人ぢやつまんないから、よう」

と甘えても、彼は、體を堅くしたまゝ、つんと依估地に拒絕した。

「今、僕はいそがしいから駄目です」

仲子は、恐怖した顏つきで彼からそろりと離れる子供の姿を見るに忍びず夫に云つた。

「貴方が癪に觸るのは尤だけれど、其なら何故、ちやんと云ふべき時に、直接に堂々仰云らなかつたの？——何も知らない、小さいものに意趣がへしみたいなことをするのは、私男らしくなくて嫌いよ」

佃は、さう云はれると實に寃罪といふ表情で、逆に

「何時か其那ことをしましたか」

と反問した。春、田舍に行く前であつたら、仲子は忽ち感傷的になつて仕舞つたどらう。が、彼女は僅に、彼の心持を此方から說明した。彼が、あの時、ちつとも忙しくなどなかつたこと、つや子はごく無邪氣であつたこと、それに其那險のある容子をしたのは、彼の內心に原因があつたに違ひないこと等を。佃は、同意も、否定もせず終りまで仲子に云はせてから

「それは、皆君がさうだと思つて居ることだ。僕の氣持とは違ふから、其だけは云つて置きますよ」

「……ぢやあ、貴方の氣持を教へてよ、私知りたいのよ、ね、どう違ふの？」

「——僕が上手に話せないのを知つて居るでせう、いつか分つて呉れるでせうよ……本當に僕を愛してくれる人には分らなくちやあならない筈だ……」

仲子は體ぢゆうに力を入れて、自分の額をきつくきつく、擦つた。「さあ、可哀想な奴、又皺をふやさないように！」

仲子は斯ういふ時、若し自分に笛が——せめて口笛でもよい、吹き鳴らせたらどんなに凌ぎよからうかと思つた。歌詞のない、息に準じて、高くも低くも、鋭くも軟かくも自由自在に響かせられる笛であつたら、悲しい嬉しい思ひも感情も、さぞ樂々とそのまゝすなほに溢らせられてよいことだらう。

（十）

十一月に成ると、様々な原因から、仲子は再び不安に捕はれだした。

勤坂とのいきさつは、あれぎり……弟や妹や稀には祖母が來るぎり、一向變化しなかつた。僅九月から、まる二月經つたばかりなのだから其は寧ろ當然ではあつたが、仲子に辛く思はれたのは、十二月が近づいたといふ豫想からであつた。日本の、家族的な習慣で、どこでもさうであるやうに、十二月の大晦日は、仲子の兩親の家でも一年中で一番賑やかな日であつた。いつからさうなのか、自分で思ひ出さない頃から、仲子がこの祝ひ日の世話役であつた。母が忙しく他の方に働いて居る間に、仲子は花や蠟燭や贈物やらで、卓子を飾つた。（クリスマスと一緒にする風だつた）閉め切つて、一生懸命になり、飾り終つた部屋に、

「さあ！お入り下さい」

と、導き入れる嬉しさは、子供らしい瑞々しさでいつでも彼女を有頂天にした。家中が彼女に感染して喜んだ。その單純な歳暮の樂しみを今年は家ぢゆうが持てない、たゞ他の都合で仕ないのならよいが、仕たいのに、仲子が居ない。其故仕ても始まらないとよしたとしたら、大晦日はどんなに滅入つたものになるだらう。皆が、例年にない沈んだ夜を送つて寢床に入る時のこと、又その時刻には自分も此方で一層徹へる思ひで枕につくだらう時のことを想ふと、仲子は弱いことだと叱り乍ら喉がしめつた。西洋の通俗小説にあるやうに、其ならその日に自分から詫びて團欒の中にうけ入れて貰ふか？仲子は、いつそ親や弟妹が東京に居なければよい、それが駄目なら自分達が東京に居ない方がよいと思つた。そしたら、不自然乍ら自然らしく、苦しい晩は過せるだらう。旅行へ若し自分等が出るとしたら、何處がよいか，

金がどうにかなるだらうか、伯が自分の氣持を察して承知して呉れるかどうかゞ先づ疑はしい。――仲子は、机に掛けた紙の上に、考へにつれて、疑はしいとか、して呉れる、とか樂書をしながら考へつゞけた。

さういふ或日、仲子は庭の隅で、一本の菊をいぢつて居た。粗末な泥鉢に植つた夜店の菊ではあつたが、澤山ついた純白の花からは、十一月らしい芳香を撒いた。凋んだ古花を鋏で剪つて居ると、露路に俥のベルが聞えた。仲子は、板塀の切戸をあけて見た。祖母が、俥から降りた。仲子は

「おばあさま、こつち、こつち」

と手招きをした。そして、俥夫に云つた。

「かへりはお送りするから歸つてよろしい」

祖母は、珍しさうに

「ほう、こんなところに木戸があるのか」

と、見廻し乍ら草履をふんで庭に入つた。

「今日は買物を少ししようかと思つて出たが、はあ俺にや分らないからやめにして、茶をよばれに來たごんだ」

仲子は、笑つた。祖母は、俥を命じさせるとき、きつと仲子のところに來たいとは云はず、本郷辺へ呉服ものを見に行くからとでも云ふのだらう。そのせずとよい云ひわけを、彼女は、仲子のところに來て迄云ふのだ。

「お茶ぐらゐはいくらでもさし上げてよ。――けふは、一つ菊見の眞似でもしませうか」

仲子は、椽側に坐布團や茶を出させた。

そして、祖母をかけさせ、自分も傍で、さも壯大な花壇でも眺める振をし乍ら

「——さてい丶眺めぢやのう、見渡す限り千本白菊の眞盛りだ」
祖母は、美味さうに深く煙草を吸ひ込み、さて吸殼をはたき乍ら、くす〳〵笑つて揶揄つた。
「………俺の眼がなじよになつたか、菊は一本しか見えないごんだよ」
「——駄目よ、おばあさまつたら。もつと在るつもりよ！もつとある積りよ！」
傍から、きよが、白い瀬戸もの丶大きな義歯をむき出して、愛素笑ひをした。
「ほゝゝゝ、奥様の面白いことを仰云ひますこと、ほゝゝゝ」
（伸子は、きよが、自分を二言目には奥様々々と呼ぶのが嫌であつた。奥様と云はれる度に伸子は體の何處かを鄭重に、いや應なく摘まれ、何方かへ引張られるやうな、工合のわるい氣がするのであつた。）祖母は上機嫌で、國技館の菊人形の噂をした。彼女は、やがで足先が冷えると云つて家に上つた。
「——俺も若い頃にやあどんな女にもまけなかつたが斯うなつては死ぬばかりだなあ…………針のめど通すに縫ふ程かかるごんだ」
皆が、八十の祝ひを來年の正月早々しようと云つて呉れるが、無駄な費へだと云つた。
「其那こと位してお貰ひになつて結構よ、皆だつてよろこぶわ、是非なさいませ、私も何かお祝してよ」
「有難いことはことだが………」
祖母は、彼方に行つたきよに聞かすまいと妙に眼を働しておろ〳〵呼聲になつた。
「………お前等、今見たいな馬鹿なこととして居ちや、俺そげなことしても、一向詰らないごんだよ。——お前來られまいちえ」

仲子は、困つた。彼女は曖昧にうなつた。

「ふむ……………」

「なじよな譯か知ないが、やくたいもないごんだなあ―

きよは、平常話し合手のない故か、祖母が來ると、よく喋つて相手をした。自分には、男の子がなく娘ばかりだとか、其故

「何の役にも立ちませんのよ、くれてやつたものでございますから」

とか。祖母はそれに答へて、自分は、三人息子が居たのにたつた仲子の父一人になつたとか、孫が他の娘のもまぜて何人あるとか話した。彼女は、

「孫は大勢あるが、これが子供のうちから馴染んで居る故か一番めんごいことよ」

と、仲子を見た。

「もう死ぬ〱と思ひ乍ら、やがて曾孫まで見るかも知れないなあ………」

祖母は、樂しさうに干菓子をたべ乍ら、何か考へて居たが、眞面目な顔つきになつて呟いた。

「………お前、見たとこだほれで、丈夫でないかしらて………」

「なぜ？丈夫よ」

「何して子が出來なかろ」

昔ものらしい遠慮なさで、祖母は續けた。

「今の若いものは、嫁入るとすぐ子を産むぢやないか」

「いやあね、どうでもいゝわ、其那こと」

「弱かあるまいかと思つてさ………さう云へば佃さんは顔色がいつもよくないな。佃さんが子種なしでもあろうかしらて」

仲子は、本氣になつて

「やめて頂戴、其那話」

と遮つた。彼女は、いやで涙が出さうであつた。子の話はいつだれにされるのもいやであつた。まして祖母のやうに、まるで飼牛か何かのやうに話されては堪らない。いそいで、話題をかへようとすると、きよが傍から、一種の笑ひを滿へ乍ら、ずつと祖母の方へ頸を延し、宛然ひどく耳の遠い人に物でも云ふやうに云つた。

「御隱居樣、御心配なさることとございませんよ、もうじきお目出度でございますよきつと——はい」

そして、仲子の方にいやに心得て居るといふ風な顔をし、笑ひを含んだ横眼を使つた。仲子は、反射的な嫌惡から、ぶちたやうに思つた。何といやな姿だ！厭がるのを知つて居ながら。——きよが、其那ことを予言めかしく吽いた意味が仲子によくわかつた。彼女は、女のさとさで、仲子の定りが、半月も遲れて居ることを知つて居ると仄したのだ。祖母は、たゞ漫然と

「さうかなあ」

と答へた。

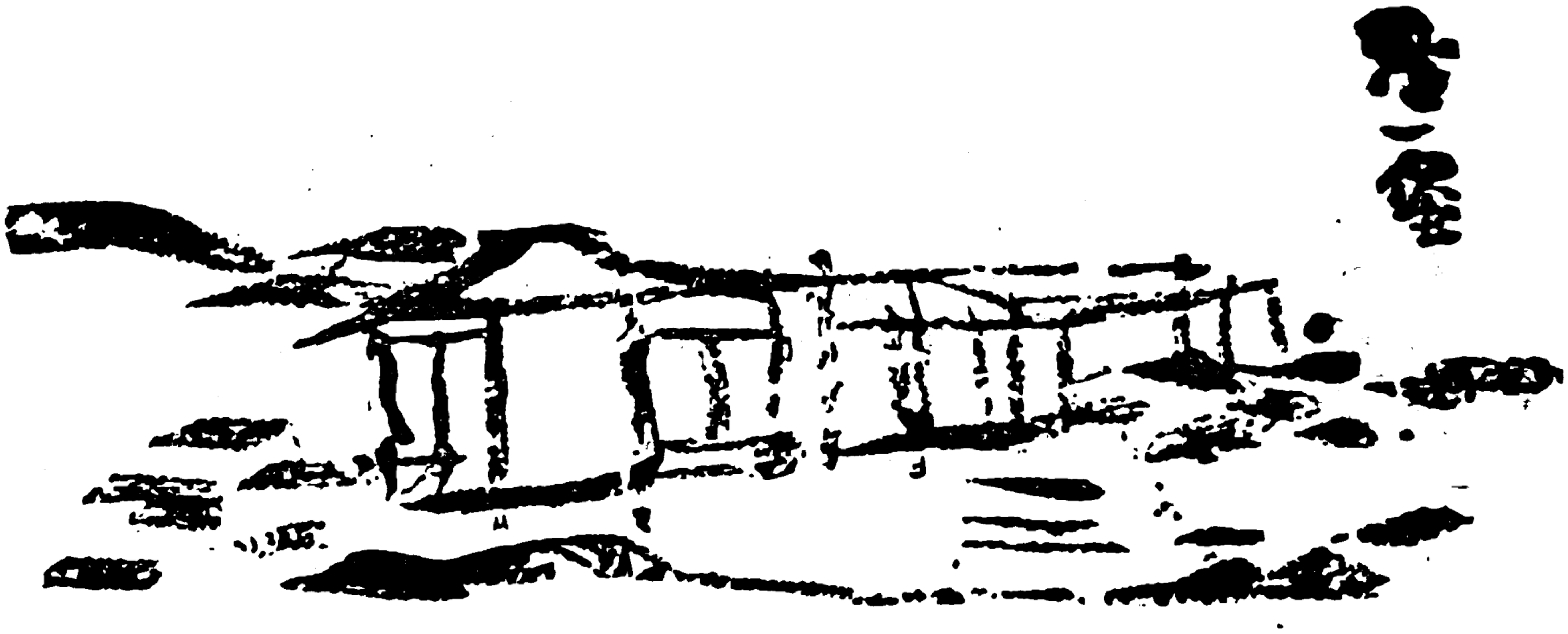
仲子は、祖母のする昔話を聞き乍ら、不愉快な心持から自由になることが出來なかつた。祖母が、頭巾をかぶり、俥に乘つて歸つてからも同樣であつた。彼女は壓しつけられた、物に憑かれたやうな氣持で、早くから電燈の點く薄ら寒

い冬の黄昏の家を歩き廻つた。きよが餘計なことを云ふまでもなく、もう充分伸子は自分の體の極めて輕い變調に神經質になつて居るところであつた。數日來、折々暗い動物的な不安といふやうなものが彼女を脅した。何かの拍子で、氣がつくと、伸子は心の中で克明に日どりを數へ、種々自分を安心させる理由を、自分に向つて數へた。さういふことに煩はされることは、好みから丈でも厭であつた。強いて平氣にして居るところを、きよの暗示的なおせつかいや、祖母の露骨な詮索で、彼女はすつかり陰氣になつて仕舞つたのであつた。きよが、いやに笑つて自分を横目で見た時、ぶちたい程に感じた嫌惡――その嫌惡は、いつまで經つても伸子の心から消えなかつた。きよに對してゞはない、若し自分が身重になるのではないかといふ事實に對して。―伸子は、自分が魂の奥にこれ程烈しい嫌惡を藏して居ようとは我乍ら知らなかつた。この感情が普通でないだらうことはよく分つて居た。嚴しい意味から云へば、結婚生活を營んで居ながら、其點だけ恐れ厭ふことは、あり得ない事でさへあるかもしれない――其等は皆よく分つて居るのだが、この、どんな言葉でも強さを現し切れない程強い嫌惡、どうしても他の言葉に云ひかへようのない嫌惡を、どうしたらよからう。

萬一母になる事が事實となつても、猶一方にこの暴々しい激情が燃えつゞける場合を考へると、伸子は自分が人間でなくなるやうに恐ろしかつた。その恐れの下から、考へつゞけてゆくうちに、更に一つの恐怖が徐ろに頭を擡げ出した。それは、抑々結婚の最初に遡る一つの、悲しい反問であつた。自分は、彼と結婚しようとした時、あのやうに心を入れ、親にならない約束をした。理由は、自分に仕事があることが主であつた。けれども――伸子は、痛みを忍んで心に迫つて行つた、――けれども、本當に、本當に、それだけの、それぎりの譯だつたのだらうか？伸子は、今その底に、當時こそ意識しなかつた、見えざる何ものかの力が働いてゐるのではあるまいかと思つた。即ち、感傷や空想や貧

弱な衒學のごた〱混つた佐々伸子の、蕊に活きてゐる唯性としての女性、その女の本能が知られないところから佃が父としては不充分なのを嗅ぎつけ、警戒を加へたのではなかつたらうか？

さう思つて顧ると、伸子は現在自分が姙娠といふことに對して持つ猛烈な嫌惡と、心にある我が子といふものゝ影像とは、まるで別なのに思ひ至つた。伸子は、まだ生れない我が子が決して憎く嫌なのではなかつた。其は可愛い。珠のやうに尊く、いとしく、希望し得る最大の希望をかけて大切に思はれた。誰にも穢されたくない我が子！さうだ。自分は、その大事な大事なわが子を、このやうな環境に於て、このやうな父の子として送り出すのが、送り出さなければならないかといふ想像が、腹立たしく、回收し難き何事かであるやうに思ふのではないだらうか。――この考へにぶつかつて、伸子は、自分の體を二本の脚で支へ兼るやうな自己分裂を感じた。この男の子供を持つのはいやだ。この男といふのは夫だ。自分が愛を感じ、牽きつけられた夫――一體、この人を自分の子の父とするのはいやだが、愛しはするといいことがあり得るものだらうか。伸子は、まるで愛さなければ自分の心に生じようのない彼への集注を自分が持つて居るといふことが、何かの答へにはなるまいかと迷つた。けれども、思ひ切つて考へを更へ別の側から眺めると、此等は案外亢奮した頭が勝手にこね上げた謂はゞ理窟で、事實は、自分が變つた生れつきで、愛す者の子でも、子供は產みたくないといふひねくれ者だといふのに過ないかのもしれない。――伸子は、火の氣ない、もう眞暗になつた寒い部屋で、分らない自分の正體を追つた。



水不足

正宗白鳥

この土地には水が缺乏してゐる。震災後は殊にひどくなつた。地盤が動搖して水脈がが狂つたのか、多くの井戸が涸れてしまつた。昔から、どんな旱魃が續いた時にも、水量の減じたことのないと云はれてゐた山ノ手の大井戸でさへ、一月十五日の二度目の大地震のためにすつかり調子を狂はせて、稍々もすると、乾枯びた底を見せるやうになつた。他所の井戸で貰ひ水の出來ない家では、夜の明けないうちから、汲みに出掛けた。

雨の少かつた去年の冬から此年の春にかけては、下町にある四五軒の湯屋は屢々休業した。辛うじて營業を續けてゐた家でも、時間を縮めたり湯水を惜しんだりした。それで、清潔な湯に氣持よく入りたい者は、汽車に乘つて平塚まで入浴に行くやうになつた。

「冬だからまだどうにか間に合つてゐるが、夏場に大勢の避暑客がやつて來たらどうするだらう？」と、私は氣遣つてゐた。

私の家には井戸がなかつた。何時まで此處に住むか分らないのに、借りてゐる地所に井戸を鑿るのは馬鹿げてゐるし、ことに私の家の建つてゐるあたりは、地下が岩石なのだから、井戸の鑿賃が高い上に、鑿つても水が出るか出ないか、はつきり分らないと云はれてゐた。しかし、下が岩石で固められてゐたからこそ、あの激震に會つても家屋の崩壞を免れて、生命を全うすることが出來たので、さう思へば水の不自由なくらゐは忍んでもいゝのであつた。

「水が充分にありさへすれば、この土地もいゝんだけれど」と、妻はつねに零してゐた。水に富んでゐる土地から來た知人にも屢々訴へた。

私だち夫婦はたまに東京へ行つて、水道の栓を捻つて、有りあまる奇麗な軟い水が湧出るのを見ると、貧人が急に富豪になつたやうに感じて、他人には分らない有難さを覺えて、その水に親しんだ。そして、湯屋などで都人士が、湯水を濫費してゐるのを見ると、勿體ないことをすると思つたりした。

移轉當時、妻の機轉で、浴室に大きなタンクを造らせて、屋根から雨水を引くことにした。「大島のやうですな」と、水汲人夫が冷かした。一荷いくらの水代を拂ふのは、洗濯好きの主婦のゐる私の家では、米代よりも水代が嵩張る譯なので、天水の利用はいゝ思付であつたのだが、その代り、大雨が降出すと大變だ。夜中にでも飛起きて、タンクに淀んでゐる古水をかへ出さなければならない。タンクが溢れると、浴槽へうつさなければならない。この機會にて、洗濯に取掛らなければならない。空樽にでもバケツにでも洗面器にでも、滿々と水を湛えて、我々は一安心するのである。……

……我々は水については、どれほど神經が過敏になつてゐるか知れない。

移つて來た最初の夏、久しく雨が止絶えてタンクが涸れて、汚れ物が大分溜つたので、妻は近所の共同井戸へ行つて、二三枚の浴衣を洗濯した。私も汲立ての冷たい水でサイダや果物などを冷やすために、バケツで二三杯汲んで來たが、

すると、薄暗い路次で立話をしてゐた長屋の主婦が、「別荘の人は勝手に人の水を使つて、後を放散らかして歸つて行くんだからいゝや。おらつちは井戸替えをしたり、修繕のお金を出したりせにやならないから割に合はねえだ」と、聞えよがしに云つた。

「洗濯してると、ジロ／＼此方を見るんですよ。この邊の井戸は組合の外の者には汲ませないんでせう」と、妻は云つた。

「しかし、金さへ出しや汲んで來て呉れるものがあるからいゝぢやないか。それだけは別莊地だから便利だ。……水汲人夫がなくなりや、自分で大井戸まで汲みに行くんだね。おれだつてバケツに一杯づゝなら提げて來られる」

「でも、水にお金を出すのは馬鹿々々しくつて」

ちやんとした浴室があつて、先住者が、檜づくりの浴槽を無代で讓つて呉れたのであつたが、一人切りの小人數で、わざ／＼風呂を立てるのは厄介なので、大抵は下町の湯屋へ出掛けることにしてゐた。私は運動がてら、氣晴しにもなるし、毎日下町まで往復するのは何でもなかつたので、湯屋の戸の開く時刻を見計つて、少しくらゐ戸口に佇んで待つてゐても、一番風呂に入るのを一日の樂みにしてゐたが、妻に取つては、湯屋通ひは厄介であつた。ところが、何時となしに懇意になつた近所のある商家で、「入りに來い」と勸めて呉れたので、それを幸ひに貰ひ風呂をすることにした。この商家の老主人は、獨力で富みをつくつたので、安田善次郎翁のやうな人であるが、私だちに對しては、不思議に好意を寄せて呉れた。家事についていろ／＼世話を燒いた。震災後の修繕の際には、自分で大工を連れて來て差圖したりした。「世事にうとい若い方のすることは、傍で見かねる」と云つたりした。

私は、貰ひ風呂は氣兼ねがするので、いくら勸められても頑として應じないで、地震後一月あまり湯屋の休業中は、

水浴で凌いで來たのであつたが、妻は非常に助かつた。一日置きに立てた湯に、眞先きに入れて貰えた。

氣をつけて見ると、この近所の人は、何かの緣故に依つて、風呂桶の据ゑられてゐる家へ貰ひ風呂に行つてゐるのであつた。老人は云ふまでもなく、若い者でも、一日の勞働を終つて下町の湯屋まで出掛けるのは臆劫なので、近所で間に合はせるやうにしてゐた。

私は故鄕の家の、風呂貰ひの爺さん婆さんのことを思出した。家中の者の入つたあとで、誰れかゞ垣根越しに近所の家へ知らせると、その聲に應じて、次から次へ貰ひ手がやつて來て、小さな汚れた風呂の中へ入つてゐた。そして、夏の頃であると、浴後に涼み臺に休んで喧ましく、その日の村の噂をして時を過した。……時世の變つたこの頃だつて、あの風習はまだ名殘りを留めてゐるだらう。

「でも、人を手頼るのは不安なものですよ。いくら親切に云つて呉れたつて、それがいつまで續くか分らないんだから」と、妻は、他の事について近年さう思つてゐると同じやうに、貰ひ風呂についてもさう思つてゐた。

が、彼女は、近所の百姓家にも、ある關係から話合つてゐるうちに、そこの風呂にも入れて貰ふことにした。その風呂場は、草花などの咲いてゐる畑の側に假小屋見たいに建てられてゐた。湯の中で蟲の音が聞かれたり、月が見られたりして、傍目には風流に思はれたが、貰ひ風呂の弱味があると、さう悠長に湯浴を樂んでゐられさうでなかつた。

兎に角、妻が、この百姓家とかの商家の風呂へ、一日代りに入れて貰ふことは一年あまりも續いた。百姓家の若い主婦は、私の家の裏庭の木戸口へ廻つて聲を掛けた。商家からはいつもぼんやりした店僮が使に立つて呼びに來たが、この店僮は、私だちの返事がおくれると、玄關から無遠慮に上へ上つて搜すのであつた。季節々々の食物など持つて來て呉れる時でも、この小僧はキヨト／＼あたりを見廻はしながら、玄關から臺所まで入つて來るので、「これから、聲を掛

けて呉れさへすりや、私の方から出て行きますよ」と云ふと、「それぢや、お氣の毒だから」と答へて、やはり無斷で入つた。

風呂場ではいろ〳〵な世間話が聞かれた。

私の家の向ひ側の八百屋には、老夫婦が住んでゐたが、この老夫婦も、私の妻と同じやうに、かの商家や百姓家の風呂を貰つてゐた。

「八百屋のお主婦さんは押しが强くつて、まだ湯が沸いてゐないと云つても、ずん〳〵先きへ入つて、自分が出ると、直ぐにお爺さんを呼んで來て入れるんですよ。わたしの家ぢや、皆んなが野良から歸つて、これから汗を流さうと思つて待つてるのに、あのお主婦さん、そんなことを構ふ人ぢやないんだから」と、ある時、百姓家の主婦が不平を云つた。

その話を妻の口から聞かされた私が、

「八百屋ばかりぢやない。お前だつて、あの家の者よりも先へ入れて貰つてるんぢやないか。水の足らない土地で骨を折つて風呂を立てて、他人を先きへ入れる氣によくなれるものだ」と云ふと、

「あの人だちは、昔氣質で心が穩かだからですよ。あしこの老人夫婦なんか、そりやノンビリしてゐるの。……此間も、小さい子が居酒屋の飼犬に嚙まれて、それが狂犬らしいと云ふのに、苦情も云つてゐないんです」

「今の時世にでも、百姓にはそんな人があるんだね」

「あの人だちは、とても八百屋の主婦さんとは口の上で太刀打ちが出來やしませんよ。お向ひの奥さんを、何故わたしより先きへ入れるつて、つけ〳〵とやり込めることもあるんですつて」

八百屋の主婦は、六十を越してゐたが、口が達者で灰汁ぬけがしてゐて、この近所の田舍婆さんとは際立つて違つてゐた。そのあまりに利害に敏過ぎるのに、私の妻などは、時々反感を抱きながら、屢々その口車に乘せられた。

「わたしの家には、風呂桶を置く場所も御座いませんし、お爺さんに、あの年齢で風呂水を汲ませる譯にも行きませんしさ。近所で入れて貰ふより外爲樣が御座いませんよ。でも、たゞで入つてやしません。ちやんと附屆けをして居りますよ」と、主婦は目元に例の愛嬌をこぼして云つて、「あの家も慾が深いんですからね。此間も、××へ行つた時の土産を持つて行くと、長宮の方がお前んとこよりや餘計持つて來たといふやうな口を利くから、そんなら長宮の方のをわたしの目の前へ出して見せろ、そんな筈はないと小突いてやりました。此方の心附を、多いも少いもあつたものですかよ」

口達者な主婦は、かの商家の込入つた家庭の内情をも、そのすばしこい目で觀察して、噂の種にした。それが商家の主人の耳に入つたので、「そんな出鱈目を世間に言觸らされちや困る」と、主人は家の者に命じて主婦を詰つて、「家には病人もあることだから、今後は湯に入ることもお斷りしよう」と云はせた。

「それはわたくしが惡う御座いました」主婦は早速主人の前へ出て詫びて、風呂貰ひにはその晩も出掛けた。

「そんな六ケ敷いことを云つたつて、あなた。蔭ではどんな偉い方のお噂でもいたしますさあね。」と、主婦は、商家で叱られたことを、私の家へ來て興味のある話の種にした。

しかし、不斷から主婦を煩さがつてゐた商家では、今度をいゝ機會に頑强に入浴の拒絕をした。

「家には病人があるんだから、當分見合はせて貰ひたい」と云つて、主婦の歎願を取入れなかつたので、主婦はしまひには淚を落した。

「ぢや、どうしても入れて頂けないので御座いますか。……それなら、お向ひの奥さんもお斷りなすつて下さいまし」

「そんなことは、わたしの方からは云へないから、お前さんが云ひたければ、自分で、お向ひの奥さんにさう云ひなさい」

主婦は默つて歸つたが、その翌日私の家の窓際へやつて來て、機嫌のいゝ笑話をしたあとで、

「わたくしはお風呂が貰えなくなりました。」とこぼした。

「人様のお世話になつてると、いつかそんな目に會ふから手頼りないものね。わたしだつて何時いけなくなるか分りませんよ」と、事情を知らない妻は、同情を寄せた返事をした。

今日は人の事、明日は自分の身の上と、妻は感慨を催してゐたが、その夕方、例のぼんやりした店僮が、「奥さんお風呂が湧きました」と、いつものやうに知らせに來た。

妻は、入浴具を持つて八百屋の前を横切るのに氣兼ねをしながら、商家へ行つたのであつたが、歸つて來ると、

「わたし達はよつぽどお馬鹿さんなのね。」と、商家で聞いたことを私に話して、「世の中のことは底には底があるのだから、迂濶に人に同情も出來やしない。八百屋の主婦さんは、照隱しに今朝あんな泣事見たいなことを云ひに來たんですよ」

「あの主婦さんも案外氣が弱いんだな。」

「……でも、わたしも、これを機會に貰ひ風呂なんか止さうか知ら。今のうちはよくつても、先方でいや氣が差して來た時に、長い間の習慣で斷はるにも斷はれないで、お互に氣まづい思ひをするやうなことが出來て來るでせうか

ら。……百姓家の方でも、この頃は變に卒氣ないんですよ。充分な附屆けをしないからなんでせうが、高が湯のお禮に大袈裟なことは出來ませんからね」

妻はさう云つて、兩方とも穩かに斷はることに極めた。そして、自分の家で簡單に湯に入れる工夫をして、ブリキ屋に賴んで、トタンの湯桶をつくらせた。

それから商家から小僧が呼びに來た時に、二三度續けて斷つたが、すると、商家では變に思つて、若い主婦がわざわざ譯を糺しに來た。

「八百屋の主婦さんにこの先また何と云はれるか分りませんから、わたしの家で湯を使へるやうにいたしました」と云ふと、

「へえ、それで大きなトタンの桶をおこしらえになりましたの。あんなものを何になさるのかと思つてゐました」と、商家の主婦は面白さうに笑つて、「でも、父はどうしても奥樣にこれまで通り來て頂かなきやならないと申してゐますのです。さうでなければ、今まで長い間御懇意にしてゐたのが何にもならないと云つて機嫌が惡いんですよ」

さう云つて熱心に勸められたので、妻は今まで通り商家へ貰ひ風呂に行くことになつた。しかし、百姓家の方は、それつきりで、向うから呼びには來なくなつたし、妻の方から、ある用事で夕方顏出しすると、そこの若い主婦が、また湯に入りに來たのかといはぬばかりに、目に角立てた。八百屋の主婦もついに斷はられたらしかつた。

暫くして、妻が野菜を貰つた次手に、

「あなたは、この頃はお湯はどうしてゐます？」と訊ねると、

「とても下町のお湯屋までは行かれませんから、××さんのお別莊にお願ひして、入れて頂いてゐるんです」と、主婦

は弱つてゐるやうであつた。

「もう避暑のお客様か大分來たやうだから、この頃はお忙しいんでせう」

「えゝ、忙しいのは結構なんですけれど、今年はお爺さんも弱つちやつて、おらあ、もう働くのはいやだ、東京の息子の所へ行つて暮したいと云ふんで困りますよ。いくら息子の家でも、他人もゐることだから氣兼ねでさあね。此方にゐりや、老人同士で柔かい好きなものを氣ままに食べられるだけでも得なんですからね」

「どつちにしてもお婦さんは、懐中が温くつて生活に不自由しないんだから幸福ですわね」

「幸福が不幸福か、人間死んで見なきや分りませんさ。わたしども、この先どれほど生きてるものでもないから、老人同士で四國まゐりでもしようかなんて云つてるんですよ」

この老いた主婦には實子はなかつた。

その話を聞いた私は、

「歳を取ると、後生願ひにさう思ふのかも知れないけれど、四國遍路は樂なものぢやないよ」と云つて、自分自身の生活について考へた。

かのトタンの桶は、入浴の具になるかはりに、天水溜めに役立つべく、浴室のタンクの側に置かれた。



所謂生き死に

佐佐木茂索

第一

麟は氷を包んだ手拭で鉢巻をしてゐた。半ば辷り落ちるやうに肱掛椅子に腰をかけ、兩手は力の拔けた姿勢でだらりと下げてゐた。持ち續けた興奮で顏の所どころは赧かつたが、手の皮膚は弛緩した蒼さだつた。――

凡て昨日のままの今日だつた。

「何だ、まだ病人のやうな恰好をして。」

かういひながら村野は麟の前の椅子に腰を下した。麟は物憂さうな眼を上げて村野の入つて來るのを迎へ、そのまゝの無言で村野の言葉を受けた。

「どうしたといふんだ。氷なんかあてて――頭がまだ痛むのかい?」

村野は先づ外側から觸れていつた。麟の樣子は昨日のやうに弱よわしかつたが、しかし其處には何處か二十四時間の經過を思はせるものがあつた。村野の肚づもりとぴつたり合ふ時間の効果が見えてゐた。次の二十四時間、更に二十四時間――

村野は麟の癒る日をひそかに計算した。村野は麟の様子をぢつと目守りながら、今日はいささかの揶揄を混へてもよからうかと思つた。

「おでこに氷なんかあててさ、まるで病みたいぢやないか。とつちまへよ。氷で冷える質の熱でもあるまいし、そいつをとつちやつて――――」

さういひながら村野は立つて窓を開けた。

「第一から閉めきつて、これぢやなほ蒸むしするばつかりだ。氷よりは窓を開けるのがいいし、序に外へ出りやなほいいや。ちと――――散歩でもするんだね。」

「おい、閉めてくれ、寒い。」

麟はやつと口をきいた。さうして寒さといふより、何か皮膚を刺すものを怖れるやうな恰好をした。

「寒いつて陽氣ぢやないぢやないか。――――そりや閉めてもやるがね。」

だが窓はそのままで、村野はもとの席へ戻つた。

「おい、閉めてくれよ。」

麟は顔を突き出して村野を睨むやうに見た。村野は麟の疲れた眼を見返しながら

「さう執拗ぢや。」といつた。「それぢや毒だよ。さらりとしちまへよ。せつかく昨日か今日になつたのぢやないか。それをまたもとへ戻しちや、もとも子もないや。」

「何でもいいから閉めてくれ。」

「そんなにいふなら閉めてやるかね――――素直に閉めてやるがね、その代り俺のいふことも素直に聞くんだらうな。―

といひすてて村野は窓を閉めに立つた

「いらんものが」麟はつぶやいた。「聞えて來るんだ。」

さう呟くのを聞くと村野は大げさに振返り

「何だつて?」といつた。「變な事を、いつてるぜ。」

そこで快活に笑つてみせた。麟はちらと咎めだてするやうに顔を上げたが、すぐそのまゝ眼を閉ぢた。村野は窓際の椅子に寄つかゝつたまゝ直に火を點けた。

麟はさすがにげつそりと痩せを見せてゐた。閉ぢた眼の下に醜い腫れぼたさの影を置いて、苦闘の跡を覗かしてゐた。これを見てゐると麟は、彼のいふ如く、生き死にの問題に直面してゐるといつてよかつた。苦悶、何處かさういふ字に嘘のない姿だつた。揉みくちやの苦しみ、そんな中にゐる人の姿だつた。――この中で麟が髯を剃りたての頬を見せてゐるのが、白じらと村野の目に映つた。が、髯なんか剃りやアがつて、といふ非難よりは、麟らしいや、と其餘裕に同情のもてる氣がした。

「おい、」と村野は麟に呼びかけた。「旅行には出掛けるんだらうな。――尤も出掛けないといつたつて、曳きずつてども行くわけだが。」

「分るもんか。」

「だつて約束ぢやないか。」

「こんな時の約束なんか、責任持てるもんか。」

「亂暴いつてら。こんな時だから約束したんぢやないか。そんなに直ぐぶり返しちや駄目だよ。昨日はともかく俺に賛

成したのだらう。その方がいゝと思やこそ旅行に行くといつたのだらう。昨日がそれでいゝんなら今日はなほいゝ筈ぢやないか。世の中が別にどう變つたといふわけぢやなし。」

「そんな話にやいかないよ。俺の昨日の心持は昨日の心持だ。」

「そんな分らん奴があるか。」

「君に分らんでもいゝさ、俺の心持は。」

「君の心持?」村野は輕くいひすてた。「そんなもの尊重出來ないよ。」

「なに?」麟は開き直つて氣色ばんだ。「尊重出來ない?」

「さうさ。」村野は憎にくしいほど煙を吐いた。「そんなもの尊重しちや君が滅びるだけだからな。」

麟は默つてしまひ、また眼を閉ぢた。村野は

「なあ、竹中、」と麟に呼びかけた。「ともかくこの赤つぽい部屋から出なけりや駄目だよ。君のいふ第二の解決だつて――第二も第一も何だつて此處ぢや解決のつきつこないよ。どんな思案もまア此處を出てからだね。それが先決問題のことは、君自身あんなに昨日認めてたぢやないか。」

赤つぽい部屋といふのは麟のこの部屋だつた。最近の彼の好みで壁紙が赤いのに張りかへられ、絨氈から椅子までダーク、レッドのひどく人から落付を奪ふものだつた。ひとりでにいらいらして來る部屋だつた。――およそ失戀したものゝ居るに適しない部屋に出來てゐた。

「昨日は認めたんだ。」

「それならいいぢやあないか、今日も認めろ。」

「さうは簡單にいかないよ。」

「簡單にいくよ。」

鱗は感傷に自分を増長させてゐるのでないことは分つてゐた。しかし感傷に甘えてゐる傾きは充分に認められた。それは無理ではなかつた。死ぬ覺悟からやつと此處まで遠のいたのだから、それくらゐは仕方のない程度だつた。ただむやみに死にたがり、次には順子の死ぬことを惧れて、彼女が死ねば死ぬ氣で居り――それから感傷に甘える程度、さうして兄の彪への氣構えからぐつと最後のどたん場で踏み止つてゐる覺悟――徑路は自然であり、村野には充分に同情の持てるものだつた。此處迄來て――初めから分つてゐたともいへるが、村野には此先の見込がはつきりついてゐるのだつた。村野にいはせれば、ただ時日――時間の經過が鱗を癒してくれるものだつた。時間の經過を順當にとる爲に、一ツには萬一のぶり返しを避ける爲に、差當つて鱗の氣持を轉換してやれば、その方の努力を致してやれば、それでよいのだつた。村野が鱗に旅行を約束させ、ひたむきに引張り出さうとするのは、此陳腐な手段で彼を趁しでも安全に、僅かでも早く常態に――いはばけろりと物忘れしたやうな鱗にしやう志だつた。

「そりや簡單にいかないかも知れないさ。しかし簡單にいかせやうとすりやいかんものでもあるまい。簡單にいくものなら簡單にいかせてそれで差支へはなからう。それまで不贊成だとは君もいふまい。尤も此場合簡單にする爲の努力を、君がするのは厭だらう。また僕も其處迄は立ち入つた强ひ方をしはしない。だが、努力はしてくれなくていいから、俺の妨害はしなくてもいいだらう。俺の妨害――そんなことをいふとまるで俺が當事者みたいに響くけれど――まアそらどらでもいいや。ともかく君は俺の意志に默つて縱いてくれないか。同意してくれた以上、默つて從いてくれたつていいだらう。一口に簡單にいくよとはいひきつてゐても、俺だつてさう簡單だとは思つてゐるわけぢやないさ。何に

しろ相手が兄さんだから。」

「彪！」

鱗は急に粗粗しくなりかけたが、またもとの姿勢で兩手をぶらりとさせた。

「今怒つてもしやうがないさ――何しろ兄さんだもの。だから他人の場合と違つて、此事件はこれでさらりと解決しても、だからそれまで、といふわけにはいかないさ。あとあとまで何かにつけ引掛り通すかも知れない。兄と弟だもの、そりや仕方がないと、一應はさうさ。だけど何しろ此方は君だし、片一方は兄さんだ。さう世間並の兄弟らしいいさこざ――いや、こいつは世間並の兄弟らしく他人の始まりで片付けて、片付かんこともあるまい？」

鱗は僅かに頷いた。

「とはいへ一方、ちよつと餘裕を置いてみれば、相手が兄さんだけに、あの彪といふ人だけに、意外なさばさばさで、仲のいい兄と弟のままで、片の付くめどもないぢやあるまい？」

今度は鱗も頷きかねてゐた。

「此説に直ぐは君の首肯出來ないのは、それは俺にも分つちやゐるよ。俺は、案外近いかも知れないが、しかしまア普通に行けば大分先の見込を話してゐるだけなのだよ。――よさうか。」

鱗は默つてゐた。

「繰り返したつてしやうがないからね。それが君に苦痛を與へるなら猶しやうがないからね。だから何もいやアしないが、兄さんは、何といふか、向う見ずといふよりは無頓着なんだ。おそらく君の苦痛を此三分の一にも貰つてゐるかどうか曖昧なくらゐなのだ。結果には驚いてゐるだらう。無頓着らしいだけに結果には一倍驚いてゐるに違ひない。兄さ

んの此處んとこが、此の兄さんの性質が、づかつと分りやアずゐぶん赦せるんだし、同時に君の苦しみがそんなでなくなるのは分りきつた事だ。きつと兄さんは意外な波動に驚いてゐるし、それだけに後悔してゐるよ。君のいふほどの深い魂膽、そんなものはありやしないのだよ。俺にいはせると、だいたい順子さんは――」

「いいんだ。」

「え？」

村野はちよつと口を噤んでから續けた。

「何がいいんだか、まアいいことにしておくが――そいちやさつさと旅行に出ることにしやうぢやないか。兄さんはあんなだし、順子さんにや君の杞憂のやうなことは起らないだらうし、そんなことがあつちや大變だが、死ぬなんてこたア絶對なしと分つたんだし、だからあとは、今度は此方がもともとになるやうにするのが順ぢやないか。」

村野の眼で觀ると鱗は飴のやうなものだつた。しやちこばればしやちこばつてゐるが、その代り溶けてもしまふし、どんなにも捻れもする質だつた。村野は鱗の氣の折れかかつてゐるらしいのを知ると、此際ぐつと引張つてしまふ氣になつた。

「どうだい、今日ともいくないか、明日にも出掛けやうぢやないか。考へたつてどうなるものでもないんだ。惡くはなるかも知れないが――こんなもの、いつかは忘れるんだからね。早いだけいいに定つてゐる。」

その翌日村野は、まだ出しぶるやうな鱗を無理に引張り出してしまつた。さうしてその日横濱を出る船で神戸へ向つた。空は晴ばれと高く、まだ風は寒かつたがいい天氣だつた。

スモーキングで村野が高級船員の一人を相手にシェーク、ダイスをしてゐる時だつた。今迄片隅で莨をふかしてゐた

麟が覗きに來たので、村野はすすめてみた。
「どうだ、やらんか？」
「俺は厭だ。さういふ物に勝つたことはないのだ。人が三を振れば俺は必ず二を振るのだ。まるで——」
いひかけたまま麟は口を噤んでしまつた。
神戸へ着くと村野は訊ねてみた。
「どうだ榮丸へでも乘換へてみるかな。」
「さうさな。」
麟は生返事だつた。
「ぢや一先づ船とは緣を切らう。」
その日神戸で一泊した彼等は、翌日大阪へ入つた。大阪から彼等は和歌の浦へ行つた。和歌の浦から歸ると奈良へ行つた。かうして彼等は大阪を中心に暫く遊び續けた。京都に二日ばかり泊つて大阪へ引返さうとした時だつた。麟は、
「大阪へまた歸るのか」といつた。
「え、大阪へまた歸るつて？　ぢやどうするんだ。まさか東京へ歸らうといふんぢやあるまいな。」
「う、まア。」
「歸る氣かい？そいつア——」
旅に出て五日ぐらゐで麟がもう内心歸り度がつてゐるらしいのは、薄うす村野に分つてゐた。しかしさう氣付いても村野はわざと横を向いてゐた。今歸つても無事なことはほぼ見透せたが、何となくまだ早すぎるやうな氣がしてゐた

「だつて――ごろごろしてゐたつてしやうがないぢやないか。」
「うん、まアそりやさうだが。ぢやなるべく早く引上げることにしやうかな。それにしても今日は一應大阪へ引返さう。」
村野の豫期した經過とはいへ、峰の氣持の變化はあまりに安やすと、且早すぎるやうだつた。峰のあんなに苦んでゐたのは決して嘘でないのは分りきつてゐただけに、だといつて此癒り方が嘘だといふのではなかつた。何方も眞實だつた。峰が時どき大きな聲を出して笑ふのも、何處かでそつと溜息をつくのも眞實だつた。

第二

彪は門司へ上ると、
「御覧」といつた。「あれも私服だよ。何だつてかう下關だの門司だのは、憲兵と私服が多いのだらう。」
「さうね、下關にもずゐぶんゐたわね。」
順子は心持ち彪に寄り添ふやうにした。小さな風呂敷包きりで、怪しめば怪しめる旅客振りの二人だつた。
「といつても別段此方へ寄るにも及ばないさ。わざと駈落者じみて見せる要もないわけだ。かう見えたつてちやんとした――さて、ちやんとした何かな、旅行者だね。」
別段私服に見咎められるでもなかつた。彪と順子は東京を出ると直ぐかうして九州へ來て、何となく落人めいた後寂しさに、だが何處か心の安さを得ることが出來た。九州まで遁げると西へ來たといふ氣持、此處でならよしや死んだところでちよつとは東京へは知れはしまいといふやうな、理窟なしに距離の頭に來る心持だつた。彪はいつか

「九州へ來てやつぱりいいやうだね。と、さう理に落ちるにも及ばないが——暖いだけでも助かりもんだ。」

「ほんとね。」

答へながら順子は、足一歩九州へ入つてから、屋所どころで目についた柑橘類の黄色な木木を目に浮べた。

「此處でも降りるか。」

彪は博多に着くと順子を促して下車した。汽車が千代の松原を通る時、いいところねといつてゐた順子は博多で降りることを喜んだ。彼等は公園の松林の中で日蓮の銅像を見た。それから港内の一目で見える西の公園へ行つた。そしてその日のうちに彼等は長崎に向つた。長崎は暗かつた。彪は持前の無頓着さから、直ぐ驛前の薄汚い宿屋へ入つた。

「若し、さ、二人で死ぬとすればだね。」彪は冗談めかしていひながら、「此宿ぢやさすがに死にきれないね。——死なうたつてどうにも死ねやうもない家ではあるが。」

翌朝彼等はさつさと宿を出た。彪は旅に出てからいつとなしにたまつた身のまはりの小道具などを風呂敷に包んで抱へてゐた。彼は路傍で小さな洋品店を見付けると、其處で小さな鞄を買つた。

「ちよつと御免よ。」

彪はさう斷りながら、洋品店の店先で風呂敷のものを鞄に入れかへた。順子はがらくたに目を反らすやうにしながら佇んでゐた。彼等はお諏訪樣も支那寺も見た。大浦へも出島へも行つた。せかせかと追つ駈けられるやうに、急ぎ足に何處もかも見て廻つた。それには彪もふとさすがに苦笑なしでは居られなかつた。

「やつぱりこりや駈落者かね。いや、といふよりどうやら心中でもしさうだね。どうやら生きてゐるうちに見られるだけは見ておけといつた心根が出てゐやアがる。やつぱり恐ろしいものだ。」

「をかしいわよ、そんな大きな聲でいつて。——だけど死ぬおつもり？」

「なに？」と彪は見返しながら浮いた調子でいつた。「何いつてるんだい。死ぬ筋はないぢやないか。」

彼等は夕方の汽車で島原へ立つた。左に大村灣のなみなみとした水があつた。島原に近く眞暗な中で彼等は行手の山の山燒を見た。

島原の町は細長く、灯の乏しい家並だつた。彪は魚臭い軒下を歩きながら、「此處らにするか」といつた。さうして二三軒並んだ宿屋の、一番靜かさうな家へ入つて行つた。

夜中に彪は宿のお上に起された。

「お客樣、今警察の方が見えて——」

彪よりも傍らにゐた順子が蒼くなつてゐた。彪は、

「なに警察か。それでどうだといふのだ。」

すつぱり覺悟してゐるといふ樣だつた。

「警察の方が此宿帳を見まして——

「うん、それで？」

「お客樣の職業が無職となつて居りますので、それがいけないと申します。」

「なんだ、その事か！」

彪は順子と顏を見合せた。

「は、はい。それが無職なら無職でもよろしいのですが、それだといろいろ身許調べがあつて、五月蠅んでございま

す。だもんであのう、お客様のお商買は、あのう、金貸としておきましたが。」
「なに、金貸？」
彪は突拍子もないので驚いて笑つた。お上のいふのには、巡査が宿帳を見ると、無職なんて職業があるもんか、といつたのださうである。第一無職で氣楽らしく旅行なんて出來るか、金があるからぢやないか、金があれば金貸するだらう、職業は金貸ぢやないか——さういつたのださうである。お上はただ巡査の論理に服從して金貸としおしまつたのださうである。
「なるほどね。金貸夫人かね。」
彪は順子を顧みて笑ひ出した。
翌朝彼等は小さな舟で三角へ渡つた。島原の港も三角の港も静かな美しい海だつた。島原から三角へ近づくと、三角の町も所どころの小島も、そのまま靜かな海に映つてゐた。三角から直ぐ熊本へ出た。熊本では水前寺だけを見て彼等は太宰府へ立つた。太宰府では隣りの宿で藝者と踊つてゐる客があつた。境内の梅はまだ固かつた。
「さうかなア、まだ梅は咲かないのかなア。此處らは滿開だと思つてゐたが。」
彼等は飛脚のやうな旅で製鐵所の煤煙の下をくぐり抜け中津へ向つた。驛前の茶店に鞄を預けると、彼等はお寺の中で大雅堂を見た。
「どうだ、いいだらう？」
「何だか分らないけれど。」
彼等は耶馬溪へも行つてみた。客引の引張るに委せて行つてみた宿では野天の風呂だつた。その代り安かつた。輕便

の中では中津七郷の質朴な住民が、見知らない彼等に朝の挨拶をした。

彪と順子は別府へ出た。別府では暫く滯在するつもりだつた。砂湯の傍の宿屋に陣取つて、彼等は悠々たる湯治の客だつた。彼等はよく見て廻つた。彪は時時一人で濱側あたりをぶらついた。道を歩きながら、大きな風呂の中に女の浮んでゐるのが見えた。

或朝彪は顔を洗つてゐる時、ふと吐いた痰に血線の混つてゐるのを見た。崩れた外郎（ういらう）のやうなものの上に眞紅な線がぶよぶよと動いてゐるのを見ると、彪はいひがたい恐ろしさが足の底まで傳はるのを感じた。彼はさまで虚弱といふのではなかつたが、呼吸器に自信が持つてぬ方だつた。ずうつと續く不攝生で體も惡くしてゐるだけに、彼にはひどく自然に、いよいよかなアといふ氣がした。彼はむやみに肺に定めてしまつた。一條の血線だけで彼はもう死の恐怖を目の先に見てゐた。彼は部屋に歸ると、

「俺はちよつと寢るからね。」さういつて横になつた

「どうかなすつたの？蒼いわよ。」

「蒼い？」と彪は起上りさうに首をもたげたが、そのまゝ向うを向いて寢てしまつた。

その晩彪は改まつた膝を順子に向けた。

「あのね、相談があるんだが。」

「相談？なアに？」

「順子は東京へ歸るつもりか？」

「え？」

「その邊まさか考へてないことはないだらう？それでどう思つてゐるんだ。歸れると思つてゐるのか。よもこのまゝ旅行が續けて居られるとも思つてはゐまい。」

「そりや——」

「思つてはゐないだらう？」彪は追つかぶせるやうにいつた。「思つてたつてさうはいかないからね。さうとすると何處かに落ち付いて遊べる間は遊び、あとは務めるなり小商ひでも始めるより仕方がないだらう——そこらが落ち付く先とすれば、どうだ、順子はどの邊に見當をつけてゐるのだ。」

順子は無言だつた。見當がつきかねる。それも彪の本心につきかねるのだつた。急にどういふつもりで彪がそんなことをいひ出したのか、順子には推量の及ばないものがあつた。昨日迄の、たつた今迄の彼等には、急に味噌漉生活に移らなければならないやうな影もないのだつた。勿論永久に遊んでゐるわけにはいかないのは知れてゐたが、まだ旅に出たばかりの今日あたり、そんな常の生活に觸れた話に落ちるわけあひがないのだつた。さつき蒼い顏して寢てゐたのは、そんなことを考へてゐたのだらうか、彪し順子の腑に落ちかねる點があつた。

「何の邊につて、そんなこと急にいひ出してどうしたつていふの？見當なんかどうとでも貴方のつけるところへつけるわ。」

「そんなこと訊いてるんぢやないんだ。そんなことは分りきつたことなんだ。そんな場合俺のつけるところへつけてくれなきやそりや困る、そりや分りきつたことなのだ。俺はもつと根本の覺悟、そいつたものを訊かうとしてゐるのだ。東京へ歸れなければ歸れないでゐるのか。そして何處かで小さな世帶でも持つつもりなのか。それとも——それともなんだ。」

「それとも？」

「そりや、死なねばならぬ筋はないさ。そんな惡いことはしてないさ。だけどひよいと心を靜めると、東京がもやもやと渦卷いてゐるのが分るだらう。何も惡いことは、といひきつてしまふものゝ、いろいろの五月蠅い事、どうでこれから無事に濟みつこないいろいろの出入り、そいつを考へるといくらかうんざりするだらう。厄介になるだらう。あしたも昨日のやうに笑つて通せるさ。だけどもその合間合間にひよいひよいと飛び出して來る厄介さ、そんなものはずゐぶんこれから小五月蠅い――」

「分つたわ。死ぬことなんでせう？死んだ方がいいと仰しやるんでせう？そんなら死ぬくらゐ何でもないわ。」

「さう手輕にいつて、死ねるかい？」

「死ぬくらゐ――それとも貴方の方で冗談いつてらつしやるの？」

「何いつてるんだ。俺は東京へ平然と歸る覺悟がつかなければ、あとは死の一手だけのつもりだ。東京を出る時からこの二つの何方かに定めてゐるのだ。」

「私だつてそれくらゐのこと――。」

「とつくに定めてゐるといふのかい。ふん。」

「あら、笑ふの？」

「それで怒るやうなら、それなら死ねるだらう。」

その晩彼等はくたびれきつて眠りに自然と落ちるまで、こんなことを慇闘慇闘といひ合つてゐた。彪には初めはまるでなかつた死ぬ覺悟なんかが、何だ蚊だといつてゐるうちに初めからあつたもののやうに信じられて來てゐた。血線を見て急にどうで助からないといふ氣になり、いよいよ死ぬと定れば順子と死んでしまはうといふ肚になるまで、ごく當りまへな前からちやんと豫定しておいた段取りのやうな氣がした。――

翌朝鱗に熱があつた。喉が痛く、確かに風邪をひいてゐた。彪は醫者を呼んでもらつた。彪の頭は熱と風邪だけで一杯になり、ゆふべ死ぬ氣でゐたのをすつかり忘れてゐるやうだつた。彼は醫者に診てもらひながら、死ぬつもりだつたのになアと苦笑した。醫者はちよとした風邪ですといつた。彪は怖ごは昨日の朝の血線のことを醫者に告げた。醫者は「ああ」と輕くいつた。「何でもありません。氣管支をちよつと痛めてゐるだけです。御心配はありません。」

彪はそれから一週間ばかり寢てゐた。風邪をひくと長引く質で、ちよつとした風邪で直ぐ大病人のやうに寢るのだつた。順子は吸入をかけたり、濕布の世話をしたり、まめに忙しく、忠實な一個の妻だつた。

彪は病氣にかかるとひどく死を怖れ出した。生き永らへたい氣で、それ以外のことは忘れてゐた。醫者の言葉で風邪の爲に僅かに氣管支だけを痛めてゐるに過ぎないことが分ると、一條の血線で死なねばならないもののやうな氣になり、その氣で順子に向き合つたことなどが、嘘のやうに思はれて來た。順子も看病しながら死ぬ二人だといふことを忘れてゐるやうだつた。どうせ死ぬつもりぢやありませんかといふのも忘れてゐた。

風邪が癒つて床を拂つた日彪はいつた。

「鱗はどうしてゐるだらう。」

旅に出てから二人の間に鱗の名の口にされた最初だつた。順子は默つて俯向いた。彪はいひ次いだ。

「あいつ、あいつのことだから、病氣になつてゐるかも知れない——」

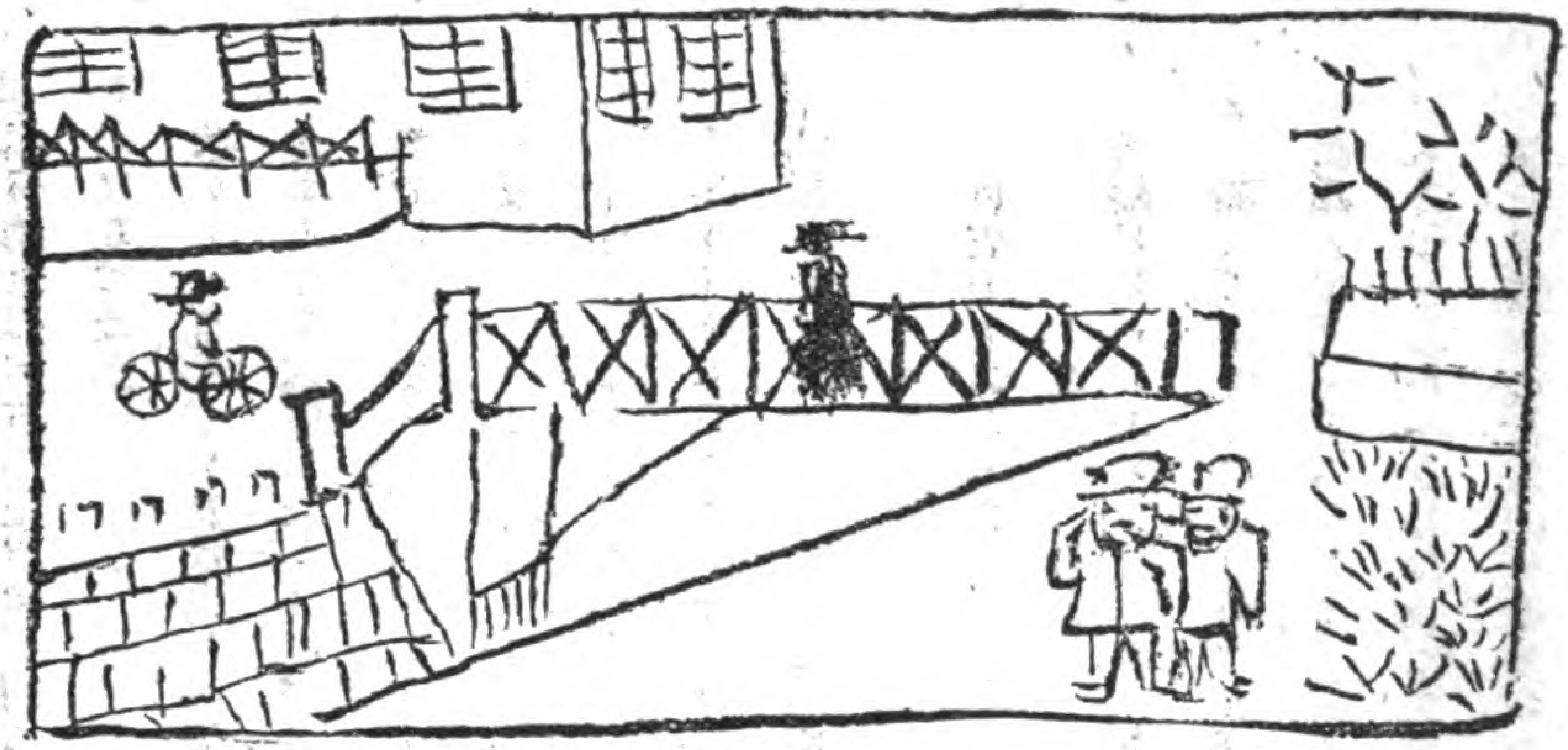
死にはしなかつたらうか。とはちよつと出礎つた。

「ほんとに。」

ちよつとしんみりした。だが順子の若干愛ひを含んだ樣子を見ると、彪は咄嗟に氣を荒くした。

「なに、鱗のことだ。死ぬものか。病氣にだつて怪しいものだ。一晩熱ぐらゐ出したかも知れない。そんなもんだ。」

彪は殘酷な、いつまでも生きてゐさうな顏を順子と合せた。



奇縁

近松秋江

一

七月の中旬であつた。竹崎は、毎朝九時ころ郵便配達が置いてゆく、いろんな郵便物の中に、屢々未見の青年などから受取る手紙と同じやうな一通の封書を受取つた。彼はいつものとほり、ある冷淡さを以つて開封しながら、中に白いペーパーにペンを以つて書かれてゐる文字を一瞥すると、それが、封筒に書かれた名前が男子の名であるにもかゝわらず、女の筆蹟であるらしいのに先づ不審を抱かされた。それで彼は本文に眼をとほす前に一寸、二枚重なつてゐるペーパーの一番しまゐの處を讀んでみると、そこには果して女名前で奥田ひろ子と署してあつた。竹崎はしかし、女性からの手紙を受取ることも決してめづらしいことではないので、それを見て格別驚きもしなかつたが、通例其等の場合には表の封筒にも公然と女名前を書いてあるのに、此の場合は故意にそれが男の名にしてあるのが冒頭の不審であつた。

彼はそれによつて、直ちに、或るものを、その手紙に直覺した。それが俄に、今まで冷淡であつた彼の興味を刺戟することになつた。

讀んでみると、文意は案外に簡短なものであつたが、中にいつてゐることはかうである。

今年もまた次第にお暑さに向ひました。あなたさまには、定めしこの夏も何處かへお出かけのこと丶ぞんじます。日光でございますか、それとも箱根になさいますか。――――――私はまだ、あなた様とお言葉を交はしたことはございませんが、餘處ながらお目にはかゝつて居ります。それは、日光でも箱根でも。

――――私達は今夏も日光にまゐるつもりにいたして居ります。あなた樣もやつぱり彼地にお出かけ遊ばすなら、今年もまたお目にかゝることが出來ますことゝ、蔭ながら樂しんで居ります。まだ直接にお言葉を交はしたこともないにもかゝはらず、こんな失禮なことを申上げまして、まことに相濟みません。失禮の段何卒お赦し下さいまし。

奥田ひろ子

竹崎先生おんもと

竹崎はそれを讀みおはつて、何だか狐が狸にでもうまく騙されてゐるのではないかといふ氣がしたが、それと同時に、暫く覺えない、ある人間的興味を強く刺戟された。そして考へてみた。

直接に言葉を交はしたことはないが、餘處ながらお目にかゝつてゐるといふのは一體どんな女のことであらう。箱根でも日光でも自分を見て知つてゐるといふのはどんな女であるか。……

彼は地震以後箱根にも日光にもまだ行かないのであるが、それまでは、此の手紙にもいつてゐるとほり始終いつてゐた。その時分向うで此方を見てゐるといふのであるが、果してどんな女か。さういへば、其等の土地で、此方でも眼に

留まつた女のあつたことは憶ひ出せないことはない。しかしそれは、箱根の宮の下や日光の湯の湖の畔を散歩してゐて、たゞ通りすがりに見てとほつたゞけのことで、それつきり前も後もないことなのである。たゞそれが普通の場合よりも強く印象に殘つてゐる理由は、一年か二年つゞけて箱根の宮の下で屢々見たことのある、ある家族づれの婦人を、その次の年に今度は日光の湯元で見たことであつた。その時彼は心の中で、

「あゝ、この前箱根で見た連中が又こゝへも來てゐるな。」と、思つたことがあつた。その仲間ならば、此方でも拙に記憶してゐる。けれども、それかどうか定かに分らない。一度宮の下で御用邸の脇を歩いてゐると、自分より後になつたり前になつたりしながら骨董屋の店前を三四人づれの浴客が歩いてゐた。その中の年長は、見たところ三十にはまだ一寸間のある婦人で、少しく赤味がゝつた素直な毛を、流行のオールバックとも異つた、むしろ、どつちかといふと日本固有の櫛巻とでもいひたいやうな、あつさりとした手輕な頭髪に束ねて、紺飛白の薩摩上布のたらりと裾を曳いたのを着てゐた。年齢から見ると無論夫のある婦人であらうが、自分の子供らしいものは連れず、みんな面ざしの生うつしなところから察すると、弟や妹に間違ひのない十四五の女の子、十七八の中學生らしい男の子などゝ一緒に繋がつて散歩しながら時々骨董屋の店前に立つて繪葉書にした廣重の版畫を覗いてみたり、馴染と思はれる雜誌屋に入つて、誂へておいた雜誌でも取つて行くといふ風に見える。それから又少し先きまで歩いてゐると、今度は底倉の方から此方を向いて歩いて來た羽織姿の五十三四——標緻が好いから三つ四つは年よりも若く見えるのかも知れぬ。——の老婦人と互に、五六間まだ離れてゐる先きから、何か言葉を掛け合つた。そして件の老婦人は尙ほ三四間近寄つて來た時、笑顏で、

「お迎ひ！」……

と聲を掛けた。その顔をよく見ると、一見その若い連中の母親であることは明らかで、古典的な、上品な容貌風采であることは母子共通であるが、年齢の苦を面に刻んでゐるためか、流石に若い人達よりも眉目の間に、大分神經質な苦みが浮んでゐる。

母親から聲をかけたので、一番年長の娘は、

「いゝえ、そんなわけでもないんですけれど。」

といつて、一同そこの道の中央に佇立んだ。多分奈良屋に泊つてゐる客と察しられた。

それから五六日も過ぎてからであつた。ある晩富士屋ホテルの舞踏室でいつもそのシーゾンの年中行事の例になつてゐる滯留外國人の主催で音樂會の催しがあつた。竹崎は格別氣は進まなかつたが、人から切符を勸められたので行つてみた。すると多勢の聽客の中に、此の間外の通りで見た薩摩上布に櫛卷の婦人がその夜は、高い山の上の温泉場の涼しさに、輕いお召の單衣を着てずつと前の方の椅子に凭つてゐるのを認めた。その後も散歩の際時々見たことがあつた。

そして、その翌年日光の湯元に往つた時であつた。竹崎は、中禪寺湖から戰場ヶ原を經て、湯瀧の落下する懸崖をやつと上りつめて湯の湖の畔に出で、あの幽邃を極めたる、落葉松や山毛欅や水楢の蓊鬱として空を蔽ふた散歩道を湯の宿のある方に進んで行くと、向から滯在の浴客とおぼしい若い男女や犬を伴れた西洋人の夫婦などが散歩をして來るのに出會つた。その中には氣取つたスタイルの洋服の青年が、若い娘と並んで抱き合ふやうに手を握りながら薄暗いアベニウを、戀でも囁くのか靜かに歩いて來たりした。彼等は道を往く人に出會つても、格別恥かしがる風もなく、ひたと寄り添ふたまゝ通つていつた。

竹崎はそれを見て過ぎながら、こんな處へ來れば誰れでもあゝして戀に大膽になれるのであらうかと思つて、不思議

さうに、ふつと又彼等の往つた方を振顧つてみた。太古のまゝのやうな、神秘めかしい深碧の水の色、その上に欝蒼として蔽ひ被さつた森林の布置、その湖岸に沿ふて、うねりながら深く入つて行く靜かなアベニウ湖邊を圍んで聳り立つてゐる突兀とした四圍の山岳、そんなローマンチツクな自然の狀態が若い男女の胸に戀を唆るのかと思はれた。

竹崎は、中禪寺湖の歌ケ濱から水に浮んで男體山の翠微を仰ぎながら二里の湖上を菖蒲ケ濱まで來て、そこから戰場ケ原の三里の道を獨りでこつ〳〵歩いて來たので、もう、湯の宿は、ぢきそこだと思ふと頓に疲れを覺えてきた足を氣樂に引擦りながら翠嵐滴るばかりのアベニウを入つてゆくと、今度向うから靜かに散歩を運んで來たのは、背のすつきりした、頭髮を涼しさうな手づかねの束髮にした婦人と、一人は十五六の中形を着た二人づれの女であつた。だん〳〵近づいていつて、擦れちがひに、ふと見ると、その年上の婦人は去年まで屢く箱根で見たことのある女であつた。面ざしのよく似た少女もいつも一緒に歩いてゐる妹であらう。通りすがりにちらつと見ると、流石に此處の溫泉場は箱根などゝは遙かに質素な爲か、今日は薩摩上布でもお召でもなく、その代りに粹でそして上品を傷つけないくらゐの木綿縞のゆかたを着て、極く不斷の身裝である。道が狹いので、箱根で見たよりも近い處からよく見ると、その顏は決して當世風の派手な顏でなく、古典的な、たとへば歌麿の美人畫などにあるやうな、靜かな穩かな表情をしてゐる。そして、いつ見ても、ついに自分の子供らしいものを伴れてゐないのがひとつの不思議であるが、眉尻の方から眼隅のあたりが、もう何處となくやゝ疲れてゐるのを見ると、子供を産んだことのある婦人か、それとも年のせゐか。

とにかく竹崎は、胸の中で、

「あゝ、又此地でもあの女の一瞥きを見た。」と思つて通り過ぎた。

それから八月のおはりまで半月ばかりの間、湖畔の並木道を散歩するたびに朝に夕に彼女達の一と群れが親しさうに

繋がつて歩いてゐるのを見受けた。そして八月の末に歸つて行く時、中禪寺まで乘つて行く馬車の半分を殆どその一卷きで占領するくらゐ、多勢の弟や妹達を連れてゐた。竹崎は、湯の湖に沿ふた道を朝の散歩をしてゐると、彼等が宿の者共に見送られて、嬉々として歸つて行くところを見た。その古典的な表情が男女ともに共通してゐるところや、贅澤な寫眞機を殆ど各自に携へてゐたり、指環や腕時計や凡ての身裝風俗が、可なり有産階級に屬するものと知れた。

その後彼は、又ある秋、銀座を歩いてゐて、やつぱり同じやうな多勢でぞろ〳〵繋がつて行く彼等を見たこともあつた。その時は、その年長の婦人は、それが彼女の良人でもあるのか三十五六と思はれる男子と肩を並べて歩いてゐた。

竹崎はその時も、

「お、又こゝでもあの婦人を見た。」と思つた。

そしてその良人と思はれる男は、顏も身體もまるく、づんぐり肥つた、色の眞黑けな人間であつたが、さういふ容貌風采の人間に屢く金持があるので、察するところ、その若い主人が自分で身代を仕上げたものでないだけに、何處か悠然とした、卑しくない好良な人物といふところが表はれてゐるのであつた。

「おや、こんな色の眞黑けな人間か、あの優雅な容姿をした婦人の良人か……」

と、竹崎は、第一印象では一寸不思議なやうな矛盾を感じたが、二歩三歩通り過ぎながら、よく考へてみると、却つてそれが、矛盾の中にまた妙な調合を示してゐるやうにも思へた。

今まで書いて來た話は、畢竟それだけのことに過ぎないのであつた。しかし、思つて見ると不思議なもので、何百萬といふ人間が三百六十五日の間渦を卷いて動いてゐる廣い東京の中に住んでゐると、あの人間は近頃どうしてゐるであ

らうか、時々思ひ出す人間に、出會ふ機會をつくらないかぎり一年も二年も會はないことがある。いや、一年二年はおろか、五年も十年も、或はそれきりもう一生顏を見ないで過ぎてしまふやうなことの方がむしろ珍らしくないのである。さうかと思ふと、何處の誰れといふ名前も何も知らない男や女にさうして度々途中で行き會ふことがあつたりする。今、突然受取つた手紙の主人公奥田ひろ子が果して、その婦人であるかどうかは分らないが、日光や箱根でよく此方を見てゐるといふのであるから、竹崎は自分の方で屢々見て記憶に留つてゐる婦人のことを、あれかこれかと思ひ出さうとすると、その婦人が眞先に思ひ浮んで來るのであつた。そして彼は心の中で

「この奥田ひろ子の名か、あの婦人の名であつてくれゝば、かなりローマンチツクであるのだが…………………」と、極めて都合のいゝ空想して見た。

けれどもそんな空想くらゐよく無殘に破れるものはない。…………そして、それか空想であるとすれば、そのほかに、どんな婦人が自分を知つてゐるといふのであらうか？と、更に、忘れてゐる記憶を思ひ浮べやうとした。すると、又かういふことのあつたのを思ひ出した。

やつぱりそれと同じ時であつた。暑い八月の半ば上野から日光行きの汽車に乘ると、二等車には七八分どほり客が乘つてゐたか、最後に乘つて來た若い紳士の夫婦づれに伴の書生が一人プラツトホームにはその一行を見送りに來た袴を着けた家從らしい者が二三人、發車するまで慇懃な態度で窓外に突立つてゐた。見たところ、その列車には一等車かないので爲方なく二等車に入つたが、もう一等室があるならば必ずそれに乘るらしい風俗の乘客であつた。

若い紳士は上野から日光に至るまで四時間の間殆んど他の者とは言葉を交へず何かしら、大阪の眞面目な研究雜誌を熱心に默讀してゐた。初め七八分通り車室を塡めてゐた乘客も田端、王子、赤羽あたりで、おほかた出ていつてしまつ

云、ずつと日光まで乗り通すのは竹崎とその一行ばかりであつた。行儀よくクッションに凭れたまゝ宜てその態度を崩さないで、欠伸一つせず長時間の讀書に倦む様子もないのが、竹崎には、遠くの坐席から見てゐて心ひそかにその紳士に對して敬意を抱いてゐた。

夫人の方は年の頃、打ち見たところまだ廿四か五でもあらうか。荒い紺飛白の明石に、白地の勝つた、見るから涼しさうな藍染めの模様をかいた羽二重の丸帯を、脊のすらりとした腰のまはり鮮かに締めて、頭髪は、意氣で上品な顔に屢々見る細面で顎の少しく長いのを氣にしてゐるのか、その上なるたけ顔を長く見せぬやうに、濃い多い毛を思ひきり、恰どおすべらかしの頭のやうに低く撫でつけた束髪である。濃く粧ふてゐる白いものも、あまりに眼に立たぬくらゐ、細かい滑らかな顔の地が繊緻を引立つて見せてゐる。夫人は汽車が少しく透いた頃から、膝の脇に、それだけは自分で持つて入つておいた白縮緬の包みを解いて膝の上で白い毛糸の編み物を始めた。時々これを高く持ち上げてみてゐるのを見ると、子供の上着で、もう半分以上出來てゐる。折柄窓外の青田から萬頃の波が涼しい夏野の風を煽つて來て、夫人の美しい鬢の毛を弄つた。夫人は暫く毛糸の編み物を弄んでゐたが、それも間もなく止めて、時々小さい扇子を帶の間からぬき取つて口にあて、欠伸を嚙みしめてゐた。そして十五六の洋服を着た伴の書生に戯談をいつて笑つたりしてゐた。

それから丁度二十日ばかり經つて、九月の初に又日光驛から、東京へ歸る汽車に乗ると、また同じ車室にその若い紳士の一行を見た。そこでも羽織袴を着けた四五人の者がプラットフォームまで見送つてゐた。夫人は往く時とちがひ今日は又ずつと華美な縦し縞の白地の勝つた明石ちゞみを着て、此の間のとは違つてゐるがやつぱり白羽二重にところどころ大きく朝顔を臙色に染め出した模様のある幅廣の丸帯を締めてゐる。伴の者も今度は先日の書生でなく、三十五六

の仲働き風の丸顔の女中を連れてゐた。

竹崎は、往きも復へりも同じ汽車に同室した奇遇を不思議に思つたり、いつも畏まつた見送人のあるところから、それが如何なる階級の、何といふ人間であらうといふやうなことを、所在なさにいろ〳〵想像してみたりした。良人の若い紳士は此の間往く時と同じやうに、又四時間の間車室はかなり暑さであるにも係はらず行儀ひとつ崩さず、何か眞面目な物らしい書籍をずつと讀み通してゐた。竹崎はそれを見ていよ〳〵その紳士に對して、敬意を抱く氣になつた。色の淺黑い小柄な體をしてゐるのに、よくそんなに長時間の間行儀を崩さないで疲勞しないものだと思つた。

夜に入つて上野驛に着くと、ステーションの混雜と群衆とにまぎれて、そのまゝ分らなくなつてしまつた。

それから十日ばかり過ぎて後竹崎は帝國劇場にアンナ・パヴロワの舞踊を見にいつた。そして幕合に廊下を歩いてゐると、婦人化粧室の處から出て來る、背の高い婦人を何氣なく見て、何處かで見覺えのある女だと思つてゐると、向うでも、ちらつと彼の方に視線を向けて、記憶のあるやうな眼をしてゐた。…………

竹崎は今、そのことをも想ひ浮べてみた。すると、ふつと氣が付いて、自分で、今自分の思つてゐることを批評して、思はず彼は獨りでにやりとしてしまつた。

「何だ俺は。今奥田ひろ子といふ、知らない女から手紙をもらつて、いゝ氣になつて、自分に都合の好い、隨分自惚れた想像を逞しうしてゐた。」誰も見てゐる者もないのに顏を赤くした。そして考へた。

どうしたものだらう。何處へ返事を出すといふあてもないのだし、どんな女であるか知れたものでもないので、打棄つて置いていゝのだが、しかし何だか此のまゝにするのも惜しいやうな氣もする。それにしても箱根へいつていゝか日光に行つていゝか一寸判斷が付かぬ。しかし此の手紙の模樣では、どうも日光に行くらしい。自分も今年何處かの高い

山の上に行きたいと思つてゐるところであつたが、今年は少しく方向を變へて伊香保か、でなければ上州の方の、もつとずつと深く山の中へ入つたところにいつてみたいと思つてゐた。それを、こんな手紙に誘惑されて日光へいつて、もしその女に出會つたにしたところで、それが、今夢みてゐたやうな、あんなブルヂョアの夫人であるとしたならば隨分興味のあることだが、十中の八九は、向うの方で、此方に依つて何か利しようとする、醜い女にちがひない。いつそそんなところへ往かずにゐて、こんな、自分の住所も明記せず謎のやうな手紙を越したりするコケツトらしい女には、京都の女達などがよくいふすかたんを喰はしてやつた方が一層痛快であるかも知れん。………

二

それから半月ばかりも過ぎた八月の五六日頃であつた。竹崎は今年も又上野から日光ゆきの汽車に乘つた。やつぱり牛が物を牽く力よりも倘ほ強いといふ黒髪長き女名前の手紙に誘惑されたのであつた。

すると、事實は小説よりも奇なりといふが、實際そのとほりであつた。實に不思議にも不思議、その同じ車室の中に、その奧田ひろ子といふ女からの手紙を受取つた時精彩に思ひ浮べて見た婦人がその二人ともいひ合はしたやうに乘つてゐるではないか。竹崎は小説家であつたので、その時、そこに思ひがけもなくその二婦人の一行を見たことの悅び(?)そのものよりも、自分などの平常書いてゐる小説はあまりに、あり有べき事を書かうとして、却つて平凡な事實の型に囚へられてゐるのだ。藝術はもつともつと今よりもローマンチックなものであつても可いのだといふやうな興味ある感激(インスピレーション)が溢れるやうに湧いて來るのを覺えた。

そして彼は、誰れか自分を注意して視てゐる人間がそこに接近してゐるやうな心持で、つとめて平靜な態度を裝ひつ

ゝ少しく大型のトランクを置き場に持て剰してそれを坐席と平行に自分の膝の上に置いて、窮屈な兩脚のやりばに迷ひながら、持つて來たその日の新聞を二三種披いて熱心に讀みつゞけてゐた。が、心の中では、この二人の婦人の、どちらかが奥田ひろ子の名の持主ではあるまいかといふ、そんな場合最も男性の弱點である、都合のいゝ、妙な自惚れに支配されることを、どうすることも出來なかつた。もしそこに彼の心理を透視する者があつたならばいかに彼れが滑稽な道化役者に見えたかも知れなかつた。彼は、披いた新聞を袖垣にして絶えず熱心なる視線をそれ等の一行の上に注いでゐた。そして、このうちのどちらかゞ果して奥田ひろ子であるならば、向うでもきつと度々の奇遇に吃驚したやうな眼をして此方を見てゐるにちがひないと思つて、二人の婦人の表情にそれを發見しようとした。

振顧つて考へてみると、薩摩上布を來た女は、もう彼れこれ五年前から見てゐる女である。彼女は今日も亦たその同じ着物を着てゐる。それは一寸見たところ隨分高價な品物らしく、古くからあるものを大切にして着てゐるものらしい。一年見なかつた間に、先から、すこしく眼についてゐた眼隈のまはりの、何處か疲れたやうな色が前より大分際立つて見えて來たのは、まだ年のせいといふほどでもないらしいし、それにこの婦人が何時見ても自分の子供らしいものを連れてゐないのが不思議であつた。そして今までのとほりやつぱり多勢の弟や妹を伴れてゐた。

竹崎がそれとなく熱心に注意してゐるにもかゝはらず、彼女の表情には、彼が偶然同車してゐることを意に留めてゐるやうな點は何處にも發見することが出來なかつた。

もう一人の婦人は去年と同じやうにまだ若く美しかつた。たゞ去年よりはいくらか地味になつたかと思ふだけ、違つた紺飛白の明石ちゞみの浴衣の裾から純白の麻のレースが清々しく溢れてゐた。そして大人の手荷物らしい、底だけ竹細工の信玄袋に附けてあつた名札によつて、主人の若紳士の名が、たしか、ある地方の大縣の大地主の名ではあるまい

かと。竹崎は何かで知つてゐる記憶を思ひうかべた。それは奥田といふ姓ではなかつた。今日はその主人が居ないで去年のと違つてゐる女中が一人と書生が一人附いてゐた。不思議にもその婦人も嘗て子供を連れてゐたことがない。名札の姓は違つてゐるが、それよりも肝腎のその夫人の表情に何處か奥田ひろ子らしいものを發見しはせぬかと思つて、竹崎は新聞の小蔭からそれとなく注意をしてゐたが、そんな様子は何處にも認められなかつた。そして汽車が二時半過ぎ日光驛に着くと、プラットフオームに、丁度その二等車の停車する邊の處に赤帽を連れた出迎への者が三四人立つてゐて、彼等は、若紳士の主人に對する時と同じやうに慇懃な態度で夫人の一行に向つて挨拶をしてゐた。一行は改札口を出るとそのまゝ、出迎への者に案内せられて、構内に待つてゐた自動車の中に姿を消してしまつた。竹崎は自分も、そこに居合はす自動車に乘らうか、どうしようかと考へながら、その夫人の一行の落着く先きを一寸想像して、――何處か山内の寺院かそれとも西町あたりの別莊へでも行くのであらうと思つた。

薩摩上布の婦人の一行は、毎年夏季の避暑旅行などにはよく馴れてゐるらしく弟達と一緒に赤帽を指圖して、チッキにして預けた手荷物を受取るためにその方へ行つてゐるのを見た。竹崎は又彼等の行先きをも想像してみた。――これから日光の町に泊るのはまだ早いし、自動車か電車ですぐ馬返しまでいつて、それから徒歩や俥で、今晩は中禪寺湖に泊るのであらう。それとも、そこから又直ぐ今日の中に湯元まで一氣に伸すつもりか。

竹崎自身も丁度その考へであつた。まだ日もあるから、それから中禪寺湖までは譯はなかつたが、何だか日光の町にも久しぶりで一晩泊つてみたいやうな氣もするので、彼はステーションから俥に乘つて神橋に近い大きな旅館の高い處にある別館に投宿した。

その晩夕飯後の散歩に旅館の前の阪を下つて街の方へ出てみた。清澄な夜の街には大谷川の方から吹いて來る風が水

のやうに街の中を流れてゐた。樂しい散歩の客がその中を往き交うてゐた。すると、ある土産物のくりもの細工や繪葉書などを鬻いでゐる大き店の、土間に立つて、あつち此方品物を見て歩いてゐる晝間の姉妹づれを、またそこに發見した。

竹崎は、「あゝ、あの連中も今日は上へゆかずに町に泊つてゐるのだな。」と、思ひながら、又阪を上つて旅館の方に上つてくると、その連中も後から、がやがや話しながら、やつぱり薄暗い阪道を上つて來る樣子であつた。

三

湯元にいつて四五日してからであつた。竹崎は一人で、いつかのとほり湯の湖に沿ふた靜かなアベニウを散歩してゐると、例の姉妹連れの婦人が妹と二人で向うから散歩して來るのに出會つた。その時彼女は行摺りにふつと竹崎の方に一寸眼を留めて見て、過ぎた。そして三四歩行き過ぎたと思ふころ、何か知ら姉妹で囁いてゐるのが自分のことをいつてゐるやうな氣がしたので、竹崎はそちらを振顧つてみた。と、とたんに向うでも二人で背後を振向いたところであつた。

竹崎はそれで思つた。あの女とは、この三四年來不思議に到る處で何度出會つてゐるか知れない。それにも係はらず今まで向うから、ついぞ一度も此方に氣を留めて見ていつた樣子はなかつた。それが今日はたしかに自分の方に眼を留めたにちがひない。それとも今までとても何知らぬ風を裝ひながら、その實心に留めてゐたのであつたか。東京の銀座などでない限り、大概何處の場合でも、人の往來の少い此處のアベニウか、箱根の散歩でか、汽車の中かで見てゐるのであるから、余程ぼんやりしてゐる女でない限り、あれくらゐ屢々行き會つてゐる人間に氣づいて、多少奇異な感じを

起さずにゐる筈はないのだ。しかし、今度はじめて氣付いたのだとすると、奥川ひろ子といふ手紙の主があの女でないことはたしかである。

しかし竹崎は、奥田ひろ子のことばかり考へてゐたわけでもなかつた。一月ばかり遊びに來てゐる間に、ある雜誌へ寄稿すべき百枚ばかりの纏まつたものを書かなければならぬので、今日は机に凭らう、明日からは必ず筆を執らうと思つてゐるうちにもう一週間ばかりの日が瞬く間に過ぎてしまつた。そして、何もせずに空しく時日を食つてゆくだけ段段氣が焦つて來た。彼は少時机に凭つて凝乎と考へ耽つてゐるかと思ふと、やがて何だか考へあぐねたやうに、起ち上つて、ぷいと外に出ていつた。そして毎日歩き飽きてゐる同じ散歩道を歩いてみるのであつた。でなければ旅館のオールを持ち出してボートを漕いでゐた。中禪寺湖と異つて遙に小さい湯の湖は波はいつも穩かで危險がなかつた。

ある日の午前彼はいつものやうにボートを浮べて平らな水の上をオールを弄びながら向うの山の岸の方へ滑つてゆくと、ほかにも二つ三つあつち此方にボートに乘つてゐるものがあつた。竹崎は、對岸の、前白根の裾山が、碧い水の中にのめり込んでゐるやうに、森樹が鬱蒼とした影を醮してゐる深い水際の木陰にいつも舟を寄せて、そこでオールを休めてよく雜誌などを讀んでゐた。その邊には白樺だの山毛欅だの水楢などの大きな野生樹が密生してゐた。八月の中旬頃になると、もうそこからの雜木の中には眞紅に紅葉する木のあるのが眼を引いた。それはなゝかまどといふ木であつた。竹崎はその暗い木陰の水際に沿ふて舟を波のまに／＼漂游しながら、大きな水楢が枝を水の上に臥してゐる出鼻を廻はつてゆくと、そこの山際に一艘のボートが居つて、眞紅に色を染めたなゝかまどの枝を折つてゐるところであつた。湖水も湖畔の山もそこら一帶が御料林になつてゐて、湖水では漁魚を禁ぜられてゐた。竹崎のボートがそちらに網ばれたので、彼等は、舟の上からとり附いて撓めてゐたなゝかまどの枝をちよつと手を緩めるやうにして此方を振向つ

た。竹崎はそれを見て少しく氣の毒なやうな氣がした。といふのは、彼も此の間からボートでそこらを乘り廻はすたびに、山腹の中ば早く既に紅葉して、深い秋の氣分を湛えてゐるそのなゝかまどの樹が何となく興を引いてゐたのであつた。自分も一昨日が昨日その小さい一枝を折り取つたのであつたが、さて折つて手にしてみると、思つたより興が薄らいだやうな氣がしたので、それからは、やつぱり自然の野生林の中に生えてゐるまゝを見る方が趣が深いと思つて、折り取ることは斷念してゐた。

竹崎はさう思ひながら、よく見ると、向うのボートに乘つてゐるのは例の姉弟づれの連中であることを認めた。姉さんと妹と、その間らしい十六七の學生服を着た弟とが乘つてゐる。竹崎は、今日はこゝで一つ口を利いてみようと思つたので、紅葉を折りかけて、一寸ためらつたやうにしてゐるその連中の氣を休めるやうに自分のボートをその間近に漕ぎ寄せていつた。そして、

「奇麗ですねえ。」と、簡單に一と口いつた。

すると、姉さんは、

「ほんとに奇麗でございますねえ。……」と、

いつて置いて、まだ枝を撓めてゐる弟の方に向つて、

「そんな大きな枝はおよしなさい。」といつた。

弟は、さういはれて撓めてゐた大きな枝から、二尺ばかりのもつともよく紅葉したところを一本折り取ると、そのまゝ、強く撓めてゐたなゝかまどの幹から手を放した。それとゝもに小さいボートは、はづみを喰つて、ぐら／＼ツと水の上に大きく搖れた。

「あらッ、危ない、吃驚りするぢやありませんか、厚ちやん。」と、いつて、女達はボートの縁をしつかり捉へた。竹崎にはたしかにその弟をこうちやんといつたやうに聞えた。

「何だ、遠くから見てると素ばらしく奇麗にめえるけれど、折つたんぢやつまんないな。」

弟は生粋の東京育ちらしい軽い江戸ッ児辯でいふのが聞えた。竹崎はそれを聞いて誰れも同じことを思つてゐると思つた。すると例の婦人は少しも人見知りをしないやうな、さつぱりした調子で微笑ながら、

「貴方にはよくお眼にかゝりますねえ。」と、竹崎に向つていつた。

竹崎は、向うから、さういつて言葉を掛けられたので、いさゝか不意打を喰はされたやうに、心の中で少なからずたぢろいだ。それでも、うは邊は去りげない笑ひを浮べながら、

「えゝ、不思議によく貴方がたをお見かけします。」

といつたが、腹の中では、この様子では此の間の手紙の主は此の婦人ではなかつたかと思つてゐた。そして、つゞけて口をきいた。

「先の中よく箱根の宮の下でもお見受けしましたが、近年はおもに此方においでのやうですな。」

すると彼女はうなづいた。

「もう三四年つゞけて此方にまゐります。……それにあちらは地震がひどうございましたもんですから。」

「さうですよ。まだ十分道路も元のやうにならないさうですから、……しかし此處も涼しいには、こんな涼しい處は他にはありませんが、こんな行き詰つた寂しい處ですから、ぢき飽きますねえ。」

「えゝ、でも年中騒々しい處に居つて、たまに夏一ケ月くらいこんな處に來てゐるのもようございます。」

「勿論、それはさうですが。」

そんなことを、一間ばかり間隔を置いた水の上で語り合ひながら、二つのボートはオールで輕く水を弄ぶつてゐた。

明るい夏の日は今殆ど頭の眞上のところに來て水面を照らしてゐるのであるが、深碧の水際を蔽ふた緑の木蔭がそれを遮つてゐるので、日の熱はひどく和げられて、黄緑色の光線が水面に斑點を描きながら涼しい風につれて、綸のやうに揺れてゐる

「あら、大きな鱒がゐたよ。」

と、一心になつてゝ先刻から深い水底を眺めてゐた弟が、出し抜けに聲を發した。そして、その次には、

「釣が出來るといゝんだがなあ。」と、歎息した。

「今から十年ばかり前に私が來てゐました時分には、まだ禁漁にはなつてなかつたんですがなあ。宿の主人と舟に乘つて、よく鯉など突きに來たことがありました。」

「一遍金精沼へ釣りにいつてみようか。」弟ははづんだやうに姉に向つていつた。

「あたし恐いわ、林の中から熊が出て來るわ。」妹がいつた。

「なあに大丈夫さ。」

「でも出ないとも限らないわ。」姉がいつた。

「あゝ金精沼においでになるんですか。」竹崎は訊ねてみた。

金精沼といふのは、そこから又四五里奥の、白根山の中腹に沿ふて上州の方へ通ずる山道の途中に在る、かなり大きな湖水であつた。そこには、東京の名士や富豪が會員組織で倶樂部をつくり、鱒を養殖して、夏期避暑かたがた釣魚を

して樂むやうな設備が出來てゐた。會員に限つて、そんな深い山の中にも滯泊することが出來るやうな用意が整へてあつた。そこの會員になつてゐるほどの人間ならば、實業家ならば、いづれも千萬長者の聞えある巨頭であるし、さもなければ、以前外交官であつたとか、大學の古參教授であるとか、又は宮内省の高官だとかとにかく、どちらにしても外國の貴族趣味の道樂を解する連中から成立つてゐるのであつた。竹崎は、勿論彼女に對してどうといふ考はなかつたが不思議なほど度々見てゐる彼女の一行が誰れの家族であつて、如何なる地位境遇の人間であるかを知りたいといふ興味は夙うから持つてゐるのであつた。竹崎の每年來て泊る溫泉旅館でその倶樂部の保管を托せられてゐた。かねて聞いてゐるところによると會員は二十人くらゐあつた。そしていづれも、各方面で世間に名の通つてゐる紳士連中であつた。

さういつて訊くと、年長の婦人は、

「わたし達はまだ一度もまゐつたことはございませんのですけれど、あそこの會員になつてゐるものでございますから。………でも今年は一度いつてみたいと、もう此の間からさう申してゐるのでございますが、何だか寂しい道だといふことを聞いて居りますので。」

竹崎は、うなづいて、

「隨分遠いさうです。………私は會員ではありませんが、自分の泊つてゐる宿でその世話をしてゐるさうですから、一週、此度宿の者が行く機があつたら一緒にいつてみたいと思つてゐました。」

「明日いつてみようぢやないか。」弟はもう行きたくつてたまらぬやうに云つた。

「えゝ………。」と、姉が生返事をしてゐると、

「熊に喰はれてよ。」と妹がいつた。

「熊が出て來たら、しげちやんを喰はしておいて、他の者は逃げてしまふ。」
「よくつてよ、わたしは行かないんですもの。」
「實際どうかすると熊が出て來るさうですからねえ。四五年前にも中禪寺湖の寺ケ崎の處に熊が出て來て、子供が二人乘つてゐた舟の中に飛び込んで來たことがあつたさうです。」竹崎は中禪寺湖で聞いたことを思ひ出してゐた。
そんな取留めもない話を水の上でしてゐる間に日かげが丁度頭のまうへの處に來たので、二つのボートは段々又沖の方へ漕ぎ出した。そして一としきり熱心にオールを動かしてゐたが、そのうち思ひ〳〵にいつもの乘り場の葦原の中へ漕ぎつけた。
竹崎は宿に歸つて、その晩帳場の爐端へはなしに出て來た時、宿の主人に金精沼の話をいひ出して、それとなく俱樂部の會員の中に奧田といふのがあるかと訊いてみたが、そんな名前はなかつた。
その後湖畔を散步してゐると相變らず彼女の一卷によく出會つた。そして、いつも同じやうに互に輕く辭儀をしていた。竹崎は、二十人に過ぎない會員の中の誰かの家族であるべき彼女達の姓を知りたいといふ好奇心を抱いてゐたが、それを訊く好い機會がなかつた。すると一度竹崎は寫眞機を持ち出して、ぶら〳〵アベニウを步きながら湖水尻の湯瀧の方までやつてくると、彼女達もそこに來てゐた。そして弟や妹は銘々小型の精巧な寫眞機を携へてゐてそこらの風景などを撮映してゐた。
竹崎は、そこから向うの中空に高く聳へてゐる男體山を二つばかりカメラに收めてから、此度は彼等の方に向き直つて氣輕な調子で、
「ひとつ貴方がたを。」といつて機械をそちらに向けた。

もうさうなると辭することも遁げることもしないで、彼女は尋常に妹達と並んで湯瀧の落ち口の處に立つた。

竹崎は長く手間をとらぬやうに、いゝ加減のところでシャッタアを切つて、

「どうも難有う。巧く撮れてゐるといゝがな。」と、氣づかはしさうに獨言をいつた。

すると弟が、今度は、

「貴方を一つ。」といつて、竹崎の方へカメラを向けた。

「さうですか。やつて下さい僕は此處に立つてゐますから。」

といつて、湖尻の溪流の畔にいつて立つた。

彼は巧みな手附で映しおはると、

「ありがたう。」といつて、につと笑つた。

「貴下は巧さうだ。出來たら一枚下さい。君は自分で現像をするんでせう。」竹崎が訊くと、

「えゝ、これから歸つてすぐやります。……貴方は。」

「私は自分ではやらないんですだからすぐ成績が分らなくつて可けないんです。東京へ持つて歸つてからでなくては。」

「何でもないんです。映すよりも現像の方が面白いんです僕は。………僕が一緒に現像してみませうか。」

「あゝ、さうやつて頂けば好い。やつて下さい。ぢや、もう二枚フイルムがのこつてゐるから、ついでに使つてしまはう。」

といつて、その青年を一枚と、彼女と妹を又一枚映した。その後で竹崎は、一寸氣を變へたやうに、

「失敬ですが、貴方がたは何方ですか。………」といつて、青年とその姉妹の方とを等分に見ながら、「金精沼の釣魚倶樂部の會員のお方なら、いづれ天下に知名なお方の御家族であることは分つてゐますがはゝゝゝ。」竹崎は一寸持ち上げるやうにいつてみた。

すると彼女は、一行の上の責任者であるかのやうな落着いた調子で、

「××と申します。」

「あゝ××さんですか。」竹崎は、それでよく分つたといふやうに肯いた。しかし彼は××といふ紳商を直接に知つてゐるわけでも何でもなかつた。たゞ新聞などで、××といふ著名の實業家があることをよく知つてゐた。そしてそれが○○といふ更に一層有名な實業家であることを知つてゐた。何でも、これも新聞か何かで知つてゐるところによれば××氏は○○氏の女婿であるか、或は○○氏の統裁してゐる○○商事會社の單なる重役であるか、どちらにしても其の會社の實權を代表して實業界の一方に重きをなしてゐる人間であることはよく知られてゐた。

道を歩きながら、竹崎は、青年に向つて、

「別莊にはいかないんですか。」と、訊いてみた。いづれ方々に別莊など持つてゐる筈だと思つたから。

「僕等もう海に飽きてゐるんです。」

「さうでせうなあ。私なんかも山の方が好い。」

四

その翌日の夕方であつた。青年は突然一人で竹崎の宿に訪ねて來た。

「寫眞が出來ました。割合うまく撮れてゐましたよ。」といつて、燒附けた寫眞を竹崎の前に置いた。

「う、、これはなか〱好く映つてゐる。」と、竹崎はそれを手にとつて、彼等の寫眞を眺めた。

「しかし、君の姉さんは隨分年とつて映つてゐるねえ。これぢや姉さんが不足をいつたらう、はゝゝ。」

青年はそんなことを聞くまへに。

「貴方のも出來ました。」と、自分の映した竹崎の小型の寫眞をも一枚そこに置いた。

竹崎はそれを又取り上げて、

「どれ、僕のですか。うむ、これは又一層巧い。僕より上手だ。一つは君の方が機械もいゝんでせう。」

「貴方はコダツタですか。」

「さうです。安物です。」

「僕もそれと同じのも持つてゐます。」

「君は熱心な方でせう。」

「そんなでもありません。」

竹崎は寫眞の話から他へ話頭を持つていくやうに、

「君は中學でせう。……何處の中學ですか。」

「日比谷です。」

「一中ですか、そいぢや秀才だな。」

「…………」

「感心だ。貴下がたのやうな家の息子さんはよく慶應とか、學習院などに行くものですが日比谷の一中とはえらい。」

「僕は實業家にはならないんです。」青年は率直にすぱ／＼物をいつた。

「なぜ？……實業家はいゝぢやありませんか。」

「僕は文學をやりたいんです。」

竹崎はそれを聽いて、から／＼と笑つた。

「文學が好きなんですか。」

「えゝ好きです。」

「そりやあ、貴方がたのやうな境遇の好い人なら、一生文學に身を委ねてもわるくもありませんかな。……君は兄さんもあるんでせう。」

「一人あります。」

「ほかは皆な女ですか。」

「えゝ五人女があります。」

「隨分多いねえ、おや、皆なで七人兄弟ですね」

「さうです。」

青年は、それよりも文學の話を少しでも余計にしたいといふやうな風で、「僕の中學からも有名な文學者が出てゐます。」

「さうでせう。誰れですか。」

「谷崎潤一郎が出てゐます。」

「おゝ、谷崎。……君は潤一郎の物が好きですか。」

「大好きです。」

「なるほど君達が好きさうだ。でも此の頃書く物は君達にはどうですか。」

「先の時分の方のものが面白いにや面白かつたですが、それでも今の物もやつぱり面白いです。」

「隨分變つてゐるからなあ。」

竹崎は、青年との文學の話はそれくらいにして、彼の姉のことが何となくやつぱり知つてみたかつた。

「五人も女の姉妹があるつて、いつも一緒に來てゐる人が、あれが一番上の姉さんですか。」

「さうです。」

「あの人、まだ貴下の家に居るんですか。」

青年は、竹崎の問ひに、一寸解らない顔をした。

「何處かへもう嫁して居られるんでせう。」

「えゝ、さうです。」といつたが、青年は何故か少しく暗い顔をした。竹崎は、それを見て、その上もう余計なことを訊くのは遠慮したいと思つたがもう一つだけ訊いてみたいと思つて、

「何といふ方です？……釣魚倶樂部の會員なんでせう。」先きの××といふのが會員であることを、竹崎は知つてゐたが、強ゐてそんなことにかこつけて彼女の良人の姓を知りたいと思つた。

すると青年は何の氣もなく、相變らずさつぱりした調子で、

「奥田といふ人です。」といつた。

竹崎はそれを聽くと、はつと胸を一つき突かれたやうな變な衝動を感じた。そして、妙に白を切る油斷のならぬ女だなと、ひそかに心の中で思つたまゝ、青年には少なからず不思議に思はれるほど少時の間堅い沈默に陷つてゐた。（九月十二日）

（おはり）



長篇「この三つのもの」

佐藤春夫

四章

「……最後にお八重は言ふのだ――本當のことは直樣本人に、といふのは君にだよ、聞くまではわからないとしても、僕の想像はどうなのだと言つてね。こいつには僕も閉口をした。僕はね、さつきもいふとほり、どうもお八重を欺きたくはなかつたのだ。僕としてはかうなつてはもう何もかも言つてしまふのが本當だと思つたのだ。つまり何もかも君の口から出ることを僕も求むのだね。が、その場はやつぱり今までのとほりの態度でゐたよ。といふのは僕自身の口からは出來るだけ言葉を出さないで、代りには出來るだけお八重に言はせるのだ。さうして逆に同じことをお八重に問ひ返したのだつた。

――僕の想像と言つたところで、僕はもう一年近くも北村には逢はないのだから、近頃何をしてゐるやら知らう筈もなし、これや反つてこちらから聞きたい事だが、人が北村に就てそんな噂をするにつけて、なる程さう言へばと思ひあたるやう

な事でもあなたにあるのですか。
つてね。すると、お八重はしばらく默つてゐたつけが、不意に立つて下りて行つてしまつたのだ。へんな様子だつたが、ひよつとすると今まで出かかつてゐた涙が急に溢れ出たのを、こつそり拭ふために行つたのぢやなかつたか知ら。ともかく直ぐにまた上つて來たよ。さうしていきなり言つた、
――判りましたわ。やつぱりさうなのです。
――さうといふのは、お雪と北村とが……ですか。
――え！　思ひ當りました。みんな思ひ當りました。
と、さうお八重はきつぱり言つたよ。いつも君が家をあける時にはきつと一緒にお雪も留守だとか、それに、何でも最近に君はお雪をつれて沼津へ行つた事があるつて？、大磯までの切符で乘越して、その乘越を支拂ふのを忘れて沼津驛から手紙で交渉に來たといふね。それをお八重は見たさうだが、夜、若い婦人とふたりづれで當驛に下車されたのは、旅館で調べると貴方ださうだが云々と書いてあつたつてね」
赤木は話し疲れて一息休む間に、北村は
「うむ」
と返事をした。相手の問を肯定すると同時にあとを促すものであるが、それ以外別に深い表情を、そのなかから覗ふことは出來なかつた。
「君はまた」赤木は言ひつづけた「最近Hへ行つたさうだが、その時にも東京からここへは歸らずに、ここを素通りしたままで行つた。あの時もお雪が一緒だつたに違ひない――とお八重は言つてゐた。でなけや、自動車をここへとめて

一足うちへよるのが自然なのだ。お雪はひとりであとから言つたのだとお八重に言つたさうだけれど　ふたりがふたりまで家をすどほりするのはをかしな事だとその時から思つたさうだよ。君は、お八重はもう勘づいてることは知つてゐたのかい。それとも勘づくなら勘づいてもいいと思つてゐたのかい」

「どうせ、いづれもう判るだらうからと思つてゐたよ。それに大野の辰子が何か暗示を與へたらうといふことはとつくに知つてゐたさ。何しろ辰子は大野のところへ歸らずにここにゐたのが、毎日お八重と顏を合していろんなことを話し合つてゐる樣子だつたからこりや惡い智慧をつけるだらうなと思つたさ。そいつが不愉快でもあり、それにどうで別れなけやならないものだから、きつぱりと早い方がいいと思つて、大野の話は僕が進行係になつて型をつけてしまつたのだ」

赤木は北村の話の間で「どうで別れなけやならないものだから、きつぱり早い方が」といふのを北村自身のことかと思つて聞いてゐたら、それは大野のことであつた。さうして赤木は、北村が自分の話に就ては言はうとはせずに、大野の事件に方向轉換しさうなのをちよつと異樣に感じた。

「さういふ點で、大野が僕に怒つてゐるらしいのだがね」北村はさう言つて寢がへりを打つた。腹這ひになると枕もとをさぐつて煙草に火をつけた。それを吸ふ度に少しばかりその光が彼の顏を照した。迷ひさうになつた話を、しかし北村は自分で氣がついた「それで、お八重は一たいどうしたいといふのだい」

「さ。そこまでは何とも言はなかつたのだがね――ちき、そこへ君が歸つて來たし、しかし、今まで相手が誰だらうと思つてゐた間よりも、いよ〱お雪だと判つたら、反つて氣がおちついた。それならそれでいい。自分は身を引く――と、そんなことを一言いつてゐたつけ。お八重は、君、相手を岩出いづみだと思つてゐたらしいね」―

「ふ、ふん」北村は輕く笑つた。實際、北村はお八重がさう思つてゐるらしいのを利用して更にさう思ひ込ませるやうに工夫してもゐた。お雪までがそれを手つだつて、岩山いづみのことを北村とお八重との前で言ひ出したり、その繪はがきを買つて來て北村を揶揄してみせたりしてゐた。

岩山いづみといふのは、淺草のオペラに出てゐた小さな女優だつた。年も小さかつたし女優としても名もないひとりだつた。北村は、全く、少しばかりそれが氣に入つてゐたのだ。三年程前に支那へ遊んだ歸りがけには毛皮の外套を土産に贈つたりした事もあつた。北村は、さすがに時折はお雪との關係を省みて、お八重の爲めにせめてお雪ではなく別の相手をと思ふ時に、いづみをその候補者に選定してみたのであつた。ところでそれが捗々しく進行しなかつた。そのうちにいづみは病氣にかかつてしまつて暫く見る機會もなかつたが、それが直つて再び舞臺へ出た時には、病氣がチブスであつたので、この小女優の肉體はむく／＼と肥つてしまつて、北村の氣に入らなくなつてしまつたのだ。——といふよりも、北村はやつぱりお雪との間が離れられなかつたのだ。

……が、いづみもなか／＼惡くはなかつたのだが……北村はふと、全くそれつきりに過ぎ去つてしまつたその頃のことを、いづみの拙いダンスの身振りを、しかしすんなりと延切つたごく若い、チキンのやうにうまさうな肉體を、それが惡どい色電氣のフートライトで照し出された時の喜びを、瞬間に思ひ浮べたが、やがてそれが直ぐお雪のことに變つた。昨夜のことから、今夜。さうして現に今。——お雪の奴はどこで何をしてゐるのやら。口では橘とも切れたやうなことは言ひはするが、それもどうやら怪しいものだし、橘でなけや外に、たしかに誰か相手があるのだ。何と、婬蕩た飽くことを知らない女だ！　北村は驚嘆と恍惚とでお雪を思ひ出しながら、暗のなかでそのさまざまな姿體を描き出した。その昨夜のアフタア・テエストが徐ろに消えると、北村の聯想は自づと辰子の事につゞいて行つた。

「「大野は、君に」と北村はそこで口を開いた「辰子の事でも何か言つてゐなかつたかい」

「いや、一言も。僕も別にその事は言はないしね。僕は何も知らないやうにしてゐたさ。事實知らないのだから」

「あれは君、あの事件は徹頭徹尾、大野が間拔けなのだ」例によつて北村は、先づ一口にさう言ひ切つてしまつた。北村の話すところに依ると、その前後から辰子はひどいヒステリイにかかつてしまつて、それがどうも何か事ありげなのに、大野は例の呑氣な性分で、それに出來かかつてゐる家のことにばかり逆せ上つてしまつて辰子の樣子にはまるで注意を拂つてやらないらしい。北村は見兼ねて大野に注意をした上で、或る日、事情を聞くためにH溫泉まで辰子を誘ひ出したのだ。辰子は何もかも打あけた。相手といふのは、毎月續きものの原稿を大野のところへ取りに來る雜誌記者だつた。あとで大野の言ふところでは、大野はその男のことを多少氣づいてゐたので、酒の席ではあつたがその男に、「辰子が欲しいならやらうか」と言つたことがあつた。するとその男は陽氣に手を振つて「いや、眞平だ」と事もなげに答へた。その白々しい態度を、大野は不都合だと言つて怒つてゐたが、男もさういふ調子の奴ではあるし、辰子はまた、自白に依ると、さういふ癖のある女で、彼女は今までにももう幾度か結婚生活をしては、その度毎に男をこしらへては離婚になつた。今度、大野と暮したのが一番長い位で、もう今度こそは大丈夫だと思つてゐたのに、と自分でさう言つては咽び泣きした……

「それはいいのだがね、辰子は、君」北村は今までの調子よりいくらか聲を低めて、「夜中に僕の部屋へ這入つて來て、もうお休みですかと言ひながら、自分でも寢間着姿で、僕の直ぐ枕もとへだらしのない格好で座り込んでね。今のやうな話を、必要ではあつたのだが、實にあけに話し出すんだ。なかなか具體的にね……」

「ふむ」

北村の話すのを聞いたが、赤木は、彼の癖で自分に關係のないことだし大して興味を持たなかつた。それに赤木は、今はさういふ他人の話よりも自分自身のことを早く言つてしまひ度いと考へつゞけた。それをどういふふうに述べ出したものやら、先づ北村に明すつもりでこゝに來た彼であつたのに、いざとなるとそれが容易でない自分を赤木は感じた。打明けて身の上を語るといふことは或る種の人間にとつては、その自尊心が決して許さないものである。さればこそ赤木は殆んど滿二年の間、一言も何人にも言はずに過して來た。しかし、赤木は今はもうその盤根錯節を眞中からすつぱり切斷してしまはうと決心してゐるのである。一度、充分に表白しさへすれば彼の心も安定するし、同時に事件も客觀化されて見られるだらう。さうだ彼自身がそれほど執してゐる出來事といふのも、要するにただ人間生活のなかのほんの一斷片で、人間の生活に就て人間が談るといふことは必要でこそあれ、決して秘密にすべきものではない。もしそれが複雜なものであればあるほど眞實な表白を要求してゐる。又、言ひたくない人が敢てその感情と戰ひながら眞實を述べることにこそ意味はあるのだ。しかし、赤木はその事件に於ては被害者であつた。さうして懺悔し告白しなければならないやうな何物もなかつたが、その代りにはたくさんの苦しみを受けた。それを言つて何になるだらうか？ 言はずに堪へられたならば堪えるのがいい。しかし言ふと言はないとにかかはらず、赤木はもうその事件そのものに就て堪えることが出來ないでゐる以上、せめてはその心の經過を友に聞いて貰はうと思ふのである。さうしてその友にも亦、彼の言はなければならない筈の事件を彼から聞かして貰ひたい。それだのに赤木が今になつてもまだ躊躇してゐるのは、用もない彼の自尊心の爲めではなかつた。彼は寧ろ彼の友を恐れてゐるのだ。彼の友は、そんな些細な出來事にそんなに心を勞してゐる彼自身を思ひやりもなく一笑し去るのぢやないかと思つた。さつき夕飯の後で不聰亭の結婚のことを評した時にも、今大野や辰子に關して話す時にも、そればかりではない。赤木がお八重の事に就て話すのを聞

いてさへも、北村は殆んど何等氣にかけてゐるやうな態度もなく、口を開くごとに寧ろ、シニカルな言葉が出た。赤木は北村に威壓されるのを感じた。赤木は北村のその態度を、しかし、非難しようとは思はないばかりか、彼の平常にふさはしいものとして肯定しなければならないと思つた。けれども赤木は北村を決して冷酷な男とは思つてゐない。それどころか事によつては温い律氣な人物としての半面を、赤木は幾年かの交際によつて知つてゐた。さうして世間が作品をとほしてのみ北村を想像して、彼を呼ぶに惡魔的作家といふのはいいとしても惡魔的人物と斷定するのを笑つた。超人を說いたニイチエが女のやうにはにかむ人であつた事を理解する赤木は、いつもは寧ろ北村のこの矛盾した性格を面白いものに思つてゐた。今とてもそれを知らないではないけれども、かういふひねくれた友の前で、赤木は素直には自分の苦悶を語り出せなかつた。赤木は考へた——この事ばかりではない、お八重の事だつても、北村さへもつと普通の性格なら。さうしてもし自分自身にも北村的の一面がなかつたら、もつと早く立入つて話し合つてゐるのがあたりまへなのだ。自分のことを深く語るのは女々しいやうに思ふ。人のことに深く立入るのは潜越なやうに思ふ。——たいが、何でもむきに話し合ふのは野暮に感ずる。ふたりはさういふ點で共通した點があつたのだ。……

北村は、やはり大野や辰子のことを話してゐたが、赤木はいつの間にか別のことを考へ始めて、北村のいふのを殆んど聞かなくなり、今までも身に入らなかつた返事が、だんだん杜絕えがちになつた。さうして北村の話は自づと終りになつた。北村は赤木がもう睡くなつたものだと思つた。彼等は今までにも、時々かういふふうに枕を並べて寢物語をしながら、いつの間にか、どちらかが眠つてしまつてゐることがよくあつたから。

北村は起きて小便に出た。彼は先年、支那へ旅行をしてから後、支那人のホテルなどで每晩便器を使用して來てから、それを便利だといふので歸ると直ぐにそれをうちでも使用し出した。彼は四五年前から糖尿病にかかつてゐて小便

が近いからでもあつた。お八重はさういふ物のために女中などの手を煩はすのを氣の毒がつて、毎晩自分でそれを部屋の外の廊下へ運んで來てゐた。

北村につゞいて赤木も起きた。彼は階下の便所まで下りて行つた。

茶の間の障子には電燈が明るく映つてゐた。お八重がまだ起きてそこの長火鉢によりかかつてゐるのぢやないだらうか、さう思ひながら通り過ぎた赤木は歸りかけに注意してみた。障子が五分ほど隙てゐたので、彼はちよつと覗いて見た。彼の想像は違つて、そこには北村の一番若い弟の末雄が、鼻のさき一尺ばかりのところに眩しい五十燭光をつけつ放したきりで、兩手を大きく擴げていかにも心地よげに眠入つてゐるのであつた。その何でもない光景を赤木は暫つと立留つて見てゐた。正面に見える柱時計は一時を過ぎたところであつた。

再び臥床に入つた赤木は、もとより直ぐは眠れさうにもなかつた。

「北村。もう寢たかい」

「いいや。起きてゐるよ」

「末雄は明るい電燈を鼻のさきへぶらさげたままで、ぐつすり寢てゐるね。子供はえらい者で、羨しいね」

「僕も、時々ああいふのを見るとさう思ふ。カルモチンがあるよ、欲しけれや」

「うむ……」

「で、何かい。君は明日東京へ行くつもりか。――僕も一緒に行つてもいいが」

「なるべく早く行つてかたづけてしまはなけや」

赤木はさうひとり言めいて云つた。どうして？と北村に尋ねて貰ひたげであつた。しかし北村は別の事を問ふた。

「お雪が何か言つたかい、君の細君のことを」

「いいや。どうして？」

「うむ。……何ね、あいつがどこかで聞いて來たんださうだが……。君のところへ出入りする男で音樂雜誌の編輯か何かに關係してゐる男がゐるつて？」

「あゝ杉田かい。――それがどうした」

「――どんな男だつたらうな」

「君、知つてゐるぢやないか。一度僕がつれて來たことがあるぜ。あんまりやかましく君に會ひたがるものだから」

「お雪もそんな事を言つたが、どうも思ひ出せない。それがね、君の細君とどうとかかだと、自分で言つて歩いてゐるさうだが。――杉田だか、またそれの友達だかそこのところは僕もはつきり知らないがね。尤も東京まで行けば直ぐわかるが」

赤木があまり即座にさう斷定したので、北村は言つた「思ひあたる事があるのかね」

「杉田だよ――それや、きつと」

「いいや、別に。だが直覺的にだね」

赤木はさつきから杉田の聲を思ひ出してゐたが、彼は杉田の聲音と全く同じ系統の聲を他にもう二人知つてゐた。濁つた太い聲で、好んで低く囁くやうに話し出すのを聞くと、赤木はいつも、彼等がさういふ風評のあつた人物だつたせゐもあるだらうが、その聲から女に關する不德な事件を聯想するのが常だつた。その音調のなかに誘惑そのものが含まれてゐるやうにさへ感じた。杉田のものはやや高い聲ではあつたが感じに於ては全く同じかつた。それに杉田といふ人

物は、率直とひかへ目との全く反對な性格を藏してゐて、そのためには尚作らしい罪過を犯しさうに思へた。勸められて一度その男の下宿へ遊びに行つたことがあるが、すると彼の机の前には彼がいつも惡罵してゐる或る作家の短冊が飾つてあつた。何でもないやうな事だが赤木はそれを忘れないでゐた……。赤木は言つた――

「なるほど、始めて聞くがありさうな事だよ」

赤木はまた思ひがけない事件が一つふへたことを知つたが、これは別だん驚きはしなかつた。どちらかといふと寧ろ心が輕くなるやうな氣持さへした。

「これは全く景品だな」彼は不意に冗談らしく言つてから、再び眞面目に「美代子はしかしその事に就ては、別に僕にはもう責任のやうなものは感じちやゐないだらうよ、――あれのつもりでは、あれはもう僕とは緣を切つたつもりでゐるだらうから。――あの女にしてみてもずゐぶん辛かつたに違ひないのだ……」

「どうして？　どういふわけだい」

「あれは愼吉と關係があつたのだよ」赤木ははつきりとさう言つて、唾を嚥み込んだ。

「愼吉と？　ふむ。いつの事だい」さすがに北村も驚いたらしい。

「なに、以前の事だ。もう三年――いや二年になる。一昨年の冬だ。君が支那へ行つたころのことだ」

「君はいつからそれを知つてゐるの」

「そのすぐあとからさ。――愼吉が僕にぢかにそのことを言つてあやまつたのだ。さうして女も後悔してゐるのだから、なるべくならばあれをあのままに僕の妻にしておいてやつて欲しいと言つてね。愼吉は、さうして、自分はもうそ

れつきり僕たちには近づかないのだ。僕もなる可く愼吉のいふとほりにしたいと思つたよ。僕はひとりぎめにつれて來た女ぢやあるが、いざ別れるとなれば、やつぱり親たちにだつて言はなけやなるまい。そんな事情ははつきり言へないし……、それに女も當座は精神が緊張してゐた。過を感じてゐたのだ。——それがだん〳〵いけない、自分にそんな落度があつて、いつでも出されるかも知れないとでも思ふのだらう。やきもちがひどくなつて、もととうさういふ癖はあるんだが。途方もない氣を廻すのだ。そらいつかも言つたらう、僕がお雪とをかしいなどと思ふんだからね。すべてがさういふ調子だし、僕としては直ぐにどうにか忘れるだらうと思つた事がなかなかさうは行かないのだ。重荷を負つて歩くやうなものだね、時が經つほど身にこたへる。苦しい事を打明けた上での愼吉の賴みではあつたが、僕はもうやりきれないと思ひ出した。難かしい事を仕遂げて見ようといふ心も、苦しい事を誰にも明すまいとする心もだんだん挫けては來るし、そんなくだらない心懸りで仕事は少しも出來ないし、僕の心持は僕の顏にも動作にも現はれて來たのだ」

「ふむ」

「田舍へかへつたのも、さういふ心持に轉期を與へるかと思つたからだが。——君、知つてるかどうか知らないが、美代子は田舍で懷姙したのだ」

「うむそれは聞いた。東京へ來て流産をしたといふぢやないか」

「さうだつて。僕は旅行中のことだからよく知らない。——が、自然に流産をしたのぢやなくて人工的にしたんぢやないかとも思つて見るんだがね。ともかくも、女が懷姙をしてから僕に不思議にもう一層氣持が暗鬱になつてしまつたのだ。これや、どうしても別れた方がいいと思ひ出した時であつたものだからね。しかし僕は君とは違つて子供があつたら子供は可愛いのぢやないだらうとも思ふ。さうなると子供のために女房をいつまでもそばに置いて、その女房がから

毎日不快だつたらどうしようと思ふ。僕はすつかり鬱屈してしまつて、殆んど誰とも口を利かなくなつた。その理由を知つてゐるのは當の美代子だけなのだが、居づらかつたに違いない。突然、東京から電報が來て、美代子のお婆さんが危篤だから歸れといふのだ。前後にどうも不自然なことがあつて、本當とは思へない。僕は美代子が歸りたいからだと知つた。僕はあれを東京へ歸してしまつて、自分は旅に出たんだ。――田舍を出る時から美代子はもう決心をしてゐたのだと思ふ。僕は旅行中にも考へつゞけて、やつぱり別れようと思ふのだ」

「それや、さうだな」北村は言つた「考へるまでもないようだ。善惡は別としてもそんな事は何だか氣持が、たゞ氣持が惡いからなあ。僕なら、何もさうくよ／＼と長くは考へない。尤も、君としては美代子にいいところがあつたからだらうが」

「そればかりではない。僕は苦しみながらも無駄目をしたとは思はない。さうして僕がさうすぐに別れたくなかつたのは、外にも理由がないでもなかつた。もつといろ／＼なことを言はなけやならないが」

「もういいよ。大がい判るから」

北村は、急に、無慈悲なほどきつぱりとさう言つた。さうして彼はしばらく默つてしまつた。赤木は、北村が立入つて聞かうとしないところに寧ろ北村流の友情を感じた。

「君にしろ、僕にしろ」北村が、思ひ出したやうな時分にまた口を開いた「一たい女房なぞはない方がいいのだ。人なみにそんな事をするから面倒なのだ。だから僕は、哲人不聰亭の四十面をさげての結婚を晒ふのだが」

さう言つたきり、北村はまた默つてしまつた。

昨日の晩ほどではないが、波の音がやはり聞かれる。赤木は海邊にある彼の故郷のことを思ひ出すとさま／＼なこと

が頭に浮んで來て、それは彼の母のことに一番多く關聯してゐた。その母に、歸つて美代子を離緣した話を報告することは、これがまた思ひだと考へながら彼は、つゞいてお八重のことやら、さてはもう長く顏を合さない愼吉や、それに美代子、杉田の聲などをもまた思ひ出された。杉田と美代子とどちらが働きかけたらうかと空想することが、これは半ば客觀的な小說作者めいた興味であつた。赤木はすつかり目がさへてしまつてどうしても眠れさうにもならなかつた。と、もう睡つてゐると思つた北村が靜かに枕もとの盆を引きよせて、その茶碗に水を盛りながら、カルモチンを數へてゐるらしいのが物音と、暗いなかのもの影とで判つた。

一たい、北村はそれに就ては一言も云はなかつたけれどもお八重をどうするつもりだらうか。赤木はそれに就て考へ初めてゐた。

記者曰　本號掲載の第四章は約二倍に達する豫定なりしも後半締切に間に合はず次號に廻しました。作者及讀者の御宥恕を願ひます。

編輯だより

◇初秋の夕ぐるるときほどありがたいものはない。グッタリ疲れた體でも散歩の三十分間もすれば神氣頓に蘇つてくる。夜分と、爽曉は一年中書き入れの讀書季である。人間はこの好期の利用如何で運命が決まるのである。

◇上野の秋も二科や佛展、院展で色づいて來た。しかしこれ等が果して好畫家に何ものを與へ得たか、好畫家の鑑賞は日に月に著しく進んで來つつあるが、畫家の制作が之に伴はざるの憾はないか。

◇本月號の論文欄は雄篇巨作のみを以つて充たされた。末弘氏の「勞働組合法制定に關する諸問題」は刻下最重要の論文で、論壇は勿論、政府、議會へも一大影響を與へるだらう問題を含む雄篇。

◇もしそれ、多大の期待を有する倫理界の一大雄材錦田氏の執筆は論壇第一の收獲で珍しき限りだ。この一作の寄稿を受けたことは感謝にたえない。

◇「社會科學」十月號は「形式社會學研究號」とした。そして高田博士、新明、波多野、淡、五十嵐、關氏等の新說が擔當執筆した。「近代社會學傾向」が如何に進展しておるか、「共同社會」に對する高田氏の新說が如何なるものであるか初秋論壇に一大智識を貢獻するものである。社會學に志す學徒以外の人々も必讀の好文獻だ。本號は單行本の使命をも兼ねる永久的に價値あるものだ。

◇河合榮治郎氏は此程九月歐洲より歸朝。槇有恒氏も加奈陀より歸朝。十一月號にはその登山記を載せる。

◇細井和喜藏君逝く。君の生涯は苦闘の生涯であり、忍從の生涯であり、奴隷の生涯であつた。しかし君が社會意識に目ざめてからの躍動は目まぐるしいほどの武者振りであつた。「女工哀史」の一書は永久に生命を把持して行くであろう立派な世界的文獻だ。

◇第二次現代代表短歌集中、與謝野晶子氏「人間往來」前田夕暮氏「原生林」が本日出來しました。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	四圓六拾錢	郵税不用 大増共
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	郵税不用 大増共

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲増刊號其他價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割増の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾四年九月廿日印刷納本
大正拾四年十月一日發行

（價九十錢）

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行兼印刷人　平田貫一郎

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

東京芝區愛宕下一ノ一
發行所　改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

改造社出版圖書目錄

（大正十四年十月現在）

（1）經濟及社會

著（譯）者名	書名	内容一斑	版數	判型頁數	定價送料
法學博士 穗積重遠著	離婚制度の研究	○離緣狀と緣切寺○緣切寺滿德寺○クリスト教の婚姻非解消主義○イギリス其他各國の離婚制度の研究	新刊	菊上 九四〇頁	一〇・〇〇円 内・三六
法學博士 河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	（一）家族制度論○家族制度の性質と機能○外五項（二）婦人問題○女子勞働問題等を檢討す	7版	四六上 三五三	二・〇〇 ・二〇
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	婚姻法の將來○夫婦間の貞操○寡婦の再婚○離婚防止○婚姻媒酌○家族制度と婚姻等結婚に關する研究	5版	四六上 三〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田德三著	社會政策と階級鬪爭	（一）社會政策序論○「社會」の發見○外三項（二）階級鬪爭と其當事者等其他の深刻なる研究	30版	四六上 五〇四	三・〇〇 ・二四
法學博士 福田德三著	社會運動と勞銀制度	（一）社會運動の理論的根據（二）勞働爭議の意義及種類（三）勞銀制度を博士一流に檢討す	15版	四六上 四三〇	二・五〇 ・二〇
法學博士 福田德三著	ボルシェヴヰズム研究	○マルキシズムとしてのボルシェヴヰズム○レニン國家論○ボルシェヴヰズム○「資本主義への降伏」等	10版	四六上 三九四	二・九〇 ・二〇
慶大教授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	○緒論○○ロオドベルトス研究○マルクス研究○雜錄（三章）○○追補河上博士との論戰記錄	8版	菊上 四二三	三・二〇 ・一八
商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念、研究方法の變遷、理想○勞働法の法源○勞働法の効力等勞働法概論	5版	菊上 三四〇	二・六〇 ・二六
ジノヴィエフ原著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	○組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動○勞働組合世界的名文献の飜譯	4版	四六並 一六四	・九〇 ・一四
ニコライ・レーニン原著 茂森唯士譯	レーニニズム	○ロシヤ革命の國際的意義○ボリシエヰキーの成功の一根本條件○ボリシエヰーズム發達の諸期等	4版	四六並 二二四	一・二〇 ・一六

著者	書名	内容	版	判型・頁	定価
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	○日本社會史の觀念○氏族制度の社會○郡縣制度の社會○莊園制度の社會○分權的封建制度の社會等	21版	菊上 三九六	二・五〇 ・二四
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	○農村問題と對策○農業改造方策○都會と田舍との分裂○農民土地愛着心冷却の傾向等外數項の熱論	14版	四六上 三四四	二・〇〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	21版	四六上 四一八	二・五〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	噓の効用	○噓の効用○改造問題と明治時代の省察○役人の頭○小智慧に捉はれた現代の法律學○其他八項	41版	四六上 四四四	二・六〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	新法學の權威が新しき國民はいかに法律を心得ねばならぬかを說いた法治國民への國民讀本	新刊	四六上 四一三	二・五〇 ・二〇
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の問題○世界的破綻○歐洲再生の力○佛國、一般財政經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務等	4版	四六並 三四〇	一・三〇 ・一六
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	近時澎湃たる社會科學問題に關し政府者に對し巨砲を放つ。學生諸君は本問題の內容發展を本書で知れ	14版	四六並 二〇〇	一・三〇 ・一二
ウンターマン著 森 喜一譯	哲學思想の史的考察	○著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の變遷を語るもの	4版	菊上 三四三	二・〇〇 ・二〇
ヨゼフ・ディツゲン原著 山川均譯	無產階級の哲學	現代のブルジョア哲學に對し無產哲學の新提唱新時代學徒の必讀すべき文獻	5版	四六上 三六六	二・五〇 ・二〇
賀川豐彥著	生存競爭の哲學	生存競爭の原理を闡明し生存互助の哲理を說き生命力と愛の力が生存競爭を超越するを進化論的に說す	12版	四六上	二・〇〇 ・二〇
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	(一)階級篇○階級の本質○マルクス的階級概念外一篇(二)第三史觀篇○經濟史觀より第三史觀まで等	5版	菊上 三八四	二・八〇 ・二四
森戸辰男著	思想と鬪爭	○震災と主義者と反動勢力○國粹主義者と政治的殺人○大杉榮君の追憶○外四項	4版	四六上 三五六	二・〇〇 ・二〇
細井和喜藏著	女工哀史	我國の工場及女工生活を知る世界的勞働記錄十五ケ年の氏の血と肉とから成る本書を國民は一讀せよ	10版	四六並 四四八	二・〇〇 ・二〇
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	(一)非十月革命文學○革命の文學的同伴者○アレクサンドル・ブロック○未來派○詩の形○外四項	新刊	四六上 三六六	二・〇〇 ・二〇

帝大助教 平野義太郎著	法律における階級闘爭	○法律に於ける階級闘爭○階級闘爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級闘爭○外四章	8版	菊上 三四三	二・五〇 ・二六
法學博士 河田嗣郎著	農政四十三講	○農村問題解決の鍵鑰○小作爭議と農村破壞○外四十一項、農村問題を知らんとする人の必讀の書	5版	四六上 三九八	二・五〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	○經濟組織の改造と政治の革新○政治的議會より經濟的議會へ○產業資金の供給○外九項	5版	四六上 三五四	二・五〇 ・二二
農學博士 小野武夫著	農村研究講話	○緒言○基礎的研究の必要及び其綱領○農村問題とは何ぞや○村落の研究○農家經濟の研究等	新刊	四六上 二六八	一・五〇 ・一八
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	マーシャル經濟學原理（分册三）	現代の經濟學書中、此書程、學としての生命と光の鮮かなるものはない。本篇は主として生產を解く。	新刊	菊上 四九八	三・五〇 ・二六
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	マーシャル經濟學原理（分册四）	譯者は、晩年のマーシャルに親炙したる人、原理に流れつゝある血を其儘移植したる名譯。	近刊	菊上 三四〇	三・七〇 ・二八
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	近刊	四六上	價未定
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歷史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業○中世寺院法と組合及び會社等	新刊	四六上 三三三	一・五〇 ・一八
室伏高信著	印象と傾向	著者が歐米漫遊中、彼地の文豪、政治家、社會運動家、哲學者、科學者に會見せし趣味ある印象記。	4版	四六上 四三〇	二・〇〇 ・二〇
ロマン・ローラン著 大澤章譯	先立ちて來る者	深遠たる思想と熱寵ある筆致を以て世界の思想界に牢乎たる位置を占むるローランの「先驅者」の飜譯。	新刊	四六並 二九六	一・五〇 ・一六

(2) 政治及法律

法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	21版	四六上 四一八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	○法窓閑話○誤判賠償の根本原理○單法會議廢止論○小作人と土地所有權○法律小話（十二話）○外二篇	新刊	四六上 四三三	二・五〇 ・二二
帝大助教 平野義太郎著	法律における階級闘爭	○法律に於ける階級闘爭○階級闘爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級闘爭○外四章	8版	菊上 三四三	二・五〇 ・二六

商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	◯勞働法の基本觀念◯勞働法の研究方法◯勞働法制の變遷◯勞働法の理想◯外六章	5版	菊上 三四〇	二・六〇	・二六
早大教授 大山郁夫著	現代日本の政治過程	(一)現代に於ける社會思想及び政治事實の進展(二)現代日本の政治過程(三)多元的國家觀の法理	4版	四六上 三五四	二・五〇	・二二
法學博士 森莊三郎著	法制講話	◯總論◯親族法及び相續法◯皇室法◯憲法◯全國の中學師範女學校の教科書、參考書としての最良書	4版	四六上 四五四	二・五〇	・二二
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	近刊	四六上	價未定	
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	◯婚姻法の將來◯夫婦間の貞操◯寡婦の再婚◯離婚の防止◯婚姻媒酌◯家族制度と婚姻	5版	四六上 三六八	一・五〇	・一八
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	◯序論◯利子禁止思想の歷史◯中世寺院法と猶太人◯中世寺院法と商業◯中世寺院法と組合及び會社等	新刊	四六上 三五三	一・五〇	・一八
北一輝著	日本改造法案大綱	◯緒言◯國民の大綱◯私有財產制度◯土地處分三則◯大資本の國家統一◯勞働者の權利◯外三章	4版	菊上 一六六	一・五〇	・一八
佛國藏相 カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	◯大戰の苦悶◯世界的破綻◯歐州再生の力◯佛國一般經濟の混亂◯佛國賠償問題と戰爭債務◯外三章	4版	四六並 二四〇	一・三〇	・一六
ニコライ・レーニン著 茂森唯士譯	レーニズム	◯ロシヤ革命の國際的意義◯ボリシエヰキーの成功の一根本條件◯ボリシエヰズム發達の諸期◯外五章	4版	四六並 三二四	一・二〇	・一六
ヂー・ジノヴィエフ著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	◯組合運動の原則的諸問題◯ロシヤに於ける組合運動◯勞働組合――刻下最必要の一文献	4版	四六並 一九四	・九〇	・一四
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	◯カントの平和論◯カントと政治◯思想問題と哲學的精神等――カント研究者に必要の一書	7版	四六上 三六八	一・五〇	・一八
阪 内務事務官 三宅 司法書記官 著	普通選擧法要綱	普通選擧法に對する尤も信賴すべき當局者の釋義。各府縣警察署にては皆本書を參考として購買した	10版	菊半截 一八四	・六〇	・一四

(3) 哲學及宗教

文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	一般心理學を體得せんと欲する學徒のために解り易く書かれた我國で心理學の最良書	30版	四六上 六四八	四・二〇	・二四

著者	書名	内容	版	判・頁	定價・送料
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	(一)序論(二)本論民族心理學(三)別論文化と歷史〇文化の領域(〇文化の將來 四)附錄	7版	四六上 三六六	三・五〇 ・二四
文學博士 米田庄太郎著	文化哲學叢書第一篇 リッケルトの歷史哲學	〇リッケルトは現代哲學の巨星、氏の哲學を尤も解り易く繹いた一書米田博士の懇到の釋義亦喜ぶべし	8版	四六上 六六六	四・七〇 ・二六
板垣鷹穗著	文化哲學叢書第二篇 新カント派の歷史哲學	〇歷史實在の意味〇歷史哲學の概念と歷史〇カントの批判哲學と科學方法論〇外三章	5版	四六上 二二八	一・五〇 ・一八
京大教授 恒藤恭著	文化哲學叢書第三篇 ジムメルの經濟哲學	〇序說〇本篇價値と貨幣〇貨幣と實體價値()目的系列に於ける貨幣〇附錄著作年表參考書	改版	四六上 四四八	三・〇〇 ・二〇
廣島高師教授 勝部謙造著	文化哲學叢書第四篇 ディルタイの哲學	〇傳記及び重なる著作〇〇ディルタイの哲學的立場〇精神科學論〇世界觀說〇〇藝術論〇結語	8版	四六上 二八四	一・八〇 ・二〇
リッケルト原著 小川義也譯	生の哲學	理想の魂なき生の偶像を謳歌するの愚を悟り眞の生の意義を闡明せるもの新理想の巨擘たる著者の傑作	5版	菊上 三六六	二・八〇 ・二四
京大教授 植田壽藏著	藝術哲學	〇藝術的理念〇藝術的自然〇藝術家〇藝術作品〇觀照—藝術の進展性を新銳の氏が熱烈に論究す	5版	菊上 三四四	二・七〇 ・二四
佐藤繁彥著	體驗宗教の研究	(一)序論〇體驗宗教の意義(二)本論〇カント、シュライエルマッハー、ルッターの宗教(三)結論	4版	四六上 三三六	二・〇〇 ・二〇
スティルネル著 辻潤譯	自我經	(一)人間篇〇人生〇舊時代と新時代の人々〇古代人〇近代人自由人(二)自我篇()所有〇所有人唯一者	8版	四六上 六六八	二・八〇 ・二〇
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	()物理學と認識()文藝上の沽耳論と科學〇物理學上の認識の問題()絕對運動論〇外四篇	6版	四六上 二四四	一・五〇 ・一八
東洋大學教授 關寬之著	學校兒童心理學	〇學齡兒童を研究の對象として實驗的にまた演繹的にその心理狀態を考究したる教育的心理學である。	3版	四六上 四三三	二・七〇 ・二二
文學博士 松本亦太郎著	智能心理學	人間力の智能方面を、博士獨自の廣汎にして精緻なる立場より研究したるもの。	近刊	四六上	價未定
ヨゼフ・ディッゲン著 山川均譯	無產階級の哲學	〇ディッゲンの哲人と其所學〇哲學の實果〇一勞働者の觀たる人間の腦髓の働きの性質	5版	四六上 三六八	二・五〇 ・二二
ウンターマン著 森谷一譯	哲學思想の史的考察	原著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の變遷を語るもの	3版	菊上 三四三	二・〇〇 ・二二

著者	書名	内容	版	判型	定價
室伏高信著	靈の王國	獨逸の政治家ラテナウの思想神髓を傳へたもの人の心の崇高なものを抽出し靈の王國を建設せよと高唱す	5版	四六上	一・五〇 ・一八〇
日本聖公會編	鮮血遺書	三百年前キリシタンを信奉して長崎立山にて虐殺されし二十六人の殉教記錄、言々これ血涙記	近刊	四六上	價未定

(4) 文學

著者	書名	内容	版	判型	定價
京大敎授 植田壽藏著	藝術哲學	○藝術的理念○藝術的自然○藝術家○藝術作品○觀照○藝術の進展性—植田氏は藝術哲學の權威	5版	菊上 三四四	二・七〇 ・二四〇
文學博士 厨川白村著	苦悶の象徵	白村の唯一といつてもよい系統ある藝術を論じたもので千古の名文。情熱に富んだ立派な文學槪論だ。	50版	四六上 二二四	一・八〇 ・二〇〇
吉江喬松著	近代文明と藝術	○近代思想とか藝○現代日本文明と藝術○大自然と文藝等を氏の流麗な文章で述ぶ。	5版	四六上 三四四	二・〇〇 ・二〇〇
里見弴著	文藝管見	○自序○自分自身の紹介○藝術の分野○文藝槪觀○內容と表現等、文藝に志す人の必讀の良書	最新	四六上 一九八	一・二〇 ・一六〇
レオン・トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	○非十月革命文學○革命の文學的同伴者○未來派○詩の形式派とマルクス主義等	新刊	四六上 三四四	二・〇〇 ・二〇〇
帝大敎授 阿部次郎著	學藝論鈔	○若きゴーホ○ゴーホの藝術○ツーゴー・ヲルツの傳○晚年のロダン○美の問題について等	6版	四六上 四三三	二・二〇 ・二〇〇
昇曙夢著	露國現代の思潮及文學	露國現代の思潮文學を解剖した我國での唯一の大文獻。近代の露國文學を知る人の第一の參考書。	4版	四六上 七八六	四・八〇 ・三〇〇
文學博士 厨川白村著	近代の戀愛觀	○近代の戀愛觀(十三項)○再び戀愛を說く(七項)○三度戀愛に就て言ふ○結婚式を非す等實行日本一	120版	四六上 三四〇	二・五〇 ・二〇〇
理學博士 石原純著	戀愛價値論	○戀愛價値論○戀愛と道德○愛の一つの相としての戀愛の本質○戀愛と生活○現代女性の步むべき道	7版	四六上 二八〇	一・六〇 ・一八〇
親佛文學會編	ゆかり	クローデル大使を送る爲めに佛蘭西に關係ある文家詩人畫家が自分の最もいい作を集めた趣味ある著書	新刊	四六上 四四八	上三・五〇 [illegible]・〇二〇

(5) 小說及戲曲

賀川豊彦著	長篇小説 死線を越えて（上卷）	我國第一の賣行きを示せる有名なる賀川氏の自叙傳的小說。此三卷は世界各國に飜譯された高名の書物	288版	四六上 五三三	三・〇〇 ・二四
賀川豊彦著	長篇小説 死線を越えて（中卷）太陽を射るもの	氏の貧民窟敎化賣淫窟敎化がいかに熱烈であることは我國の全民衆の承認する所。勞働記錄の聖典。	182版	四六上 四九四	二・八〇 ・二二
賀川豊彦著	長篇小説 死線を越えて（下卷）壁の聲きく時	震災前後に氏が神の如く活躍せるさまは本書を讀むのものの誰でも涙なしでは讀み得ぬところである、	60版	四六上 五二〇	二・八〇 ・二四
志賀直哉著	直哉傑作選集 壽々	○小僧の神様○正義派の諸作の追憶○母の死と新らしい母○城ケ崎にて○眞鶴○和解等の十數名篇	5版	四六上 四一三	二・五〇 ・二二
芥川龍之介著	沙羅の花	○羅生門○奉教人の死○きりしとほろ上人傳○或日の大石内藏之助○南京の基督○秋山圖等	7版	四六上 四〇八	二・八〇 ・二二
里見弴著	改版 直輔の夢	○甘酒○直輔の夢等最近氏の代表作を集む。名人の名作といふ感じが横溢す。	10版	四六上 二七四	一・五〇 ・二〇
武者小路實篤著	第三の隱者の運命	武者小路氏の創作中尤も力の這入つた傑作と稱せらるべきものだ。そして尤も考へさせられる大作。	廉價	四六上 五九〇	一・九〇 ・二〇
吉田絃二郎著	ダビデと子たち	○ダビデと子たち○叔父夫婦○救はれぬ人間○高原○○峠	10版	四六上 三八六	一・八〇 ・二〇
吉田絃二郎著	芭蕉	○芭蕉○草原○或る中學教師○二老人と彼○生れ來る者を集む。就中芭蕉は好評高し。	14版	四六上 二八六	一・六〇 ・一八
正宗白鳥著	戲曲 ある心の影	○ある心の影○人生の幸福○影法師○秘密○白壁の五篇。「人生の幸福」は氏の大力作	4版	四六上 二八六	一・六〇 ・一八
イバニエス原作 鈴木厚譯	血と砂	西班牙の闘牛士の生活を描く。彼等がいかに社交界に持て、そしてその生活のいかに華かなるかを見よ	10版	四六上 五六八	二・六〇 ・二二
三上於菟吉譯	ゾラ傑作 獸人	失戀に狂ふ女、凡ゆる女をたらす色魔を描いて情慾の句に充ちた戰慄すべき作ゾラの作中深刻なるもの	品切	四六上	三・〇〇 ・二二
ジョルジユ・サンド著 田沼利男譯	鬼火の踊り	葡萄香る佛國の田園を背景として村乙女と若き農夫の清新純朴なる戀を描く佛國文豪の一大傑作	4版	四六上 二四四	一・八〇 ・一八
藤森成吉著	東京へ	○東京へ○無心○少年の群○脫走者○若き修道者○山湖等社會意識を明にせる絶品	4版	四六上 三七〇	二・三〇 ・二〇

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價	送料
藤村千代著	脂粉の顏	○人間の意企○追憶の父○東京と云ふところ○巷の雜音○脂粉の顏等新人の力作を集む	4版	四六上 三五二	二・三〇	・二二
野上彌生子著	海神丸 其他	○海神丸○多津子○所有等	3版	四六上 二四〇	一・三〇	・二〇
佐藤春夫著	佗しすぎる	美文家として名聲高き著者の名作、傷々しき戀の記錄、詞は花の如く想は星の如し藝術味豐なる作品	5版	四六上 二五六	一・六〇	・一八
武林無想庵著	長篇小說 結婚禮讃	規模の廣大は古今に絕し人間の性慾を赤裸々に取扱つたものゾラのナナ以上に面白く一讀卷を掩ふ不能	11版	四六上 三六六	二・三〇	・二〇
武林無想庵著	文明病患者	○續結婚禮讃○アナルキスタの夢○溷沌○日記よりでめとりずす○遊女くりにす○文明病患者等	5版	四六上 四〇六	二・三〇	・二〇
長與善郎著	靑銅の基督	○靑銅の基督○陸奧直次郎○シスカの一夜○Cの話	5版	四六上 三六六	二・〇〇	・二〇
中西伊之助著	汝等の背後より	花の如き女革命家を中心として脫獄決鬪虐殺等陰慘の場面を展開する朝鮮を背景とする深刻の長篇小說	9版	四六上 四〇六	二・三〇	・二〇
中西伊之助著	農夫喜兵衛の死	小農喜兵衛の作は滿洲で戰死し娘は賣れて朝鮮に行き彼は地主に虐られて水に溺れた現代社會の縮圖	5版	四六上 二九八	一・七〇	・一八
葛西善藏著	哀しき父	○不良兒○仲間○西○本來の面目○春○惡夢○父の歸鄉○埋葬そのほか○下人風呂○M氏の失策等	5版	四六上 三四四	一・九〇	・二〇
ルネ・マラン作 傑作 高瀬毅譯	バッアラ	黑人文豪の大傑作、黑人の生活を深刻に描けるもの奔放なる愛慾、慘忍なる憎惡心眞に特殊の藝術境	30版	四六上 二四〇	一・五〇	・一八
佛フラマリオン著 高瀬毅譯	此世は如何にして終るか	精細なる科學的立場より世の終末を鮮明に描出せる特殊の文學、譯文亦些の澁停なく原文の俤を傳ふ	9版	四六上	二・〇〇	・二〇
近松秋江著	二人の獨り者	愛慾を描くに纏綿の名筆を有せる氏が最長篇力作。男ばかりの生活は寂しいが又別種の趣がある。	4版	四六上 三三二	二・〇〇	・一八
犬養健著	一つの時代	○愚かな父○眼白○初夏○弱い生徒○冬の出來事○姉弟と新聞配達○二人兄弟○朧夜	5版	四六上 三六六	二・五〇	・二二
柳原燁子著	則天武后	題材を支那に採りて權力と戀とにまつはる女性の心理を深刻に描寫せるもの文章亦華麗香高き藝術品	4版	四六上 二四六	一・六〇	・一八

著者	書名	內容	版	判型・頁數	定價・送料
山本有三著	嬰兒殺し	○井村教授○嬰兒殺し○生命の冠○女親○坂崎出羽守	[illegible]版	四六上 三〇八	二・〇〇 ・二〇
菊池寛著	戀愛病患者	○信康母子○浦の苫屋○ある記錄○微苦笑○世評○震災餘譚○戀愛病患者○顯縊り上人○丸橋忠彌	1[illegible]版	四六上 二三六	一・五〇 ・一八
菊池寛著	啓吉物語	文壇の雄菊池氏の自傳とも出世作とも見るべき短篇集若き氏が如何に才氣に富み力強きかを盛る絶好書	改刷	四六上 四六九	二・〇〇 ・二〇
北村壽夫著	幻の部屋	貧乏な美術家資本家の娘、秘書役等を拉し來りて人生の各斷面を生々しく讀者の面前に投げ付けた傑作	新刊	四六上 二七〇	一・六〇 ・一八
トマス・ハーディ著 内多精一譯	薄命のテュード	結婚と靈肉鬪爭社會組織の欠陷と現代の學風信仰に對する皮肉を深刻に描けるプロ文學の代表小說	新刊	四六上 七〇八	三・三〇 ・二四
長田秀雄著	戲曲 愛憎篇	○石山開城記○父の別莊	4版	四六上 二六六	一・六〇 ・一八
細田民樹著	或兵卒の記錄	○入營の日○最初の頃○多忙な初年兵○饑餓道○ひとつの飯盒○厩○高原の廠舍○愛馬菊水○外五篇	4版	四六上 四六八	二・五〇 ・二二
泉鏡花著	番町夜講	○眉かくしの靈○夫人利生記○假宅話○きん稻○光籃○胡桃○火のいたづら○柄の貧○雨ふり○外二篇	4版	四六上 三三六	二・〇〇 ・二〇
谷崎潤一郎著	新選谷崎潤一郎集	○神童○葵○悪魔○續悪魔○あくび○前科者○異端者の悲しみ○人面疽等外數十篇	新刊	四六上 三二〇	五・五〇 内・二七
谷崎潤一郎著	戲曲 愛すればこそ	○愛すればこそ○永遠の偶像○彼女の夫○或る調書の一節等藝術品として我國第一の實行を示す	101版	四六上 二八二	一・六〇 ・一八
谷崎潤一郎著	戲曲 愛なき人々	○本牧夜話○お國と五平○白狐の湯○愛なき人々	[illegible]1版	四六上 三四四	二・〇〇 ・二〇
谷崎潤一郎著	痴人の愛	マゾヒズムの代表作として世界的の名作。最近創作壇の第一人者、	最新	四六上 三九八	二・〇〇 ・二二
吉田絃二郎著	運命の秋	○西鄉吉之助○寒日○人間を悲しむ○霧の中○故鄉の町○花梨の下	[illegible]版	四六上 三三六	二・〇〇 ・二〇
志賀直哉著	雨蛙	○雨蛙○冬の往來○濠端の住ひ○偶感○轉生○梟○斷片○子供三題○廿代一面○或る男其姉の死等	新刊	四六上 四一三	二・五〇 ・二二

(6) 詩歌

齋藤茂吉著	現代代表自選歌集 朝の螢	天才詩人茂吉の歌は全く子規・漱石と共に文壇の寶玉である。此歌集は現代歌壇の一大權威、	新刊	四六上 一五四	一・五〇 ・一八
島木赤彦著	現代代表自選歌集 十年	彫琢の殿堂に達す。かくの如く藝道に澄透の境地を有する歌人の自選集出るは歌壇の喜び	新刊	四六上 一四〇	一・五〇 ・一八
古泉千樫著	現代代表自選歌集 川のほとり	未だ曾つて歌集を出さざりし氏の處女歌集にして併せて全集。左千夫を師として出藍の偉材	新刊	四六上 一八六	一・八〇 ・一八
中村憲吉著	現代代表自選歌集 松の芽	アララギ新進歌人隨一、天才ありて視野に一新境地を發見せり茂吉、赤彦と併稱さる。	新刊	四六上 一八〇	一・八〇 ・一八
釋迢空著	現代代表自選歌集 海やまのあひだ	尤も幽寂な歌人。此人の歌を誦し居れば身はいつでも深山幽谷にあるの思ひがする。	新刊	四六上 二六六	一・八〇 ・二二
木下利玄著	現代代表自選歌集 立春	白樺第一の歌人信綱を師としその和歌は師の發見せざる一別境を行く長閑なる惑があこ	新刊	四六上 一七六	一・八〇 ・一八
加藤一夫著	亂舞する焰	○亂舞する焔○悲劇の成長○寂しき道づれ○愛の復活	4版	菊半上 三〇八	二・〇〇 ・一八
北原白秋著	現代代表自選歌集 (題未定)	歌道各派に重大なる影響を與へた歴史的天才詩人その和歌は奔放雄大天馬空を行くの慨あり	近刊	四六上	一・八〇 ・一八
與謝野晶子著	現代代表自選歌集 人間往來	北原氏と共に歌壇の雄にしてその功勞は枚擧に遑あらず此人の自選歌集は歌壇の一重鎭だ。	近刊	四六上	一・八〇 ・一八
前田夕暮著	現代代表自選版集 原生林	歌集として見れば此人程意外に立派な歌が集まる人は又他に少いと思はれる。總てこれ名玉。	近刊	四六上	一・八〇 ・一八
土岐哀果著	現代代表自選歌集 空を仰ぐ	啄木を知るものは哀果を擧げ、哀果を論ずるものは啄木を引合に出す、近時彼に一轉機あり	近刊	四六上	一・八〇 ・一八
若山牧水著	現代代表自選歌集 (題未定)	その風格、その和歌共に脫俗して歌道以外の人々まで氏を仰ぎ見る氏か半生の史的集成。	近刊	四六上	一・八〇 ・一八
窪田空穂著	現代代表自選歌集 (題未定)	この人の藝道に於ける境地は近時ますます展けて來た。此一書を讀みて近時に追へば一段の味あり	近刊	四六上	一・八〇 ・一八

隨筆

帝大教授 阿部次郎著	北郊雜記	○北郊雜記(十三項)○思潮雜記(二十五項)○雜纂(十一項)	18版	菊半上 三〇三	一・九〇 ・一八
倉田百三著	超克	○善と禍との一致に就いて○人間主義と超克主義○卑しむべきものに就いて○心なき業に就いて等	34版	四六上 三九二	二・二〇 ・二〇
賀川豊彦著	星より星への通路	○星より星への通路○デオニソスの誕生○混迷の巷より	49版	四六上 三七八	二・〇〇 ・二〇
若山牧水著	樹木と其の葉	○氏の洒脱な旅行記、感想、歌道感、人生感、自然感を集めた面白く誦へらるる一書	5版	四六上 三六七	二・〇〇 ・二二
長谷川如是閑著	改造社隨筆叢書第一篇 犬・猫・人間	○ピヨトルの猫と私の猫○亡友四匹○猛犬ジャックの話○其他犬、猫、人間、家に關する隨筆	17版	四六並 四〇三	一・八〇 ・一六
堺利彦著	改造社隨筆叢書第二篇 野外劇の一幕	○野外劇の一幕○獄中を顧みつゝ、○出獄後の世の中○過去の夢、未來の夢、現存の夢○外數項	5版	四六並 二六八	一・五〇 ・一六
中澤臨川著	改造社隨筆叢書第三篇 嵐の前	○嵐の前○余の態度○新藝術觀○思想藝術の超然性○感能のさま〴〵○隱の花等	18版	四六上 二三四	一・五〇 ・一六
高濱虚子著	改造社隨筆叢書第四篇 朝の庭	○所謂新傾向○雜感○二葉亭主人の俳句の草稿を見て○十九日間○机上觀能○螢○外二十五項	5版	四六並 二五五	一・七〇 ・一六
武者小路實篤著	改造社隨筆叢書第五篇 筆の向くまゝ	○アンリ・ルーソーの畫を見て○詩十二○詩と感想○雜感○舞臺監督に就て○時事雜感その他	新刊	四六並 二四四	一・一〇 ・一四
河東碧梧桐著	改造社隨筆叢書第六篇 二重生活	○肉體美○薔薇とコクリコ○縱の橋○外的二重生活○內的二重生活○縱斷的都市○外十數項	新刊	四六並 三三〇	一・二〇 ・一六
文學博士 新村出著	南蠻更紗	○雪のサンタマリヤ○吉利支丹文學斷片○遵主聖範の舊譯本○切支丹宗の遺物○外三十二項	15版	四六上 三九八	二・五〇 ・二二
野口米次郎著	先驅者の言葉	○苦言○英雄崇拜の提唱○無用の長物○美感の凋落○單純性○世界心○近代生活○隅田川外十一項	4版	四六上 三三〇	一・八〇 ・一六
野口米次郎著	坐る人間の評論	○母性禮讃○重大な結果○米國人○露國人○メレデスへ行け○詩に於ける想像の力○外數項	最新	四六上 三二六	二・〇〇 ・一八

著者	書名	内容	版	判型	定價
文學博士 幸田露伴著	幽秘記	○運命○眞眞○師諭○樓船斷橋○水殿雲廊○共命鳥○一枝花○泥人○玉主○碧梧紅葉○狂濤艶魂外數篇	最新	菊上 三六八	二・五〇 ・二四

(8) 美術

著者	書名	内容	版	判型	定價
文學博士 瀧精一著	文人畫概論	○文人畫の起源○文人畫の流派化○文人畫の原理○文人畫の原理○文人畫の精華○將來の文人畫等	5版	菊上二	二・〇〇 ・二〇
板垣鷹穗著	美術史論集 表現と背景	○ギリシャ思潮の推移と神像の變遷外四篇（附圖四十葉）	3版	菊上 一九八	三・八〇 ・二〇
岸田劉生著	圖畫教育論	（一）圖畫教育私見（二）我子へ圖畫教育（附錄）慶應義塾幼稚舍に於ける圖畫教育（附圖五十四）	4版	菊上 三六八	三・五〇 ・二〇
矢代幸雄著	太陽を慕ふ者	○レオナルドに逢ふ日○悲しき昨○緑色のショパン○本寺の幽影○スペインの誘惑○窓の少女等	5版	四六上 二四	一・五〇 ・一八
木下杢太郎著	支那南北記	透徹したる美術眼と之を表現するに適しい才筆を載せて支那及び朝鮮全土の古趾名蹟を行脚したる記錄	近刊	四六上	價未定

(9) 歴史及傳記

著者	書名	内容	版	判型	定價
改造社論	大正大震火災誌	其内容の豐富なる其記述の正確なる其寫眞の鮮明なる其他凡ゆる點に於て類書中の白眉と推賞定評あり	3版	四六倍 内 八〇四	一・五〇 ・四五
ピシャラ・ナハス著 高瀬毅譯	ツタンカーメンの生涯と時代	○埃及小史○埃及の村落○埃及の發掘○ツタンカーメンの王朝○ツタンカーメンの生涯外三章	4版	四六上 一八三	一・八〇 ・一六
村松梢風著	近世名匠列傳	○柴田是眞○島村俊明○狩野芳崖○木内喜八○橋本雅邦○竹内久一○森寬齋○旭玉山等	4版	四六上 三六八	二・三〇 ・二〇
山川均著	改版 レーニンとトロツキー	○ニコライ・レーニン○レーニンの生涯と事業○レオン・トロツキイ○印象と批評	11版	四六上 二六八	一・五〇 ・一八
大杉榮著	自叙傳	○最初の思出○少年時代○不良少年○幼年學校時代○新生活○母の憶ひ出○獄中生活○葉山事件	24版	四六上 三四四	二・〇〇 ・一八
片山潜著	自傳	勞農露國にて國賓として待遇されつゝある吾國無産階級解放運動の先達たる片山翁の自傳新人の好讀物	5版	四六上	一・八〇 ・一八

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價
柳澤健著	ジャン・ジョレス	○ジョレスの生涯及び思想○ジョレス(ロマン・ロラン)○ジャンジョレス(プリユール)	新刊	四六上 二三三	一・五〇 ・一八〇
經濟博士本庄榮治郎著	日本社會史	○日本社會史の觀念○氏族制度○郡縣制度○莊園制度○分權的封建制度○集權的封建制度等	24版	菊上 二八八	二・五〇 ・二四
京大講師山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歷史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業()中世寺院法と組合及び會(,)等	新刊	四六上 二三三	一・五〇 ・一八〇
日本聖公會編	鮮血遺書	三百餘年の昔キリシタンを信奉して長崎立山にて磔殺されし二十六人の殉教記錄、言々涙なる實歷史	近刊	四六〇	價未定
經濟博士本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史上の一方面である	近刊	四六上	價未定

(10) 紀行

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價
槇有恒著	山行	○山と或る男○アルペンに於ける登山の發達○登高記○南側よりのアルペン○山村の人と四季等	6版	菊上 三七三	三・二〇 ・二二〇
野口源三郎著	オリンピアへの旅	○首途○○大平洋上から○桑港より○プルマン車窓によつて○○紐育の巷○太西洋日記等	4版	四六上 四〇八	二・五〇 ・二〇〇
矢代幸雄著	太陽を慕ふ者	○○レオナルドに逢ふ日○悲しき昨○綠色のショパン○本寺の蔭影○スペインの誘惑○窓の少女等	5版	四六上 三二四	一・五〇 ・一八〇
室伏高信著	印象と傾向	(一)人の印象○ロオラン○○ベルグソン外七人(二)世界の傾向○アメリカ見聞○混亂の英國○外六項	3版	四六上 四三〇	二・〇〇 ・二〇〇
芥川龍之介著	支那游記	詩情流溢神韻靈妙な氏の筆は支那の人事風物の眠れるを醒まし驕るを矯めて新綠青燃の如き爽快味あり	近刊	四六上	價未定
木下杢太郎著	支那南北記	透徹したる美術眼と之を表現するに適しい才筆を載せて支那及び朝鮮全土の古趾名蹟を行脚したる記錄	近刊	四六上	價未定

(11) 物理

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價
理學博士石原純 理學博士山田光雄 理學博士桑木彧雄 理學博士阿部良夫	アインスタイン全集 全四冊	世界的頭學の回天の新學說を熱烈正確に我が國學術界に紹介す、内容に就いては今更贅言を要せず。	1刷	菊上	各冊三・〇〇 各冊・二六

理學博士桑木彧雄著	物理學と認識	○物理學と認識○文藝上の描寫論と科學○物理學上の認識の問題○絶對運動論外四篇	6版	四六上 二三四	一・五〇 ・一八
佐藤充 庄司彥六 共著	近代物理學概觀	(一)物價○分子及び原子○電子○原子の崩壞等(二)エネルギー○波動○輻射等	新新	菊上 三三四	三・〇〇 ・二二
中澤臨川著	電子説から見た世界	一代の文豪として雷名を轟かせし臨川氏の理學的文藝品であり藝術的滋味に富める科學的世界觀である	6版	四六上 四三二	一・八〇 ・一八

(12) 兒童

佐藤春夫著	童話 ピノチオ	豐富な構想上品な滑稽適度の教訓空想や感傷に陷らず而かも子供の性情とぴつたりせる少年文學の上乘	6版	四六上 二九六	一・八〇 ・一八
東洋大學教授 關寛之著	學校兒童心理學	學齡兒童を研究の對象として實驗的にまた演繹的にその心理狀態を考究したる教育的心理學である、	3版	四六上	二・七〇 ・二二

(13) 運動

熊谷一彌著	改造社運動叢書第一篇 テニス	世界的名手熊谷氏苦心の著述、硬球式庭球の唯一の指南書。スポーツを知らんとする人の好伴侶	24版	四六上	二・三〇 ・二〇
三宅大輔著	改造社運動叢書第二篇 野球	野球界の三宅氏は清理兼備の名將として好球兒に普く知らる本書は科學的研究の結晶にして文章亦雄健	10版	四六上	二・八〇 ・二二
梅澤親光著	改造社運動叢書第三篇 水泳	○游泳術○水上競技○教導と指導○雜件○附表	7版	四六上 二六四	二・〇〇 ・一八
平井左門著	改造社運動叢書第四篇 山岳スキー	○スキー沿革の概説○用具及び準備具○スキー・ツーリストとしての資格と訓練○外九項	新刊	四六上 三三六	二・五〇 ・二二
香山蕃著	改造社運動叢書第五篇 ラグビー	(一)總論○競技の精神○起原及發達○概說(二)本論(三)結論○注意事項○練習○規則	新刊	四六上 三二八	二・五〇 ・二二
槇有恒著	山行	○山と或る男○アルペンに於ける登山の發達○登高記(南側よりのアルペン○山村の人と四季等	4版	菊上 二七三	三・二〇 ・二二
野口源三郎著	オリンピヤへの旅	○首途○太平洋上から○桑港より○プルマン車窓によりて○紐育の卷○太西洋日記等	2版	四六上 四〇八	二・五〇 ・二〇

農學博士 小野武夫著

農村研究講話

（四六判上製）

定價壹圓五拾錢
郵送料十七錢

最新刊

農村問題の實際的研究の權威たる小野博士が、研究の根本精神より其の實際的方法に亘りて、詳論せられた新著である。農村問題が盛んに論議せらるゝ半面に、世上幾多の所論が較もすれば實際を離れ、机上の空論となるの虞多き今日、本書の出づるは正に時を得たものです、敢えて農村研究者の机上に勸めます。

【内容目次】一、基礎的研究の必要及び其綱要。二、農村問題とは何ぞや。三、[illegible]村落の研究。四、農家經濟の研究。五、小作問題の研究。六、農村問題の參考[illegible]附錄、諸調査樣式。

發行所 改[illegible]

東京市芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番

社會科學十月特別號

「形式社會學」研究號

（本號特價壹圓 送料三）

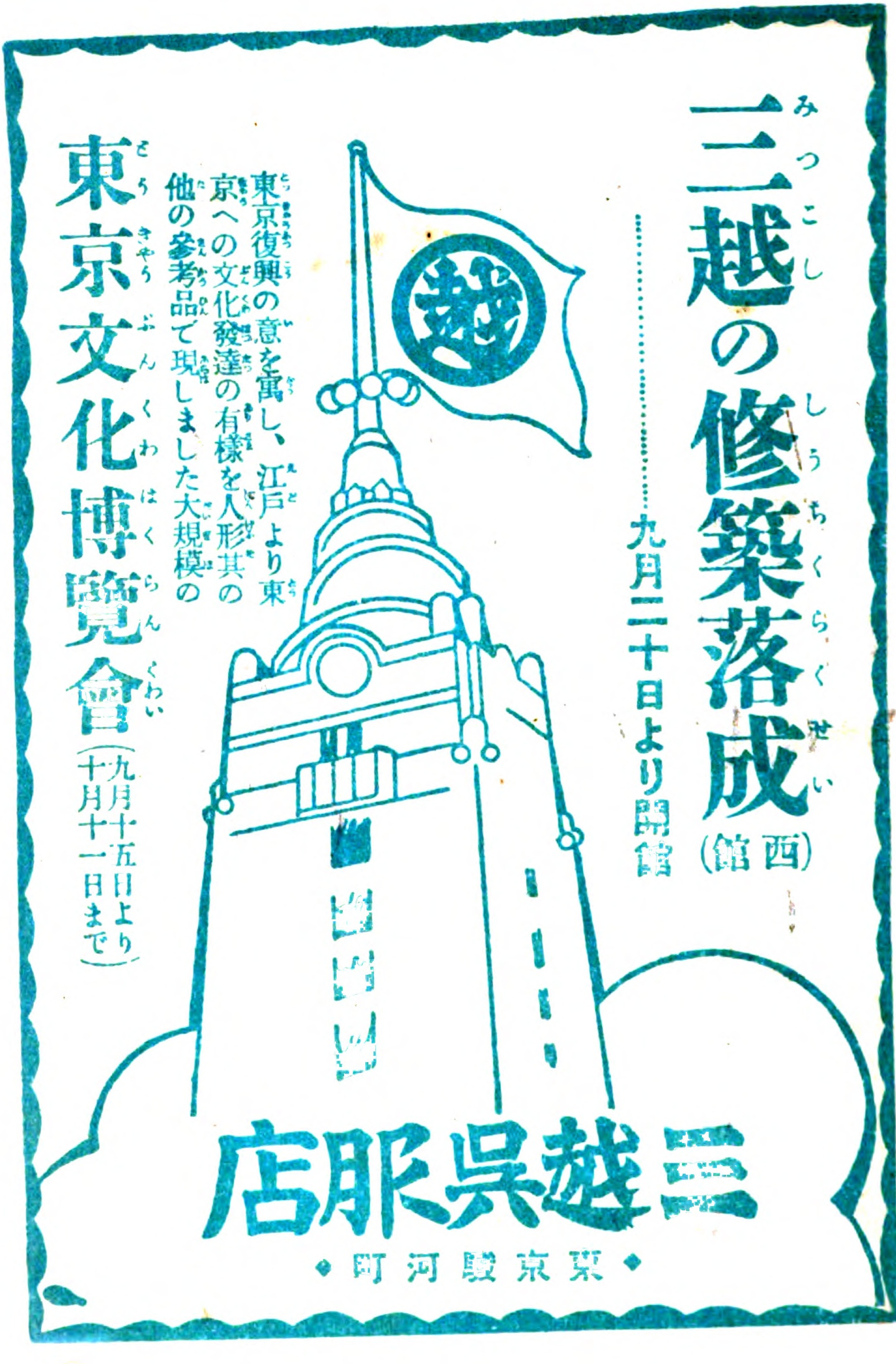
（九月廿六日發賣）

本號は近代社會學の傾向發展を斯學の權威達が執筆したもので社會學研究者にとりて唯一無二の文献である。殊に高田博士が『共同社會』研究は斯界の一大權威をなすものだ。本號發行の意義は各購讀者によつて諒解されることであるから茲に贅言せず。

執筆者

高田保馬
五十嵐信
關榮吉
綿貫哲雄
酒井正三郎
新明正道

淡德三郎
小松堅次郎
松本潤一郎
高瀬莊太郎
波多野鼎


三越の修築落成
（西館）
九月二十日より開館
東京文化博覽會
東京復興の意を寓し、江戸より東京への文化發達の有樣を人形其の他の參考品で現しました大規模の
（九月十五日より十月十一日まで）
三越呉服店
東京駿河町

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR.
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正十四年十月一日發行（毎月一回一日發行）
大正十四年九月廿日印刷納本
第七巻 第十號 十月號 定價金九拾錢



株式會社秀英舎印刷